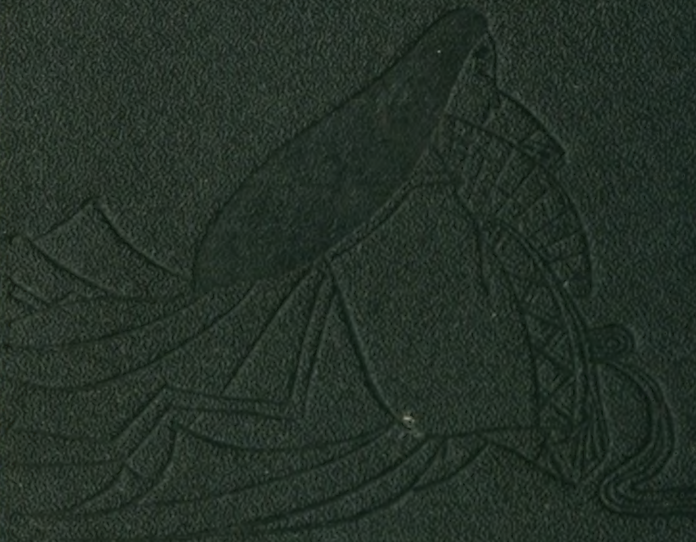
國文註釋全書



東宮侍講 本居豐頴
文學博士 木村正辭 校訂
文學博士 井上頼圀

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

目録

以上

緒言

一細流抄ハ西三條公條ノ著ニシテ十六卷寫本ニテ傳レリ、弄花抄ヲモト、シ、河海抄、花鳥餘情等ノ誤リヲ正シ、マタ其說ノ取ルベキハ、河說可然花說可用ナド、記セリ、內閣文庫本ヲ底本トシタレドモ傳寫ノ誤リ多クシテ、之レガ訂正校合ニ頗ル苦心ヲ極メテ辛ウジテヤ、全キヲ得タリ

一源氏官職故實秘抄ハ壺井義知ノ著ニシテ寫本ニテ七卷、桐壺ヨリ槿ニ至ルマデノ官職故實ヲ詳解セル祕本ナリ、本書ハ井上賴圀博士ノ所藏本ヲ底本トセリ

明治四十一年十二月

編者識

源氏細流抄

全



細流巻一　きりつぼ、はゝき木、うつせみ

作者

紫式部か筆作勿論之儀也

花一説父為時之息女式部加筆之由宇治大納言の物語を花鳥にひけり

宇治大納言物語云いまはむかし越前守為時とてさえあり世にめてたくやさしかりける人は紫式部か親なり此為時源氏は作りたるなりこまかなることゝもをむすめにかゝせたりけるとそきさいの宮此事をきこしめしてむすめをめし出したりける此源氏つくりたることさま〳〵に申傳へたりまゐりてのちつくりたりとも申いつれかまことならん云々此儀人の推量分女房の胸中より書出せる物とは見へねは此説もさもやとは覺ゆれと式部か廣才凡人にあらねは為時か作の説尤心あさきに似たり紫日記にもけふはさとに出て史記と云文よむなと載たり外典の事は云に不及天台六十巻をうかゝひ一心三観の妙理をさとりうるほとの物なれは疑を殘すへからさる歟法成寺の入道關白の奥書に云此物語世皆式部か作とのみ思へり老比丘筆を加ふる所也云々されと是も自然の事なるへし

順徳院御記承久二にも紫式部書之とのせらる

順徳院云此物語を始一條院御覽有て不可説物なり

式部は日本紀をよくこそ見たりけれと仰らる時に左衛門内侍此綺言を妬て日本紀の御局と號せり云々紫日記にも此事を載たり

紫式部か俗姓

閑院左大臣冬嗣公六男勧修寺元祖

- 良門　内舎人　贈左大臣正一位
  - 利基　従四上右中將
    - 兼輔　中納言従三位　堤中納言
      - 雅正　刑部太輔　豊後守従五下
        - 為頼　歌人
        - 為時　正五下歌人　越後守
          - 惟規　歌人
          - 女子　上東門院女房號紫式部　源氏物語作者　母攝津守為信女イニハ常陸介
  - 高藤　贈正一位　小一條内大臣
    - 兼茂
      - 女子　兵衛後撰作者

河云紫式部は鷹司殿〔一條従一位倫子 左大臣雅信公女〕官女也相繼て陪ニ従上東門院ニ後に左衛門權佐宣孝に嫁して大貳三位辨局〔狹衣作者〕を生す舊跡は正親町以南京極西頬今の東北院の向也此院は上東門院御所跡也

又式部か墓所は雲林院白毫院の南小野篁か墓の西也宇治寳藏日記にも紫野に雲林院ある由見へたり雲林院は淳和の離宮也賢木巻に光源氏雲林院にて六十巻と云文とかせて聞給し所也

式部は檀那院贈僧正の許可を承て天台の一心三觀血脈に入れり兼てより紫野の雲林院の幽閑を思ひしめけるも旁ゆへあるにや又云作者觀音化身也云々

紫式部と號する事

河此物語一部の内に紫上の事をすくれて書出たる故に藤式部の名を改て紫式部と號せられけり

或説に云一條院の御めのとこの子也上東門院へまいらせらるゝとて我ゆかりのもの也あはれと思食せと申させ給ひけるに依て此名あり武藏野の義也ともいへり

清輔説　一説云藤式部の名幽玄ならすとて後に藤の花の色のゆかりに紫の字に改めらるといへり

發　起

此物語のおこりに付て説々有といへとも河海等にしるせる旨尤正義たるへし紫式部上東門院に官女として祇候の比上東門院へ〔一條院后宮 御堂殿女〕大齋院より〔選子内親王 村上十宮〕めつらかなる物語や侍ると所望申されしにうつほ竹とりやうの古物語はめなれたれは新しく作りて上（タテマツ）るへき由式部に仰られけれは即作進之云々定めてまへ〳〵連々用意歟と云々河に註せらるゝ分は上東門院の仰を奉て石山寺に詣でゝ通夜して此事を祈申すに折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみわたるまゝに物語の風情心にうかひけるは先須磨明石の兩巻を書とゝめけり是に依て須磨の巻にこよひは十五夜なりけりとおほしいてゝと書けると云々されは石山寺に詣でゝ趣向を得たる由緣起にも有と云々かくて其後次第に書加て五十四帖にして上（タテマツ）りしを權大納言行成卿に清書させられて齋院へまいらせられけるに法成寺の入道關白奥書を加られけると也河

海にしるせる所石山寺に通夜の時物語の趣向を忘れぬさきにとて佛前に有ける大般若の料紙を本尊に申受て飜してすまあかしの兩巻を書とめける後に罪障懺悔の爲般若一部六百巻を一筆に身つから書て奉納しける今に彼寺に有由河海に載らる此大般若の事は實もなきこと歟と云々般若を一筆にかきはづすまじき物なれとも實説なしといへりさてこのすまの巻に源氏の左遷の事を書たる心は西宮左大臣高明公冷泉御代安和二年太宰帥に左遷せられ給ひしかは藤式部幼少よりなれ上(タテマ)りて思歎きける比なれは光源氏を左大臣に比し紫上を式部わか身によそへて在納言菅丞相のためしを引周公旦白居易か古を勘て趣向を書出せるといへり　高明公左遷事大元法事等云々鴨長明か無名抄には大齋院より上東門院へつれ〴〵慰みぬへき物語や候と尋させ申されしに紫式部を召出して何をかまいらすへきと仰られあはせけれは珍き物は何か侍へき新しく作りてまいらせ給へかしと申けれはさらは作れと仰られけるを承りて源氏を作りけるこそいみしくめてたく侍と云人侍れはまた宮つかへせて里に侍りけるをりさる物作出たるに依てめし出られてそれ藤紫式部と云名はつきたると申何れかまことならん云々

大意

此物語一部の大意面には好色妖艶を以て建立せりといへとも作者の本意人をして仁義五常の道に引いれつゐに中道實相の妙理を悟らしめて出世の善根を成就すへしとなり去は河海にも君臣の交仁義の道好色の媒菩提の縁に至るまて是をのせすと云事なしといへり先此物語の大綱莊子か寓言にもとつけり寓言と云は己か言を他人の名を借て以て謂ふと也莊子か文法は名を作り出してわか云たき事をいはせたり其云處悉く實の事也今此物語に云處の源氏も其眞實を尋ぬれは其人なし書顯す處實也されは莊子か筆をまのあたりうつせり凡莊子か文章より一切經の文章は出たりと唐人かほめたる如くに一切の詞花言葉は此物語より出るなるへし

さて又人の善惡を褒貶して此物語にしるし出せる處は左傳を學へり孔子の左傳をしるさるゝ心は善をしるす時は後人を善道にいさみを加へてすゝましめんため惡をしるすは後生に見こり聞こりに懲すへき爲

也されは勸善懲惡と云是なり此物語の作意の本意てれなり
さて又うるはしく文體を似する處は史記の筆法をうつし卷々次第をたつるも史記の面影を模すされは此物語の習物一をとりつめてはしるさす寓言は莊子により又虛誕なき處は司馬遷か史記の筆法をかたされり
こゝに不審をかくる人あり此物語は悉く好色淫亂の風也何とて仁義五常を備へきや是道を知さる人の一隅の管見也四書五經とて仁義五常を旨とする書に殊に淫亂の惡虐をしるせり是上に申如く惡をはこらさんの義也尙書に朝に渡る者の脛を切り賢人のむねをさくとも（比干と云し賢人を賢人にはむねに七のあなあると云ふことあり胸をさきて見よとてさかれしこと有）昔もかゝることありとて手本にすへきにあらす毛詩又淫風をしるして戒とす史漢是又暴虐をしるせり是後人のいましめ也經敎の中にも提婆か五逆又仁王經に九百九十九王の首を切んとせしこと阿闍世太子の父王を籠者し母を害せんとせしことも末世の群生を戒めんか爲也此物語も好色淫風の事をのせて此風のいましめとすされはこそ世の翫物とはなれりけれ淫風有ならは披見をもいましむへきことなりこゝのは先賢達の至寶と稱せらるゝうへは眼ある書と見へたり凡四書五經は人の耳に遠くして仁義の道に入かたし況や女房如きの爲其德益なしされは先づ人の耳に近く先づ人の好む所の淫風を書題はして善道の媒として中庸の道に引入ついには中道實相の悟におとし入へき方便の權敎也

凡此五十四帖は天台六十卷に比すと云天台一家の心四敎に付て化義化法の兩種の四敎あり先化法の四敎と云は三藏敎　四阿含　八十誦律　五部律　一切の小乘論　定戒論の三藏也
さま〳〵說給へとも所詮を取て戒定惠の三の法門有是小乘也
通別圓の三敎は大乘也三大乘と云是也
化儀の四敎と云は頓　漸　不定　祕密の四敎也此物語四敎をしるせり
帝王四代年紀は七十餘年の興廢を今眼前見るか如くしるせり
盛者必衰有　爲轉變會者定離世間の興廢

因果の道理　君臣の道父子の禮夫婦の序朋友の交

此物語五十四帖の冊數事天台の本衆に擬すと云也然らは天台の本衆は六十巻也物語は五十四帖也不審有に似たりされとも五十四帖にて六十巻にあたれる甚深の義有由故寂光院申されしを子細をはいまた尋窮めず六十巻かきたるよりもかへりて深重の妙理ある事と云々追可尋記也

天台六十巻と云は摩訶止観十巻（天台大師）弘決十巻（妙樂釋止觀）法華玄義十巻（天台）釋籤十巻（妙樂釋玄義）法華文句十巻（天台）疏記十巻（妙樂釋文句）十巻つゝ六部都合六十巻也されとも此中に上下あまたありて七十巻にも及へる歟されは天台六十巻といへとも六十巻を出たれは五十四帖にて六十巻を含める理もあるべし

又外典の俗書の中にも冊數の不足有之尙書は十三巻孟子は十四巻通鑑は五十四巻也各皆甚深の理有へし

諸本不同事

行成卿自筆今世に傳らす

源光行本八本を以て校合取捨して家本とせり所謂云々

二條帥伊房本

冷泉中納言朝隆本

堀川左大臣俊房本（號黃表紙左大臣書銘）

從一位麗子（土御門右大臣女號京極北政所）本

法性寺關白本（唐紙小草子號尙侍殿本）

五條三位俊成本

京極中納言定家本（號青表紙私今所談ノ本是也）

（河）各雖證本皆有異動猶勘合古本且可加了簡者耶善者從之古人之美言也

此外私勘（此本ハ勝定院殿ノ仰ニ依テ書朱墨チ加ラルル云々）耕雲本河内本にも非ず青表紙にも非ず一樣各別の本也耕雲も又此物語を史記の筆法と見られけるにや史記の索隱か述賛に擬とて巻々に一首の詠有之此耕雲本には非分の朱墨を加へ首書載て文段を分てり初學の輩の迷をとくには便あるに似たれども段きり等相違の事あり取用かたし青表紙の手から纔に奥入を以て義理を消す尤正道なる者哉耕雲は花山の庶流也俗名長親南朝へ參す無双の才藝人也南朝へ參せられし時周禮儀禮は當朝によむ人あるまじき由被稱之云々南朝に於て右大將にて翰林學士を兼らる希代事されば新葉に云中納言に侍ける時文章博士をかねて准儒の宣旨をかうふりける

家に五十首歌よみけるに林花といふことを　右大將長親「おもひきや筆の林の花の香を吾袖にさへうつすべしとは

後に出家して耕雲と號す南朝より歸參云々

淸書は行成卿也云々

諸本の不同勿論歟其故は凡一切の文章に草書中書淸書の三あり又轉々書寫の誤り辨計すべからず況や大部の物語書生の失錯勿論の義なり（青表紙河内方には誤へからす）又此物語の習ひ史記の筆法をなすらひて同詞を以て書也然を道を知らざる後作の所爲に書生の誤成べしと稱して今案を加へなをし改め來れりさる故に正本まれにのみなりて物語の本意を失へり此に定家卿の青表紙正本にして作者の本意を得たり尤可吉此旨者也是は内奥にも有事也天台の本衆に書生のあやまり多くて無盡の論義ありしを其後廬山の竹中本と云正本出來して校合せしに年來すちともなきあやまりを無盡の理をつけて來れる論義多かりしかば即其論義悉く破れて數すくなくなれりそれよりして天台六十卷の本衆正說を得たりと申傳へたり此如く此物語も轉々書寫のあやまりをそだてゝ無盡の理をつけたる事も諸抄に有之されば定家卿も古今の奥書生の失錯を以て有職の秘事と稱す道の魔障と云べしといへり又後人の推量を以てなをし改もて來れる事ともあり尤可悲事也此青表紙の誠正義にして竹中本とも申べきなり

諸　抄

奥入、伊行卿作　伊行は行成卿五代の末孫定信か子也こは宮内卿權少輔從五上傳書筆

追註加　定家卿　河海に中納言定家卿卷々難義を註して奥入と號すと云々　（私）定家の奥入とは號すれども根本の述作の源は伊行卿也

（河内方）水原　大監物源光行作光行は淸和氏貞純親王の後胤滿仲の弟に滿政と云しが後胤始大和の守にて後に河内守たり故に河内方と稱す

（河内方）紫明　素尺作　後鳥羽院北面千載作者也其子式部卿親行相續て道にたつさはれたり

（河内方）源中最秘抄　同上

源氏論議　（弘安）　爭勝負伏見仙院東宮の御時有此事

河海抄　此卷四辻宮善成公作順德院第三世の孫也ひこに當る水原の宜き所を拾て其上に故事來歷を引勘

へ義理を述られ是當河内方に近し
花鳥餘情　兩本あり一は筑紫より所望申　一本は美濃歟故に兩本相違の事有之　後（二條關白）成恩寺兼良公作河海のあやまりをたゝして義理を演說す是も猶青表紙には相違のこと等有之されば青表紙は只奥入一抄の旨を守のみなりされども河海花鳥の兩抄なくんばいかてか物語の東西を辨へきや尤至寶の抄也

物語時代

寛弘初造出之　康和流布凡五百四五（五十餘年）十年也　殊五條三品京極黄門之比賞翫云々

准據の時代

醍醐朱雀村上の三代に准する也桐壺は延喜朱雀は天慶冷泉院は天暦光源氏は西宮左大臣如此相當する也又仁明の御子源光諸道兼備の人也凡此仁にもする也此物語の習人ひとりを取つめてしるさす彼是をとり合て周公旦東征菅家在納言在中將の沈淪等を思よせり一様に模することなし是褒貶の難を発れんか爲た又寓言の筆法の習也尤名所有也
　河に證據をあけらるゝ時（此巻兩所）に亭子院のことをのす是は諷諫の義也又繪合に朱雀院の御事を延喜の御手つから事の心かゝせ給ふと云々
又貞信公の母は寛平法皇の皇女延喜の御いもと也されは致仕の大臣の母も桐壺の御門の御一腹とあり此外其證多と云々難云其證分明也といへとも高明公好色人に非すいかてか源氏を順すへきや答云作物語の習ひ大綱は其人の面影あれとも行跡一々に其實をしるさす漢家の書籍も異同有之仍桐壺帝冷泉院を延喜天暦に比しなから玄宗のためしを引秦始皇のかくれたる例をうつせり天慶御門は相續の皇胤たはせねとも此物語は朱雀院御子今上冷泉院の御後なし（或說此條作者ノ意趣アリト云々）されは安和の左相府に比すといへとも好色の先達なるか故に在中將の風をまなひ五條の后を薄雲の女院朧月夜尚侍によそへたりされはいつれの御時と分明に書あらはさゝるも此故也されとも下の心には延喜の御時を含めり　河一說に桓武一條院を桐壺の帝に准し光源を伊周公光大臣に擬すと云々此義謬說也若一條院といはゝ延喜より五代のこと見へす其うへすまの巻に千枝つねのり此比の上手といへり是は朱雀村上の御代の書師也一條院まては存生せす繪合の巻に當代の由載之無異論乎

さて此延喜を心あてに書出せること甚深の義也凡日本の國史は三代實錄光孝天皇仁和二年八月までのことをしるして其後の國史なし此物語をしるすに醍醐の帝よりしるす心は上の日本紀にしるしつがんの心也尤廣才の所爲也さるに依て漢家にて孔氏の春秋をしるさるゝ時に魯の哀公まてをしるして筆をたゝれ又左丘明か周の元王貞定王の時まてしるして考(コウ)王夷列(レツ)王以下のことをはしるさすしかるに司馬温公か通鑑をしるす時に夷烈王廿三年よりしるせり是も左傳にしるし續へき心あるなり此物語に宇多の御世をしるさゞるも能相叶へる歟

又延喜をしるしはしむる心は歷代無双の明王なれは延喜を最初とする也

題號事

神道にも日本紀を宗源と云如く万の道の源と云心分明也必光源氏と號すへき古源氏と云物語あまたある中に光源氏は式部製作歟云々不及此義

一物語の意を取て和歌に詠こと一說に詞をは取用心をは不取之と云義あり不可用之撰集也中其證據非一（河海ニ粗彼引載）其上六百番の歌合に俊成の判詞に源氏見さる歌よみは遺恨のこと也云々正治譜國帖にも源氏見さらんはうたてきことに候也と被載之頃連歌に初心の輩源氏を取用事可斟酌之說有之源氏うとき人ののがれ詞なるへし或は行名殘おほゐの里の雪の日にと宗祇か名句の侍るやうのことまてこそ及はすとも面影をうつすことは此物語はなれては連歌と云もの有へきに非す尤可悲之されはとてつくしより初瀬にかゝる玉かつらの類なることは不可然如此所學者の心にあるへし

紫日記云左衛門督公任あなかしこゝのわたりにわかむらさきや候とうかゝひ給源氏に似るへき人も見へ給はぬにかのうへはいかゝ物し給はんときゝゝゐたり左衛門内侍と云人侍りあやしくすゞろによからす思けるもしらす侍に心うきしりうごとのおほう聞え侍りしうちのうへの源氏物語人によませてきこしめしけるに此人は日本紀をこそ見たるへけれ誠にさえあるへしとの給はせけるをふとをしはかりにいみしくなん侍さえかな殿上人なとの云ちらして日本紀の局とぞつけたりけるいとをかしう侍る物か

順德院御記（承久二年）一切物語雖多或有事或託事也伊勢

物語は詞指事なけれと尤上手めき詞殊勝也大和は無下に劣れり其外無し何物語を盡ても不レ見無ニ其詮一之故也源氏物語不可說物也更非ニ俗人の所爲一紫式部書レ之誠諸道諸藝皆縮此一篇に不可說未曾有也下說に源氏ノ歌は劣なり狹衣ノ歌こそよけれと云人有と云々此條心浮淺猿事也更非ニ同日論一誠狹衣ノ歌も少々不惡はあれとも源氏ノ歌に不可及事雲泥也凡歌道は知與不知如ニ水火一者歟源氏は第一には詞つゞき非ニ人間所爲ニ不可說事也第二歌逸是又何人及レ之第三作樣也以ニ虛言一盡ニ優美一を過レ之事も有るへし但未見歌又不可說也但是は我朝最上也詞ハ更非ニ人之所爲一物也未レク知ニ子細一輩不レ可レ辨ニ是非一歟古今後撰爲大意時は則一條院比と思へり猶々非ニ普通物一歟河海水鏡云（中山内府忠親公抄）紫式部か源氏物語作り出して侍はさらに凡夫の所行とは覺へ侍らす日本記を初として諸家の日記に到るまで明かに悟りもちて時の人日本記局と號し侍りけりとあり凡此物語の中の人の振舞を見るに高き賤に隨ひ男女につけても人の心をさとらしめことのをもむきをしへすなとと云こし（發端作者の事より是迄全篇細流無之細流は初より桐壺を書出す內閣文庫本の一本に之を添ふ依て茲に之を收む）

桐壺

いつれの御時にか　○題號事說々多し爾（シカ）れとも唯源氏の事をしるせる故也又は今古序に山下水のたねすといへるか如く水の源をいへるなり山谷か詩に岷江初濫（一本タヽド）觴入楚乃無底と云か如く是は女のはかなく書たるやうなれとも其心淺（一本淺カラサル也）からぬ心有なり凡諸抄に委くしるせり仍略之巻名は花鳥に見へたり發端は伊勢集にいつれの御時にかたほみやす所と聞へける御つほねにとかけるにもとつけり何れの御時とさすことは肝要は醍醐（須磨）の御時をさして云也高明公左遷のことを以てすまの事をは書なり惣して此物語の習人ひとりのことをさしつめて書とは無（ナケ）れとも皆古事來歷なき事をはかゝさる也面（オモテ）ハ作り物語にて莊子か寓言により又しるす所の虛誕なきことは皆司馬遷か史記の筆法によれり好色の人をいましめんか爲多くは好色淫風の事を載之盛者必衰（一本サル也）の理り則出離解脫の緣も此物語の外には有へからす

凡日本の國史は三代實錄光孝天皇仁和三年八月まてしるして其後國史見へさる歟此物語は醍醐天皇よりしるす心彼國史につかんの心とみへたり彼孔子の春秋も哀公までしるせり哀公は周の敬王の時代にあたれり其後左丘明周元王貞定王の時代までしるして孝王夷烈王以下の事をはしるさす然るに司馬溫公が鑑をしるすことは夷烈王廿三年よりしるせり是も左傳につぐべき心有なり此物語宇多の御代をしるさゝるも能相叶へる也

更衣 ○便宜の御殿にさふらふしかるへき上達部などの女也

時めきたまふ ○時めく時を得たる也時宜にあへると也春めく冬めくなどおなじ心也

はしめよりわれはと 是より品をたてゝ云へり

下らふの更衣たちはまして 此ましてと云詞殊勝也人はわが身の品々程心もちゐはあるものなりいくらか下臈の人は嫉妬の心はふかき者なり

あつしく ○異例かち也

まはゆき ○人のそねみてうちもむかはぬ良也

もろこしにもかゝる事のおこりにてそ 花鳥にはもろこしにもと云より以上楊貴妃の事のやうにしるさる不可然歟二段にみるへき也是は殷紂か妲妃を愛し周幽王褒姒を寵せしより世の亂たる事を引て云也さて揚貴妃のためしと書は此卷は長恨歌にて書故也褒姒は烽火の事にて世の亂出來也妲妃はさせる惡事見へさる歟但史記に妲妃之言是徒とかけり何ことも妲妃か云まゝに紂か惡事を行ふ心也史記の筆誅のをもき詞と見へたり（此ヨリ以下「本無）「たゝ此人の故にてあまたさるましき人の恨みをひしはて〳〵はとあり又やかて此卷の詞にこの御ことにふれたる事をは道理をもうしなはせ給ひとかけるも妲妃之言是徒とかけるに相叶へる歟」（此迄ナシ）

かゝる事のおこり ○おこりは起字を用也

いとはしたなき ○此更衣によそよりの人の心むけ也

かたしけなき御心ひとつを ○御門の御氣色一を賴（タノム）計也

ちゝ大納言は ○以下更衣の族姓をいへり

母北のかたなん ○母北方なんいにしへの人の由あるにてと句を切て讀也

おやうちくし　○孤獨の身なれともかた〳〵におと
　らぬやうに母君のあつかひ給ふ也
たまのをのみこ　○源氏の君也玉の緒のこ花鳥の説
　尤有興
一のみこ　○朱雀院也
右大臣　○弘徽殿の父也
よせおもく　○寄重也
この御にほひには　○黍稷かうはしきには非す明德
　惟馨といへる如く其人の威德を匂ひといへる也
たほかたのやんことなき　○一のみこはもとよりの
　御おぼへばかりと也
はしめよりをしなへてのうへみやつかへし給へき
○女御更衣は別殿に祇侯して時〳〵こそ侍ふへき
を此人は典侍なとのやうに御まへさらすめしまと
はせはかへりてかろ〳〵しきなり寵愛甚しき餘り
也
上すめかしけれと　○上手めかしきとは上﨟しきと
　也花鳥の說如何
坊にもようせすは　○ようせすはあしくせはと也
かしこき御かけをはたのみきこゆなから　○是より

更衣の心なり
中々なる物おもひ　○此物語中々と云詞いづくも奇
　特也凡歌の五文字にも中々と置は大事也末云おほ
　せかたき故也御寵愛なく(一本ゼシカラズ)はかやうにはあるましき
　をこれ故に中々なる物思ひも有と也
御つほねはきりつほなり　○桐壺は御殿よりはこと
　の外程とをき故なり花鳥に見へたり
うちはし　○きり馬道に板を打渡してかよふ道也
あやしきわさを　○花鳥に見へたり
後凉殿　○凉の字らうと讀へきよし河海に見へたり
　後凉殿の更衣誰とも見へす
そのうらみまして　○はしめより後凉殿にすみし更
　衣の心也
このみこみつになりたまふとし(給)　○三歲着袴例河海
　に見へたり
みやす所　○更衣のこと也更衣と同心也更衣たるは
　御子をうみ奉りて後御息所と號するやうに此物語
　にはいづくにも見へたり
五六日　○いつか六日(ムイ)と日の字を入て讀也以下傚レ之
なく〳〵そうしてまかてさせたてまつり給ふ　○こ

ゝにて退出のやうに見へたり然れともいまた御いとまを申ばかり也おくにてわりなくおもほしなからまかてさせ給つと云所にて實の退出なり此筆法あまた所にあり

あるましきはぢもこそと心つかひして　○更衣の里にわたし上らん事をは遠慮して源氏の君をはとゝめさせ給ふ也

われかのけしき　○あるかなきかの氣色なり正體もなき體也

てくるまのせんし　○花鳥の説たよりあり可然

かきりとて　○ありのまゝなる歌也時にのそみて哀なる歌也いかまほしきはいきたきと也

いとかくおもふ給へましかは　○花鳥義非也かねて萬つ頼みし心の外になりぬることを思ふ詞也昨日今日とは思はさりしをと云か如し帝の御返歌のなきは妙也御心を深くまさはし給ふことを見せたり

けふはしむべきいのともこよひよりときこえ　○今夜より更衣の里にて修法をもさせんとて也是もふかくおはしめすにより退出を許し給ふなり

まかてさせ給ひつ　○こゝにて實に退出也

みこはかくても

かゝるほとにさふらひ給例なきことなれは　○此段河海說なり花鳥說可然七歲以前の人服忌の事醍醐の御代に法をたてらるゝこと兩度改まれり是は初め七歲以前の人も服のいみあるへしとありし時の分にかける也

なに事かあらんともおほしたゝす　○光源氏の君いときなきよし尤あはれなり

よろしきことにたに　○此宜きは中品也猶ざりの別れさへとなり

おたき　○今の六道是なり昔の葬處也

むなしき御からを　○母君の心也引歌に不可及也

ひたふるに　○一向に也

三位のくらゐ　○三つのくらゐと讀也

さまあしき御もてなし　○御寵愛のすくれたるによりて人のにくみをうけ給ふ也

なくてそとは　○引歌

御かた〴〵の御とのゐなとも　○他人の御とのゐは絕てなしと也猶なきあとまても人のそねみあるさなり

野わきたちてはたさむき　○はたに將の字宜きなり
ゆけひの命婦　○衞門の命婦なり拾遺の詞書にもあり命婦は惣しては禁中にあるを內命婦と云私の妻をも命婦と云それをは外命婦と云也當時も禁中に侍ふ女房の中に內侍より次に御下とて侍ふ其中に命婦女藏人とてある也
やみのうつゝには　○引歌夢にいくらもまさらさりけりと云たるよりは此面影は猶はかなきとなり引歌のとりさま奇特なり
人ひとりの御かしつき　○人ひとりは更衣を云り
草はたかくなり　○ぬしなきやとはさひしかりけりと云歌の心あり
やへむくらにも　○引歌河海にあり　とふ人もなき宿なれとの歌宜也春を月にとりかへて引用也
けにいたふましく　○母君の身にてはかやうの御弔にあつかる事ははつかしきと也
まいりてはいとゝ心くるしく　○命婦の詞なり
內侍のすけの　○是よりさきに內侍のすけを御使につかはさるゝこと有へし
しはしは夢かと　○是より勅定を命婦の傳るなり
めもみえ侍らぬに　○母君の詞なり
ほとへはすこし　○是より勅書の詞
みやきのゝ　○宮中の心なり花鳥に見へたり
松のおもはん　○いかにして有としられじ高砂の松の思ん事も耻し引歌人にしられんも耻しと也
ゆゝしき　○こゝにてはいま〳〵しき心なり處々に用かへる詞也
宮は御とのこもり　○宮とは源氏也
みたてまつりて　○命婦の詞なり源氏を見まいらせてありさまも奏せんずる物をとなり
くれまとふ心のやみ　○母君の詞なり子を思ふ道をいへり
とりところうれしく　○更衣在世の時はおもたゝしきことにこそ御消息ありしに只今思ひかけさることの御使と悲きとなり
よこさまなる　○横死也あまりに寵の甚しき故に人のそねみなとのつもりて失ぬると思なさるゝなり
かへりてはつらく　○寵の甚しきもかへりてはつらきとなり是も心のやみとなり
うへもしかなん　○命婦の詞なり

人の心をまけたる事は　○御心ならぬ事も有しと也
月は入かたのそら　○まへに夕付夜のおかしきほと
に出したてさせ給と云にかけて見るへし夜の深行
たる暑氣餘情たくひなし
むしのこゑ〳〵もよほしかほ　○あはれを催なり
すゞむしの　○命婦の歌なり
ゑものりやらす　○まへに門ひきいるゝよりと書て
ここにはものりやらすとかけり悉皆車のことを車
とはいはて餘情にてかけり
いとゞしく　○母君
かことも聞え　○かことはかこつ也又處によりかは
りめある詞なり
御くしあけのてうと　○さしくしなとの類なるへ
し
すか〳〵と　○はや〳〵と也速なり
おほとのこもらせ給はさりけるを　○主上いまた御
寢ならさるとなり尤あはれなるへし命婦のかへり
まいるを待給故なり
つほせんさい　○此巻の一名ともいへり
長恨歌の御ゑ　○花鳥に見へたり貫之歌のこと不見

云々然とも凡物語に書事則證據なるへし榮花物語
伊周公左遷の所にも昔の長恨歌の物語もかやうな
ることにやとかなしくおほしめさるゝこと限なし
と云々
まくらこと　○つねのこと也
いともかしこさは　○母君の文の語也
あらき風　○更衣のなくなりしを云
みたりかはしき　○両義あり第二三句御門の御うへ
を云に似たり仍憚へきと云心也又義此程のみたり
心にかきさまなどもみたりかはしきと也此義可然
歟草子地評して云也
いとかうしも　○御門の心なり
かくても月日は　○かくてもへぬる世にこそ有けれ
の心なり
故大納言のゆいこん　○大納言の志を母君のきこへ
しによりて仰らるゝなり
かくてもをのつからわか宮なと　○母君をなくさめ
給ふ御恨なり
しるしのかんさし　○花鳥に見へたり
たつね行　○幻術の方士もかなと也

からめいたるよそひはうるはしう　○うるはしうは
御貢めなるなり
なつかしうらうたけなりし　○貴妃にはたとへもあ
りし也此更衣の姿はたとへものなきとなり
弘徽殿には　○遊なとし給ふ也かくまての御なけき
にて有へきとも思たまはぬと也
月もいりぬ　○此詞殊勝の由古来所稱也まへに夕月
と書月は入かたの空とかきて月も入ぬと云妙也月
落長安半夜鐘の句にもをとらぬやと云々
雲のうへも
右近つかさ　○河海
あくるもしらてと　○引歌也長恨歌を詠る歌也玉す
だれ明るも知でねし物を夢にも見じ思ひかけきや
猶あさまつりこと　○長恨歌には貴妃か寵によりて
也こゝは更衣の事の御なけきにをこたらせ給なり
猶の字殊勝なり
大床子　○朝かれゐは女房の陪膳大床子は殿上人の
陪膳なりいつれをも御らんじもいれざるさま也
この御ことにふれたる事をは　○御寵愛の甚きによ
りて此更衣のことにふれてはすこしは道理をまけ
たることも有しとは後凉殿の更衣をよそにうつし
給ひしなりとの類(タグヒ)なるへし
人のみかとのためし　○河海玄宗と云々玄宗は祿山
か亂の後則位をさりて肅宗位に付給ひしかは位を
もやさり給はんすらんの心なり
月日過てわか宮まいり給ぬ　○源氏君なり
坊さたまり給ふ　○朱雀院御事也醍醐御事代には東
宮文彦太子保明薨の後其子慶賴王立坊又早世其後
朱雀院立坊也
女御も御心おちゐ給ぬ　○弘徽殿の心安堵せしなり
かの御おは北のかた　○更衣の母君源氏君祖母なり
このたひはおほししりて　○源氏君更衣にわかれ給
時は何の辨へもなかりしを此度は思ひしりて愁傷
あるなり
女みこたちふた所　○朱雀院の御一腹也
宇多の御かとの御いましめ　○河海等に見へたり
鴻臚館に　○河花に見へたり今の四塚と云處の邊な
り
右大辨の子のやうにして　○うつほの物語にも相人
に右大辨の子としてあふことあり

くにのねやとなりて　○又そのさうたかふへし
此段花鳥義いかゝ言ははしめより國のおやとなり
てあらばあしかるへし天下をたすくる方にてあら
はみたれうれふるかたゝかひてよかるへしと也
辨もいとさいかしこき　○さねのさ文字清へき由一
條禪閣の御說と云々然れともさ文字古本濁て聲を
さす也可然哉其故は神樂のさいのをのこをもさ文
字濁也濁てよむへきなり
いみしきをくり物　○此進物梅かねの巻に沙汰あり
やまとさう　○和國の相人もかやうに申也
無品親王の外戚のよせ　○花鳥
いよ／＼みち／＼のさねを　○天下のたすけなとに
ならせ玉はゝ才學なくてはとなり
すくよう　○宿曜師人の運明なとを勘に者也
先帝　○系圖になし
三代の宮つかへ　○河海光孝宇多醍醐歟とあり然共
さして三代にてなくとも只久さしくといはん爲歟
御かたち人にて　○かたちよき人と也
ゆゝしくと　○いま／＼しきなり
きさきうせ給ぬ　○藤壺の母后なり

兵部卿のみこ　○紫上の父也後に式部卿
これは人のきはまさりて　○桐壺更衣は族姓さしも
なきによりて人もそねみしに是は族姓人からそね
み云へきかたなしと也
おほしまきるとはなけれと　○ねもしろきかきさま
なり
うちねとなひ給へるに　○女御たちの中に藤つほは
わかくねはしますとなり
はゝみやす所はかけたに　○源氏の君更衣の面影は
覺へ給はねとも今内侍のすけの語給につけてなつ
かしく思給となり
うへもかきりなき　○主上の御心には源氏をも藤つ
ほとゝ何れも大切に思給故なり
こきてむの女御又この宮とも　○更衣ども更衣の後
は源氏をは思ひゆるし給しを此藤壺と御中へたて
給はぬにより立かへり源氏をにくみ給ふとなり
名たかうねはする　○弘徽殿の宮たちのことを云
かゝやく日の宮　○花鳥
おはします殿　○清涼殿なり　河海
大藏卿くら人　○花鳥

はいしたてまつり給ふさまにみな人涙たとし給ふ
○春宮の御元服は南殿堂上にて拜あり是は堂下にてある故に皆涙たとすと云義ありされとも只源氏の容儀進退を感する心可然歟
さぶらひに　○殿上なり
たとゝけしきはみ聞え給ふ事あれと　○今ひきいれの大臣むてにとり給ふへきなりさて我亭へ請し申さるゝこと也
いときなき　○いとけなきと云本ありそれをもいときとよむへし
御心はへありて　○葵上の事を含たる義なり
むすひつる　○紫は惣して女を云今は元服なれは云也歌の心は源氏の君の心たにたかはすはと也
みはしのもとにみこたち　○元服の祿を賜也
おりひつ　○おりうづと讀なりたりにいれたる物なり
こ物とつゝき　○河花
とんしき　○河花
ゆゝしうつくしと　○此ゆゝしうはゆへ〳〵しき心歟

女君はすこしすくし　○葵上は源氏に四の兄なり此年のましたるこそ故始終葵上は心をかせ給ふとなり
くら人の少將　○後の致仕のたとゞなり
なほ〳〵　○念比になり
さとのとのは　○更衣の里なり後に二條院と云なり
たもふやうならん人を　○一義大方思ふやうなる人となり又藤つほの心あり
ひかる君とは　○源氏の名のてとをかきあらはせり
西三條右大臣源光と云は仁明天皇御子才人なり
となん　○紫式部我かきたる事を人にしらせじとなり何の卷にも此心あり
(此ヨリ末)
此所聞書旨趣任夢浮橋奥書胸臆荒涼之談卒爾可註置不可漏脱之處能州刺史義綱數奇深切餘寄紙懇望之間不獲止書全部以附與之云々卷々予一一見了猶宜令取捨不可披出深窓之外而已
太永戊子夏五下旬候　　比立　御判
(是迄細流無之)

箒木　源氏十六歳のことあり桐壺巻には十二歳のことまてをしるすと見へたり但し同巻の奥におとなになり給ひて後はとかきて又さとの殿は修理職たくみつかさに宣旨くたりて二なう改めつくらせ給ふとあり然者十三四五の年のことは同巻の奥にこもり侍るへし巻の名の事河海はゝきゝの心もしらでの歌の所に委くしるされ侍り箒木と云名は惣ては源氏一部の名にかけて見るへきなり一切衆生のあるかとすれはなき有さまに能叶へり桐壺巻は序分まても入たゝす此箒木巻物語の序分也と見へたり作者の本意讀者必要の理り此箒木の題號にをさまれり凡莊子か胡蝶の夢の詞も此ありなしに同しかるへし世間のありさまを思ふに只箒木に始りて夢浮橋にをさまると見るへきなり

光源氏みのみこと〳〵しう　○河海に名のみこと〳〵しくと讀切へきよしゝるせり可然但しよしつゝけても苦しからさるなり人をそしるかたよりいへはいかなる名人も云けたるゝものなりこれ世間のありさま也弘徽殿のかたさまよりは云けたれ給ふとなりされともたゝ公界へかけて見るへきなり

とかは好しよくなりまたなにことにつけてもなり

すきことゝも　○すきことゝは好色なり花鳥光源氏と云名をすきことゝはいへる也云々此義は如何かくろへことはしのひたることなるへし花鳥高麗人に相せしめ給ひしことと云々是も又如何

なよひかに

をかしき　○花鳥

かたのゝ少將にはわらはれ給ひけんかしと云　○是まて物語の作者の惣論也かたのゝ少將說々あり只物語の名也清少納言枕草子にも見へたり心はかた野の少將は天性好色をうへからたつる人のことなり此源氏の君はうへはさはなくてしたに好色の心あるとなり

また中將なとにもの給し時は　○こゝより双紙の詞なり今源氏は當官中將也　給し此しの字は過去のし文字にては聊心得かたき樣なれと當代の事をも物語に如此書事常の事也

内にのみさふらひようして　○侍よくしてなり

おほいとのにはたゝ〳〵　○葵上の御かた也桐つほの巻にも内すみのみこのましうたほへ給と有五六日さふらひ給てたほいとのには二三日なとたへ〳〵にまかて給とあり

しのふのみたれやと　○内裏にてはいかなるみたれ心もありなんと葵上かたには思ひ疑へるとなり花鳥藤壺女御に心かよはし給ふことと云々是はさしつめたる様にていかゝと覺侍るなり

さしもあためきめなれたる　○花鳥めなれたるとは葵上のこと也と云々此儀不可然此段は悉皆源氏の君の本性を顯し侍也源氏の心はせにてちと心つくしにわりなきふしをこのみ給ふとなり源氏君の一生涯の心はせを顯はし侍也

なか雨　○花には六月とあり只五月のことなるへし

いとゝなかゐさふらひ　○久しく居なり

御むすこの君たち　○ひきいれのたとゝの子息たちゝなり

たゝこの御とのゐ所　○源氏のとのゐ所なり

宮はらの中將　○後に致仕のたとゝ也桐壺の帝の御いもうと三宮の御腹也

右のおとゝのいたはり　○弘徽殿の后の妹也此おとゝの四君此宮はらの中將にあはせ給なり此君も物うくしてとは此四君をはさしも思はてあためき給へは源氏の葵上には心とゝめ給はぬ同しやうなりと也

をさ〳〵　○此詞所によりて用かふる也こゝは常にをのつからかしこまりもたをかす　○へたてなくむつひ給故にをのつから禮義をも忘れて伴ひ給ふとなりかしこまりもたをかすとは無禮なるやう也となり是則品さための物語なと打とけたることのはしめにかけるなるへし

御とのゐところ　○桐壺の事なり

ふみともなとみ給　○此文は書籍なり

色々のかみなる文とも　○此ふみは艶書なり

かたはなるへきもこそと　○其中に見苦きも有へきとなり下の心は興ある文をはかくし給ふ心なり

をしなへたるおほかたのは　○只大かたのは中將なとの我身の上にも書かはして見侍るとなり

をのかしゝ　○我〳〵なりみつからの心さしのまゝになり

ゑんすれは ○うらむるなり
おほそう ○大概のなり
二のまちの心やすき ○第一にかくし給ふにては有ましき也つきのにて有へきと也
そこにこそ ○そこそは 足下也源氏の詞也此中將をさしての給也
御らんしごころあらんこそ ○中將の詞也
これはしもと ○只これはといはん爲なり し文字はやすめ字也花鳥四段に分てり
うはへはかりのなさけにてはしりがき ○手をかくことなりうはへの情に手はしりかきと讀說不用也大かた手なこともきたなけなくかきてことたらひたるやうなる人也
そもまことに ○そもはそれも也撰出していはんにはかたきとなり
わか心にたる事はかり ○我はと思て人を何ともなく云なり女のつねのくせ也
まとのうちなる ○人のむすめのよそのきこへある程なり
たゝかたかとを ○歌をもよみことをもひき手をもかくなと一ふしゑ出ることのあるを聞傳るなり凡此品定は誰となく皆世にありとある人のありさまをいへりされとも少々皆は物語の中にある人の性に引合せて見るなりこゝは末摘の琴なとひき給ふをきゝて源の心をとめ給ふ類ひなり
をのつからひとつゆゑつけて ○自然一藝はたれもし出ることあるなり
みる人をくれたるかたをは ○人の媒介するくせにて必す種々の其身によきことはかりを取出して云立るなり
それしかあらしと ○さは有ましきと推量するまてのことはたれもなきものなり
まことかとみもて行に ○きくことに叶ふやうなる事はなき物なれはとかくに世間に然るへき女はなきぞとて打うめきたる也
いとなへてはあらねと我も ○我もとは源氏なり
いとさはかりならん ○一向なる人の所へはすかさるれどもよるましき也
とるかたなくくちをしき ○下品と上品とは同物なるへしいたりて最下品と到りて最上品とは數すく

なきとなりさる程に中の品に人の心は見ぬへしと
なり
人のしなたかく　○上品の人は自然にかくるゝこと
も多きとなり
しもかしなになりぬれは　○下品の人のことは人の
とりあくることもなきには耳立こともなきとなり
まへの詞のとるかたなく口惜ききはとすくれたる
とは數すくなしと云詞を云のへたる也
そのしな〳〵やいかに　○源氏の詞なり三品には何
とつくへきと問給ふなり
もとのしなたかく生れなから　○上品の人の身をも
ちさげたるを云也くらゐみしかくとは選叙令にも
位のみしかきと云に卑の字を書たり位のいやしき
心なり
又なを人のかんたちめなとまて　○なを人は直人也
種性不貴人也諸大夫なとの時を得て次第々々に昇
進して公卿なとまてなりのほる人なり此二の品分
別しかたきと問給ふなり
左の馬かみ　○此問答の最中に此兩人參也
いときゝにくき事　○是は物語の作者の詞なり

なりのほれとも　○左馬頭の申なりまへの二の品を
評するなり當時なりのほる人を世間からは昨日今
日までのさしもなき人そと思ひいへと既に昇進な
としあかれは云おとすへきにもあらすとなり
さはいへと　○されとも思ふ處はあるとなり惟光か
女藤內侍のすけなとにあたれり
又もとはやむことなき　○是は種性よき人の衰行を
云なり末つむなとにあたるなり前には琴なとひき
給しわさを云とて末摘を云也こゝは其身のありさ
まに比する也兩段は中の品なるへし
すりやうといひて　○軒はの荻の類なり前のなほ人
と云類なるへし國の守は一任四ヶ年つゝにかはる
也さて人の國の事にとは云なり吏務を司る人なる
へし國の守にて參議の兼國と云は權守なり
けしうは　○氣の字淸なり
わり出へきところほひなり　○當時受領の女可然多き
時分なるへし
なま〳〵のかんたちめ　○なま〳〵とはなまなりな
る也初（本ノマヽ）めて公卿なとになりたる人なり中納言參議
ほとゝことひの人也

非參議 ○參議にもあらて三位四位たる人なり
もとのねさし ○明石入道にかなへり
いとかはらか ○さはやかなるなり
家のうちにたらぬ事なく ○はぶかずとは何事も省略せず也はぶかひは何事も省略する也
まはゆきまてもてかしつける女 ○明石の上の類なるへし
宮つかへに出たちて ○桐壺の更衣にあたれり
すへてにきはゝしきに ○源の語なり所詮は富るによるへきこと也家のうちにたらぬことなとはたかめると云にあたりての語なり
こと人のいはんやうに ○中將の語なり源氏は好色の身にしてかくの給ふは似合さるなり
もとのしな ○馬頭か詞也此段女三宮によく當れり
朱雀院寵愛の皇女にてましませとも御手なともうるはしからす心もをくれたる所ましますす也
うちあひてすくれたらん ○やんことなき人の時の覺へもあり心もちゐもしわさも打合ひ可然人なり是はもとよりの事なる薄雲女院これに當れり
心もおとろくまし ○是はもとよりかくこそ有へきことなれは心も驚くましきとなり
なにかしがおよふへき ○なにかしは右馬頭自身をさしていふ然者身にとりて上品をは申かたきとなり
さて世にありと人にしられす ○夕顔上に當れり
ちゝのさしをい ○此段は種姓させる人ならぬ人の中にも可然人有へきの心なり
かたかとにても ○かやうの中にも取所あるへき義なり大かたをしなをしにすてかたきをはいかゝとなり藤式部か妹の類なり
いてやかみのしな ○源氏の心の中なり葵上は父は左大臣母は御門の御妹となれは是こそ上の品とも云へき人たにも源の御心には思ふ所あるやうなり
君とは源氏なり
しろき御ぞ ○源氏のありさまを云也
なをしはかりを ○夜陰なれは知音の中にてはさしぬきを略して直衣はかりを引かくること勿論なるよし一條禪閤說たり然れとも直衣には必す下にきぬをかさぬる物なりこゝにはきぬをかさねさるをなをしはかりとは云歟さしぬきを略する說はあま

りなる歟云々

そひふし　○添臥なり花鳥説可然

女にして見奉らまほし　○女に我なりて見奉りたきとなり此説よきなり又説源氏を女になしてみたきとなり此詞末の巻にもあり

この御ためには　○源氏の御爲には上か上を撰てもあくましきとなり

おほかたの世に　○左馬頭詞なり我物と撰定へき人はかたしとなり

そのこの大やけ　○此段肝要なり此人こそは世のかためともなるへきとて取出すへき人はかたきことなり

されとかしこしとても　○されとも天下の萬機の政は官に職々ありて司る物なりかしこしとて一人してすることはなきなりさる程にかみは下にたすけられ下は上になひきて大事とは云なから何こともなりて行事なり

せはき家のあるし　○家中は人ひとりのはからひにて讓るかたなけれは大事なるとなり此あるしはうしろ見すへき女あるじの事なりうしろみなくては

家中はおさまりかたきなり

とあれはかゝりあふさきるさ　○花鳥そへにとは本の荷にことつけそへたる荷を云世俗におもににこつけと云ことなり人のあつらへものなと預りてあなたこなたへとするはをのか煩ひになる心なり云々如何顯昭か註云あふさとはあふさま也きるさはきさまなりとさまかくさまと云心なりとするもかくするもあしと云ひしらぬわさかなとよめりと云々京極黄門因之なり　とせんとするもかくせんとするもあちこちへ物のちかふなりそへにとてとは只詞なりあまりと思てすれは又かかりと也世中の有さまなり荷には非て後撰に戀けふそへにかくれさらめやは思へともたへぬは人の心なりけりも此詞に同歟

なのめにさてもありきぬへき　○大かたは子細なき人ならなのめは十分ならぬ詞也大かたなと云心歟

すき〳〵しき心のすさひ　○あなかちすき〳〵しき心ならねと心にかなふやうもやとにりそめては定りかたきとなり天然の緣にまかせてをくへきことゝなり

かならすしもわか思にかなはねと　○少々心に叶はぬ女をも捨かたく思ふ男の事なり此詞男女の上のみならす君臣朋友の交りにも殊勝の詞なり　されとなにか世のありさまを　○河海なにがさはなにがしと云心と云々但されとゝ讀きりて何かと詞にいへることゝ見へたる歟

君たちのかみなき　○源氏や中將を云なり可然女の世になきを云なり

所せくれもひたまへぬにたに　○花鳥所せくはひろき心なり思ふたまへぬはせはき心なり馬頭か世間せはき身にたにかやうに思となり云々聊相違せるにや所せくとはせはき心なり上臈は萬つに身をかるゝしくし給はぬによりて其身はせはき心なり

馬頭なといやしき身は所せはきことなく見ありき侍るたに思に叶ふ女はなきとなり所せく思ふたまへぬにたにと云にて句をきり心を上へかけて見るなり下へはつゝかぬ詞なり

かたちきたなけなく　○女の一種あるさまなり

ちりもつかしさ　○身をたてゝ潔白なるとなり

文をかけとおほさか　○六條御息所に當れりたほとかは大やうなり

ことわり　○詞をわらひつくろふ也

又さやかにもみてしかなと　○又とは文かきなとほのかなると云に對していへり心は文なとはかりにてはおほつかなさに行てあはんとすれはすへなく待せてはやく出てもあはて幽にあへしらひて物を思はする躰なり又文のほのかなれはさやかなるをも見はやと待心にや花鳥墨つきほのかに書たる文を讀とかんとすれは隙を費すなれはすへなくと云

待せとは程をふる心也と云々是又如何

わつかなるこゑきくはかり　○是よりは木枯の女に當れり

とりなせはあたゝく　○取よりて心見れはあたゝしく見ゆる人あり

はしめのなんとす　○第一の難とするなり

ことか中に　○ことなるか中なり取分てなと云心なり此段はすゝむをしりぞけ退をすゝむるなり

なのめなるましき　○なをさりならぬ人となり可然女のことを云り又男のうしろ見をなをさりにすましきをも云

物のあはれしりすくしをかしきにすゝめる　○物のあはれをしり情にすゝめるあしきにてはなけれとも實なる所なきはかひなけれはと云なり

又まめ〳〵しきすちをたてゝ　○是は餘りに實なる後見の方はかりをたてゝ我身をはやさしくも持さるを云なり

みゝはさみかちに　○鬢髮を耳にはさむなり取つくろはす有に任せて我身をもつなり

ひさうなき　○ひさうは貧相なりなきにては有ましきなり貧相なるなりきは添字なり此類詞に多歟

家とうし　さためたる妻なりこの女は馬頭か指くひし女の類なり

朝夕のいていり　○男の出入なり世間のうきをも又は外より歸ても何事なとゝ我妻にこそかたり合せんとするにも打とけて其いらへなともしか〳〵とせさるを云なり

おほやけはらたゝしき　○主人なともちたる人の其身にうらみあり又傍輩朋友なとに口惜きことのあるとき心ある妻なとには語もすへきとなり

をもひいてわらひ　○口惜なと思事の有時なり

さしあふき　○扇なとをさしかさして居たるなり

たゝひたふるにこめき　○紫上の類也こめき花鳥にをさなかましき心と云々如何叵の字可然歟をほごかなる心なり

けにさしむかひてみん程は　○さし向ひてあるほとはそのけちめも見へさるも立はなれて男の爲に何事をもをしはかりさたするかたのなきはあしかるへきとなり

たりふしにしいてん事のあた事にも　○人に物を云つてさたさするにも我たらひたる事にてなけれは毎事不便なること多き物なり

つねはすこしそは〳〵　○花散里の類なり平生は其かたちなとのよくもなきによりて打も向はぬやうなんともおりふしにつけて出はへする心たての然るへきを云なり

いまはたゝしなにもよらし　○此詞一部の肝心なる由花鳥にしるせり尤可然

ねぢけ　○佞人なり

物まめやかにしつかに　○葵上紫上を人の本にして皆云なり

あまりのゆへよし心はせ　○ゆへ〳〵しくよしある
なり
うしろやすくのとけき　○葵上に當れり
ゑむに物はちして　○是は伊勢物語に出ていなは心
かろしといひやせんの歌よみし女の類なり
うらやみ云へき心も　○匿レ怨友二其人　と云か如し
うへはつれなくみさをつくり　○夕顔上なとのるゐ
なり
わらはに侍し時　○馬頭幼少の時昔物語にさまかへ
たる女のことなと書たる草子を見て哀なることと
思ひしを今思へは結局かろ〳〵しきことにこそと
なり
心ふかしやなとほめたてられ　○古今に我を君なに
はのうらにとよみし女の類なり
君の御心はあはれなり　○君とは男を云なりいまた
男の方からは忘れもはてぬと云なり
にこりにしめる　○引歌詞はかりをとるなり心はち
かふなり言はうき世にある程は蓮の淤泥にありて
濁にしまぬをはや世を一度離れて又立歸る心ある
は更に濁にけかさるゝとなり

あまにもなさて　○是は尼にいまたなさてとりかへ
すなりこれもたゝ同し物なり
われも人もうしろめたく　○伊勢物語忘るらんと思
ふ心のうたかひにとよみし類なり
又なのめにうつらふ　○なをさりにうつろうなりさ
やうならん男をは女も思ひさるへし
心はうつろふかたありとも　○男のうつろふかたあ
りとも有初し契を思ひて堪忍すへきなり
さやうならんたちろき　○堪忍せぬ人はかやうの時
中もたへぬへきとなり
なたらかにゑんすへき　ゑんすへきをもゑんし恨む
へきをも一向恨みぬもわろき物なり紫上の類なり
みる人からをさまり　○見る人とは女の事なり男の
心も女からおさまるへきなり
あまりむけにうちゆるへ　女の男をあまりさしゆる
すゝ疎きとなり千里万里の船をもいさゝかの纜に
て繫きをく如くに男の心をも女の心にて繫をくへ
きとなり
つなかぬ船　○河海鵬鳥賦を引可然
さしあたりてをかしとも　○花鳥第七段馬頭か詞云

ないかゝ是よりは頭中將の詞なり男のうへに見る説あれとも只女に見るよきなり朧月夜の類なり

ともかくもたかふへき　〇こゝにて總を決して云なり

我いもうとのひめ君　〇此事葵上の樣躰によく似たると思たれはなり

君のうちねふりて　〇案の如ノ源氏もかく思給ふ故なり

物さためのはかせ　〇集覧に博士とは學官名掌レ通ニスルコトヲ古今ニと註せり只古今にひろく通する心なるへし

ひゝらき　〇鳥の羽を翥ごとくにほこりたるなり

よろつの事によそへて　〇馬頭の詞なりまへ〳〵は人の心〳〵をさしむきて云もてきて是よりたとへをもちて云なり木の道繪所手跡の三を云なり万の道を中將に知せん爲なり政道にも又如此道までもしらては叶ましきよしなり

そはつきされはみ　〇されは左道の心にて左禮なり此譬人にとらは人に戲れことを好む人なりそれをも愛するかたにとるなり

大事として　〇人の本臺になるへき人はされはみたりなとしたる人は叶ふましき也世に有かたき物なり

又繪所にじやうす　〇是より繪を云り若宮はまきる事あるなり墨繪いたりて大事なり

つき〳〵　〇上手のにならべて見るなり

ほうらいの山あら海のいかれる魚のすかた　〇眞實を見ざる物はさも有へきと思ふなり河海鈔子を引後漢書張衡傳にも畫工惡レ圖ニ犬馬ヲ而好レ作ニ鬼魅ヲ誠以ニ實事ハ難レ形ハシ而虚僞ハ不レ窮ラなりと云に同心なり

にさらめと云々　〇眞實を見ざる物はさもあるべきと思也

山のけしき木ふかく　〇濃淡に山のかさなりたる樣に書なり花鳥金剛は山を十五重たゝみなすことをひけり

けちかきまかき　〇前栽を云なり

心しらひ　〇心つかひなり是は人の本臺たるへき人のさまなり

手をかきたるにも　〇是より手跡を云

てんなかにはしりかき　〇點長走書

けしきはめる　○ごこともなく氣色有也
猶まことのすちをまめやかにかきいたるは　○唐穆宗問二筆法一柳公權曰心正則筆正云々乃可レ法矣と云
うはへ　○うはつらなり
とりならへてみれは　○歌道も如此なりかさ〳〵しき様なるはきとめにたつやうなれとも取ならへて見るに見さめのする事のある物なり大貳高遠か關の岩かとふみならしとよめるは貫之か關の清水に影見へてにはまされりと思ひしか後に及さるといひしか如くなり
はかなきことたに　○かやうの小技藝たにもあり何事も實になくてはとて馬頭か申なり源氏の君頭中將何れも世をまつくかこつへき人成故に世上の有様を能知せ奉らん爲なり
そのはしめの事　○前にさま〳〵いひしもいまた事たらぬとて我身に昔ありしこともを引出てかたり申也
法の師の　○まことに説法の砌にて法り聞如くなり花鳥三周説法の事尤面白し總して此品定は口にて云までにては無曲なり久く年へたる人なとはさま〳〵に思合することも有へし悉く世の有さま人の上にある有さまなり凡此物語を見るには源氏の時代になりかへりて見るへきなり何事も今の世に合せて見れは毎事虚誕のやうに思るゝ也定家卿の戀の歌をよまんには凡骨をすてゝ業平のおきもせすねもせて夜をあかしてはとよみし歌をよみたる時の心になりかへりてよめと申されし如く此物語を見るも其時代に心をゝきて見るへきとなり
はやうまた下らう　○古今詞書にはやうすみける所にてほとゝきすのなきけるをとあるはもとすみし所と云也其心に叶へり
きこえさせつるやうに　○前にひさうなき家とうしと云し事なり
まほにも侍らさりしかは　○河海まほはうるはしき也まほに非すとはうるはしからぬ也眞帆也ほと讀なり只まおとも讀なり千載にそなれ木のそなれ〳〵てむす苔のまおならすとも相見てしかな是はまあおのかたへもよむなり又こぬ人をまつほの浦の夕なきに是もまつおとよむ也
わかきほとのすき心ち　○眞實の本臺とは思はさり

しなりされともよるへとは思しなり
おいらか　○なたらか也
かすならぬ　○いまた官も淺くて年ゟ若き我身をは
何とて是程まではたのみてかく許しなくはするそ
となり
じねんに心おさめらるゝ　○まことは自然に心もお
さまるとなり
此女のあるやう　○此より本性を云なり此人の爲と
は馬頭の爲に也女の何とかなと馬頭を思なり
すゝめる　○すくめると云本ありすゝみ過たるなり
又はきこつなき女の事なり
とかくになひきて　○花鳥には男の事と云々不可然
只女の事なり
人にみれは　○是より馬頭の本臺といはれて他人に
もなほざりに見へしとは苦しかるへしとていつも
能つくろひて有也可然心用ひなり
にくきかた　○嫉妬のかたなり
あなかちにしたかひ　○馬頭か心には我には能隨ひ
たる人なりけれはちとをごして見ん我を見はなつ
ましき本性なりと思なり

かくおそましくは　○馬頭の詞なりをそき也をそろ
しきなり
かきりとおもはゝ　○我に別れんと思はゝ此程の如
く嫉妬をもせよ此まゝにも添終へきと思はゝ此心
をやめられよとなり
人なみ〳〵にも　○ちと昇進をもせんとなり
我たけくいひそし　○つよくいひすこすなり
よろつにみたてなきほとをみすくして人數なる世も
やとし　○女の詞なり人なみ〳〵にもなくといひ
し詞をうけて云なり更に人なみ〳〵になるへきを
待にてはなきとなりいつかしつほうに有へきとま
てともさはあるましきならは別るへきとなり
あひなたのみ　○かひなき頼と云心也あちきなき心
なり
かたみにそむきぬへき　○とにかくに別るへき刻か
となり
はらたゝしく成て　○前は此馬頭はそらはらをたて
てありしか此にては實に腹立する也
およひひとつを　○小指なりかやうにかたわにさへ

なれは萬つかひなきとなり
てをりて　○作物語なれは上何もとのを置なり
　これ一つやはといま是一にてもなきとなり
えうらみしなと　○今は女もゑうらみしと馬頭か云
　なり
うきふしを　○こやとはこれやなり
まことにはからはるへき　○馬頭か心なり
りんしのまつり　○賀茂臨時祭なり
いみしうみぞれふる　○艶に餘情あるさまなり
まかりあがるゝ　○別なり
家ぢとおもはむ　○馬頭の心なり家路とは室家を云
　なり
内わたり　○内裏なり
けしきはめるあたり　○我思物のあるあたりへと思
　へともそれも夜も更待由也是は木枯の女なるへし
いかゝおもへると　○指くひし女の事なり
つめくわるれと　○はぢたる體なり
火ほのかにかへに　○面白體なり
なへたるきぬとものあつこゐたる　○綿なと入りた
　るきぬなり

おほひなるこ　○ふせこなるへし
ひきあくへき物のかたひら　○木丁なり
こよひはかり　○馬頭を今夜なとやと待さまなり
されはよと心おこりして　されはこそ我を思ひは
　給ぬよとなり
さうしみは　○あるしなり
おやの家にこれよさりなんわたりぬると　○留守の
女房の云なりをりしも今夜おやの家へ出ぬる由を
云なり然を花鳥にをやの家にありて今夜是へわた
り給ふへしそれを待也と云々不審
ひたやこもり　○無意趣なりこゝのやう體何とも心
得かたきことなり歌なとをもよみをかずいかにもい
ひもをかさるを云なり
我をうとみねと　○此程さかなく許し無りしは我に
思ひうとませてよそへ行へきと思けるにこそとま
てあらぬふしなときへ思るとなり
さしもみ給へさりし事なれと　○年月はさやうの心
とはおほろけにも見さりしことなれともと思なり
きるへき物つねよりも　○二心ある歟と疑たれは馬
頭か衣裳なとを可然やうにとゝのへてをくなり

わかみすてゝん後をさへ　○女の見すてし後までを思なり
そむきもせすたづねまどはさむ　○あり所をかくしもせすかはらす返事をするなり違さかりて尋まとはせんともせぬなり背きもせぬなり背きもせすとは河海にははしめに世をそむきぬへき身なりといひ……これは前のかたみに世を背きぬへき詞になんあると云詞にかけて見なり花鳥彼之只男の尋きたるにうちそむかすあへしらふなりと云々可然又河海の説も猶捨かたきかと云々
かゝやかし　○はちかやくなと云は只はぢたるなり馬頭にはぢすの心なり
たゝありしなから　○女の詞なり馬頭の心をたにも改めは歸るへきと云なり
さりともえ思はなれし　○かやうにはいへとも猶もこらさんとて改むへしともいはぬなり
いたくつなひきて　○女をちとこらさんとて馬頭のわさとのけひきてよりつかぬ儀也引よせは只には寄て春駒の綱びきするぞ名はたつと顯此歌にて書也
たはふれにくゝ　○引歌女をこらさんとせしはたはふれたる心なり
たつたひめといはん　○物をそめなとする色あひなとも上手なり
たなはたの　○物をたちぬふ事なり
うるさくなん　○うるはしきなり
中將との七夕のたちぬふ　○中將の詞なりたちぬふかたは似すこともなかきちきりにあやからせたきとなりあへましはあやかるへしとなりたちぬふわさはあへすそありけるの歌にて書也
そのたつたひめのにしきには又しく物あらし　○しく物あらしとは馬頭か妻の物の色あひなと能させけることの又たけひもあらじとほめたるなり然を花鳥に手きゝたる女なりともたつた姫にはさりとも及ましきと云々いかゝと覺へ侍り
ほかになき花紅葉　○春の花秋の紅葉は造化のしわささへ年によりて花も色なくさき紅葉も色あひあしければ露のはへなき物をまして人の沙汰し出ることなとは色あひ肝要也とて一段と此女の大切なる由を中將の云て馬頭にあはれとそへ給ふなり花鳥おりふしの色あひはかく／＼しからぬもてなしとは

物ゑんしのかたのうるさきを云なりと云々如何
さて又おなしころ　○又物語を一云出すなり木枯の
女のことなり
うちよみ　○歌をよむなり
こともなく　○無事はほめたる詞なり萬つにわたる
へし
このさかなもの　○ゆひくひたる女を本臺にてなり
えむにこのましき　○あた〳〵しきかたの心たのも
しからぬと也人の心のをしへにいへり
うちたのむへくは　○色〳〵しきゆへに心をもとめ
さるなり
神な月のころほひ
うへ人　○殿上人なりたれともなし此人木枯女にか
よへる人なるへし
大納言の家　○此大納言はたれともなし河海右馬頭
の父歟と云々さもあるにやいかさま馬頭に緑ある
人成へし
こよひ人待らん　○此上人木枯の女に心有て云詞也
池の水かけ　○面白き詞なり
月たにやとる　○伊勢が雲井にてあひかたらはぬ月
だにも我宿すきてゆく時はなし
すのこたつ　すのこのやうなるとなり
ふところなりける笛　○殿上人なり
影もよしなと　○此あすかゐをうたふ心はやとりは
すへしの心を取なり
つゝしりうたふ　○式々にうたふにはあらてつゞり
うたふ也そゝろうた也花鳥文選大人賦云嘰瓊華
註嘰は食也云々今大人賦は文選に無之漢書司馬相
如傳にあり文選とあるは誤なり
よくなる和琴を　○内にて女のしらへたるなり
律のしらへは　○飛鳥ゐも律の歌なり律は秋を司
るなり又律は陰なれは女のかたなり時節神な月な
れはおりにあへるなるへし
いまめきたるものゝ　○和琴を云なり
庭の紅葉こそ　○秋はきぬ紅葉はやとにの歌にて書
りねたますと云詞心得難き歟踏分たる跡のあらん
こそたれか通ひつらんとねたむ理なるへけれされ
とも是は此女の庭へ別の人の通ふときゝていへる
なり通ふ人ありともかやうの紅葉なとをも我こそ
尋参りて見はやし侍れとなり此心にてねたますする

心聞へたり
琴のねも月も　○月を菊と書たる本あり何れも面白しえならぬとは只ならぬとなりつれなき人とはさだめて待人有へしと也されど我ならて誰かは紅葉を踏分て來つるとなり
わろかめり　○かやうに女と歌よみかはすは人目わろきとなり又の儀は歌のわろきなり此義を用へきにや
きゝはやすへき人　○馬頭を云なり
本からしに吹あはす　○前の歌は別に待人有へしと讀るをこゝにはつれなき人をは此うへ人にしなして我身數ならねは引とゝむへきことのはもなきとなり
にくゝなるをもしらて　○女のかやうにいひかはすを馬頭か聞てにくゝ思ふなり
かとなきにはあらねと　○一かとなきにてはなけれとなり
たゝ時〱こうちかたらふ　○時々のかたらひ人にてはかやうにても子細なきとなり大かたの物と實に用へきとの差別なり前より皆此心なり

此ふたつの事を　○わかき時さへ口惜く思ひしにまして今は所望にもあらすと也
御心のまゝに　○頭中將なとの御心のまゝならはかやうのあたなることをこそ面白くおほしめさめと也萩の露玉篠のあられ引歌に及へからす只あたなる心なるし
あへかなる　○ひはつによはき心なり
いま七とせあまり　○馬頭源氏よりも七年はかりの兄と云義歟只七は大數をあけて今ちと年も重りて思知給ふへき由なり
いつかたにつけても　○源氏の御心なりおはさうすとはおはしますとなり
なにかしはしれ物の物かたり　○是より中將の物語也しれもの花鳥にはしれ物はされ物と云々不可然萬葉に浦嶋長歌に世中にしれたる人と云癡の字を書たりこゝは夕顏の上の事なり彼性おろかにて癡なるかたある人也痴の字尤可然又左傳第十三（四十丁）成十八年の傳無慧ニメ不レ能レ辨ニ菽麥ヲ故ニ不レ可レ立註云不慧ハ蓋シ世ノ所謂白癡ソ
さてもみつへき　○なにとなくはしめてあふ人の心

につくなり此まゝも見たく思ひしなり
ならふへき物とも　○行末とをくとまては思はさりしなり
うちたのめる　○女もなれ行まゝに打たのむとなり
たのむにつけては　○たのむにつけては恨むへきことをも恨てこそあれ匿怨所あるなり
心ぐるしかりしかば　○此夕顔上はとたへ（絶）のあるをも恨むるやうにも無りしをそれさへ結句心くるしきなり
おやもなくて　○おやは三位中將なる人なりたかほの巻に見へたり
さらは此人こそは　○おやもなき故に此中將をたのみ所に思るゝなり
このみたまふる　○頭中將北方二條大臣の四君かたよりおとしかけたることのあるなり
むけにれもひしほれ　○夕かほのうへなりかやうの事をも露程も中將には申されさりしなり
さてそのふみのこと葉はと　○源氏の問給ふなり
いさやことなる　○優なる詞なりはゞかりての給はさるなり詞なとにて人の程人の心も見ゆへき故なりさて源の問給ふを心得て中將もかやうに答玉ふ心つかひ面白きなり
山かつのかきほ　○あはれなる歌なりあるともとは荒るゝともなく我身こそ山かつのことくあれたりともなく卑下の心なり下句は玉かつらのことにかけたりあはれはかけよと中將をかこつなりなてしこはそなたの御子なれは問給へとなり
れいのうらもなき　○たかほの上の心ぐせなり
あれたる家の露しげき　○あはれふかきさまなり
むかし物かたり　○當時此家の躰を見て云也古物語に及へからさる歟
さきましる　○さきましる花とは秋の庭のさまなり其中に床夏は今女にたとへて云なり夕顔上をなくさむるなりしく物そなきとはほむる心なり又床の緣も有へし秋の七種の中とこ夏其一なり
ちりをたに　○子よりもまつ母の心をとる也夕顔上をこそ思へとなり
うちはらふ　○又夕顔の上の歌なり嵐吹そふとは下心は二條大臣方よりはけしきことの聞へくるとなり面ては只中將を恨て讀るなり

あはれともひしほとに　○我身のとたへをくをも恨むる氣色もあらはかやうには有ましき物をとなり

なでしこ　○玉かつらなり

つれなくてつらしと　○色には見せすして此女のつらしと思ふをは我は不レ知してあはれと思しは益なきかた思ひなり

いまやう〳〵わすれゆくきはに　○我はやう〳〵わすれんと思ふ時分には結句思ひ出ることも有へきとなり

されはかのさかな物も　○是より又馬頭の詞なりさかな物は指くひし女なり花鳥には中將の詞と云々

琴の音のすゝめる　○木枯の女なり

この心もとなき　○夕顏上なり

なんすへきくさはひ　○思のまゝなる人はなきとなり

吉祥天女を○帝釋のむすめ端嚴の天女也

ほうけつき　○佛法くさきなり

くすしからむ　○くすみたるなり此より以下皆狂言に書也

式部か所にそ　○藤式部なり

しもかしも　○式部か詞なり

また文章の生　○藤式部か語りける詞なり

かの馬頭の申たまへるやうに　○前に朝夕の出入につけてもわたくしの人のたゝすまひよきあしき事の目にも耳にもとまる有さまをうとき人にわさと打まねはんやはなといひしやうにとなり

さえのきは　○さいのかきりなり花鳥才の伎と云々如何

なま〳〵のはかせ　○才學ある女なり皆狂言に云也

我ふたつのみち　○文集秦中吟を引花鳥に委註せり儒者なるによりてかやうに云也

たやの心をはゝかりて　○物を習ふ師なる故にたやの心を憚るとなり

こしをれふみ　○こしをれうたなと云か如し折腰體まてはゆかぬことなり

はかなしくちをし　○藤式部か詞なり女を或ははかなし或はくちをしなとは思へと宿世にまかせてあれは男は子細もなき物なりとなりすくせのひくかた侍めれはと讀切りてをのこしもと云よりおこし

て見るなり大方男子はやすきものなりと云なり花鳥義には上へつけて一つに見るなりおのこの爲子細なきと云々如何

心はえなから　○すかしてかたらせんとし給ふと心得なからなり

はなのあたりおこつきて

ふすふるにや　○久しくまからさる故かと思なり

又よきふし　○式部か心には是も子細なきと思なり

ふびやう　○腹病也

こくねつのさうやく　○土用のひるなと云て藥に用ることの有なり

いらへになにとかは　○何と返事を云へき由もなければなり

うけ給ぬ

この香うせなん　○女の詞なり

きゝすくさんも　○式部なり

さゝかにの　○此香うせなん時にと云をとかめていへるなり我來るへきよひとも待すして此香うせて後とあるはもしあらぬかこつけこともやあると云かくるなり蒜を晝によせたり

あふ事の　○不斷たちそふ中にてあらはひるまをまてともいはす逢へきを玉さかなる故にかやうなると也面白歌也まはゆきははつかしきなり

いつこのさる女　○さやうなる女はよもあらしとなり

おいらかに　○まことになり花鳥まめやかにと云々同心なり實成とよめりまめやかもまことの心有なり

さふらひなんやとておりぬ　○をりは居なり

すへて男も女も　○こゝにて惣をくゝりて馬頭の批判するなり

しれるかたのことを　○是よりは悉皆人のをしへを書也殘りなく知たることをも思はせてをくかよきなり餘りに才學たてをするわろきとなり

三史五經の　○紫式部か云なり大かたにめこそよからめと云てをきてぬされとも強ちに事にたてゝならはすとも世にあることをしらては口惜きとなり

さるまゝに　○さありとて是か又うたてきことなり

かきすくめ　○一本すゝめとあり

心ちにはさしもおもはざらめと　○眞名と云物は心

のやはらかなることも聲に讀なせはこは〳〵しく
聞ゆるなり
うたよむとおもへる　○歌よむへき人のをしへなり
はしめからそれにまつはれたるはあしきとなり
五月のせちに　○花鳥に見へたり
いそきまいるあした　○えならぬはえんならぬなり
今日はをりにあひてえんなるへきことなれとも節
會なとに參る人はをりふしのいそかしきに歌なと
よみかくるは心つきなきとなり
九日のえんに　○九月重陽の宴也
いとまなきおり　○かやうの折節に菊の露をかけ歌
讀かけなとするはつきなきことにては無れとも心
つきなきことなり時節をそしはかりて有へき事也
定家卿詠歌大概にも時節の景氣世間の盛衰とかゝ
れたるなりこゝもとに心をゝかさるいかなる秀逸
を讀出すとも心の下手なるへし
さならてもおのつからけにのちにおもへは　○歌を
よみかけなとするは尤後のあはれにもなるへきを
つきなきときよみかくる當座は心おくれに見へ侍
り歌讀ん人の敎可然と云々

よろつの事になとかは　○なとかはと云にて句を切
へし
さてもとおほゆるおりからは　○後に思へはの句に
かゝるなり時節の機嫌を分別すへきことゝなりこ
ゝに心をゝかはめやすかるへきなり花鳥には分別
なき人の心にては斟酌したらんはめやすかるへき
となりされとも只用捨有へきことゝ見るへき歟
すへて心にしられん　○殊勝の詞なり心を付へし
君は人ひとり　○君は源氏なり人ひとりとは藤つほ
の御事なりさま〳〵のことを聞にもたくひなく思
出らるとなり
いつかたにより はつともなく　○此品々いつかたに
一定するともなくて明はつるなり
からふしてけふは　○長雨晴間なきと前にありしに
かゝれり長雨の晴るゝ氣色からうしてといへる誠
にさることなり
日のけしきも　○此もの字にて御物忌もはて雨も晴
たるを見せたり
おほとのゝ御心　○おほい殿と云本もあり葵上の父
おとゞなり同事なり大殿の御心には源氏をいかに

してかな里住をせさせ奉らんとおほす故なり
たほかたのけしき ○葵上のありさまなり是より上
品の人ともいふへきかたちなり
御ありさまのとけかたく ○あまり實目なるを源氏
の若き心には難こ思給ふなり
さう〳〵しくて ○ざひしくてなり
中納言の中務の ○兩人葵上の御かたに侍ふなり源
の思人なり花鳥にくはしく註せり
あつさにみたれ給へる ○源の御さまなり雨の晴間
一入のあつさ成へし
おとゝもわたり給 ○源の御出ある故にわたり玉へ
り
うちとけ給へれは ○あつさにみたれ給う御さまな
れは木丁を隔てましますも禮をいたさるゝ義なり
あつさにと ○源のくるしく思給なり
人〳〵わらふ ○あなかまはあなかしかましなりこ
このやう儀几帳を隔ての對面と見へたり
なが神 ○中央の義にて中神とも云又長神とも云な
り両義なり天一神の事なり内裏より天一神の方に
當ることなり

さかし ○げにさそとなり
れいはいみ給方 いつもいみ給ふ方なり
二條院 ○河海花鳥を種々色々沙汰せられ侍り何れ
にても無佃禪卷に至て用處あり花鳥の義可然
いとなやましきに ○蒙氣したるにとなり
いとあしき事なり ○此方遣に御出なくてはあしき
事なり
中川 ○花鳥紫花物語を引尤叶へり中川といふは賀
茂川は東桂川は西京極川は中央にて中川なり
なやましきに ○源氏の詞なり門外より下車する所
はわつらはしきとなり
しのひ〳〵の御かたゝかへ ○源氏の思人のある所
々は自然いつくにもあるへきなりされともさやう
の所へは只今はえ出給はざる也久しく内裏にのみ
侍ひたま〳〵御いてありて又さやうのかたへは憚
り有と也源氏の心つかひ可然
きのかみにおほせ事給へは ○今夜御出有へきと仰
らるゝなり
伊與のかみの朝臣の ○きのかみか父なり
なめけ ○無禮なり

その人ちかゝらん ○源氏の詞女ちかくあらん所こそ好ましけれなり
けによろしき ○侍ふ人たちの中なり
人はしらせやる ○紀守か先さき一人をつかはすなり
おとゝにも ○あるじのおとゞにもなり儀事なる故になり
かみにはかに ○紀守なり
風凉しくて ○夏の末つかたの體面白し花鳥此節をなか雨より恐昔六月とあり此虫の聲などゝあるを以て六月とある歟なり只月もあり明にてとあるほとに五月の末なるべきなり
人々 ⊙御ともの人々なり
あるしもさかなもとむ ○風俗歌にあるしもさかなもとめにこゆるきのいそにわかめかりあけになととありこゝのあるじは紀伊守なるに此詞妙なり
かの中のしなにとり出て ○前の品定めに中の品にそをくへきすりやうといひて人の國にかゝつらひてなどゝいひしことを此家の有さまを源の御らんしておほしめし合するなり

おもひあかれる ○空蟬をは父の內へ參らせんなと思ひし人なり
きぬのおとなひ ○夏は皆すゞしをきるへき程に音はあるましきと云說あり頗いりほがなり夏もひねりかさねてしたのかさねはいたびきなり音有へし又はりはかまもいたひきなれは音なくては叶へからす
かうしをあけたり ○女のある方のかうしなり夏なれは如此紀伊守聊爾(レウジ)也とてたゝさするなり
むつかりて ○日本紀發憤とかけり
さうしのかみより ○障子の紙よりなりひまの心なるへし
このちかきもやに ○女こもなり
よすかさたまり ○葵上のさたまり給ふを云なり
されとさるへき ○さはあれとも御しのひありきは常にあるとなり
たほす事のみ ○藤つほ密通のことなり
式部卿の宮のひめ君 ○桃園式部卿宮の御女槿(アサガホ)の齋院也是よりさきに此事なし初て書出し侍り前に有つる事と心得へし此類此物語の格なり

ほうゆかめて　○圓は方に初まる物なり歌を正躰に
も語らさるなり
くつろきかましく　○源氏のたちきく(聞)をも不知して
ひまありてくつろきたる樣なり是も女の要心ある
へき事の教なり
とはり帳　○源氏の詞なり催馬樂我家の歌にわか家
は戸ばり帳をもかけたるを大君きませむこにせん
みさかなはなによけんあはひさたをかせよけんな
とゝ云詞也今源氏の給ふ心は今夜然へき御そひふ
しをまいらせよとなり
なによけんとも　○此下の詞を以て何よけんと云な
り可然女も有かたきと云なり
はしつかたのたましに　○源氏も假に寢給ふなり
あるしの子とも　○紀伊守の子なり
いよのすけの子　○是は紀伊守か弟なり
十二三はかり　○是空蟬の弟小君なり
故衛門のかみ　○空蟬の父なり
あはれの事や　○源氏の詞也
まうとの　○眞人なりかばねをよひ給ふなり朝臣や
なといへるに同し朝臣より次なり眞人を改て朝臣
とす
のちのおや　○繼母也さ(然音)あらは空蟬は紀守のまゝ(繼)母
かと御尋(給)有也
あてはる　○姫妍　日本紀
さなん　○紀守申也
にけなきたや　○源氏詞
宮つかへに出し　○父は空蟬を宮つかへに出さんと
申せしと内に其仰有りし也何とて受領の妻になし
たるそ哀の事やとなり
ふいにかくて　○紀守申なり
女のすくせ　○世間の不定なき中にも女は一段はか
なきとなり
いよのすけは　○源氏の詞なり
君とこそ　○しうとこそ思らめなり
いかゝはわたくしの　○をし出してしうといはんは
源の御前にては憚有故に私のといふ會釋面白しい
かゝはと句を切てよむへし
すき／＼しきことゝなにかし　○我等を初て無益な
る事と申と申なり
さりともまうとたち　○源氏の詞也

つき〳〵しく　○紀守よりは伊與の守はさやふの處はよしはむへきとなり
おろしたてんやは　○紀守もすき物なれは伊與介も心をはゆるさしとなり
いつかたにそ　源の尋給ふなり
みなしもやに　○紀守詞なりしもやは雜舍なとなり
ゐいすゝみて　○源の御ともの人々なり
ありつる子の　○小君なり
ものけ給はる　○物うけ給はる也
かれたる聲の　○此子のかれたる聲にてうつせみに云なり
こゝにぞふしたる　○空蟬の詞なり
いかにちかゝらん　○源氏の御寢所へいかにちかゝらんと思しにさもなくてうれしきとなり
いとよくにかよひたれ　○小君と空蟬と聲能似たるとなり
いもうとゝ　○姊をも妹と云なり系圖なとにも姊なれとも女子をは必末につる類なり花鳥に見へたり
ひさしにそ　○小君か詞なり花鳥に女房達の詞と云々如何

おとにきゝつる　○源氏の御事を小君のかたるなりひるならましかは　○空蟬の詞なり
ねたう心とゝめても　○源の御心なりちと我うへを心とゝめてもとひきけかしとなり
まろはしに　○小君か詞
女君はたゝこの　○源氏の空蟬の聲を聞て推し給ふなり障子は寢殿の母屋の南面と北面との中を隔てたる障子也すちかひたるとは今夜源氏の寢所は東の方なり空蟬のかたは北面なり今源氏の方よりは空蟬の臥所は北西にすちかひなるへし
中將の君はいつくにそ　○空蟬の君のめしつかふ女房の名なり空蟬の尋ていふ也
うへなるきぬをしやるまて　○源氏なりもとめつる　○中將の君と思ふとなり
中將のめしつれば　○源氏當官中將なり中將の君はいつこにそと尋しをきゝ給ひし程にかくのたまふ也　とりあへすよき詞なり
うちつけにふかゝらぬ　○源の詞なり打つけなるやうにこそ思ふらめ我は年月の思ひあるによりてこそ今夜の方たかへもありつれと取あへすの給ふ也

あさましく　〇空蟬の云也
たかふへくもあらぬ　〇源の詞なり
もとめつる　〇中將はいつくにそといひし人なり
やゝとの給ふに　〇此中將を源氏のめしよするさまなり
あやしくて　〇此中將なり
おもひよらぬ　〇源氏にてましますと思ふなり
ごうもなく　〇うごきもし給はぬなり
とうで給へる　〇とりいで給へるなり
猶いとあさましきに　〇空蟬の心なり
かずならぬ身なからも　〇空蟬の詞なり
いとかやうなるきはゝ　〇花鳥上臈下臈のきはを云也と云々不然歟女のよすか定たる身はみたりかはしきことはなきと云義也
そのきは〱を　〇そのきは〱のある事もいまたいときなき程の身には分別もなきと源氏のゝ給ふなり
あなかちなるすき心　〇源の詞也さやうのかたのすき心は更に習はぬとなり
あはめられ　〇あは〱しくいひおとさるゝなり

いとたくひなき　〇空蟬の心なりつれなくてやむへきなり
人からのたをやきたる　〇したはつよきなり
心くるしきは　〇ほいをもとけぬを云なり
なとかくうとましき　〇源の詞なりかやうに取あへぬこそ契なれとなり
いとかくうき身の　〇空蟬の心中なり伊與守のつまになりてあるくちをしさとなり
ありしなからの身にて　〇取かへす物にもかなや世中をありしなからの我身と思はん空蟬の一生かい此歌の心なりありしなからの身にてあらは待事も有へき物をとなり
のちせもや　〇河わかせなる後せの山の後に又あはんかならすけふならすとも
いとかうかりなる　〇よすか定りてかやうなるこそ口惜けれなりうきねはうきたる心なり
みきとなかけそ　〇それをたに思ふ事とて我宿を見きとないひそ人のきかくにと古今にはみきとないひそ人のきかくにと有をかけそと引かへて用る面白也總して詞をかへて引事史記漢書其類多也短才

の筆は必ず本を引て見るによりてかへりて誤なき
なり廣才の人は只覺へたるまゝにて物を引よりて（ウチマカセ二誤アル事アリ）
ちかふ事多也こゝの心は中々源になひくましきと
なり　やごとも見きとなれはしめしそとなり
いきたなき　○能ねたる物かな也
かみもいてきて　○紀守なり今ちとしつかにと云な
り
君はまたかやうのつゐて　○源氏の君なり
世にしらぬ　○かやうにつれなきことは又たくひも
あるましきなり此中將にわさと云きかせ給ふなり
とりもしは〳〵なくに　○前に鳥もなきぬと書てこ
こに鳥もしは〳〵とかける面白し河數鳴しはなく
とも云あまたゝひなり
つれなきを　○實儀なき由なりとりあへぬの詞面白
し此時實儀の有無品々ありたとひ此時實儀あり
とても此以後源氏にあひ奉ぬにて貞節無此類物な
り（鳥チソヘテイヘリ中將ニ今夜實ナキ由ナキカセンノ心ナリ）
身のありさま　○空蝉の心なり
つねはいとすく〳〵しく　○平生は我身に似合ぬと
思ひし伊與の守を思出す也

夢にやみゆらん　○伊與守か夢にやなり
身のうさを
ことゝあくる　○こと〳〵くあかくなるなり玉云あ
やにくに明行けしきなり河云事となりわさとかま
しくなり
へたつる關　○あふさかの名をはたのみつゝこしか
とも中へたつる關のつらくも有哉此歌の心は實な
きかこつけによくかなへり爰へ引付てあり又產星
に戀はまさりぬ天川へたつる關をいまは止てよ此
歌は障子を隔てゝの歌なれはこゝには能合（カナエ）たり兩
首ともに用（河之）へきと也
にしれもて　○女のかたなり
そゝき　○そゝめきなり
こさうしのかみより　○かみは上なり前のは紙より
火の影のすくなり
月はあり明にて　○有明の躰なりやう〳〵明方ちか
くなれは月の光ほのかに成行に猶影さやかに見へ
たる折節なるへし夜中の光よりは中々をかしく曉
月の面白きとなり花鳥朝日の出て月の光さゆるを
云なりとありいかゝと覺へ侍り源の別給ふ程なり

下の詞へつゝけ能見へし
なに心なき ○此時の源氏心になりかへりて此段は見るへきなり餘情かきりなきものなり
殿にかへり ○此殿かやうのしのひありきのかへさは二條院也と云説あり誤なり是は葵上の御所なり末の詞にも見へたり
すくれたる事は ○源空蟬こそ中の品なるへき人なれとなり
この程は大殿にのみおはします ○此詞にて前の殿にかへり給ふとあるは二條院にあらさること見へたり
猶いとかきたえて ○空蟬のかたへの事なり
中納言の子 ○私加 花鳥云上には故右衛門と云こゝには權中納言といへり權中納言兼右衛門督たりし故也
うへにもわれたてまつらん ○源のしたてゝ内へも參すへきと也
あねなる人に ○空蟬なり
そのあね君はあそんのをとうとや ○源の詞なりあそんとは前にもうとゝありし類也賞翫しての詞也

紀守をさしての給也空蟬の腹に子のありなしを尋給なり空蟬の子あらは紀守の別腹の弟なるへし
さも侍らす ○紀守詞なり
おやのをきて ○空蟬の父は宮仕人にとこそ思ひしにさもなくて受領の妻になること心ゆかぬとなり
あはれのことや ○源の詞なり
けしうは侍らす ○紀守詞なり
あて人 ○妙人 商買人
世のたとひ ○繼母はちかつかぬと云たとへあればなり
めしいれて ○小君を源のめしまつはし給ふなり
いもうとの ○空蟬の事なりあねなれともいもうとと云ことさきに見へたり
されといとよくかく ○もといひかはし給ひしやうに仰あるなり
おもひのほかなれと ○小君の心にたゝ不審には思へとなり花鳥云小君にもと見し人と云ひしらせ給ふをさてはさせることにてありけると思の外に思へるなり
いとおほくて ○ことは多也

みし夢を
ぬるよ ○戀しさを何につけてか慰まん夢にも見へ
すぬる夜なけれは
心えぬすくせ ○受領の品に定れること又源氏のか
やうにし給ふ事なとを思ふなり
かゝる御ふみ ○空蟬の詞なり
うちゑみて ○小君なり
心やましく ○空蟬の心なり小君に殘なくいひ聞せ
給よと思なり
いてをよすけ ○空蟬の詞なり
めすには ○小君か詞なり
あこはしらしな ○源氏の詞也あことは小君をさし
ての給ふなり
河云 吾子 日本紀 我子五音横通
そのいよのすけよりは ○源氏のくりことをの給ふ
なり
くひほそし ○かひなきと云心なり兩小君にかなし
く思はせんとての給ふなり 玉云 かひなきと云心な
り兩云ひはつなることなりひはつに物けなしとて
ふとりて給すして伊與に心をうつすとの給なり

かのたのもし人は ○伊與守なり
さもやありけん ○小君か心の中なり
わか御くしけ殿 ○裝束調する所なり
されとこの子もいとをさなし ○空蟬の貞節なるを
云なり
ほのかなりし御けはひ ○其御けしきはわすれかた
けれとも有ましきことなれは也空蟬の心也
さるへきかたのいみまちいて給て ○御かたたかへ
なり
女もさる御せうそこ ○女も更に御僞とは思はねと
もなり
小君かいてゝいぬる ○小君にかくれてなり
とてもかくても ○女の思とりたる心殊勝なり能も
惡くも一度伊與介の妻になりては如何なることに
も心をは移すましき心つきなりとあるへしとなり
ふようなる ○不用なり小君かことをは不用となり
哢云 違例氣なる由なり不豫の由なり
とはかりものも ○河云 汰沙のかきりとなり
はゝきゝの心をしらて ○箒木事說々あり只よそよ
りと見れはありと見へて立よれはなきとありこゝ

へきても無曲なり
數ならぬ　○伏屋は卑しき心なり卑下の心なり下心はゝやよすか定りたるにはあるにもあらすと云なり花鳥云近くよりて見れはうするをきゆるとは云也此兩首花鳥には各獨ことゝ云々ひとことならは同やうに帚木をは云ましきなり贈答にて有へきなり小君ねぶたくもあらてなと云も此御使をする成へし
人にゝぬ心さま　○貞節なる人のかゝるはなきとおほすなり
さはれとおほすと　○さらはさてあれと思へともさてもはてぬなり
つれなき人は　○うつせみよりはなり
おほさるゝとそ　○とそとは紫式部か我書たることを知せじの爲なり此物語好色を以て云やうなれとも人の心をもちひおしへ何の書にもかやうなるは有ましき事なり心をつけて見るへきことゝ云々

空蟬　一卷各以歌名之並の横竪の事河海花鳥に見へたり此卷は帚木卷のつゝきなり竪の並なるへし惣して並の事史紀の本紀の外に列傳を立たるに同しかるへき歟
ねられ給はぬ　○中川のやとりにとまり給ての事也
我はかく人に　○源氏の好色を自稱し給ふなり
淚をさへこほして　○小君なり
にかよひたるも　○小君か有さま空蟬の手さくりのけはひに能似かよひたるとなり
れいのやうにもの給まとはさす　○前のやうにもなきとなりまとはすは纒なり
女もなみ／＼ならす　○空蟬もおほしめしこりて御音信もなきよとさすかに思也
やかてつれなくて　○空蟬の心なりさま／＼と思ふ心なり
しいていとをしき御ふるまひ　○わさと御出あるは空蟬の爲には面目なりと思ふなり又御せうそこの絶なんも子細なき也とにかくに我身はつれなくてはてんと思程にとなり
よきほとにかくてとぢめてん　○かくて絶はてなん

と思へは又さても思はなたれさるとなり
こきみにいとつらうも　○小君をたのみ給ふなり
かゝるかたにてもの給ひまつはす　○小君わつらはしながらめしまつはさるゝをうれしと思て小君かたはかるへき由を領状申也
きのかみ國にくたりて　○家あるしも留守なり可然たりと思なり
この子もおさなきを　○源氏の用心なり
こたちあらはなりと　○小君かいりたるあとをこゝはあらは也人もこそ見とをすへき物をと女房達の云也
なそかうあつきに　○小君か云なり
にしの御かたの　○伊與介の女(ムスメ)は軒はの荻なり空蟬繼子也此家の西の方に當りてすゝめるにや
このいりつるかうし　○小君か入つる妻戸なり
にしざまに　○只今源氏は辰巳の方よりすちかひて西のかたへ見給也
もやの中はしら　○是空蟬也
こきあやの　○花鳥説可然紫なるなり
なにゝかあらん　○ひとへかさねのうへにうはきを着と云説あれとも只ほかけにきはかに見へわかぬなり
かほなとはさしむかひ　○空蟬の用意ふかき體なり
手つきやせ〳〵として　○碁をうつには手あらは成へきをも能程にひきかくす也用意あさからぬさまなり
いまひとりは　○軒葉の荻也辰巳の方より見給ふに東むきなるにより殘りなく見とをされぬへし
ふたあひのこうちき　○二藍なりふたあいとも讀也同事なりあかき花あを花二色にそまる色なり
はうそくなる　○河海は傍側云々花鳥には飽足なりにきはゝしくほこりかなる心と云云然れとも傍側猶宜き(ヨキ)歟傍若無人の心なるへき歟憚處なき心なるへし
そゝろなる　○すこしたかきやうにや
さがりば　○さがりたるさまなり
ねぢけたる所　○あしき所なきなり
むへこそおやの世になくは　○おやなとは一段可然むすめとこそ思らめとなり
心ちそ猶しつかなるけを　○人は見さまよりは用意

ことから本なり此人はほこりかなるかた過たる也しつ〳〵としたる氣をそへたきと也人の性の教也

かとなきにはあるまし　○一かとなきやうにはなきなり是も捨かたきとなり

けちさすわたり　○けち清てよむなり

おくの人　○空蟬なり座敷の奥成へし花鳥の義有不審

ちにこそあらめ　○地と持との二なり持とは持合なと云事なるへし

いてこのたひは　○軒葉の荻の詞也

すみの所々　○源氏の見給へる所のさまなり

いよのゆけた　○數おほき事に云ふなり今父の伊與へ下りたる留守なり似合たる詞なり雜藝の歌なり雨抄に見へたり

すくしなをくれたり　○かやうのかたのはやりかなる樣を改めたきと也

たとしへなく　○空蟬のありさまなり

目すこしはれたる　○はれたるとは晴也ひたいたかなるなり又は目のうへのあつきを云なり云々此義可然歟

はなゝともあさやかならぬ　○あさやかならぬとは鼻の高からぬ由歟

このまされる人　○軒端の荻なり　かたちは空蟬よりはまさりたるなり

いひたつれは　○空蟬はかたちはよからぬ方なれとも進退ことから可然に依て能見ゆるなり是人の教也

にきはゝしき　○是より軒はの荻を云なり

みたまふかきりの人は　○源氏に見へしたかふ人は大略引つくろひたるをのみ見給へりかやうに打とけて居たる人をかひまみし給ふ事はなき程に今此ありさまをめつらしく見給ふなり

小君いてくる　○小君か出來るけしきのすれは立の・き給ふなり

わた殿の戸くち　○前より此戸口に居給しやうにして小君に見へ給なり

いとかたしけなしと　○小君か思なり

れいならぬ人持て　○小君か詞なり軒端の荻のあるを云なり

さてこよひもや　○源氏の詞なり

なとてかあなたに　○小君詞なり此人の定めて歸る
へきと云なり
さもなひかしつへき　○源氏の心なりおさなけれと
もたのもしきとなり
わか君はいつくに　○小君を女房達の云なり
しつまりぬなり　○源の詞なり
この子も　○小君も今をよき折ふし也と思なり
きのかみのいもうと　○源の小君に軒はの事を問給
なり
いかてかさは侍らん　○小君か云なり
さかし　○源の詞なり
されとも　○されとも能見給物をと思となり
このたひはつまこを　○小君か入なり
風吹とをせ　○引歌
たゝみひろけて　○屏風なるへし次の詞に見へたり
とはなちつるわらは　○小君をあけていれつる女房
達なり
いかにそをこかましき　○いかにとおほつかなく思
給源氏の心もちひ思ひやり深きなり
やはらかなるしも　源の優になまめかしく閑かに人
にことなるさまのいちしるきとなり
女はさこそ　○空蟬の心なり此程の源のかきたへ給
ふをはよきとに思へとも又さすかにわすれかたき
由なり
春ならぬこのめも　○よるはさめひるはなかめにく
らされて春はこのめもいとなかりけり此歌能叶へ
り河海に見へたりいとなくはいとまなきなり
わかき人はなに心なく　○軒端の荻なり
かゝるけはひの　○源の御けはひなり
かほをもたけたるに　○空蟬なり
君はいり給てたゝひとり　○空蟬一人と源の思給ふ
なり
ありしけはひよりは　○空蟬よりは物〳〵しきなり
されとも別の人とはおほしもよらさるなり
おほしもよらす　○空蟬のもぬけたるをは知給はぬ
なり
いきたなきさま　○空蟬にかはりたるなり
やう〳〵みあらはし給て　○空蟬に非る由を見定給
ふなり
人たかへと　○人たかへのやうにはしらせ給はぬな

り
ほいの人を　○是ほと我身をうとみはてぬる心ならは今人達の樣にして空蟬を尋ても又尋合すはかへりておこかましかるへきとなり
かのおかしかりつる　○碁をうちし時見給ひしさまならはにくからすおほすなり
わろき御心　○草子地なり
やう〳〵めさめて　○軒はの荻のさまなり
あえかにもおもひまとはす　○また世をしらぬ人のさまにあへかにもあらす見へたるなり
我ともしらせしと　○源の御爲には我と知せすして能かるへきを軒端の荻に空蟬に心さしのあるにてはなき由を知せん爲に顯し給ふ也空蟬の事外につゝましき所をおほしめす故なり
あのつらき人　○空蟬也
たひ〳〵の御かたゝがへ　○度々の御方違も軒端の荻への御心さしといひなし給ふなり
たとらん人は　○世になれたる人は源のかくの給ふをもさは有ましとたとり知へきものをとなり
にくしとはなけれと　○軒はの荻を源の思給由也

猶かのうれたき人　○空蟬なり
あやにくに　○とにもかくにもわすれ給はぬなり
この人のなに心なく　○軒端荻也
人しりたることよりも　○源の軒端荻にの給ふ詞なり
身なから心にも　○源の我身を我身ともせぬとなり
またさるへき人〳〵も　○おやなとも我には許されし物をとなり
わすれてまち給へ
人のおもひ侍らん　○軒端荻の詞なり
なべて人にしらせは　○源の詞なり
このちいさきうへ人　○小君か事なり
かのぬきすへし　○空蟬のきぬなりすへしはすへらかしたるなり
うしろめたうおもひつゝ　○心にかけていねたるさまなり
わつらはしくて　○小君か思なり源をぐし奉りて出る故なり
さかしかりて　○さかしらかりてなり
いとにくゝて　○小君か心なり

あらすと　○くるしくもあらすと答るなり
又おはするは　○此女の云なりたそと問て又民部の御もとなりと自問自答するなり花鳥には少輔のたもとゝあり本のかはりなり
たけたかき人の　○たけ高しとて人に常にわらはるる人なり
これをつらねて　○小君か民部のたもとをつれてありくと思也
いまたゝいまたちならひ　○此民部のたもとのせいほとに小君のなるへきとなり常に老人なとの云物なり
わたとのゝくちに　○源の立かくれ給ふなり
このをもとさしよりて　○源を民部のたもとゝ思てかやうに云なり
いらへもきかて　○此女いらへもきかてあなはらはらはらいた〳〵といふ〳〵いそきいぬるなり
からうして　○源のこのすきに出給ふなり
猶かゝるありき　○草子地なり
いとをしうて　○小君か思なり
いとふかうにくみ　○源の詞なり

いよのすけにおとりける　○源の我身は伊與介にはたとりけるよとなり
ありつるこうちきをさすかに　○さすかの字尤面白し
あてはらうたけれと　○空蟬のつらきふし故小君をも今は哀と思はつましきとなり
うつせみの身をかへてける　○空蟬は蟬のもぬけを云なり又萬葉第一中大兄三山歌に虚蟬毛嬬乎相格良思吉とあるはもぬけにあらすうつくしき心なり其時はせもしはそへ字なりうつくしむ義也
ふところにひきいれて　○小君かとりたるなり
かの人もいかにたもはんと　○軒端の荻なり
人かにしめる　○人香なり
とかくまきらはしても　○かやうの事はするものかまきらはすへき方もなし源もかへりて小君を心たさなしとたほしめしたとすへきと空蟬のいさめはつかしむるなり
ひたりみきに　○小君か心なり源と空蟬とを左右と云なり
いせをのあま　○はつかしやいせたの海士のぬれか

衣相叶へり
この君のわたりありくにつけても　○軒端の荻の心なり此小君して源の音信給ふへき由契をかせ給しにさもなきを思ふなり
あさましと　○草子地なり
つれなき人も　○空蟬なり
ありしながらの　○取かへすものにもかなや
空蟬の心の中始終此歌の心ありされは所々に多く此心見へたり我身よすか定らぬ身にて有へくはと思なり貞節の心深して取かへされぬ身の悲しきとなり
空蟬のはにをく露　○義なし此歌伊勢集の歌なり河海にしるされ侍り



細流巻二　夕顔

夕顔　巻名歌并詞をもちて名付たり源氏十六歳の夏より十月迄のこと見へたり竪のならひ也
六條わたりの　○六條御息所の事はしめて書出せり帚木巻忍ひ〳〵の御方たかへ所はあまたありぬへけれと此語より出たり
文彥太子重明親王の事を前證にひきてかけり中將御息所とて貞信公女前坊御息所也
大貳のめのと　○源氏のめのと惟光か母也めのとの數のこと花鳥に見たり乳母の事親王は二三人只の皇子は二人あるへき歟
御車いるへき門は　○大門をはさみたる也
はしとみ　○下ははた板にて上はしとみの如にしたる也　花鳥に委く見へたり車にも大臣なとの車には半蔀とてありこゝの體は二かひ作の樣にちとたかき所と見へたり　後拾遺雜一につきあかく侍ける夜はじとみに女ともの立て侍けるを男まいらせんなと云入させけれは讀人不知　「たれとてかあれたる宿と云ひなから月より外の人をいるへき

あながちにたけたかき　○半蔀の上よりみゆる程にたけ高き人と見へたり二階作の上なるへし
さきもをはせ給はす　○しのひ給たるさま也
門はしとみのやうなり　○おりとなるへし
いつこかさして　○世中はいつこかさして我ならんゆきとまるをそ宿と定むる
玉のうてなも　○何せんに玉のうてなに八重葎はへらん宿にふたりこそねめ源氏はいつも玉の臺に住給方にてこのはかなきすまゐを見て觀し給尤殊勝也
きりかけたつ物　○源氏一ケの秘事と云云さもなきこと也しとみやと云物也たてしとみとて今も内裏の床子座の前なとにありかりそめにしたるしとみなとのやうなる物也
をのれひとりゑみのまゆひらけたる　○をのれひとりゑは此小家のあはれけなるに此花のみ獨心ちよけなると也ゑみのまゆとは夕顔のつほみの蕾の眉に似たるを云也
をちかた人に　○白くさけるにつきて梅花を用かへて云り續古今小侍從か歌にさきにけりをち方人にことゝひて名を知りそめし夕顔の花こゝの心を取用たる也
ゆふかほと申侍　○夕顔をはさふらひ以上の家にはうへさる物也
花の名は人めきて　○名はかりは人ゝしきと也かほと云につきて云るにや
このもかのも　○つくはねに限るへからす
むね／＼しからぬ　○花鳥は棟々河海は宗々と云々心は同しかるへし
このをしあけたる門に　○前云つる門はしとみのやうなるをしあけたると云し事也
されたるやり戸くち　○左禮也正體ならすゆかみなとしたるさま也
いたうこかしたる　○説々あれとも只焼物の匂にこかしたるなるへし
門あけて惟光の朝臣の　○此隨身花を直にまいらすへきを如何と思所へ惟光門をあけて參りたるして奉る也かやうの書さまえもいはぬ所有にや
かきをゝきまとはし侍て　○惟光か詞也
ひきいれて　○源氏の車引入りており給也

これみつのあにのあさり ○此四人大貳の子也皆つ
とひゐたる折しも源氏の御いてをよろこふ也
をしけなき ○めのとの詞也
たゝかく御まへにさふらひ ○さまをかへたる身に
ては源氏の御あたりなとにひたひたと參りさふら
ふへきこと憚有へきと思たゆたひしと也
いむことのしるしに ○尼になりては齋戒をたもつ
也
日ころをこたりかたく ○源の詞也
かく世をはなるゝ ○さまをかへたる事也
命なかくて猶くらゐたかく ○我昇進なとをきはめ
給へき行末をも見給へと也
さてこそこゝのしなのかみにも ○九品上品上生也
今こそ阿彌陀佛の御光も心清くと云し返答に奇特
の詞也
かたほなるをたに ○かたほは頑也頑愚の心をろか
なる心也ほの字清てよむへし河海おさなくかたく
なる心と云云如何かたはと云詞也かたくなるをた
にもあるを源はいかはかりと也
あさましくまほに ○まほは正體に也かたくなしき

物をたにも乳母なとは大切に思てまほに見なす物
をと也
子ともはいとみくるしと ○尼になりたるを後悔す
るに似たりとて子ともはとかゝと思也
みつからひそみ ○ひそむは顰字也顰は眉蹙也ひそ
みは具をつくりたるを云也
いはけなかりけるほとに ○源の詞也三才にして更衣
にはなれ六才にて祖母にはなれ給へる也
はくゝむ人あまた ○左衞門のめのとにをくるゝ事
末摘巻に見たり乳母の員數の事前に花鳥に見たり
したしく ○大貳の乳母をはなかに又なく思給也
あま君をもとかしと ○前にいとみくるしと思てつ
きしろひつる子ともも又けにもと思也
修法なと ○いのりをはしめらるゝ也
此所ナシ 物語なとし給うちに ○日も暮にけれは也
しそくめして ○先に此扇はやかて御らんすへきを
さあれは（サヤウナ）此めのとを問給事のわさとならぬやうな
れは先さし置て此とふらひよくし給て歸給とて見
給心つかひ殊勝也
心あてに ○心あてにとはをしあてにと也源氏に

ておはしますと推したるによりて花の光もそひたると也さし過たるやうなれと折節の過し難くて出したる扇なるへし花鳥夕顔は女の我身にたとへてよめりと云云此義いかゝと覺へ侍り河海に夕顔を美人にたとふること花鳥に破之可然只顔と云に付よめる也

このにしなる家は　○源の問給也

れいのうるさき　○惟光か思也むつかしくは思へとも也

この五日六日　○惟光也にく〳〵と御返事を申也

にくしとこそ　○源の詞也

やうめいのすけなる人の　○答詞也物語中大事の一なりと云り

女なんわかく　○揚名介の妻也

宮つかへ人にて　○爰へ來通ふに宮仕する物ともある也

したりかほにて　○かやうの宮仕人なとの我はがほにてかやうの歌なとはよみ出したるならんとおほす也したりかほは隨分と思人と見へたよと也

さしてきこえかゝる心のにくからす　○かやうに歌をまいらせたるはさし過たる事なるをも源はにくからす思給也

このかたにはおもからぬ　○好色の方には聊輕々しき御心と也

御たゝうかみに　○たゝうかみに歌を書事花鳥後撰の詞書を引り後撰十九に伊勢にまかりける人とくいなんと心もとなかると聞て旅の調度なと取らする物からたゝん紙にかきてとらすると云云

あらぬさまにかきかへて　○手を書かへ給也用心深也若菜卷に柏木の文の書さましかるへからさるよし源のゝ給も此心也

よりてこそ　○此五文字をりてこそとある本ありと云云不用之よりてこそはなれちかつきてこそと也なれたきと云ふ心也夕顔を女によそへよめり女の心あてにそれかとそ見ると云るに答てなれてこそとよめる也

それかとそみめ　○たしかに見定て云へるをよりてこそとはなれてこそはそれとも知へるへしと也

またみぬ　○やかて源氏とはしるかりければ見すくさしとてちとさし過たるやうにはありしかとも折

ふしのなさけはかりを見すくさしとしつる也
いらへ給はて　○やかて御返事もなきを無風流に思しに又かやうにわさとかましき御返によりて又いかになと皆思也
わさとめかしつれは　○きとわさとのやうに御返事ある也
めさましと　○又御返事を申へき事なとゝ人々の思躰を此隨身こと過うるさく思て歸り參ぬる也
御心さしの所には　○六條御息所の御所也引かへけたかき躰也此御所後に修理して六條院と號して源の御前となれり今これを云ばゝ曼殊寺なとにあたるへし事跡を見給てより心かけそめ給へり
うちとけぬ　○用意源たけたかき人也大臣女にて先坊の宮す所にて桐壺の兄宮をまうけ給へしとかくれ給けれは此ふる宮にをはします
けふもこの蔀の　○此半蔀の邊なにとなく過給しに此歌をよみかはし給し後は心をとめて過給ふ也
日ころありて　○惟光は毎日さふらふへきを病者故の懈怠也
わつらひ侍人　○大貳のめのと也

おほせられし後　○惟光か詞也
さ月のころをひより　○五月の頃より爰へ來れる人ありされと事の外に人にかくるゝさまあれはたしかにもしり難しと也
その人とはさらに　○夕かほの君の事也夕顔の君のめのとは揚名介の妻のむすめ也
しひらたつ物　○褶字也裳なとひきかけたるは人をうやまふさまにて同僚計あるとは見へぬさま也同類ならはさもあるましきをかしつく上つかたの人あるなるへししうとおほしき也
昨日夕日ののこりなく　○西むきなる所と見たり南向の西かけたるへし
をほゝこそ　○惟光か心の中に思也無心事御身なれはこそ輕々しきともし給はめ御かたちのたくひなく人もなひきやすなるへきを聊はかやうなる御忍事をもし給はてはと思也
もし見給へらる事もや侍と　○惟光か詞也
せうそこなと　○惟光か文をつかはしたると也（文ヲツカハシタルトナリ）
猶いひよれ　○源の詞也
しもかしのもと　○彼家の躰也

さてかのうつせみの　○貞節をつよくたてたるを云
也
たいらかならましかは　○こゝにては大やうなる心
也猶ざりの人にてあるへきならは一夜のあやまち
にてやみぬへきをあまり貞節をたつるやうに見へ
し程にかへりてまけしの心ふかくて思ひすて給は
ぬと也
かやうのなみ〳〵までは　○下の品などにも與ある
ことのあるよし彼雨夜の物語に聞給故也大人には
細なることをきかすましきのいましめ也
うらもなくまちきこゆかほなる　○軒はの荻也
つれなくてきゝいたらん　○空蟬のきくへき所あれ
は音信給はぬ也
まつこなたの　○空蟬の心見はてとおほす也思召う
つるやうにや空蟬の思へきの理也
いよのすけ　○源の家禮也空蟬の夫也任終てのほる
なるへし
まついそきまいれり　○源氏へいそきまいる也
ゆけたは　○國の物語のついてに問たく思せとも空
蟬の碁うちし時のことを思出給に心のをにゝえとひ
給はさる也
なのめならぬ　○なへてならぬ也かやうにうつせみ
の貞節なるをしゐて思給は我心のかたはなると也
かゝる所に此物語は心をつくへき也
むきのかみ　○雨夜に女の事故名の立なとかたりし
事也
人のためは　○我につれなきは伊與の守か爲には可
然と也
むすめをは　○軒はの荻をは留置少將に合する事也
北のかたをは　○空蟬をは具めくたる也
人の心を合せたる　○うつせみのつれなきさま也
さすかにたゆて　○文なとはかりは取もかはすへき
と空蟬は思也
いま一かたは　○軒はの荻也
ぬしつよくとも　○人の姓の見へたる事を心得へし
人やりならす　○只我心から也藤壺の御事空蟬の事
かた〳〵心つくし也
大殿には　○葵上也
六條わたり　○さま〳〵心をつくされしかと藤壺を
思給程にはなき也なひき難事を色々申ふせられて

其物となりよりぬれは一段と御心にも入られへき
ことをさもなきと也
よそなりし御心まとひ　○御息所の事藤壺なとやう
にあなかちならぬを云
女はいと物を　○六條の御息所也此おほしゝめたる
心靈に出へきさま也
よはひの程も　秋好中宮も御成人にていとゝかゝる
名をとらるゝことは不可然とをさらは又一向にそ
れにかへてせ一途(本ノマヽ)あらはなるを絶々なることを恨
思す也御息所は源よりは八の兄也總巻に源廿二に
御息所は卅也然は源は今十六歳御息所は廿四歳也
ねさめ〳〵　○前坊の御息所にて秋好中宮を生奉し
後程なくうせ給し事今又源氏のかよひそめ給て又
夜かれかちなることなとたほしつゝくる也
いたくそゝのかされて　○あなかちにふかくしのひ
給事ならねともあけぬといそかしたてられてたき
出給さまなるへし
中將のたもと　○御息所の官女也
御くしもたけ　○御息所也
しれん色のをりにあひたり　○をりにあいたると旬
を切てりよむへし河海說可然表すわう裏萠木也河
云普通しをん色の裳と心得歟非也紫苑色のきぬに
薄物の裳也
みかへり給て　○源のみかへり給也はかなく心をあ
たにはうつさしとつゝめともと也私御息所を置て
又心をうつすへきことをはつゝめともと云義也
さく花に　○源の歌中將の君の朝顏を云也
あさきりの　○妙なる返歌也我身の上をはさし置て
御息所の上にとりなして今朝のふかく出給夜を云
也
さふらひわらは　○此童の事別勘の義女と云いかゝ
只男たるへき歟源氏のめしつれたる童也花鳥に女
と云非也馬にのる時は指貫を用こと有と云ふそれ
はさもこそあれてゝは男童を云也
たほかたにうみたてまつる人　○以下双子地也
あけくれうちとけて　○聊(イササカ)とたへを心もとなく皆た
ほす也
これみつかあつかり　○夕顏のやとのこと也
花鳥惟光を隣のかいまみのめしろにつけ給れはそ
れをあつかりと云也
つれ〳〵なるまゝに　○つれ〳〵の故に車のすくる

音なとすれは出てのそきなとする也此宿に二階つ
くりなとのやうにたかくつくりたるとみへたり
なかや ○中屋俗に中居と云楠の寺のなかやにわか
いねしうなひはなりはわか戀まさる
中將殿こそ ○頭中將のこと也
あなかまとてかく ○人のきくにとて手にてあはく
也
いかてさはしるそ ○何として頭中將とはしるそと
也
うちはしたたつ物 ○此なかやにかよふ道にうちは
しある也
いそきくる物は ○物に心はなき也只いそきくる也
榊巻明石巻にもあり
いてこのかつらきの神さかしう ○此さかしの字如
何是は嘲哢して云にやとおほへたり 河葛城神作橋
事役優婆塞金峯山與葛城峯爲行通於兩山召集
諸神令渡橋云々
君は御なをしすがたにて ○夕顔のやとのわらはか
車にのりたる人を申と也
頭中將の隨身 ○頭中將のともの物をみしりて心あ
てに云也花に云中將の召具するわらはを小舍童と
云也河云小舍人は童惣名也
たしかにその車を ○源の詞也それをたしかにみと
ゞくへき物をと也
もしかのあはれにわすれさり ○雨夜の物語の時頭
中將わすれかたく申されん女かと源の推しの給也
たゝ我とちに ○主人なと有とはみせぬ樣にする程
に其分にして惟光もをくと申也
いとよくかくしたり ○ことの外にしのふと也
あま君の ○源の詞也
かりにてもやとれるすまひ ○やとの樣也これこそ
はしもがしなとなんとおほす也
このほとのくたくしけれは ○双子地專くたくた
しきによりて夕顔の宿へおはしそめつることをは
いひもらすと也是又文の法也後漢書列傳第廿三蘇
竟傳又與仲況書諫之文多不載云々此筆法に類せ
り
女をさしてその人と ○たかいに名をつゝみ給ふ也
我馬をは ○惟光か馬也此程まては我かけさう人に
てありし物を也

いと物けなき ○我かくし歩く事をみせたらはと也
女もいとあやしく ○夕顔の上也
さすかにあはれに ○夕顔の上のありさま也
かゝるすちは ○源のいさゝかもみたれ給てともなきをと也
あやしきまて ○源切に思給也ことの外に思給これなかゝるましき相也
さまて心とむへき ○いつくにさして心をとゝむへきこともなきをと也
やはらかに ○只こゝに心をとめ給也
昔ありけんものゝへんげめきて也 ○三輪明神のににて本縁よくかなへり
てさくりにもしるき ○源とは手さくりにもいちしるきと也
猶此すきものゝ ○此程惟光がしいでたること此女の推する也
たいふを ○惟光也たいふは民部大輔になる故歟且太夫とよみつけたり末にてこそ昇迄はみへ侍れこゝにては只五位なる故に爵を指て太夫と云歟すまの巻に民部大輔とは見へたり爰にては只五位なる故に爵をさして太夫と云歟凡此物語に名字をさして云事は惟光良清二人也うつほ等には名をさして云人おほき也ふるき除目の申文に掲名介の申文に惟光良清あり是又此物語に叶ひて面白也
たゆます ○これみつはしらすかほにもてなす也
あされありけは ○河海ザレ同事也
君もかくうらなく ○打むかひてはさらにそむくへき様にはみへされとも自然ふといつくへも行てはと思給也
かりそめのかくれ ○此やと也こゝは暫時のやとりとみへたり定而行所あるへき也
をいまとはして ○さらに打捨ては置難きありさまなるをうちわひ給也
いさいと心やすき所 ○源の詞也
かくの給へと ○夕顔上の詞也
いつれきつねならん ○たかひにはかされたる様也
けしきはみて ○我に何ともいはてはかくるゝへき心さまは見へさると也
心なからも ○我は自然うつろふ心ありとも此女はそむくましきさまのしたる也我なからもうつろふ

方ありてはとまて思給也

八月十五夜　○陰陽交會をいむ日なりと云り

なりはひ　○毛詩生民之篇誕后稷之穡又遊仙窟云家業のなりわひ倫滑とみたれたり

えんたちけしきはみ　○夕顔上の天性たほやうなるさまを云也さかしらたちたる人ならはこのけはいを源の聞給をはかたはらいたく思てきゝも入へき物をと也

中々はちかゞやかんよりは　○中々はちぬ様のよきと也

しろたへの衣うつ　○南樓月下擣寒衣只擣衣を云までなるを白妙と云ひのべたる優にして面白し昔よりしろき衣をうつなれと聲には色のありける物をと後京極殿

されたるくれ竹　○枝のゆかみなとしてすぐならぬ竹也

かへ中のきり〳〵す　○花鳥毛詩を引て詩七月篇に十月蟋蟀入我床下とあり間違にきゝならひ給へる御耳にさしあてたるやうにとあるは我床下に入と云る心にかなへりと云々此儀さも侍らん但蟋蟀は宮殿のあたりなとにはたまさかにきこゆるを此いやしきやとにてはまちかく聞給をめつらしきことに思給心なるへし

中々さまかへてをほさるゝも　○志の切なる故也

しろきあはせた　○夕顔の上の衣裳也

うす色の　○紫のうすき色也

そことりたてゝ　○夕かほの上のさま也

心はえたるかたを　○河心あるかた也よしあるをよしはみと云か如しはみは讀つけ也今ちとふかき用意を加へたきと也源のよくほり也

いかてかにわかならんと　○何をもうちまかせたるさま也

右近をめしいてゝ　○右近は夕顔上の宮女もとのめのとの子也

かゝる御心さしの　○此御志の切なるをみるにあしきことにては有ましきと皆思也

みたけさうし　○河枕草子に哀なる物よき男のわかきみたけしやうしんしたる定たる人くしたるもあはぬよな〳〵へたつるをは苦きことにこそ思へかめるをことの外にきひしくへたてなして獨居て打

行ひたる曉のぬかのほどいみしく哀なり河御嵩は金峯山也みよし野の金のみたけ也「朝もよひきの河上を今朝みれは金の御たけに雪ふりにけり
ぬかつく　○河額突　稽首　額拜也万地祇ふして額拜
万」あひ思はぬ人を思ふは大てらのかきのしりへにぬかつくかごと
あしたの露に　○河この禮する聲にてみたけさうしんと聞給也
南無當來導師　○河金剛藏王は過去釋迦現在觀音當來彌勒也彌勒出世の時地に數へき金をまもり給神也仍御たけ精進に彌勒か禮せる歟彌勒は釋迦付囑を受て一生補處薩埵とす第一減劫の初めに生し給也成佛して三會に說法すへき故に當來導師と云也
うはそくか　○なもたうらい導師と云聲をしるへにて來生迄を契をくへきこと也
長生殿の　○玄宗の北翼の鳥連理枝と契給しはいま〳〵しきあたなる契也來生の彌勒をかけて契へき物をと也　河從釋尊入滅至慈尊出世隔五十七俱低六十百歲云々彌勒下生經には將來久遠却於此國界成佛云々

こちたし　○おほきなる心也
さきの世　○身の程のはかなさには來生までは何のたのみのあるへきぞと也
かやうのすぢなど、　○箋云非歟源の心中也此歌のさまも物はかなくうたかはしき人さま也かたかたおぼつかなく思給也
いさよふ月に　○河花くわしくしるさるゝは只十五夜の月のいりかたに山のはにしはしやすらう心也
ゆくりかに　○不意也
なにかしの院　○河海に見たり河原院也小書に延喜御記曰此日參ニ六條院一此院故左大臣源融望臣宅也大納言源朝臣奉レ進ニ故院一又號ニ六條院一後宇多院御領也
あつかり　○平生人すまぬ故に院には必あつかりあるも
霧もふかく　○車にてのさまをもしろし
またかやうなる事を　○源の心也
いにしへもかくやは　○源の歌也我身にはいまたしらさると也
山のはの　○山のはゝ月をかくすへき所とはしらて

行月の心也山のはを源の心によそへたり源の心もしらて我身はうはの空にさそはれて行よと也次の夜うせぬへき人なれは何となくあちきなき心ありしなるへし

かのさしつとひたる　○せはき所に住つきたる心ならひにと給也

あつかりいみしく　○院のあつかり也

けいめいしありく　○源の御出をおとろきありくさま也河海經營歟と云云可然歟

このありさましりはてぬ　○此院のあつかりの崇敬するにて源氏にてさてはましますよと右近の猶々思ふ也

かりそめなれと　○俄事なれともきよけによくしなす也

御ともに人もさふらはさりけり　○あつかりの申詞也

むつましき下けいし　○此預は源の被官也殿にもとは葵上の御方へもと也

ことさらに人くましき　○源の詞也

おきなか川　○引歌鳰鳥のをき中川はたへぬとも君にかたらふことつきめやは心は絞川なとはひることもあれともたき中川はたゆることなきよし也水原抄に見たり鳰鳥は息なかき物なる故に鳰鳥のたき中川とはつゝくる也翁な川の説非也

べちなうの方にそ　○別の屋也小寝殿なりと云物也雜舎也預はこの別屋に居也

かほは猶かくし　○昔はふくめんをたれて面をかくしてありくことのある也

花云かりきぬの袖なとを覆面にせるにや又扇なとさしかざして半面にかくしたる心歟おほつかなし云々

夕露にひもとく　○顔を今あらはし給を云心也あてにそれかとそみるといひしをうけてよみ給也

露の光や　○夕顔をゝりし時のことを思ての給へり心あてにそれかとそみる白露の光そへたりとありし光やいかにと也

ひかりありと　○扇を出し時はかやにうちとけてあるへきことゝは思はさりしを今此返歌はちと大事なる處也その心あてにそれかとそみるの歌よみしはたそかれ時のそらめにてありけるよと陳して讀るなるへし又義末の詞にてみれはたそかれ時に物

の數にてはなきそ今此あらはし給御すかたのたく
いなさはの心あるへし
つきせす　○ついに我はあらはるゝ也此上は名のり
し給へと也
あまの子なれは　○やごもさためすの心也
あいたれたり　○あまいたるさま也
よしこれも　○我不肖なる故と也花鳥あまの子と云
返事に我からの詞妙也
うこんがいはん事　○惟光か心也我身のうへのやう
にしなしてたはかりよりしを云也
をかしうも　○惟光か心也
たとしへなく　○なにかしの院のさまたもいやるへ
し
なこりなく成にたる　○源の我はあらはし侍を猶心
へたてありけるとうらみ給也
うちにいかにもとめさせ　○禁中に尋給へきよし也
いとをしきすちは　○六條御息所のこと也
なに心もなく　○此夕顔上のあまりにをほとけたる
と御息所の打とけさりしをゆつろへたきと源の思
へくら給也かく思給たよりを得て靈も通するにや

すこしねいり給へる　○御息所の念なるへし
ことなる事なき人を　○夕貝の上は三位のむすめ也
其本性のさしもなきをさてことなることなきとは
云へり又は御息所のあるましき契をさま〳〵云な
ひかしていくほともなくさしもなき人に思うつり
給所をねたく思給なるへし
御かたはらの人を　○夕かほの上也
わたとのなる　○源の右近にの給也
いかてまからん　○右近か詞也
この女君いみしく　○夕かほの上也
しとゝになりて　○しとゝにぬれて也
われかのけしきにて　○夢たにも何ともみへすみゆ
ろこともわれかもまとふことのしけきに
ものをちをわりなく　○平生物をぢをし給よしを右
近申也
ひるも空をのみ　○河海に病者の空をみるは死相の
一也云云いかゝ今夕顔の上病者にはあらす只愛の
心は總別の物をもひすかたなりしを源の思給也
この院のあつかり　○今夜さふらひたる物とも也此
院の預の子とは前に大井殿にもしたしくつかふま

るなと云し物也
又うへわらは　○河海說いかゝ只男わらはたるへき
歟
れいのすいしん　○夕顏の花もてまいりし隨身也
ひあやしさ　○文選五十六新漏刻銘曰衞宏載ニ傳呼
之節一注衞宏漢舊儀曰夜漏起宮中宮城門傳ニ五伯官
直符一行ニ衞士一周廬擊ニ木柝一傳呼備レ火
うちおほしやりて　○此火ともしに行たる間也此間
に禁中のことおほしやる也前にうちにいかにもと
めさせ給らんをいつくにたつぬらんとおほしやり
てとあり此心よりかやうのことにふれても思やり
給也一は忠孝の心を忘れ給はさる也
なたいめん　○是より抄なりたきくちのとのゐまう
し雨抄に見たり亥の刻にてそあるらんと思給也延
喜近衞式凡行夜者內裏官一人近衞一人起ニ亥一刻一
迄ニ子四刻一但右起ニ丑一刻一迄ニ寅四刻一
かへりいりて　○これもいまた火をともしてはまい
らさる以前也
おまへにこそ　○夕顏の上をさして右近かおまへと
云也

物にけとられぬる
猶もてまいれと　○瀧口源をおそれてきとまいらさ
る故に猶もてまいれとは仰らるゝ也
むかし物かたり　○河海
身のうへもしらす　○我身も恐怖あれとも我身の上
をもわすれはて給ひて此女君のことをいかにとお
ほす也
法師なとを　○宇多御門淨藏をめすこと河海に見た
り
あか君　○あかはわかの心也かしつく詞也
けはひ物うとく　○人に魂魄ありまつ魂さりつれは
をそろしき氣のいてくる物也
右近はたゝあなむつかし　○右近は我身のをそろし
く思心もうせはてたる也
南殿のをにの　○河海に見たり
このをこ　○瀧口也
なにかしのあさり　○惟光か兄也
かのあま君　○大貳のめのと也
物のたまふ　○かやうにあるへき樣に物の給とすれ
と心はかなしくかきみたると也

むく／＼しさ　○いふせくをそろしき也
けしきある鳥の　○河原院ありさまかやうなるへし
人めしけき所にはきゝなれぬなるへし　文集第一
凶宅詩梟鳴ニ松桂枝ニ狐藏ニ蘭菊叢ニ云々前主爲ニ將
相ニ後主爲ニ公卿ニ云々よく融公にかなへり
なとてかくはかなき　○此院にやとりしこと也
またこれも　○右近をもあやうく思給へり
こゝかしこくま／＼しく　○くまはかくれ也物のか
くれてあるやうなる心也物をそろしと思ふ心より
思なさるゝ也
これみつとくまいらなんと　○惟光を待かね給也
ありかさため　○惟光也
おほけなくあるましき　○藤壺に心かけ給事の空を
そろしきむくひにやとおほす也
内にきこしめさんを　○内にきこえんをはしめとし
て天下にかくれあるましきと也
夜中あか月　今夜しも惟光遲參するよし也
右近たゆふけはひ　○はしめは惟光か我けさう人の
分にしてありきし事を思いてたる也
この人にいきをのへて　○花鳥杜子美が詩尤有レ興

昨日山へまかり　○物ちかひのすれは毎事如此有也
世間のありさまなり
まついとめつらかなる　○惟光か詞也
れいならす　○夕顔の上は自然兼て違例なとせしと
のあるかと也
さる事もなかりつ　○源の詞也
よゝとなきぬ　○よゝはつよく鳴也
さいへと　○惟光か參て力をつけ給樣なれともこれ
も又いまた年もいかぬ物なれは也
この人ひとり　○此院のあつかり也
まつこの院　○此院もりにもかくしてまつ出給へと
申也
さてこれより　○源の詞也
けにさそ侍らん　○惟光か詞也
かのふる里　○夕顔のやと也
思まはして　○思案して也
昔み給へし　○惟光か父のめのと也
みつわくみて　○年の老たる也
かこかに　○かこ／＼としたる也
いとさゝやかに　○ちいさき也

えいたき給はす　○源はさすかえいたき給はぬ也
かみはこほれ　○うは莚につゝみたるさま也
なりはてんさま　○此車にもしたひのりて御出あり
たく思給也
君に馬は奉りて　○我馬をは源にたてまつる也
いきかへりたらん　○あはれ也
おほいとのゝ君たち　○連枝の中に頭中將はかりを
めしいれて也
めのとにて　○源の詞也
その家なりけるしも人　○此穢氣をまきらはしにか
くの給也
をちはゝかり　○此穢を遲くきゝしと也
神事なる　○八月十七日のことなれは九月は齋月な
れは一日より御神事也然るに穢もひくへき故也
このあかつきより　○そのうへ病氣し給と也
むらい　○無禮也簾をへたてゝ中無禮也と頭中將に
會釋をし給也
さらはさるよしを　○中將の詞也
たちかへり　○頭中將の立かへりてかくの給也
のへやらせ給　○陳し給也

むねつふれ給て　○頭中將のうたかはしけにの給を
心の鬼にわつらはしく思給也
かくこまかには　○かやうにこまかになくとも大方
に此よしを申されよと也
藏人の辨　○頭中將の弟也頭中將には大方の事を語
り給て辯してくはしく奏給也
大殿なとにも　○葵の上の御かた也
いまはかきりに　○惟光か申也
なか〳〵とこもり　○なか〳〵しくをきてもいかゝ
とて明日葬送すへきよしを申也
そひたりつる　○右近はいかゝと問給也
けさはたにゝも　○身をなけんとまとひしと也河海
云とりへ山のたに拾遺集歌にあり彼心歟云々こゝ
は靈山邊のとなるへけれは所も程ちかくさもあり
ぬへし又さらてもふかき谷こそあさく成なめとも
あれは谷にもとかけることもしろき也花右近悲
のあまりに谷に身をもなけんの心也云々
かのふる里の人　○右近は彼やとへも此よしを告や
らんと申也
我もいと　○源也

なにかさらに　○惟光申也
さるへきにこそ　○不慮と思ふ事も定れる事にてあるへき也となくさめ申也
さかし　○源の詞也
さみな思ひなせそ　○定れることとは思なせともと也
少將のみやうふ　○惟光かいもうと也
さらぬほうし　○さならぬ也此ことをしらせではかなはぬ僧なとにもよく申かくしたる也まして其外には誰か申へきと也
かゝり給へる　○なくさむる心也耕雲本
ほのきく女房　○二條院に伺候の女房也
さらにことなく　○ことなくは無事也難なく沙汰せよと也葬送をちとゝりつくろひてしかるへく沙汰せよと也
なにかとこ〳〵しく　○惟光か御前をまかりたつとて申詞也心こもりてをもしろし
ひんなしと思へけれと　○惟光か心をもいかゝと憚なからの給なり
いとたい〳〵しき　○惟光か心也

このころの御やつれ　○此夕顔のやとへかよひ給折のかりの御裝束也
たゝいまのからをみでは　○妙語也あはれふかき物也
とりへのゝかたなと　○鳥へのゝあたり打烟たるなと平生の心ならす物むつかしかるへきを只今の御心には何とも思給はぬと也
こゑたてぬ念佛　○河葬送以前無言念佛云々
その屋には女ひとり　○女は右近也
きよ水のかた　○十七日參詣の人のさま也
河寶龜十一年初建立延暦廿四年宮府界二四至一以田村丸私宅一寄附云々
このあま君のこ　○惟光朝臣父のめのとの子也前にむかしみたまへし女はらのあまにて侍ひんかし山の邊にと云しか子也
右近はひうふ　○此夕顔上ニ屏風へたてゝ也
おそろしきけもおほえす　○夕顔の上のさま也
大とこたちもたれとはしらぬに　○此夕顔上を誰とはしらぬにかく源氏の大切に思給はいかなる人そと思也

さなん此世中は　○源の右近をことはりてなくさめ
給也
わかれといふ物　○花鳥杜子美をひけり
かくいふわか身こそ　○かやうに右近にはわれをた
のめとの給へとも又我身もあやうくたへかたきと
也
いとふしきあさきりに　○前の霧もふかく露けきに
簾をさへあけ給へれは御袖もいたうぬれにけり古
もかくやは人の歌の時を思出給へし
ありしなから　○なきからなからありし時のまゝな
る也
我くれなゐ　○源の我御その紅なるをきせ給しかそ
のまゝある也さま〳〵思出給也
つゝみのほとにて　○賀茂川の堤也花防鴨河使の官
も鴨川の堤也
さらにえいきつゝまし　○二條院へかへりつきかた
きと也
わか身はか〳〵しき　○我身はか〳〵しくは此御出
をも諫申てとゝむへき物をと惟光か後悔也
君もしゐて　○源も佛を念し給也

夜ふかき御ありきを　○昨日まて御心ち煩しくあり
しにこの御ありきはいかなることにやと思也
世にたくひなく　○源のたくひなき人からなるによ
りて世に不相應なる故いかゝと人々の思也
これみつ心ちもさはき　○源のかく御心ちあしきに
もいかゝと思へとも右近ありつけんとする也源の
仰かたしけなき故也
めしいて　○右近を召出す也
ふくいとくろう　○服衣の色ふかき也説々あり不レ
可レ用レ之歟花説ふくりと肥て色黒き心と云々枕草
子の説に同し河海説可レ然とあり此義非也
あやしうみしかゝりける　○源の右近にの給詞也
としころのたのみ　○夕かほの上にわかるゝこと也
程もなく　○源の我もなからへかたきと也幽玄にあ
はれなる詞也
いとかたしけなくて　○内より種々御心をつくさせ
給を不孝なることと思てつよくおほしなるとは何
共と養生し給也
けいめいし給て　○こゝは警心也私に上の詞にあつ
かりいみしくけいめいして云々それは經營也

けからひ　○穢もひとつになる也
御とのゐ所　○參内ある也桐壺也
おほとの我車にて　○葵上の御かたにとゝめをきた
　てまつらるゝ也
九月廿日　○平癒ある也
右近をめし出て　○こゝよりは二條院にてのこと也
いこなんあしき　○源の詞也
まことにあまの　○前にもありし也名をかくし給を
　云へり
なとてか　○右近か詞也
はしめより　○源のかよひそめ給しこと思かけぬこ
　とに思ひ給し故也
御なかくしも　○源も名をかくさせ給しかはなをさ
　りのかりそめことにて末もとをらぬことにてある
　へきかと思給し故也
あいなかりける　○源の詞也さては心くらへなりけ
　るよと也
かやうに人にゆるされぬ　○忍ひありきのこと也
うるさき身のありきま　○我身の人もゆるさぬさま
　をは今こそ右近はみしるへけれと也

かうなかゝるましき　○一段と心にしみて思はれし
　はかくなかゝるましき故なりけると也
猶くはしくかたれ　○源の詞也
なぬか／＼の佛かゝせても　○妙なる語也
なにかはへたて　○右近か詞也あなかちかくすへき
　にてはなけれとも現在にみつからかくし給しをな
　き御かけにては何と申へきそと也
おやたちは　○こゝよりかたり出す也
三年はかり　○今年までは四ヶ年也
こその秋ころ　○嵐吹そふ秋もきにけりの歌のこと
　也
にしの京に　○揚名介か妻也
ふたかりたるかたに　○方違のために此五條なる家
　へ出給也
されはよそにほしあはせて　○頭中將のかたりし人
　と思あはせ給なり
をさなき人　○をさなき人のあるかと問給也
女にて　○玉かつら也
かの中將にも　○頭中將にも語たくは思給へともこ
　の尋よりたるさまをしらせしとて語給はさる也い

かさま源の我御子にもと覺す也
さらはいとうれしく　○右近か詞也
心より外にをかしきましらひかなと　○右近か心の中也
かの夕かほのやとりを　○彼やとりを源の尋給しも此御前のありさまをみるに猶はつかしき也
竹のなかにいゑばとゝいふ鳥
かのありし院にこの鳥のなきしを　○ありし院とは河原院也院にこのと讀きりて鳥のなきしと讀說あり此といふ詞はうたい物なとにやすめ詞にをくたくい也此時は家はとの聲にふくろふを思出たる也さもあるへきにや一說只ありし院にと讀て此鳥のなきしとよむへき也此河原院には終日居給し程に鵼の鳴てともあるべき也それを思出すなるへし物語には前に鵼のさたなかりし故にむつかしき沙汰ありかやうに心をやりてみれは相違なき者也
としはいくつ　○夕顏の上の年を問給
十九にや　○右近か詞也我はなくなりにける御めのとのこ也と申也
いとしも人に　○たもふとていとしも人になれさらんしかならひてそみねはこひしき
はかなひたるこそ　○源の詞也女は物はかなけなるかよきと也
みつからはか〱しく　○源の自(ミツカラ)也
みん人の　○みん人とは夫也
我心のまゝに　○夫の心のまゝに也
このかたの御このみ　○此御このみにはかなふへき物をと右近か云て悲む也烟をもとは變化して跡もなく見なせはと也
みし人のけふりを　○しくれかちなる空なるへし九月廿日あまりの空のけしきなと思へし
えさしいらへ　○右近歌をえよまさるにてはあるへからす今新參の身なるによりて御いらへも斟酌あるなるへし右近かふる川のへに君をみましやの歌云々是にて可レ知
かやうにて　○此二條院に夕かほの上のかやうにてあるへき物をと也
かのいよのいゑ　○又詞を轉して空蟬のことを書出たり物語の書さま見つへし
ありしやう　○今は空蟬に音信給ふこともなき也

うしとおほして　○空蟬か心也
とをくたり　○伊與のかみの具してくたる也源の
わすれやし給と心みに又御違例をも聞かてら申お
とろかす也
うけたまはりなやむを　○是より文の詞也
とはぬをもなとかとゝはて　○源のなやみ給をも空
蟬ははゝかりて聞奉らぬを源も又なとかともをと
つれ給はて程ふるを思みたるゝと也此歌の結句也
花鳥にはおもひわつらふと有思わつらふは源氏の
病氣を思よせて云へり聞給はぬはわつらひ給ふ故
とをしはかる心也と云云是はあまりなる義也此本
はおもひみたるゝと有然者わつらひなき歟
ます田はまことに　○ねぬなはのくるしかるらん君
よりも我そますたのいけるかいなき
めつらしき　○空蟬の方より申をめつらしき物にお
ほすと也
いけるかひなきや　○是より源の文の詞也我こそま
す田の地とおほすに空蟬の方よりかく申はいはれ
なきにや
うつせみのよはうき物と　○はかなき物と思はてし
を又かやうにとはれ侍てそのことの葉に命をかけ
たる也
猶かのもぬけを　○空蟬の心也此歌に空せみのとよ
み給は猶彼もぬけのことをわすれ給はぬよと思也
さすかにいふかひならす　○空蟬も一かうにかけは
なれては思はさるへし
かのかたつ方　○軒はの荻也
少將の心の中　○藏人少將自然しりたらんことをい
かゝと也
かの人けしきも　○軒はの荻也
しにかへり　○源の詞也只ありに書給へる詞人によ
りておもしろし
ほのかにも軒はの荻　○かことはこゝにてはかこつ
け事也一夜の契もなくはかやうにはおほすましき
をそれをかこつけにと也
荻につけて　○河云後撰左大臣小野宮あき太輔かう
つきさなる家にと云々
われなりけりと　○源の好色にをごりたる詞也
少將のなきおりに　○少將のなきをりにと讀きりて
心得へし心うしと思てとはかやうの御音信は心う

しと思へともと也
おほしいてたる　○思わすれ給はぬをうれしく思也
ほのめかす風に　○なかはゝどあるを源氏と少將と
のことをおもひむすほゝるゝと云說あり如何只今
驚かし給により過半はしほるゝと云なるへし
てはあしけなる　○此人は當世樣にてさのみ可然人
とも見へさるよし悉皆みへたり
こりすまに又も　○又も此道には名たつへきともお
もからす身と思なり給也
四十九日　○いつくにても訓によむへし
ここそかす　○心をとめてとりつくろひて沙汰ある
也前にことなくと侍をよくせよとみる義こゝにて
しるへし
もんさうはかせめして　○花願文重明親王家室四十
九日願文後江相公朝綱生者必滅釋尊未レ免ニ栴檀之
烟一樂盡悲來天人猶逢ニ五衰之日一
河云清和天皇貞觀九年十月自製ニ願文一云々願文自
作ノ例是也
あはれと思ひし人の　○妙なる語也
なに人ならん　○文章博士の心也

なく〳〵もけふは　○施し行ふ袴に手をふれ給さま
也來生の再會期しかたきと也結ほゝれたる思ひは
何の世にかとくへきの心歟私云とけてとは解脫の
義なるへし
このほとまては　○四十九日まては中有にたゝよふ
心也
かのなてしこの　○玉かつら也
これみつをかこち　○自然惟光かむかへをきたるか
なと推すれとゝさもあらぬさま也私此段不審恐非
歟
もし受領の子とも　○自然受領の子ともなと夕顏の
上をとりて頭中將にをちはゝかりて國へゐてくた
りたるかなと思也
この家あるしそ　○揚名介の妻は嫡女又一人はつく
しにすみつきたり一人はのほりき玉かつらの巻に
見へたり
右近はこと人なれは　○前に云かことく右近は別の
めのとの子也
わか君のうへをたに　○玉かつらのこと也
いよのすけ神無月　○おもてむきにて別して伊與の

守に餞し給也
又うち〳〵にも　○空蟬のかたへ也
くしあふき　○帥（河）隆家つくしへ下向の時餞に中宮よ
り扇をつかはす「すゝしさはいきの松原まさると
も添る扇の風なわすれそ
ぬさ　○黄帝四十餘人王子最末子好ニ旅行一死ニ于路一
誓曰吾爲レ神守ニ旅客一云々道祖神是也
かのこうちき　○前のもぬけをかへし給ふ也
あふまてのかたみはかりと　○あふまてと思しかと
も袖はくつるはかり也
逢まての形見とてこそとゝめけめ泪にうかふもく
つなりけり也
こまかなる事とも　○草子地也此筆法前にもあり此
程ことくた〳〵しけれは例のもらしつとあり此筆
法此卷のかきさまと見へたり
せみのはもたちかへて　○もぬけは夏の衣也今の冬
の衣なる故也
思へとあやしう　○源の心也つよくおもふことをお
もへとゝは云也
けふそ冬たつ　○立冬也河海たつのた文字聲濁てさ
したる本ありいかゝたもじ清てよむへき歟
すきにしもけふはかるゝも　○過にしは夕顔の上け
ふ別るゝは空蟬也是は十月の歌なるを秋のくれ哉
とよめる餘情類なき也歌の道かやうの所に心をつ
くへき事也惣しては春と秋との中に夏冬はこもる
也拾遺集にも雑の春秋の中に夏冬の歌はこもれり
猶かく人しれぬ　○是より草子地也今案此一段は箒
木の發端の光源氏名のみこと〳〵しうといひ又か
くろへことをさへ末の世に云ひつたへける人の物
云ひさかなさよと侍り又こゝにあなかちにかくろ
くしのひ給ひしもいとをしくとかける悉皆箒木の
始よりこゝにいたりて源氏の好色のことをありの
まゝかきあらはすと見へたりいかさま此一段は箒
木の發端を結する語と見へたりかやうにかけてみ
侍れは心甚深なる者乎
かくろへしのひ給ひ　○夕顔の上の事空蟬の事なと
也皆此事をばしるましきとは思たれとも源氏は桐
壺の帝の御子なるか善事（ヨキ）はかゝをとえりしてしる
さは私あるそしりも侍へし又實錄の心にたかへり
されはありのまゝにしるすと也

あまりものいひ　○あまりに又ありのまゝにしるす
さてしるしすこしたる事もあるへしと也
寫本三光院殿實枝御筆今川氏眞有之者也



細流卷三　若紫　末摘花　紅葉賀　花宴

若紫　卷名花鳥に詳也源氏十七歳自ニ三月一至レ冬
はらはやみ　○俗に云わこり也瘧わらはやみ
瘧 古摹切通作 瘧久病也　一日小兒口生瘡通作囟
ましなひ　○花鳥に杜子美詩手提ニ髑髏血一と云句を誦しても瘧は落ると云々手提ニ髑髏血一とあるは五言の句に似たり是は杜子美が花郷ノ歌云子璋髑髏血模糊手提擲還ニ崔大夫一と云句也これは夜深見ニ戰場一空月照ニ白骨一
よろつにましなひ　○ましなひは厭術也人々ましなひ煩しをとは俗語に如レ形物を沙汰するをましなふといへり沙汰しましくりてをくなるへし然ともましなひと云は輕く煩と云は重き貌也如レ此同し詞を用かへてつかへる此物語の習也如レ此分別すへき哉
きた山に　○鞍馬寺と見へたり
こその夏も　○世に流布せし也常にあるさま也
しゝこらかしつる時　○しそびらかす也瘧はしそびらかしてはあしくして落兼る也

おいかゝまりて　○慈惠大師のことに能叶へり河海
両抄に見へたり
山の櫻はまたさかりにて　○引歌に及へからす面白
き時節也
いりもておはする　○景氣たくひなし
所せき御身　○河海に云ひろき心也云々誤歟只せは
き心也御ありきなとかろ〳〵しくはなきさま也
寺のさまも　○鞍馬寺昔は四十九院の所なり
たれともしらせ給はす　○源の忍ひ給ふありさま也
あなかしこや　○聖の詞也
けんかたの　○年老ては現世の祈禱なとは本ともせ
す後世のつとめをこそ本とはすへきことゝ也修驗
者と云也
さるへき物つくりて　○符なとなるへし河内本には
さるへきふんとあり
すかせたてまつる　○すかせは食字也吸心也松の葉
をすきなと云に同し
つゝらおり　○もとは志賀寺と見る誤也枕草子近く
て遠き物くらまのつゝらおりと云々九折つゝらを
り

おなしこしはなれと　○僧都の坊のしつらひの可然
さま也よろつのことしさまによりてやさしくも又
あしくも見みる也榮花物語覺忍僧都北山に住給事
を撰する也
きよけなるやらう　○屋廊也
このふたとせ　○三年禁足のよし末にも見へたり
あまりやつしけるかなきゝもこそすれ　○源氏の忍
ひてわたり給へる程にあまりに聊爾なる御樣(サマ)を僧
都の聞もこそすれと憚給へる詞也
きよけなるわらは　○女わらは也尼公のわらはなる
へし
かしこに女てそ　○御ともの人の云也
君はをこなひし給つゝ　○看經なとし給也
日たくるまゝにいかならんとおほしたるを　○瘧病
をこりは心にまきるゝことあれはをこらぬことの
あると也
うしろの山にたちいてゝ　○源の立出給也瘧をまき
らはさんために遊山し給ふ也
かゝる所にすむ人　○源の詞也
これはいとあさく　○さふらふ人の詞也

人のくになとに侍　○他國也伊勢物語に人の國にても猶かゝることなんやまさりけると云に同也
いかに御ゐいみしうまさらせ給はん　○須磨にて繪を書給ことこゝにて先云出したる也
なにかしのたけ　○花鳥あさまの嶽と云々花鳥義可レ然也
よろつにまきらはしきこゆ　○此段悉皆良清が物語也
紛ゆをびかなる　○寛(ヒロキ)ひろき也
かの國のさきのかみ　○播磨の前の守也明石入道の事也
しぼち　○初て出家したる人を云兩抄に見たりたゝの滿仲を新發意と云御堂殿をはゝかる故也
いといたしかし　○かたはらいたき也餘につくろひたる樣體事過たると也
大臣の後にて　○明石入道の事也大臣の後胤にて次第の昇進なともすへき人也
近衞の中將をすてゝ　○中將なとにて宮中にて近きまもりの官こそねかふ所なるへきを近衞を捨て國の守にならんことは頗無念の事なるへし去は世のひか物とは云へり此類あまたあるへし河海實方朝臣の例を引り又山蔭中納言中將を辭して備前守に任して國に下るよし三代實錄に見たり　君命に非されは境をこへす引又
けにかの國のうちに　○海つらならてはこもるへき所もなきと也
ふかきさとは　○深山なとは妻子なとも住難き故に此海つらにある理りと也
近曾さいつころまかりくたりて　○良清申父播磨にありし也
京にてこそ所えぬ　○京にては世のましらひもなけれとも此國にては國の守なるによりていかめしく住なす也
さはいへと　○國の守なりしかは豐なる心かまへもあると也
さてそのむすめ　○源の問給也
けしうはあらす　○良清が詞也
代々の國のつかさ　○諸國の守は一任四ヶ年にてかはる故に代々とは云也さやうの任に赴く人の心をかはすものあれとうけ引ぬと也

我身のかくいたつらに　○入道の我身徒に沉むことさへあるにと也

この人ひとり　○このむすめをたに徒物になさしと也

おもふさまことなり　○此入道夢の告あるによりて國母なとにもなさてはと思也

かいりうわう　○只海に入りねと云によりての取合せ也吉祥天女の本義をひけるにや花鳥の説には及へからさる歟

かくいふは　○良清也

かうふりえたる　○今年の除目に叙爵する也

ゆいこんやふり　○此良清は入道の遺言やふりつへき人也

いてやさいふとも　○又そこにある傍の人の云也いかに然るへき由を良清は申なせとも此入道ゐなかひたる人にてさしたることはあらしと思ひたとす也ふるめいたる親にしたかひたらんはと讀きるべし

はゝこそゆへあるへけれ　○良清か詞也母の族姓を云也松風の巻に此族姓のことは見へたり

よきわか人わらは　○此母の都のかたより然るべき人なとをよひ下して何事も都を學ふと也

なさけなき人になりゆかは　○今迄は國の守の所望するをも云のかれけれとも後になさけなき人なとの此國の守になりて入道の心をきてをも云破りて迎取人もあるへきと也人なりゆかはとに文字を略して了簡の一説あり不レ可レ用レ之

なに心ありて　○源の詞也すくせ違（タカヘ）は海にいりねと遺言せしこと也

そこのみるめ　○本歌難レ用レ之と也花鳥あまのすむ底のみるめもむつかしく磯に生たる若めをそつむ

もてひかみたる　○源はちとよのつねの人には違ひたる御心なれは此女（ムスメ）には御心も留るへきと人々推量して申也

暮かゝりぬれとおこらせ　○今日はかやうの御物語に打紛れて瘧もおこらせ給はぬ也

はやかへらせ　○歸らせ給へきとある也御物のけなと加はゝれると書る前の夕顏の巻よりの心をおもはせて誠に其よせ有にや

夕くれのいたうかすみ　○前に坊なとある所なれは

人めを忍ひ給て夕暮のかすみたるに立出給用意有さま也
十はかりにやあらん　○紫上也
かほはいとあかく　○なきなとしてかほをすりたるさま也
なにこそ　○尼君の云也
見あけたるにすこしおほえたる　○此尼君よく此紫上に似たり
少納言のめのと　○紫上のめのと也
つみうることそ　○沙彌戒經を引く
炎經第四金剛身品持戒比丘云々不レ得レ畜ニ養奴婢牛羊非法之物一
こちやといへは　○こちへと也
うちけふり　○にほひあるさまなり
かんさしいみしう　○花鳥に云おとなになりてかみあけしたらはうつくしく有(アル)へきと云心也云々さまてなくともかんさしすへきあたりうつくしくと云心也
さるはかきりなく心をつくし　○藤壺に能似たる也をばめい也
かはかりになれは　○尼公の詞也よのつねの人は十はかりにもなれはをとなしやかになる物を此君はいとけなくましますと也
こひめ君は十二にて　○紫の上母也按察大納言にをくし給ひしこと也
ふしめになりて　○くすみたるさま也
おいたゝん　○尤哀なる歌也我さきたつよし也
はつ草　○義なし
僧都あなたより　○かやうに歌なとよむ所へ僧都の來給也
この世にのゝしり　○僧都の詞也
いて御せうそこ　○源へ僧都の音信申へきとてたつ也
哀なる人をみつる哉　○源の心也源のたまさかの御ありきにもかやうの人を見付給ふにましてすき物の心のまゝのありきをする人は何(イカニ)と思しやる也
かの人の御かはりに　○藤壺に思なすらふへきと也
うちふし給へるに　○源のうちやすみ給ふ也
程なき所なれは　○かやうに物申にも程なき所なれは源のやかて聞給也

よきりおはしましける　○僧都の使の弟子の詞也
よきるとは過の字也河海に云過すきおはしましける也云々如何過は度也わたり來る心也凡過の字は平聲去聲兩音也然れともよきりの時は平聲也毛詩第一江有汜篇云江有レ汜之子于歸不二我過一云々又山谷詩ニ近レ人積水無二鷗鷺一時有二歸牛浮レ鼻過一云々是皆平聲也來たる心也此類あまた侍り
おとろきなから　○驚つゝやかて可レ參をと云也
いぬる十餘日　○源の詞也
かうやうなる人の　○効驗あらは子細あるましきを萬一驗なくては聖の威徳もいかゝと思給故に忍ひ給と也是も源の用意の深さたくひもなき也
いまそなたへも　○僧都のかたへ只今申さるへきと思給時分也と也
すなはち僧都　○僧都のやかて參給ふ也
すゝしき水のなかれ　○涼しきとは時節にかきらす水のきよく涼しけなるを云也
かのまた見ぬ人に　○先に僧都の尼君に我御ことをこと／＼しく云ひきかせ給しを立聞せ給し故に今見おとりすへけれともと思しなから御出有と也

かゝり火ともしとうろなとにもまいりて　○とうろなともとに文字のなき本有ありて面白也心は篝火とも灯籠もともしたりと云はんため也
世のつねなき　○源に說きかせ申さるゝ也此時僧都の詞殊勝也人は敗壞の無常を知て念々の無常を知らぬと云へり其事に望む時の觀念は無常を觀するにも非す念々よと也都て僧は俗に對しては必無常の法理を演說するを禮義とすへし
ましてのちの世の　○源のまして我御身のうへをと思ひ給也
ひるのをもかけ　○のそき給し時のこと也
こゝにものし給　○源の詞也夢を見るよしつくりにの給也
うちわらひて　○僧都也
かく京にもまかてねは　○此僧都の禁足する事を云なり
かの大納言　○源のなにとなきさまに問給也
兵部卿宮　○乙女には式部卿の宮也紫上の父也
もとのきたのかた　○本臺のちとをそろしき人也
物をもひにやまひつく　○僧都の詞有レ興

さらはそのこなりけり　○さては尼公の孫也と推し
給ふ也
みこの御すちにて　○兵部卿宮の御すちなれは藤壺
ともよそならさるに依て似かよひ給と思給也
人の程も　○人からもと云心也已下源の心也
いとあはれにものし給　○源の詞也
なくなり侍し程　○僧都の詞也女子の一人侍ると也
それにつれて　○尼公此事を物思ひにし給と也
されはよとおほさる　○源の心也
あやしき事なれと　○源の詞也僧都にの給也思心あ
りてと讀切て獨り住にてなんと云にかけて見るへ
き也
またにけなき程　○花鳥説可レ然也 云なつけ なとの
様にあらんと也
いこされしかるへき　○僧都の詞也
そも〳〵女は　○いまた僧都の詞也○三從の心ある
へし
あみた佛ものし給たうに　○僧都の詞也初夜のつと
め也
山風ひやゝかに吹たるに　○暮春山中のさま也

たきのよとみもまさりて　○雨に瀧の音のます（落ソヒタル也）と也
山中一夜雨樹杪百重泉なと云か如し
ねふたけなるど經　○引聲の阿彌陀經なるへし
すゝのけふそくに　○心にくゝやさしきさま也
おほえなき心ちすへかめれと　○餘りに聞も知らぬ
やうにてと思て少納言君ゐさり出る也さて人も見
へさるとて又ひか耳にやと思て退也常にあるさま
也
佛の御しるへは　○源の詞也くらきに入てもといへ
るたくひなき取合なるへし
いかなるかたの御しるへ　○此出たる女の云也
けにうちつけなりと　○源の詞也
はつ草の　○紫上を見しこと也
さらにかうやう　○此女（少納言君ノ詞）の云也
しろしめしたりけなる　○僧都も大方御物語にも申
されぬへき物をと也
をのつからさるやうありて　○源の詞也
此君やよついたる程に　○ちとおとなしとや推はか
り給つらんと也
さるにてはかのわか草を　○花鳥にくはし

久しうなれは ○程をふれはなさけなしと也

枕ゆふ ○若草の御歌をすきかましき方には取なさて返しをし給也三山の苔とは袖をよめる也そなたの御旅ねは只今夜計にてこそあれ我山住の袖を思しめしやれかしと也

ひかたう侍る物を ○引歌なし夕されはいとゝひ難き我袖に秋の露さへをきそはりつゝ此歌叶ふへきかと也

かうやうの人つてなる ○源の詞也未たならひ給はぬと也人傳ならて申度と也

ひかことき丶給へる ○此おさなき人のことはすちなきひかことゝ也

はしたなう ○爰にさふらふ人々の云也

けにわかやかなる人こそ ○わかき樣なる人こそとて尼公の出給也

うちつけに ○源の詞也ついてとは題目なけれともと也私云如何不審

心にはさも ○源の我御心にはつきなきやうにも覺ぬと也

佛はをのつから ○我身のあさはかならぬ心さしはさりとも佛は照覽あるへきと也をのつからとてさ云にて讀切へし尼君に對してきをえ打出給ぬと也

けにをもふたまへよりかたき ○尼君の詞也ついてに題目と也

あはれにうけたまはる御ありさま ○源の詞也紫上のこと也

かの過給にけん ○紫上の母のこと也

むつましかるへき人にも ○桐壺の更衣に早く立をくれ給しこと也

をなしさまに ○今此紫上も母に早くはなれ給てみなし子なるは同したくひなるへしと也

かゝるをり侍かたくてなん ○と讀きるへし今迄つゐてなくて申さゝると也

をほされん所をも ○何とか思しめすと憚なからと也

いとうれしう ○尼君の詞也かやうにおほしめしよるはありかたくうれしきことゝ也

きこしめしひかめたる ○さりなからあしくきこしめしたる歟と也よつきたる年なる人なとゝ聞あやまり給かと也未た堅固に幼き人にてある物をと也

あやしき身ひとつをたのもし人にする人　○紫上を
云也
みなおほつかならす　○源の詞なりたしかによく案
内をしり侍る物をと也
いとにけなき事を　○尼君の心也うちとけたるいら
へをもし給はぬ也
そうつをはしぬれは　○たち給也
法花三昧懺法　○四種三昧也
止觀に四種三昧ありいはゆる常行常座半行半座非
行非座の四種也法花懺法は半行半座の三昧也懺法
は天台大師（或說遺式）つくり給て六時に六根の罪を懺悔
する法門也
吹まよふ　○義なし
さしくみに　○僧都の歌也さしくみはさしより也我
身は耳なれ侍れは聞も驚かさる也○これは源の歌
也花鳥の一義可レ然二首なから源の歌可レ然
鹿のたゝすみありくも　○春日山にをもしろきさま
也
ひしりうこきもえせねと　○ひしり僧都の坊へ參也
こしんまいらせ給　護身也

かれたる聲のいといたうすきひかめるも　○河海齒
落ぬれは聲のすく也ひかめるは老人の調子にのき
たる心歟と云々
ぐうつきて　○くうは功也功のいりたる也東屋の巻
にもあり功をかさねは五位のかうふりとよめる也
ことしはかりのちかひ　○前にも此二年と有三年住
人の人と見へたり
山水に　○源の詞也
みや人に　○幽玄の歌也○三千年に一度花さく義轉
輪王出世云々三千年のこと不審
うとんけの　○僧都の歌也源を優曇花に比する也優
曇華此云二瑞應一般泥洹經云閻浮提內有二尊樹王一名
優曇鉢一有レ實無レ花優曇鉢樹有二金華一者世乃有レ佛
時ありて　○源の我身を卑下めの給也佛の上になし
ての給也
ひしり　○加持の聖也
をく山の　○面白歌云々山櫻戶を稀（マレ）にあけての句法
なり
そうつ聖德太子の　○僧都引出物を申さるゝ也
君はひしりよりいしは　○源も皆々に布施をし給也

僧都いり給へて ○紫上のことを尼公に申さるゝ
也
ちいさきわらはして ○尼君の方への歌也ちとほの
み給しことをほのめかし給也
まことにや ○源の今とまり給かを見るへき也花の
たはかりを申さるゝ也
大臣より ○葵上の父殿と也
とよらの寺の ○山寺にたより有て面白し
人よりはことなる ○皆類なき殿上人なとも源の御
前にてはけをさるゝ也
さうの笛もたせたる ○是も隨身なるへし
山のとりも ○伯牙鼓琴而六馬仰秣
みたり心ちいとたへかたき ○源のかくの給つゝ彈
給也
このわか君 ○紫上也
みやの御ありさま ○兵部卿父宮のこと也
君はまつうちにまいり給て ○參內ある也
あさりなとにも ○阿闍梨○七高山阿闍梨
近江ヒエ山 ヒラ山 美濃國伊吹山 山城愛宕 攝津國神峯寺 大
和國金山 葛木山 毎年給穀五十斛春秋各四十九日於二件
山一修二藥師悔過一祈二天下五穀一也承和三年

のとやかに一二日うちやすみ給へとて ○大殿我御
方に誘引し給也
わか御車に ○源をは端に乘せ奉りて大殿は奥の方
に乘たまふ也
とのにもをはしますらんと ○葵上の御方也
女君れいの ○葵上也
をもはずにとき／＼はよのつねなる御けしきを見は
や ○源の葵上へ物申詞也
とはぬはつらき ○葵の上の詞也 奥入君をいかて
思はん人にわすらせてとはぬはつらき物としらせ
ん わすれねと云しに叶ふ君なれとはぬはつら
きものにそありける
まれ／＼はあさましの ○まれ／＼とは適(タマ／＼)の給出
る詞のかやうなるよと恨給也大方の人の習なとこ
そあれ本妻なとにとはぬはつらきなと云ことはあ
るましきと也
よしや命たにとて ○命たに心に叶ふ物ならはなに
かは人を恨みしもみん
かのわか草のおひ出ん程 ○紫上の事也

兵部卿の宮はいとあてになまめい給へれと　○あてなれと匂ひやかなるとはかはる也匂ひやかなるとはきやしやなる方也兵部卿宮は匂やかなる方はなしとなり
ひとつきさきはら　○父宮のかたはかはれともをはの方へ似たる也
又の日御ふみたてまつれ給へり　○北山への文也
もてはなれたり　○是より文の詞なるへし
面かけは　○とめては留て也心はとゝめて來たれとも面影は身をは離れさるよし也
よのまの風も　○朝またき起てそ見つる梅花夜のまの風のうしろめたさに
をしつゝみ給へるさまも　○花鳥 義尤可レ然 河海の說如何
さた過たる　○さたは央字云々齡の半過たる也
めもあやに　○目もあやしきまて驚也
あなかたはらいたや　○尼君の心也
ゆくての御ことは　○是より文の詞也
ふりはへ　○うちはへわさと也
また難波津をたに　○面影は身をも離れすの返歌をは紫上のし給へきをいまた手習なとをさへ取たてゝし給はぬと也歌のことには非す手跡のこと也河海に見たり
あらし吹　○花の上のみを云へり
いとゝうしろめたう　○前の文の詞をうけて書けり
さもかゝらぬ　○惟光か心也
つき〴〵しう　○惟光よく云つゞくる也
御はなちかき　○放書也難波津をさへとありし程に只其放ちかきのつふ〴〵としたる樣なるを見たきよし也
あさか山　○なにはつの語をうけて也かけはなるは影さへ見えるの影のかたによせたり
くみそめて　○くやしくは汲初てける淺けれは袖のみぬるる山のゐの水此歌本歌の如くくやしくやの心あり下の句は我身を卑下したる也影を見すへきは見へかたしと也或は云見るへきは源を待見るへき也
この煩給事　○少納言のめのとの語也此尼君此程煩給程に今少取なをしてと也
ふちつほの宮なやみ給事　○三四月の事なるへし

わうみやうふ　○王氏の命婦也是より先に藤壺に源氏密通のことあり此物語の作例こゝに始て書出す也さて宮もあさましかりしを思し出るたにとはかけり○河則天皇后は太宗の妾也後爲ニ高宗后ニ光仁天皇后井上內親王通ニ桓武天皇ニ給

なさかなのめなる　○彌よ思ひますさまのあるなり

なにことをかはきこえつくし　○ことの葉もなき樣也

くらふの山に　○只くらき心にて夜を慕ふ心なるへし定家卿の歌にも見たり花に「やとりせぬくらふの山をうらみつゝはかなの春の夢の枕や此歌は建暦三年三月內裏戀歌三首の內也三月の歌に用られ侍る花其よせある歟

見てもまた　○源の歌也逢見ても實なきか如し只夢中の樣なれは此夢の中にて我か身も消うせたきよし也

むせかへり給さまもさすか　○さすかの字妙也

世かたりに　○趣向面白き歌也なき身になしてもか樣のことは人の云ひ傳へきことゝ也

御なをしなとは　○女なとにまきれて參より給歟又はいつくにてそなをしなとぬきかへ給しなるへし

殿にをはして　○逢ことの今はなき子の夢ならていつかは君を又もみるへきの心也

又いかなるにかと　○源の病惱を又いかにかと內に思しぬへきもそれさへおそろしきと也

人しれすをほすことも　○懷姙の事也

三月になり給へは　○四月より六月迄三ヶ月也一本六月とありみな月とよむへし心は同こと也或説には六月とあるをむ月と讀て冷泉院十六月に生給と云説あり不可説の事也十一ヶ月にて生給也

此月まてそうせさせ給はさりける　○人々は何とて奏し給ぬそと申也

わか御心ひとつには　○源氏のこと也

辨の命婦　○二人の名也河內本には句をきると云々靑表紙には辨の命婦とよむ也一人也王命婦かむすめ也但二人によみても心得よかるへきにや

內には御もののけ　○か樣に內には奏する也

みな人もさのみ思けり　○皆人もさやうに思けりと也

中將の君も　〇源氏也
さまことなる夢　〇此事末の卷に見へたり
をよひなうをほしもかけぬ　〇源氏の天子の父たる
　へきと云義也
たがひめありて　〇花鳥の義可レ然
七月[フツキ]になりてそ　〇懷姙四ヶ月なるへし
いとゝしき　〇内にもめつらしく思しめす也
ふくらかに　〇懷姙のさま也
御あそひもやう〳〵　〇秋にもなれは也
かの山寺の人は　〇紫上のことを云也
をなしさまにのみ　〇いとけなきよしのみ返事のあ
　る也
ありしにまさる　〇引歌無用云々今はかき絶たる樣
　也此事のみ思しまとふ也
六條京極　〇御息所の御かた也
あはれの事や　〇源の詞也
わさとかうたちより給へる　〇次てならて態といは
　する也
いとかたはらいたき事かな　〇少納言の詞なるへし
いとむつかしけに　〇いつくも見くるしくて忝なき
と也
ゆくりなう物ふかき　〇打つけに心もをき奉らぬや
　うなりと也
けふかゝる所はれいにたかひて　〇源の御目には見
　習ひ給はぬよし也
つねにをもひたまへたちなから　〇源の詞也
かひなきさまに　〇紫上のこと也
みたり心ちは　〇うちよりの返事也
の給はする事　〇紫上のこと也
かくわりなきよはひ　〇いとけなき也今ちと年齡も
　かさなりてと也
ねかひ侍るみちにも　〇後生のさはりともなるへき
　と也
いとちかけれは　〇程なき家ゐなれはかく云聲をも
　源の聞給也絕々きこえてと云ひて讀きるへし
いとかたしけなき　〇いまた尼君の詞也
この君たに　〇紫上也今ちと成人もあらは只今の御
　出の忝なさをは身つからも申さるへき物をと也
あはれにきゝ給て　〇源の聞給て也
なにかあさくをもふ給へん　〇源の詞也

いてやよろつをほし　〇少納言の詞也
いとをかしときゝ給へと　〇源の用意也紫上とはしり給へとも人々くるしけに思ひたるさまを見しり給故にきかぬ樣にし給也
けにいふかひなの　〇源の心也未たいとけなき樣を思給也よく敎へ立てゝ見度由也
いはけなき　〇夜部はきかぬ顏をつくり給へとも此歌にてはたつの一聲とよみ給也なつむは行やらぬ也えならぬとは不ㇾ自由ㇾ也
少納言そ　〇少納言の返事をする也
とはせ給へるは　〇少納言文の詞也尼上は北山へ出給と也
をほしみたるゝ　〇藤つほの御事也
あなかち　〇其ゆかりを尋給也藤壺は紫上の御をはなれは思給也
きえん空なきと　〇をひたゝん有かも知ぬ若草をゝくらす露のきえん空なきの歌よみ給し時のことなと思出給也
見をとりやせん　〇源切に思給故に自然ちかく見をとりのしてはと迄おほす也　てにつみていつかわか物にすへきの心也紫の一本故に武藏野の歌の心也河海の說可ㇾ然是より紫上と云名あり
十月に　〇紅葉賀卷にあたるへし末摘卷は横竪の並也紅葉賀の卷は此卷の中末摘の中とにあたる也
朱雀院は　〇代々の仙洞を申也
山里人にも　〇とかく打紛て久敷音つれ給はぬ也
ふりはへつかはし　〇前にもふりはへさせ給へるに聞えさせん方なくとありそれも態と問給也こゝも同心也かやうの同詞を同卷にかきて見せ侍此類多し此物語の文法也心をつくへし
たちぬる月の　〇九月也
せけんのとうり　〇世間の道理也
あはれにうしろめたけに　〇紫上のこと也
こ御息所に　〇桐つほの更衣に離れ給し時のこと迄思出給也
京の殿になん　〇紫上京へ出給也
れいの所にいれたてまつり　〇前に有し南のひさしなるへし
少納言御ありさまなと　〇尼君の得ありさまを申也
宮にわたし奉らん　〇少納言の詞也父の兵部卿の宮

の御方へ渡し奉らんと也
こひめの君　○紫上の母君を云也父宮へ渡しても繼母にては如何とおほつかなく思給しと也
いとむけにちこならぬ　○一向二歳三歳の時ならは無分別にても有ぬへしはや十計にもなり給へは他人の中の住居も如何とおほつかなきと也
あまたものし給なり　○系圖紫上の兄弟三人あり其中にて一のあなつらはしき人なるへし其を口惜と也
すき給ぬるも　○尼君也
なにかかう　○源の詞也そのいはけなきこそ我本意なれと也
あしわかの　○蘆のわかきに若浦をよせたりみるめはなくとも立から歸るへきは面目なきよし也
めさましからん　○無二面目一と也人傳ならて聞え給はすはめさましからんと也
よる波の　○源の御心をよくも知らてなひきてとはうきたることとなるへしと也
わりなきこと　○いまたいはけなき由也
きこゆるさまの　○少納言か物なれて御返事を申と也
なそこえすらん　○引歌なとをこえかたき相坂の關此歌詞を用替たる也此類あまた侍り心は何樣一度はあはてはとおほす也
君はうへをこひきこえ　○君は紫上也上とは尼うへ也
宮のをはしますなめり　○父宮也
宮にはあらねと　○源の詞也
こちとのたまふを　○こなたへと也
いまさらになと　○源の詞也
さればこそ　○御らんせよいまたかく云かひなき御樣なる物をと乳母の申也
手をさしいれて　○上にきぬをかい取給なるへし其あはひへ手を入て髮をさくり給なるへし
うたてれいならぬ人の　○紫上の心也
今はまろそをもふへき人　○思ふへき人と句を切てなうとみ給そとよむ也
さりともかゝる　○源の詞也
めのとは　○少納言也
よろしき程に　○御年の程も猶さりならは可然こと

なるへき物をと皆思と也
あけくれなかめ也　○源の詞也
宮も御むかへに　○少納言の申也父宮より御迎參るへきと也
この御四十九日　○十一月上旬彼行幸以後なるへし
たのもしきすちなから　○源の詞也うと〳〵しさは父宮も同事也我はあさからす思かたはかへりてしたしかるへきと也
まことのけさう　○實のきぬ〳〵ならは也
いとしのひてかよひたまふ所　○誰ともなし
朝ほらけ　○妹か門催馬樂也うたはせてなと云あたり面白し
立とまり　○此はかなき草のとさしにはさはるへきとも覺侍らす御心さしあらは立とまり給へと也此段物語のかさりにて奇妙也今空く歸給道には何のよしもあるましきを此事を書出したる筆者の妙こゝに有ぬへし
おかしかりつる　○紫上也
文やり給に　○紫上へ也
かくへきことのはも　○尋常の後朝の文にはかはりはてたる也さて書へき言の葉のなきと也
かしこにはけふしも　○父宮の御出ある也
めのとはさうし　○局(ツボ子〳〵)にしてあるへし也あるへき樣を父宮めのとに云聞せ給也
君はわかき人々になと　○兄弟ひとつにましますへき也
かの御うつり香　○源のうつりか也
とし比もあつしく　○父宮の詞也尼君の御方にましますに故に宮の御方へはうと〳〵しかりしと後悔し給也
さた過給へる　○前にもあり
なにかは心ほそくとも　○少納言か詞也今ちと御心もつきてと也
よるひる戀きこえ　○尼君をしたひ給と也
なにかさしもをほす　○父宮の詞也
君の御もとよりは　○源の御方より也
あちきなくもあるかな　○少納言の申也父宮のきゝ給てはと也紫上へも父宮は此源の御事かくし給へと也
まいりてありさま　○惟光かへり參て也

さはる事ともありて　○源の御方よりの詞也

宮よりあす　○少納言か方よりの御返事也

君はをは殿に　○葵上の御方に也

あつまをすかゝきてひたちには田をこそつくれ　○此段古来不審也河内方源中最秘抄なとには色々沙汰あり花鳥河海不ㇾ及ニ沙汰一也いかさま此物語いつくにてもより所のなき事はかゝさる也ひたちにはの歌をふと歌ひ出されしはいかさま心あるへきこと也今案いま葵上の例のとみにも對面せす物むつかしき様なるをうらめしく思て様々のこと人の上なと思出給に末摘の事をふと思出給なるへし末摘は常陸宮の御むすめ也然も末摘に逢給こと此時分にあたるへしと云々

まいりたれは　○惟光まいりたる也

しか〳〵　○あす父宮へわたり給へきの由を申也

わさとむかへ　○父宮へ所望申ことも如何と也

車のさうそくさなから　○惟光が心にとりつくろひてなと思はせしとて只常のまゝにとの給也

女の心かはし　○女の心の行は常のこと也是はさまかはると也

さてはづしてんは　○とりはつしては也

女君れいの　○葵上也

こゝにをはしますと　○源の御出のよしを申也

おさなき人は　○少納言の詞也

なとかいと夜ふかうは　○いつくよりその御朝かいりなるへしと少納言は思也

宮へわたらせ給　○源の詞也

何事にかは　○少納言詞也

君いりたまへは　○源の内へ入給也

いとかたはらいたく　○見くるしきをと少納言のわひあへる也

かゝるあた霧を　○いまた夜中なるを如此いへる面白し

宮の御むかへに　○父宮かと思給也

たいに少納言　○紫上のめしつかふ人也

よしのちにも　○源の詞也

ひきさけて　○衣架なとよりひきさけて也

二條院　○二條院は法興院に准する也同京都のとをりなれは近也不然は程遠かるへし

そは心なり　○それは心也と也

かへりなんとあらは　○少納言はかへらはかへるへきと也
宮のをほしの給はん　○父宮の也
たのもしき人々に　○母にも祖母にも早くをくれ給故也
涙のとゝまらぬを　○今ことのはしめと思て堪忍する也
御丁屏風なとあたり〱したてさせ給ふ　○花鳥あたりは當の字也あたるに仕てとあり如何此あたり〱とはそこ〱と云心なるへし河内本にはあたり〱たてさせ給ふとありてし文字なし此し文字はやすめ字也
をましなとたゝひきつくろふ　○二條院は久敷人のすまぬ所なれとも引つくろひて驪而可然なると也
花鳥筵茵なとあるをひきのふるはかりのことゝありあまりなる歟
さるへき人々　○故郷の人をめす也
女はこゝろやはらかなるこそ　○花鳥源英明男女婚姻の賦英明作云々誤也後江相公の賦也可改なり河海端嚴如天后大慈佛柔軟 花嚴經 陽は體強自在陰柔順從陽 引文なし 至剛者男至柔者女後漢列七十四曹世叔妻傳陽以剛爲德陰以柔爲用男以强爲貴女以弱爲美鄙諺有云生男如狼猶恐其尫生女如鼠恐其武
やう〱をきゐて見給にひ宮　○花鳥說尤可然にひ宮を可用也
東のたいにわたり給へるに　○源の東の臺の我御方へ出給其間に紫上の立出給ふなり
やかて本にもと　○御手本にもやと也
むさしのといへは　○しらねとも武藏のといへはかこたれぬよしやさこそはむらさきのゆへ藤つほの御ゆかりと也
ねはみねと　○草の根を寝るかたによせたり未た結ふほとはなけれともと也
いて君も　○源の詞也
またようはかゝす　○紫上詞也
よからねと　○あしくともまつ何ことも沙汰してこそすゝむ道もあるへけれと也人の性をゝしへたる詞肝要也
かこつへき　○かこつへき故もなき身にむさしのゝ

若紫をなにゝかくらん　心は何ことにかこちかけらるへき故をしらぬと也何のゆかりと云ことをも更に知らぬ物をと也
かのとまりにし　○是より故郷のこと也
こあま君も　○あまりさしすくしたると也
北のかたも　○紫上の繼母也
やう〳〵人まいり　○是より又二條院のこと也
宮をはことに　○父宮也
のちのをや　○源也
さかしら心あり　○紫上のいまたなに心なきを云也
むすめなとはた　○娘なとよりはしたしきと也

末摘花

卷名は歌幷詞を以て號せり横竪を兼たる巻也源十七歳の春より明る年の春迄のことあり若紫より前のこともあり同時のこと也
をもへとも　○此發端面白し玉かつらの發端と相似たり然とも玉かつらの巻は彼玉かつらのことを書いてんとてそと云出す也さる程に夕顔上のことは只聊かく也此巻は夕顔の上を忘れかたくし給故に深切に思給由の詞也凡思へともと歌の五文字にをくは必思へとも〳〵と深切に思心のある由也古今思へとも身をしわけねはの歌も思へとも〳〵と重て思心のある也
夕顔の露にをくれし　○此末摘なとに耳とゝめ給も夕顔上に別て後又さやうなる人にもしやあひ見るの心也
こゝもかしこも　○六條の御息所奏上なとの體也
いとましさ　○挑戰なとの心也あらそふ心也夕顔の上は誠に女しき所はにる物なかりしをと物也
いとらうたけならん　○かやうの心も箒木巻の雨夜の巻の雨夜の物語より思しめす也
こりすまに　○いかなる人もかなと思す也末摘のこ

と云出さん爲也
さてもやとおほしよる　○源になひきやすなるを云
也
いとめなれたるやう　○草子地評して云也
つれなう心　○源の一度物なとの給ても又末をとけ
ての給ことなきことは又こと方へうつろひ行もあ
る也さま／＼の人々のことを云也
かのうつせみの　○空蟬はいなかへ下向の後のこと
也こゝもとは悉皆草子地也さる程に悉皆とりあつ
めて樣々のことを書也
ほかけのみたれたり　○軒葉の荻の碁を打し時なと
のこと也
をほかたなこりなき　○源の性を書也こゝまては皆
草子地也
左衞門のめのと　○源のめのと也大貳のめのとにつ
きては此左衞門のめのとを源の大切にし給ふ也
わかんどほり　○王孫を云也
こひたち　○是より兵部大輔か彼宮へ常に參る便に
て傳る也　光孝天皇承和五年任㆓常陸太守㆒後貞純
親王代明親王元長親王等任也

心はへかたち　○大輔命婦の詞也人のをくれたる方
をはかくしてよき所はかりを云こと帚木卷にもあ
り常に有也心をつくへき敎へ也
ひそめ　○嚬の字也かくるゝ心也
さへきよひなと　○さるべき也
みつの友にて　○樂天北窓三友琴詩酒也
いま一くさ　○河海詩の事と云々但酒の事にて可然
歟詩は女の學はんにもつきなからさるにやと也琴
罷輙擧㆑酒々罷輙吟詩三友遞相引循環無㆓已時㆒一彈
愜㆓中心㆒一詠暢㆓四支㆒猶恐中有㆑間以㆑醉彌縫㆑之㆓
ちゝみこの　○常陸宮詞也
さやうにきこしめす　○命婦の詞也
いたうけしきはましや　○源の詞也
のたまひしもしるく　○源の兼ての給しにもかはら
す也
いとかたはらいたき　○命婦の詞也秋の空なとこそ
物の音も澄侍る物を今はつきなきよしをとりあへ
す申也
うちとけたるすみかに　○内々の方也命婦か我つほ
ねなとなるへし

寝殿にまいりたれは　○末摘のまします方へ命婦の
まいる也
御琴の音いかに　○命婦の申也
もゝしきに行かよふ　○命婦はもゝしきに行かふ人
也さやうに耳に留るやうなとは如何と也
かやうの所にこそは　○花鳥うつほのとしかけか女
の事を引り可然但これに限るへからす此類多かる
へし
きゝしる人こそ　○末摘の詞也
いかにきゝ給はんと　○命婦の心也源の何とか思て
聞給はんすらんと思也
さはかりの人　○源の心也故常陸宮の御事を思給也
かやうの所にこそは昔物語にも　○花鳥宇津保のと
しかけか女のことを引く可然但是に不レ可レ限此類
多かるへし
物やいひよらましと　○此ついてに云ひやよらまし
と也
命婦かとある　○命婦心しらひして大方ひかせまい
らする也
まらうとのこんと侍つる　○いとひ顔にもこそ句い
ま心のとかにを句
みこうしまいりなん　○かやうに句を切てよむへし
中々なる程にて　○源の詞也源の聞けしき御心に入
たるよと命婦思也
をなしくはけちかき　○命婦か心つかひ也
いでやいとかすかなる　○命婦の云也
けにさもあること　○さやうにたゝ人なとの様には
あるましきと命婦の申をもことはりと思給ふ也
あはれにをほさるゝは　○故常陸宮の御事なと也
さやうのけしきを　○此由を申せと也
またちきりたまへる　○源の又今夜と契り給かたあ
るかのさま也
うへのまめにをはしますと　○命婦の詞源へ申也源
の實體にをはします由を内裏に仰あるを申やふる
也
たちかへり　○源の立かいりの給也
こと人のいはん　○をしかくしてもをかれよかし也
あまり色めいたりと　○命婦か様也
頭中將　○みあらはさんため也
もろともに大内山　○大内山名所にてもあれ共こゝ

にては只禁中を指て云也宇多院の御陵か西にあり大内山といへとも所の名には非す花鳥により詳せり御本記に大内を大内と云頼政か歌も大内を云也
この君と　○頭中將に見さため給也
さとわかぬ　○面白歌也月をはなへて誰もめつれとも入方までを尋行人はなき物をと也
かうしたいありかは　○頭中將の詞也
まことは隨身からこそ　○か樣の御ありきには可然供奉の人なくてはのことゝ也大和物語泉の大將（定國）故左（時平公）の大殿に詣て給へりけり外にて酒なと參りゑひて夜いたく更てゆくりもなくものし給へりおとゝ驚き給ていつくにものし給へる便にかあらんなと聞へ給てみやうしあけさはくにみぶの忠岑御供にありみはしのもとに松ともしなからひざまつきて御せうそこ申すかさゝきの渡せる橋の霜の上を夜半にふみ分ことさらにこそとなんの給ふと申すあるしのおとゝいと哀にをかしと思して其夜一夜おほみきまいりあそひ給て大將も物かつき忠岑もろく給はりなんとしけり云々此等を思へるにや
かうのみ見つけらるゝを云々かのなてしこは　○源の心也かやうにみつけらるゝ樣なれと夕顔の上の事をは頭中將はおほろけにも知り給はぬよと思す也
人みぬらうに御なをし　○狩衣すかたなるを直衣に改め給也前に狩衣すかたのなひかしろなるとありしも内より（直衣）出給とて直衣を狩衣に改て出給て又こゝにてなをしにあらため給なるへし
をとゞれいの　○葵上の父おとゝ也
中務の君　○葵上に祗候の人也
頭の君の心をかけたるを　○頭中將の心かけ給をはもてはなれて源に心を留ると也玉さかなるとは源のこと也
大宮なとも　○葵上の母君也
たえてみたてまつらぬ　○中務の君の心也源を一向にみたてまつらぬ所にあらんはさすかにてさふらふと也
ありつる琴の音　○末摘の琴のこと也
この君の　○頭中將を云也
その後こなたかなた　○草子地也
いつれもかへり事見えす　○かやうにかすかなる住居なる人の玉さかなるいらへもなきはいかなる事

事と不審(オホツカナ)く思給也
例のへたて聞給はぬ　○源と頭中將との御あはひ也
心みにかすめたり　○文の返事なきかと頭中將の問
給也
さらはよいひより　○源の心也さては頭中將も文を
やり給よと思給也
いさみんとしも思はねはにや　○我はみんとも思は
ねはみざるよし也態と源のをぼ〳〵との給也慥か
に文をみしとも又みさるともきは〳〵とはの給は
ぬ也面白詞也
人わきしけると　○頭中將の心也かやうに源のの給
は源へは返事のあるかとねたく思給也
ことをほくいひなれたらん　○定て頭中將は念比に
云へきさやうの方にそ心ひくへきと也
したりかほにて　○源の初めはかくまては思ひ給は
ねとも頭中將に今は　まけしの心つくと也
おほつかなくて　○是より源の詞也
いてやさやうに　○命婦の詞也たゝ時々のつゐてな
その御音信はかりは如何と也
らう〳〵しう　○源の心也をしはかりて思給也

わらはやみに　○若紫巻の始めと同時の也
人しれぬものをもひ　○藤壺に逢給しこと也
かのきぬたのおとも　○夕顔上の一周忌になる也
いかなるやうそ　○源の心也かやうにつれなきはい
かなる故そと也
いとをしとをもひて　○命婦の心也
もてはなれて　○命婦の詞也更につきなきことなと
は思侍らねと餘に物つゝみをし給故と也
てをさし出給はぬ　○返事をし給ぬ也
ほどこそ　○此上のこそは跨句とてまたかる句也
文章の體也新注
それこそはよつかぬ　○源の詞也わろきことよと也
猶よにある人の　○命婦の心也
ちゝ君にもかゝる事なとも　○父の兵部大輔には云
ひ合せす我か心一つに任る也
すこしけちかう　○命婦の心也
いましもをとろきかほ　○命婦今更のやうにをとろ
く也
いとかたはらいたき　○命婦の詞也
たはやすき　○たやすき也

物こしにてきこえ給はん　○物こしにて源に對面あれと申也

人にものきこえんやうも　○姫君の詞也

いらへきこえて　○返答なとはなくて只きけとならはさやうにてはありなんと也

すのてなとは　○命婦の詞也

ふたまのきはなる　○本尊なと安置する所なるへし

たゝをほとかにものし給ふ　○命婦の心也かやうのおほとかなる方は心やすしと也

君は人の御程　○君は源也さすか宮の御すちなれはと也

ましてちかき　○ちかき御返事はなきと也

わりなのわさや　○源のなけき給詞也

いくそたひ　○しゝまは無言也人の無言をするをはまけて居也我も物な云ひそと云ぬはかりなると也花鳥に見へたりしゝま耕雲本の聲しゝま云々俯仰喉咽進退而血泣又相傳の義也

たまたすき　○思はすはおもはすとやは云ひはてぬなぞ世中のたまたすきなるてゝの心はなましいにかけたるを云也

かねつきて　○花鳥に見へたり鐘つきて留めたくは思はぬとなりされとも我は又答ふへきことはなきと也

人つてにはあらぬ　○此侍従末摘の御歌を傳ふるやうには云もなさて只みつからの給やうに侍従か云なしたる也さては末摘の自の詞と源の聞なし給て今ちとはやりかなりと聞給也

いはぬをも　○心はあらは也

いとかゝるも　○源になひくましきの心ある歟の不審ある也自然こと人の云ひかゝることあるかと也

猶おもひにかなひかたき　○源の観し給ふ也

かろらかならぬ　○かやうの古宮に自然可然人をみつけてはと思しにさもなきを観し給也されとも人がらなれは末までも思ひすつましきと也これ源の性也

心やすきひとりね　○源の詞也

しかまかて侍るまゝ也　○頭中將の詞也罷出たるついて也

朱雀院の行幸　○若紫巻にも沙汰ありし同時也

ひきつゝけたれは　○同車し給也

いさねふたけなりと　○葵巻にも頭中將の物語に秋のことなと云へる此時のこと也
かくい給事　○頭中將のうらみ給也
かしこには　○末摘の御かたへ也
雨ふり出てところせくもあるにかさやとり　○前にいてやさやうにおかしきかたの御笠やとりにはえしもやとありし詞をうけて也
中々とかとも　○後朝の文の遲々するをも何とも思ひ給はさるとなり
夕霧の　○心あらは也
はれぬよの　○あらは也
むらさきの紙の年經にければはひをくれ　○紫の色のかへりたる也紫には灰をさせは色のよくなる也
てはさすかにもじづようなかさた　○なかさたは中古也此物語末巻に假名は末代によりてよくなりたる様に見ゆ今こゝになかさたのすちとあるもそしりたる心なるへし
かみしもひとしく　○ちらしてもかゝさる也
我はさりとも　○源はかはりは終(ハテ)ましきこと也

かしこには　○源の捨給ましき御心をはしらねはなけき給と也
まかて給にひかれ給ふて　○末摘の方へ御心もありしをおとゝにひかれて大殿に出給なるへし
大ひちりき　○昔は今の世のよりも大なるありし也
たいこをさへ　○花鳥の勘例有ㇾ輿禮記曰鐘鼓在ㇾ庭琴瑟在ㇾ堂云々延喜四三廿四覽二舞樂一左大臣時平公依ㇾ仰階前自打二大鼓一云々寛治五々廿五庭上競馬主上堀河院自打二大鼓一給此時置二堂上一
御いとまなきさやうにて　○此頃源の御ひまもなきよし也
ぬすまはれ　○深切なる所へこそ身をぬすむやうにて忍ひありき給へ也
なきぬはかりをもへり　○源を命婦かうらむる也
いとまなきほとそや　○源の詞也
ものをもひしらぬやうなるを　○あまり末摘のつれなかりしをこらさんためと也
われもうちゑまるゝ　○命婦也
この御いそき　○行幸をすくしてと也
わりなの人にうらみられ給ふ御よはひや　○よはひ

は齢と又はよひと両義と云々如何
かのむらさきの　○花紫君二條へうつり給ことは行
幸終て霜月のころなり
されとみつからは　○奥ふかなるさま也
をしやりなと　○をしやりたる所もみたれさる也
秘色　○滄總そうわにも越器とも云ゐを義のこと也
河云越より出其色奥有殊勝たり何秘して尋常に不
用之號秘色
なにのくさはひも　○可然道具もなくをろそかなる
さま也
さすかにくしをしたれて　○古躰也
内教坊　○花大宿にあり
はやは　○者乎
とびたちぬへく　○貧窮問答の歌たよりあり河世中
をうしとはさしもおもへとも飛立かねつ鳥にしあ
らねばあり
侍從は齋院に　○侍從は前に晴ぬよの月待里をの歌
讀し人也齋院は誰ともなし
かのものにをそはれし　○河原院にてのこと思し出
給也
いざとき心ちする　○ねられ給はぬ也

からうして　○心もとまらぬさま也
をかしきほとの　○源の詞也此空のけしきも見給へ
かしと也
いとゝきように　○源の御さま也
はやいてさせ給へ　○こゝに祗候の人々の中也
見ぬやうにて　○源也
うちとけまさりの　○源のいさゝか見なをしもやす
ると思給て也
まつゐたけのたかく　○是より末摘のありさまを云
へり悉皆誹諧に書り
さほに　○小青也
さらほひて　○饒莊子
ゆるし色　○花鳥説可然花延喜十七年參議三善淸行
請禁深紅衣服奏議云但淺紅輕黄未及火色者
不在制限云々河論語紅紫不以爲褻服　○今案
紅紫の深き色を禁色と名け淺をゆるし色と云制禁
に不及誰も著する故也
なこりなうくろきうちき　○くろきとは紫の色のく
ろみたる也花袿に大小あり小袿は宮一の人あるじ
なとの着也きぬの上うはき其上に小袿を着寸法は

次第にうへにきるはおゝらかす也
ふるきのかはきぬ　○昔も着することは邂近と云々
ぎしき官　○政官とて辨少納言内記外記史などをも
云也こと〱しき様也
いとをしくあはれにて　○源の心也
たのもしき人なき　○源の詞也
あるましきものおもひは　○色々のあらましことを
思給也かやうの在所から今ちとも宜き人ならはと
世間の思やうにもなきを観し玉ふ也と思ふやうな
るの語は影略互見の詞也かやうなる所なりけんか
しと云ひまきれなにたしと思と二を兼たる語也可
ㇾ着ㇾ意也
朝日さす　○今末摘のとけなからいまた結ぼゝれた
る所のあるを云也又はたゝ見る當座を云也軒のた
るひの打解て露はすかれとも未たとけさる様也
松の雪のみ　○只雪のふりつもりたるさま也
かの人々のいひし　○雨夜の物語のこと也
なにたつすゑの　○引歌に不及只雪の色を云也
「わか袖は名にたつ末の松山や空より波のこえぬ
日そなき　一浦ちかくふりたる雪は白波の末の松
山こすかとそ見る今案此雨言可ㇾ用ㇾ之にや此雪の
さまは又我物思のたゆることなきさにいへるにや
きぬは雪にあいて　○きぬのすゝけたるを雪に對し
て書たる面白し
あやしき物に火を　○花鳥説あきゝりなる歟只朝のさ
ま也
ふりにける　○此翁の袖よりもこれを見る人の猶ぬ
れまさると也あさの袖はあしたの袖也
わかき物は　○秦中吟を引り古來只此翁のありさま
を見て頌し給ふとはかり心得侍りされと是はかり
にてはふとしたる様也前に風吹あれておほとなふ
ら消にけるをともしつくる人もなしと云々かしこ
へかけてみるへき也此灯も消て物をそろしかりし
ことを思給をりしも此翁なとを見て頌し給ふなる
へしさやうにみれは秦中吟の夜深烟火盡霰雪白紛
々幼者形不ㇾ蔽老者體無ㇾ温悲端與ㇾ寒氣ㇾ併入ㇾ鼻中ㇾ
辛と云々悉皆叶へり今案云々私云此末句の鼻中の
字肝心也可ㇾ付ㇾ眼○夜深ㇾ煙火盡キ霰雪白メ紛々タリ
幼者形不ㇾ蔽老者ハ體無ㇾ温悲端與寒氣併入鼻中
辛

いまみつけられなん　○只今に見付らるへしすべな
うとはすへき様をなしと也無心のこと也
ふるきのかはならぬ　○面白き語也
よのつねなる　○源の性殊勝也
かやうのまめやかごとも　○末つむの性也
内のとの井　○源十八の年の正月也
あやしき事の　○大輔の命婦の詞也
みつからのうれへはまつこそは　○と讀きるへし
かの宮より　○常陸の宮より也
みちのくにかみ　○檀紙也陸奥よりすきはしめける
と云々
から衣
心えすうちかたふき　○袂はかくそとあるは何そ別
に添物のあるべきと不審し給也
ひきこめられなん　○源の詞也
袖まきほさん　○淡雪は今日はなふりそ白妙の袖ま
きほさん人もあらなくに
またふてのしりとるはかせ　○はかせとは諸道に師
をいふなるへしちとをしへ申人もなかりけるよと
也

いまやう色の　○花鳥に見へたりこれはきぬ也
なをしのうらうへ　○なをしをきぬにそへたる也當
時の直衣とは見へす上古にはうらおもて紅の直衣
あるかと也　今案紅の直衣事所見不分明歟是は直
衣にてはあるへからす今様色のえゆるすましくつ
やなうふるめきたると云迄は衣のこと也されはふ
るめきたると云にて句を切てなをしのうら面ひと
しうよりは直衣のこと也こまやかなると云を色の
方にはみるへからす織さまなとのこまやかなる心
歟今案如此然るに松殿装束抄云法成寺關白直衣布
袴紅梅織物直衣紫織物指貫皆練着之寛弘四年三
月五日法成寺關白左府行曲水宴主人着桃花直衣
柳色指貫山吹出袙永久三年十一月十四日五節童御
覽日法性寺關白紅梅浮文直衣萠木指貫皆紅衣此時
は前の今案の記非也可破也
なつかしき　○源氏後悔のひとりことなるへし
色こき花とみしかとも　○紅の色こき花とみしかと
も人をあくにはうつるてふ也
花のとかめ　○命婦は畫なとさたかに末摘を見るこ
となき也源のいつも花のとかめあるは鼻に如何様

あしき事あるかと命婦の推する也
をり〳〵の月かけ　○月影なとに源はよく見給へきと也　今案是は命婦のことなるへし源は月影ならてたしかに見給也命婦こそ時々月影なとにはかり見まいらせたることなれと覺たり前に物こしにて語ひ侍とあり又此頃のおほろ月夜に忍て物せんともあり時々許命婦は見參らする也
くれないの　○命婦末摘のかた人してよめる歌也
よきにはあらねと　○かうやうならはとは猶さりならはと也せめて此命婦の口つき程ならはと也
かゝるわさは　○此衣を源のあさましとおほす也
なにゝ御らんせさせ　○命婦か心也
くはやきのふ　○くはやはさあなとと云詞也
あやしく心ばみ　○花鳥には心たちすくさるゝとあり然れとも心はみとは常陸宮のをとつれさしすくしたりと源氏の思したるなるへし
たゝむめの花の色　○もとめ子の詞也源の口すさみ也求子に春日にては三笠山のとうたひ又他所にては其在所々々をさして歌ふ也源の心に爰にては常陸の宮のとうたいたく思給也鼻の宮を指て思出給也此儀秘説也
命婦はいとをかしと　○命婦は心へてをかしと思心しらぬ人々なそ御ひとりゑみを
人々あやしく思也
あらすさむきしもあさに　○命婦の釋して云也　花
鳥いかゝ
かいねりこのめる　○あかき花(ハナヤ)やありつらんなとされこと也かいねりは紅也
あながちなる　○しゐてかくの給ふを云へり
この中には　○誰も此中には鼻のあかき人もなきかと也
左近の命婦　○此二人鼻あかき人也
あはぬよを　○心はいとゝ隔りおほき中と思つるにから衣君か心のつらけれはなと隔あるさまに承は猶々心へたてをかさねよとあるかとなり　結句は我も見ん人も見よの心なり　かさねていとゝは
かさね〳〵へたてたる也
えひそめ　○蒲萄也紫色最淺也
ついたち頃過て　○源十八才の正月也
さひしき所の　○常陸宮也

あけもはて給はて　○上下つゝきたるなかき御格子
なるへし今の紫宸殿なとの如き也
きやうたい　○かやうの御具は故宮の御物なるへし
ありしはこの　○昨日源よりたてまつられし衣裳也
さもおほしよらず　○さもおほしよらすと云迄を上
へ付て見るへし通例式の人ならは源の御方よりの
きぬはかりを着用し給をは源に對しては恥しくも
思へきを此宮はさやうの方をは何とも思玉はさる
と也
けふあるもんつきて　○花鳥に三説あり共三可用之いつれも可
然
またるゝ物は　○あら玉の年也
さへつる　○もゝちとりさへつる春は物ごとに云々
故常陸のみこ　○光孝天皇永和五年正月任常陸太守
考續日本紀第五承和五年正月庚申朔壬申四品忠良
親王爲常陸太守從五位下藤原朝臣貞公爲介
嵯峨天皇―仁明天皇正良諱
　　―忠良親王 二品式部卿　容貌美麗貞觀十八
二廿一薨五十八
しゝま　○河海日本紀を引て進退の字をひける尤可
然也幾度もそなたの進退に任て進退する也物な云
そなとうけたまはらはそれに從ふへし今迄は物な
云ひそとは承はらさる程にと也當時皆しゞまを無
言の樣に用心得るはひかとにや進退本の心也然る
をしなにかねつくかたに取なしてよそへ云へるな
るべし人の我儘に物を沙汰するをしまいにすると
云へるは此進退をしゝまいてとよめるにかよへる
にやと覺へたり然てしゝまと聲を讀べきにや先公
此聲を用給へり五月十二日於議定所講談也
あるやとをかし　○はやと云詞は者乎の心歟ものを
と云詞歟
あらすさむき霜あさに　○是はこゝにある人々の我
か身のうへかと心得るを命婦はさにてはなし命婦
のわか身の上のことゝ云たる也さてあらすとは云
へり其故は此命婦は左衞門のめのとのむすめ也さ
れは衞門府の風俗の歌の詞なれは我身のうへと云
ひなすなるへし此義を申也
けうあるものつきたる　○花鳥二義非歟只末摘の心
也したぎなとをも源に對して是は皆源より奉り給
へる物をと恥給へきを只此うはきはかりをは末摘

心にもはち給也其外をは何とも思給はぬと也是も
　心のをくれたるかた也此由申
夢かとそ見る　○別に引歌あるへき歟又業平の小野
　にての歌の心も面白かるへし
くれなゐはかうなつかし　○花鳥義如何只きぬの事
　なるへし
むもんのさくら　○是うはきなるへし
うたてこそあらめ　○紫上の詞也
へいちう　○河海に見たり平貞文字仲「我にこそつ
　らさは君か見すれとも人にすみつく顔のけしきよ
くれなゐの　○義あらはなり
かゝる人々の　○草子地なり
　叡山尊與此山尊
　誰定楊雄優劣論
　試上絶巓望湖水
　眼前歴々見漁村

紅葉賀　卷名此卷に紅葉賀とつゝきたる詞なし
　花宴藤裏葉の二の卷に此時の事を紅葉賀と云へる
　心にて付たる名なるへし又誰人の御賀ともたしか
　に見へさる也賀とは其年の滿ぬるを賀して行末の
　寶算を祈心也天皇の御賀は仁明天皇嘉祥二年三月
　庚辰興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十云々
　又十月癸卯嵯峨天皇太后遣使奉賀天皇四十寶算也
　凡厥山海珍味數百捧旣而天皇御二紫宸殿一音樂遞奏
　歡樂終日云々太上天皇の御賀は淳和天皇天長二
　年十一月丙申奉賀太上天皇五十八之御齡云々是始
　也源氏十七歳の十月より十八歳の七月迄のこと也
　河内本十月まてと見へたり花鳥には十月を用給也
　如何
　此朱雀院の行幸は宇多御門の御賀になすらふる也
　其故は延喜十六年三月七日行幸朱雀院有法皇五十
　賀云々三月を十月に書なすにや　醍醐の御門の御
　代に朱雀院と申は寛平法皇の御こと也此卷に一院
　と申すことあり是則寛平法皇になすらふる也桐壺
　帝御在位の中に一院崩御の事見へさるは寛平法皇
　は延喜御門崩御以後かくれさせ給故也

朱雀院の行幸　○花鳥に種々沙汰あり宇多御門御賀三ヶ度也朱雀院事前に注せり古今に朱雀院の女郎花合とあるも宇多院也行幸の事河海に康保二年十月をひけり時分これにもと付歟河朱雀は三條朱雀也

行幸　○蔡邕云車駕所至見令長三老官屬親臨軒作樂賜以食帛民爵有級或賜田租故謂之幸晋灼曰民臣被其德以爲徼倖也又顏師古云幸者可慶幸也故福喜之事皆稱爲幸

御かた〳〵ものみ給はぬ　○禁中の外なる故に禁中の后定は見給はすと也

かたてには　○舞のあひて也花鳥にうつほを引けり此頭中將もわろきにてはなけれとも源に立ましりては也深山木も面白き心也

花のかたはらのみ山木　○さのみをとれると云んには非す常磐木も見所捨難き也

えいなとし給へる　○青海波の詠也　青海波は承和御時大納言良峯安世作奉勅命作此舞時依勅改盤涉調詠は小野篁作之五言四句也

迦陵頻　○翻譯此云妙聲鳥大論云在㲉中未出發聲微妙勝餘鳥正法念經出妙音聲美音若天若人緊那羅等無能及者唯除如來音聲河唐云敎鳥此鳥鳴時音中囀苦空無我常樂我淨土

春宮の女御　○弘徽殿女御也

神なとそらに　○河海大鏡を引けり延喜富小路御息所の御腹の惟明親王七歲にして舞に其形有光山神めてゝ奉取云

うたてゆゝしと　○弘徽殿女御の御心には今源をいかなる山神なともとりたてまつることもあれかしの心也

藤つほはおほけなき　○彼心かけ給ことなからましかはと思す也

宮はやかて　○宮は藤つほ也

けふのしかくは　○勅定也

あひなう御いらへ　○藤壺の御心の鬼にいらへにくゝし給也

ことに待つと　○殊なると也

かたてもけしうは　○勅定也

家のこは　○堂上の人也

こゝしう　○巨々の字也

つとめて　○翌日源より藤つぼへの消息也
ものおもふに　○源の我身のことは物思ひに立まふへき作法もなかりしを只御前に見せたてまつらせ給へきためとありし故に涯分の程舞の手をもつくしゝ也さやうの心にて袖うちふりしとはしり給はぬかと也
御返りめもあやなり　○平生は玉さかの御返事もなかりしにけふの御返りの有は昨日の舞をたくいなく面白く思給し故にてそと草地のことはる也
から人の　○青海波は唐樂也もろこしのことは遙なることなれは知りかたし昨日の源の舞給ありさまたくひなく哀に忘れ難かりし由也
おほかたには　○大方には思しなさぬ也
かうやうの　○此樂は唐の樂とも能分別し給を云也誠に后なとに立給ふしたちと源の思給也
人のみかと　○唐を云也
きさきこと葉　○后の御したち也
行幸には　○これより行幸の當日也
春宮もおはします　○花延喜十六年三月御賀有詔令喚皇太子云々此時太子は保明太子也

くさおほかり　○種々多き也
ひとひの源氏の御ゆふかけ　○前に神なとそらにめてつへきとありしこと也其故に誦經せさせ祈禱せさせ給也
春宮の女御　○弘徽殿にはかやうにはなくともと思給也
いうそく　○可然人なと也
宰相ふたり　○系圖誰ともなし奉行する人たち也
河參議御賀樂行事例延喜十六年亭子法皇五十賀行事參議右大辨保忠卿
おの〱　○此程の稽古也
四十人のかいしろ　○四十人のかいしろと讀切ていひしらすと讀也四十人か皆悉く吹たてたるにてはなき也　河長秋卿笛譜云四十人内有序二人破二人垣代卅六人云々
誠のみ山をろし　○朱雀院には池山ある所也
かさしの紅葉いたう散過て　○散すきのきの字清也
河榮花物語治安三年十月十三日殿の上の御賀也かさしの花とも金銀の菊の花を作りて此君達かさしたりと云々

左大將　○系圖になし
けふは又なき　○試樂よりは又一段面白し
入あや　○河舞有取綾手故云入綾花更に取て返して
　面白く舞こと也「時鳥二村山を尋見ん入あやの聲
　やけふはまさると後頼
物みしるましき　○面白語也
承香殿の御はら　○桐壺帝の御子也
ことさまし　○あまりの面白さ故にかへりて興もさ
　むるはかり也
正下のかゝい　○叙正四位下也
この君に　○源氏の君にひかれて各昇進し給と也
むかしの世ゆかし　○源の前世の床しきと也
宮はそのころ　○藤壺の宮也まかてはまかんてとよ
　むへし
おほい殿には　○葵上の御方也
二條院に　○紫上の一かうかくかたなりなる人とは
　葵上かたには知らさるよし也
心うつくしく　○葵上の性を云也ちと打解さるやう
　に平生のあり樣のある也さやうにたになくは他人
　にわくる心もあるましき物をと也匿怨友其人なり

　よろしからぬさまのある也
人の御ありさまの。○葵上のいつくもたらひたるこ
　とをの給也
人よりさきに　○うゐかふりの時より見そめしより
　聊も心隔てさる物をと也
心をも知給はぬ　○初こそあれつゐには思なをり給
　へきとこそ思しに也
おさなき人は　○是より紫上のこと也
見つい給ふ　○見ならひ給と也
これみつより外の人　○此外には知る人もなきと也
かのちゝみやも　○兵部卿の宮也
そうつはかくなん　○源のかく大切にし給を僧都は
　心やすく思給と也
かの御法事　○紫上の祖母の法事也
ふちつほのまかて給へる三條宮　○源の外樣むきに
　て參り給也
命婦中納言　○二人の名なり
けさやかに　○あまり外樣むきなると思給へとも也
兵部卿の宮　○藤つほの兄弟紫上の父也
この君　○源也

女にて　○我を女にて兵部卿を見はやと也
むこよなとは　○是も女になりて源に向ひたきと也
紫上のことはかけても思より給はぬ也
くれぬれはみすのうちに　○兵部卿宮簾中に入給也
しは〳〵も　源の詞也
はかなのちきりや　○源の心也
少納言はおほえす　○又是より紫上の事を云也かやうに源の大切にし給ふ事を云り
おほい殿　○葵上也
こゝかしこ　○六條御息所なと也
おとなひ給はん　○紫上成人ありてはむつかしきことあるへきと也
されとかくとりわき　○たのもしきよし也
はゝかたは三月　○花鳥此除服十一月晦日とあり如何九月よりかぞふれは十二月に及ふへし然らは十二月卄日なるへし末にをとこ君は朝拜にまいり給とあり尤十二月可然也
又おやもなくて　○紫上は母上にははやくはなれ給て悉皆祖母の養育にてそたち給程に一段と服をもふかく着し給へき由を源の思給也河海說如何

まはゆき色には　○薄紅なるへし　花紅の薄色紫を除てまはゆき色とはいつれを云へきなれは紅梅もよき朽葉其外梅櫻なと名あるを云へきにや
男君は　源十八歲の年也
てうはい　○花鳥に見たり花云正月一日の小朝拜を云朝賀のことには非す云々
うちゑみ給へる　○源也
なやらふとて　○紫上詞也ひゝなの追儺也
河文武天皇慶雲元甲辰十二月此年天下諸國疫疾百姓多死始作土牛始追大儺
けにいと心なき　○源の詞也
けふはこといみして　○正月一日なれは也
ことしたに　○少納言か詞也
心の中に我はさは　○紫上の心也
かくをさなき御けはひ　○かやうにおさなき人とは人はをしはかり思はさる也
れいのうるはしく　○葵上の樣也二條院の人のこと下心にある故也
ことしより　○源の詞也
わさと入すへて　○二條院に入すへをき給きこへあ

るにより猶うとみ給也
よとせはかり　○源は葵上よりは四年はかりをとり
給也
何事かはこの人のあかぬ　○あかぬは不足也
おなし大臣と　○草子地也
みやはらに　○當代の御めい也
をとこ君は　○源は何とも思給はぬと也
ならはい給ふ　○效ナラヒ給故何とも思給はぬと也
おとゝもかくたのもしけなき　○葵上ちゝおとゝ也
みたてまつり給ふ時は　○打むかひてはうらみをも
忘給也
名たかき御帶　○玉の帶也
これは內えんなと　○源の詞也今日のためには過分
なりとて斟酌し給なり
それはまされるも　○大臣の詞也
たまさかにても　○源をはかりそめことなりともむ
こなと云ひてもてはやさてはと也
一院　○花鳥に有花云此一院は寬平法皇に准すへし
宮は御几帳　○藤壺也
この御事の　○藤壺の懷姙のこと也源の密通は四月
也御門の御子なれは三月よりなるへき心也正月は
さりともと思也
中將の君はいとゝ　○源也此時の祈とも薄雲巻に見
へたり
世の中の　○藤つほの御心なるへし
二月の十日　一月こえたる也
いのちなかくもと　○藤壺の御心也此ついてにいか
にもならはやとは思せとも弘徽殿の后かたに此時
なにともなり給へなと思給へきを口惜く思給故に
それに思つよりていかにもしてなからふへき由を
思給也
かの人しれぬ　○源也
うつしとり給へるさま　○源に似給也
命婦の君に　○源氏逢給て也
なとかうしも　○命婦の詞也
いまおのつから　○內へ御參りの時見給へきよし也
思へるけしき　○源也
いかさまに　○何とした契りそと也此世子によせ
たり
かゝる事こそ　○何とも心得かたき契りと也

命婦も　○さすかさしはなちてもあひしらはさる也
見てもなもふ　○命婦の歌也若宮の御こと也見ても
こは藤つほの事也みぬはたとは源也
かくのみいひ　○源也ものからと讀きるへし
人の物いひも　○藤壺の御心也
命婦をも　○此源の御こと故に命婦をもうとみ給也
四月に内へまいり　若宮參内ある也
めさましきまて　○源によく似給也
又ならひなきとちは　○双ひなくうつくしき人のを
さなたちはいつれも同し物と思給也
源氏の君をかきりなき　○源を東宮に立給はさりし
ことを口惜く思すよし也
きすなき玉と　○春宮にとおほす也
みこたちあまた　○勅定也
そこをのみなん　○そことは源をさしての給也
いとちいさきほとは　○源ならてはをさなき人をま
ちかく見給事なき故に小兒はみなおしなへてかや
うなるとのみ思す也
おそろしうもかたしけなうも　○此詞のつゝき奇妙
也如切如磋如琢如磨瑟兮僴兮赫兮喧兮なといへる
文勢なり
物かたりなとして　○若宮の御ありさま也常にをさ
なき人のさま也
かき給ふことおほかるへし　○草子地也
よそへつゝ　○儀あらは也
花にさかなん　○わかやとにまきしなてしこいつし
かも花にさかなんよそへつゝ見ん
さりぬきひま　○藤つほの御隙也
たゝちりはかりこの花ひらにと　○一ふて計もと命
婦かしいて申詞也
袖ぬるゝ　○物おもひのたねと思故也
よろこひなから　○命婦のうれしく思て也
れいの事なれは　○れいの御らんしも入るましきと
思絶てましますも
女きみありつる花　○紫上也ありつる花とはなてし
こ也面白き書樣也
れいならす　○源の久しくと絶給をうらみかほなる
也
こちやと　○こちへと也
いりぬるいその　○引歌

見るめにあくは　○引歌
さうのことは　○箏の十三絃のうち斗為巾此三の緒ほそき也其ほそ緒の中の第一のほそきと云心也兄弟をも弟を中のをとりと云ことやかて此物語にあり巾の緒のせまりたるををしくたす心なる也
ゆしたまふ　○左手也
おほかたらう〳〵しう　○かしこくふむかへとりしと思給也
ほそろくせり　○長保楽の破也
いて給へしと　○源の今夜はとまり給ましきけしき也
さらはね給ね　○紫上の詞也猶もうたかはしさにかくの給也
かゝるを見すてゝ　○源の詞也
内わたりなとにて
心なけにいはけて　○いはけてとはおさなくて也かやうにおさなき人とはをしはからて只さしもなき人をかくしをき給とをしはかると也
うちにもかゝる人　○禁中にもきこしめして也
おとゝの思なけかる　○葵上の父おとゝのなけき給ふ事を御門の思しめしなけく也
さはかりの事たとらぬ　○かやうの所を分別すましき人にてはなきをと也源に教訓の御詞也
さるはすき〳〵しく　○御門の御心也
うねめ女くら人　○典侍掌侍は云に及はさる也
としいたうおいたり　○是より源内侍のすけを云也物語の狂言に云也
そなたには　○好色のかたにはをもからさる也
うへはみうちきの人　○御したゝめとて御髪にまいる人はうへにうちきを着するを云也
まかは　○はの字清濁両儀也清時は目皮也此儀可然歟目の皮の白粉なとにくろみたるさま也俗にをしろひしみなと云か如し
いみしうはつれ　○扇にてさしかくす髪のはつれ也
木たかきもりのかたを　○ぬりかくしとは泥にてぬりかくす也
かたつかたにてはいとさた過たれと　○泥にてぬりたるかたつ方に手はふるめきと云也
森の下草　○おほあらきのもりの下草おひぬれと駒もすさめすかる人もなし

もりこそ夏のと　○隙もなくしけりにけりな大あらきの森こそ夏のかけはしるけれ
女はさもをもひたらす　○此内侍好色の人たる故に何とも思はさる也
君しこは　○源に御出あれのよし也
さゝわけは　○此内侍好色の人なれは男おほくいつれもあるへき也われゆかはとかむる人のあるへきと也
またかゝる　○此源氏のやうにつれなき人をは見さると也「白髪にくろ髪ましりおふる迄またいとかゝる物は思はす
いまきこえん　○後にも又きこへん今は人めも有とて源の立給也
はし〳〵らと　○つの國のなからの橋のはし柱ふりぬる身こそかなしかりけれ
にくからぬ人故は　○にくからぬ人のきせけるぬれ衣は厭ひ難くもおもほゆるかな
つきせぬこのみこゝろ　○心の字濁れり
かのつれなき人の　○源のなくさめにと也
みまほしきは　○引歌に不可及此人にてもなくさめかたきとなり
うたてのこのみや　○源はしり給はさる也此語はうたての好色やと草子地に見るへきにや
見つけきこえては　○源をうらむる也
温明殿(ウンメイデン)
うりつくりになりやしなまし　○催馬樂山城呂の歌詞なりいかにせん〳〵われ如何にせんの詞をとれり
かくしうにありけん　○河内本文君と云ひけん昔の人もとあり花鳥に河海の説如何とあり雖然青表紙はがくじうとあり尤可然也夜聞ニ歌者宿ニ鄂州一詩也花鳥には娉婷十七八と云句にかゝりて爰には似あはさると也然とも年にはかゝはるへからす只夜うたふ物を聞く當座にてかく思出給へし尤がくじうを用へき也
あつまやを　○催馬樂その戸ひらかせの心也
をしひらひて　○同二段の詞也
れいにたかひて　○例式の女にはたかひたると也
たちぬるゝ　○内侍の歌也うたてはうたゝ也
我ひとりしも　○我身獨にてはあるましきと源の思

給也
人づまは　○人つまなれは源の立もよらしと思と也
修理大夫の通ふと也是も催馬樂のあづまやの詞に
われや人妻とあり其便ありまやとは本の屋也あま
りとは廂也そのはしにもかゝりそめにもなれじと也
人にしたかへは　○むかひにしたかへはなり
これもめつらし　○これもやうかはりて面白く思給
也
この君のいたゝまめたち　○實法たてをし給を云也
すりのかみ　○修理大夫也此内侍を忘かたくせし人
かと思す也
あなわつらはし　○源の詞也
くものふるまへは　○此人の來へきことは兼てもし
るへき物をと也
ふるう〳〵　○頭中將をひかへたり
たれとしられで
五十七八の　○音に讀也
二十のわか人
中々しるくみつけ　○源はやかて中將と知り給也
つゝむめる　○中將の歌也源の御忍ひこともあらは
るへきとなり
うへにとりきは　○紅のこぞめの衣下にきん上にと
りきはしるからんかもほころひたるなをしを上に
きは憂名はかくれあるましきと也
かくれなき　○名はかくれなき物也誰としられじと
かまへたるをうすき心也と讀給り
うらやみなき　○頭中將と相具して歸給也
うらみても　○頭中將とひきつれて歸給也
そこもあらはに　○別れての後そかなしき涙川そこ
もあらはになりぬと思へは
おもなのさまや　○面つれなき事とおほす也
あらたちし　○頭中將をこそうらむへきことなるを
と也
花鳥よせけん礒は頭の君にたとふとあり　今案あ
らたちし波は頭の君のこと也よせけん礒とは源内
侍のことなるへし連々頭君をかよはせし故又今も
如此ことのあると也
おひは中將の　○帶は直衣のきれを用也源のよりは
中將のは色濃き也花鳥源氏は宰相中將とあり誤也
此時はいまた三位の中將也末にて宰相になり給よ

し見へたり
はたても　○緒袖也或説にはたは辭也將の字也云々不用之
これまつとちつけ　○中將のかたよりかく申さるゝ也
此帶をえさらましかは　○此帶なくてはと源の思給也
なかたえは　○催馬樂の石川を引也是は花田ならねとも取て云也かことはかこつ也頭中將と內侍のすけとの中を云也
君にかく　○我中はそなたへ引とられて絕はてたると也
そうしくたす　○上へ奏聞すると下へ云ひくたすと也
物かくしは　○頭中將の詞也
なとてかさしも　○源の詞也
まことはうしや世中　○引歌未勘只世間を觀したる心也
ともすれは　○此事をこうにし給也
中將はいもうと　○葵上也

やんことなき　○是より以下うるさくてなんと云迄は草子地也
この中將はさらにをしけたれ　○誰々も源には所をゝき給へとも此中將はさもなき也
七月にそきさき　○藤壺の女御中宮に立給ふこと也
河內本十月とあり七月可然歟其故は皇太后藤温子昭宣公の御むすめ也寛平九年七月中宮に立給ふ昌泰二年七月皇太后たり此等に模して書侍るなるへし然者七月尤可然也
源氏の君宰相になり給ぬ　○これより源氏宰相中將也
みかとおりゐさせ給はん
○天文八五廿九於禁中議之仍此段不講之
このわか宮を　○藤壺の御腹の若宮冷泉院也
母宮をたに　○藤つほ中宮に立給ふ
こきでん　○弘き殿をさしをきてはと皆人の思也されと春宮の御世ちかうなりぬれはうたかひなき御位なりとをほしのとめよとそきこえさせ給ける
此段も禁裏にて講釋之時略之也
廿よねん　○廿餘年と音によむ也
餘年

まいりたまふ夜も　○中宮入内也
ましてわりなき御心には　○源也
そゝろはしき　○飛立はかりと云やうに也
つきもせぬ　○心のやみはわか宮也雲井に人をは藤つほ也
宮いとくるしと　○源に此宮の似給ふこと也
月日のひかりの　○最も源に似給を云也
花宴行事花云相壺帝を醍醐に准するに就て彼御宇花宴之行事延喜十七年三月六日常寧殿花宴詩題春夜翫櫻花延長四年二月十七日清涼殿花宴詩題櫻繁春日斜ニ（此例此物語ニ當レリ）各有探韵作文御遊のこと此兩度之例には不可慮
此物語の花宴も宴は清涼殿に還御ありて被行と可心得事延喜の常寧殿の花宴も宴は清涼殿にて開かれし也天暦四年三月十日仁壽殿花宴の題（花樹暮深雲）是も宴は清涼殿にてあり此物語も南殿櫻御らんありて清涼殿へ歸らせ給て宴を行るゝと可心得也○河拾遺天徳三年三月内裏に花宴せさせ給けるに九條右大臣「櫻花こよいかさしにさしなからかくてちとせの春をこそへめ

花宴　源氏十九歳の春宮は宰相中將正三位也巻名南殿櫻の宴事也則花宴也唐土には花と云は牡丹日本には花と云は櫻也櫻宴花宴差別あるへからす類聚國史卅一云弘仁三年二月辛丑幸神泉苑覽花樹命文人賦詩賜綿有差花宴之節始於此花宴例諸抄にくわしくしるさる此物語は彼是の例を引合せてかけると見へ侍る但延長四年の例に相叶へし
きさらきの廿日　○延長四年二月十七日宴此物語の准據に相當れり醍醐御門延長は御代の末也今此花宴も桐壺御代の末のこと也二月廿餘日も旁以延長に叶へり
后春宮　○后は藤壺春宮は朱雀院也
左右にして　○左右音に讀也南殿の東西也東宮は左東なるへし后は右西なるへし花鳥延喜の例を引て清涼殿にかへらせ給てと心得へしと云々此義可然我うちみたれたる宴は南殿にては其たよりありたきにや
こきてんの女御　○藤壺に立后をこされ給を恨給て同座もなき也去（サレ）ともけふは參給也
日いとよくはれて　○時節の景氣又其頃の宮中のさ

まを思やりて見るへき也末代零落の躰にて見れは
作者の筆の粉骨もむなしかるへし
その道のは　○文學にたつさはる人々のこと也花先第一ノ儒者奉レテ御献レ題次書韻字盛ニ中椀ニ置ニ庭中文臺上ニ近衛次將先探ニ御料韻字ニ二置ニ宮盖ニ昇白御前階献之次王卿堪属文者文人等各進久臺以探一字見之奏官姓名及所探字也今案探韻は各分一詩悉ク韻字替ル也故懐紙端作春日賦春夜翫
たんいん　○韻の字を一字つゝさくり得て詩を作也
花鳥に見へたり
宰相中將春といふも　○韻の字を探えては各そのよしを申也官姓名何の字を給はるとなのる也今日の花宴に春字をさくり得給こと自然の幸也こはづかひ容儀心つかひあるへきことと見へたり
つきに頭中將　○是もそのみおとり給はさるよし也
さての人々は　○源頭中將の外の人々を云也
はなじろめる　○臆したるさま也
やすき事なれと　○詩の絶句一首作へきこといとやすき事なれと時宜にしあつかひたる也今案あなかち詩の事に非すとも立出て探り給ける時の進退を云にや
年老たるはかせ　○物なれたる功者の博士は何とも思はさる也何ことにも稽古を積へきを教也
かくごもなとは　○延長四年の例を用てかけると見へたれとも此度は樂なしされともてとをとりくはへて云也花凡花宴には御遊はかりにて舞樂はなし但天暦三二十一日二條院陽成花宴同月十二日仁壽殿花宴各有舞樂
春のうくひすさへつる　○天暦の例なるへし春鶯囀花宴にたよりあり一名は天長寶壽樂と云々かた〳〵たよりある者也
源氏の御もみちの賀　○紅葉の賀の字こゝに見へたり
春宮かさし給はせて　○春宮は朱雀院也源氏の舞を所望し給也此舞何の舞とも見へすもし春鶯囀の樂を舞給歟と云々
左のおとゝ　○葵上にふさはしからぬをうらむる心あれとさやうの心をも打わすれ給也
頭中將いつらおそしと　○紅葉の賀の時の源のかたかたのあいてなれは何とてをそきそとある也

柳花苑といふまひ　○柳花苑上古此舞あり今は斷絶也

これは今すこし過して　○源よりは念頃に舞給也

かゝる事もやと　○かやうの御所望なとありてはとて内々稽古をして用意もありしにやと也

御りたまはりていとめつらしき　○花鳥儀可然下可賜御衣こと延喜延長の例と云々花宴の日殿上の舞又勅祿を給ことなと珍敷例也

源氏の君の御をは　○をはとは御詩をはと云心也

文なとかうするにも　○花詩の披講の時庭中に所立之文臺をかきて御前に立て文人とも階下に進て講頌する也

かうやうの　○草子地也桐壺帝は何ことをも源氏の君を光にし給よし也

中宮の御めのとまる　○中宮は藤壺也其宮の女御かやうのたくいなき人をはにくみはて給そと也

わかかうおもふも　○又かやうに我おほしめすもあやしきと也

をほかたに　○藤壺歌也ちと心得難歌也古今歌「露ならぬ心を花にをきそめて風吹ことに物思ひそつく心は花はさくをもちるをもしらすかほにて有へきを露のことく花の上に心ををく故によしなき物思ひのあると也此歌にては可心得今の源のすかたのすくれたるによりて心にかゝれると也大方ならましかは源のうへを樣々思事もあるましと也

御心のうちなりけん事　○かやうの御歌は人にかたり給へきことならねは御心一にてあるへき物をとかたらふへき　○王命婦か局なとなるへし也草子地也

猶あらじに　○中々と思なから也猶あらしとことなしぐさに云ふ事を聞しれらくはすくなかりけり萬第七黙無不有

こき殿の　○相壺のすちむかひ也

ほそとのにたちより給へれは三の口あきたり　○ほそ殿は廊也

三のくちあきたり　○廊の第三の口也

かやうにと世の中のあやまちは　○思事にをちいりたる也世間人のあやまちは如此故なるへし

こなさまにくる物か　○此かの字淸てよむ也されと疑の歟の字には非す此詞與にも見へたり

ふかき夜の　○かやうに思懸さるはおほろけならぬ契にてはなきかと也天文八年三月六日の講に入月心あるへし愚案此朧月夜の行衛も知らぬなこりは只入月のと思なさるなるへし三月廿日の月入と云に不審の由也

まろはみな人に　○源の自稱には非す人にゆるされたるとは計略にの給也此人にすまはせじのため也

この君と　○さては源にてましますよと思す也

わひしとをもへる物から　○女のさま也

なをなのり　○たまへ源の詞也

いかてかきこゆへき　○向後何として申通すへきそと也

うき身世に　○朧月夜の歌也もし此儘にてはかなくなりなは草の原まても尋給へきことなるに名のりせすはたれとしらぬとて問すしてをかるへきにやとかこちたるうた也

ことはりやきこえたかへたるもじかなとて　○源の詞也是は理り也しか也と也げにさにて有るそと也河海說尤可然花鳥にはしか〳〵の事と云々如何

いつれそと　○此人は弘徽殿方の人と見へたれは右大臣と源とはよからぬ中なれば尋んにつけてさはかしき事も有へきと也名乘給はぬとて問すつへきにてはなきと陳したる也あしく心え給よと也こ篠か原は小篠原也河海にをさゝと有也但猶小篠歟源と右大臣との中か風もはけしく露もたまらぬ如くなると也

わつらはしく　○そなたのわつらはしく思しめさぬことならはと也

うへのをつほね　○弘徽殿へ也

あふきはかりを　○兩方取かへて也源の出給ぬる也

きりつほには　○昨日の花宴の後朝なれは人々おほき也

おとろきたるも　○漸ね覺したる也

そちの宮　○螢の兵部卿宮の事なるへし

頭中將のすさめぬ　○帚木巻に右のおとゝのいたはりかしつき給すみかは此君も物うくしてとありし人也

六は春宮に　○此人也

中々それならましかは　○箋曰ぬしある人ならは中々よかるへし六は春宮へ參給へき人におはすれは

それならはきすのつきたることと恐怖し玉ふ也
さてたえなんとは　○女のさま也
かのわたりのありさま　○河海説葵上のあたりのことと云々尤可然右大臣かたは女方聊備なると也左大臣かたは如此女方かろ〳〵しきことのなきをありかたく思くらへ給へる也花鳥は中宮の御ことと云々藤壺の御ことは末にありしかれは葵上の邊の事と見る宜しき歟
その日は後えん　○後朝の御遊也花後宴と云名目は男蹈歌の後二三ヶ月に弓の結あることを云へりそれを花宴にとりなしたる也云々
さうのこと　○源の所作し給也
昨日の事　○昨日は外様也内々は猶おもしろしと也
ふちつほはあかつきに　○上局にまいり給也
かのありあけ　○物見に右大臣の女たちのまいり給しか歸給へしと思てうかゝはせ給ふ也
おまへよりまかて給ける　○源の退出に逢たてまつりて惟光良清か申詞也
右中辨　○朧月夜の兄弟也
いかにして　○五六君をいつれとしりさためたきと也
ちゝをとゝ　○父おとゝの聞給てこと〳〵しくし給へきも如何と也
また人のありさま　○様々思案し給也
ひめ君いかに　○紫上のこと也上の詞につく〳〵となかめふし給とあるより姫君のことをも思出し給ふなるへし
かのしるしのあふき　○とりかはし玉へたる扇也
さくらかさねにて　○檜扇也抄に見たり他本三重かさねとあり青表紙三重の字なし　しるしの扇は櫻の三重かさね花云今案櫻薄様面白裏蘇芳也手習巻に髪は五重の扇をひろけたるやう也と云々清少納言枕草なまめかしきもの三重かさねの扇五重に成ぬれはあまりあつくて云々
こきかたに　○紫の雲をかきたるなるへし
草のはらをは　○さきの歌也
世にしらぬ　○源氏の中にも秀逸也五文字殊更妙也云々花鳥にさま〳〵あり其體面白し
おほいとのにも　○葵上也
わか君　○紫上也

あかぬ所なう　○不足もなく也
おとこの御をしへ　○草子地也我御心のまゝにをしへなさんとある詞を受てさやうならば男かたなとあまり人なれたるやうにもやあるへきと也
れいのさくちをしう　○前にはつよく源をしたひ給こと前の巻にも見へたり
おほいとのには　○葵上也
やはらかにぬる夜は　○葵上の心もとけ給はぬを思す也花鳥おやさくるつまとあるを思よせてかきたると云々さまては有ましきかと云々
一日のけうありし　○花宴のこと也
めいわうの御世四代　○河海に見へたり但此物語の上にては只年久しきよしに見侍へし代の数はかゝはるへからすと云々　明王御代四代の事河云摸周文武成康ニ云々陽成光孝宇多醍醐たるへき歟貞信公元慶四年誕生なれは延長迄已四代也于時左大臣也最是可擬也
ふみともきやうさく　○詩ともをほめたる也きやうさくの字は奥に注景迹（コヽロハセ）也　私勘日本紀天武紀下云景迹行能景迹をはこゝろはせとよめり然は詩のこころはせありておもしろきを云成へし人さまをほめたる所にもあまた所にかけりそれもこゝろはせありて可然人を云り
みち／＼のものゝ上手　○源のよくしりてめしいたし給故と也
おきなもほと／＼　○別勘ほと／＼は殆（ホトント）也まさにと云義也
ことにとゝのへ　○源の詞也さもなきよし也
そしうなるものゝしとも　○そしうは奸の字かたむ心也公方の御用なとには出つかへすして隠れ居る者の中に物の上手なとあるをはめし出しはんへると也
柳花苑　○頭中将の舞給しを源のいま褒美し給也
ましてさかゆく春に　○おきなもほと／＼舞いてぬへきとありし程にとてものことにおとゝの立出給たらは桐壺の御代のめいほくなるへき物をと也
辨中将　○両人也葵上の兄弟也
春宮には　○六君まいり給へきと也
たこともたつねん　○源也
ゆるし給はぬあたり　○弘きてんあたりなれは也

弓のけちに　○今年右大臣の亭にて踏歌の後宴ある
也　弓結花二條大臣亭にて小弓あそひ有て其結に
藤の花の宴有河踏歌後宴弓結延喜七年二月御記云
踏掌所達仕踏歌後宴云々花藤宴事天曆三年飛香
舍藤花宴有興云々大やけに准して出私亭有此事
ほかのちりなんこや　○時節面白き書さま也本歌後
そさかましと敎へたるをもて書たる詞也花鳥に見
たり古今「見る人もなき山里の櫻花外の散なん後
そさかましと云へるは花に云ひ敎へたる心也雲な
かくしそと云をいさむる嶺と云へる此語勢也花説
宮たちの　○弘き殿の御腹の宮達也源の姉妹也
たはせねば　○源のこと也
我やどの　○をごりたる歌也我宿の花のなをさりな
　らぬよしなり
したりかほなりや　○我宿の花をほめたる樣なるを
　わらはせ給也
女みこたち　○源の兄弟のこと也右大臣わたりには
　そは〳〵しき間ついてがてらよそ〳〵しくなし給
　そと御敎訓ある也
さくらのからのきの　○花鳥に見へたりうすき唐あ
や也櫻のからのきは面白き唐の綺に蘇芳の裏を付
　る也御幸にも有此事
しりいとなかくひけり　○直衣布袴と云出立也
西宮云上藤着直衣下着下襲隨便不常事云々今案袍
　に下襲を重ぬるをは布袴と云上下用之事也直衣布
　袴は依時依人こと也帶は丸鞆也晴時は着蒔繪太刀
　云々
みな人はうへのきぬ　○皆な人は袍を着也
あざれたる　○しどけなき樣也
花のにほひと　○草子地也
ゑいなやめるさまに　○そら醉也
たうかのをり　○けふはうち〳〵なることなるを餘
　りにこと〳〵しき有樣と也
ふちつほわたりを　○前にかのわたりのありさまと
　ありしは葵上の邊と見るよき也爰にて藤壺渡ワタりと
　云出したれは也
なやましきに　○源の詞也
かけにもかくさせ　○花鳥說面白し但こゝはたゝひ
　め宮達をかこちたる儀猶可然歟云々
あなわつらはし　○此にさふらふ女房の云也しもさ

まの物こそ親類もとめはすれと也
そらたき物　○此殿のありさまを云也空たき物のさまもけしからぬと也すゝ虫の巻にも見ゆ悉皆人の用意をかける也
この戸くち　○宮達の物見給所也
さしもあるましき　○此おほろ月夜のこと也
あふきをとられて　○催馬樂石川の歌いし川のこまうさに帯をとられてと有を扇とうたひかへ給ふ聞とかむる人かあらんすらんと思ひての給て也
あやしくもさまかへたる　○かやうに云は一向に此扇のことをばしらぬ人なるへしと也
いらへはせて　○此人なるへしと推し給也
あつさ弓　○今日は弓の結なれは尤縁あり一日の戸口を云ふ也
なにゆへかと　○何故にまとふそと也
えしのはぬ　○さては源の我をしり給と朧月夜の思てえしのひ給はぬなり
心いる　○ふかく心にいりたることならはたつねまとはさらましと也前の歌のまとふかなにかゝりたる返歌也朧月夜は天性歌よみ也　頃花此三月廿日餘なればやう〳〵弓張月になる頃也前の歌のまとふ哉と云詞にあたりての給也心に入らぬ故にこそあらめと也　明圓融院の御集弓結の頃宮にわたらせ給て「弓はりの山の端さして入時はあやしく物そかなしかりける」御返し宮「里ならて弓はりなから入月は山の端にたに立とまらなん
たゝそれなり　○ありし朧月夜の聲也
いとうれしき物から　○花鳥說面白し但師說此結語は返歌をし給ことはうれしくはあれとも女の身にとりてはちとかろ〳〵しと思し召たる也是源氏君の性也いつくにもこの心あり　凡此物語の中にも此巻すくれたると也俊成卿六百番歌合の判にも紫式部は歌よみの程よりも物書筆は殊勝の上花宴の巻はことに艶なる物也と云々
きやうさく　○景迹行能　日本紀天武紀下十一年八月癸未

寫本三光院殿實枝御筆今川氏眞有之者也
天正十八二十六一校了
天正十七己巳年十二月十五日
於越後國石內極樂寺寫之

細流卷四　葵　賢木

花鳥云舊説に花宴巻と此巻との年紀同前と云義あり以外の相違也仍六ヶ條の疑を擧らる

一疑云二條大臣の藤宴は三月下旬也此巻の齋院の御禊は四月也兩月の間幾はくの日數も無之然るに朱雀院受禪冷泉院立坊源氏君任大將齋院齋宮の卜定等條々の事何の間に可被行哉

二疑云源氏任大將事は若葉巻に廿に一あまりて宰相にて大將兼給云々然れは花宴巻は十九歳也此巻と同時と云へきに非す

三疑云花宴巻は紫上十二歳也葵巻同年ならは新枕の事不審醫書にも女子十四にして天癸至といへり

四疑云花宴巻は冷泉院二歳也澪標巻に十一歳御元服と見たり二歳の不足有之

五疑云齋院の御禊は兩度也初齋院に入玉はんとて御禊あり又紫野の野宮に入玉はんとて御禊あり此巻の御禊は二度の御禊也其證多之然は初度の禊同月に可有之哉其例無之也

六疑云伊勢齋宮も一代に一度立替らせ給ふ秋好中宮齋宮に立給ふ事は朱雀院受禪の後の事也されは此巻に齋宮は去年内へまいり給へかりしをさま〳〵さはることありて此秋入給ふ云々朱雀院の御ゆつりを受給ふことは葵巻より以前のことと知へし此六ヶ條の疑を以て源氏任大將は廿一歳のことと定むへきなり云々

葵

巻名はかなしや人のかさせるあふひゆへと源内侍のよめる也賀茂祭の事を詮とする故也源氏二十一歳より二十二歳の正月までのことあり「私云二十一歳も四月までの義闕せり」花宴は十九の年の四月までのことあり二十歳の年のこと物語の面になき也花鳥に六ヶ條の疑あり十九歳の四月以後に六ヶ條の事有へし

源廿一歳よりの事也花宴巻と此巻との間に朱雀院に御位を讓給ひて御即位大嘗會等の事あるへし齋宮と定齋院御禊等まて可勘知なり云々

世中かはりて　○桐つほの帝位をさらせ給ふ事也桐壺御脱屣朱雀御代替なれは大后任意たる政なれは源氏失時也

よろつものうく　○朱雀院の代始なれはなり源の父

帝の御代にてなき故に萬つ御心におほすやうにも
なきことゞもなり
御身のやんことなきも　○源の大將になり給ふ事也
顯職なる故にかろ〳〵しき忍ひありきなともなき
となり此詞より大將と見へたり　榮花物語後二條
關白師通承保四三廿七任參議同四月三日兼左大將
こゝもかしこも　○六條御息所なと也
猶われにつれなき人　○藤つほ也われを思人を思は
ぬ餘にや我思人のわれを思はぬ
いまはまして　○御脫屣ありて御いとま有故にたゞ
人のやうに藤壺に添おはします故に御隙なきと也
いまきさきは　○弘徽殿也后に立給ふと見ゆかやう
に藤壺と一所にましますを心やましくて內にのみ
ましますなり　花云朱雀院即位の故に弘徽殿女御
を皇太后と申なり
うちにのみ　○箋云當代朱雀院の禁中也
たちならふ人なう　○藤壺は双ふ人も無てましします
也
おりふしにたしかひては　○桐壺上皇の御事也
いまの御ありさまも　○院中を云也

たゞ春宮をそ　○冷泉院立坊の事前に有へし源氏廿
歲の事前に有へき也花冷泉院を東宮と申こそてゝ
に始て見へたり立坊は受禪後の事なるへし
御うしろみのなきを　○藤つほはかたはらいたしと
覺すなり
大將の君に　○此時參議の大將也若菜卷に廿に一あ
まりて大將兼玉ふとあり參議にて大將を兼たる例
河海に委見へたり榮花物語卅九にも大將には三位
中將宰相にならせ玉て大將かけさせ玉つ宰相の大
將と聞えさするいとめてたくいまめかしとあり私
云後二條關白師通公事也花云源氏任大將の事こゝ
に始て見たり
まことやかの六條の御息所　○物語の作者聞及たる
樣に書出す也代の始には必齋宮かはり玉ふ故なり
御むすめ　○秋好中宮也前坊の御女六條御息所の御
腹也
前坊　○春宮坊を辭退したる人を前坊と云也小一條
院の如也
さい宮にゐ給にしかは　○秋好中宮なり去年朱雀院
の代の始に卜定して齋宮を定められて今年の秋野
宮に入玉ひ明年くたり給へき也と見るへし卜定よ

り三年めに下り給へき也群行の事有へし
大將の御心はへも　○御息所を源のすさめ玉ふ也
くたりやしなまし　○源の御心もおろそかなれは此
齋宮に具して下りやしなましとおほす也
院にもかゝることなんと　○父御門源に敎訓ある也
こ宮の　○前坊は桐壺帝の御弟也
齋宮をもこのみこたち　○齋宮の御事をも我子の如
くにおほしめす也
わか御心ちにも　○源の心にも也
人のためはちかましき　○御門の御詞也親心なり葵
上に六條御息所の物の氣になり玉ひしことに叶へ
り
けしからぬ心の　○藤つほの御事をおほろけにても
聞食てはと也
またあらはれては　○かやうに院にもかくれなくし
ろしめしたることなから未た忍ひ玉ふよし也
女もにけなき御とし　○御息所は源に八の兄也此時
御息所は廿九なるへし源は廿一也此次の年御息所
卅にていまゝ内を見玉ふとありかやうに年のました
る故に御息所の方よりは斟酌の心有と也

それにしたかひたる　○源の心を云御息所の御けし
きに隨ふやうにをもてにたてゝもてなし玉ふを御
息所はうらめしく思玉ふ也
あさかほのひめ君　○桃園の式部卿の御女也つゐに
源に隨はすよき程にして始終ありし人也御息所の
如くにてはとおほす故也槿の名は箒木の巻に人の
かたりし時分よりのこと也
あまりつゝまぬ御けしき　○葵上の御方にはかやう
のことをも源の深くつゝみ玉はさる故にさのみえ
んし玉はさると也
心くるしきさま　○懐姙也葵上の事
おほしおこたるとは　○御息所へのとたへ有さま也
面白き書さまなり
その頃齋院　○此齋院誰ともなし自然におり玉也
女三宮　○弘徽殿の御腹花宴に御裳きのことありし
人なるへし榊に院の御服にており玉ふ
すちことになり給ふ　○齋院に立給ふ事神事なとに
つきて心つきなしと也別に立玉ふ人なき故に立給
ふ也
人からと見えたりし　○何事も人から也

ごけいの日は　〔斎院を卜定して二度の禊あり是は
第二度めの禊と見へたり花鳥に委
おぼえことに　○人をえり出す也
えたかさねの色　○かやうのはれの日は皆染装束と
て下襲表の袴を色々に染て用る也花御禊の日の勅
使公卿は染装束を着す馬には唐鞍或は和鞍を用杏
葉をつくる也
とりわきたるせんじにて　○大將供奉する例花鳥に
見えたり花國史云貞觀三四月十二日丙辰賀茂齋内
親王臨鴨水修禊是日便入紫野齋院勅大納言正三位
兼行右近大將源朝臣定監禊事云々齋院御禊に大將
供奉の例也
大殿には　○葵上也
大宮　○葵上の母宮也
日たけゆきて　○俄なる故に見物の人も居定たるな
るへし
さう〴〵の人なき　○雜人也
これはさらにさやうに　○御息所方の人の云也
わかき物とも　○人々沈醉したる故に制止にかゝは
らさる也

斎宮の御はゝ御息所　○草子地の詞に云也
つれなしつくれと　○人にしられしとすれとも也
人たまひの　○出事也
さないはせそ　○やうないはせそなと云也
その御かたの人も　○御息所とは大涯しれとも今と
なりてはしらぬかほをつくる也俄なる喧嘩のさま
あり〳〵とかける妙也
かゝるやつれを　○御息所の心也
えちなともみなをしおられて　○牛なとはつしたる
なり
ことなりぬと　○はや斎宮の行啓なると也
さゝのくまにたに　○引歌かけをたに見んを取也
えりめにとゝめ給も　○源のそれとしりてめとゞめ
玉もある也
大殿のは　○葵上なり
御ともの人々　○源の供奉の人此葵上の御まへをは
禮を致して過るさまなりいよ〳〵御息所は口惜く
見玉なり
かけをのみ　○御息所の御歌也今日のまつりの縁也
大將のかりのすいしん　○花鳥にしるせる只事にこ

とを加へて書なるへし
右近の藏人のそう　○軒端の荻の兄弟なり
つほさうそく　○見物の女房とも也
けふはことはりにくちうちすけみ　○老女なとの見物に出たるはよの常はにくき物なるを今日はことはりと見えたり
かみきこめたる　○是もつほ裝束のなり也
てをつくりてひたいにあて　○花鳥司馬相如をひけり誤也司馬温公か事也宋朝通騒なるへし司馬光赴闕衛士以手加額曰此司馬相公也云々　河大鏡云一條院春日行幸に御輿に大宮そひのらせ給ふに田舍世界の民百姓まて神佛のやうに額に手を合ておかみ奉りけり云々
心のかきりつくし　○皆心つかひする也
式部卿　○桃園なり
神なとはめもこそ　○源をいたはりての給なり紅葉賀に弘き殿の詞はそねみ惡み給ふ方よりの給ふなり心相替れり
姫君は　○槿のひめ君なり
いとちかくて　○貞女のおもむき見えたり源の年來念頃に聞へ給に姫君の御心はとまりけるなるへし源の御ありさまの目出たさはかうしもいかてとまて見へ給を見給ひて　はなのめならん人なりともかやうに念頃なるにはなびきもすへきをまして源にはと云心なりされともけちかくとはおほさぬと也
まつりの日は　○酉の日なり
おほ殿　○葵上なり
かの御車の所あらそひ　○源に委く人の語なり
れもりかにおはする　○葵上かたのことなり心よりをこりてかやうには有ましきとなり然れとも御息所のあたりへはむつ〳〵とも無りし故にさるをきてに人々も隨ひてかやうのことも出來ぬるとなり
齋宮のまたもとの宮に　○卜定ありて左衛門のつかさに入玉へきをさはることありてまたもとの六條京極の宮にわはしますと也　花延喜式云天皇即位者定伊勢太神宮之齋王仍簡内親王未嫁者卜之若無内親王者依世次簡定諸女王卜之訖即遣勅使於彼家告示事由神祇祐以上一人率僚下隨勅使共向卜部解除神部以木綿着賢木立殿四面及内外門今按秋好中

宮は去年卜定ありて未た諸司へ入玉はす本の宮にまし〳〵て神齋し給ふを云也榊の葉はかりとは是を云なり

さか木の葉はかりに　○神事とて對面なきなり河榊は日本紀に眞賢木とも眞坂樹とも書り天香久山の本緣より神の緣木とす榊の字は日本の作字なり龍眼木と書也云々

かたみにそは〳〵しからて　○只今對面なきをいへり源の心なり

けふは二條院にはなれおはして　○源也

こよみのはかせ　○推古天皇十二年甲子正月戊午朔始用暦

まつ女房いてねとて　○今日は源も女車にて出給ふへきとなり

うきもんのうへのはかま　○童女の取つくろふ時着する由花鳥に見えたり河云浮線綾の袴なりわらはの袴なり若菜巻にもあり云々花西宮云女親王對面時總角者着汗衫半臂下襲表袴玉帶等又齋宮齋院童女者總角靑麴塵、汗衫半臂下襲表袴白柳帶今按童女は晴の時は打袴の上に表袴をきるうき文は窠に霰や世の常には表袴を不着云々

君の御くしはわれそかんとて　○紫上のをは源のそき給ふなり

はかりなき　○祝言なり河海説さも侍るへし

ちひろとも　○みちひるしほとは源の心のさためなきをいへり紫上やう〳〵おとなひたる心なり花うつほ十一髮のうつくしきをみるをつくりつけたるやうなり云々

けふも所もなく　○今日も物見車の多き由なり

むまはのおとゝ　○一條なり左近馬場は一條西洞院右近馬場は一條大宮なり花おとゞはおとゝやと云物なり乙殿屋とて左右の馬場にあり五月の騎射の時中少將の着座する所なり賀茂祭大內の時は北陣はてゝ一條を東へとをるに依て左近の乙殿の程をわたるなり

いかてえ給つる所　○源の返答なり

扇のつまをおりて　○檜扇の端を折たるにや

はかなしや　○葵は逢と云心ありあふひとよめり神の許しを待けるとは今日の葵の便をこそ期しつるに人に同車し玉ふ故にかひなしとなり

しめのうちには　○引歌未たなし心は我身に遙かなる由なり
かさしける　○源の一度かさしゝもくやしきと也八十氏人とは多くの人になひきやすなる物をとなり結句のなへてあふひを此あふひあをいと讀へし逢日とは讀へからす其故は古今物名に葵をあふ日のまれにとかくして讀るを葵を心にこめて讀時逢日とよめは物名によみたる紛骨なくなるへし　花後撰第四賀茂祭の日物見侍りける女の車にいひ入ける「行歸る八十氏人の玉かつらかけてそ頼むあふひてふ名を返し「木綿たすきかけてもいふなあた人のあふひてふ名はみそきにそせし人たのめなる草の名なるへし云々
女はつかしと　○源のちとにく〳〵との給故になり
くやしくも　○源内侍か歌なり
すたれをたに　○榮花物語彈正宮和泉式部とひとつ車にて祭見給ふ式部か方の簾おろして紫の紙の物忌を付たり 花今按前の簾をはあけたるなるへしそれは車の中に几丁の帷をかくるに依て不苦なり
一日の御ありさまの　○是は世界の人の思なり源内侍には非す
かやうにいとおもなからぬ　○源の心なり源内侍はおもなき人なりかやうのおもなき人ならすは今源の人と同車し給と知なからは中かはす事も有ましきなりいとましからすとはねほせと是も又興有ことゝなり
御息所は　○是より六條御息所をいへり
こよなきに　○事の外になり
ねもひくたす　○河海は思下すとあり朽(クタ)すにてもよき歟なり
つりするあまの　○引歌よくかなへり伊勢へ下向の事心一つに定めかね玉由なり
いせの海に釣する海士のうけなれや心一つを定兼つる 河うけは釣針の糸に杉なとを付て針の沈もはてす魚のくひやすきなり
數ならぬ身を見まうく　○源よりの詞なり
さためかね給へる　○こゝも釣するあまの引歌の心あり
みそき川　○河大嘗會御禊をは豊の御禊と云とよはゆたかなる心なり萬葉に禊身とかけり

さはいへとやんことなき　○平生念頭ならさりし源
　も只今はことに思聞へ給ふと也
めつらしきてとさへ　○懐姙なり
ものゝけいきすたま　○河海 遊仙窟窮鬼（イキスダマ）故調人注人
夢魂與鬼通言我心中正憶此十娘忽即夢見惜忽此鬼
作夢誑我故罵之曰窮鬼也　韓退之の窮鬼は心かは
れる也
二條の君　○紫上かくおさなき程を人はしらてかく
疑となり
すきにける御めのと　○自然葵上の御めのとのうち
にうらみなとありてさきたてたる靈もやなといふ
也
むね〳〵し　○宗の字なり
たゝつく〳〵とねをのみ　○物の氣の躰也
院よりも　○桐壺帝也
御息所は　○靈になる心見へたり
かの殿にはさまても　○人の恨むへき所をかへりみ
さるあしきこと也總して權門の方には不肖の方の
恨あるをは知さる物なりかやうの所を心を付へし
となり

かゝる御物おもひにはかにわたり給　○御息所也神
　事なる故に他所にうつりて修法なとし給なり
なやみ給人の　○葵上の事也
みつからはさしも　○源の詞なり見すくさんとてな
　んと云にて句を切て心得へし
うちとけぬ朝ほらけ　○御息所より出給朝なり
猶ふりはなれなんことは　○御息所の心
やんことなきかたに　○葵上の懐姙の事なり
御ふみはかりそ　○源を待給へはなり
日ころすこし　○文の詞なり葵上のわつらひ給ふ由
　なり
れいのことつけ　○例式のかこつけことと思給ふな
　り
袖ぬるゝ　○御息所の歌此物語第一の歌と云々心は
　只我身からの物思と也
山の井の水も　○くやしくそ汲初てける淺けれは袖
　のみぬるゝ山の井の水」心は只あさき契となり
御手は猶こゝら　○いつくまても然るへき人となり
いかにそやもある世かな　○かやうに何くもたらい
たる人の聊打憑むへき所のなき人と也とにかくに

世中なりと也
袖のみぬるゝや　○山の井の水なとある詞によせたり此歌を見ては伊勢物語にみのもかさも取あへすしとゝにぬれてなと云やうにしても行へきことゝなり花云戀ちは泥をひちと云に就たる詞なりさて袖ぬるゝこともいへり田子もいやしき人也
あさみにや　○源の歌也贈答の本となり身もそほつを花鳥の説いかゝ
おほろけ　○大かたのことならは只今參りても申へきをさもなきにて葵上のよく〳〵煩ひ給ふ程をは推量有へきこととなり
故ちゝおとゝの　○河海は誤歟花鳥可然歟　具平親王宇治の關白靈氣に出給事榮花物語第十二にあり
おほしつゝくれは　○さもやと思事ともある也
身ひとつのうきなけき　○宮す所のなけきなり
うちまとろみ給ふ　○宮す所のまとろみ給ふ時はかやうの夢を見給ふとなり姫君は葵上也
はかなきことのおりに人のおもひけち句なき物にもてなす
すこしもうちまとろみ給ふ　○宮す所のまとろみ給時はかやうの夢も見給となり姫君は葵上なり
いかき　○辛なりいかめしきなり
身をすてゝ　○身を捨ていにやしにけん思より外なる物は心なりけり
うつし心ならす　○河現心万現人日本紀　梅花木つたひちらす鶯のうつし心も我思はなくに
なたゝしう　○名の立也
ひたすらよになくなりて　○死靈は常の事なり
すへてつれなき人に　○源なり
おもふも物をなり　○思はしと思も物を思ふなり思はしとたに思はしやなそ
さい宮はこそうちに　○未た此本の宮にましますも也
諸司に入給はんこと也大内のうちに左衛門のつかさに入給へきを云也河九月神宮祭禮の月也延喜式云凡齋王入太神宮之時自九月一日迄卅日云々
こたひの御はらへ　○野宮へ入さまにも兩度御禊有へきなり花鳥に見たり花齋宮諸司に入給はんとても又野宮に入んとても東川にて御禊あり是を二度の禊と云なり但群行の時の御禊は西川にてある也
まさるかたの　○葵上なり

またさるへき　○葵上の御産の事なり
大將にきこゆへき　○葵上の源に物をの給なり
むけにかきりのさま　○遺言もあるへき歟とて也
おとゝも宮も　○宮は母宮なり
法花經　○敏達天皇六年渡本朝羅什三藏譯又推古天皇御時聖徳太子迎持法華經又遣渡小野妹子
しろき御そ　○産婦のいてたち也
かうてこそらうたけに　○葵上のかく打とけたる有さまをは初めて見給也
なみたのこほるゝさま　○葵上に靈のかはりて源氏を打まもり涙をこほすなり
あまりいたうなきたまへは　○葵上なり
心くるしきおやたち　○源の心也
又かく見給につけて　○源を見給につけて也
なにこともいとかう　○源の詞なり後世までも夫婦の道は絶ましきとなり
ふかき契りある　○親子の契は一世と云ならはしたれとも今はなくさめての給なり
いてあらすや　○葵上の詞なり御息所の靈の入かはりて云なり

物おもふ人のたましゐは　○物おもへは澤のほたるも我身よりあこかれにける玉かとそ見る
なけきわひ　○玉の出ぬるを結ひとむることあれは也結ひとゝめよとはうかるゝ心を本心に返し給へとかこつ心也「歎侘出にし玉の有ならん夜深く見へは玉結ひせよ吉備公誦文「玉はみつぬしはたれともしらねとも結ひとゝめつしたかへのつま
むまれ給ひぬ　○夕霧の誕生なり
のちの事　○産後の事なり
山の座主　○義眞和尚天長元年六月廿二日補天台座主號修禪大師
けうありめつらしき　○誕生の與ありめつらしきに皆人心をいれ侍なるへし
うふやしなひ　○三ケ夜五ケ夜なとのことなるへし
禮記內則篇云國君　世子生時告ニ于君ニ一接（ウフヤシナヒ）以ニ大牢一註云　接讀爲ニ捷一々勝也謂下食ニ其母一使中補レテ虚ヲ强上レ氣ヲ也又左傳桓公六年傳曰九月丁卯子同生ル以ニ太子生之禮一擧レテ之接以ニ大牢一
おとこにてさへ　○こゝにて男にてと書たる筆法力いりて面白しと云々

たひらかにもはたさ　○此はたの字「郭公なく〳〵聲き
けはあちきなくぬし定まらぬ戀せらるはたさいへ
るに同し
御そなともたゝけしのかに　○邪氣の護摩には芥子
をたくなり其香御息所の衣にとまる也
御ゆする　○髮あらふことなり
いとゝ御心かはりも　○皆御息所の心ちの事なり
あさましかりしほとのとはすかたり　○葵上に靈の
入かはりて云しこととも也
人の御ため　○源の心なり
御ふみはかりそ　○御息所へ御文はかりあるなり
いたうわつらひ給ひし人の　○此程も源のよそへ御
ありきもなきなり
ことあひたる心ちして　○只今若君誕生ありて葵上
は毎事相應したるを云り
さはかりいみしかりし　○大事の靈氣のあけくなれ
はきと平癒なきと也
春宮にいみしう　○冷泉院に能似通ひ玉ふなり
けふなんうひたちし侍を　○參內あるなり
いりて物なときこえ給し　○葵上に對面あるなり

御ゆまいれなとさへ　○源のゝ玉なりかやうのこと
はいつ習ひ玉そと人々思となり
とし頃なにごとを　○源の後悔なり不足もなき人と
なり
院なとにもまいりて　○源の詞なり
宮のつとおはするに　○母宮なり
れいのおまし所にこそ　○と讀切へし
あまりわかく　○母宮のあまりにおさなき人のやう
にあつかひ玉を云なり
つねよりはめとゝめて　○葵上の源に目を留めて見
出し給ふなり
秋のつかさめし　○八月なり諸司を任するを京官除
目と云除目は天武四年三月に始る云々
いたはりのそみ給　○人々つかさの所望ともなり
みなことやふれたる　○何事も打さましたる如くな
り
殿のうちの人　○癈忘したるさまなり
御まくらなともさなから　○死人は必枕をやふるこ
と有と云々
物の氣故かやうのてとしけきとて改めすしてをき

玉ふとなり
いきやかへり給と　○さま〳〵のことをし給ふ間に
日を經てそこなはれ給となり
とりへ野に　○葵上死去は十四日の夜なり葬送は廿
日あまりなり
もこよふことゝ　○文選第十二郭璞江賦云神蜧蝹蜦
以テ泛遊フ註云神蜧ハ蛇也蝹蜦ハ行皃又日本紀第二豐玉
姬化爲八尋大熊鰐匍匐透蛇何れもたゝよひありく
皃なり
つねのことなれと　○源はかやうに人のなくなりた
るをは見給しこともなきと也
人ひとりかあまたしも　○人ひとりかとは夕顏上を
云なり夕顏上はかりかとおほしたると也
八月廿日あまりのあり明なれは　○折から哀なるこ
と深かるへし紫上に別給し時も此夜の月のことを
思出し玉事あり
のほりぬる　○源のひとり詠し給ふなり
なとてつゐには　○平生の恨あるさまもつゐには見
なをさるへきと思し物をと也
にはめる御そ　○本妻の限の色なり色のうすきなり

輕服なり
我さきたゝましかは　○源の我さき立たらは葵上は
重服なるへき物をとなり
かきりあれは　○限ありて定たる輕服を着玉へるを
云なり紫上に別給し時此衣の色のうすき事をいへ
り
ほうかい三まいふけん大士　○普賢は法界にあらゆ
る所作を三昧とするなり大士は菩薩也
なにゝしのふの　○結ひをくかたみの子たになかり
せは何に忍の草をつまゝし
宮はしつみいりて　○母宮なり
御わさのいそきなとせさせ　○此程は產かたの經營
のみなりしを思かけさりし事の出來ぬる也凡此物
語は盛者必衰の理をつよく書顯せり今葵上は夕霧
を誕生ありて思事もなく十分なるへきに此事の出
來ぬるをいへり
なのめにかたほなるをたに　○草子地評してかけり
又たくひおはせぬ　○女子の兄弟もなきとなり
袖のうへの玉　○たくひなきを云なり本文不分明
かの宮す所は　○八月に諸司に入給へきなり去年中

に大内の諸司へ入給へきを延引有を云なり左衛門のつかさへ入給事見へされともはやありしにてあるへきなり左衛門のつかさは猪熊なり

御きよまはり　○いよ／＼潔齋なるにかこつけ給ふなり

うしとおもひしみにし　○源の御心なりた夕顔なとのこと也

かゝるほたしたに　○夕霧のことなり

たいのひめ君　○紫上なり

時しもあれと　○秋やは人の別るへきの歌也

念佛のあかつき　○こもりゐる僧ともなり

ふかき秋の　○引歌に及へからす面白き詞なり

菊のけしきはめる　○未た開けさるをいへり

こきあをにひの　○はなたのてきなり菊の葉の色に通へる成へし

きこえぬほとは　○文の詞なり人の歎は問につらさの増ることとあれは此程も尋申さゝると也

人の世を　○菊の心あるなり人の上を聞ても我身も同事と思やられてあはれなる義歟

たゝいまの空におもひたまへあまりてなんと　○これまで文の詞なり

つねよりもいたう　○打をきかたく見給となり

さすかにをきかたう　○今の時分此あたりのことはちとうるさけれとも打をきかたきとなり

つれなの御とふらひやと　○今のおりふしからをいへり

さりとてかきたえ　○源の心なり

過にし人は　○葵上は定業にてそあるらめとなり

なにゝさることをさた／＼と　○さやかに靈氣に宮す所の出給しを見しこと也人傳なとにて聞へき物を今はくやしきとなり

齋宮の御きよまはり　○今齋宮は一段の神事なるに依て此穢氣の所よりの文を遣す事も如何と源のためらひ給ふなり

わさとある　○わさとをとつれ給を返事無ては如何となり

にばめるかみ　○今は黑みたるなりにび色なり

こよなう　○文の詞なり此程も申たき心なからとなり

つゝましき程は　○穢處なるに依て斟酌するなり

とまる身も　○世間の無常をいへり下句は御息所の
物の氣なとに成給し心をほのめかし給也
かつはたほしけちて有し　○何事も世に心な留め給
そ恨を殘すはあしきことと宮す所を教訓の心なり
御らんせすもやとてこれにも　○是にもと云詞河内
本たれにもとあり花鳥譯義同之然れとも青表紙に
はこれにもとたしかにあり心は御息所の詞に聞へ
ぬ程はおほし知るらんとあるをうけてこれにもと
見べしこなたも同し心となり
ほのめかし給へる　○前のかつはおほしけちてよか
しの詞のこと也
されはよとおほすも　○我靈に出たること誠なりけ
るよと心の鬼に思ひ給なり
猶いとかきりなき　○御息所の心なり
こせんはうのおなしき　○故前坊は桐壺の帝の御兄
弟也兄弟にとりても御中たくひなきとなり
その御かはりにも　○前坊の御かはりにもと院には
おほすに依て内住をもし給へと念頃に申給ひしか
とも自然院の帝の御心かけ給ふ事なとのありては
とて參り玉はさりしとなり

かく心より外の　○此源のこと似合さるよしなり
猶れいのさまとも　○心も心ならさるなり
昔より名たかくものし給へは　○よしある人となり
野の宮の御うつろひ　○諸司より野宮へ入給なり
此宮す所は天性よしある人にて人々心を寄せ奉る
よしを源の聞給ひてなり
ことはりそかし　○人々を源のことはりと聞ての給
なり
しやう日　○正日なり四十九日の事を云なり法事は
四十九日よりうちにあげ玉成へし
三位中將　○頭中將なり三位になり給ことこゝにて
見たり
かの内侍のすけ　○源内侍のすけ也
あないとをしや　○源の詞なり
おはをとゝ　○うば殿と云心なり
かのいさよひのさやかならさりし　○是は末摘にあ
ひ給ひし時のことといさよひの月に常陸宮にて頭中
將の源を見顯したりし常陸宮にてのことなり
秋の事なと　○末摘巻に後朝に頭中將猶ねふたけな
りなとたはぶれし時のこと也かやうによく句を切

て心得へし
しくれうちして　○是は他日のこと也十月に成ての
ことなり
中將の君にひ色のなをし　○中將の君更衣のついて
に鈍色をうすくなし給ふ也
をゝしう　○男々しくの義なり
颯あらゝかに　○面白きさまなり
雨となり雲とやなりにけん　○劉禹錫か句を引　巫
山神女旦爲行雲暮爲行雨朝々暮々陽臺下　光宋玉
か賦をもとゝめ禹錫か妻を失時の詩を引也　相逢
相失兩如夢爲雲爲雨今不知——
女にては　○中將の心なり
ひもはかりを　○花鳥說非歟中將の近く寄居給故に
引つくろひ給ふさま成へし
これはいますこし　○中將は更衣し給へとも源はい
また色こきを着し給ふなり志しの深き由也
くれなゐのつやゝかなる　○花鳥に見たり
中將もいとあはれ　○我妹なれはあはれに思出給な
り
雨となり　○源の誦し給ふ句をうけて中將のよみ給
なり　劉禹錫ハ只應ニ長ク在ニ漢陽ノ渡ニともいへるを
此葵上の行末は何くとも定かたしとなり
ひとりことのやうに　○此語面白きなり他人のこと
ならは源へよみかけ玉へきを我妹のことなる故に
卑下したるさまなり
見し人の　○面白き歌也結句の餘情思へし中將の歌
は詩の句をうけて詩常の事なり雨と時雨とをひき
はなして云なり是は見し人の雨となりにしは八月
わたり成しがはや十月はかりに成けるよと時節
のをし移りたるを雨と時雨とにて云かへたる殊勝
なり
のたまふ御けしき　○中將の心なり
あやしうとしころ　○年頃は父大臣のさま〱もて
あつかひ給ふ故又御門の御教訓大宮の大切にし給
ふ故かた〱の去かたさにうはへはかりの御志と
思ひしに今愁傷のさまは眞實の御心さしの淺から
さりけることよといとゝ深く葵上のあたらしく惜
きことを中將の給なり
くむしいたかりける　○苦痛也
かれたるした草のなかに　○此景面白し中將の立

玉ふ跡にて大宮へ奉り給ふなり
宰相の君して
くさかれの
にほひおとりてや　○葵上よりは匂をとりてこそ夕霧をは思給らめとなり後拾遺哀傷小式部の内侍なく成てむまこともの侍けるを見て和泉式部「とゝめをきて誰を哀と思ふらんこは増るらんこはまさりけり
けになに心なき　○若君なり
木の葉よりけに　○花鳥の義面白し
いまも見て　○かきほあれにしは葵上を云
なをいみしう　○あはれのなくさめ難さにとなり只今の物のあはれは此姫君ならてはかひあるさまの返事なと申へき人も無となり
くらきほとなれと　○暮かた也
たえまとをけれと　○源より槿の宮へ久しく音信給はされは也
さのものと　○河海云さやうの物と云詞なりその物なり例のけさうの文にやなと思へとも此文を内々にて見しにや只折ふしの哀はかりなれはとかもあらしとて御覧さするなり
空の色したる　○鈍色なり服者の用る色なり
わきてこの　○下の句槿宮にかけていへりつれなくて程ふる由なり
いつもしくれは　○引歌よく叶へり「神な月いつも時雨はふりしかとかく袖ひつるをりはなかりき
御てなと　○いつとなきうちにも一段とかくうつくしくかき給なり
すくしかたき程なりと　○此御返はなくてはとなり
おほうち山を　○是より文の詞也　花鳥説大内山は大内の事なり大將の直廬を云とあり又は亭子院仁和寺の大内山と云所にをはします時堤中納言兼輔勅使にて参りて「白雲の九重にたつ峯なれは大内山とむへもいひけりと讀しことを思て今源氏の物さひしくこもりをはするによそへての玉へる也
此二説何れにてもとなり
えやはとて　○色ならはうつるはかりも染てまし思心をえやは見せける　心はそなたのことを思やり奉れとも心の中をはよも知せ給はし思程をもえ見せぬと云心なり

秋霧に　○葵上にをくれ玉し由なり
なにことにつけても　○源の心なり大かたのことと
もを思つゝけ給なり六條御息所なとはすくれ給へ
るにも又思所のあることを下に思へる心なり
つらき人しもそ　○槿宮藤つほなとを思へり引歌に
及はす
つれなながら　○槿の姫君を云なり
猶ゆへよしすきて　○御息所なとのたくひなり世界
の交を云なりましはりのあまりにこき人はあく心
の有なり人はとをあさにて有へき也
たいのひめ君　○紫上をはよく〳〵おほしたてんの
由なり
母なき子を　○源中最秘抄に無用の沙汰あり不用之
いかゝおもふらんと　○紫上の心には我を恨給こと
は有ましきと思のみ心やすきとなり
中納言のきみと　○葵上方の女房なり源の心かけ給
ふ人なり
かうこのごろ　○源の詞なり
みなれ〳〵　○みなれ木のみなれそなれてはなれな
は戀しからんや戀しからしやト此歌にてかけり

いみしきことをは　○葵上の事なり
いふかひなき御こと　○みな〳〵の詞なり
なこりなきさまに　○今より後は源の御出も何故に
か有へきの由なり
あはれと見わたし　○源の見わたし玉ふなり
なこりなく　○源の詞なり
火をうちなかめ給　○見るか如く面白きなり
ちいさきわらは　○葵上のつかひ玉しあてきなり
程なきあこめ　○程なきとはちいさき由なり
くはさう色　○服者の用色なり花鳥に見えたり
むかしをわすれさらん　○源の詞なり
おさなき人　○夕霧なり
いてやいとゝ　○なにとの給とも葵上のまし〳〵し
時のやうには立いり玉へきことも有ましきとなり
大殿は人々に　○遺物なとくはり給なり
おりしりかほなる　○此段殊勝なり
すこしひまありつる袖とも　○日數も過行て愁歎も
聊ひま有つるに今源の出玉ふ折節のさま折知かほ
なる空の氣色感情深き物なり書様心を付て見るへ
しとなり

けふにしも　○強ち今日よりはこゝをふり捨玉へきにてもあらされともとなり
けふのけしきに　○源の出給をいへり
院におほつかながりの給はす　○源の詞なり
いとたへかたけに　○おとゝの愁傷のさまなり
おとゝ久しうためらひ　○涙に咽ひたるさまなり
よはひのつもりには　○おとゝの詞なり
をくれさきたつ　○源の詞なり
をしはからせ給てん　○御門の御心をおしはかりて源のゝ給なり
さらはしくれも　○今おとゝの御心片時も源をとゝめて見参らせたくおほせとかくの給ふ尤哀也
をしこりて　○凝あつまりたるなり
おほしすつましき　○おとゝの詞なり夕霧のこと也
うちとけおはします　○源は葵上の御方に打とけてましますことは無かりしなり
さりともつゐに　○かやうにてははつましき事と頼み思しとなり
けにこそ心ほそき　○今日よりはいよ〳〵心ほそき由なり

いとあさやかなる　○源の詞なり過にしかたは心のおこたりも有つるなり今よりは御覧してんとなり
うつせみのむなしき心ちそ　○葵上も失給源も今出給ふ跡は蝉のもぬけの如しとなり
手ならひすて　○源也
わかき人々は　○おとゝのあまりなるまて愁傷し給を云也
かしこの御てや　○源の手跡をほめ給ふなり
よそ人にみたてまつり　○草子地なり
ふるき枕　○文集第十二　長恨歌鴛鴦瓦冷霜華重シ舊枕故衾誰與共
なきたまそ　○源の心の切なる方より云へるなり源の今住み捨て難くおほす心から彼葵上の魂もさこそあくかれかたく思つらんとなり此義宜きなり花鳥なき床にねんの歌を引けり此歌の心はなき魂の方より思をきたるさま也此義不レ叶歟
しもの花しろし　○河海文選連昌宮賦
君なくて　○とこ夏を床に用るなり　玄宗の楊貴妃にはなれたる時を思やりたり此二首は文集の二句を題にてよめる歌なり此句によせて述懐也

一日の花なるへし　○上の詞にかれたる下草のなかにりうたんなてしこなとゝありし時の花なり
いふかひなきことをは　○葵上のことは無常の習ひ類あることなり宿業を思て慰むとすれともとすれは又戀しき凡情の習なり猶さま〳〵に思さまし侍となり
この大將のきみの　○源をよその物に見なし侍と云なり
殿のおほしのたまはする　○おほし捨ましき人もとまり給へれはとおほせたるなり又は殿と云を源に見る也おさなき人を見捨す物し給へと人々にの給しことにや何れにてもよきなり
あからさまにまかてゝ　○女房達の云なり
院へまいり給へれは　○源の院参あるなり
中宮の御かた　○藤つほの事なり
命婦の君して　○中宮の御方よりさへきりて仰あるなり
つねなき世は　○源の詞なり細々中宮よりも御とふらひのありし由見へたり
けふまてもとて　○此詞幽玄なりなからへたるなと云心を含めり
むもんの御そに　○輕服なり
とうくうにも　○冷泉院なり
かのゐなみくむしたりつる　○葵上の方の女房達のおほし出給ふなり
御さうそくたてまつりかへ　○花鳥云三ヶ月の服なれは八月より十月までなり今は除服し給へきなり云々此義如何除服は是よりも後なるへし是は只院へまへり玉し衣裳を着改給成へし
にしのたいに　○二條院西の對なり
少納言かもてなし　○かやうのしつらひなと心もとなき所なく少納言能沙汰したると源のおぼすなり
ほかけの御かたはらめ　○藤つほに能似玉ふとなり
しはしことかたに　○二條院の內東の對なとなるへし打やすみ給ふにや
あやうし　○又いかなる本臺もか出來んと思なり
やんことあき　○草子地也
中將の君といふに御あしなと　○源氏の方の官女也御足さすらせ給ふなり
君はわたり給とて　○源氏の我御方へわたり給なり

あやなくも　○源の書給て置給へる也心の隔をあや
なくもと云り後朝の文を何となく云紛らはし給也

かゝる御心おはすらん　○紫上の心には源の眞實の
子になり給て自然いかなるありつきをもさせ給へ
きと思給しに思の外に思給なり

かゝる御たもひの　○源の方へはまいらせさるなり

こなたはかりに　○紫上はかりなり

あすのくれに　○新枕の三ヶ夜のもちゐの事を宣也

けふはいま〳〵しき日なり　○當座のまきらはしに
の給ふ成へし

けにあいきやうのはしめ　○是も惟光取合て申詞也
いま〳〵しき日との給しをうけて申なり

さてもねのこはいくつか　○亥のこの翌日の事なれ
は對してかく云なり源の語さたかならぬ程におほ
めきて問なり

みつかひとつか　○三ヶの大事の一なり

心えいてゝ　○惟光がやかて心得て立たるを物なれ
たるさまやとおほすなり

あなかしこあなたになと　○一本あたになとゝあり
何れも人にも知すなと云心なり

あたなる事は　○辨は何事とも知らぬなりもらさし
と也

まことにいまはさるもし　○別勘にあり但いまはあ
たなることはと云にてことたるへき歟

したしきかきりの人々　○近くつかふまつる人々な
り

御さらともなとゝ　○もちゐのさら也

けそく　○臺のあし（足）なり

さてもうち〳〵に　○少納言か心なり我に仰もなか
りしよとなり

かの人も　○惟光なり

にゐたまくら　○若草の新手枕をまきそめて夜をや
へたてんにくからなくに

いまきさき　○弘徽殿なり

御くしけとの　○朧月夜なり葵上無くなり給ひしか
はりにはとおとゝは思ひより給へともこき殿はさ
も思より給はさるなり

君もをしなへての　○源もさもとはおほしよれと今
の折ふしは少思給也

このひめ君を　○紫上なり父宮は兵部卿宮なり

なれはまさらぬ　○みかりする片野のをのゝなら柴のなれはまさらて戀そ増れる
としもかへりぬ　○源廿二紫上十五なり
みそかけ　○衣架なりさほ也
けふはいみしく　○是より大宮よりの詞なり
けふはかりは　○妙なる語なりさためていつくにも御服はあまた有へきを今日はかりはやつれ給へとなり
かならすけふたてまつるへき　○今日の元三の用とてこそし給ひつらんとてきかへ給也
こさらましかは　○今日源の御出なくは口惜かるへき由なり
春やきぬるとも　○源の詞なり申やる方もなきとなり
あまた年　○下の句哀也去年にかはりたる由なり
あたらしき　○大宮の歌なり哀傷面には不レ出して妙なりいつとなく葵上の事のみ心にある由なり

賢木

巻名詞并歌也源廿二歳の九月より廿四歳の夏まて三ケ年の事あり
齋宮の御くたり　○秋好中宮なり齋宮群行九月十六日御祭前事なり
おほとのゝ君も　○葵上の失玉ふかはりには此御息所こそ源氏の本臺にもなり給へき由世の人も思しを今はかへりてうとみはて給をいへり
宮のうちにも　○野野にてのことなり
まことにうしと　○源のうしと思玉ふ由はもれ聞玉ふを誠なりけりと思ひはて給ふなり
よろつのあはれ　○万事をさしをきてくたり給ふなり
おやそひて下り給　○河海に圓融院の御規子女王の事を引りこれは延喜以後の事なれは例に用さるは此物語の例也されは例もとになけれはとはかけり村上御女規子女王天延三年に爲齋宮下向し給ふ御母齋宮の女御徽子重明親王女相そひて下り給り
みはなちかき　○齋宮十四歳也
たいめし給はん　○御息所なり源に對面の事也
人は心つきなし　○御息所の心中なり人とは源なり

もとのとのには　○六條京極の宮なり御息所時々わたり給なり
大將とのえしり給はす　○しのび玉へる故なり
たはやすく　○此野宮へはたやすくまいりよるへき所に非すとなり
院のうへおどろ〳〵しき　○桐壺帝御惱なり此卷の末に崩御し給へきおこりなり
九月七日　○十六日に齋宮くたり給へきなり
たちなからと　○白地にてもと連々申されしなり
いてやとは　○引歌に及べからさる歟云々「われをのみ思ふとならは有へきをいてや心は大ぬさにして　無用歟とは思なから也
ものこしはかり　○さらは物こしはかりの對面はと源を待給なり
物の音ともたえ〳〵　○遊なとし給也「琴の音に峯の松風通ふらし何れのをよりしらべ初けんと讀るも齋宮女御野宮にての歌なり心かよひて面白し
十よ人はかり　○十人あまりはかりとよむなり
いまゝてたちならさゞりつらん　○たちなれさりつるよとなり

物はかなけなるこしはかき　○野宮の御所のさまなり　大嘗會の垣を柴にて拵由延喜式に見へたり潔齋の心なり齋宮も是に准すへしかりなるを本とするは何時も穢氣の時に撰却せんの心なり內裏に火はしを用ふ又其心なり
あたり〳〵　○そこ〳〵としわきたるなり
かう〳〵しう　○神々しくなり
かんつかさ　○神官なり
ひたきや　○春宮にもあり所用不ㇾ分明ㇾ野宮のは神膳の用なるへし花火矩小人（ヒタキワラハ）二人山城葛野郡秦氏の童女を取の由延喜式云々神供なとしたゝむる所歟云々
きたのたいの　○內々の方なり面向は皆神事なれはなり
あそひはみなやめて　○上の詞にその事ともわかぬ物の音ともとありしなり
かやうのありきも　○源の詞なり
いさやことの人めも　○御息所の心なり
かのおほさんことも　○齋宮のおはさん御心もいかかとなり

たけからねは　○たけからぬ心なれはえかけはなれ
給はさるなり
こなたはすのこはかりの　○源の詞なり
かはらぬ色を　○わか心のかはらさるさまを榊の色
によせてよめり花後撰「ちはやふる神垣山の榊葉
は時雨に色もかはらさりけり河「たく霜に色もか
はらぬ榊葉のかをやは人のとめてきつらん
いかきもこえ侍に　○ちはやふる神のいかきもこえ
ぬへし今は我身のおしけくもなし
神かきは　○御息所の歌なりことから殊勝の歌也と
ふらひきませの歌を含せて尋る人もあらしと思へ
はの心あり思かけさりし由なりいかにまかへてと
は思たかへてやなとの心なり
をとめこか　○榊葉の香をかくはしみとめくれはや
そ氏人もまとゐせりけり
おほかたのけはひ　○神事なれは憚あるさまなり
心にまかせて　○源の心なり
人もしたひさまに　○人とは御息所也したひさまに
思給し程はさもなくて只今切に思はれ給となり
いかにそやきすありて　○物の氣になり給し事なり

内にかへりみるの心なり
めつらしき御たいめの　○此程中絶たる故に更にめ
つらしく思給なり
月もいりぬるにや　○七日なれはなり上の詞に花や
かにさし出たる夕月夜とありしにあへり
こゝら　○多くの心なりそこらとはそれらなと云か
如し
つらさもきえぬへし　○御息所の恨も消ぬへきとな
り
やう〳〵いまはと　○御くたりを治定し給し事なり
されはよと　○御心のひくと也
殿上のわかきんたち　○葵巻に殿上人とも〻朝夕の
露分ありくを其頃の役になんするとあるを云なり
庭のたゝすまひ　○野宮のけしきなり
うけはりたる　○以て出たるなりわれは貌なり
あかつきの　○源の歌なり此つくり出たる樣なる曙
の空たゝうちの身にもしみ侍るへきを此時の心思
やりて見侍るへし
ましてわりなき御心まとひ　○このつくり出した
るやうなる所にてはいかなる秀逸も有へきをさせ

る歌もなきを云なり花鳥に能沙汰あり
大かたの　○御息所の歌なり此別は我心からなる事也然に只秋の感はかりになして云給なり別れの悲きとは面にはいはさる面白し花鳥に此分見えたりくやしき事　○源の心なり此程たえ〳〵なりしをいへり其故にこそかやうの別も出來ぬれと後悔あるなり
いかはかりの道にてか　○侍ふ人々の云なり
御ふみつねよりも　○源よりの文なり
おとこはさしも　○草子地なり
たひのそうそく　○色々源よりとらふひ給ふなり
ほとちかくなるまゝに　○御くたりの近くなるなり
齋宮は　○秋好中宮なり
世の人はれいなき事と　○たやそひて下り給ふことなり
なる事も人に　○世間の人のをしへとなるへき詞なり心を付て見るへきなり一向に數ならぬ人の身はやすき物なり此御息所は何事も人にぬけ出たる人なるを此源のことのみ御身の瑕(キズ)なるとなり
十六日かつら河　○西河の御禊なり 花 齋宮群行の日也西河にて御禊の事有幄の屋にて中臣御麻を奉る
長ふそうし　○花鳥に見えたり 花 群行の日御前と勅使とは河原迄供奉して歸參す長奉送使は伊勢まて供奉して上洛の時弓場殿にて事故なく御下着の由を奏す中納言參議の間一人被定之
院の御心よせ　○故前坊の御事をは院の御門大切に思給し故なり
れいのつきせぬ　○御息所の御方へもさま〳〵有へし
かけまくも　○是は齋宮へまいらせ給ふなりかけて申さんもをそれなれともの心なり
なる神たにこそ　○此思ふ中をさけ給ふは此齋宮故なれは也「天の原踏とゞろかしなる神も思ふ中をはさくる物かはの心にての給なり
やしまもる　○齋宮歌也くにつみ神は地祇と書なり山祇と書ては山つみかみと讀なり地神一切の神といはん爲也　河 伊弉冊尊生淡路伊豫筑紫壹岐薩摩隱岐佐渡次生大日本豊秋津洲謂之大八洲
おもひたまふ事に　○さても思ふにあかぬとなり
いとさはかしきほとなれと　○是は御息所の返事な

り
宮の御は　○齋宮の御返事なり
女別當　○齋宮の別當なり花延喜式に見えたり
今の世にも院宮關白家なとに別當の局とてあるなり
くにつ神　○なをさりことゝは大將の僞を先たゝすへきとなり
つれ〴〵になかめ　○二條院になり其頃のさまを思へし
宮の御返のおとな〳〵しき　○此歌の下句を云なり
れいにたかへる　○我物にもすへき物をとおほすなり源の御心のくせなり
いはけなき御ほとを　○御息所に打そひてあらましかは此齋宮をもわか物にて見るへき物をとなり
世中さためなけれは　○又も逢奉ることも有へきと云妙也つゐには源氏のうしろみ奉り玉ひしなり
心にくゝよしある　○御息所のおほへあるの由見へたたり
みやす所御こしに　○齋宮幼稚なる故に同輿あるなり　但聊不審あり幼稚とは云なから今齋宮は十四歳なり同輿の義如何と覺え侍り但諸抄此沙汰に及はさるなり　齋王同輿事花云　齋王幼稚の時御乳母奉抱薬御輿也幼主行幸の時母后御同輿の例に准する哉今の齋宮は十四歳なれとも母御息所相具して下向之間同輿にて參內し給なり御輿は葱花なり此葱花は神事の時被用御輿也主上は御禊行幸或諸社の行幸なとに乘御あるなり齋宮群行の日は八省への御輿も則葱花を被用也鳳輦の御輿には非す一もしのたうを金にて打たるを棟にすゆるなり云々
ちゝおとゝの　○御息所の父大臣の事なり此人をは后にもと思ひ給ひし物を思かけさる齋宮の同輿にて內にまいり給ふ事臨時の事なり無念の事となり
河世繼忠平のおとゝの御女前坊の御息所にておはせしかつゐに御位もきはめ給はす云々
十六にて　○河樂府上陽人入時十六今六十云々
廿て卅にて　○年記事に花鳥に詳也河御息所は十六にて故宮にまいり玉ひ十七歳にてやかて秋好中宮をまうけ給ひ廿歳にて前坊にはなれ給へり源十二の年のことなり朱雀院の立坊は源氏四歳の時なり

其より前に東宮たりし故に前坊と申なり保明太子
小一條院などの例なり
そのかみを　○今日は祝言なる故に何事をも思出さじとすれども悲しき由なり御息所の心中に詠し給也
わかれの御くし　○花鳥に委し天皇大極殿の高御座の東の御座にて筥に入たる櫛をとらせ給て齋王の額にさして京の方を趣玉なと仰事あり　花云 其儀齋王西河に出給由を聞召て天皇八省に幸して先大極殿の後房小安殿におはしまして常の御衣をぬかれ帛の御裝束に改給て大極殿に出給高御座の東の御座に東向に着給中臣御麻を奉る事あり其後五位藏人を以て齋王參給へき由を仰す齋王の御輿は嘉喜門より入て大極殿の北の壇上にて輿よりおり玉ふ則東北の戸を入て南西の座に着給ふ齋王はうす物の地摺の唐衣同色の裳を着給て玉のかつらを掛給ふ幼稚の故に髮上をはし給はす女房几丁をさす幼少の時は御乳母抱て座に着す次天皇舍人を召二聲少納言版位に進て中臣忌部を召す兩氏次第に進寄て御幣を取又仰の旨を承る次に額の櫛筥を召す藏人頭內侍につけて是を奉る內侍仰を奉て內親王可ニ進寄給一之由を申す中臣其時齋王御前へ參給女房几帳をさして祗候す天皇筥に入たる櫛を取せ給て齋王の額にさし給て京の方に赴給なと仰事あり櫛の筥をは內侍これを御乳母に渡す此度は大極殿の東の戸を開て壇上にて乘輿ありて昭訓門より出給ふ勅使長奉送使なともそなたに待うけ侍り件の櫛は藏人作物所に仰て黃楊木にて作らしむ長二寸計金銀にて松鶴をまき繪にしたる方四寸の筥に入なり勢多の頓宮にて御額櫛を撤して此宮に入らるといへり
八省　○大極殿の事なり中務以下の八省なり省は禁の心省は察するなり明察にしてみたりならさるなり　花大極殿をは八省院と云只八省ともいへり八省の本院なる故なり朱雀門の內一町にあり南限冷泉北限中御門東は東の坊城西は西の坊城を限なり八省の東に太政官廳西に豐樂院北に中和院あるなり出車は八省の東路にたてつゝけたるへし八省は孝德天皇大化四年始置ニ此官一
殿上人とも　○御息所の御方の女房に物云ひかはす殿上人も有へし

くらういて給て　○さるの時内にまいり給とありし
に時刻のをし移りたるさまなり
二條院より洞院の　○二條院のそはの事なるへし此
大路の事花鳥に見たり○齋王乘輿出二昭訓門一至二
八省東路一南行至二郁芳門路一東折至二美福門一南行
即出二東掖門一經二二條大路一東行至二京極一云々洞院
大路は西洞院とも東洞院共云へし其子細は帚木巻
に見たり云々　玉云選子内親王齋宮不相替事 私玉勘之 榮
花第三此頃の齋宮恭子女王にては式部卿宮爲平の女御の御
いもうとの中の宮そおはします御門はかはらせ給
へと齋院には同し村上の中の宮おはします云々
すゝか川　○ぬれ〳〵すとはぬれもせよぬれすもあ
れなり
ことそきて　○旅の中なれはなり
あはれなるけを　○此御息所の御返歌あはれすくな
しとなり歌を思へきをしへなるへし
行かたを　○源の歌なり面白き歌也あり〳〵と見る
體なり
にしのたい　○紫上の方なり
まして旅の空　○ましての詞妙なり

春宮も一たひにと　○行幸と一度にとをぼしたれと
他日なるとなり
なに心もなく　○東宮いとけなくおはします御心あ
はれなり
よろつのことを　○延喜御門最後の御藥の間事
李部王記河海に委く引り河云李部王記延喜御門最
後御藥之間春宮朱雀院七歳御時御舅貞信公爲御供
參内主上御對面之間五ヶ條之仰一者可專神事二者
可仕法皇三者可聞左大臣訓四者可襃古人其外一ヶ
條御忘却春宮御退出之時左大臣被奉問之
いと物はかなき　○藤つほの御心なり
この宮の御うしろみ　○春宮の事なり
かくれさせ給ぬ　大后のまいり給はさるさきに以前かく
れ給ふとなり
御くらゐを　○脱屣以後政をし給ことは嵯峨天皇始
なり
おほちおとゝ　○二條太政大臣なり弘徽殿の父なり
花 二條右大臣任相國越引入左大臣元慶四三基經公
任相國越左大臣源融此例也
けうしつかうまつり給　○孝事なり

藤の御そ　○河云服者の着する物也本儀は藤の皮にて織る布也御素服に用レ布此儀也主上は以日易月とて十三日着御して令脱御也又裁麻とて麻布をも用なり僧の着する黑衣も佛の御服云々素服事仁明天皇承和七年濫觴歟可尋
こそことしと　○去年は葵上なり
御ほたし　○紫上并夕霧若君也
御四十九日　○河七條后うせ給ひける後伊勢「おきつ浪あれのみまさる宮の中にと云々
しはすの廿日のほど　○七々日の事なり
おほかたの世中　○雪霰の空なり
ほか〳〵へと　○舊院にはとまる人なき也
宮は三條宮に　○宮とは藤つほなり
兵部卿宮　○紫上父藤つほの兄弟なり
かけひろみ　○以レ院比レ松也人々ちり〳〵になるさまなり河松は君子の樹なり松やかれにけんと大やうによみ給ふ殊勝なり云々
さえわたる　○餘りにうちむきたる歌也水の面にしづく花の色さやかにもの歌の面かけありて面白し河云大和物語亭子院にて兼盛「池はなを昔なから

の鏡にて影見し君かなきぞ悲しき
おほすまゝに　○草子地なり
そのつゐて　○是も草子地なり
ふるき宮はかへりて　○三條宮なり
御さとすみ　○今は只人のやうにと葵巻にありしなりさて暫時の里住も無りしなり今はあはれにおほすなり
年かへりぬれど　○源廿三歲なり
ちもくのころ　○御位の後も院の御所なとに門前市をなしゝも今は引かへしづかなるさまなり
とのゐ物のふくろ　○三ケの一なり
いまよりはかくこそと　○かねてより思なけくなり
みくしげ殿　○朧月夜なり
院の御思にやかてあまに　○院の御爲にもとの內侍のかみ尼になりたる有へし其闕に今此朧月夜の內侍のかみになり給なり
后はさとかちに　○弘徽殿の太后也大略里がちにおはします也自然の御局には梅つほを用給なりさる程に弘き殿には此內侍のかみ住玉ふなり
登花殿のむもれ　○登花殿は弘き殿よりも奥なりむ

もれたる所なり此弘き殿は晴たる故なり花鳥說慶にむもれたる心也と云々如何只かくれの方なる心成へし河凝花舍梅つほなり弘き殿登花殿以上后町の西殿女御等の曹司なり

御心のうちには思ひ外なりし　○源の密通の事也

ものゝ聞え　○今は太后あたりの聞へ如何と思給也

れいの御くせ　○源の心くせかやうのことに心とゝめ給ふとなり

院のおはし　○年頃は院の御門の御心にはゝかり給しを后のさがなき御心今はと打出給へき后の御心を云也

見しり給はぬ世のうさと　○年月なれ給はぬ世のうさとなり

左のおほい殿　○葵上父なり

こひめ君を　○葵上を朱雀院より御氣色のありしを引よきて源氏に定め玉しことなり

おとゝのなかももとよりそは〳〵しく　○左大臣葵上父と右大臣弘き殿の父となりそは〳〵はそむき〳〵たる心歟

河海觚稜文選云々是は文選西都賦上觚稜而棲ニ金爵ニあり殿闕の角を云なり心は聊かはりたる歟

故院の御世には　○左大臣の悉皆し給ひしなり

大將はありしに　○源は左大臣の御方へは一段としたしくし給ふなり

かきりなき御おほえの　○故院の御在世は出仕し給ふこともしけくて又かた〳〵に隙なく有しを今はさも侍らさりしも紫上の幸なるとなり

むかひはらの　○兵部卿宮の今の北方やすからす思給ふなり

むかし物かたり　○ふるき物語なとにあるさまなり

齋院は御ふくにて　○院の崩御によりてなり葵卷に后腹の女三宮ゐ給ひしと有し齋院の事なり桐つほ帝第三皇女なり一説権の齋院は桐帝の御めいなりそれは輕服なから七日の服三日の暇なれは程もなく日數は過へきなり

かものいつきにはそわう　○そわうはそんわうと讀なり　花鳥說可レ然延喜齋院式云若無内親王者依世次簡定諸王女卜之云々花此物語の習延喜已往の事をは例に引てそれより以後の事は今事に書なせ

り孫王の齋院に立給事穆子女王眞子女王の外以往の例なき故に多もなしと云なり
大將の君　○源の心かけ給ふ事の止さるなり
かうすちことに　○齋院になり給ふなり
中將にをとつれ　○齋院のつかひ給ふ女房なり
むかしにかはる　○源の事なり院の後かはり給ふ事なり
みかとには院の御ゆいこん　○源氏の御事を忽かにし給ふへき御心はましまさゝれとも御心につよき所なきに依りて后の申のまゝなる事も有へきとなり是はをしへなりなよひたる方はかりにては叶ましき由なり承平の御門は大絃急なれは小絃たへすとて主上につよく急にましませは臣下はたへ難きとて聊かよはき所のまし〳〵しなり是に能叶へり
おほきたとゝとり〳〵　○弘徽殿の父太政大臣になり給と見えたり一本おほちとあり同事なり
かんの君は　○朧月夜の心源にかよふ由なり
五たんのみすほう　○此ひまに源のまいり給なり中壇御室必御参なり
かのむかしおほえたるほそ殿　○弘徽殿のほそ殿なり
中納言の君　○朧月夜の女房源のこゝろしりする人なり
あさゆふに見たてまつる人たに　○源のさまなり草子地なり
おもりかなるかたは　○聊はしちかなる由なり
たゝこゝにしもとのゐ申さぶらふ　○此夜禁中に大將にてはなくて近衞司の人の祗候する有へしはらきたなきとは無骨なる物の尋ありく也定めて是もかくれてもありぬへき物を無骨なる事也と源の聞給ふなり又は源の我も近衞の大將なる故に我身のこゝに有を知て如此(カク)尋るかともをほすなりされとも別の近衞司を尋出して時を申なり
花 西宮大將議云宿申事大將以下少將以上宿候之中至其上臈所申之(殿上及宿所等也)若大將候御前令次將殿上人申宿申官人候由(即)大將於射場殿及便所令申即作立與奪(初問名替申仰云與之其音微々也)北山羽林抄云宿申亥子時は左陣毎刻夜行丑寅刻右陣勤之丑刻折節一人申宿申候由(殿上及宿所尋上及次將在所申之)今按宿申の近衞は其夜大將次將の内御とのゐしたる上首の人の所を尋て申なり殿上

にても直廬にても申なり大將御前に祗候の時は先中少將して申せは大將出逢てたそと問へは近衞官人官姓名を申す大將則よしと仰す（よしは縱の字ゆるすと云心なり）中少將も是に同し今の物語にいへるは近衞司のかくろへたるは誰にてあるらんそれを宿申の近衞人にをしへられて其わたりにてこはつくるをそはにて大將の聞侍なり此故になまわつらはしきとはかけり寅一は右近の宿申也子時源氏も右大將なれは聞くるしきとなり又云次將に告へき事なるを近衞司を見へぬ折節傍人の源氏のかくれ居給へる事にあたらんとてその邊へをしへたこするにやと源の聞をひ給ふなり源の身にはかゝらぬ事なれとも聞くるしきとなり

心から　〇たゝ今寅一とつけ侍に依て明ると敎るをいへり明と云を厭によせてよめりさてかた〳〵袖をぬらすとはいへり

なけきつゝ　〇むねのあくと人にあく事なきとをそへたり我はかくては終ましきとなり

承香殿　〇當今朱雀の女御今上の御母なり

とうの中將　〇ひけくろの弟なり頭中將頭少將藤少將など種々の異本あり

もてはなれつれなき人　〇藤つほの御事なり我につれなくまします故にをのつから忍ひたる事もなきとなり必す心のまゝならましかはかろ〳〵しき名もたち侍へきとなり

内にまいり給はん　〇藤つほの御事なり源氏にはあらす

いさゝかもけしきを　〇故院の終に源の御事をしろしめさるゝ也薄雲の巻に此所の事見へたり

あけはてにけれと　〇源の本心うせたるやうにほれたる故なり

人々ちかうまいりて　〇人々しけく行かふなり

御けあかりて　〇御氣のゝほりたるなり

兵部卿の宮　〇藤つほの兄弟なり大夫は中宮の大夫なり

かくこもりゐ給へらんとは　〇源のかくこゝに籠りたはしますとは藤つほは知給さるなり

宮もまかて　〇兵部卿宮なり

猶いとくるしう　〇藤つほの宮ひとりことにの給ふなり

世やつきぬらん　○我世やつきぬらんと也「あはさりし涙のもろく成行は世やつきぬらん時やきぬらん　樹下集花

すこし物おもひのはるけ所　○紫上を見ん時藤つほの戀しさをなくさむへき事なりと思得給なり

さすかに　○源の詞のさすかに藤つほの御耳にとまる事もましるなるへし東宮の御事なるへし

せめてしたかひ　○源の心なり

なのめなることたに　○草子地なり

あけはつれは　○辨と王命婦となり

世中にありときこしめされんも　○源の詞なり

あふことの　○源の歌なりやかてうせ侍なんとある詞を以てよめりさもなきにてあらはいつまてふへき我身そと歎たるなり

御ほたしにもこそ　○御ほたしとこそ思ひしかとなり

なかき世の　○人にとは藤つほの身に源の恨を殘してもなり心をあたとは源のみつから知るへきとなり

世にふれは　○世にふれはうきこそまされみよし野の岩のかけ道ふみならしてんの心にての給へるなり

この女君　○紫上なり

宮もそのなこり　○藤つほの宮なり

たほきさきのあるましきことに　○中宮職の事なり院の太后をさしこして藤つほを中宮にたて給ふ事をそねみ給しを今はさやうの事をもあらため給ふことも有てはと恐怖あるなり

院のたほしの給せし　○春宮の御うしろみもなきとて中宮にたて給し其しるしもなくかはり行世の有さまをいへり

戚夫人のみけんめ　○妙に此事を引り河海に見えたり能叶へり爰の心は戚夫人の如くにこそなくとも人わらはれなることと必すあるへしと也此段悉く史記を以て書也　花　高祖は桐壺太后は呂太后朱雀は惠帝に比する也　花戚夫人は漢高祖の妾趙王如意の母也惠帝の太子たる時立かへんとせしかとも終に其事ならすして高祖は崩給ぬ惠帝位に即給て後母の呂太后かのむくひせんとて戚夫人の眼をぬきて人彘と名つけて厠にをしこめてをかれし事あり見

史記今藤壺の中宮太后の御心を恐れ給ふ御詞なり
そむきなんことを　○出家あるへき由なり
御をくりにも　○中宮の行啓にもまいり給はす聊
思心あれはなり
宮はいみしう　○春宮の御さまなり
御らんせで久しからん　○藤つほの春宮へ申さるゝ
詞なり
式部かやうにや　○式部とて年よりたる人あれば也
花髪のおちほそりたるなりさはあらてそれよりは
みしかきとはさけ尼の事なり
いかてかさはなり給はんと　○何かさやうにはなり
給へきそと春宮やかてをしかへしての給ふなり
いとゝ久しかるへき　○絶間有へきとなり
まめたち給て　○春宮なり
たゝかの御かほ　○源によく似給へるなり
女にてみたて　○女になしてなり
玉のきすに　○源に似給へるを瑕におほすなり
宮をいと戀しう　○源の藤つほをなり
あさましき御心の　○藤つほに思ひしらせ奉らんの
心なり

雲林院に　○河海序淳和離宮也紫式部墓雲林院白毫院南小野篁之墓之西也宇治寶藏日記にも紫野に雲林院ある由見えたりと云々紅葉なと面白所なるへし「侘人のわきて立寄なと遍昭の讀侍所也
花國史云天長九年四月癸酉鸞駕幸紫野院御ニ釣臺ニ院司獻命陪從文人賦詩御製和成賜祿有差并撰院之名爲雲林亭承和十一年八月癸巳幸北野駐蹕於雲林院閲覽池塘錫宴群臣日暮還宮元慶八年九月十日丁卯權僧正法印大和尚位遍昭奏言雲林院者故無品常康親王之舊居也親王出家爲沙門貞觀十一年二月十六日以此院付屬遍昭因深草天皇給此居之天皇登遐常康落髪昊天罔極德難報恩願永爲精舍令學天台之敎伏思元慶寺永賜年分度者三人傳天台之法門試度之道請以爲元慶寺別院成親王之心願矣院中雜事擇下遍昭門徒中堪幹事者上令其勾當勅依レ請聽レ之
河云雲林院は淳和の離宮也仁明天皇に處分し奉り給ふ次常康親王傳領本堂は彼親王の室也其後御願寺として天曆に實性僧都別當に補せられなとして殊尊敬なり又御記にも天曆七年正月八日於雲林院令轉大般若又康保四年五月十四日始從今日於眞言

院東寺雲林院蓮臺寺實相寺講仁王經限廿ケ日竟之
爲息災也 本尊千手觀音有靈驗云々 又諫德公康保元年二月廿二日
補雲林院別當于時三木從四位上

こはゝ御息所の御せうと ○桐つほの更衣の兄弟也

所からにいとゝ世中のつねなさを ○面白き詞なり

をしあけかたの ○天の戸をゝし明方の月見れはうき人しもそ戀しかりける

なそやとおほしなるに ○何とてかそむきはてさるやとなり

行はなれぬへしやと ○是より文の詞なり世をのかれはやの心なり

きゝさしたることありて ○法文のこと成へし

みちのくにかみ ○檀紙なり

あさちふの ○打むきたる歌にて面白し一條院より上東門院へまいる御歌の上句なり源氏のしつ心なきを嵐によせたり ○例ならぬ事おもく成て御くしおろし給ける日上東門院中宮と申ける時つかはしける淺茅生の露のやとりに君をゝきて塵をいてぬることそ悲しき

風ふけは ○女君の我身を淺茅か末にかゝるさゝかにゝたとへてよめり

吹かよふ風もちかき程にて ○槿齋院なり賀茂近きわたりなる故なり

中將の君に ○槿の齋院の女房なり

かけまくは ○齋院なる故にかけまくも忝なきと也

そのかみの秋とは朝かほ奉りし時又葵卷にをとつれ給しも秋也秋おもほゆるとは必いつとなけれ共昔覺るの心也槿奉り給なとせし事あれは秋に緣ある由也今は齋院なれはかひなき由也

むかしを今にと ○引歌「古へのしつのをた卷くり返し昔を今になすよしもかな齋院にたち玉さるさきならましかはとなり

とりかへされん ○取かへす物にもかなやの心なり

あさみとりのかみ ○花榊につくるに便ある色なり

中將まきるゝ事なくて ○中將の君の返事

たまへのはゆふのかたはしに ○齋院よりは木綿のかたはしに書給ふなり

そのかみや ○前歌のそのかみの秋おもほゆるとあるをとかめて讀玉ふなり

ちかき世にこそ ○引歌未勘 心は近き世には思ひ

もしらぬと云心なり
さうなことをかしう　○草子地なり
まして朝かほも　○顔のことをよせたり
おそろしや　○神事の憚なり去年を思出て此頃よと
　思給ふなり
あやしうやうの物　○齋宮齋院何れも同し樣に心つ
　くしなる事の神事に憚有事なれは神をうらめしう
　思となりあやしうやうの物の註花鳥の義如何
わりなうおほさは　○是より草子地なり
院もかくなへてならぬ　○院は齋院の心なり院とか
　くはめつらしき事なり
すこしあいなきことなりかし　○こゝまて草子地な
　りつれなくてもはてすして時々玉さかの御返のあ
　るはあやしきと評するなり
六十巻といふふみ　○前に聞さしたるとくあるも此
　天台の六十巻のこと成へし
人ひとりの御事　○紫上なり
しはふるひ人　○只いやしき人となり
くろき御車　○服者なれはなり
女君は日ころの程　○雲林院より歸玉ふ時の事なり

世中いかゝあらんと　○當代になりて源氏時を失ひ
　たるさまなるへきを思へるなり
あいなき心の　○源氏のしるく見給ふなり
色かはるとありしも　○前の紫上の返歌に色かはる
　淺茅か露にかゝるさゝかにとありし事なり
御まへのに　○二條院の御前なり
たほつかなきも　○いまた藤壺へは其後無音也し也
宮にまいらせ給　○藤壺中宮へなり
いらせ給にけるを　○是より文の詞なり中宮の春宮
　へまいり給事なり
宮のあひたの事　○此程寺に侍て中宮春宮の間のこ
　と心もとなきとなり
をこなひもつとめん　○心さしてをこなひし侍る日
　數を破りて出んは心ならぬ事となり
にしきくらう　○夜の錦の心なり「見る人もなくて
　散ぬる奥山の紅葉はよるの錦なりけり
おりよくて　○御機嫌宜くは見せ奉らるへしとなり
れいのいさゝかなる　○源の文也
あたら思やり　○源の事をの給ふなり
ゆくりなう　○不意なり思やりなき心なりゆくりか

ども申也
大かたの事とも宮の御ことに　○春宮の御事なとの寶めなる方の御かへりはかりをし給なり
さも心かしこく　○源の心なり
なにこともうしろみ　○今更よそに見んも人見とかむへきとて參り給なり
まかて給へき　○藤つほの春宮より三條宮へまかて給ふ日を知て參給なり
まつ内の御かたに　○朱雀院へ參給なり
御かたちも院に　○朱雀院故院によく似給ふなり
かたみにあはれと　○源の故院に似給ふよと朱雀院もおほしめすと也たかひにあはれに故院の御事を思出給ふなり
かんの君の御事も　○御門の御心なり
中宮のこよひ　○源の詞なり中宮の春宮より退出あるへきをとふらはんと也かやうに申さるゝ故は自然御遊なと有へき由を仰出されてはまかり出かたき故に先遜而此由を申さるゝなり
春宮をはいまのみこに　○勅定なり朱雀院の御子にし給へき由御遺言ありし事なり

とりわきて　○御心におほしめす其かひもなき由なり
としのほとよりも　○春宮を褒美し給ふなり
なに事にもはか〳〵しからぬ　○我御身のおもてたこしなるへきとなり
大かたし給わさなと　○源の詞なり
大宮の御せうと　○大宮は弘徽殿なり兄弟也
れいけいてん　○當代の女御なり
しはしたちとまりて　○頭辨のたち留るなり
白虹日をつらぬけり　○史記幷漢書鄒陽か傳の上書の詞也文選にも載たりこゝの心は源の今なり立ましきことを思立給とあさむきたる心なり當代へ野心ある事をいへる也
箋曰讒言の事を用る奇特也　燕召公世家云太子丹質於秦亡歸燕見秦且滅六國兵臨易水禍且至燕太子丹陰養壯士二十五人使荊軻獻督元地圖於秦因襲刺秦王秦王覺殺軻使將軍王翦擊燕燕王亡徙居遼東斬丹以獻秦々拔遼東卒滅燕註索隱曰徐廣云涿有督元亭然督元之田在燕東甚良沃欲獻秦故畫其

圖而獻　史記列傳廿三鄒陽魯人也游梁以讒見禽乃從獄中上書曰臣聞忠无不報信不見疑臣常以爲然徒虛語耳昔者荊軻慕燕丹之義白虹貫日太子畏之註應劭曰燕太子丹質於秦始皇遇之无禮丹亡去故厚養荊軻令面刺秦王精誠感天白虹爲之貫日也如淳曰白虹兵象日爲君　烈士傳曰荊軻發後太子自相氣見虹貫日不徹曰吾事不成矣後聞軻死事不立曰吾知其然也索隱曰王劭巳曰軻將入秦待其客未發太子丹疑其畏懼故曰畏之甚解不如見虹貫日不撤也　戰國策云聶政刺韓傀亦曰白虹貫日是也　史記列傳第六荊軻傳云軻衛人也之燕燕太子丹質於秦秦王遇丹不善故丹怨而亡歸而求爲報秦王者國小力不能有間秦將樊於期得罪於秦王亡之燕太子受之舍荊軻乃私見樊於期曰今聞購樊將軍首金千斤邑万家願將將軍之首以獻秦王秦王必喜而見臣臣左手把其袖右手把其胸然則將軍之仇報而燕見陵之愧除矣樊於期曰此臣之日夜切齒腐心也乃今將聞教遂自剄太子聞之馳往伏屍而哭遂盛樊於期首函封乃裝爲遣荊軻令燕國勇士秦舞陽爲副遂至秦持千金之資幣物厚遺秦王寵臣中庶子蒙嘉嘉爲先言於秦王々王聞大喜乃朝服設九賓見燕使者咸陽宮荊軻奉樊於期頭函而秦舞陽奉燕督亢地圖以次進至陛秦舞陽色變振恐群臣怪之荊軻顧笑謝曰舞陽北蕃蠻夷之鄙人未嘗見天子大王少假借之使得畢事於前秦王謂軻曰取舞陽所持地圖軻既取圖奏之秦王發圖圖窮而匕首見因左手把秦王袖而右手持匕首揕之未至身秦王驚自引而起袖絕拔劍々長操其室時惶急劍堅故不可立拔荊軻逐秦王々環柱而走群臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法群臣不得持尺寸之兵方急時不及召下兵以故荊軻逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共搏之是時醫夏無且以其所奉藥囊提荊軻秦王方環柱走王遂拔劍擊荊軻斷其左股荊軻廢乃引其匕首以擿秦王不中中銅柱火出秦王復擊軻被八創軻自知事不就倚柱而笑以罵曰事所以不成者以欲生劫之必得幼契以報太子

也於是左右既前テ殺レス軻　正義曰燕太子 云左手揕ニ其胷ー　秦王曰今日之事従ニ子計ー耳乞聽レ琴而死召ニ姫人ー鼓レ琴々聲曰羅穀單衣可ニ裂テ而絶ー八尺屏風可ニ超而越ー鹿盧之劔可ニ負而抜ー王於レ是奮レ袖超ニ屏風ー走之

かうえたしう　○此頭辨なとの事なり

おまへにさふらひて　○中宮へ源の參りて申給ふ詞なり未た春宮の御前に中宮もましますなり

月のはなやかなるに　○上の詞に廿日の月やう〳〵とありし夜の深行景氣成へし

九重に　○中宮の御歌をまへに待ひてとある源の詞を請て今はことのほかにへたて多きとなり

月かけは　○うへは前の歌を請て下心は源の心をのへたるなり

かすみも人の　○山櫻見にゆく道をへたつれはかすみも人の心なりけり○箋曰此引歌今の時節の秋に相當せさるやうなれとも一段と深切の心あり在所東宮にての事なれは味あり可レ付レ眼なり

宮は東宮を　○宮とは中宮なり

ふかうもたほし　○いまたいときなき御さゝまなり

いて給まては　○中宮の御出あるまてたき居玉ふなり今中宮はさまをかへ給へきとをほす故に一入あはれ深き御心なるへし

うらめしけに　○春宮なり

かんの君にも　○萬つゝましくて無音なるなり

こからしの　○源の無音なるを木枯によせたり

あなかちにしのひかき給へらん　○源の思やり給なり

筆なとも　○朧月夜は手跡すくれたる人なれはなり

たれはかり　○いつくよりそと皆云ひあふなり

きこへさせても　○文の詞なり源なり

身のみものうき　○數ならぬ身のみ物うくおもほえて待るゝまてに成にけるかな○こなたよりこそ申へきを待るゝ程に成にけるよとなり

あひ見すて　○此頃の時雨はかりにてはなきなりこなたの涙も添へてふるなるへし大方の秋の時雨にてはなきとふり

心のかよふならは　○花鳥雨首引歌あり但此詞不及引歌歟

いかになかめのそらも　〇引歌あるへき歟未勘御わすれもなくはいかにとなり
物わすれし侍らん　〇是まて文の詞なり
こまやかになりにけり　〇えうちおかすして書もて行さま妙なり
かうやうにおとろかし　〇此かんの君の外にもかた〳〵とたへある方多かるへしされとも打すて給ふなり
院の御はて　〇一周忌なり
御八講　〇中宮かたちかへ玉ふへき心さしなり
宮もさこへ給　〇中宮へなり
わかれにし　〇雪を行によせたり
けふは物かなしく　〇御國忌なれはなり
なからふる　〇今日までなからふるもうけれともなからへてこそは其世にあふ心地も今日はし侍れとなり趣向面白し
すちかはりいまめかしう　〇いまめかしきは一かどある故に由なきなり常の物なるか何事も上手なるなり御息所の手跡は一かどあるやうにいへり藤つほの御手跡は極上と見へたり

人にはことに　〇人よりは異なる也
けふはこの御事も　〇今日は藤つほの御ことをも源の思けちて故院をとふらひ給なり
ちす　〇帙簀なり竹を簀にあみたる文卷經をつゝむ物なり
先帝の御れう　〇藤壺の父也
五卷の日　〇第三日なり薪の行道ある日なり
世のつゝましさ　〇人々弘徽殿わたりのことの憚をも忘れてまいるなり
つねにたなしことの　〇草子地なり
はての日わか御ことを　〇藤つほ出家の事なり
みこはなかはのほとに　〇中宮の御願の趣に驚きて立給なり
心つようたほしたつさま　〇兵部卿宮さま〳〵申さるれとも心つよく思たち給ふ由をの給ふなり
御をちの横川の僧都　〇中宮の御をちなり
こ院のみこたち　〇中宮の御腹にあらさる御子達なり
むかしの御ありさま　〇故院中宮を大切にし給ひし

をおほし出るなり
いかやうに　○大將の詞なり
いまはしめて　○中宮藤つほの御返事なり
物さはがしき　○人々物さはかしくせし程にかへりて心亂れぬへかりしとなり
みすのうちのにほひ　○御簾の內のそらたき物なり
みやうかうのけむり　○是はみすの內に名香を燒給ふには非す法事のある方みすの外の事なり
の給ひしさま　○式部かやうにやなとの給ひし事を中宮の今思出し給て堪かたく思給也
御心つよさも　○中宮の御心なり哀なり
大將ぞことくはへ　○大將のをしはかりて御返事をし給ふなり
月のすむ　○源の歌なり雲井をかけては禁中のことには非す今中宮の出家し給て忉利天上なとの望ありとも天上にても子を思ひ給ふ心のやみは晴難かるへしとなり
大かたの　○幽玄なる返歌のさま類なしまことは世のうきとはかりに出家は有つれとも猶濁にしむへきとなり○つねしきならはさやうにまとふ心は有ましきとこそ有へきを是は眞實の道心あるさまなり高光の少將の「九重の內のみ常に戀しくて雲の八雲たつ山は住うしの心なり
かつにこりつゝ　○引歌不見又歌の心ならすとも
かたへは御つかひの　○草子地なり
殿にても　○二條院なり紫上の御方へも御出なきなり
母宮をたに　○故院も此中宮をこそ御後見にと仰ありし物をとなり
もとの御くらゐにて　○中宮のことなり辭退し給はんとなり
おほしあかす　○箋曰ひとりふし給て御めもあはすと云詞にて見るへし
いまはかゝるかたさまの　○尼の道具なとしたゝめて參らせ給ふなり
くはしくいひつゝけんに　○さう〳〵しやと云まて草子地なり
まいり給もいまは　○源の心かけ給ふ事も今は有ましきとなり
れもひしめてし　○源の心なり

さしもかはりぬれは　○源廿四歳になり給ふ也
内わたりはなやかに　○故院の諒闇はてゝなり
むつかしかりし　○源のけさう心の事なり
宮のうちのとがに　○三條宮の事なり
あをむまはかり　○白馬計は今も中宮へ引なり
むかひのおほいとのに　○二條の太后の御方なり○二條のおとゝの事なり三條宮よりむかひとかけるなり
重ト千人にもかへつへき　○源の今參給は誠に一人當千とも云つへきなり
むへも心ある　○あまといはんためなり
なかめかる　○義なし
たくふかうもあらす　○奥つかたには佛をすへをき給へるによりて中宮の御座いさゝか端近なるさまなり面白き書さま也
ありし世の　○今源の立より給ふを類ひなくめつらしと見玉ふ由なりうらしまと讀給へる源氏のよみ給松かうら嶋をうけてよめり松か浦島を只うら嶋とよめるにやめつらしき事也○御說云此うら嶋は浦嶋か子の心にて用かへたり仙院より歸てあらぬ世に逢由をそこにもちて松か浦嶋と云かけたるなり云々尤甘心也
世をおもひすましたる　○簾中に世をそむきたる人々多かるへし
さもたくひなく　○簾中の人々の源氏をほめたる詞なり
なにゝつけてか　○故院の御時は思の有へき人とも思はさりしに只今毎事物思のあるさまのし給も又一入類ひなきとほめたるなり
つかさめし　○こゝにては春の除目をもさしていへる歟　箋曰京官の除目成へしころといふにて去年のことと聞へたり此次の末の詞にこの度のつかさめしとありそれは此所にはやつかさめしとかきたれは如此理運に云なるへし又春の時も京官計をば如此云にや
おほかたのたうりにても　○其身にとりて加階すへき年勞ある人も只今中宮に祗候ある人をは結句それ故に加階なともせさるなり臨時の中宮の御給こそ有へきをあまりなると思給ふなり
御たうはり　○三宮の年爵を云り院の御給も同事な

り
かくてもいつしかと　○御出家以後も中宮職の留るへき事もなきを事によせてかはりたる事ともの有由なり御封なと不可改也入道し給へと猶入道の宮と申へき心なり一勘
御心うこく　○中宮の御心なり
人しれす　○春宮の御身にきすある事を佛に念し申さるゝなり
この殿の人とも　○源の御方の人も加階にもれ給人多きなり
左のおとゝも　○葵上の父なり
致仕のへう　花鳥説尤可然用之曲禮上に大夫七十而致事註致其掌所之事於君而告老　若不得謝則賜几杖懸車ノ年とて先祖の廟に車を懸るなり花云　左大臣藤良世例相叶但清愼公圓融院受禪の時更攝政此例尤近云々
いまはいとゝひとそうのみ　○二條のおとゝの一族はかりなるとなり
御こともは　○左大臣の息ともの事なり
三位中將　○葵上の兄なり

四の君　○二條のおとゝの四の君也
おもひしれとにや　○三位中將今中納言にも昇進有へきをさもなきとなり
このたひのつかさめし　○三位中將の事なり
春秋のみと經　○二季の御讀經は私には行たる例なきなり今私に源のし給歟なり
世中にははわつらはしき　○世にはやう〳〵讒言どものあるなり
夏の雨　○面白き景氣なり
めつらしき古集　○韵ふたきの用なり
左右にこまとりに　○對座に着座するなり
いとことよなき御さえ　○源の才覺をいへり
ついに右まけにけり　○三位中將まけ方なり
中將の御子のことしはしめて　○紅梅なり
四の君はらの二郎　○紅梅のおとゝなり
おほえことに　○二條のおとゝの外孫なれはなり
れいよりうちみたれ　○源のさまなり
あはまし物を　○高砂は七段の歌なり此句末の詞なり
中將御かはらけまいり給ふ　○三位中將酌をとり給

ふなり

それもかと　○中將の歌なヽり是も高砂の詞なり源の御かたちは今朝ひらけたる花よりも類ひなきとなり是ははしのもとの薔薇を見てよめるなりけさひらけたるとは古今物名部にさうひを「われはけさうひにそみつるとよめる心にてよめる成へし源の歌も同し

時ならて　○源も我顔を花に比しての給ふなり

らうかはしく　○事外しゐ給ふなり

おほかめり　○記者の筆也人々の歌多かりしを此二首の外にはかきとめさるをいへり

つらゆきかいさめ　○此事出所不分明なり心は只かやうの酒の中なとにて心もとめす讀る歌はすちなき事も多く交る物なりしるしをくへからさるの由をしるせる事有へし

いさめたうるゝ　○たうるゝはかたふくなり傾けいふなり花說のことくならはいさめと讀切てたふるゝと讀へきなりいかゝと聞へたり

みなこの御事を　○皆源をほめたる事ともなりと也

文王の子　○源も自奢給ふなり文王をは比ニ桐壺ニ武王を朱雀院に比し源の我身を周公旦に比しての給ふなり

成王のなにとか　○こゝは記者の詞なり周公旦の詞は成王の叔父とあるをこゝは冷泉院も源の御弟なりかくれたることあるに依て成王の爲には我御身を何とかの給へきと云なり花鳥說は大なる誤と見えたり

兵部卿宮も　○紫上の父なり帥の宮とある本ありいつれにても螢の兵部卿宮の御事なり

そのころかんの君　○朧月夜里に出給なり

きこえかはし給て　○箋曰かはしの三字誠かんの君の心の筆誅なり

后の宮も　○弘徽殿太后なり

殿のきんだち　○二條大臣の公達なり

まつ宮の御かたに　○弘徽殿の方になり

むらさめの　○俄なる雨の音にまきれておとゝのわたり給ふも聞へさりしなり

中將宮のすけ　○中將は弘徽殿の弟宮のすけは皇后宮の亮家司なるへし

左のおとゝ　○葵上の父なり源の心におほすなりか

やうにあはつけき方はなき物をと思ひあはせ給ふなり

こなからも　○たゝうちの人ははつかしくはゝからしく思へきを此おとゝ性の急なる故にかやうなるなり

しん殿に　○弘徽殿の御方なり

女君の心くるしき　○源は女君をなくさめ給ふなり

むのしも心ゆるされて　○さき〳〵もかよひ給ひしとなり

さても見んと　○又ゆるしても見んと思し時は心もとめ給はさりしなり

世にけかれたりとも　○此けかれはかりにては朱雀院はおほしすつましきをたのみにて内侍のかみにも参せ給となり

うけはりたる女御　○此けかれ故にとなり

齋院をも　○權の齋院なり

よのためのみにもあらす　○我爲を思玉はゝよもさはあらしと思しとなり箋我爲とは源の事なり神職なれはいかなりとも身を思はぬことはし給はしと思しとなり

宮はいとゝしき　○太后なり

みかとゝきこゆれと　○御門をも何とも思はさる時節と弘徽殿の述懐の詞なり

このかみの坊にて　○朱雀院東宮にておはせし時のことなり

おとうとの源氏　○葵上を源にあはせ給し事なり

又この君をも　○二條のおとゝも始め源をむこにとるへきやうにし給しことなりみな〳〵源に心よせのあるとなり

たれも〳〵あやしとやはおほしたりし　○箋曰朧ノ月のはしめの曲事をとかめもせすして剰へ源にも参らすへきやうに皆思給へりしに果して源の其時は心もとめ給はさりしことをと打あたりて太后のの給なり

みなかの御かたにこそ心よせ　○源氏には人々の心よせ給ふと腹立給ふなり

そのほいたかふ　○源の領狀なき故にこそ内へは參らせ給へとなり

いかてさるかたにても　○内にても何とかなと思給となり

さはかりねたけなりし人の　○此かんの君のことは
さま〳〵世間の人のもてあつかひし故にいかにか
など思となり
しゐて我心のいるかたに　○かんの君の心を后のの
給ふなり
齋院の御事は　○源は我身をもかへりみす齋院なと
へ文まいらせ給ふ事必す有へきとなり
春宮の御世　○春宮の御世をいそく心なり
さすかにいとおしう　○二條大臣の心なり
さはれしはしこの事　○太后事外腹立ある故に申出
給事をれとゝは後悔あるなり
此事もらし侍らし　○箋曰白虹貫ㇾ日の語勢成へし
太子丹田光先生に謀て曰此事勿ㇾ泄といへり
あまえて　○臘の上へあまえ給なるへしとなり箋曰
此段一向にかんの君の事に見るへきなりおほし捨
ましきの詞にて朧月夜と聞へたり
うち〳〵にせいし　○此かんの君をも内々に制し又
源をも連々に教訓有へきとなり此段殊にかんの君
の事也源と申あしけれは教訓有へきに非すわか女
の事なれはたはいりて名を惜給ふなり一向源のて

さは沙汰に及はさる事なり
このついてにさるへき　○左遷の事などなるへし

細流巻五

はなちる里　すま　あかし　みをつくし

花散里　巻名歌によりて號也源氏廿四歳五月事なり　賢木巻の末も同し夏の事なりかれは六月渡り迄の事なるにや夕立の比と見ゆ此巻は賢木の巻の末よりは前と見ゆ

人しれぬ御心づから　○人しれぬ物思はしさとは源の心朧月夜藤壺の事にたへす心を盡し給ふなり

わつらはしくなど　○白虹日をつらぬけりと云しことなとなるへし

大かたのよにつけてわつらはしう　○とは白虹日をつらぬけりなと聞へし事を云へり

れいけいてん　○桐つぼの御時の女御なり　花散里の事を云ひ出さんかため也

御おとうと　○花散里の事なり源のかよひ給ふ人なり

のこることなくおほしみたるゝ　○此花散里の事などは思わすれ給ふを只今なにやかやと物あはれに思しつゞけ給には思出給なり世間の有さまなり

さゝやかなる　○ちいさき家なり

あづまにしらへて　○和琴なり

さしいてゝ　○車よりかほをさし出給ふなり

たゝひとめ見給ひし　○此家誰ともなしもとかよひ給し家なるべし此段此時の餘情に書侍るなり若紫巻に行過かたきとうたはせし時の類なるへし

御くるまをしかへさせて　○門の前ををしかへすなり

をちかへり　○ほのかたらひしと云にてもとかよひ給しと云所見へたり隨分堪忍して行過んとしつれどもあまり堪がたくてとひ奉るぞと也

さき〳〵も　○惟光も又内の女もたかひに聲を聞しるとなり

ほとゝぎす　○内よりの返事なり此時分はいぶかしきとなり源のうとかりし故にあなおぼつかなごよめるなり

ことさらにたどる　○態たど〳〵しきさまをすると見る惟光が心なり

うゑしかきねも　○惟光もたどりたる心にいへり

花散し庭の木末も茂り逢て植し垣ねもえこそ見わかね

人しれぬ心には　○うちの女の心なり今少しねんころにも詩よかしとなり

さもつゝむべき　○惟光が心也此程久しく問給はざしり故にもし異方(コトカタ)に心ひくかと思也惟光が空をほれしたるを女のねたく思なり此引歌能叶くり

つくしの五せち　○大貳のむすめなり是も源のあひ給ひし人也須磨の巻に見えたり源の始終心をかけ給し人也

御心のいとまなく　○あなたこなたの事なり

とし月をへても　○忘るべき人もかやうにすてずをとつれ給によりて人の物思ともなるとなり

かのほいのところは　○麗景殿の事なり

廿日の月さしいつる　○五月の比古たる庭のさま思ひやるべし

すくれてはなやかなる　○桐壺の帝の御寵の程を今思出給也

ほとゝぎすありつるかきね　○中川の宿の垣ね也面白き書ざまなり

いかにしりてか　○いにしへのことかたらへば時鳥いかにしりてか啼聲のする

たちばなの　○橘の香をなつかしみ時鳥かたらひしつゝなかぬ日ぞなき　「橘の花散里にかよひなば山時鳥とよませんかも古歌此二首を取合せたる歌なり巻名是より出たり

いにしへの　○源の女御へ申給詞なりかやうに御物語申せば思のなくさめにもなり又結句(カヘリテ)思のますこともある也けい匠か斧の如伯牙が琴の如くぞ

こよなう　○紛る事も數そふ事も古ことを語りてなくさみかつはかなしさも數そふとなり

おほかたの世にしたかふ　○源はあなたこなたし給にさへ昔の友はなく侍をまして女御はかやうにてましますはさこそとをしはかりて申給なり

いとさらなる世なれは　○女御の心中なり

人めなく　○當意をまりのまゝなる歌なり女御の御歌そ

さはいへど　○故院の御時は此女御などははなく〲となとはなかりしを今の代にはかやうの人もまれなるとなり

にしおもてには　○花ちる里の住給かたなり

つらさをもわすれぬへし　○此程のと絶をも此有様

にては忘れ給へしと也
おぼさぬことには　○僞はあるまじきと花散里は思給なり
がりにも見給かぎりは　○源のみ給にさのみあしき人はなきとなり
にくくなくわれも人も　○源の御音信のたへ／＼なるをも恨みずしてある人はこの花散里なり去程に始終思しすてざる人なり心もちゐののどかにて然るべきは此花散里一人と見へたり
それをあひなしと　○とたへのみあるをあひなしと思ひて心かはりする人もあるなり
ことはりの世さがと　○心がはりの有人をも又ことはりの世のならひと思ひて恨み給けしきもなきなり源の性を云へり
ありつるかきね　○中川のやどの事なり

須磨　巻名以二歌詞一號レ之源廿五歳の三月より次年の三月邊迄の事あり廿四歳の秋より廿五歳の春迄の事物語に見へず此内に源の除名などの事などあるべし榊巻の末の弘き殿の造意より遠流あるべき定なども有けるにやさやうの所を思してみづから須磨にうつろひ給なるべし物語の書さま妙也
世中いと　○世間ものむつかしきとなり
しらずがほ　○此まゝ籠居してありぬへくやと思ごも也
かの須まは　○行平卿すまに有てもしほたれし事又周公旦管叔蔡叔の讒言によりて東征せし事を専用とし又菅丞相高明公などの太宰府に左遷の事又野相公隱の國へ流されし例を以て書り此等の譬喩一途ならず五大所成して一身となり草木を生ずるが如し凡此巻は行平を本としてかけり其謂は行平は我と蟄居したる也今源も我ミツカラと籠居あるべしと也よく行平の事に叶へり
ひたゝけたらん　○明　河花書レ之人しけくかまひすしき心なり云々　愚案滔字典滔ハヒコレリレ天一ノ黠滔ヒタヽクニレ天
倘書堯典帝曰　庸違象チ恭滔レ天　註滔ハ漫也　貌象

は　恭敬而倣狠若レ滔レ天ニ言不レ可レ用　又云浩
々滔レ天　註　盛ニ大ナルコト若レ漫レ天ニ
さりとてみやこを　○須磨は都よりの程も不レ近不
レ遠よき程なり
あふをかきり　○我戀は行末もしらすはてもなしあ
ふをかぎりと思ふばかりぞ
やかてわかるべきかどでにもや　○門出也源の心に
ついの別にもやと思給なり「かりそめの行かひぢ
とぞ思こし今はかぎりの門出成けり
かの花散里にも　○是も一すちに源をたのみ給人也
入道宮よりも　○藤つぼの事なりこゝにて始て入道
と云也男女にかよひて入道の號あるなり
三月はつかあまり　○高明公左遷三月二十六日也安
和二年三月廿六日也
いとかすかにて出立給　○かやうにはいへとも奥に
は出立給事はあるなり此筆法あまた所にあり心を
つくへし
そのおりの心ちのまぎれ　○草子地也例の紫式部が
詞也一云式部は西宮左府の思ひ人にて有しかば左
遷の折のまぎれを書ると云々但此物語書出る比と
左府左遷の年と遙に隔りたり不ニ必當一歟
夜にかくれて　○夜と世と二義なり夜の義よきなり
重云世に忍給也　イ本世也主詞夜と見ゆ如何云々私
云箋曰夜中に忍ふこそ世にかくるゝ心なれ
おほいとの　○致仕のおとゝなり
御かたいとさひしけに　○葵の上の御方なり
わか君は　○夕霧なり
ひさしき程に　○源の詞なり
つれ〳〵にこもらせ　○左大臣詞源の除名せられて
出仕なきなるべし
くらゐをもかへし　○官をかへしたるなり
こしのべて　○河海に退体とあり花鳥に破レ之也然
れども河海の説も可然歟
いちはやき　○嚴密にきびしき也
いのちなかきは　○壽者多恥
あめのしたを　○かくても源の御身のうへにかやう
の事あるべきこは思はざりしの由なり
ことあることもかゝる事も　○源の詞也只前業と也
さしてかく官爵を　○除名の事花鳥に見たり
此詞を以て見に源氏に除名と見ゆ花云除名事出身

よりなり來る官位を悉く除て無位の人に成る事を云配流の人を先必除名する事なり又除名ばかりにて流罪せられぬ事も有源氏の除名は左遷の例を用たる也

月日のかけをたに　○たほやけのかしこまりなる人はあきらかなる月日の影をたに見す玉云本説如何
　一勘本説未レ勘レ之意は無ニ相違一也違ニ天意一者日月の照覽も可レ畏之由也

とをくはなちつかはす　○除名せられてさて配所を定る也おほかた配所も定るとなり

むかしの御物語　○左おとゝの詞故院の源を大切にし給事を云出給也

すき侍にし　○左たとゝの詞なり葵の上を云へり

よくぞみしかくて　○奇特なる詞なり

おさなく物し給ふが　○夕霧也祖父祖母の中におひ出給へきと也

なづさひきこえぬ　○源に夕霧のなれ給まじきを悲しとなり

いにしへの人も　○左府の詞聖廟など也讒言の事也

されといひ出る　○世に云出てこそ進退を定め給へき事なるをそれよりさきには如何となり

中納言の君　○葵の上の女房なり

いへばえに　○いはんとすれば云はれぬと云心なり

これによりとまり　○草子地なり

夜ふかう出給ふに　○三月末の景氣たぐひなし

又たいめん　○源の詞也

宮の御まへより　○大宮より也

みつからも　○是より宮よりの詞也

夜ふかくいてさせ給なる　○世を忍ひ給故也

さまかはりたる　○葵上の在世にはかはりたると也

心くるしき　○夕霧の事なり夕霧にいとまこひをし給へかしとなり

とりべ山　○奇特なる歌也葵上をしたひたるさまなり只今須磨の浦に思ひたつよしなり

曉の別は　○宰相の君にの給ふなり江文通別賦云黯然銷レ魂者唯別而已

いつとなく　○宰相の詞なり

きこえさせまほしき　○大宮への御返事なり

ましていはけなく　○源を元服の始より見たてまつりし人たち也

たとしへなき　○なぞらへなきなり

なき人の　○とりべ山の返歌なり都の中を出給はゝ

猶なき人の煙は隔たるべき物をとなり
とのにおはしたれば 〇二條院なり
さふらひには 〇二條院の殿上也
たいばん 〇殿上にあり
みる程たにかゝり 〇俊成卿歌に「あれ渡る秋の庭こそ哀なれまして消なん露の夕暮」とよみ侍りし此心と見たり
にしのたいに 〇紫上の方なり
さしもあるましき 〇平生はかやうのことには御心も留るまじきをと哀れなるなり
よべはしか〳〵して 〇源紫上へ申給詞也
ひたやこもり 〇無意趣也
かゝる世をみるよりほかに 〇紫上の詞なり例のおもはずなるさまにや思しなしつるとあるを受ての詞なりかやうの事の出來ぬるより外にまして思はずなる事は何事かはとの給なり
世のきこえをわづらはしがりて 〇紫上の父宮は人目をはゞかり給故に御尋もなきを紫上は悲しく思ひ給なり
中々しられたてまつらて 〇源の御かたにましますをもしられずしてあるへき物をと思給なり

おもふ人かた〳〵に 〇かた〳〵とは祖母又母上にも早く別給ひ今源に逢奉りて限りなき幸を得給と思しに又程なく別給と繼母の心に聊にく〳〵と云給なり
猶世にゆるされかたう 〇源の詞只今紫上をも相具し給はさる由を理給也
たちまさることとも 〇又是よりまさりていかなることか出來ぬへきと也
師の宮 〇螢の兵部卿の宮也
むもんの御なをし 〇除名によりて平絹を用給也
身はかくて 〇源の歌也
花ちるさとの心ぼそげに 〇女御の事なり
かの人も今ひとたび 〇花散里の上の事なるべし
にしおもては 〇花散里の方なり
やかて月をみて 〇花散里の用意可ㇾ然樣見えたり
みじか夜のほどや 〇源の詞なり
ことなしにて 〇無事にて有し時何とてたへまがちなりしぞと後悔なり引歌に及ばざる歟
れいの月の入はつる 〇花鳥説中納言の君に別れ給し時の事を引くいかゝ只月の入かたを我身に思ひよそへ給也例のとは毎夜の心歟

こき御ぞ　○こきとは紫なり
ぬるゝかほなれは　○あひにあひて物思ふ比の我袖
にやどる月さへぬるゝがほなる
月影の　○花散里の心の中うちむきてよろしきさま
此歌にて見えたり只今の別の名殘をしき心をつゝ
みもせずよめり我數ならぬ身にも此源の御光はと
ゞめてをきても見たきよしなりよのつねの女のよ
みさまにはかはれり
ゞみじとおぼいたる　○事の外に此別を悲しと思す
氣色なればなぐさめ給なり
行めぐり　○女君をなくさめたる也やがて立歸るべ
きの由也
しらぬ涙のみ　○行さきを知ぬ泪のかなしきはたゞ
目のまへに落るなりけり
文集　○白樂天が文集なり
にしのたい　○葵上なり
みさうみまき　○皆所領どもなり
券など　○券とは支證の物なり
なかつかさ中將　○皆源のつかひ給人なり
いのちありて　○源の詞なり
こなたにさふらへ　○こなたとは紫上の御方なり

わか君の御めのと　○宰相なとなり
こはせ給はぬ　○文の詞なり
いまはと世を思ひ給へはつる　○朧月夜をちゝと恨み
給なり
あふせなき　○無實なることの樣によみ給用意あり
若菜の卷に柏木の右衞門督の文を心なきかきさま
との給しもかやうの處なり惣しては實事ある中も
我思ふ心の切なればあひても又あはさる心のある
也さればあふせなきとはをきたるなり用意可然事
也此歌俊成卿の女は此物語の中第一の歌と申され
しとなん
なみた川　○みなは水沫（アハ）なり
うしとおほしなかす　○大后のかたさまなれはなり
あすとての暮には　○かく書たれと又色々のこと此
間にあり
北山へ　○何の所とも見へす北山は岩陰歟岩陰は松
が崎の奥也天曆の陵云々榮花物語に岩陰と云所に
御廟の事ありかやうの事を思て書る歟云々私勘同
物語第九寛治八六廿二一條院崩御葬送七月八日也
八日の夕に岩陰と云所にはします云々

あかつきかけて月出る比　○定家卿歌に其まゝ下の句に用たるかつは式部が高名歟云々「春はたゝかすむばかりの山のはにあかつきかけて月出るころ
たゝかくれもひかけぬ　○源の詞なり
宮の御世だに　○春宮の御事なり
宮もみなおほし　○是は藤つほなり
み山に　○山陵にまいれるとなり
みしはなく　○藤つほの御歌一の句は故院二の句は源也
いみしき御心まとひとも　○艸子地此歌を評する只今の御歌思様なる秀逸にてもなきとなり
わかれにし
月まちいてゝ　○暁かけて月いつる比なればなり
右近のぞうの蔵人　○中河紀伊守が弟なり伊與守子なり
うべきかうぶり　○源の家人なるによりてなり
ひきつれて　○神もうらめしきとなり
かぎりなきにても　○三位の事を云なり十善帝王の位も生を隔て侍れは何事も口惜きとなり
御はかはみちのくさ　○古墳何世人不レ識ニ姓與レ名化作ニ路傍土ニ年々春草生と樂天か作れる心うかかひて面白となり
ありし御おも影　○幻のごとくなり
なきかけや　○折節月の雲がくれたるを見て故院如何我身を御覧ずるにや月の隔たりぬるを心の鬼に思とかめ給也　藤つぼの密通事を思給なるべし
わうみやうふを　○今藤つほの御かはりに是は可然人なりとて春宮にそへ給人也
いつか又　○春宮を申給ふ也
さくらのちりすきたる　○ちり過たるとは散透也
しばしみぬだに　○春宮の御詞なり
ものはかなの　○王命婦の心なり
御かへりはさらに聞えさせ　○是より王命婦の文の詞なり
御前にはけいし侍ぬ　○春宮の御前に啓するなり
そこはかとなく　○命婦の心なり
さきてとく　○花の開落を源の榮辱に比して云なり又こん春は必す待と也
時しあらば　○時あらばやがて帰り給べきとの心也引歌未レ見心明也

おさめみかはやうど　○いやしきものなりやうとの
との字不清不濁さるやうによむべしとなり
ありかたき御かへりみのしたなり　○皆源の御かへ
りみのしたなると也
大かたの世の人も　○此除名の事誰も〳〵心よから
ず思由也
かゝる折は　○世のならひなり
その日は女君に　○此日は未下向なきなり
月いてにけりな　○今出たち給なり
おほし入りたるがいとゝしかるへければ　○うしろ
めたくは思せと女君をなくさめてをき給なりいと
ゝしのし文字はやすめ字也源の悲の色を紫上に深
く見せしとてなくさめたる歌をよみ給へり
いけるよの　○
おしからぬ　○面白歌なり
御船にのり給ぬ　○淀河よりなるべし一日に彼浦へ
下着の事不審也但さることもや
日なかきころなれは　○是はいかなる永日なりとも
あまりに早速なる歟但文章に望てはかやうに書る
事常のことなり

おほえとの　○齋宮歸路の時の旅館なりそれに松は
かりのこるとなり齋宮こゝにて祓をして都に入給
處となり一代一度齋宮の旅舘なれはあれたると云
るにや
から國に　○河海屈原をひけり一人にかきるへから
ざるなり
うらやましくもと　○いとゝしく過行方の戀しきに
うらやましくも歸る波かな　業平旅行の時の詠中
にも此歌哀もたくひなきことなれはふりたりとい
へとも今源氏の吟じ給へるは又殊勝なり
うちすんし給へる　○誰も知たるふることなれと源
の吟し給ふ殊勝なるとなり
三千里の外　○須磨への程は二十里はかりなれど三
千里の外の心ちするとなりあはれ深きものなり三千
里外隨二行李一十九年間任二轉蓬一在昌賦蘇武　十一
月中長至夜三千里外遠行（白氏文集）
かひのしつくも　○泪の心もあるへし此詞面白し
つらからぬ物なく　○折節の心に此山の霞などの無
心なる物もつらきよし也羈旅の感慨ふかきもの也
おはすへき所は　○是よりは舟よりあかり給てのこ

となり
かやゝともさしふける廊　○此所にもとよりかゝる
　體の屋どもありしと見るへし
かゝるをりならずは　○罪なくして配所の月を見ば
　やと云が如し只うちの身にて見侍らはいかに面白
　からんすらんとなり
御さうのつかさ　○御領の者ともなり
うゑ木どもなどして　○末の詞に春秋の花の事あり
國のかみ　○津の國の守なり
なか雨のころ　○夏に成てなり
女君　○紫上なり
宮には　○薄雲女院也
松しまの　○大かたなか雨のつれ〳〵なるを思ひや
　り給なるへし花鳥ついぢなどの沙汰迄は餘りにく
だ〳〵しき歟
みぎはまさりてなん　○是まて文の詞也「君戀る涙
　落そひ此川のみぎはまさりて思ふへらなり　此引
　歌相叶へり
れいの中納言　○朧月夜の御方へなり
中なるに　○

つれ〳〵と過にし　○是より文の詞也
こりすまの　○源の方よりはこりすまに戀しきをそ
　なたにはいかにとなり又は中納言の方への文なれ
　は此人もいかにとなりいかさま鹽やくあまとは向
　ひをさしていへり
大殿にも　○致仕のおとゝ也一註大臣なる人をも大
　殿と云通用したる詞なり大殿へもさま〳〵文あり
　と見へし
ふたかたに　○紫上の御心をなくさめんのれう又源
　の歸京をいそくへき事なり
かとりの御なをし　○平絹なり今源除名せられたる
　故に無官なればなりさる故にさまかはりたるとは
　云へり明緒の字なり平絹の直衣指貫の地の事也夏
　秋は直衣年齢によりて薄色あさきなり冬は白きな
　り指貫も年によりてあさきの淺深きある也
さらぬかゝみと　○前にありし源の歌の事なり
いていり給ひし　○前のもてならし給し御てうどゝ
　もひきならし給し御琴ぬきすて給へる御そとあり
　し詞にかけて見也
世にしほしみぬる　○紫上未だ世に物なれ給はぬ御

よはひとなり
ひたすら世になく　○死別よりも生別の悲は猶深き
よしなり
少納言はそつに　○北山僧都なり
きくほとはちかけれと　○此津の國の須磨なと云は
只打聞には程近き所なれと歸給ふ期なき由なり
としころはたゝ物のきこえ　○薄雲の御心の中なり
かはかりにうき世の　○源密通の事をば世に云出る
ことなきなり人ことは人言なり
やみぬるはかりの　○ばかりのと云にて讀きるへし
大やうに云殘したり其故は人の御ためもむけもうし
と云へる心なり
云出ることなくてやみぬるはかりのなと云へる心
なるへし
人の御ためもむけ　○人とは源の心つかひをいへり
かつはめやすく　○源もよく忍給しはかしこしとな
り
あはれに戀しうも　○草子地なりことはるなりかや
うなる故に薄雲も源をあはれに思すへきとなり
このころはいとゝ　○文の詞なり

しほたるゝ　○鹽をやくを我身の役によせたり
うらにたく　○鹽やくあまやいかゝ思はんとある返
事なれはそなたは鹽やく煙にもまかへ給へきを我
身の方はさやうにまかはすへき煙もなきのよしな
りまして臨の思の行かたもなきとなり
さらなることゝもはえなん　○是迄文の詞なり
ひめ君の御文は　○心ことにこまやかなる御返なれ
はとあるにて源より文ある由は見えたり事しけき
故に此物語にのせさるなるへし二條の君への文の
詞本になし
うら人の　○紫上獨寢のさまなり又は只今との井物
なごくたし給ふよせも下心あるへし
物の色　○くたし給衣裳をいへり
なにこともらう〳〵しう　○紫上を然へき人と思す
なり
今はてと事に　○今は心しつかにわくる心もなくし
て有へき物をとなり
なをしのひてや　○紫上を忍ひてもむかへはやと迄
思すなり
御さうしんにて　○聖廟も御精進にてありし也

大殿のわか君　○夕霧なり
れのつからあひみてん　○つゐにはあひ給ふへきこ
なり
中々此みちは　○人のをやの心はやみにあらねとも
と云にはかはれるにやと也夕霧の事よりも紫上の
事心もとなきとなり夕霧はたのもしき人々もあま
た侍る故なり
恩愛の中には夫婦の中一段大切なるよしなり
まことや　○草子地なり
かの伊勢の宮へも　○六條御息所なり
ふりはへたつね　○わさと使あるなり
ことのは筆つかひに　○御息所をほめたるなり
なをうつゝとは　○御息所の文の詞なり
あけぬ夜の　○夢のやうなると云心なり
さりとも年月　○やかて立歸給へきとなり
つみふかき　○我身の事なり花鳥齋宮にては佛經に
手をふれぬと云事を罪深しとは云と云々如何只我
身のよろつに思ひしつみたる心なるへしさま〳〵
の思なるへし神の事に佛經にうとき說不用也
うきめかる　○須磨にていせのあまをも思しやれと
なり
猶いかに成はつへきにかと　○是迄文の詞なり
いせしまや　○結句云つめたる面白し源はかきりあ
りて歸洛し給こともあるへしと云心あり我身は終
しなきよしなり我身なりけりとよめるにや
うちたき〳〵　○面白きさまなり
あはれにおもひ　○源の心中なり御息所を哀に思ふ
なり
ひとふし　○葵上の事なり
わかやかに　○御息所の御使なり
かく世をはなるへき　○文の詞なりかやうに有べき
事とかねてよりしり侍らは齋宮へ御供申て伊勢へ
くたるへき物をとなり歌も此心歟
いせ人のなみのうへこく　○いせ人はあやしき物ぞ
なぞといへは小舟に乘て波の上こぐ此歌にて詠給
にや
あまかつむ　○我身もいつともしらさるなり
つきせぬ心ちし侍る　○是迄文の詞なり
あれまさる　○此歌の躰にて又花散里の心見えたり
打むきて故郷の躰を云る心中も又哀也下句ふかく

源を思心見たり大かたの人ならは源の羈旅の御すまゐも如何なとあるへきをさも侍らさるたくゐなく見えたり

むくらより外の　○さこそと源の思すなり

かんの君は人わらへに　○朧月夜も出仕を留めさせ給ふと見ゆ

たゝいとかなしう　○二條のたゝなり朧月夜はおとゝの愛子なれはなり

かきりある女御　○女御なとにてもなけれはとなり

かのにくかりし　○源故にこそとなり

猶心にしみ　○源のことを朧月夜は忘給はぬなり

おもひいつることの　○源の御事を内侍のかみは忘給はさるなり

その人のなき　○勅定なり

院のおほしのたまはせし　○先皇の御心にもたかふとなり

えねんし給はす　○朧月夜なり

世中こそあるにつけて　○御門の御詞なり

ちかきほとのわかれに　○源の別にはをとるへきとなり

いける世にとは　○心あさくいひしとなり　「戀しなん後は何せんいける身のためこそ人は見まくほしけれ」心あさくいひしとなり戀しなん後は何せんとよめるはよからぬと朱雀の朧月にの給へり後の世にもとてそちぎるへけれと也

よからぬ人の　○つぎさまの人となりさしもなき人の云をきしことなりと也後世をこそかけて契るへき物そとなり花鳥よからぬ中とは中のよからぬ人と云々如何

ほろ／＼と　○内侍のかみなり朧月夜の泪なり

さりやいつれにおつるかと　○御門の御詞なり我御ためか源の御ためかとなり

いまゝてみこたち　○是も勅定なり此時迄は今上も御誕生なきと也朧月夜の御腹に御子もなきとなり

東宮を院のゝ給はせし　○冷泉院を朱雀の御猶子にさせ給て位をゆつり給へと桐壺帝の御遺言ありしとなり

よからぬことゝも　○此東宮を除て八宮をたて給ふへきとなり弘徽殿の造意なり宇治に至て見えたり

私勘漢高祖八男あり其中准南厲王をは呂后の母として養ひ之後に謀反の心ありし人なり此八宮是に准すへき歟

すまにはいとゝ　○秋にもなるとなり

うみはすこし遠けれと　○前に海つらはやゝ入て哀に心すこげなる山中なりとありさて海はすこし遠と云なり

せき吹こゆると　○花鳥には忠見か秋風のせき吹こゆるたひことに聲うちそふる須磨の浦なみと詠したるを此浦波と云にかゝりて此を本として行平とあるはあやまりたるとしるされ侍るなり如何今案行平は忠見よりは先輩也然れば此行平の歌より此忠見か歌も出來たると見えたり此段の心は彼行平の中納言の關吹越ると云けん所の浦波と云心なり前に心つくしの秋風にと書て爰にて浦波とかける餘情たくひなく見たり

戀わびて　○新古今旅部に京極中納言の「袖にふけさぞな旅ねの夢も見じ思方よりかよふ浦風」とよみ給ひしも此歌を思へるなるべし

あいなうおきゐつゝ　○あぢきなきなるへし

けにいかに　○源の心なり祗候の人々も我身一人のためにかやうのすまゐをもし侍よとなり玉源氏の心に祗候の人を憐み給なり人々の源の事をかなしみ奉るなり

ひるはなにくれと　○人をなくさめん心にてかくし給也

さま〳〵の繪　○此繪後に繪合に出たり

人々のかたり　○若紫の卷にいかに御繪いみしくまさらせ給はんと云し事なり

千枝つねのり　○千枝常則皆繪師也

つくりゑ　○今源の書給は皆墨繪なれは今別に彼繪師ともに色とりの繪をかゝせて見せたてまつらはやと也河海說如何と云々源氏の墨書の繪師に色とらせはやと云說不可然只色とりたる繪なとをかゝせはやと云なりへし

しろきあやの　○花鳥說可然とそ河に白き綾の御衣に紫苑の色指貫と云さも有ぬへし又紫苑色も同く御衣の色と云はんも相違あるへからすきぬとは色々に重てきる故なりこまかなるとは夏の直衣地平絹の無紋にてもあれ色は紫苑花田年齡に依て用な

り花田ならは色のこきを濃と云へし
こまやかに　○色の濃き歟
釋迦牟尼佛弟子　○金剛佛子某なと云か如し
ちいさきとりの　○舟をいへり
かりのつらねてなく聲　○雁陣易レ迷秋ノ嶺上鳧舟
難レ辨夕陽中此句に叶へり
くろきの　○
はつかりは　○雁の聲か悲しきは是も我戀しく思ふ
人の類なりと云々又云ニ待人にあらぬ物から初雁
の今朝啼聲のめつらしきかなの心にて相叶へりか
なしきとは聲を聞て悲みをまし思をもよほす故郷
の人に類するよしなり空といふは空飛也
民部太輔　○惟光也爰にはしめて民部太輔と見たり
心から　○惟光歌なり旅鴈の愁を今は身にしる心な
り心からはかりのさまなり身にかけて見るまても
無歟ニ我今旅の身にて云也旅雁を年月は我心から
なるとよそに思しも今は我身のうへなりけるよと
也
さきの右近のせう　○かりの随身にてありし人なり
とこ世いてゝ　○

ともまごはして　○いつく迄も御とも申さてはとな
り雁のつらなれるか友をまとはしてはいかならん
と云なり我身のともをまとはしたる心より云へる
なり
たやのひたち　○源により相随奉る人なり
二千里外　○河海說殊勝三五夜中新月色二千里外故
人心と樂天か作りしは禁中にての詩なり只今誦し
出し給へる殊勝の由河海に見えたり
入道の宮のきりや隔つると　○榊卷に有し事なり
夜ふけ侍ぬと　○人々の申なり餘りに物思のあるさ
まなるをなくさめ奉るなり源の月を見給を入給へ
と云へきに非す物思入給へるをなくさめ奉るなり
みるほとそ　○月を見る程そと也旅懷をなくさむる
心なり都の事を月宮によせてよめり
その夜うへのいとなつかしう　○榊卷の九重を霧や
へたつるの歌よみ給し時の事なり
思賜の御衣は　○菅廟の御詠也去年今夜侍ニ清涼ニ秋
思詩篇獨斷レ腸恩賜御衣今在ニ此捧持每日拜ニ餘香ニ
御そはまことに　○源の御衣を賜事あるへし此物語
の例ふと書出してやかて實事になる類あまた所あ

り
うしとのみおもほへて ○我身かやうの身に成ても上へ恨はなきなりされと又時としてはうらめしきこともあるなりさて左右とは云へり
左右とは一篇にうしと思はかりにはあらで御衣を身にそへてなつかしく戀しき心もあるとなり
そのころ大貳 ○五節か父なり花散里の卷に五節君に源氏逢給事見たり父の任はてゝ上洛するなり
北のかたは舟にて ○くがをのほるもあるへし
帥の御せうそこ ○大貳なれとも帥と爰には書り帥は親王の任する官也權帥を置て吏務をも沙汰させ侍り親王は吏務をすましき故也權帥のなき時は大貳必吏務をつかさとるなり大貳を帥といへるは帥の闕の時は大貳か帥の事を取行ふ故なり帚木卷に伊與介とある所々花鳥に見たり
いとはるかなる ○是より詞なり帥は一任の間五ヶ年也
あひしりて侍る人し ○今は人しけき故に中々まいりても人々如何となり
ことさらに ○わさと必す參へきとなり

このちくせんのかみ ○大貳か子なり
此との﹅くら人に ○此筑前守は源の御恩を深く蒙りし人なり藏人にも源のなし給なりされと當時の事なる故に憚ありて留まらさるなり大貳も子の筑前も都の聞を思て心の儘にも源へ申相はらす是は君臣の道を思ふ義也凡此卷に君臣朋友の道をよく書あらはせり源は謫居の身なれとも恩賜の御衣を携て君恩を忘れ給はす又三位中將は朋友の信ありてすまに來り給されと物の聞へを思ひていそき歸給是又君臣の道なり
みやこはなれて ○源の詞なり
御かへりも ○大貳か方への御かへりもなり
まか〳〵しく ○枉々なりいま〳〵しきなと云か如し
五せちは ○源へ音信申なり
琴の音を ○源の琴の音をいへり
すき〳〵しさも ○こなたより申はさし過たるやうなるをゆるして御覽せられよなり
人なとかめそ ○いて我を人なとかめそ大船のゆたのたゆたに物思ふ比

心ありて　○心あらはとまり給へかしとなり
いさりせんとは　○篁か「思きやひなのわかれにをとろへてあまのなはたきいさりせんとは」の心なり
むまやのをさに　○聖廟の御句河海に見えたり心は此句詩を聖廟は心なき物に仰せかけ給したにも末代に殘る也此歌はまして今五節君につかはし給事後代迄も殘るへきとなり又の義は今此御消息を申かよはすはがりをも名殘あるやうに思侍るへし爰に落とまりてありたくも思へきと也此説可然歟
くしとらする　○故事を以て書く此物語の面は五節のつれたる人々源の御方に候人々なと物云名殘をしみなとすることを云へり志行所なれは口詩にたとへたるなり又花鳥の義別なり
ましておちとまりぬへく　○人々の物云かはしなとするを聞て五節はまして源氏の所に落とまりてもありたく思ふとなり花鳥の義異なり
命婦の君　○王命婦なり
御はらから　○源の兄弟なり
きさいの宮　○弘徽殿也

かうし　○勘事也勅勘をいへり
かのしかをむまと　○趙高か事河海に見えたり趙高か亂をおこさんとせしを源氏の當今にうしろめたき心あるにたとへて源に心をかよはす人々を彼群臣の高に順して馬と云しによそへて太后の給ふ也
ひんかしのたいに　○初源の御方にさふらふ人々なり
なへてならぬ　○奥ふかくなるさまなり
そこらのなかに　○源の紫上をたくひなくし給ふもことはりなりとなり
かの御すまひ　○須磨を云へり
めさましうかたしけなく　○此いやしきありさまをまちかく見給に付て源の我御身なから忝思すなり
山がつの　○さひたる歌なり心はしは〳〵もこと問こなんといはん爲の序歌なり
大輔　○民部大輔也惟光也
ことものゝこえ　○源の琴の音に感したるなり
むかし胡のくにに　○源の心なり明妃は胡國へ獨行侍り我は都に女を捨てをき侍るよとの心なり
霜ののちの夢　○胡角一聲霜後夢漢宮萬里月前腸

ゆかのうへに夜ふかき空も　○軒のみしかきさまを
云り故宮の詩に終夜床底見二青天一と云るにも心か
よへるにや
たゝこれにしに　○天廻二玄鑒一雲ヲ將霽唯是西行不
左遷
いづかたの　○我は左遷したるなり
ともちどり　○結句面白したのもしとは我も都の人
にともなふこと時あらではあるへき歟と也
家にあからさま　○こゝに祗候する人どものことな
り須磨にての私のやとりへの事なり
あかしの浦　○つれ〳〵なるまゝ文をやるなり連々
かよはするなり
返事もせす　○むすめの返事はなくて父の方よりか
やうに云なり
うげひかさらん　○むすめの事を云ひかゝりてせう
いんせすはうしろてもいかにとなり
かみのうかりのみ　○國は皆當時の守にこそしたか
ふなるを此入道ひがめる心は何とも思はざるなり
この君かくて　○入道の北方にかたらふ詞なり
あこの御すくせ　○入道のむすめの事を云なり

はらたちて　○入道腹立するなり
えじり給はし　○夢のつけありし故なり
つふやく　○入道のつぶやくなり
いかにものし給ふ　○北方の事なり源へ此むすめを
まいらせんことを庶幾せざるをとかめたる詞なり
君ぞとは尼公(北方)を指て云なり
按察の大納言　○此入道と桐つぼ更衣といとこなり
いとかうざく　○よき事なり女のさいはい有後迄光
ありし例を引なり
たほしすてじ　○源の思し捨しとなり
身のありさま　○明石上の心なり
すまには年かへりて　○源廿六歳なり
二月廿日　○去年の此比そかしと思し出給なり
うちのうへ　○其時朱雀院春宮にてまし〳〵し時な
り
わかつくれる　○花の比なれは思出給あはれ也
いつとなく　○百敷の大宮人はいとまあれや櫻かさ
してけふもくらしつの心なり
うれしきにも　○憂喜一なりとなり　嬉しきもうき
も心はひとつにて分ぬものは涙なりけり

すまゐ給へる　○すまのてい也
たけあめるかき　○からめいたるさま也　五架三間
新草堂石階松柱辨編墻樂天
ゆるし色　○源の衣裳也花鳥にくはしゆるし色のうちぎ青にひの指貫と云べきとて先此色を出して後に衣裳の名を明せりゆるし色はうす紅を云也黄かちなるとは落紅の黄なるかたによれる也青鈍は花田に青けの交れる制限云々黄かちなるとは此事也但淺紅輕黄未及火色者不在三善淸行禁淺紅衣服奏淺云
かひつもの　○海士のかづきしたる物なり又は海物なり
そこはかとなくさえつり　○海士のさへつりなり
くらかなにぞなる　○倉やなぞなるなり稻ともとは秣なるへしかきさま面白しいねとり出なとして御まくさもよしの心をとれるたくひなしとなり
あすかゐ　○御馬ともに草飼ことによりてみまくさもよしとうたふなり
つきすへくも　○草子地なり
ゑいのかなしみ　○樂天か詩河海に見たり

悉皆此段は樂天か元稹にあひたるを心に持て書なり
をのかじゝ　○私の別なり
さいひなからも物のきこえ　○此段奇特也世を憚りなからも親眤の中なれは參り給へる勿論なりさありとて世の聞えともあれとはゝからさるは朝家をかろしむるなり然は須磨へ參り給は朋友の道を失はさるなり忍てはやく歸給は君臣の道を守るなり
あかなくに　○かりなると鴈とによせてよめり歌の面は鴈と心得へし三位中將の歌也秋の鴈のやうに見ゆ只此時の歸さのことをよみ給へる計にや
さるへきみやこの　○三位中將のみやげなり
風にあたりては　○胡馬嘶二北風一故鄕を思心あり
いつかまたたいめん　○源の詞なり
さりともかくて　○三位中將の詞なり
雲ちかく　○鶴に三位中將を比していへり雲井に近くさふらひ給ふへきとなり我はをかせる罪もなき身成となり
かつはたのまれ　○我は罪なき身と思へは歸るへき道は必とこそ思へども昔よりもとのことく成人は

まれなりと也
聖廟なとのためしをも思へり
たつかなき　○たつきなき心なり鶴にそへたり
むかしのかしこき人たに　○菅家の御事に相當れり
又只大方にても
（再出）たつがなき　○たづきなき心なり鶴にそへたり
いとしもと　○思とていとしも人にむつれけんしか
ならひてそ見れは戀しき
やよひの一日に　○上巳のはらへなり　河曰漢代三月上巳百官東派水上禊飲自レ魏以後用ニ三日ニ不レ用ニ上巳ニ鄭國俗桃花水上以ニ上巳ニ祓除ニ不祥ニ
軟障（ゼジヤウ）　○つゐたち障子などのやうの物なり假名にはぜんじやうとかける本あり只ぜじやうとよむへし
河曰軟障有ニ書圖ニ松也謂ニ高松軟障ニ堂上立ニ軟障ニ堂下引レ幔又堂下にも有レ立レ之内宴岐樂之時云々一註幕の如なる物に高き松なと繪に書て壁に添て引也
この國にかよひける陰陽師　○昔は國々に陰陽師醫師を置かれ侍り河海に道滿法師の事をひけり其義に及はさる歟
しらざりし　○我御身のなりは此人の形の如しと也

はれにいてゝ　○いよ〳〵くもりてなく源の御形の見えたるなり
やほよろつ　○祓をし給ての歌なり
との給ふに　○の給にと書てやかて風雨の變をあらはしたる心は源の只今罪なき由を詠じ給ふに此歌に天も感じて俄なる雨風有て都迄吹て是故に深くめしかへさるゝなり周公旦の讒言をふくめるなり
ふすまをはりはる　○波の白きを云なり花云ふ家定明月記云雨脚融レ地電光張衾云々
たとりきて　○やとりへたどり來てなり
けしきづきて　○よのつねの風は兼て催して吹ことあるを是は俄に大風吹なり
たかしほと云もの　○大伴の皇子其の比波風吹てたかしほといふ物入ていとをそろしくやども皆流れて寢殿もゆるぐいぎたなかりける人々皆流にけり云々
願引ちから　○此風故に願をたてたるなるへし
宮より　○龍宮よりの事なり花鳥說面白し
このすまゐたえかたう　○明石へのうつろひ書出すへき發端なるへし

なご宮よりめしあるには　○玉云さば海の中の玉龍彦火々出見尊兄ほのうゝりの尊の釣を取て魚にとられてたゝすみ給し時鹽土老と云へるものさま〳〵の術をして彦火出見尊を海中に入奉りて豊玉姫にあはせ奉て後にて珠滿珠を得て歸給事あり此事なごを思給ふへし　花云彦火々出見尊釣針を失給てわたのへに入て尋給けるを龍神貌絶せりとめて奉てむすめ豊玉姫に合てわたつ宮に三年留奉しなり日本紀に見たり又日本武尊東夷を征し給ふ時相模國より上總國に渡給しに龍神めてゝ尊を取奉らんとしけれは波風あらくて御船沈まんとせしに橘姫尊の御命にかはりて入給て失給けり是は彦火々出見尊を源氏にたとへ龍神を豊玉姫を合奉りしを明石入道の女になすらへてかけるなり

明石　巻名以歌幷詞名たり源廿六歳の三月より廿七歳の秋歸京の時の事まてをしるせり

なを雨風やます　○三月一日の上巳の祓の時の事なり花鳥周公旦の事をひけり

心つようしも　○左遷の愁の外に又かやうの風雨の恐怖あるは悲みのきはまれると也花帥内大臣伊周公播磨國に流されて後又ひそかに都に上りて母君に逢給事きこへて重て罪を得て更に太宰府へ流され給へり榮花物語に見えたり

かゝりとて　○雨風故に歸京すへきことも如何と也

世にゆるされもなくては　○伊周公のこと花鳥に見えたり

波風にさはかれて　○人きゝを遠慮し給ふなり殊勝なり上機の心つかひなり

御ゆめにも　○須磨の巻にありし龍宮へめすことなり

空のみたれに　○只雨風のみたれなりあなかち天道のみたれにはあらす

二條院　○紫上よりの御つかひなり

あやしき　○此御使也簑笠などの躰なるへしあはれ

なり
我ながらかたじけなく　○花鳥辱の字也身もはづかしき心と有尤可ν然我ながらかやうの物をなつかしく思して對面あることの恥しきよし也
あさましくをやみなき　○紫上よりの文の詞の中をこゝに書たるへし
空さへ　○此さへの字にて心の中もあらはれたり
うら風や　○あはれなる歌なり幽玄の歌也
京にも　○此御使の中なり
仁王會　○七難即滅の心にてかやうの時必をこなはるゝことなり
たゝれいの　○是も御つかいの申也
いとかく地のそこと　○京はこれ程[illegible]てはなきと也
ひふり　○霰なとのふるなり此さとしは周公の東夷征の時天變の有し類也花云周公旦のよそへ榊巻にも見ゆ
あるかきり　○をぢれそれたるなり
われはいかなる　○祗候の人々の云なり
すみよしのかみ　○住吉神彼御神往還の舟を守らんの誓なり花

君は御心を　○源はしつかに思づよりて居給なり
れの〱みづからの　○祗候の人々なり源をたすけ申へきの由なり
ていわう（帝王）のふかき宮　○源氏の無ν罪よしを空にうつたふる也聊も世の煩なとはし給はさりし人なり陰德陽報あるべき事をと也
家をはなれさかひをさりて　○公卿ハ非ν公事ニ不ν越ν境とこそ云へるにいかなることにかとなり
おほいとのと　○雜舍なり
夜をあかしてこそは　○此雜舍にて夜をあかし給ふなり
柴の戸たしあけて　○雜舍の柴の戸なり源の性靜かなる所見ゆ
この風いましはし　○海士ともの云なり
海にます　○海にます神は住吉の明神をいへり又前に海の中の龍王萬の神達に願立させ給とあり龍神にても有へし兩說ともに用之やはあひは深き心なり祓の詞八萬會（ホアヒ）と書り
さこそいへ　○上詞に君は念誦し給てなどさかしく書しに對していへり

こうして　○花鳥劫の字と云々如何國の字たるべき歟
かたしけなき　○きたなげなる所なり
たゝよりゐ給へるに　○うるはしくはいね給はざるなり
かしこき御かけ　○夢中に院へ申給なり
いとあるまじきこと　○院の御返事なり
いさゝかなるものゝむくい　○薄雲密通などのことなるべき歟又さならでもあるへし
れかしありければ　○延喜御門の天子に父母なしと仰られし事を引り又さもあらすとも
われはくらゐにありし　○御門御在位の時なり
いみじきうれへ　○源の身上の事也
奏すへき　○源の歸洛のことなるへし
月のかほのみ　○以下の詞妙絶なり杜子美が落月滿屋梁と云へるに心かよへり
年ころのゆめ　○海に入なきさにのぼりてと仰ありし故に源の御身かやうの事なからましかは夢にもかくさだかに見奉るべき事もあるまじきに是もさいはひなるとなり孝心の至りなりかゝる左遷の悲なくは父御門を夢にも見奉らしとなり
いますこし聞え　○御物語をもうけ給はるへき物をとなり
又や見ね給ふと　○ねぬる夜の夢をはかなみの心なり
さきのかみ　○明石の入道なりもとの播磨守なり
源少納言　○良淸なり
とくいにて　○國にての知音なるなり良淸か父も播磨國守なりし便なり
わたくしにいさゝか　○むすめのことを云よりしを云なり
君の御夢なども　○源は夢を思しあはするなり
いぬるついたちの日　○三月一日上巳のはらへし給し日よりの雨風なり
十三日に　○夢のつけなり
雨風のおどろかし　○入道さとき心にて思よるなり
夢をしんじて　○故事不レ可ニ勝計一
あやしき風　○順風なり
こゝにもしろしめす　○こなたにも自然告などありしにやとなり

夢うつゝさま〳〵　○龍宮よりめすともあり又故院も夢に見へ給ひ又かやうにうつゝにもあるをさま〳〵とはいへり
よの人きゝ　○世界より雨風にたそれてなどの人ぎきを如何と遠慮ありながらなり
後のそしり　○上の詞にありし遠慮ありながらなり
又これよりまさりて　○又是眞實の神慮にてもあらはそむきかたき事なりなと思すなり
うつゝさまの人の心たに　○眞實の神の助にてもあるやらんをそむき難きとなり又云うちむきてうつゝの世間の人の事さへそむきてあしき事のあるをとなり又現在の人の事さへ神の助を頼へしましてかゝる身にては神の告ならんには尤可レ頼事なり
はかなき事をかつみる〳〵　○辛苦の事とも有しなりかく悲を極めたるうへにては何事のあるへきぞとなり
われよりよはひ　○官位もたかく又年齢もまさりたる人にまかすることよしとなり明石入道は齢たけたる人なり打任すべきとなり
しりぞきてとがなし　○退（シリゾキ）は退休の退にはあらず人に隨ふ心なり人の義に隨ひてとがなきなり
けにかくいのちをきはめ　○辛苦をつくし給しとなり
のちのあとの名　○人の云へき一旦の名をは思給はさるとなり
ちゝみかとの御をしへ　○夢の御告なり
しらぬ世かいは　○源の御返事なり
うれしきつりふね　○引歌よく叶へり「波にのみぬれつる物を吹風のたよりうれしき海士の釣舟
かきりなく　○入道のよろこへるなり
れいの風　○順風なり
あやしきまて見ゆる　○よのつねならぬ順風を云り
濱のさまげに　○入道の住かのあたりなり
人しげう見ゆる　○須磨よりは人目もあるよしなり
けうをさかすへき　○可レ催レ興也
三昧堂たてゝ　○種々のかまへなり
すみよしの神をかつ〳〵　○入道の本意ある故なり
月日の光を　○入道の夢に見しことにたよりあり若

菜巻に見たりかつ〳〵云出したり
繪にかゝは心の　○妙なる詞なり
月ころの御すまゐ　○すまをいへり
まいれりし　○前に參し紫上の御使なり須磨にとゝめ侍しを只今めしよせ給て御返事を給るなり
いみじきみちに　○かく地のそことをるはかりのひふりいかつちのしつまらぬ事は侍らざりきなと云し事なり
文とも　○京の使は須磨に留りたるを又めしたり
返々いみしき　○文詞なり
かゝみをみても　○紫上の歌須磨の巻に見たり
うれはしさはさしたかれて　○今一度あひ見んことを思となり
はるかにも　○第三の句面白し須磨も明石も我しらぬさかいなれはなり
いとみまほしきそはめ　○さぶらふ人々のそばめなり
れの〳〵ふるさとに　○人々故郷の言傳をするなり
こゝはまたさまことに　○須磨よりはまさりたるなり

おかしと　○若紫巻北山にて良清か物語よりなり申せしことを思しあはするなり
みやこの人も　○紫上なり
いひしにたかふ　○引歌に及へからす紫上の思さん所も憚あれはこなたより打出の給ふことはなきなり
こゝにはかしこまりて　○入道の禮義ふかきさまなり
おもふ心を　○むすめをたてまつらんの心なり
さらほひて　○やせ〳〵なる體なり
としころおほやけわたくし　○源は年來隙もなき故によくたち入てもしらせ給はざりしことなど物語申さまなり
かゝる所をも　○かゝる所をも御覽せずしてはと思すなり
かうはなれきこゆれと　○入道の心なり源のけだかきさまなり
さうじみは　○入道のむすめのことなり
四月になりぬ　○入道の方より調進するなり
いとおしう　○非分なることゝなり

おもひあかりたる　○源をあくまてかしつきたるに思しゆるすとなり

あはとはるかに　○躬恒か歌に「あはちにてあはとはるかに見し月の近きこよひは所がらかも」此歌は阿波渡なるへし花鳥に見たり

あはとみる　○是は水の泡なるへし此さへの字は躬恒が歌に詠せし時の哀さへ殘らざるのよしなりあはと見るは海の泡のやうに淡路のうかび出たる心なり一註は昔のうたによみし月のあはれさへとなるべし

かうれうといふてを　○琴の秘曲なり　廣陵散河云晉嵇康宿ニ華陽亭ニ彈レ琴夜半夢有客來曰我是堯時樂士伶倫也令レ授ニ廣陵散ヲ自レ是叔夜琴名大震ニ于世ニ矣花曰廣陵散は琴秘曲也嵇康神人に逢て傳たる曲也此神人は昔の伶倫の變化なり箋曰此曲こゝにふと書たる心あるへし上に此夢にも同しさまなる物のみまとはしつゝとあれば今源の此心よりふと彈じ給ふなるべし

しはふる人　○只いやしき人迄なるへしはの字濁れは柴ふるひ人とひの字を入て讀也はの字清ばひの字を除て讀なり其故は年老て皺なごある人となり

はま風をひきありく　○面白き書さまなり俗にいへる風をひくなり

さらにそむきにし　○入道まいりて申なり

のちの世にねかひ侍ところ　○極樂世界の事なり

かきならし給るへころ　○さま〴〵の事心にうかびたるに依て心すごかるへし怨者其吟悲の心也

入道ひはのほう　○昔は盲者の琵琶をひきてありきしなり

さま〴〵いみしう　○よろづ源の具し給たるよと入道奇特に思たてまつるなり

いとさしもきこえぬ　○萬事折から所からなる物なり

中々春秋の花紅葉　○四月の初の景氣の面白きさまを至極あたらしく書なせるたくひなきうへに定家卿「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫やの秋の夕暮」ととりなされたる深重なるとなり

たかかさして　○また宵に打きてたゝく水鷄哉たか門さしていれぬ成らん

これは女のなつかしう　○箏の事を源のの給詞なり

延喜の御てより　○河海說しかるへし代は七代なれ

と血脉三代と見たり
あやしうまねふ　〇入道はむすめのことをいへり
せん大王　〇一本前王とあり花鳥此れによれり青表紙は大王とあり大王とは親王をいへり然れば延喜帝の誰人ぞ親王に傳へ給へるを其御手より此入道の傳たるなるへし大王と侍る尤可レ然也
いかてこれしのひて　〇源の御耳に入たきりとなり
君ことをことゝも　〇松風に耳なれにける山伏はことをことゝも思はさりけり」さやうなる耳聞のある所とも知さりしよとてをしやり給也花鳥義可レ然
あやしう　〇源の詞なり心は明石上てとの上手にて源氏のしらへ給をもよくも聞ましきにとなり
女五宮　〇繁子也但血脉にはたしかに不レ載レ之さるほどにとりたてゝつたふる人なしとはいへり　源氏の物語し給なり嵯峨御門の女五宮の上手にておはせし昔のことをかたり給なり
こゝにかうひきこめ　〇明石上の引ことなり
きこしめさむには　〇入道の詞なり
れまへにめしてもと　〇讀きりて心得へし此語影略して見侍るへし
あき人の　〇琵琶引よく叶へり商人の妻なとのひきたるをもきゝはやす人のありしとなり
ひはなん　〇此語决前生後の詞なりかやうの筆法心をつけて見侍へし
いかにたとるにか　〇たつね知たる心なりむすめの事を云也
あき人のなかにてたに　〇箋曰此琵琶引をひき用事甚深の心あるへし彼樂天太子賓客にて時世を得しも江州司馬に左遷せられき今の源氏も春宮の御後見なれは此浦にて物音きこしめしはやする樂天か故事に面影相似せり然も入道の女を商女に比して卑下したる義旁以有味也
すきゐたれは　〇すき〳〵しきなり
さうのことゞりかへて　〇入道にひかせんの御心なり
をかしとおほして　〇源なり入道にひかせ給はんためなり
けにいとすぐして　〇すぐしてとはすゝみたるなり又當世ならぬ手をひく也ふるめかしき人なり

ゆの音　○由音也左手也
伊勢の海ならねと　○明石なるによりて伊勢の海ならねとゝいへり
さけしひそし　○そしは殺也愁殺すなと同心なり
いとゝり申かたき　○入道思あまりて娘の事を申なり
十八年に　○むすめの年十八歳よりは年たけたるへきなり然ば願をたてはじめしより今年迄十八年なるへし
くちをしき山かつに　○入道自の事をいへり
おや大臣　○入道のおやなり
うまれし時より　○夢想ありしことなり
あまたの人のそねみ　○代々此國の守より所望ありしにも領狀なかりしてとなり良淸なとも此たくひなり
よこさまの　○源の語なり返答なり
かくさたかに　○前の入道の詞に我君覺えなき世界にかりにてもうつろひおはしましたるはもし年比老法師の祈り申侍る神佛の憐れはしましてしばしの程御心をもなやましたてまつるにやとありつる詞をかくさだかにとはの給へり
いたつら人をは　○罪にあたりたる身にて侍ればと卑下しての給ふなり
ひとりねは　○入道の歌也そなたよりも此邊のひとりねをはしろしめしたるかとなり
されとうらなれ給へらん　○源のなれぬ旅寢はましてとなり
旅衣　○我は旅の身なれば一しほのかなしみもあるとなり　潮聲偏恐初來客海味只甘久住人の心あり
うらかなしきは只物かなしきなり花鳥に心かなしと侍る如何
數しらぬ　○草子地なり
おもふことかつ〳〵　○入道の心中なり
又の日のひるつかたをかへに　○源の文なり
なか〳〵かゝる　○人の心つかいあるへき事なりかた邊土なるとてあなつるましきよしなり
をちこちも　○源はたゝ入道のをしへのまゝなりいつくをいつくとも分別もなきとなり
おもふにはとはかり　○思ふには忍ぶることぞまけにける色には出じと思しものを

入道も人しれずまち聞ゆ　○源の御文を待なり
まはゆきまで　○響應するなり
いともかしこきは　○文の詞なり
たもとにつゝみ　○うれしさを何につゝまんから衣
の歌より書けり
さらにみたまひも　○むすめは中々と思となり
さるは　○さはあれとなりかたちけなさは御返も如
何と覺ゑ侍れと又打をくへくもあらすとなり
なかむらん　○源の心もむすめの思も同し心なるら
んとをしはかりたるなり
いとすき〳〵しや　○入道のをしはかりて申侍るも
すき〳〵しきとなり
玉もなとかづけたり　○女裝束なればなり裳を藻に
よせていへり海邊に便あり後撰黒主「をきの玉藻
をかつく身にしてともいひ又涙にうかふもくつな
りけりとも云り
又の日　○源よりかはし給ふなりせんしかきはおほ
せがきなり
いふせくも　○引歌「戀しともまた見ぬ人のいひか
たみ心にものゝなけかしきかな　此歌よく叶へり

やよと誰に云へき人もなきとなり
このたひはいとゝ　○わさとけふの文は艶書たちて
書給なり先はしめたる時はなよひたる躰ならで次
第に如此也
さらになすらひ　○たくひなくは思へども我身に相
應せさることゝ卑下したるなり
しめたる　○たきしめたるなり
たもふらん　○此歌また見ぬ人同歌詞にてよめり女
の身を卑下したるなり又一義に源のまた見もし給
はて聞なやみやし給らんさやうならぬ身なりとな
り
○源の御心をしらさるとなり云かたみの歌を受て
云なり下句源のいまた見もし給はては聞なやみも
し給はしの心なり一目も御らんしもせすして聞給
ふはかりにては如何となり又はまた見ぬ傍人のあ
つかひを思となり只前の義然るへきとなり
京の事　○今はかやうなる事も思離れしを此事故さ
らに京を思出給なり
つれ〳〵なる夕暮　○此心面白し人も見しりぬへき
折節をはからひてと次の詞にいへるに叶へり如此

の心つかひの事帚木巻品定めにも物うらめしき折
待かほならん夕暮なりなとあり
見てはやまし　○濁みでは也
めのまへにおもひたかへん　○良清か我物のやうに
領して物語申しに今目の前には如何にしてむかへ
てんと思すなり
入すゝみまいらは　○入道の方よりまいらせはよか
るへきと思すなり
女はた中々　○此むすめ心源のあなかちにの給はす
はと思故に心くらへなるなり
京の事をかく關へたゝりては　○須磨より此浦にう
つり給て關のへたゝりたる故にいとゝ遠さかる心
を思ふべし
たはふれにくゝも　○紫上を悲く思となり「ありぬ
やと心みかてら相見ねはたはふれにくき迄ぞ戀し
き
しのひてや　○紫上を此あかしへむかへはやの心也
いまさらに　○源の遠慮なり
三月十三日　○とりわきて恠異あるなり須磨にての
雨風の時の事なり

源氏の御　○草子地なり
いとおそろしう　○朱雀院の御心なり
雨なとふり空みたれ　○河海に六夢の沙汰あり
御めわつらひ給て　○花鳥三條院の事あり
内にも宮にも　○宮とは太后なり
おほきおとゝ　○悪大臣二條太政大臣なり弘徽殿の
父なり太政大臣に任じ給ふ事見えす但前にもあり
一本おほぢおとゝと云々
世のもとき　○太后の申給なり
みとせをたに　○流移の人六歳にて歸洛又三歳にて
ゆるさるゝこと獄令の文花鳥にありされはみとせ
をたにとの給なり　律第一名例第一云凡除名者
官位勲位悉ク除ク課役從ニ本色ニ六歳ノ後ニ聽シ敘ス免官ハ
者三歳之後ニ降テ先位ニ二等ナ敘ス唐律註除名トハ者官
爵盡ニ既ニ除ク故課役從ニ本色ニ也免ケ官ハ者免ニ所レ居
官ヲ云々愚案只今源氏は除名とも免官ともさたま
らずみづから退きたる人なりされは免官なりとも
三年をこそをくらるへきものをと云へるなり尤面
白き書さまなり花鳥には令をひいて徒罪のことを
ひけり凡律はよくかなへり　後漢書董卓傳董卓死

後其將牛輔旣敗衆無依欲各散去李傕等恐ァ乃遣レ使ヲ語レ長安求乞散免ヲ王允以爲一齡ニ不レ可レ棄ニ散一不許之云々

こちまいらせよ　○こなたへむすめをまいらせよとなり

さうしみ　○此むすめなり

くちおしききは　○一任四ヶ年の人なと　の人にかたらひつくことはいやしき物なとこそある事にて侍れとなり

人かすにも　○自然御氣色もなくてはなり

世こもりてすくす　○世中にもましはらさるさきこそとなり一度も人に見ね侍て後させることもなくては親のたのむ處なかるへきとなり

あひなたのみ　○かひなきたのみとなり

弟子ともなとに　○弟子とは眷屬ともを云也　源内侍のすけ出家せし處にも宮の御弟子と云へるも同し

十三日の月　○八月十三日なり

すきのさまやと　○すき〳〵しきと思すなり

あたら夜　○心しられん人に見せはやの心なり

夜ふかして　○みやこなとの人きゝを忍ひ給ふなり

思ごちみまほしう　○思ごちいさ見にゆかん玉津島
　入江の底に沈む月影

戀しき人の　○紫上也

やかて馬ひきすきて　○此儘都へゆかはやの心なり

秋の夜の　○都へあくかれて出たきの由なり此段物語のかさりに書りやかて岡べのやとの事をこそかき侍るへきを此歌なとをかける物語の餘情ふかきものなり

つくれるさま　○岡邊のやとを云り

いたき所　○心いたきまてなり

海のつら　○入道の濱の家の事なりひろきさまなり

これは心ほそく　○岡べのやと物あはれなるさま也

こゝにゐて思ひ殘す　○女なとの獨りねに思殘すことはあるましきとなり

三昧堂　○入道のをこなひつとむる所なり

月はれたるまきの戸くちけしきはかり　○此詞殊勝と見たり河内本けしきことにと云々凡今夜源をさして待かほならんもさし過てにくきけあるへし又あまりに閉籠りてもあしかるへきをけしきばかりと云へるわたり尤艶なるなり　此所にて此時源氏

を待むかへ奉らんにさし過たらんも又心つかひなからんも如何にそあるへきを氣色はかりと書て尤艶なるにや
うちやすらひ　○源なり
かうまてはみえたてまつらしと　○明石上の心ふかきさまなり
こよなうも人めき　○源の思給なりあまりなるけしきなることなり大方源の物の給人々にかく迄つれなきさまなる人はなかりし物をと思すなり
いとかくやつれたるに　○我身の只今よろつやつれさせ給ふ故かと思食なり
なさけなうをしたゝん　○源の心なり
心くらへに　○源の詞なり
物おもひしらん　○草子地なり明石上より今ちと物の心をしりたる人にとなり
さうのことの　○明石上奥さまへひき入たるを源のしたひて入給と見えたり此箏なとは座の奥つかたにあるへし　女のすこしひき入たるによりて箏なとのある奥なる所のさまを書たるへし
このきゝならしたる事を　○事の字を琴にそへたり聞ならしたるとは入道の明暮かたりし故なりむつごとを　○源の歌なり源の身上はまことに夢中の如なるへし思人とかたり合せなは夢の如くなる身うへの物思なともなくさむへしとなり　明石上の打とけぬさまを恨みたる歌なり
あけぬよに　○只我身も夢中なり何れを夢ともしらさるとなり
なに心もなく　○今夜源の御出あるへきよしをは入道内々もいひきかせさるへし
さうじのうちに　○女すこし奥に入たると見ゆ
されごさのみも　○しゐてもをしたち給はぬさまなりとかきて此語を書出したる面白しからうしてつゐに内に入給ふよしなり
そびえて　○河海説ほそやかなると云々如何たゝ人に打むきて人まかせなるやうにはなきとなり一かごあるさまなり
かうゐながち　○源の心の中なり前世よりの契かとなり
つねはいとはしき　○あふ人からの秋の夜なればなり須磨などにての獨臥のことに思し出たり

御ふみいとしのひて　○此程は大かたの御文なり今日は後朝の文なれは忍ひ給となり
あいなき御心の　○草子地なり
こゝにもかゝる事　○今日は入道も忍ふなり御使をもてなささる也
はともすこし　○道遠なり前にもやゝ遠く入處なりと云々
たほしはゝかる　○京のきこへを憚かるなり源の例の遠慮あるさまなり
されはよと　○忍ひ給ふ故にたへ〳〵なるを云り
たゝ此御けしきを　○入道は源の御出を聖衆の來迎よりは待事にし侍るなり
二條の君の　○源の心の中なり
かゝるかたの　○紫上嫉妬のかたは心深きよしなり
まことや　○文の詞なり
又あやしう　○明石上のことをほのめかし給ふなり
ちかひしことも　○忘れしと誓しことをあやまたはみかさの山の神もことはれ　○誓言をたて給しことなり
なにことにつけても　○此詞歌へつゝけてかけるなり

しほ〳〵と　○何事につけてもと云詞を上にをきて見るへしこゝは只かりそめなりまつそなたをこそ思へのよしなり
しのひかねたる　○是より紫上の文の詞なり過にし方のことにも思あはすることも侍りされは此浦なとにてかやうのことあるへしとは思はさりしとなり
うらなくも　○我は淺はかに波は越ましきと思しとなり
名殘ひさしく　○かやうに紫上のかすめ給しをあはれと思て明石上にも久しく御出なきなり
女おもひしもしるき　○入道の海に入ねと云ひしに今源の思すて給ふ故に身もなけつへきとなり此語面白し
たゝそこはかとなく　○獨身にてありし時は中々物思もなかりし物をとなり
なたらかに　○源に恨あるさまはなきなり
あはれとは　○源の心中なり
やんことなきかた　○紫上なり

たゝならすうちおもひ　○是さへ紫上の思そふへきとなり

ゑをさま／＼　○紫上なとへ上せて見せ給へりと見ゆこの繪を見給はゝ定て紫上の返事も心ことにあるへしされは返事きくへきとあるなり是は繪合に出たる繪にてはなきなり　繪の事一註返事は紫君の返事に思よせていへり又義大樣に心得へし繪なとをかきあはれなることともを見ん人の又哀なることなとあるへき樣なりとあり紫上なとの事なるへし

いかてかそらにかよふ　○同時に紫上も繪をかきをき給しなり

いかなるへき　○此行末いかなることゝもかあるへきと草子地書なり

年もかはりぬ　○源氏京を出て三年めの春の事なり廿七歳なり此年歸洛なり

右大臣　○鬚黑の父大臣なり承香殿の女御は鬚黑の妹なり

たゝこみこ　○後に今上と申なり

春宮に　○冷泉院なり

御めのなやみ　○朱雀院なり

かさねて　○前にゆるされ給さため出きぬといへりさてこゝを重てと書り

六月はかりより　○明石上の懷姙なり

あやしう物おもふへき　○一生涯物思ひのたへかたきとなり又今あやにくなることかな是も宿因なりと思ふなり

つひには行めくり　○都を出し時は必す時ありて歸るへき頼みありしに此浦は又かへりみすへきこともかたき別なれは一しほ名殘もをしきとなり

月もたちぬ　○七月の事にや花鳥には六月と云々程さへ哀なる空の氣色といへり初秋のさまなり

なぞや心つから　○源の心なり

心をしれる人々は　○惟光なとなり

月ころはつゆ人に　○明石上のことを忍ひ給由なり

少納言のしるへして　○良清なり若紫にありし事なり

たゝならす　○良清か心なり我も云よりし物をとなり

さるへきさまにて　○京へむかへてんと思ふなり

たゝかはかりをさいはひにて　○此儘にて源の打捨給ともも此程の御契はかりにても其身に取てはさいはひなるへきとなり
めてたきにしも　○かやうなるに付てもと思となり
しほやくけふり　○折から此浦をはなれ給へき折節秋の哀ともを書る也されはみをつくしの巻にも夕の烟なとゝ出るは此時の事を心にしめ給成べし
このたひは　○つゐには同し方になひくへきとなり
かきつめて　○とりあつめてなり
あはれにうちなきて　○明石上の體よろしきさまなり
一ことをたに　○事を琴によせたり
入道もえたへで　○明石上をすゝむるなり
入道の宮の　○薄雲女院箏の上手なり
ねたきねそ　○一かとあるなり
この御心にたに　○源の御耳にもめつらしと思す手を引なり
なをさりに　○一言を琴によせたるなり琴は又かき合するまての形見にとあるをそれはなをさり事なるとなり

このねたかはぬ　○やかてと云心なり
うちすてゝ　○身をも捨んなと云心をよめるにや
としへつる　○花鳥に恨たる心によめり云々いかゝこゝを波にあらしも今源にともなひ奉りてのほりたきとなり只打思たるまゝを云なり　明石上の身をたくへましとよめるは此折節切なる思を忍ひあへぬ心なり
心しらぬ人々は　○明石上故名殘を惜み給をも知さる人は只かりそめなれと此浦の名殘を惜み給かと思となり
をろかならす　○明石上を然るへく思給故と良清とは思ふとなり
うれしきにも　○草子地なり
よる波に　○しほとけしはしほたれたるなり
かたみにそ　○ぬきかへて形見にとゝめ給はんとなり奉りかへてつかはす心ある歟
心さしあるをとて　○只今入道の奉るに着かへ給ふなり
入道いまはと　○遁世の身なれともとなり
世をうみに　○此岸は今世をいへり只こゝをえ立さ

らぬなり
心のやみは　○子を思ふ事なり御上りに御をくりにもまいらはそれに付てもむすめの事を思へしとなり
すき〳〵しきやう　○むすめのことをかすめ申なり
ところ〳〵うちあかみて　○泪くみたるさまなり
思ひすてかたき　○源の詞なり懐姙のことなり
いまいとゝく　○やかてむかふへきとなり
たゝこのすみか　○明石上をはやかてむかへて見侍るへし此すみかは又來りて見るへきてとも難しとなり
ひか〳〵しき人　○入道なり
あなかまや　○入道の詞也思しすつましきとは懐姙の事なり
いとゝほけられて　○入道のありさまなり
てしともにあはめられて　○皆々いさむるなり
月夜に出てきやうたうする物は　○入道の事なり物の字には心なきなり只行道するはなり
君はなにはの　○是より源の御事なり
すこしへかれたる　○すこし髮のうすらきたるなり

なをよこゝもに　○とにかくにかやうの方に心をつくし給なり
その人の事　○明石上の事を紫上へかたり申給なり
身をはおもはす　○わすらるゝ身をは思はす誓てし人の命の惜くもあるかな
かつみるたに　○かくみるたになり　昔の歌かくと云へき所をかつとよめるあまたあるなり
世の中もうらめしう　○世中のこと故にこそ紫上にも此程隔りても有つれと思にさらにうらめしき世中なるとなり
もとの御くらゐ　○花鳥に見えたり本義は流罪の人は歸りては叙爵より始めてすへきを是はさせるつみならさるによりてもとの參議の大將に成給なり
かすよりほかの權大納言　○大納言昔は三人なり源只今新任し給なり花鳥に見えたりくはしくしるさる花云　正の外の權になり給へるなりと云々上古は大納言の數二人寛平遺誡には正權三人云々花鳥にくはし中比より正一人權十人なり云々按公卿補任寛平九年大納言正三位藤原時平一人也六月十九日聖廟並源光此兩人同日に權大納言に任せり權大

、納言此時始なり此等を摸して書ける歟
つき〳〵の人も　○前に御簡けつられし人々なり
さる物むつかしき　○ゐなかの體なり
あそひなともせす　○勅定なり面白し八月十五夜なるに折節勅定尤興あるなり
わたつみにしなへうらふれ　○物思なつみうれへたるなりひるこ「かそいろはいかに哀と思らん三とせに成ぬ足たゝすして只三年といはん爲なり蛭子のなかされし迄は無用也
宮はしら　○此五文字めくりあふといはん爲也枕詞なり造宮の義不用之
院の御ため　○源の行はせ給なり源の御願なりこゝにてはあらましなり
東宮を見たてまつり　○今年十歳になり給へし
世をたもたせ給はんに　○末に受禪のことあるへき故に先書出せり
かへる波につけて　○御をくりの人のかへるにつけてことつけ給ふなり
なみのよる〳〵　○文の詞なり
なけきつゝ　○明すとよせたる歟朝霧のたつや抔思と佳人の詠むらん程を思やる心成べし心得かたき歌也花鳥説いかゝなけきつゝあかすと續けたるへし心は人丸のほのほのと明石の浦の朝霧の歌の心にてほる〳〵と見やりたる也朝霧には幾度も源の事をこそ思出給らんとこなたより思やりての給也又の義は万葉第十五「君か行海邊の宿に霧たゝはわか立なけくいきとしらませ此心にて見れは我思の行衞はそなたの詠る空の霧と成へきと也
かの帥のむすめ　○大貳のむすめなり須磨にて音信申せし人なり　親王の帥に任する時大貳の職を行ふ故に帥とも云へるなり
物おもひさめぬる　○都にのほり給ふをいへり云々花鳥說如何　あちきなく人しれす源のことを思ひ歎きしことの今歸洛し給に依てさめぬるとなり
まくなき　○まくはせなと俗に云かことしいつくよりともいはせすして目をくはせてさしをくなり
蠛勾會又作㆑蔑此字註に丁見の事あり
てなとこゝなう　○大貳のむすめの手跡と見定てつかはし給なり
かへりては　○かことやせましとはかこちやせまし

となり尋ねたりしをかへりてかこち給ふなりさら
は留まりもせすしてかへりしをの給ふなり花鳥に
見えたり
あかすおかしと　○此五節は源の平生心かけ給人な
れと今はわさとすく〳〵しくの給ふなり

みをつくし　巻名以レ歌號爲二巻名一○此巻には源
氏二十七歳明石より歸京の年より次年二十八歳の
十一月迄の事あり二十七歳は明石巻の末と同年な
り花鳥二十八歳の八月迄の事有と云々如何
さやかに見え給ひし　○須磨にて見給し三月十三日
の夜の夢のことなり
かくかへり給ひてはその御いそき　○源の忠孝の至
りなり
神なつきに　○歸京は八月なり毎事を差置て此御八
講を程なくやかて十月いそきにし給孝心の切なる
所あらはれたり心をつけて見るへし
御八講　○花鳥寛平御記をひけり寛平元年九月に古
院光孝を夢に見給て御八講行はれしことあり此物
語何事も如此例ありしことを思てかけるなり
よの人なひきつかうまつる事　○源にもとの如く人
のつかうまつるなり
おほきさき　○弘徽殿なり
この人を　○源なり
ものゝむくひ　○帝の御心なり源の歎の報もやと覺
しけるなり源氏を惡后のあしくおほすに帝故院の

御遺言をおほして悪事は報ひ有事なれはとたほし
て帰京の事を改給て御心ち涼しくなり給へる事也
御かとは院の御ゆいこん　○帝は故院の御遺言を覺
して悪事は酬(ムクヒ)あることなれはと覺して喜ひ給ふな
り
なをしたて給て　○何事をももとの心はなをりたる
なり　過(アヤマ)りて改むる心なり
おほかた世にえなかく　○位をさり給へき御心ある
なり
あいなくうれしき事に　○あいなくとは一偏にと云
心なり一かたにうれしく思さとなり花鳥説如何
大宮　○皇太后宮成へし前巻に太后云々
おとゝうせ給ふ　○御門内侍督にの給ふ詞なりおと
とは父おとゝなり
わか世の殘すくなく　○御位をさり給へき由なり
昔より人には　○人よりとは源をさしての給なり
たちまさる人　○源の事なり
をろかならぬ　○御心さしの深さには源は及給まし
きとなり
よろつのつみわすれて　○寵の甚しき故なり

なとか御こをたに　○勅語なり
ちきりふかき人　○源をさしての給ふなり
かきりあれは　○源の御子ならはたゝ人なるへしと
なり
めてたき人なれと　○源の御事なり内侍の心の中な
り
さしもおもひ給へらさりし　○父おとゝの源にゆる
し給へきの由ありし時は源の心もいれすし給し事
なり
物思ひしられ給まゝに　○我身のいとけなき心より
出來ぬる事と思知給と也此段花鳥などてと云より
朱雀院の御心のやうにしるせる如何
あくるとし　○源廿八歳なり
春宮の御げんふく　○冷泉院なり十一になり給ふ
はゝ宮は　○御心にはゝかる事有故也
御くにゆつり　○御讓位なり
かひなきさまなから　○朱雀院太后へ申給詞なり寶
算をたもたるへきはかりこそなり
數さたまりて　○左右の大臣闕なきなり内大臣は令
外の官とて官位令に載さる官なり大職冠の時は内

大臣を左右大臣の上にも置たり云々　一註數とは
左右の大臣のことなり依レ無レ闕左右の外に內大臣
を置也
ことしけきそくには　○そくとは職なり事しけき職
をはさて辭退し給なり
ちしのおとゝ　○葵上の父なり花鳥に委見えたり
一勘忠仁公良房攝政の例なり六十三の年齡なと
不ニ相違一なり
御としも六十三にぞ成給　○此もの字にて忠仁公の
例を思へる由見へたり
さるためしも　○致仕の人の又攝政する例
宰相中將　○葵上の兄なり
四の君の御はら　○二條のおとゝの姬君朧月夜の姉
頭中將のすさめぬ四の君とありし人なり
かの高砂うたひし　○榊卷にあり紅梅右大臣なり高
砂うたひし君も此もの字にて柏木の昇進も見えた
り　柏木も昇進あるへし弟の事を云にて知へし
源氏のおとゞは　○御子の多きを源のうらやみ給也
大殿はらのわか君　○夕霧なり　太閤を大殿といふ
相國をも大臣をも云通申したる詞なり

こひめ君の　○葵上也喜ひの有に付ても更に思出給
也
宮おとゝ又さらに　○宮は葵上の母君なりすまのう
つろひの時はよくそみしかくてかゝる夢をも見さ
るよし有しかと今喜ひに付ては悲く思出給なり
おはせぬ名殘も　○葵上は現存ならねと猶源の御德
をは見給ふなり
ことにふれつゝよすかつけんことを　○人々の程々
に隨て然へき事ともをめくみはからひ給ふなり此
段は皆草子地なり
二條院のひんかしなる宮　○東の院と號す故院の御
知行ありし故に源のかく領し給ふなり
忘るゝ時なけれと　○御國ゆつりの事等大義を本と
し給へる心なり
心くるしけなりし　○去年六月よりの懷姙なれは此
比誕生あるへしとなり
十六日になん女にて　○前の詞に一日頃と云より少
後にや
めつらしきさまにてさへ　○女子を云り
すくように御子三人　○若紫にありしなり花鳥に

委見えたり花云　宿曜道に源の御子三人と申は夕霧左大臣冷泉院明石中宮也后御門は冷泉院明石中宮を申也中のおとりは夕霧たゝ人なれはなり但夕霧任相國の義物語にはは不見とも末には太政大臣と分別すへし又中のおとり腹は明石上なり紫上葵上にくらふれは如此云なり

としころは世のわつらはしさに　○須磨のうつろひなとの時は相人のことはすちなきと思給しなり

もてはなれたるすち　○天子の位の事なり

たゝ人におほしおきてける　○故院の源の姓を給ひしこさなり故院も天子の位につき給ふへきことをは有ましき事におほしたりしとなり

うちのかくて　○冷泉院なり

いま行すゑのあらましことを　○過にし方の事は皆相人の申せしにたかはさるなり今日より後の事もたのもしく思ひ給なり明石中宮の御ことなり

まことにかの人も　○明石の上なり

かしこきすちにも　○后のことなり

さるにてはかしこきすちにも　○后の事なり

さる所にはかく／＼しき人も　○明石には乳母なとも然るへき人有かたかるへしとなり立后なと有へき人になとはつき／＼の乳母なとも人からを精撰すへき事となり

せんしのむすめ　○故院に奉公の人なり花鳥に見えたり花云　明石姫君の御乳つけ少將君の事なり母は宣旨の局と云ける人なり父は宮内卿宰相なり

はかなきさまにて　○はかなきさまといへるは父母なともなき人のさま哀なるさまなりさる躰思やるへし

さるへきさま　○明石へくたるへき由をの給ふなり

この御あたり　○源の御あたりなり

いたしたて給ふ　○くたし給ふなり

しのひまきれて　○源乳母を行て見給ふなり　明石へくたすめのとの所へおはしたるなり姫君を切にし給ふ心なり

さはきこえなから　○いまた思定めさりしを源の只今の御出を忝く思故にくたるへき心を定めたるなり

あやしう思やりなき　○源の詞なり

おもふさまことなることにて　○思ところあるとな

り
みつからも　○源も思ひかけさるすまの住居をもしたまひしなりさやうのためしをも思慰みてくたるへきの由なり
うへのみやつかへ　○此女の事なり父母なくなるなり
木たちなと　○此家のさまなり
さすかにおほきなる所の　○父の家成へし
いたし　○とはほめたる詞なり
とかくたはふれの給て　○なさけあるさまなるへし情の詞なるへし
けにおなしうは　○女の心の中なり
かねてより　○此程とてもへたてぬなかにてはなけれともとなり
うちつけの　○かことはかこつけなり下句は我身をつれて明石にくたり給へかしとなり
なれてきこゆるを　○物なれてなり
いたしと　○ほめたる詞なり
御はかし　○女子に太刀をつかはす事三條院皇女の例河海に見えたり
入道の思かしつき　○姫君をかしつくさま思やり給なり
いつしかも　○こなたにて養育あるへき物をとなり
そなたにむきて　○京の方なり
ありかたき御心はへを　○文にもをろかにもてなし思ましとありし事なり
ちこのいとゆかしきまて　○乳母の思なり
けにかしこき御心に　○源の心ことにかしつき給ふも理と思給なり
こもちの君　○明石の上なり
ひとりして　○はや〳〵都へむかへ給への由なり明石上の性かやうにはなきを心のやみにてねんころに申給尤あはれなり
あやしきまて　○源の心に入れ給ふ由なり
女君には　○紫上なり
きゝあはせ
いよ〳〵いたはしうたそろしきまて　○明石女御をかたしけなく思なり
さこそあなれ　○源の詞なり世間の事の何事も思や

うにはあらさるとなり
さもれはせなんと　〇紫上の御腹に御子のなきこと
なり
おもてうちあかみて　〇紫上なり
あやしうつねに　〇紫上の詞なりにくみ給ふなよと
の給ふ詞にあたりてなり
いとよくうちゑみて　〇源なり
そよたかならはしにか　〇紫上の思はすなる物ゑん
しはたかならはしにかと也我こそをしへたてたる
物をとなり
としころあかす戀しと　〇紫上の心なり
この人をかうまて　〇源の詞なり
またきにきこえは　〇またきにかたらは紫上のあし
くや心得給へきにやとてなり
人からのおかしかりし　〇明石上のさまも所からに
やと云ひなし給なり
あはれ成しゆふへのけふり　〇煙は同し方にやなひ
かんの歌讀し時の事なり琴の音きゝ給し時の事な
となり明石上の鹽やく煙のことゝ又いひしことなと
かたり給なり

われはまたなくこそ　〇紫上なり
われはわれと　〇紫上のゑんし給ふさまなり
あはれなりしよのさま　〇紫上のひとりことなり
思ふとち　〇紫上の歌也明石にての煙は同し方にな
ひかんの歌なと語り給に依て煙を讀給へり源を恨
給心也源と明石上との中の煙よりも我こそさき立
へけれと也さきたちなましとは思に消ぬへき由也
たれにより　〇紫上を思故にこそ世をのかれもはて
すさま〳〵にうき沈みぬれとなり
いかて見えたてまつらん　〇紫上には命こそ限なる
へけん心の隔はあるましき由也
かのすくれたりけんも　〇明石上の琴を聞給御耳う
つりにはとやひき給はさる也
五月五日　〇五十日の祝也三月十六日より五十日に
當なり
なにこともいかにかひある　〇都にてあらはの心な
り
我御すくせも　〇須磨なとに沈み給ひしも此姫君の
出生し給へき宿世にやとなり花鳥說末の事をいへ
り如何

御つかひいたしたて給ふ　○五月五日に參つくへき
由を仰せて出したて給なり
うみ松や　○海邊松なるへしみるにてはなし只不綾の枕詞なりあやめは菖蒲に寄たりいかにとは五十日によせたり皆思はせていへり
なをかくては　○上洛あれの心なり
うしろめたき事はよも　○是迄文の詞なり
こゝにもよろつ　○五十日の御祝なり
この女君の　○明石の上なり
をさ／＼をとらぬ人も　○此乳母にをとらぬ人をも尋出すなり
おとろへたる宮つかへ　○たつきなき人なとの山すみなと求るかくたりぬるなり宜き人はまれなるとなり
これはこよなう　○此乳母なり
かくおほしいつはかり　○此君をまうけ奉ることを忝しと明石上は思ひあかりたるなり
もろともに　○めのとと明石のうへともろともになり
あはれかうこそ　○めのとの心なり明石上をうらやむなり
めのとの事はいかに　○此文のうちにかく書給ふに慰むとなり
數ならぬ　○いかには五十日にそへたり卑下の心なり
よろつにおもふたまへ　○此詞哀なり明石上の文の詞なり尤哀なり明石上の性かやうに思ことをかきあらはすへき人にてなきを是も心のやみにえしのひ給はぬ成へし
いのちのほともはかなく　○前に猶かくてはえすくすましきを思たち給ひねとありし詞を受けて申給なり
うちよりをちに　○三熊野の浦よりをちにこぐ舟のわれをはよそに隔つる哉　引歌能叶へりへたてつるかなと云つめたる紫上の身に叶へり
まことにかくまて　○源の詞なり
かはかりの　○暫時の事となり
所のさま　○我身のすみて能しり給となり
やんことなき人くるしけなる　○上らうなともかほとはありかたしとなり

かゝれはなめりと　〇手跡も可ㇾ然也

めづらしく御めおとろく事のなき程　〇花散里のさまなり心やすくてをこたり給なり

よそなからも　〇源を悉皆たのみ居たる人なれは心やすきとなり

女御の君に　〇麗景殿の女御なり

にしのつまと　花散里の方なり

いとゝつゝましけれと　〇花散里のつくろはさるさまゝ見えたり

くゐなたに　〇花散里の歌なり此歌優なりと云々源のとひ給を月に比したるなり卑下のさまなり此家のふりたる事なり

とり／＼にすてかたき　〇源の御心なり

をしなへて　〇水鶏にをしなへて驚給ふならはまたぬ人も來りぬへき物をとなりちと女を疑心にいへりされともさはあるましぎよしを奥へいひのふるなり

そらなかめそ　〇須磨の巻に有し歌なり

なとてたくひあらしと　〇花散里の心なり源のしつみ給しことを身一の思のやうに思しかとも歸京の後もうき身にては對面もかたくて同しなけかしさなるとなり

おいらかにらうたけなり　〇さして恨なとはし給はぬ體なり花散里の性なり

女は物おもひたえぬを　〇女は五節の君なり源には心を留るなり

世にへんことを思おえたりし　〇源にのみ心を留る故なり

心やすき　〇東の院なり

さる人のうしろみ　〇五節なとやうの人をつとへて明石の姫君をも迎へたらは其人の後みにと思す也

よしある受領　〇花鳥そのたよりある受領なとに仰て造らせらるゝなり

後院のつくりさま　〇二條院の美麗なるにはをとるへきを此院はつくりさまのめつらしきによりて見所あるなり中々の字心をつくへし

女御かういみなれいのこと　〇院にましますなり

春宮の御母女御　〇承香殿女御なり年比は朧月夜に寵を奪はれ給しなり

かくひきたかへめてたき　〇春宮をもち奉り給故に

只今時を得て禁中にましますなり

このおとゝの御とのゐところは　○源の直盧は桐つほなり一註東宮別殿にをはしますによりて昭陽舎におはしますなりいつくにても便宜にしたかふへし

宮をもうしろみ　○春宮なり

入道きさきの宮　○尼にてましませは今更皇太皇宮なとに成給へきならねは封戸はかりを益なり委く花鳥に見えたり

おとゝはことにふれて　○惡后は源を心よからす思給へとも源はかへりて后に心をよせつかうまつり給ふなり

人もやすからす　○惡后の心を世人のよからすいへるなり源の心よせ給を見るに依てなり　世間は定なき物なるを太后のあまりなるまてありしを今は源の御心もはつかしきと人々思となり

兵部卿のみこ　○紫上の父なり左遷の時世の聞えをはゝかりて音信もなきなり源性舊惡を思はさる中にも是は親昵なるによりて恨の色を見せ給なり源の心大方の人々には左遷の時節の恨をも見せ給はす舊惡を思はさるなりされとも兵部卿宮には其時のけちめを見せ給なり紫上の故にも理をまけぬ性を見せ給なり

入道宮はいとをしう　○兵部卿宮は薄雲の御兄弟也

兵部卿の宮の中の君　○紫上のいもうと今一人は系圖になし

おとゝは人よりまさり給へ　○兵部卿宮に遺恨ある故に大方にして取持給ふこともなきとなり

いかゝし給はんとすらん　○宮の女御の事なり

その秋住吉に　○源廿八歳の秋なり須磨にて風雨の時の願をはたし給なり住吉詣の事御堂殿の例を摸するにや同時の事をもかけり

折しもかのあかしの人　○明石上のまいりあひたるなり

こそことしは　○年々は年の始に詣侍るを去年の秋詣たるなり明石上の事也

今年の春は懐姙によりて參詣懈怠也延引有て只今かく人さをつら　○今源攝政し給故に皆召具し給ふ成へし委花鳥に見えたり

たかまうて給へるそ　○舟よりとはせたるなり

しらぬ人も　○世中ゆすりたる大臣を知ぬ人も有かとあさむきたるなり
けにあさましう　○明石上の心なり
松はらのふかみとりなるに　○住吉の景氣思やるへし
うへのきぬのこきうすき　○上古は位の淺深によりて袍の色の濃淡あるなり
かすしらす　○世中ゆすりてかんたちめ（上達部）殿上人我も我もとつかうまつり給ふとあるに叶へり
六位のなかにも　○あを色は麴塵の袍を云なり今の世も極﨟とて第一の六位の藏人着レ之晴の日は第二の藏人迄はこれを着する事もあるなり
かものみつかき　○前に見えたり
ゆけいになりて　○衞門權佐に成て隨身をめし具するなり一註六位の藏人にてゆけいの尉を兼たる也
おなしすけ　○廷尉のすけなり衞門佐なるへし同こはまへのゆけいの藏人の事なり
あかきぬ　○赤衣なり一註廷尉佐は赤衣を着す五位なる人なり三事かけたる五位の藏人は今も規摸なりおなしとは衞門佐の事なり

みし人々ひきかへ　○須磨にて祗候の人々の花やきたるなり
御くるまを　○源の御車なり
かはらのおとゝの御例　○（両ヶ）河海花鳥等たしかならさる由しるさる然とも物語にのせたるうへは定て證據あるへし先づ物語の上にてありのまゝを心うべし以俟後之君子也　弘安の源氏論議にも一の難義とせり　玉云或説忠仁公白河に住給ふを河原大臣と號云々　一禪御説忠仁公給童隨身事無所見云々　又融公童隨身給事國史なとにもしるさすされとも如此事註さぬ事もあるへし此物語に書る即支證とも成へし已上一禪御説
いまめかしう　○めつらしきなり
おほとのはらのわかきみ　○夕霧なり八歳成へし源廿一の年生給へり殿上童にも扈從あるなり
雲井はるかに　○おいさき遠き由を云り
わか君　○明石の姫君也
國のかみ　○攝津國守なり
いとはしたなけれは　○はれ〳〵しきなり明石上の心なり

神もみいれ　○大かたの手向をは神も見いれ給ふま
しきとなり「手向にはつゝりの袖もきるへきに紅
葉にあける神やかへさんの心にかよへり
君は夢にもしり給はす　○源はしり給はさるなり
これみつやうの　○惟光なとは枯木に再花さく心地
し侍なり
すみよしの　○まつこそは先を松にそへたり神代の
ことゝは過にし方といはん爲なり須磨明石に沈し
時の事也作例たるへし云々歌の道の殊勝なるは惟
光も只今かやうに歌を奉りて上下の懐をのへ侍る
なり歌ならてはいかにして卑懐をも述侍るへきそ
と云也
あらかりし　○行末とても住吉の神助をは忘るまし
きなり須磨にての風雨にも殊なる難なくて今日迄
無事なるも偏に神の助けにかゝりしとなり
しるしあり　○奇特なることゝなり
かの明石の舟　○夢にも知給はさりしとて驚給なり
神の御しるへを　○神のしるへなれは明石上の事な
をさりにはおほすましきとなり入道の御むかへに
まいりしことなとは皆神助なるとなり

なゝせに　○七瀬は遠近にあるなり遠き七瀬は難波
其一なり一註七瀬御祓今の世にも毎月あることな
り近所の七瀬遠所の七瀬と云ことあり
今はたおなし難波なる　○明石上を思ひ給ふ故なり
みをつくし　○つの文字清て讀へし心をつくし身を
盡して只今船出せしも縁にてはなき歟となり
こまなへて　○たゝに過給ふともあるへきを今音信
給をあはれに忝く思となり
數ならて　○何事も數ならぬ身の哀をいへり
ほり江　○仁徳の御時ほらしめて堀れたる川なり
たみのゝ島に　○源氏の御祓なり
御はらへの物につけて　○木綿につけたるへし
日暮かたに　○景氣たくひなく見えたり
露けさは　○名にはかくれす難波をよそへたり雨に
よりの歌によれり明石に住給し時の露けさにもを
とらさるとなり
道のまゝに　○ゆく／＼の心なり
あそひとも　○遊女ともなるへし
されといてやおかしき事も　○源の心なり上達部な
とさへ彼遊女に目とめぬるを源氏見給て大方の世

の人の事を思へ給へり何事も人からによりてこそ
心をもとむへけれとなり
なのめなる事をたに　○なのめなることゝとは大かたの事もと也こゝの心は大かたの何事もあは〳〵しきには心もとまらぬ物をとなりまして此遊女なとはいかなる類(タグヒ)なきけしきありとても心をとむへきことにてはなきよしなり人のをしへとなるへきこととなり
をのか心をやりて　○遊女とものまさなり今あそひに心とめたるけしきを見給て思給なり是又人のをしへなり
かの人は　○明石上なり
すくしきこえて　○源をすくしてなり
又中々物おもひ　○昨日の源の御ありさまを見るにつけて猶卑下の心をそへ侍るなり
いまや京に　○歸京ありて不日に御使あり源の深切の志殊勝なり
いさや島こきはなれ　○花鳥たちくほの歌をひけりされとたゝ明石の事なれは島かくれ行舟をしと思ふの心も然へき歟

さりとてかくうつもれ　○明石上はかりにてもなく姫君をはいかゝと思となり
まことやかの齋宮も　○齋宮は一代に一度立給ふ是より齋宮のことを云なり秋好中宮なり六條御息所も中宮につれてのほり給ふなり
むかしたに　○今も相かはらす源より音信をはし給へとも昔たに御息所へはつらきけしきありしほとにとなり又は御息所の心中になして見るなり此義可然
あなかちにうこかし　○源の心なり我心なからも今よりはあなかちにねんころには有ましきと思ふ故にさのみは申なひかさんとも思はさる也かた〳〵の際もなき身にてはをこたりもありぬへしとなり
齋宮をそ　○源の心なり
つみふかき所に　○齋宮は佛經なといみ給故なり
おとろきなから　○驚きつゝなり
たえぬ心さし　○源の我心さしの程の行衛を見せはて奉るへき物をとなり
かくまてもおほしとゝめたる　○御息所の心なり
齋宮の御事を　○遺言あるなり

かゝる御こと　○源の申さるゝなり

いとかたき事　○御息所の詞源氏はたのもしけにはの給へとも世間の習さはありかたきことゝなり

ましておもほし人めかさんに　○源の大切にし給はゞかへりて紫上なとよりの嫌疑もあるへしとなり

うき身をつみ侍るにも　○我身にても知侍となり

あいなくも　○あちきなくもなり源の心中なり

としころによろつ　○源の詞なり年たけてはさやうの思慮も出來ぬれは昔のやうにもなきとなり

よしをのつから　○つゐには思召し知へきとなり

御くしいとおかしけに　○昔の垂尼のさまなり

丁のひんかし　○齋宮なるへし

けたかき物からひちゝかに　○けたかくて然も人ちかなるやうなる體もあるへし又ひそやかなる心もあるへし何れにてもあるへきなり一本ひそびかさありひそやかなる心歟下のひの字濁る由御意を得たり

さはかりの給物をと　○御息所の遺言にてもある物をとなり

いとくるしく　○御息所の詞なり

ちかくまいり　○源の詞なり

いとおそろしけに　○御息所の詞也衰にたると也

思ひ侍ることを　○齋宮の御事なり

かゝる御ゆいこん　○源の詞なり

故院のみこたち　○源の我御兄弟のことなり

うへのおなし　○秋好中宮をは桐つほの帝の我實の御子のやうに思召しとなり

あつかふ人もなけれは　○源の我御子もあまたなき由なり

御とふらひいますこし　○細々にをとつれ給ふなり

七八日ありて　○源の歸り給て後七日八日ありて也

御身つからも　○源の御出あるなり

宮に御せうそこ　○齋宮なり

なに事も　○齋宮の御返なり

きこえさせの給ひをきし　○源の詞なり

いとたのもしけにとし比の　○御息所へは中比中絶し給しを恨み思し人もたのもしく思となり源の心を恨思ひし人もと也

あはれに　○源なり

たゝいまのそら　○源の申給ふなり

丁のほころひより　○六條御息所歟
丁の東たもて　○齋宮の事なり
御しやうしん　○源の事なり
ふりみたれ　○御息所さこそ思をき給ひつらんとなり
そら色のかみ　○くもらはしきとはにひ色の心なり
きえかてに　○霙をかくし題によめり
くたり給ひしほと　○源の心なり
かたしけなくとも　○源の詞なり
あるははなれたてまつらぬ　○皆王孫の一類なり
この人しれす　○内へまへらせんの心なり此段草子地なり
人におとり給ましかめり　○藝能なとは人にをとり給ふましきなり
我御心もさためかたけれは　○御かたちの心にとまり侍らはいかゝと我心なから知かたけれはうちすみのこと〻人にはあらはし給はさるなり
御わさなとの御事　○御息所の作善なり
しもつかたの　○六條京極なり
かきりある道にては　○例なき事なれと伊勢へは具し給ひしかとも此道にはえたくひ聞へ給はぬ悲しきとなり
院にも　○朱雀院なり
齋院なと　○朱雀院の御連枝なり
この人しれす思かたのましろひ　○内へまへらせんの心なり
御はらからの宮々おはします　○内すみし給へとなり心かけ給故にの給しなり
うへのいとあつしう　○朱雀院御病氣かちにたはしますをはゝかる心なり
ねんころに　○朱雀院よりは念比に申給ふとなり
よことり　○入内の事なり
人の御ありさま　○よそ人になすへきは口惜きとなり
かう／＼の事をなん　○齋宮入内の事
いとよう　○薄雲の詞なり
かの御ゆいこんを　○御息所の遺言なり
いまはたさやうの　○朱雀院の御事なり
さらは御けしき　○源の詞なりもよほしはかりのこ
云にて讀切てことをそへてつかまつるへきとなり

院に思召す所を思故なり

とさまかうさまに　○源の詞なり秋好參内のことを
いかでかなと思給ふによりかくまて色々心かまへ
をし給ふ由なり

さはかりの心かまへもかたく侍るを　○かたくとは
なしかたしとなり

のちには　○源の心なりこゝにとは六條院なり

女君　○紫上なり

兵部卿の宮　○紫上の妹なり只今源と兵部卿宮と中
あしかる故なり

權中納言　○葵上の兄なり

おほい殿の御子にて　○孫王を猶子にし給ふとなり
中納言の女をおほち大臣の御子になし給ふなり

宮のなかの君　○兵部卿宮の御女なりいつれも幼少
なる故なり

おとなしき御うしろみ　○入道宮の御心なり

おほやけかたの　○外様をいへり

いとあつしくのみ　○入道宮の御事なり

すこしおとなひて　○我御身は內すみも叶ひかたし
かやうの人なくてはの事となり

薄雲太上天皇尊中宮を辭し給歟此已後は中宮にては
おはしますへからさる歟後迄中宮と申たり如何

陽明院誕生長和二七月皇女に献御太刀事

榮花第十一御はかしいつしかとてもまいれり

寫本三光院殿實枝御筆今川氏實有之者也

細流卷六　蓬生、關屋、繪合、松風、薄雲、

蓬生

卷名よもきふとつゝきたる語はなき也よもきと云詞にも歌にも見えたり花鳥にはえわけさせ玉ふましきよもきふの露けさになんとあり昔通の本には只よもきふの露けさとある也横の並也みをつくしのさきのこともあり源氏廿七歳のこと八講なとのことより廿八歳の四月此宮を問玉とあり又末は繪合の末までのことあり末は竪になる也悉皆常陸宮の始給をかける也　○又末の詞に二とせはかり此ふる宮になかめ玉ふとあり末は竪に成ぬるにや但末のことを書たる計也

もしほたれつゝ　○行平朝臣の歌を以て源氏のすまの左遷の時のことをかける也廿六歳のことよりかけり

我御身の　○先人々の御うへともを云也

たけのこのよ　○只此世のうきふしといはんとて竹のことをきたる計也物語の匂ひ面白し古今序むもれ木の人しぬことゝなりてなといへる文躰也花鳥說いかゝ此段は悉皆業上をいへる也

なか〳〵そのかすと　○源の通ひ玉ふ所の多也上の詞ともは末つむのことをいはんとて先人々のことをいひたり

ひたちの宮　○是より末つむのこと也

大空のほしのひかりを　○本說に及はす只源の御方よりはいさゝかなる情なれと待うけ玉ふかたの心は一段と深き心也大空は大海に浮へて見るも又いさゝかなるたらひの水にうつして見るも天の心をしる所は只一也といふ心なり

かゝる世のさはき　○すまの左遷のこと也

うちわすれたるやうにて　○やうにての詞面白し眞實に忘れ玉ふにてはなきなるべし何かとをのつからにたえぬる也

そのなこり　○源の音信玉ひしなこり也

おほえす神佛の　○源の出入給を神佛のやうに思ひしをと也與風したる利生の如き御緣と云也

さるかたにありつきたる　○父宮におくれ玉し後也

中々すこしよつきて　○中頃源のかよひ玉しも中たへて更にさひしく悲しき由也

すこしもさてありぬへき　○源のかよひ玉し程はさ

ふらひし人々もちり〳〵になると也
もとより ○父宮のなくなり玉ひし後也
きつねのすみか ○梟鳴松桂枝狐藏蘭菊叢といへる
詩もあれたる所をいへり 心かよへり松桂蘭菊に
梟狐なとのすむへきにはあらぬよし也
まれ〳〵のこりて ○たま〳〵のこりてある人の云
なり
こたま ○樹神也されは形をあらはしとかけり
このころすりやうともの ○有力の物とも也
はなち給はせてん ○放やり玉へかしと申也箋曰御
殿を賣渡すへき由也石木の事に非ず
あないみしや ○ひたちの宮の詞殊勝の語也
なま物のゆへしらんと ○御調度の中昔の物の本様
にもと思て尋る人もある也調度ともを物の上手と
もの名あるにしをかせ玉へることを聞傳る人の所
望する也
その人かの人に ○其時の名物名作なとを聞傳る也
そこそは ○それこそはと也
いみしういさめ給て ○ひたちの宮也
見よとをもひ給ひてこそ ○故宮も我身に見よと思
してこそしをかせ玉ひつらんと也
かろ〳〵しき人の ○宗廟之器不鬻於市の心也
御せうとのせんしのきみ ○兄弟也
おなしきほうしと ○河海花鳥いつれも木法師と云
々此説不隨女同しき法師と讀へしと也同し法師
の中にもと云心也
しけきくさよもきを ○掃除なとせんすへもし玉は
ぬとなり此以下貧家のあれたるさまあり〳〵とか
けり
ふよう ○不用也賊貧家をうたすと云心に叶へり
わさとこのましからねと ○わさとこのましきこと
にては無れと是又つねの習ひ也
おなし心なる ○女とちの文かよはし給事也さやう
の事をも能らぬことの由を父宮の教訓ありしまゝ
に能隨ひて人にもうとしくしてましますも也天然上
﨟しきさま也
からもりはこやのとし ○いつれも古物語とも也と
しとは今も内侍所なと又攝家の末にめしつかふ女
をば刀自と云女の惣名成へし
ふるうたとても ○古歌万葉なと計は面白きことも

有まじき也其後の撰集なとこそ見所有へきと也
すゞなととりよせ　○花園左大臣有仁公まては珠數をとり玉ふことなし檜扇にて經陀羅尼の數をとり玉ふと云々
かやうにうるはしくそ　○是まてひたちの宮の行跡をいへり皆上臈しきさま也
侍從なといひ　○ひたちの君のめのとのむすめ末摘巻に見えたり
かよひまいりし齋院　○此齋院たれともなし
すりやうの北のかた　○後に大貳の妻也蓬生の君の母方のをは也系圖の外也
むすめとも　○大貳のむすめ也
むげにしらぬ　○かけはなれぬ中也さて侍從行かよふ也されと蓬生の君は通し玉はすと也
おのれをはおとしめ給て　○此姫君のをはの云こと也我身をは受領のつまになりたるなと云ておとしめ玉ふと也
もとよりありつきたるやうのなみ〳〵の人は中々よき人のまねに　○草子也先世間にかゝる類ひ有と總論に云てさて末摘のをばの事をいへり玉云末摘のをはのことをいはんとて先世にあるなみ〳〵の品なる人のことをいへり本性品たかゝらす人の妻なとは中々思あかり上臈しきことを好みまねひ心をもたつることあり又やんことなきすちなる人なれともおちふれぬへき宿世にや受領なとの妻と成て心もなを〳〵しきと也末つむのをはのことをいへり
もとよりありつきたる　○双子地也先世間にかゝるたくひあると惣論に云てさて末摘のをはのことをいへり
かうまて　○此末つむのをはは天然かやうにおちふれてす領なとの妻になりてあるへき宿世のありける人にて有けるよと也心むけのいやしきをいへり
我かくをとりのさまにて　○此宮を我身よりもしもさまになしたく思也
心はせなとの　○ひたちの宮をいへり
時々こゝにわたらせ給て　○箋曰あまりのことに末摘をわか方へ細々御出あれと申也
人にいとむ心には　○あなかちあらそふ御心は無れと物つゝみし玉ふ故に行かよふ給こともなしと也
ねたしとなん　○此をはの心也

この侍從も　○末つむのめのとの子也
かの家あるし大貳　○末摘のをはの男也こゝにて大
　貳になる也
はるかにかくまかりなむ　○大貳の妻の云也今大貳
　になりて太宰府へ夫に相具してくたると也
つねにしも　○都の內にては細々申さゝりしかと也
ことよかる　○詞をよくいひなす也
さらにうけひき　○宮は具して下り玉ふへきさまを
　はうけひき玉はさる也
あなにく　○をはの云也
うけひけり　○うけゐと讀也訓心也
さる程にけに世の中に　○かく云うちに源歸京也
かやうにあはたゝしき程に　○此まきれに此宮なと
　のことは思出し玉ふこともなきと也
いまはかきりなりけり　○ひたちの宮のかたさまの
　心也
たひしかはら　○百姓也いやしき人々までの心也
かなしかりしおりの　○左遷の時のこと也
我身ひとつの　○ひたちの宮の御身一つとおほへし
　と也「世の中は昔よりやはうかりけん我身ひとつ
　のためになれるか
大貳のきたのかたなれはよ　○こゝにておちあたり
　て申也
佛ひしりも　○法花經にも如レ是人難レ度とて佛の方
　便にてもすくひかたき衆生あると也
宮うへ　○ひたちの宮の二親をいへり
大貳のをいたつ人　○大貳のをひの妻になれり
なをかくかけはなれて　○源にたのみをかけ玉ふ也
我身のうくてかくわすられたる　○末摘のうき身の
　報果て忘られぬと觀し玉ふ也源をはうらみ玉はさ
　る也此性にて行末の幸とはなれる也
たゝ山人のあかきこのみ　○說々あれとも只鼻を云
　なるへし誹諧にことによりていへり
くはしくはきこえし　○双子地也
いとゝかきつかん　○よりつかん方もなきと也
かの殿にはこ院の御れうの　○みをつくしの巻にあ
　りし八講也同時なるへし十月はかりのことなり源
　の廿七歲也
このせんしのきみも　○ひたちの宮の御子のあさり
也

いつくのにこり　○源の御事也五濁の世に生れ玉て
奇特なる由也すくよかなる詞也
心うの佛ほさつ　○佛菩薩ならは此悲しきことをも知
玉はさる歟と也
けにかきりなめりと　○彌つらく思玉ふ也前に今は
限也けりと末摘の方さまに云しを受てげにと云り
をのことも　○大貳の北方のとものゝ物とも也
わけたる跡　○いかなる悲しき家にも此三徑はある
也此宮には此三徑たにもなき也
みなみをもての　○此大貳の妻なとは門外なとにて
こそ下車すへきをかやうに車をのり入なとするは
可然人もなき故又は所のあれたるさまのあなつら
はしさ故なるへし心をつけて見るへし
ところいたうつゐへたれと　○侍從かありさまを
いへり此宮に年頃侍ひて憔悴したる也つゐへとは
おとろへたる也
かたしけなく共　○侍從を常陸の宮に取替たきと也
いてたちなんことを　○大貳の妻の詞也
なとかう　○双子地也よの常の人ならはうちもなく
へきそかしと也
故宮をはせしとき　○我身を随分と思て云也
ちかき程はそのつから　○宮にある時をいへり
心とけても　○宮也
大將殿　○大將を去玉へけれとも女のいひつけたる
まゝと云々花
いとうれしき事なれと　○宮の詞也
けにしかなん　○大貳の妻の詞也
兵部卿の御むすめ　○紫上也乙女卷に式部卿也或本
式部卿とあるは書誤也花
心きよく我をたのみたまへる　○まことの貞女とも
別して思玉ましきと也
けにとをほすも　○宮の御心也
なくなくさらはまつ　○侍從なくさめてをくはかり
にと申也
かのきこえ給も　○侍從なかに入て大貳の妻の申も
又宮のの玉も何れもことはりなると也
この人さへ　○侍從さへ我を打捨てはとおほす也
九尺あまりはかり　○昔はきぬのたけ九尺なりされ
ばかづらも九尺にする也
くのえかう　○薫物の惣名也

やふはら　○はらとよむ
さらはまつけふは　○侍從か詞也
たゆましき　○ありめのまゝをいへる歌也
こまゝの　○侍從か母也侍從か母をまゝといひける
なるへし又はめのとの總名のやうに云來れるにや
この人も　○侍從也
としころの　○年月堪忍し難きうちをも過し來つる
を今更に口惜きと也
玉かつら　○誓言したる也更に心はかはらしと也手
向神は道祖神をいへり
いつらくらう　○大貳の妻の云也
心もそらにて　○侍從か心也
おひ人さへ　○人々とまるへくもなく云あへる也
てしのしら山思ひやらるゝ　○住吉物語にもかひの
しらね思ひやらるゝなと書る此類也
はかなきことを　○侍從がこと也
よるもちりかましき　○塵つもりたる床のけしき也
かのとのにはめつらしき人に　○紫上をいへり箋曰
めつらしきにと云本有也可然歟下の詞に物さはか
しきとあり尤めつらしきの詞可然歸京のことを云也

その人は　○ひたちの宮のこと也
年かはりぬ　○源廿八歳也みをつくしの奥也
かたもなく　○かたちもなく也
おほきなる松に　○此時のさま尤艶也
風につきて　○引歌に及はす
たちはなにはかはりて　○花散里を心さして行玉ふ
故に藤の花に橘をおほしいつる也花云橘ならねと
又おかしと也此時花散里へ忍玉ふ道なれは思出玉
ふ也
みし心ちする　○ひたちの宮也
おしとゝめさせ　○車をとゝめ玉ふ也
こゝはひたちの宮　○源の詞なり
しか侍と　○惟光か詞也
こゝにありし人は　○源の詞也
よくたつねよりてを　○源の用意也自然此程又かよ
ふ人もある歟の由也
こゝにはいと　○ひたちの宮の御方也
ひるねの夢に　○父宮の見へ玉へるに折ふし源氏の
問玉ふは誠に瑞夢なるへし
なき人を　○ひたちの宮の歌はいつも能も聞へさる

を此歌はきはめて面白くあはれなるは時の感より
出來ぬる故と見えたり
それはほかになん　○内よりの答へ也
ちかうよりて　○惟光也
たしかになん　○いまた此所にまします歟と也
こよひもすきかてに　○源の相かはり玉はさる由也
　こなたにはいかゝと也
かはらせ給ふ御ありさま　○能返答也
よし／＼まつかくなん　○惟光か詞也
なとかいとひさしかりつる　○源の問玉也
しか／＼なん　○惟光か詞也
我御心のなさけなさも　○源のみつから身をせめて
　の玉也まへに蓬生の君も我身のかくてうくわすら
れたるにこそあれと云々かやうに互に我身をせめ
　玉故に恨みもあらさるへし
いかゝすへき　○源の惟光にの玉也
かはらぬありさま　○まへに老人の詞にかはらせ玉
　御ありさまならはかゝるあさちかはらをうつろひ
　給はては侍なんやとありし語をうけたり
ゆへある御せうそこ　○歌なとを先よみ入て返しな
とを見てこそよのつねならは入玉へきを猶此末つ
むさやうの方の心をそさたをしはかり玉ふまゝに
さもなき也いさゝかえんならさるやうなれとかや
うの所一切人の用意なるへし心をつくへし歌をよ
みかはし玉ふこともなきはすへなきやうなれは獨
　こち玉ふ心面白し
たつねても　○第二句妙也歌なとよみかはし玉こと
もなくはすへなかるへきをかく獨こち玉心面白し
猶おり給へは　惟光はたゝに過玉へかしと思と此詞
　にて見えたり
御さきの露を　○惟光折ふし騎馬なるたよりある也
　種々説あり不用之
御かささふらふ　○只今の露けさはけに宮城野の木
　の下露とよめるやう也と也「みさふらひみかさと
　申せ宮城のゝ木の下露は雨にまされり
むとくなる　○無徳也面白きこともなきと也
たちましりみる　○人かけのなきをいへり
心ゆかすおほされし　○大貳の北の方の參りし故に
　心ゆかすおほすと也
いとなつかしき　○香の御からひつに入たる故に香

はしきと也
かのすゝけたる　○まへに大貳の妻にあひ玉し時の几丁也
としころ　○源の詞也
すきならぬこたちの　○松にかゝれる藤をいへり杉は尋るしるしなれは也
まけきこえにけり　○とはせ玉はぬにまけ侍ると也
ほのかにきこえ　○聊いらへをし玉也
またかはらぬ心ならひ　○源の心かはらさる心ならひにふとまいりたりと也
いひしにたかふ　○いとゝこそ増りに増れ忘れしといひしにたかふことのつらさは
ひきうへし　○ひきうへし人はむへこそ老にけれ松の木たかく成にけるかな此宮の松は我身のうへしにはあらねと木高くなりたるを驚玉也我身の年もつもりたる由也
夢のやうなる　○源須磨のうつろひのと也いまた昔のまゝにかやうに立とまりて有る人もありけるよと也
ふちなみの　○まつこそとはひたちの宮の待方によせたり上の詞杉ならぬしるしの詞より讀玉へる也
宮古にかはりにける　○すまより歸京の後萬の事かはりたるをいへり箋曰須磨の旅所都に引かへたると云義也次の詞を引加て見るへし
春秋のくらしかたさ　○上陽人の心あり源の自稱して我身ならてはたのみ玉ふ人も有ましきと也打むきての玉ふ也
年をへて　○花のたよりはかりと云なし玉ふ也
月入かたに　○面白きさま也
あたり〳〵　○そこ〳〵と見へたる也
うへの見るめよりは　○宮の荒たるさま見るめのあはれなるよりは又みやひかに見ゆると也
たうてほちたる人　○花鳥に見えたり桂中納言物語の説歟只貧女のこと也河内本まゝとありまことしき女のこと也云々末一決畢竟實法（シホウ）なる人のことなるへし
おなしさまにて　○ふるき物をも改めすして居玉也
物つゝみしたる　○是を取所に源の思玉也
かの花ちるさと　○めうつしもはな〳〵とはこれもなきとなり花散里のいへのさまもはなやかならぬ

所なれは末摘の宮のあれたるも目うつしことの外
ならぬと也
まいりこけい　○賀茂祭の齋院の御禊也四月なれは
也
しもへとも　○下部也
いたかき　○鰭板なとなるへし
かうたつねいで給へりと　○今まて尋玉はて捨をき
玉ふことの面目なき由也
二條院いとちかき所　○東の院也
なけの御すさひ　○以下草子地也源の平生をいへり
少々の人をは何ともおほさぬと也
世にすこしこれはと　○六條御息所朧月夜なとなる
へし
なのめにたにあらぬ　○ひたちの宮のとる所もなき
をいへり
うへしもの人々　○上下退出の人々歸參する也
心はへなとはた　○末つむの性のなたらかなるにな
らひたる人々いまさらに受領なとのはしたなきに
うつろひて末つむの穏便なりしをおもひいつるな
り

君はいにしへにも　○源也
物のおもひやりも　○源は宮中に生長し玉し故に悲
しき人の思やりなとは無りしをすまのうつろひの
後さやうの思やりもよく思知玉と也
かく御心の　○源の御氣色あなかちに心に入れ玉と
見おほせたる也
ふたとせはかり　○此詞にて一兩年うつるへし
東の院　○乙女卷邊にあたる也此卷はひたちの宮の
一期をかけりされはかく行末のことをもかけり
いとあなつらはしけに　○人からを執し玉也
かの大貳の北のかた　○一任五ヶ年にてのほる也こ
れも行末を書り年の移りたること見ゆ例の行末を
書たるべし
うれしき物の　○今ちと堪忍すへき物をの由也
いますこしとはすかたりも　○草子地也

關屋　巻名以詞名之あふさかの關やいかなるさ
あるやの字は助のや文字也不ㇾ可ㇾ爲二巻名一關屋よ
りさとくつれ出たるとある詞より名つけたり源廿
八歳の九月までのこと也みをつくしの末廿八歳の
十一月計までのことあり蓬生は四月頃まで見ゆ仍
此巻横花鳥竪の並と云々然れとも横の並也
いよのすけ　○伊豫の任はてゝ上洛する也
またのとしひたちになりて　○源氏すまへ赴（オモムキ）玉し前
の年常陸になりて下りし也
かのはゝきゝも　○空蝉也
つくはねの山を　○甲斐かねをねこし山こし吹風を
人にもかもやことつてやらんの歌にてかけり甲斐
かねを常陸のことなれは筑波根に用たる也此歌の
心はねこし山こしと云て幾重の山をかこへつらん
と云心也されは用かへたるも面白しと也てとつて
も申度思へともうきたるやうなる便はかへりて聊
爾なる由を思て中々音信も申さゞりしと也
かきれることも　○源のすまへ下り玉しは今年まで
三箇年也常陸に下りしは此前の年也されは一任四
箇年にて五年めにのほる由能叶へり

京に歸りすみ給て　○五年めにのほると見えたり
せきいる日しも　○ひたちの守京に入る日也
車ともかきおろし　○牛をはなつ也轅をおろす也
かたへはおくらかし　○類ひろき故にあとさきに少
々まへの日も上洛する也
車とうはかり　○今日は車十輛はかりあると也
齋宮の　○伊勢齋宮下向のこと也
なにそやうの　○賀茂祭なとのことを思へり
殿もかく世に　○春にあひたる樣也
關屋よりさとくつれ出たる　○源のとほり玉故に皆
出てかしこまり居たる也
色々のあを　○狩襖也面布にて裏絹也昔はぬひ物な
とをもする也又くゝりそめしたるもあり當時すあ
をとて着するは此あをのうらをのけたる物也
御くるまはすたれおろし　○旅人の多き故憚玉由也
さらては車の簾さしたることなきにはおろすこと
はなき物也
かのむかしの小君　○これも今上洛する也
けふの關むかへ　○空蝉の方へ源の言傳し玉也隨分
今日の關迎へに出玉ふ由に云なし玉へる興あり總
して唐人なとも送迎をは關をかきりて行也

ゆくとくと　○清水よりも涙はふかき由也
えしり給はし　○空蟬の心中に思歌なれは也
いしやまより　○参籠と見えたり
右衛門のすけ　○小君也御むかへにまいる也
一日まかり　○まうて玉し時御供に侍らはさるおこたりにまいる也
おほえぬ世の　○すまのこと也
紀伊のかみ　○常陸のすけの子也中川のやとのあるし也
右近のそう　○大將のかりの隨身せし人也須磨へ相隨奉りし也此人を一段抽賞して見せ玉也罸をは淺くし玉也
すけめしよせて　○右衛門のすけ也
いまはおほしわすれぬへき　○衛門のすけの思也空蟬をよくわすれ玉はさるよと也
一日はちきり　○文の詞行あひ玉は深き契なると也
わくらはに　○玉さかに行あひぬれと逢ことのなき由也近江によせたりしほならぬ海は見るめなきと云心をよめり
せきもりの　○常陸のすけ我物にして具して上洛せしをいへり

一日まかり過しかしこまり　○源氏石山に御逗留ありしにや
むかしにはすこしおほしのくと　○小君が源氏に隨ひ奉らぬ故にかく思ける也おほしのくとは遠さかるをいへりかく迄に念頃にの玉ひし物をと也
女にては　○女の身にては更にくるしからぬと也
いまはまして　○空蟬の心也
めつらしき　○双子地也
あふさかの　○關の景氣也昔より源と空蟬との中は如此と也
ゆめのやうに　○うつゝともなき也
のこしをくたましいもかな　○花鳥引歌
あはれもつらさも　○源の心中也
この君の　○空蟬のこと也我在世にかはらさるやうにと也
しはしこそ　○何れも子ともの爲には繼母なる故也
たゝこのかうちのかみ　○中川のあるし也昔より心にかけし故に心をはこふ也
かみもいとつらう　○河内守也
のこりの御よはひ　○殘生をはいかゝと也
あひなのさかしらや　○草子地也

繪合　以詞爲卷名兩度の繪合あり內々又外樣と見えたり凡天德の歌合に摸してかけると見えたり冷泉院を村上に比したる也源氏三十歲の三月也物語の上には廿九歲のことたしかに見へす但前齋宮の御まいりのこと廿九歲の冬なるへき歟と見へたり其故は故宮す所の周忌霜月邊なるへし然は其末に入內あるへし正二月の間に入內あらは此繪合やかては有ましき歟と云々

前齋宮の御まいり　○秋好也冷泉院の女御にまいり玉ふなり齋宮の人歸京ありて入內の例河海に見えたり

中宮の　○薄雲也御出家の後なれとも只今別に中宮なしさてまきれなき故にかく書るなり薄雲の御心此入內のこと可ㇾ然よしの玉ふこと蓬生卷に見へたり

とりたてたる　○源氏の心也

二條院に　○二條院より入內あらせばやと思玉たれと朱雀院をはゞかり玉ふ也

その日になりて　○入內の日也

うちみたりのはこ　○髮の具なれは打亂りといふなり

かうこ　○こ の字淸濁兩樣也

百ふのほかを　○はるかにの心也

とゝのへさせ給へり　○朱雀院よりかけ〳〵しき音信には非す

をと見給ひも　○源さだめて見玉へきとて也

かくなんと　○源に見せ奉る也

たゝ御くしの　○たゝの字有ㇾ感源の大概に御覽じて大やうに上﨟しきやうたい心をつけて見るへしわかれちに　○榊卷にて別のくしさし玉時に歸京有ましき由の御詞をかこつけにてはるかなるへき中の契に神のいさめ玉かと也

おとゝこれを御覽し　○此種々の御音信を大かたに見玉也御歌なとはよく見玉にては有へからす

かゝるたかひめ　○冷泉院へまいり玉こと朱雀院の御心をおしはかり玉と也

なにゝかく　○此入內のことはたゝ我心ひとつのことたると也

つらしともおもひきこえしかと　○須磨の左遷のこと也

またなつかしう　〇朱雀院の御心一つにてもなきと思なす也

とはかりうちかなめ　〇時はかり也しはらくと也

この御返は　〇源の詞也

又御せうそこも　〇院よりは御文も有へきと也

いとあるましき　〇御返事なくては叶ましきと也

しるしはかり　〇こま〳〵とまてはなくとも申されよ也

いにしへおほしいつるに　〇大極殿にてのこと也御涙を落し玉し事なと也其時は朱雀院は廿五歳也

こみやすん所　〇御息所同輿し給ひしこと也

わかるとて　〇かへりてとは歸京ありて也かへりみし給ひそとの給ひししるしもなきと也

院の御ありさま　〇源の心也秋好の御心には院を心よせに思給へきと也にくきかたに思やり給ふ也

うちはまたいといはけなく　〇此巻はみをつくしの巻の次の年にはあらす三年目成へし內は十三歳はかりにてましますへし　但しゐて御年のさた無用にや

にくき事をさへ　〇齋宮の心をはかりて也次へまいり給とおもはしからすやと也源の心くせの習に院の御心を察玉也

すりの宰相　〇參議にて修理大夫をかけたる人なるへし系圖に見へす

よき女房なとは　〇故御息所の御時より可然人多く侍ひ侍る也

さこそはえあらぬ　〇世の人はさやうにやさしきことはありかたき也

あはれおはせましかは　〇故御息所のこと也

中宮も　〇內に薄雲也おはする也常には三條宮にましますと也

宮も　〇薄雲也

人しれす　〇主上の御心の中也

こきてんには　〇致仕のおとゝの女也おさなくましますゆ故にあそひかたきにかたらひつき給也

これも人さまも　〇秋好也

あなたかち　〇弘徽殿に也

權中納言　〇致仕の大臣はこのたひの中宮にもと思ひて參らせ給也

院には　〇朱雀院也

齋宮のくたり　〇源の申出して院の御心をも試みんとて也まへに忘れぬふしに仰られし程に也

とかうかの御事　〇秋好の躰の事也院は別の觽さし給時見給ひし也源はいまたほのかにも見奉り給はさる故に床しく思給也

心にくき御けはい　〇奥ふかなるさま也

みたてまつり給ふ　〇對面したるには非すけはひなとをいへり

かくすきまなくて　〇私好弘徽殿也

兵部卿宮　〇紫上の父宮也此御むすめ入内有へき事と前に見えたり

御かとおとなひ給なは　〇外戚也兵部卿宮は薄雲の兄弟なれはなり

ましてをかしけなる　〇秋好也殿上人なとさへ繪を好ましくするをは心とゝめ給へりまして秋好中宮なとかき給をは一入御心にかけ給ふ也

ゐを興あるものに　〇主上の御こと也

まほならす　〇秋好也

月なみの繪　〇十二月の繪なるへし

又こなたにても　〇繪に心をとゝめ給故也

この御かたに　〇秋好の御かた也

いたくひめて　〇かたく口かためなとする也

殿に　〇二條院也

女君に　〇紫上也

長恨歌王昭君　〇只今ことの始なる故に斟酌ある也何れも不吉なる故也かやうのこといかにも心つかひ有へきことゝ也

こたみは　〇このたひ也

かのたひの　〇須磨にての繪也

いまゝて　〇紫上の恨み給也

しらていまみん人たに　〇一向知さる人也とも哀なるへし

ひとりゐて　〇すまの巻には女君も書給ひたりと見ゆされとも今も忍てかくよみ給へりそのおりの慰みにはかやうの繪なとを見るへかりし物をと也此時紫上も日記のやうにかき給し由幻の巻に見えたり只今は源には今まて見せ給はざる由を恨み給へと源にも又紫上の繪をはかくし給也

うきめ見し　〇一二句はすま明石のうつろひをいへり涙かとは涙哉也涙と波とをかけたり過にし方に

立歸ることくなると也
中宮　○薄雲也
かたはなるましき　○此中にてすくれたるを撰給也
繪合のあるへき張本にかき出せり
やよひの十日　○公事なともなく隙ある時節也
おなしくは御覽し　○繪合のくはたて也
こなたかなた　○弘徽殿梅つほ也
むめつほ　○秋好也
名たかくゆへある　○ふるき繪とも也
うち見るめの　○當世の繪なれは打見る處きら〳〵しく目とまる也每事如此物也
いまめかしき　○賓ならぬ方也
てよなくまされり　○弘徽殿は勝たる也
これはかれは　○評したる也
中宮も　○薄雲也
かた〳〵御覽し　○中宮もすき玉ふ事故よりとりもち給也
ひたりみきと　○是則內々の繪合也
いうそく　○有職也
竹とりのおきな　○梅壺方竹取かくや姬の物語也萬葉に若菜の事によめるは此物語にはあらす六百番に顯昭たかとりとよめるは萬葉竹取也別の事也
なよ竹のよゝに　○花鳥に物語の大意は見えたり先右の方より難を加へ侍り
なよ竹の　○玉神代のことなれはむかしのことと云心也富士のことをいへは神代とも云歟
めをよはぬならんか　○玉左方の詞也左の竹取のことをほめたてる也右方よりおとしたりしにこたへたるにや
もゝしきのかしこき　○玉內裏よりめしけるにはまいらさりし也
あべのおほしか　○玉右方よりおとしたる也竹取物語に有かくやひめは天人なれは凡人にあはしとて難儀なると共を云て或は蓬萊の玉の枝又火鼠の皮又は燕の巢の中なるこやす貝なとを取て來ん人に逢へしと云しに依て此安倍のおほし渡唐の舟を以て金銀をつくして求たりうつくしき皮を得て姬に見せけるに火に入て心見るに即燒けり仍曲なかりき此ことをいひておとしたる也
くらもちのみこ　○玉親王にや是もかくや姬の懸想

人なり蓬萊の到難きことを知なから僞て行て尋たる由にて玉の枝を造出て姫に見せける時玉造たる工の來て祿の未給を責けるにて僞顯れて曲なかりきこれもかくや姫の繪をそしりたる也其時姫の歌に「まことかときゝて見たればことの葉をかされる玉の枝にそありける

神世の事なめれは　○花鳥上代と云々尤面白し

ゑはこせのあふみ　○昌泰二年二月除目執筆時平公讃岐少目從八位下巨勢朝臣相見畫師云々貫之も同時たるへき也

かんやかみ　○常は宿紙をいへりこゝは只色紙也唐の綺にて張たるなるへし

としかけは　○弘徽殿方也うつほの物語也十二三歲の時遣唐使にて波斯國に到り琴の聲を聞也うつほの木の中に有て琴を引事あり唐日本に妙を彈する也孝行の者也阿修羅琴を作て與へしてとあり

ならひなしといふ　○右方の人の右をほめて云也

つねのり　○當時の繪師の榮花物語第八屛風そろへられたる所にもかやうにある屛風ともはためうちつねのりなとかきて道風こそはしきしかたはかきためれ云々道風延喜朱雀の時代の人也

左には　○左の劣たる也右勝也

伊勢物語　○左也

正三位を　○右也

へい內侍　○左の方人也

いせのうみの　○今やうのことに皆まけてはふるき物語は有ましき歟と也

雲のうへに　○正三位の物語にあること成へし兵衞大君も此物語の中に有人成へし雲の上にのほれると有へき也ちひろのそこは伊勢の海をいへり

さい五中將　○薄雲の勝と定給也

宮　○薄雲也

みるめこそ　○此歌を梅つほの御歌の由花鳥にしるさる如何梅壺は我御方の繪なれはかやうにはの給ましき也いかにも薄雲の御歌なるへし今尼にてまします故にいせをのあまとはよみ給へる也

一まきに　○結句の番を肝要と爭ふ也こゝまては內々の合也

うへのも宮のも　○內のと齋宮とのこと歟花鳥に初度繪合は齋宮と內と云々

御前にて　○主上の御前にてと也天徳の歌合を摸せり
かのすまあかし　○左遷の愁をも顯はし給はんの心あるへし
かみ繪を　○昔は多分絹にかく也紙繪はまれなる也
いまあらためかゝむ事は　○源の方よりの玉也今新にかゝせたるは曲もなきと也
院にも　○朱雀院也秋好をおほしはなたぬ御心にやむめつほ　○秋好也
としのうちの節會　○年中の節會の繪也
えんきの　○桐壺帝を延喜帝に比すると顯然たる也
又わか御よの事も　○朱雀院の御代也
きんもち　○公茂也繪師也金岡か孫と云々
ゑんにすきたるちゝんのはこ　○花鳥兩儀ありえりすかしたる筥の說可然歟
たゝこと葉にて　○文はなきと也
さこんの中將を　○院の昇殿をもゆりたるもの也
かう〳〵しきに　○神々しきと也
身こそかく　○朱院の御製也あはれなる御歌也今こそあれ昔の大極殿の儀式はわすれ玉はぬと也

むかしの御かんさし　○花鳥說尤有レ興有レ味者也
しめのうちは　○朱雀院の御在位の時の齋宮にてありし時を戀しきの由也
をこゝをもつらしと　○双子地の評也須磨のことをいへり
すきにしかたの　○双子地也　朱雀の御繪朱母后の方より傳てあし后の妹の方に傳て權中納言の方の女御方へも傳るへし
きさいの宮より　○故弘徽殿の大后より相傳ある也
あの女御　○權中納言の方の女御の御方へもつたはるへし
內侍のかんの君　○朧月夜也女御のそばにてましま す故にをのつからつたはり侍る也
ひたりみき　○左は梅つほ右は弘徽殿也西むきにて右は北左は南也
女房のさふらひ　○臺盤所也主上ましますも也
こうらう殿の　○臺盤所の西也
左はしたむのはこに　○先うちしきを敷て其上にしたつくゑを置きて其上のしき物に紫の唐錦をしきてそれに又つくゑを置てさて紫檀の箱に繪を入て

置也又右にはうちしきはあをぢのこまの錦と計ありてした机のうへのしき物をいはす是は文章のあやに略してかゝさる也左右ともに置様は同し物なるへし

わらは六人　○雑役を勤すへき用也

あか色にさくらかさねのかさみ　○(玉云)かさみは童女のうへにきる物也水干のかみのやうなる物也あか色のうはきに櫻かさねのかさみ紅藤重ねは皆袙也あこめは二も三も重ぬるもの也藤かさねは面うす紫裏萠木を云也

わらはあを色に柳のかさみ　○あを色はかりやす紫にあくさしたる色也一本あをにとありあをにならは濃き萠木に黄のましりたる也柳は面白く裏青きを云夏は卯花と云也

やまふきかさね　○面うす朽葉裏黄なるをは花山吹と云面黄に裏紅なるをはうら山吹と云以上一注

あをぢ　○萠木に黄のましりたる也

あしゆひのくみ　○くみにて花足をからみたる也

まへしりへと　○まへは左しりへは右也

そちの宮も　○判者也螢の宮也繪をすき給故に其事となくめしありて此繪の判者をし給也

かみゑはかきりありて　○絹ははたはり長し紙は短き故にかきのへさる所ありてさこそと思やらるゝ所のある也

むかしのあと　○不耻上古也

あさかれひ　○花說西の障子と云々然れとも東なるへし其故は朝餉と清涼殿とのあはいなるへし

中宮も　○薄雲也かやうの繪なとの方よく知給へる故に耻しきと也

さしいらへ　○源の詞也

左なを　○左方一番の勝と也今一番なるへき時須磨の繪出たり

心のかぎりをもひすまして　○源の思すましてかき給也

いはけなきほとより　○源の詞也

院のたまはせし　○桐壺の帝也

いのちさいはひ　○顏回が不幸短命の如し

ほんさい　○天下をまつりこつべき方を能々をしへ給也

つたなき事　○いたらぬ事もなきさと也

おほえぬ山かつに　○須磨のうつろひのこと也
なにのさえも　○帥の宮の詞也
おのつからうつさんに　○諸道皆師範ある物なれは
學ひ得へき也
筆とる事と　○繪かくこと師も不傳所あると也
ふかきらうなく　○智惠ある物はかく能するわさか
と思へはをれものは愚なる物なり愚なるやうなる
人もきはめてよくするわさ也
家のこ　○たかき家の人々也
猶人にぬけぬる　○源をさしていへり天然諸道に器
量あるをいへり
そのなかにも　○連枝多くましますなかに源氏獨傑
出たる也此帥の宮も連枝也
琴ひかせ　○文才をは第一にして次に管絃をいへり
禮樂の次第をいへる也かやうに諸道の達したる人
は北邊左大臣信公のことを下に含めり
まさなきまて　○つよくほめたる詞也
廿日あまりの　○まへの繪合は十日頃也
こなたは　○臺盤所は西むきなれは也
ふんのつかさ　○女宮也和琴なとあつかる人

さはいへと　○源の一人のやうにいへとも此中納言
も源におとらさる人と也
うへ人の中に　○こゝに祇候の人の中也
みこは御そ　○今日の判者たる故也
又かさねて　○別して祿を玉はり玉歟
うら〳〵のまきは中宮に　○薄雲へまいらせ玉也
またのこりて　○御覽せられたきと也
うへにも　○主上も興ありとおほす也
權中納言は　○心のやみ也弘徽殿のことを思へり
うへの御心ざしはもとより　○こき殿事也
さるへきせちゑ　○至今延喜天暦と云如くに冷泉院
をは天暦に比してさやうにいはれんと也實なるこ
とを本として又遊の事有しと也
おとゝぞ　○源也休退すへきと也今すこし主上も御
成人有てと思玉也源氏内府也
なかころなきになりて　○須磨のこと也此事故に今
までの命をたもつと也
御たうつくらせ　○嵯峨の山莊のことあら〳〵書出
し侍る也松風巻に此春よりと云々
すゑの君たち　○夕霧明石の姫君也
いかにおほしをきつる　○双子地也

松風　紫名歌併詞にて號す源卅歳の秋邊よりか
けり繪合の巻も同年の春のことあり
ひんかしの院つくりたてゝ　○二條院の東の院也逢
生巻の末より造り給由見えたり
ひんかしのたいは　○明石上をすませ給へきと也
きたのたいは　○空蟬なとのためなるへし
しんてんはふたけ給はす　○花鳥に河海の説を誤た
る由をしるさる然れとも河海説可然歟其故は六條
院にても寢殿には紫上をを給はさる也聊心あり
と見えたり
やんことなききはの人々　○源のかよひ給ふ所々多
きをいへり
むかしはゝきみの御おほち　○明石の尼のおほち中
務の宮也兼明親王に擬して書歟
世中をいまはと　○明石上の心也
さるへき物をはあけわたさん　○造作の料は京への
ほすへきと也
あつかりこのとしころ　○やともりの云也
内の大殿のつくらせ　○源の嵯峨の御堂のこと也
しつかなる御ほいならは　○閑にと思玉はゝ御心に
たかふへきと也
なにかそれも　○これより尼公の詞也源の御堂ちか
きは幸と也
みつからそする　○預の詞也我强ちに領知すること
も無れともかた〳〵として居住すると也
故民部大輔　○前中書王次男伊行の事によそへたり
さるへき物　○かはりを出して我領する由を云也
そのあたりのたくへは　○上洛ありては此田畠なと
を取あけられてはとてあやうけに思て云也
つなしにくき　○つれなしを略したる也
はちふきいへは　○はちはらひなと云か如し
さらに其田なと　○尼公の詞也
券なとは　○支證の物なとはあれとさやうの物には
心なきと也
大との〻けはひを　○源の御方へもかけはなれぬさ
まに云なす也
かやうにおもひよるらん　○かやうに上洛すへき用
意あるをは源は知給はさる也
つくりはてゝこそ　○明石よりかやうの所求め出し
たる由を申也

人にましらはむ　〇源の心也
かくおもふなりけりと　〇人めなき所をと求る也けりと思玉也
これみつのあそん　〇惟光をつかはして見せ玉也
うみつらにかよひたる　〇大井川の邊なれは海つらに似通ひて明石浦にすみ玉しにたよりあると也
さやうのすまゐ　〇源の心也明石上はかやうの所のすまひもつきなかるましき人と也
つくらせたまふ御たうは　〇大覺寺の南とは栖霞寺を思て書る也彼寺は融公の山莊也云々
たきとのゝ　〇泉殿なとは大覺寺にもおとらさると也
これは河つらに　〇小倉の宮の御所也明石の尼の家をいへりそとしたる寢殿也
うちのみつらひ　〇惟光に見せ玉て後に源の御方より云付玉也
したしき人々　〇むかへをくたし玉也
露のかゝらぬ　〇源の契をかけ玉ふこと中々なると也　露ならぬ心を花におき初ての心あり
さらはわか君をに　〇手を放ち奉らんかと同ことを云也
としころたに　〇明石の尼の心也年比たに一庵の中にも入道はなかりし物を此時明石上につきてのほらてやはと思定めたる也
たゝあたにうち見る　〇そとしたる中さへ別は悲しき物をと也
もてひかめたるかしらつき　〇入道になりてかやうのすまひをせしをいへり
これこそは世をかきるへき　〇此栖にて夫婦諸共に身を終へきと思しに思かけさることの出來ぬるよと也
わかき人々　〇わかき人々は何心なくのほることを悦へる也
見なれて　〇入道を見知玉也三歳なれは也
ゆくさきを　〇うちむきて面白き歌也
ゆゝしやとて　〇いま〳〵しやと也
もろともに　〇播磨國の任にくたりし時夫婦伴ひしを只今ひき別んことは誠荒野の方角をも不レ知所に迷出たる心地し侍ると也花鳥説はさしつめてせはき歟と云々

こゝら契かはして　○源の御志の行末もしらぬはう
きたることをたのみなると也
いきて又　○いつの世に又あひ見んとかきりも知ら
さる也
おくりをたに　○父をいさなひ侍る也
世中を　○此以下入道の詞也中將を捨て播磨の任に
成て侍る故に我むすめをかしつく便にと思て任に
おもむき侍る也
さらに都にかへりて　○上洛してふる受領なといは
れんこと口惜く思て出家せし也
おやの御なきかけ　○父大臣たるを云也
そのかたにつけて　○其時はよく思とりたると思し
也
君のやう〳〵　○明石上のおとなひ玉を見ては都に
あらは然るへき宮仕をもさせ奉るへき物をと思か
へす也
にしきをかくし　○よるの錦の心也
佛神を　○住吉なとにたのみをかけし也
おもひよりかたくて　○源の御こと也
みたてまつりそめても　○行末いかゝと又物思ひを
し侍る也
君たちは世をてらし　○入道瑞夢のことを思ていへ
り
天にうまるゝ人の　○河海今案を加へてしるさる一
旦は其興ありされと此文をまへをかけて見る故に
不審出來ぬる也御契はかりこそはありけめと讀切
て天上欲レ退時の文は今わかるゝ悲の心はかりに
とる也今都へのほる人は天へものほる程の心にて
我心は此苦あると也○正法念經云天上欲スル退ント時
心ニ生ニ大苦惱ナ地獄ノ諸苦毒十六ニノ不レ及レ一ニ又云
果報若盡還墮ニ三途ニ云々
いのちつきぬと　○此所に藤の衣になやづれ給そな
と云詞のある本あり不レ用レ之其故は此詞は若菜卷
にあり重説なれは可レ略也
むかしの人もあはれと　○ほの〳〵との歌をいへり
此歌にあはれと云詞なしされと一首の內にあはれ
なるは備はれり
いくかへり　○うき木は舟と同心也舟よりは猶うき
たる心あり
おもふかたの　○順風也

いへのさまも　○大井の家也
年ころへつるうみつらに　○面白き書さまと云々
したしきけいしに　○源の家司也
わたり給はん事は　○源也
かの御かたみのきむ　○明石に源のおき玉ふ琴を随
身してのほれる也
身をかへて　我身に同き身なから一向身をかへたる
様也○風計もこの物なること也河海の説無益歟
ふるさとに　○明石上は都にて誕生せし也されとも
二三歳の事也故郷の事とはおほへ玉ましき也只故
郷に見し世とは歌のつゞきにてよめる成へし以ㇾ
琴事によせたる也
女君にはかくなんとたに　○明石上の京へ上り給て
とを紫上にはたしかにも申聞せ玉はさる也
とふらはんといひし人　○明石の上の事也
かつらの院といふ所　○紫上は大井と桂の院とをひ
とつに心得玉ふ也
おのゝえさへあらため給はん　○紫上の詞也源は只
二日三日は侍なんとある返答也
れいのくらへくるしき　○花鳥説いかゞ源の心と紫
上の心と同しからぬやうにてくるしきと也
いにしへのありさま　○源のすき〳〵しき心も古の
やうにはなしと人も云侍る物をとなり○花鳥説如
何
かりの御そに　○源の明石にてやつれ玉し時たに類
なかりし也
めつらしう　○源の御心也
大とのはらの君を　○夕霧也
山くち　○伊勢造営の時も山口まつりあり又鷹狩に
も先入る處を山口と云也
うちいみたるかほ　○姫君也
ほいあるところに　○二條院の東院也
いとうゐ〳〵しき　○明石上の詞也
つくらふへき所　○大井の宿のこと也
かつらの院にわたりたまふへしと　○桂院へ参たる
人々大井へ尋参たる也
かゝるところを　○源の詞かりそめと思て住所にも
必習着の心有物也そこに住はてされは立はなるゝ
時心とまるわさ也明石にてもやり水なとに心のこ
まり侍しと也

たつ時物うく　○大かたも此ことはり有こと也源氏すまなとにてやり水なとに心とめ玉ひしことを思て也
あかのくなと　○閼伽具のあるを見玉て母君のことを思出玉也
御なをしめしいてゝ　○禮ふかきさま也
つみかろく　○若君を能養たてまつりたるよと也
すて侍し世を　○尼君の詞也
いのちなかさの　○念比にの玉ことをいへり
あらいそかけに　○鹽屋の傍にては悲しかりしと也
あさきねさし　○御母方を卑下の詞也
むかしものかたりだに　○中務宮の跡なれは其事を語り出し玉也尼公の卑下したるをさやうの方には詞を加へすして此小倉の庭のさまをの玉へる妙也
此詞にて尼君の父前の中書王と云こと顯れ侍也族姓の高き故は至極して聞え侍る也甚深微妙の詞也
かことかましう　○石なと立かへさせなとし玉故也折節の景氣尤感有也
住なれし　○尼公の歌也我は昔のあるしなれとも忘れはてたる也水の音はかり昔のまゝなると也

いさらゐは　○いさらゐは小井也はやくのことゝは過にしこと也前の歌の第二句を請たる也
御てうに　○嵯峨の御堂のこと也
十四五日つこもりの日　○佛の縁日にや末の詞に月に二たひはかりの御契也とあり此法事のたよりにわたり給成へし
月のあかきにかへり給　○大井に歸り玉也
ありし夜の　○明石にて岡邊へ通ひ玉しこと也彼宿にをき玉ひし琴也
しらへもかはらす　○只今のやうに覺え玉也明石巻にこの音かはらぬほとに必すなと契玉し時の事也
かはらしと　○落句面白し折々に我泣音を添しと也にけなからぬ　○源の御傍にても似あはさるやうにはなきと也花鳥の說如何
身にあまりたる　○明石の上也
いかにせまし　○源の心也
二條院に　○紫上の養子にし玉へき歟なとおほす也
また思はん事　○明石上の思はん所いかゝ也
をさなき心ちに　○姬君也初はおもきらひし玉しも次第になれむつひ玉也

いとさと遠しやと　○里遠みいかにせよとかかくの
　みはしばしも見ねは悲しかるらん
はるかに思たまへ　○めのとの詞也
もろともにいてゝは　○明石上のことの玉也
うちわらひて　○めのと也
たをやきたるけはひ　○明石上也
さこそしつめつれ　○まへにはうこきもせさりしを
　云也
かくてこそもの〱しき　○源の容儀の打あひたる
　をいへり
かのとけたりし　○賀茂のみつかきよみたる藏人也
人かけをみつけて　○うちの人かけを見つけて也
きしかたの　○ゆけいのせうの詞也過にしこととも
　わすれ難けれともなく添て申難しと愁かくる也
うら風おほえ侍る　○明石にありし時のことをも謝
　し申へきをも其便もなきとて只今事のつゐてに氣
　色はみたる也
やへたつ山は　○雲の事也雲の八重たつ也此山里の
　さびしさは明石の島かくれにも更にをとらさる也
まつもむかし　○昔の友も侍らさるに昔忘れぬ人の

詞の頼しく侍ると女の答也
こよなしや　○殊の外也すくれたる也女の思あるさ
　まにいへるによれり我身も明石にて浮沈の思は同
　物也只今は冠を得てはなやきたる也明石上も波浦
　にて朽はて玉へきかと思しを思かけさると也花鳥
　說良清と云々如何
いまことさらに　○かさねてわさとまいるへき由也
頭中將兵衞督　○系圖になし
いとかる〱しき　○源の詞也
よへの月に　○御むかへの人の詞也
山のにしきは　○霜のたて露のぬきこそよはからし
　山の錦のをれはかつちる此歌にも紅葉とはいはさ
　る也面白し
御あるじしさはきて　○噪也
ことりしるしはかり　○河海に委見えたり
すんなかれて　○順流也
ゑひにまきれて　○危をも忘れたる也
けふは六日の御ものいみ　○こゝの注にかける也御
　物忌として何事とはなく六日なとつゝきたるなる
　へし箒木巻にもありし也

くら人の辨　○殿上人四五人はかりと云うちなるへし
月のすむ　○かつらの院を桂の里によそへてよめり結句はのとかに月も澄て面白かるへしとほめたる心也
まうけの物も　○かつけ物引出物なと也
久かたの　○我身の幽閑なるさまは霧もはれさる也行幸なともあれかしと也次の詞に見えたり
中におひたる　○久かたの中に生たる里なれは光をのみそたのむへらなる
かのあはちしま　○明石にて此歌を誦し玉しこと也
ものあはれなる　○双子地也
めくりきて　○面かけの近くさやかなる心也天下を手のうちに入たる也
うき雲に　○明石にまし〳〵しは誠に浮雲の如く也祝してよめる也
右大辨　○誰ともなし花鳥河海に破せらる尤可レ然
雲のうへの　○草ふかき露の谷にがげかくしの心あり老人なれは故院の御事を云出したる也
心々に　○双子地也
をのゝえもくちぬへけれど　○紫上のまへの詞にをのゝえさへ改め玉はんほとやまちとをにあるをうけたり
ものゝふしとも　○物節也
れいの心とけす　○紫上のこと也
なすらひならぬ　○源の詞也同程なることこそ論することはあれ紫上と明石上とは天地の隔あると也たくらふるにたらさる也
われはわれと　○紫上のいさめ玉也
ひきそはめて　○大井への文也
とけさりし御けしき　○紫の上也
これやりかくし　○させることなき文なれはかやうにの玉て紫上へまいらせ玉也
せめて見かへし　○紫上見ぬかほつくり玉也
まことは　○源の詞也姫君を見玉ふ也
ひるのこかよはひ　○三歳さいはんため也
いはけなけるしもつかた　○しもつかたとは腰をいへり裳着のこと也
ひきゆひたまへる　○着裳のこと也
おもはずにのみ　○紫上の詞也源の心へたてあるや

うに思はすなることをのみの玉程に我もあまりに見しらぬやうにあらんやはとてこそすこしもえんしなともしすれと也心にはさも思はさると也
いはけなからん　○かのをさなき御心に叶ひぬへきと也
ちこをわりなう　○双子地也
いかにせまし　○源の心也
月にふたゝひ　○まへにありし月ことの十四五日卅日の念佛なとの日のこと也
としのわたり　○星合にはまさりたる也

うす雲　巻名以歌號之春風巻と同年也源卅歳の冬より次年卅一の秋までの事あり
冬になり行まゝに　○大井の里の事也
うはの空なる　○明石上の心也明石の舊里をははれ來て又源もたへ〳〵にし玉へは也
かのちかき所に　○二條院の東也
つらきところ　○後撰十一かりそめなる所に侍ける女に心かはりにけるをとこのこゝにてはかくびんなき所なれは心さしは有なからなんえたちよらぬといへりけれは所をかへて待けるに見へさりけれは女「やとかへて待にも見へす成ぬれはつらき所のおほくもあるかな此詞書歌能是に叶へりこゝもかしこもつらき所多かるへしと也明石上の心は二條にうつりても源の同しさまにかれ〳〵にし玉はゝいかゝの心也
いかにいひてか　○恨て後さへ人のつらからはいかにいひてかねをもなくへき拾遺
かくてのみはびんなき　○中宮なとに思す故有ば也
たいに　○紫上也
さおほすらん　○明石上の心也紫上の養子にし玉へきこと也

あらためてやんことなきかたに　○紫上の御子にし
　玉ともまことの御腹ならては人は申ましきと也
はなちかたく　○源のいかゝと思玉故にやと詞に出
　しかたくし玉也
うしろやすき　○自然継母なとの方をいかゝとは思
　なし玉そと源のの玉也
かしこには　○紫上也
前の齋宮おとなひものし給を　○紫上は年頃御子な
　き故に齋宮を養子のやうにし玉しと也今紫上は廿
　四歳歟齋宮は廿三歳歟只名はかりの御子にし玉也
女君の御ありさま　○紫上のありさまをかたり玉也
けにいにしへは　○明石上の御心也源の御心はなを
　さりの人には人一人に心をとめ玉ましく聞及ひ侍
　しにかやうに心を紫上一人にとめ玉はいかはかり
　の人にかと床敷思給也
數ならぬ　○明石上也　卑下也
おひされとをき　○姫君也
なにゝつけてか　○姫君をはなしては源の尋玉こと
　も有難からんと也
あま君　○遠慮ある人也
はゝかたがらこそ　○朱雀院の延喜第十一村上天皇
　は第十四の皇子にておはしませと母方の可然に依
　て位をつき玉也今源も更衣腹なるに依て位につき
　玉ことのなきと也
さしむかひたる　○本臺也
おとりの所　○落胤腹也
これはやんことなき　○可然御腹にも出來玉はゝけ
　をされぬへきと也
思よはりにたる　○明石上也
おもはん所の　○明石上の思はん所をためらひ玉て
　御はかきにことよせての玉也
かひなき身に　○我身のかひなきにそへてもいかゝ
　と也又さりとて手を放ちてもいかゝと也かやうに
　いへるは思よはりにたるよと源の思玉也
いみしくおほゆべき　○いみしくはつよく悲しかる
　へしと也
さるへきにやおほえぬ　○明石まてくだしも縁にて
　こそ有つらんと也
かやうならん　○行末のことをいへり
雪ふかき　○明石上の歌也
雪まなき　○雪深き吉野の山也とも尋かよはんと也
　もろこしの吉野の山にこもる共の歌をふまへたり

この雪すこしとけて　○源の來り玉也
れいはまちきこゆる　○面白き詞也
さならんと　○さためて御むかへなるべきと也
人やかならず　○我心なから心ならさる也いなみ申
ともさも有へき物をと也
かろ〳〵しきやうなりと　○今申かへさは一事兩樣
なるへきと也
いとうつくしけに　○姫君也
おろかには　○猶さりの人にてはなかりしと也明石
のうつろひなともかゝることのあらんため也けり
と也
この春より　○髪をそき玉也
あまそきのほと　○ふりそぎ也さげ尼の髪のほとゝ
也
なにかかく　○明石上の詞也行末可ㇾ然とにてたに
ましまさはと也
みづからいだきて　○明石上はつねは物ふかけなる
人なりしか只今は別れ上ることのたへかたさに忍
ひ玉はぬさま尤あはれ也松風巻にはもろ共に出玉
へかしなとの玉し時のさまには替れる所思へし
末とをき　○行末を祝したる也

さりや　○源の心也
おひそめし　○松風巻にあさき根さしゆへやいかゝ
と尼上の云ひしをうけて深き心にの玉也花鳥說可
ㇾ然
人たまひに　○ともの女房ともの車也
とまりつる人　○明石上のことを源の思やり玉也
いかにつみやうらんと　○是は皆源のしわさ也と明
石上の思へきと也
ゐなかひたる心ちともには　○きら〳〵しき所のす
まゐはいかゝと人々思し也
にしおもて　○二條院の西面なるべしすみよきやう
にしつらはれたる也
山さとのつれ〳〵　○明石上のことを思やり玉也
物あひたる　○符合したる也
いかにそや人のおもふ　○源の心也同しくは紫上の
御腹にてあらは思ふ所もあるましき物をと也
わさとおほしいそくとは　○別に經營も見へさる也
不斷公卿殿上人侍ひ又御しつらいなとのきら〳〵
しさもいつものことなれは其きはのとりたてゝ見
ゆることもなき也
たすきひきゆひ給へる　○花鳥にしるせり別勘の中

也
身のをたり　○明石上の後悔する也
さこそいひしか　○只打たのみ聞えてわたし奉り玉
ひてよと前には云しがされど涙もろなる也
なにごとをか　○明石上よりの音信也
まちとをならん　○源の心也姫君のましまさぬ故と
思べきと也
女君も　○紫上也
年もかへりぬ　○源卅一歳也
まいりつどひ　○參賀也
たとなしきほとのは七日　○ちとおとな〳〵しき人
は七日などに參り玉人あるべし
うはべはほこりかに　○天下太平の時分也身々にと
りては皆そこの愁はあるらめとうへは思もなき様
に見ゆる頃おひ也當時の聖代をいへり
ひんかしの院　○花散里のこと也
ちかきしるしは　○明石上は程とをし是はちかき故
に細々にもわたり玉也
さくらの御なをし　○常の冬の直衣也
とにもいて給ぬべければ　○姫君のしたひ玉さま也
あすかへりこむ　○櫻人の歌也

舟とむる　○櫻人に其船留めと云詞有上の詞を受け
て讀り源氏を明石上の留めんと也櫻人の歌にて悉
皆よめり明石上を遠方の人になしていへり
行て見て　○さねこんとは早く來んと也
なにことも　○姫君也
いかに思たてすらん　○紫上の思やり也
などか同しくは　○紫上の實子にてましまさはと也
たゝよのつねのたほえに　○明石上の尋常にもあら
はこれ程心くるしく思ましき也
さるたくひなくやはと　○明石上の大かたの人にて
あらは此姫君をわか御方にとりわたして明石上を
は捨をき玉へりともためしなきにてはあるましき
物をと也
心のとかならす　○誠に夢のやうにいつも思玉也明
石上をあかす思玉故也引歌に及はさる歟
ひきすくしけん　○河海薫云々花鳥具と云々何れも
面白歟
こゝはかゝるところなれど　○源の上﨟しきさま也
何くにても聊爾に物なとまいることはなけれとも
と也
ちかきみてら　○御寺などへまぎらはして御出ある

也
けさやかには　○さすがにこゝをばさるべき處と源のし玉也
女もかゝる御心のほと　○源氏のおしなへての樣にはし玉はざるを見知て也
中々いとめなれて　○二條院へうつろひなんことをはあるましきことに思たる也
ふりはへて　○たまさかなれどかくわざとわたり玉也御志の深切なるをいへり
あかしにもさこそいひしか　○此世をば思すてつる樣にいへとも也
そのころおほきおとゞ　○葵上の父也
しばしこもり給へりし　○致仕の表奉り玉し時のこと也
しつかなる御ほい　○源の閑なるねかひも叶ふまじきと也此段皆源の心也
入道きさいの宮　○薄雲也
ことしはかならず　○后の御詞也上﨟しき體也我身と命の限を知かほならんもいかゝと也
うつしざま　○うか〳〵としたるさま也

三十七にぞ　○此年の重厄(チウヤク)此物語に多し女のつゝしむへき年也
つゝしませ給べき　○主上の御心也
かぎりあれは　○程なく還幸ある也
たかきすくせ　○后の御心の中也當時無双の人と也
うへの夢の中にも　○源の御事を夢にも知玉はぬことを悲しく思玉也
おとゝはおほやけかたさまにても　○太政大臣の事なと也
かうしなと　○柑子は毒なき故に病者も食用すると云々但それまでもなし只不食を云なるべし
院の御ゆゐごん　○后の源へ申玉こと也桐壺の御遺言也
御いらへも　○源さま也
はか〳〵しからぬ　○源の詞也
かしこき御身　○是より薄雲の行跡をいへり
かうけにことよせて　○その身權威を振給はさる尤殊勝なり
くさくのかたとても　○無用の物をはついやし玉はさる也

殿上人なとひとつ色に ○服衣事也諒闇也
ものゝはえなき ○天暦八年母后の事を比して云也
二條院 ○源の思出玉也
山きはの木すゑ ○峯の木末也
入日さす ○源氏も今鈍色の服を着し給故也
人きかぬ ○かやうに面白き歌なれと人のきかぬ所
なれはかひなきと也双子地也
入道の宮の御はゝきさき ○先帝の后
年七十（ナナソジ）
宮の御事 ○薄雲の御事
もとのことく ○御持僧にと也
ふるき御心さし ○もとの心ざし也
いとそうしかたく ○僧都の詞
しろしめさぬに ○主上にしろしめさゝるなり
法しはひしりといへとも ○寛算供奉のことなと其
類多し
いわけなかりし時 ○是より主上の御詞也更に幼少
にまします時より心隔てず思食れしに今は隔心中
さるゝことの侍る歟と也
あなかしこ ○僧都の詞也

すぎおはしましにし院 ○桐つぼ也
きさいの宮 ○薄雲也
世をまつりこち給おとゝ ○源也
佛天のつげある ○わさとかやうに申なし給也
わか君 ○我君也主上をさして申さるゝ也
故宮 ○薄雲也
心にしらで ○勅定也よく奏したる也
天ぺんしきりに ○例にたがひたる天變のことさまへ
に見たり
式部卿のみこ ○桃園の宮也
世はつきぬる ○勅定也
古宮のたほさん ○古宮とは薄雲也位をさり給はん
事をの給也
いとあるましき御事 ○源の詞也
ひじりのみかど ○聖代にも怪異などあること漢家
本朝不可勝計也主上をなくさめ奏て申給ふ也
ましてことわり ○致仕のおとゝ式部卿宮の薨し給
しことも也何れも皆かきりある老臣ども也
かたはしまねぶも ○かやうのことは女なとの學ふ
へきことに非すと也双子地也

つねよりもくろき御よそひ　○今主上も源も同じ素服にてましませば猶まかふ所なしと也
うちかしこまりて　○平生にも似ず慇懃に源にむかひおはしますをあやしく思給也
いまさらに　○薄雲も深く忍び給しことなるを今更にさた〳〵と問給へきこともいかゝとおほしめしかへす也
いよ〳〵御かくもん　○傳學ならでは知難きこと丶也此段殊勝學者可付心也
もろこしにはあらはれてもしのひても　○秦始皇之事河海に見えたりいと多かりと書る此外にも例有べし　私案之晋元帝は牛金といへる人の子也去程に秦始皇を呂不韋か子なるによりて呂秦といひ晋元帝は實父牛金か子なるによりて牛晋といへり
案鶴林玉露第五云呂秦牛晋　秦虎規山東蠶食六國不知六國未滅而秦滅矣何也始皇乃呂大韋之子則是嬴氏爲呂氏取滅也司馬氏欺人孤寡而奪之位不知魏滅未幾而晋滅何也元年乃牛金之子則司馬氏爲牛氏所滅也春秋書呂人滅鄫義正如此胡致堂欲用春秋法於始皇紀便明書呂氏元帝紀便書牛氏以後其實

日本には　○我國にはなきなるへし花鳥陽成院の御事を引く難用之　私此事は誠似有子細哉　一世の源氏又納言大臣になりて　○其例河海に見たり只今源を親王になし奉るへきと也
太政大臣に　○こゝにては未任給也任相國のこと也乙女卷に見たり
れほしよする　○位につけ給はんのこと也
しはしとれほす所ありて　○源の斟酌し給也
御くらゐそゐて　○従一位のことなるへき歟
世中の御うしろみ　○天下の攝政也
權中納言　○葵上の兄也
なにこともゆつり　○源の心かまへ也
命婦はみくしけ殿の　○王命婦也
この事をもし　○源の尋給也
きこしめさむことを　○薄雲の御心にあながちに忍給し事也聞召さんとは主上にきこしめすへき事也
一かたならす心ふかく　○薄雲のかく心深くれはしますを一かたならす源の戀しく思給也
齋宮の女御は　○秋好中宮也是より中宮の御ことをいへり源のうしろみ給さま也

あらまほしう　○中宮のしかるへき人にてましませは源も悦ひ思給也

秋の頃二條院に　○今は源氏を御里の分にし給也初は朱雀院への聞えたほしてよそ人のやうにし給ひしと也

御袖もぬれつゝ　○源也

せんざいともこそ　○源の詞也百草の花のひもとくなとの心あり

時しりかほなる　○諒闇の中なるを花はしらさるにやと也

むかしの御事とも　○御息所の御事

かくれはとにや　○いにしへの昔のことをいとゝしくかくれは袖そ露けかりける

みたてまつらぬこそ　○中宮をは源は未たさたかに見奉り給はさる也昔は男女のへたてはるかなるさゝ見たり

すきにしかた　○源の過にし方のことも語り出給也

このすき給にし　○御息所也

あさましうのみ　○御息所はつゐに源を恨はて給し事也

かうまてもつかうまつり　○かやうの事にてさりとも見直し給へき歟と也

もえしけふりの　○いかにいひてもかへらぬことゝ也「むすほゝれもえし烟をいかゝせん君たにかけよ長きちきりを

いまひとつはのたまひさしつ　○今一つはかきさしたる面白し薄雲のことにや

なかころの身のなきにしつみ侍し　○左遷の事也

ひんかしの院に　○花散里也東院にうつろはし給ことこゝに初て見えたり

をほろけに　○おほろけならぬと也此入内のことも随分の奉公にて侍りをほろけなる心にてはし出さること也中宮をは我物にしてありともさもありぬへきこと也猶さりならさる心の中なると也

あはれとだに　○おほしめしゝるべきことゝ也

數ならぬをさなき人の　○明石の姫君也後には入内あるへし其間まちとをなるへきと也

この門ひろけさせ給て　○秋好の御さいはいにて此源氏の一門繁昌すへき時と也皇子御誕生なとのことを含めり干公高門のこと見河海

さしのうちゆきかはる時々の花紅葉　○六條院作る
へき心のあらまし也
あらはなるさため　○古來未決ことゝ也
もろこしには春の花の錦にしく物はなしと　○河海
石季倫金谷幷樂天か句をひけり
やまとことの葉には　○春はたゝ花のひとへにさく
はかり物のあはれは秋そ增れる
時々につけて　○春秋に思みたれてわきかねつ時に
つけつゝうつる心は此歌の心なるへし
いづかたにか御心よせ侍べからん　○六條院四季に
わかちてつくるへき心かまへ也其中にていづ方に
すませ給へきにかゝ御心を見んため也　實證私案
此段小蝶卷と野分卷とを書出へき序と見へたり
いときこえにくき　○大事なる返答とおほしたる也
ましていかゝれもひ　○我身はかなき心なとには分
別有難きと也
あやしときゝし　○いつとても悲しからすはあらね
とも秋の夕はあやしかりけり
はかなうきえ給にし　○故御休所のかくれ給へるこ
と哀なれは心よせのある由也大事なる返答をかく

云なせる尤殊勝也
いづこの御いらへ　○いかゞ御いらへをし給へきと
も心得給はぬと也
このついでに　○双子地也
あさましうも　○源の詞也
まことに心ふかき人は　○眞實に心深き人はかやう
にあさはかには詞にも出し侍らぬ物をと也
つらからんとて　○つらからん人の爲にはつらくし
てつらきはつらき物としらせし
わたり給ぬ　○秋好もうちへ引入給とて源も退出し
給也
やなきのえたに　○源の万つ具したる御さまをいへ
り梅かゝを櫻の花に匂せて柳か枝にさかせてしか
な
かうあなかちなる　○源のみつからのことをいへり
これはいとにけなき　○秋好に心かけ給事あるまし
き事と也
おそろしうつみふかき　○秋好に心かけ給事と薄雲
に通給しことを思ひくらへ給に薄雲にかよひ給し
ことは尙つみ深きこゝと也されどそのいにしへは年

わかき程にて思やりなきにゆるさるゝ方もあるへしと思さまし給也
これはいとにけなき事なり ○秋好を源の心かけ給ことあるましき事と也
なほこのみちは ○年たけぬれは好色の道には若き時の樣に思惟深き心まさりて遠慮の心も出來ぬる物也うしろやつしと也
おぞろしうつみふかきかたはをほくまさりけめどいにしへのすきは思ひやりすくなき程のあやまちに佛神もゆるし給けんとおほしさますも ○薄雲へ密通のことは若年遠慮なき故なれは罪かろきにや此秋好のことは有ましきと思食さます心の遠はつくつくと思へは年行て眞實の遠慮には非すおやのことよりも子のことは大切なると思故そと我なから思とり玉心の中のはつかしきと云義也これを猶このみちと云也舊義に此道と心得て好色のことゝあり不可然以上押紙
君の春の明ほの ○紫上の春をあはれみ給ふ事此詞より見えたり
いかで思ふ事 ○紫上故に山こもりも滯り侍と也

山さとの人も ○明石上也
世中をあぢきなく ○明石上のこと也
なとかさしもたもふべき ○明石上の京へわたし給はんことをきらはしく思はおほけなきことと源の思給也
すみなるゝ ○大井里也
いとふかゝらさらん ○猶さりの人を置てだに心とまるへきあはれふかき所のさま也
つらかりける御契りの ○姫君の出來給をいへり
こしらへかね給 ○なくさめかね給也
かゝり火ともの ○八月の末なれは自然篝火なとも有へし
かゝるすまひに ○明石にてのこと也浦のいさり火なとを見さる人ならはめづらかに思へきを明石上は日に近く明石にて見し故にめつらかにも思給ましきと也
いさりせし ○此歌古來稱美の歌也 明石にての物思ひも大ゐにての心盡しも同じきに又鵜舟の篝を篝のいさりに思よそへてうきことのはなれぬ心をいへり第四句ことに感あり

おもひこそまかへ　○誠に明石にてのいさり火に似たりと也
あさからぬ　○花鳥説可然明石上のかく云ひ給よりも我身の下の思ひは猶さりならぬと也落句面白し
たれうき物と　○打かへし思へは悲し世中をたれうき物と知せそめけん花鳥源氏の君の御心を明石上の恨たると云々如何これは源の心なるへし
　寫本三光院殿實枝御筆　今川氏眞有之者也

細流巻七

あさかほ　をとめ　たまかつら
はつね　こてふ　ほたる

槿　巻名以歌并詞號之源氏卅一歳の九月より冬の末までの事見たり宮内大臣此巻に宮と稱する人五人なり槿齋院父桃園式部卿女五宮三宮致仕北方薄雲女院等なり
齋院は御ふくにて　○薄雲の巻の末に式部卿宮失給し由あり此事成へし河海に延喜帝の御子の事をひけり準據の例成へし齋宮は一代に一度かはるなり齋院は其御身に服あれはおり給ふなり代始にはかきらさるなり
宮わつらはしかりし事を
いとくちおしと　○源の御心なり
なか月になりて　○重服になり給故に齋院をおり給て先他所に居住して今桃園宮にうつり給と見たり
　桃園宮は今の佛心寺其跡なり
女五宮　○式部卿宮の御連枝なり
この院このみこたるを　○故院とは桐壺帝なり
いまもしたしく　○源もしたしく大切に思給なり
たなしくしんてん　○桃園の東の方には女五宮住給

なり
ほどもなくあれにける　○式部卿宮薨給ひて程もへさるにあれたるさま哀なり打つけにさひしくもあるか紅葉はもぬしなきやとは色無りけりの心あり
宮たいめん　○此巻に宮と云こと五あり槿前齋院父桃園式部卿女五宮三宮致仕北方薄雲女院等なり是は女五宮なり
これほどのゝ宮は　○三宮なり葵上の母宮なり此女五宮よりは年まさり給へともわかく見へ給ふなり
院のうへ　○桐つほの帝なり女五宮の詞なり
この宮さへ　○式部卿宮なり
かしこくも　○源の御心の中に御年のよりたることを思給ふなり
院かくれ給て後は　○是より源の詞なり
たほえぬつみに　○須磨の事なり
たまく\〵たほやけに　○歸京し侍りては又政道隙無となり
いとも〳〵　○女五宮の詞なり命永くてすまのうつろひなどの事見聞侍れは悲きとなり

かくて世にたちかへり　○今立歸給てかくさかへ給を見侍れは命なかさもかひあるやうに侍となり
いときようらに　○さしむかひて源をほめ給なり
内のうへなん　○冷泉院源によく似給となり
さりともをとり　○源にはをとり給へきとおしはかりたるとなり
ことにかくさしむかひて　○源の心の中なり
やまかつになりて　○源の詞なりすまなとのやつれなり
あやしき御おしはかり　○さりともをとり給へらんとありし返答なり
とき〳〵見たてまつらは　○女五宮の詞なり源を時〳〵に見奉り度由なり
三宮うらやましく　○葵上の母上をいへり
このうせ給ぬる　○式部卿宮なり槿齋院を源に嫁したき由思より給し事なり
すこしみゝとまり給ふ　○女五宮の前の物語ともに聞にくき事もありしに此一言に聊耳をとゞめ給なり
さもさふらひ　○源の詞なりさも侍らはうれしかる

へき由なり
みなさしはなたせ給ひてと　○こと〳〵しくし給を
いへり
あなたの御まへを　○齋院の御方なり
かくさふらひたる　○源の詞なり
にひ色のみす　○只今服者たるによりてなり
せんしたいめんして　○齋院の宣旨なり
いまさらにわか〳〵しき　○簾中へも入給へき物を
あまりによそ〳〵しきと思給なり
神さひにける　○源の心をかけ給事の年久しくなる
由なり
ありし世はみな夢に　○内よりの返答なり齋院にて
たはせし事なとは久しくなりたるとなり
らうなとは　○年月の勞なとは思ひしらさるなり
けにこそさためかたき　○源の身上以下何事も不定
なるなり
人しれす　○年月は齋院にてまし〳〵す程はいもせの
語ひも思絶ぬるを只今はよき隙ありと思へるを神
のゆるしとは讀給へるなりこゝらつれなきとは源
みつからつれなく世にふる心をよみ給り

いまはなにのいさめ　○今はかこつけ給へき方も無
るへし　時節を得たるとたはへたる物をとなり
なへて世にわつらはしき　○すまへ行給し事なり其
後はすきかましき心もなき物をとなり
かたはしをたに　○人つてならて聞へばやの心なり
御よういなと　○源の用意をほめたるなり
いたうすくし給へと　○源の宿德なと具して居給へ
共位よりは年わかくみえ給也さふらふ人々の云也
なへて世の　○齋院の御返事なり世中の哀はかりを
云かはし給ふをも神は昔ちかひしまゝにゆるし給
ふましきとなり堅固に云ひはなち給なり
あな心う　○源の詞なり
しなとの風に　○河海に見たり東南の風を云なり秡
の詞なり　一切の穢氣を秡除之義なり
みそきを神は　○源の詞戀せしのみそきを神はうけ
すとか人をわするゝ罪ふかくして人を忘るゝは罪
ふかしといさめたる心なり
よつかぬ御ありさま　○此齋院は人にかはりて人に
なひく方の心こはき由なり
みたてまつりなやめり　○侍ふ人々の見奉りなやむ

なり
すき／＼しきやうに　○今夜は人の思ふ所を思て立給なり
よはひのつもりには　○かく外様むきにありしを面白もなきとなり恨みたる詞なり
世にしらぬやつれを　○君が門今そ過行出て見よ戀する人のなれるすかたを　せめて見をくり給へかしとなり
ところせきまて　○さふらふ人々なりめてさはぐなり
大かたの空も　○九月卄日かたなり
とりかへしつゝ　○齋院にましますす時申かはし給し事を思出給なり
心やましくてたちいて給ぬる　○是は源の御心なり
けさやかなりし　○以下源よりの文の詞なりよそよそしく簾外に侍ひしも面目なきやうなれと忘難さに催されて申侍となり
みしおりの　○源の強ちに見奉り給ふにては無れとも槿奉りし事帚木卷に云しなりそのかみのことをいへるなり下句の心は槿の花の盛は程なき物なるを哀と思給へき由なり心は相見んことをいそく由なり
かつはなと　○かやうに申もかつはいかゝおほすらんとなり花鳥の義ありいかゝ
おとなひたる　○歌のさまのすくよかなる故に御返をし給ふなり
秋はてゝ　○歌のさしむきて面はかりを取て返事をし給なり下句我御身一つに限るへからす世間のはかなきさまを此槿に比していへるなりうつるはうつろふなりかやうに用たるは稀なるなり
につかはしき　○只今物思ひのうちなるに盛者必衰の理りも思よそへられて哀なる由なり花の盛は過やしぬらんとあるも我身の衰へ行ありさまに似つかはしきと取なし給なり
なにのおかしき　○いつくにおかしき節のこもることもなきをあはれにみ給ふなり
人の御ほと　○草子地なりかやうの贈答なと人の程々にあしく語りなしてあしきこともある物なり其たりは興ありと思事も後に語り傳てさしもなき事のあるなりこれも世間のをしへ也

たちかへりいまさら　○只今は似あはぬ様に思給へともなり

もてはなれぬ　○齋院の源に一向にはもてはなれす文なとはかはし給へるなり

さらかへり　○更に歸たる心なり

せんしをむかへつゝ　○源のかたらひ給なり

さふらふ人々　○齋院に侍ふ女房なり

宮はそのかみたに　○源も宮も年わかくまします時たにもつれなくて過給し物をとなり

よの人にかはり　○かく心深き所に源は深く心をとめ給なり

世中にもりきこえて　○世間には人々よきあはひなるなとと沙汰あるとなり

たいのうへも　○紫上なり

御けしきなと　○源なり

まめ／＼しく　○眞實なるを我にもきかせ給はさるなり

おなしすち　○紫上式部宮の息女なり槿齋院又宮の御子なる由なり

人にをしけたれ　○紫上の我身はおしてけたれ給へきとなり

よろしきことこそ　○猶さりなることとこそなり

やくとは御文を　○内すみの際の役には文を書給事をし給なり

けに人のことは　○紫上の心なり人の云なる事は虚言にてはなきよとなり

けしきをたに　○おほろけにも知せ給はさるを紫上の恨み給なり

かんわさなとも　○諒闇の故に十一月なれとも神事も停廢するなり

五の宮　○女五宮なり

心よはからん人は　○槿宮の貞心ある由見たり

見もやり給はす　○紫上なり

わか君を　○明石姫君なり

あやしく御けしきの　○源の詞なり

しほやきころも　○すまのあまのしほやき衣なれゆけはうとくのみこそ成まさりけれ

なれ行ころ　○紫上の詞　なれ行はうき世なれはやすまのあまのしほやき衣まとほなるらん

宮に御せうそこ　○源の女五宮へ此夕必す參るへき由を兼て申給しなり
かゝりける事も　○紫上の心なり
にひたる御そ　○源氏の衣裳をいへり輕服なれはなり
まことにかれまさり　○紫上の心なり此まゝにかれはて給てはとなり
うちよりほかの　○源の詞なり參内より外のありきは物うけれとも式部卿宮かくれ給ては心ほそく住玉を心もとなきなと意趣をのへて出給なり
いてや御すき心　○侍ふ人々のいへるなり
宮には　○女五宮なり
きたおもての人しけき　○北門は雜人の出入しけき故に憚り給なり
にしなるかこと／＼しきを　○西門より入給なり
けふしもわたり給はしと　○今日しも暮はてぬれは思より給はさりしなり
うすすき　○すさましきなり
上のいといたく　○門の鑰のくちてさびつきたるなり　行少ニメ馬蹄生サレニメ易蹶ツマツキ用ヰ稀ニメ印鎖澁テ難レ

開　白樂天
昨日今日と　○源須磨よりの歸京は今年まて五年なり總して久敷事をは三とせといへる故にみとせのあなたといへり萬つに世かはり又式部卿宮も薨し給て世の轉變するをいへり　又云　青表紙本三そとせのあなたとあり私案之みそとせ可然なり其故は源氏今年卅一歲なり我身昨日今日の童部と思ひしにはや卅年さきに成ぬると身を觀し給なり尤みそとせ可通也　天文三九月說なり云々
いつのまに　○世の變するを云り
宮の御かたに　○女五宮なり
かしこけれと　○誰ともしらぬ老人の詞なり
院のうへはをはたとゝ　○前に見えり
この宮の御でしにて　○源内待事なり尼なれは云歟
そのよのことは　○源の詞なり院の御かとの御代のことなり
をやなしにふせるたひ人と　○源氏我身は今をやも無との給なりいひはなちても立給へきをかくあへしらひ給へる源の仁恕の心深く情あるさま見るへし　しなてるや片岡山のいひにうへて伏る旅人あ

はれをやなし すけみにたる　○老者の歯おちて口うちゆかみたるさまにや

うちされんとは　○左禮事の心なり

いひこしほとに　○身をうしといひこし程に今は又人のうへともなけくへきかな　我身の年のよりたるをは忘れて未たわかしと思し友の年よりたるをいへるなり人の上を云なり源内侍我身の老をはいはすして源のかくれひたち給へると思ふとなり

いましもきたる　○今更に來りたる老のやうに源内侍は思となり老はもとよりの老なる物をとなり

このさかりに　○源内侍の年さかりにはいかばかりの女御更衣もまし〳〵けるも皆はかなく過給しをいへり

入道の宮なとの　○薄雲なり未た四十にも足り給はさるをいへり　世は不定なり源内侍はかくなからへて侍るよとなり

物あはれなる　○源のあはれみ給ふを源内侍倚昔の心忘れぬなるへし

心ときめき　○かく世中の不定を哀と思給へる姿なるを源内侍はわか身のうへを思給故と昔の心を忘れさる成へし

としふれとこの契　○をやのをやとはおばおとゝとありしことなり　をやのをやと思はましかば問てまし我この子にはあらぬ成へし

身をかへて　○慰めての給なり後世まてをやを忘るゝ子はなしとなり

にしおもて　○齋院の御方なり

ひとまふたま　○眞實の貞女なりいとひかほにもし給はぬなり

ありつるおいらく　○河海に枕草子すさましき物おうなのけさうしはすの月夜云々但當時流布の枕草子に此事なし他本に此事ある歟但清少納言か父元輔か歌に　いさかくてをり明してん冬の月春の花にもおとらさりけり　と冬の月を愛したるなり其むすめの身として冷しき物に云なさんは如何と覺侍如何又此卷の奥にも此事見たり篁か詞同具に河海に見たり

人つてならて　○今はたゞ思ひ絶なんとはかりを人つてならていふよしもかな

むかしわれも人も　○齋院の御心なり
こ宮なとの　○父宮は源にもなとおほし給ひし事なり
さたすき　○さかり過たる心なり
あさましう　○源の心なり
さすかにはしたなく　○しかも背かさるさまにし給なり
まことは　○誠の字面白し
心つからのと　○河海引歌あまた侍れとさして不叶歟只我身の心つからといへる成へし戀しさも心つからのわさなれはをき所なくもてそ勞ふ河海三首の内可用之歟
けにかたはら　○侍らふ人々の心なり
あらためて　○齋院の貞節なる心を折々に改めてはいかにして用ゆへきそとなり人の上にてさやうに改むると聞したにも有ましきことに思しにましても我身にはいかゝ改め侍るへきとなり結句心はかりをとある本あり是可然歟末の詞に昔にかはることとはならすと侍り心はかりとあれは詞かさなりてはいかゝなり

むかしにかはる　○我は昔にかはることはなきとなり
いさらかは　○もらし給ふなとなり
なにことにか　○さふらふ人にもの給なり
かるらかにをしたちて　○源の心人の心を破りておしたることなとは有ましきと侍ふ人々の云なり
けに人のほとの　○齋院の御心なり源の御心を知給はぬにてはなしとなり
なへてのよの人の　○此哀を見知たるさまにもてなさは尋常の人のつらに思なし給ふへきなりさやうにてはかひ無るへしと深く齋院は思給なり
かつはかろ〳〵しき　○心の程をも源氏の見給はんをはつかしきとなり
年ころしつみつるつみ　○齋院にては經佛の結緣もなきをいへりそなたにむきて音をのみそなくなとよみ給ひしも此心なり
御おこなひをとは　○出家し給へきなとの心かまへもあれと人のいかゝ取なさんと思煩ひ給ふなり
中〳〵いまめかしき　○齋院の心つかひやさしく有難き心なり

御はらから　○系圖に見へすさせる人もなき成へし
ひとつ御はらからならねは　○別腹なれはなり
めてたき人の　○源をさしていへり
ひとつ心と　○同心に源に心をよせたるなり
まけてやみなんも　○源の心帚木巻にありしか如し
まけてはやまし又人からを思て思ひはすてしとなり
むかしよりもあまたへまさりて　○源氏人の心を經歴して事のさま〳〵心得まさり給なり
しのひ給へと　○紫上なり
あやしくれいならぬ　○源のあやしみ給なり
宮うせ給　○源の詞なり薄雲うせ給ふことなり
まろかれたる　○泪にまろかれたるなり
世にかくまて　○われこそかくそたてたる物をとなり
さい院にはかなしこと　○こゝにて源の云出し給なり
昔よりこよなく　○齋院の御事なり
かしこも　○齋院なり
かくなんあるとしも　○紫上にはかなしことをしもかたるへきかは源のの給しなり
まつとたけとの　○深もなき雪のさまなり
冬の夜のすめる月に　○面白き評なり端に委くしるせり　つもりそふ老となるともいかてかは雪の上なる月を見さらん　と家隆のよめるもかやうの心成へし
みすまきあけて　○香爐峰雪捲簾看の句なり
あこめみたれき　○うへにかさみを着るへきを夜なるによりて略したる成へし
おひしとけなき　○袴の腰なるへし
わらはけて　○おさなきさまなり童氣なりをさなき心に興したるさまなり
うちとけかほなる　○女の扇を持することは面をかくさん爲なりされは扇なともおとしてうちとけたるなり
ふくつけかれと　○力を入て大にまろかさんとするなりふくつけは貪るなり
雪の山　○源の紫上へかたり給なり　中宮は薄雲なり雪山の事河海花鳥に見たり　伏見院後伏見院仁の頃まては此事あり諸家の記録にも見たり藏人

頭奉行として沙汰せしとなり
はかなき　○はかなきことなれと花やかなる人にて
ましくしとなり
もていてふらうくしき　○取たてふはへくしき
所は無りしかともとなり
はかなき事をもしなし給ひしはや　○やはらかにを
ひれたる
君こそはさいへと　○紫上の御爲に薄雲はそばなり
さて紫の故とはいへり
前さい院　○是より權齋院のことをの給なり
內侍のかみこそは　○紫上の詞なり
あやしくもありける　○源と名をとり給ふ故床しき
となり
さかし　○源の詞なり
さもおもふにいとおしく　○我も後悔ありまして內
侍のかみ悔給ふことあるへし
しつけさと　○わか實法なるうへにてさへあやまち
たることのありしとなり
山里の人こそは　○是より明石上をほめての給なり
人よりことなる　○明石上受領のむすめたるをいへ
り
いふかひなき　○源のあひ給ふ人のうちにさのみい
ふかひなきふはの人はなけれと其中に然るへきと
思人のまれなるとなり
ひんかしの院に　○花散里なり
さはたさらに　○此人の樣なるはありかたきとなり
氷とち　○當座の躰はかりにてしかもなまみもなく
勝たる歌なり
戀きこゆる人　○薄雲なり
わくる御心も　○もとより紫上を思給ふに又かさね
て御心をしめ給なり又の義はわくる心を又かへし
て思給なり
かきつめて　○かきあつめてなり雪もよに　花鳥に
委し　落句紫上とむつましきことをいへり
宮の御事　○宮とは薄雲なり
もらさしと　○夢の中なり
いまもいみしく　○夢中よりの泪なり
うちもみしろかて　○紫上のしつまりたるさま用意
あるなり　又說源氏のことなり然者女君いかなる
ことにかとおほすこと讀切てうちもみしろかて臥

玉へりと心得へし
さけてねぬ　○今いさゝか物をも申かはすへき物をとなり
しる人なきせかいに　○一本しる人なきと云々へと人と似たる字なり
うちにも御心のをにゝ　○主上僧都のかたり申せし後は源をかたしけなくし給ふ故に深くつゝしみ給なり
おなしはちすにとこそは　○各留二半座乘一花葉の心なり
なき人を　○いかやうにしたひて行侍るとも其生處は知かたきとなり　水はみつせ川をよせたり

乙女

巻名以詞並歌號之五節のことある故に號すと見たり源氏卅二の四月より卅四の十月までのこと見たり
としかはりて　○薄雲の諒闇三月までなり只今諒闇並四月の衣かへなり
まして　○四月天氣和又清といへり
前齋院には　○槿齋院なり今年はおりゐ給をいへり
おまへなるかつら　○齋院の御まへなり人々祭御禊なとを思出るなり
みそきの日は　○賀茂御禊日なり祭の三日前なり
かけきやは　○思かけさる事なり去年までは齋院なりしを思かけすおりゐ給ふことなり君かみそきとは除服の日の禊のことなりいつしか齋院おりゐさせ給ひて除服のみそきし給はんとは思はさりしとなり藤を淵によせたり此物語あまた所に見たり
ふちの花に　○藤衣のゑんあり
をりのあはれなれは　○何事も其時節に感あることなり
藤ころも　○除服の御そきなり月日の早くうつる由なり　明日香川淵にもあらぬ我宿もせにかはり行

物にそ有ける　の心あり
はかなくとはかり　○歌の中にははかなきことを詞に
　顯はさすされは此詞にて歌を足すなり
御ふくなをしの　○父宮の御服をぬき給へは吉服を
　調して源よりまいらせ給なり
院はみくるしき　○院とは齋院なり院とはかり書る
　珍きなり
とし頃も　○齋院にましまし時もかやうのことは
　常のことなれはとせんしの申詞なり
わかき人々　○齋院への御心さしにて侍る物をとて
　人々笑なり
こなたにも　○女五宮齋院に御對面の時はかく教訓
　し給なり
なにかいまはしめたる　○式部卿宮の素意も齋院に
　てましますことは本意とも思ひ給はさりしとなり
すちことになり給て　○源をよく人に見なしたるを
　は口惜きことに思ひしなり
こ大殿のひめ君　○葵上なり
三宮　○葵上の母宮なり
やんことなくえさらぬ　○葵上なり

さらかへりて　○齋院おりゐ給て又源氏のゝ給ひま
　つはし給ふことなり
心つきなしと　○齋院の御心なり
宮人も　○さふらふ人々なり
かの御みつからは　○源なり
おほさるへし　○是まて齋院の御ことをいへり
大殿はらのわか君　○是より夕霧の御事なり
御くゐんふく　○夕霧十二歲なり
おほ宮の　○夕霧の祖母なり
かのとのにて　○三條の宮なり
右大將殿　○二條攝政息なり
四位になしてんと　一世の源氏は直に從四位下に叙
　するなり　夕霧は二世の源氏なれは五位に叙すへ
　き人なれとも夕霧は世のおほへもあるに依て定め
　て四位になり給へきと世間の人も思たるなり
しかゆくりなからん　○不意なり思やりもなくとな
　り
あさきにて　○六位の綠の袍をいへり
殿上にかへり給を　○夕霧は童殿上とて童體にて昇
　殿したる人なれはやかてかへりのほり給をいへり

御たいめんありて　○大宮源に對面し給てなり
おいつかすましう　○昇進に人の逐付かたき心なり
二三年　○丞相の子息大學の道にいる事良相公俊賢
卿等の例あり
みつからは　○源の自稱なり
たゞかしこき　○延喜の帝より習ひとりたるなり
それさへ及はさることの多きなり
はかなきをやに　○賢子も愚父に及ふ事はかたき理
りなり
たかき家のことして　○世間の事をかけての給なり
やまとたましゐ　○日本のめあかしなと云心なり
さしあたりて　○當時さしあたりては叙爵なとある
へき事をいへり
待らすなりなん　○源のなくなり給ての行末までも
なり
うちなけき　○大宮なり
この大將なとも　○我御子なり
おさな心ちにも　夕霧なり
左衞門督　○大將と別腹の兄弟なり
うちわらひ給て　○源なり

この人のほとよ　○夕霧のことをいへり
あさなつくる　○字なり儒者になるとては必すある
ことなり文章院にて堂監と云物か簡に書付る也文
屋康秀を古今序に文琳とかけるもあさななり此類
なり兩抄に委く見たり
はゝかる所なく　○源の御子なりとて心をゝきて憚
ることなくかきりある法式の如くに事をおこなふ
へき由を不知し給ふなり
いへよりほかに　○窮したる儒者ともは皆借着する
なり
すぐしつゝ　○年のよりたる人をいへり
へいしなとも　○酌をとるなり
民部卿　○系圖になき人なり
おほな〳〵　○此詞は念頃なる心なりされとこゝに
てはつゝしみたる心なり
とかめいてゝおろす　○河海説さもこそとは見へ侍
れと猶いかゝと覺るなり　過分なりとて驚きたる
さまなり
おほしかいもとあるし　○此事十ヶ條の一なりおほ
しとは凡の字なり我身を凡なりと卑下したる心な

りかいもとあるしとは垣下の人と云なり大饗なとにもの垣下の公卿とてあるなりこゝにてもさし定まりたる人數の外を云なりかく凡下の儒者ともの中に大將なとのましり給へることは過分なることと申心にや

ひさうに侍りたうふ　○非常に侍り給ふなり

かくはかりのしるしと　○大學の衆の詞なり斯樣に人々のしなをも不知してはおほやけにつかふまつらせ給ふか頗る過分なる由を申なり

ほころひて　○たへかねて笑なり

なりたかし　○風俗の歌の詞なり人々笑ひ給はゝ座をひきてたつへきとておどしたるなり

なめけなりとて　○無禮なりとてもとかむるなり

あされかたくなゝる　○しとけなきさまなり

けうさうしまとはされ　○けさうするなり物をついせうするなり源の出座し給はゝ皆ついせうする樣なるへきもあしかるへきとてかくれ居給ふなり

かへりまかつる　○源の仁恕の深き心見たり

さい人　○秀才をいへり

みしかころの夜　○四月の末なれはなり

左中將　○系圖の外の人なり文章生より昇進する人成へし

ゑたの雪をならし　○ならしとは馴なり

おとゝの御は　○源の御詩をいへり

女のえしらぬ　○草子地なり

にうかく　○束修の禮なり論語述而にも自行束修以上吾未嘗無誨焉と云り花鳥には今の文を載らる

よるひるうつくしみて　○草子地なり

大かたの人から　○夕霧なり

いまはれうしうけさせん　○大學寮にての試なり大學寮にて史記を讀しめて難義を問て儒士を試むる事なり委く諸抄に見たり

まつ御まへにて　○源の御まへにて内々試給ふなり

左大辨　○以下三人系圖に見さるなり

つましるし　○説々あれとも只わすれたる所にはしるしをしてをく事のあるをつましるしと云なるへし

さるへきに　○此人の大學の道に入給へき器なりと人々思へるなり

をやのたちかはりしれ行　○しれは癡の字なり帚木

巻にしるせり
大將さかつきさし給へは　○此御師に盃をさし給なり
世のひか物にて　○世間へはうちもむかすすね〲しき人なり
大かくにまいり給　○寮試の當日なり
れうもんに　○大學寮の門なり
火さの君　○夕霧なり
座のすえを　○學生は以二長幼一爲レ序トいへる今の文なり
おろしのゝしる　○制止を加ふるなり
大かくもさかゆる　○藤氏には勸學院とてたてをき源氏には奨學院橘氏には學館院をたてゝ何れにても學問をさせ侍るへき心見たり
文人きさう　○進士及第なり花鳥に委しくしるさる大數をあけていへは二なり方略の宣旨をかうふる人は本の文章の生なり進士なりとて國々より進するを擬文章生と云なり　文人きさうとは此事なり夕霧は擬文章なり此以後行幸の時御前の試ありしなり

かくてきさき　○立后の事なり
はゝ宮　○薄雲なり前齋宮の事を強ちにとおほしめしたるなり
源氏のうちしきり　○河海花鳥に委く見たり
弘徽殿　○致仕の大臣の息女なり
兵部卿宮　○紫上の父なり桃園式部卿宮薨して後式部卿闕たるに依て任し給成へし
御はゝかたにて　○薄雲と式部卿宮の女の女御としたしき心なり
梅つほ　○秋好なり
御さいはひの　○故母御息所は不幸にて過給しを引かへ幸ひ人なることなり
おとゝ太政大臣にあかり　○拗例抄に見たり
人からいとすくよかる　○此已下大將の事をいへり
ゐんふたきにはまけ給ひしよと　○榊巻にあり
おほやけことには　○有職の方なり
たさらすさかへ　○源にをとらさるなり
いま一所　○雲井の鴈なり
わかんとをり　○雲井鴈の母は王孫なり今は按察大納言の室になり給へるなり

それにまかせてのちをやに　○まゝ父にそへんことを云り異本まかせてなとあり異本あるか

女御には　○弘徽殿なり

おもはぬ人に　○秋好にをされたるとなり述懐をの給へり

この君を　○雲井鴈なり

東宮の御元服　○朱雀院の御子後に今上と申せしなり

さひはひ人のはらのきさきかね　○明石中宮を云へり

なとかさしも　○大宮の詞なり忠仁公以来藤原氏はさるすちなれはさやうに思すて給ふましきこと也

この御事にも　○源にすこし恨ある由なり

ひめ君の御さま　○雲井鴈なり

きひはに　○いときなきさまなり

りちのしらへの　○秋になりて折にあひたる調子なり

かせのちからけたしすくなし　○豪士賦序の詞なり

私按之　豪士賦は齊王冏と云人功にほこりたるをそしれる賦なり　○文選四十六には序はかりを載たり此序に不㆑足㆑哀響也といへる次に是故に苟時啓㆓於天㆒理盡㆓於民㆒庸夫可㆔以濟㆓聖賢之功㆒斗筲可㆔以定㆓烈士之業㆒言㆑遇㆑時也故曰才は不㆑半㆑古而功已倍㆑之蓋し得㆓之於時勢㆒云々　此心は庸夫とていやしき者も賢聖の名あり又斗筲のすこしきなる才ある者もかけ用らるゝ事あり又才學の古の人に半までも及はさる人も功名のすくれたる人の有なり其故は時の運なるといへるなり只今内大臣の心も今源の勢に天下歸しぬれは我御女めの立居なとの事は時いたらさると思給ふ心あるに依て此句を誦し給成へしかやうに末の句を引合て見侍らは味有へき歟

いとゝそへんとにや　○感を加たるなり

おさ〳〵たいめん　○内大臣の語なり

さえのほとより　○才學のあまり過たるもわろきさなり

はうしおとろ〳〵しからす　○檜扇なとにて拍子を打給ひ成へし

はぎの花ずり　○花鳥の説尤面白し

大殿も　○花鳥故大殿と云々然れとも只源の事成へ

し
いとおしきこと　○夕霧の姫君に心かけ給ふ事なり
おとゝ　○内大臣なり
我御うへ　○内大臣の御うへ外夕霧雲井鴈のことを
云なり
おれたる事こそ　○御をきてに違たるてとの出來ぬ
へきとなり
されはよ思ひよらぬことには　○内大臣の心なり
をともせていて給ぬ　○内大臣なり
わつらはしき御心をと　○内大臣の御心を人々思な
り
おとゝのしひて　○秋好立后の事なり此姫君をは必
す立后あるへきと思給ふ故なり
大宮をは　○大宮をもうらめしく思給なり
をゝしうあさやきたる　○頗しくたけき心なり總し
ては男々しきなり
しきりにまいり給　○細々に參給ふ時は大宮も喜給
ふなり
あまひたい　○さけあまの事なり
こゝにさふらふも　○内大臣の詞なり

よからぬものゝ　○姫君故に大宮にも背くへき事の
出來ぬるとなり
いかやうなる事にて　○大宮の詞なり
たのもしき御かけに　○内大臣の詞なり
おさなきものを　○姫君をあつけ奉りし也
あめのした　○天下無双の有職なり源並夕霧をさし
て云り
なにはかりのほとにもあらぬ　○身の中にてめつら
しけもなきなり夕霧と雲井鴈とはいとこなるをい
へり
ゆかりむつひ　○めつらしけなき由なり
夢にもしり給はぬ　○大宮なり
くちおしきことは　○我こそ思へけれとなり
みたてまつりしより　○此姫君をわたし給し時より
心をつくしゝ事なり
むなしきことにて　○跡なきことなとを人の云にや
となり
なにのうきたることにか　○内大臣の詞也
わかき人といひなから　○内大臣の詞
かきりなきみかとの御いつきむすめ　○醍醐天皇康

子内親王のこと河海に見えたり
けしきをしりつたふる　○媒などのありて傳るは常
　のことなり
よししはし　○内大臣の詞
そこたちは　○めのとたちをさしての給なり
大納言とのに　○按察大納言なり雲井鴈のまゝ父な
り
おとこ君の　○夕霧をは猶大切に思給なり
もとよりいたう思ひつき給　○内大臣は此姫君をは
思すてゝをき給しを我こそかくやしなひたて侍し
物をと覺すなり
この君より外に　○春宮をさしをきては此夕霧の外
をは誰人をもとむへきそとなり
おとゝうらめしう　○内大臣をうらめしう思給ふな
り
御心のうちを　○大宮の御心の内を内大臣へ見せ奉
　りてはと草子地にかくなり
せひしらす
御こさにより　○大宮の詞
心にかゝれる　○夕霧の心なり

なに事にか　○夕霧の詞なり
よしいまより　○大宮の詞
なかさうし　○中障子なり
雲井のかりも　○是より名となれり「霧深き雲井の
　鴈も我こさやはれせぬ物の悲しかるらん
いみしう　○雲井鴈のめのとこなり
ひとりてさを　○雲井鴈の心なり
あはれはしらぬ　○草子地なり
さ夜なかに　○夕霧の歌なり聞てかなしき心なり
身にもしみける　○吹よれは身にもしみける秋風を
　色なき物と思ひける哉荻の上風身にもしみけると
　書つゝけたるさま艶に面白し
又かくさはかるへき事とも　○かく隔らるへきことと
　とも思ひ給はさるなり
おとゝはそのまゝ　○内大臣なり母宮へ參給はさる
　なり雲井鴈をわか御方にわたし奉らんとなり
北のかたには　○雲井鴈の繼母なり
たゝ大かたいとむつかしき　○弘徽殿の立后なきを
　念なく思給ふ故里に出し奉らん其程雲井鴈をも里
　にをき奉るへきといひなし給なり

さすかにうへにつと　○立后こそなけれと御寵愛は劣らされは此うへつほねにつとのみ侍ひ給へは主上も不レ絶ましますなり

にはかにまかてさせ　○雲井の鴈をわたさんとて先女御を渡し奉り給ふなり

つれ〴〵におほされん　○内大臣の詞

さくしり　○さかしくさし過たる心なり夕霧をいへり　諸々無益歟箋曰此段は大宮の御方にねひ人とものの中にては如何と云歟

宮いとあへなしと　○大宮なり

ひとりものせられし女子　○葵上なり

うちかしこまりて　○内大臣の返事なり

心にあかすおもふ　○一端を申はかりなり思ひの外に隔ありておほしなすもつらくとある詞をうけて心の隔なき故に心に思ひとほりをかく申すとなり箋曰さはかりと讀へし隔心なけれはこそ一氣浮所をは申たるなり

ふかくへたて　○ふかく思ひ奉るにてはなきなり

内にさふらふか　○女御里いてのことなり

あからさまに　○暫時と思てあつけ申たるを成人せられたるを御思ひ淺からすとなり箋

はくらみ人となさせ　○雲井鴈を人となし給ふことなり

かうおほしたちに　○大宮の心

人の心こそ　○大宮御詞なり

おさなき心とも　○夕霧雲井鴈なり

さもこそはあらめ　○おやこの中とても頼かたきとなり　此おとゝは物の思やりも深きとのみ思ひしに此事は我身ひとりのあやまちにのみ思給ふを恨み給ふなり

このころはしけう　○一月に三日はかり大宮に參り給へとありしにあはせてしけきなり

左少將少納言　○皆大宮の御孫なり

左衛門督權中納言　○内大臣の兄弟なり別腹なり

この君に　○夕霧なり

大宮の御心さしも　○夕霧一人をうつくしく思給ふなり

このひめ君　○夕霧につきては雲井鴈を大切に思給ふなり手ならし給ふ故なり

かくてわたり　○只今ひきわかれ給へきことなり

とのはいまのほとに　○内大臣は參内ありて夕つかた御むかへを奉らんとなり此間に用意なと有へき由なり

いふかひなき事を　○内大臣の心の中なりかくて夕霧にゆるしても有へきかとはおほせと又それも口惜となり

こゝろさしのふかさ　○夕霧の志をこゝろむへきとなり

宮もよもあなかちに　○草子地なり

宮の御ふみにて　○同殿なから各々にすみ給ふ故に文をたてまつり給ふなり

こめかしく　○おほも〳〵としたるなり巨の字なり大やうなるなり

いでむつかしきことな　○大宮の詞なり

いでやものけなしと　○宰相の詞なり夕霧をあなつり給ふ事なり

わか君　○若君我君兩樣なりめのとの詞なれは若の字可然歟

よろしきときこそ　○猶さりの時こそなり

おとゝの御心の　○夕霧の詞内大臣の事なり

さはれ　○さはれなり又さばれと讀人もあり

まろも　○雲井鴈の詞なり

とのまかて　○内より退出あるなり

そゝやなと　○それなどいふ詞也

さもさはかれはと　○夕霧はくるしくもなく思給なり

御めのと　○雲井鴈のめのとなり

宮しらせ給はぬ　○宮にしり給はぬ由ありしはそらことゝ云なり

かれきゝたまへ　○夕霧の詞雲井の鴈にいひかけ給なり

くれなゐの　○夕霧の歌

色々に　○かくさま〳〵に人のもてあつかふなるはいかなる色に染たるかとなり

しもこほり　○景氣面白し三四句殊勝々々

大とのにはことし五せち　○源の參らせらるゝ五節に惟光か女まいるなり

なにはかりの　○させる經營にてはなけれとゝなり

ひんかしの院　○花散里なり

過にし年　○去年薄雲の諒闇なり今年は色改り取そ

へてきらをつくしたるなり
左衛門督 ○葵上の兄弟なり是公卿分なり
うへの五せち ○公卿分二人受領分二人なり受領分は上より出さるゝ心なりさてうへのとはいへり
宮つかへすへく ○舞姫を其まゝ留め給事善相公の意見に見えたり河海に見えたり
あそんのいつきのむすめ ○惟光は我女参らせんとはいかゝと思侍れと按察大納言もほかはらの實子を奉り給ふ故に實のすむめを奉るなり
まひならはしなと ○兼て里にて能く沙汰せしなり
いま一ところのれう ○然るへき人のあまたあれは今一分もまいらせたきとなり
大かくの君 ○夕霧なり
うへの御かた ○紫上の御方なり
わか御心ならひ ○繼母のあはひをさけ給ふなり
なやましけにて ○惟光か女なり
かの人 ○雲井鴈に似たり
なに心もなく ○心もなく見かへりたる成へし
あめにます ○天照大神なり宮人もとは天人なり舞姫を云我領する心をたかへそとなりしめを忘るなとは標(シメ)は物を領するとてのしるしなり神事の折なれは注連に事よせたるなり
みつかきのと ○久しき世よりの心はあまりに打つけなるとて草子地の書なり
なまむつかしき ○此女の思なり
けさうしそふとて ○けしやうなとしそふるなり
五せちにことつけて ○五節の日直衣を着するなり余按宇治左府記仁平元年十一月十七日癸丑晴今夕五節參内師長未蒙聽直衣之宣旨束帶參入似無面目仍不參内云々案之五節の次上古は直衣を聽夕霧も此次直衣を聽と見へたり
こゝしう ○巨々なり
ものきよけ ○草子地なり何事もしたてからなるなり
れいのまひひめ ○上古は十二三の人なり今年は年もたけたるなり
昔御めとまり ○つくしの五節の事なり
をとめても ○つくしの五節のもとへつかはし給なり我身も年のふりぬる由なり
とし月のつもり ○久敷ことたへをきて御尋あるも哀

なるなり
かけていへは　○そのかみ源に逢奉りしを結句にをもはせたるなり
あをすりのかみ　○辰の日はあを色をきる故折にあひたるなり
つらき人の　○雲井鴈なり
あふみのはからさき　○五節は内野にて祓をする也こゝに國の守によせて書る妙なり
左衛門督　○實子にはあらさるなり
それもとゝめさせ　○五節にまいりたるなり
かの人は　○夕霧なり
うちそへて　○雲井の鴈のことに打そへてなり
せうとの　○此舞姫の兄弟なり
ましか　○汝かなり
いかてか　○返答なり
さき〳〵も　○かやうのことは父もいましめし物をさは思へともなり
みどりうすやう　○六位の衣によれり
日かけにも　○我心かけたるを云なり
ふたりみるほとに　○兄弟なり

ちゝぬし　○惟光なり父主なり
なこりなくうちゑみて　○惟光よろこひたるなり
きんぢらは　○汝等なり
殿の御心をきて　○源氏の御心を云なり但夕霧をいへる可レ然なり
みないそきたち　○かやうにはいへとも皆たち侍るなり
かの人はふみをたに　○雲井鴈へ文をたにかよはし給はさるなり
さとさへうく　○雲井鴈のことを思出侍るつきとなる故に此三條の宮も物うく思はるゝなり
とのはこのにしのたいに　○夕霧を花散里にあつけ給ふこと子の如くにし給へとなり
たゝの給まゝに　○源のゝ給ふまゝにし給ふなり
ほのかになど　○夕霧の花散里をほの見給ふなり
又むかひて見るかなからん　○夕霧の花散里のさまを思給ふなり
はまゆふはかりの　○几帳のへたてをいへり常は隔はてたる事にいへりこゝにうすきことにいへりめつらしき妙なるなり

大宮の　○いまたかたちのきよらにましますなり
宮はたゝ　○夕霧の祖母宮なり
おいねご　○夕霧の詞なり
おさこはくちおしき　○宮の詞也
なにかは　○夕霧の詞也
こおとゝ　○葵上の父也
ものへたてぬ　○源は紫上の方にいつもましますなり故
　にをのつからけとをくなり侍るとなり
けゝしう　○こと〳〵しうなり
たいの御かた　○花散里なり
をやいま一ところ　○葵上なり
ついたちにも　○源卅三歳なり太政大臣にては節會
なとにもあなかちに出仕せさるなり但中古以來は
節會に參することあり
よしふさのおとゝ　○忠仁公なり准三后は忠仁公は
しめなり　玄ろ馬を見る事未ㇾ勘得ㇾ
朱雀院に　○仙洞への行幸は毎年朝覲の行幸とてあ
　るは父子の御時のことなり是は兄弟にてましゝます
故にいかゝとなり但賢木巻に春宮をはいまの御子
になしてなとの給はせをきしとかけり然は冷泉院
は朱雀院の御猶子と見へたる歟と云々さらて仙洞
　へ行幸の事中古よりは連々の事なるをや
故宮　○薄雲なり
御忌月　○薜によむへし
あを色　○麹塵也
たなしあか色　○かやうのはれの日は第一の公卿は
　主上と同し色を着するなり
わさとの文人（モンニン）　○きとしたる作文とはなきなり
かく生　○學生とは今日及第すへき人を云
式部のつかさの　○勅題を出さるゝなり
大殿のたらう君　○夕霧なり
おくたかき　○臆病を云なり
つなかぬふねに　○放島の作文とて中島の人もかよ
はぬ所にやりて詩を作らするなり其故は自然人に
談合なと沙汰させしの用なり唐朝にも進士を試る
には人もかよはぬ所にをしこめてをきて文をかゝ
せ侍なり
調子ともそうする　○奏するは吹事なり
かうくるしき　○樂なとはかりしても遊ひぬへき物
をとおほすなり

院のみかと又さはかりの事　○花鳥此院の御門を桐壺としるさる誤れる歟朱雀院にて有へし　昔の花の宴の時をおほじ出たる也
鶯の　○今日の春鶯囀は替らされともむつれし花とは桐壺帝のかはり給ふをいへり
こゝのへを　○洞中をちと恨みたるなり今日の行幸にて春をはしめてしるとなり
帥のみこ　○螢兵部卿宮なり
いにしへを　○唐堯よりの禮樂を傳へたると御代を祝し給ふなり内にあるを樂と云ひ外にあらはるゝを禮と云と禮記にいへり
あさやかに　○祝言なるによりてなり
うくひすの　○御製なり我御代の何事も昔に及はさる由を卑下し給ふなり
これは御わだくし　○草子地なり
おほきさいの宮　○朱雀院の母后
かくなかくおはしましける　○主上の御心なりかやうに年ふりてもなからへ給ふたくひ有ける物をと更に薄雲の御事を悲しく思出給なり
いまはかくふりぬる　○后の詞なり

さるへき御かけとも　○桐壺攝政太政大臣なとなり
おとゝもさるへきさまに　○只今はつゐてなり必すわさとまいるへきの由なり
いまもさるへき　○是より皆草子地なり
御たうはりのつかさ　○年官年爵なり
たいもておはする　○老ひかみ給たるなり
進士になり給ぬ　○横入したる學生なれは進士といへり本道の代々の儒者の家の人ならは秀才と云へきなり儒家から出たる人は秀才茂才になるなり御貢進士は諸國よりの士なり今夕霧も横入なり然れは進士になるなり進士の學は禮記の王制より出たり進みて爵祿をうくへき士と云なり
三人　○夕霧此中なり
かの人の御こと　○雲井鴈の事なり
おとゝの　○内大臣なり
中宮のふるき宮　○宮す所の舊跡なり
式部卿の宮　○紫上の父宮なり
としかへりては　○源三十四歳なり
御としみの事　○御賀なり年滿なり　三代實錄第卅

四元慶二年九月廿五日丁巳太上天皇延二屈碩學高僧五十人於清和院一大設二齋會一講二法華經一限二三日一訖太皇太后今年始滿二五十之算一由井慶賀修善祈二請餘齡一親王公卿文武百官畢會

うへはいそかせ　○紫上なり

ひんかしの院にも　○花散里紫上の御中よきをいへり

ことにふれて　○源氏式部卿宮とすこしよからぬ御中なりし故は紫上のたくひなき寵にひかれて枉(アゲ)たる事をせじの御事なり

女御の御ましらひ　○王女御立后あるへきをさもなきことを云なり

ひんかしの院にすみ給　○花散里なり

やり水の音まさるへき

くたに　○牡丹の類と云々

上め　○無上の馬なり

われはかほなるはゝそはら　○母にたよりあり

ひかんの　○時正なれはよき日に云り

御くるま十五　○紫上のうつろひなり

四位五位かち　○六位はすくなきなり

いまひとかた　○花散里なりまへに花散里其夜そひてうつろひ給ふとあり

侍從の君　○夕霧なり花散里に供奉し給なり

こまけ　○こわけなり

五六日さはいへと　○紫上のをたくひなく思ひしに是は猶一段と見へたるなり

てなたに　○紫上の御事なり

わらはのおかしきを　○花鳥上東門院の御事を引り

さふらひなれたれは　○天然よき人々の侍ふところなり

心から　○心から春を心にしめ給ふとも紅葉の面白きをも御覽せよとなり

風にちる　○紅葉は花よりはかろきなり岩根の松の春のをもきこそまされとよめるなりねたますやうにの給へともちとも卑下せすしての

御せんなる人々　○中宮の御へまなり

春の花さかりに　○これ胡蝶巻を書へき序にかき出すなり

いとゝ思ふやうなる　○程遠からす四町八町の中にてかく云かはし給へる事滿足する事なり

大井の御かたは　○明石上なり

玉鬘　叅名以歌號之源氏卅五歳の三月より十二月迄の事をいへり

としへたゝりぬれど　○此巻は悉皆玉かつらの傳にかけりされば過にし方の久しきことも有なり此發端末摘花の巻に似たり然る（レトモ心各別ナリ）に心もちひ各々にして面白し先づ末摘の巻の心は常陸宮の事を聞ても し夕皃の上に似通ひたる人もがなと思て尋よりたる心あり此巻の心は今此六條院を造畢ありてさても此院の内に夕皃の在世ならは一方はふたけ侍るべき物をと思給心よりあらましかはと源の深く思出給なりかく見侍らねは發端聊つきなき様なるか又重語のやうなり此事諸抄沙汰に及はさるなり

右近はなにの人かずならねど　○夕皃上の後むかへ取給なり

すまの御うつろひ　○此間には紫上の御方にわたし給なり

かのにしの京にとまり　○此以下玉かつらのことをいへり

わが名もらすな　○犬かみのとこの山なるいさや川いさと答て我名もらすな夕皃の上のいかにして空

くなりたるそこ人の問べきをつゝみ給へきとて右近を外につかわさすしてをき給へるなりさて右近は彼西京の故郷へは音信もせすしてある故に玉かつらの行衛もしらさるなり
その御めのと　○夕皃の上のめのとなり
ちゝおとゝ　○致仕のおとゝ中將の時なり
またよくも　○父君をも見知給ふまじきとなり
おさなき人を　○父君の御方に玉鬘をとゝめ給はんも夫も又うしろめたきなり
しりなから　○かくと案内申ては知給ひなからは中々下國の事はゆるし給ふましきとなり
心わかうたはせし　○夕皃上のことを思出たるなり
おはせましかは　○此詞幷兩首の歌の作者河海花鳥兩抄其說不同なり河海說可ㇾ然云々其故はおはせませしかはと云るも夕皃上の在世にてありとも妻は夫に從ふなれば夫のくだるには必す相具すへきことなり然者女の詞歌なるべし其うへをさなきもののゝ歌をよめる事なきにてはあるへらす後撰八冬歌おやのほかへまかりてをそくかへりけれはつかはしける讀人人のむすめのやつになりける

神無月時雨ふるにもくるゝ日を君まつほとは永しとぞ思ふ云々
うらかなしくも　○引歌に及へからす
ふたりさしむかひて　○前にしるせり
ふな人も　○我身こそは思はある物を舟人は何の思ひのあるそとなり
こしかたも　○君とは夕皃上なり
かねのみさき　○われはわすれすとは都を忘れさる也　ち(百七)はやふるかねのみさきを過れとも殘は忘れすしかのみめかみ
かしこにいたりつきて　○筑前なり
夢などに　○夕皃上なり
心ちあしくなやみ　○必す夢の名殘もなやましきやうなるは靈氣なとにけとられたる人とおほしきなり
少貳にんはてゝ　○少貳上洛なり
ことなるいきほいなき　○道の程もわづらはしき故なり
たゆたひつゝ　○猶豫(ユヨ)したるなり
この君のとをはかり　○小貳は任限五ヶ年なれは九

十ばかり成へし
をのこゝ三人　○少貳の子ともなり一人は豐後介なり其外は二郎三郎なり
わか身のけうをは　○臣たる者の志ありがたし
その人の御ことは　○玉かつらの實父をは我館の中にてもあらはさゝるなり
きゝついつく　○聞傳つゝなり
いときなきほとを　○箒木卷になてしこの歌のことなり
むすめともゝ　○皆よすが定りてありつきたるなり
心のうちにこそ　○かくありつきぬれはをのつから都へ上る事は何かとして打過侍なり
ものおほしる　○王かつらなり
ねざう　○年星なり又年三正五九月此儀可然歟後世のつとめなとし給ふなり
ひせんのくにとそ　○任はてゝ後肥前國に住する歟
大夫のげん　○監は太宰の大監なり相當六位なり侍ひの中監にて叙爵したるが叙留してあるを大夫の監とは云なり

おなじ心　○何事もいひ合せて同心合力すへしとあり
ふたりは　○二郎三郎なり
をの／＼わか身の　○此二人か心なり
世にしられて
この人の　○大夫監なり
なかのこのかみ　○兄弟の内にて第一の兄となり
たい／＼しく　○これはおかしけなることなり退の字なり
故少貳のゝ給ひし事もあり　○忠の心のあるは孝の心もあるへし忠臣は必出孝子之門也と云り
あけたてまつりてん　○上洛をいへり
われはおほえたかき身と　○大夫監なり
ことばぞいとたえたりける　○孝經序吾嫌其說迂然無之雖之手跡は大方よろしきを詞のすく／＼ともなきなりしたゞみてこそ物はいふなれと讀ると同し但此正本にはことはそたらさりける云々然れば不足言の義なり尤面白し
けさう人は　○大夫監か詞なり
よはひとは

秋ならねとも　〇三月なれはなり引歌あやしかりけりの心を取れり
心をやふらじとて　〇大夫監か心をやふらじとてなり
たはたとゝ　〇故少貮の後室なり玉かつらを孫と云ひなしたれは祖母といふ心なり
こ少貮　〇大夫監か詞なり
いかうにつかうまつるへし　〇威光なり
おとゝも　〇たばたとゝなり
しぶ〳〵に　〇女房とも多き由聞召す故にいかゝと思食すかとなり
すやつはら　〇しやづばらと云詞なり
ひとしなみ　〇同輩にはすましきとなり
きさきのくらゐに　〇玉かつらをは本臺とすへきなり
いかゝはかくの給を　〇おばおとゝの詞なり
思ひはゝかること　〇かたわなる由をいへり
さらになおほし　〇大夫監か詞なり
天下に　〇天下と音にわさと讀なり奥に此和歌はと云り田舎人のことはつかひこわ〳〵しき成へし
きのはて　〇三月は春のはての月なり本說なきことなれと當座を云のかれん爲なり
たりていく　〇大夫監なり歌よむなり鏡神は式家の元祖なり
君にもし　〇鏡の明神兩儀あり兩抄に見へたり廣繼は御靈八所の一所なり鏡の神は式家の元祖なり奥にあるは神功皇后與此正本には君にしもとあり可然新千載戀の二
淺からすたのめたる男の肥前國へまかりて侍けるたよりにつけて文をこせて侍ける返事に紫式部
あひみんと思ふ心はまつらなる鏡の神やかけてしるらん
このわかは　〇隨分と自稱なり
あれにもあらねは　〇われにも非すあきれたるさまなり
うち思ひける　〇心に思事をありのまゝにいへり
としをへて　〇年月かけて然るへき幸をと祈りたるなり此大夫監にとられなは神をつらしと思へきさなり監か思はん所をも忘れて打思けるまゝに讀めるとかけり
いでやこはいかに　〇監きゝとかめたるなり青表紙

本ニてやとあり可用之耕雲本も如此しはしまての心なり
さはいへと心つよく　○前にまろはまして物もおほへすとはいひつれとも此歌の心をのべたるなりさてさはいへとゝかけり
この人のさまことに　○此人のかたはありといひつるをもかへりみ給はず契をき給へり若此御心のたかひなは神をもつらしと思ふへきとなり歌の心をあらぬさまに用かへたる事伊勢物語かすが野の歌なとの例なり
おいざり〳〵と　○領状するなりさり〳〵はさにてありと云なり
まれ〳〵のはらから　○たまたまの兄弟も思ひあはさるなり
兵部君　○末のいもとなり
丈夫のけん　○こゝの註にかけり
まつらの宮　○都にても思出ぬへきとなり「たくろさきみつのこしまの人ならは都のつとにいさといはまし」といへる心あり
うきしまを　○兵部君の歌なりうき島は名所なりされと是は名所には非す只うきたるはかりなり
行さきも　○玉かつらの歌身のうへによそへたる尤哀なり又行末とても風波にまかせたるなり
うきことに　○玉かつらの歌なり又説兵部卿君と云々両説共に用之
すこし心のとまりて　○思たちてのほりし時はさも思はさりしを今心もしつまりて思出て淺ましきまて悲しむなり
胡の地のせいじ　○豊後介のありさま文集縛戎人詩心によく相似たり全篇を見るへし
この人　○玉かつらなり
いそきいりぬ　○京へいるなり
九條にむかし　○めのとのしれる人なり
秋にもなるまゝに　○三月より思立てのほるほとにとかくして秋になるなり面白し
たゝ水とりの　○古釋さま〳〵なり花鳥別勘にもあり其義に及はす關々雎鳩在㆓河洲㆒といへる其所を得たる心あれは只今よるべもなきすかたをくかにまとへるとはいへるなり
まつらはこさき　○神功皇后鏡を埋給し成へし

こしとて　○五師
をやのかたらひ　○故少貳かしる人なり
うちつぎて　○それにつきてはなり
佛の御なかに　○菩薩を佛といへるはいかゝと云說あれど佛菩薩は同じことなればなり
もろこしに　○縁起に見えたり
ときくにの　○遠國と云ひなから我國の人なれは爭か靈驗無らんとなり又の義は德道上人の聖朝安穩藤氏繁昌と祈り給へは今玉かつらは藤氏の人なれはとなり兩說ともに可なり
ことさらにかちよりと　○一段の懇志たるによりてなり
ありけむさまを　○三歲にてはなれ給故母上の御かたちをばれほへ給はさるなり
つばいち　○長谷寺のあたりと見ゆ當時俗にたんば市といへる此所歟
たのもし人　○豐後介なり
ゆみやもちたる　○めし具したる人なり
をんなばら　○おはおとゝさては兄弟なり
ひすましめくもの　○いやしき女なり

おほみあかし○　つは市にて用意せしなり
家あるじ　○別の人をやどさんとせし物をもて腹立たるなり
げに人々きぬ　○かやうにいふ内に人々の來るなり
これもかちよりなめり　○これ右近なり玉かつらの事の祈りに右近か參詣の懇志なり
ぜじうなど　○幕の類なりついたち障子のやうなる物なり
とし月にそへて　○彼參詣を訓釋するなり草子地なり
れいならひにければ　○紫上の御あたりもはれ〴〵しきましらひ心にも叶はされは玉かつらにかへりあふへき祈念に連々參詣せしなり
わかなみの人　○同輩ばかりにてはなくして主君あるとおほしきなり
兵とうだと　○豐後介のもとの名なり此名先例あり按之父の式部丞なとにて有ける時太郎なるにつきて姓を加へて藤太といへる歟
おほねすこそ　○かく尋ぬるを此三條不審に思たる

なり
かいねり ○絹を練て赤く染たる物なり
わかよはひ ○右近が我もはつかしきとなり
あがおもと ○わかおもとなり
うへは ○夕良上なり
おとゝはおはすや ○右近が詞なり少貳北方をいへり
あてき ○兵部君なり
君の御こと ○夕良上の事をはこたへさるなり
みなおはします ○三條か詞なり
いとつらく ○夕良上をつれて行ぬる人は此右近なれはなり
なきかはす ○もろともになきたるさま面白し
わか君 ○我君なり夕良上をいへり
またゝき ○一瞬なり
むかしそのおり ○右近か心なり
いでやきこえても ○夕良上は此世にましまさぬ由を云り
このすけにも ○豊後介なり
なかにうつくしけ ○玉かつらなり

うつきのひとへめく ○一本のしひとへめく物とありねりきぬをはりてのしをかけたる物なる卯月の時分着する物なり
あしなれたる人 ○ありきなれたるとなり右近は早く御堂にまゐりつくなり
このきみを ○玉かつらなり
そや ○初夜なり
この御志は ○玉かつらは今日始めて參り給へるなり右近は連々參りたりし故に佛の近き方に局を構たりなり 又の儀は長谷寺は宿老次第に局を構て人をやとすなりまたふかゝらぬとは今の玉かつらの師は宿老ならさる由なり此儀可然云々
にしのまにとをかりけるを ○玉かつらの局は末の方なれは右近か局に遠き心也右近が局は佛に近しとあり堂は東向なり
かくあやしき ○右近か詞なり
このくにのかみ ○大和守なり
たひさに ○大悲者なり觀音なり
三條らも ○其器量の少しきなる物は願ひ事もかくあり

いといたくこそ　○右近か也詞
中将とのは　○今の内大臣なり
御かたしも　○今内大臣の御むすめとてある玉かつ
らなどさやうの受領などの妻になり給べき事かと
なり
あなかま　○二條か詞也
観世音寺に　○筑前國なり今に東大寺西室管領な
り
つくし人は　○玉かわらなり
御あかしぶみ　○願文なるへし
さやうの人はくだ〳〵しう　○例の文なれは大方よ
く心得て書なり
るり君　○玉かつらの童名歟
その人このころなん　○わざと此頃といへる奇特な
り
きくもあはれなり　○つくしの人きくなり
しれる大とこ　○つば市にはあらず
おほえぬたかき　○右近か物語なり
とのゝうへの　○紫上なり
またおひいて　○明石姫君なり

かうやつれ　○玉かつらをいへり
ちゝみかと　○桐壺なり
たうたいの御はゝきさき　○薄雲女院
われにならび　○双なり紫上の事をの給ひて源氏我
身をよきためしにの給なり
いつくかをとり　○玉かつらはをとり給ふましきと
なり
いたゞきをはなれたる　○河海花鳥とも用之
おい人　○おばおとゝなり
ほと〳〵　○殆也
たはかり　○はかりごとなりかずまへられ給ふへき
やうにはからはれよと云なり
うしろむき　○玉かつらなり
いてや身こそ　○右近か詞也
ありしさま　○こゝにてありしさまを右近か委く語
出なり
心のおさなかりける　○そのかみは右近も心をさな
かりしを云なり
少貳になりたまへる　○少貳になりてくだるとて源
にいとまこひに參り給へりしをも見しなりされど

其時もえ尋よらざりしとなり
まかり申しに　○少貳か源氏へまかりし事なり
ふたもとの　○今日泊瀬にまうで侍らずは何として
逢へきそとなり
うれしき瀬にも　○祈つゝ頼みぞ渡る初瀬川うれし
きせにもなかれあふやと
初瀬川　○玉かつらの返答なりそのかみのことは知
らねど今日逢ぬることのうれしさは袖にもあまる
なり
ゐなかびこち〳〵　○かたちに打そへたるやう躰を
ほめたるなり
おとゝをうれし　○おばおとゝを有難く思なり
はゝきみは　○夕皃上よりは增りさまなる也凡此物
語には紫上を第一にほめて次には玉かつらをほめ
て書なり
つくしを心にくゝ　○所詮筑紫は人のよく生長する
所と心にくゝ思なり
みなみし人はさとひにたる　○玉かつらの外は皆田
舍ひたるなり
秋風たにより　○かけづくりの坊のさまなり

人なみ〳〵ならん　○父おとゝにはかすまへられ奉
らんとも思はさりしに皆々物めかしくし給ふを聞
てたのもしく思給ふなり
はら〳〵　○內大臣の御子なり
いつとても　○寺より出るとてもあり所をたかひに
能をしへをくなり
いひかはすたつき　○六條と九條と程ちかき故なり
右近は大との　○泊瀬より還向以後なり
この事を　○玉かつらの事なり
みかとひきいるゝより　○二條院は狹少なりし目う
つりに只今六條院廣くすみ給へるを云なり
思ひふしたり　○玉かつらのことを思ひ臥たるなり
右近めしいつれは　○紫上よりめすなり
れとゝも御らんして　○紫上の御方にて源の見給ふ
には非す別に御覽しけるなり次の詞にうへに聞せ
奉らてといへる詞にてしりぬへし
こまかへる　○河海万葉十一若反(ワカガヘリ)をひけり當時流布
仙覺が點本若反(ニマカヘル)と點せり古點こまかへるなりわか
かへる心分明なる者歟

まかてゝなぬか　○長谷寺に三日參籠首尾七日ばかりなり
あはれなる人　○玉かつらなり
またうへにきかせ　○此詞にて見えたり紫上の御方にてはあらす
おほとのあふら　○紫上の御方なり
女若は廿七八　○實は廿八なり
かの人を　○玉かつらなり
おほとのこもるにて　○源の御あしさすりなとさせ給ふなり
さりやたれか　○さふらふ人々の詞なり
年へぬるどち　○源のたはぶれの給なり紫上の右近をもいかゝと自然うたがひ給へきとなり
さるまじき心も　○紫上の詞源の御心一向にさもあるましきとは思はさるとなり
かのたづねいてたりけん　○源の詞たはふれことなり
あなみくるしや　○右近か詞也
けにあはれ　○源の詞也
よし心しり給はぬ　○源の詞なり紫上は其世のことは知給ましきなり委はかたり申ましきとなり
うへあなわづらはし　○紫上の詞なり
かたちなとは　○源の詞
こよなうこそ　○右近か詞なり
おかしのことや　○源の詞此君とは紫上をいへり
いかでかさまではと　○右近か詞
花鳥此君とは源自稱と云々如何
したりかほに　○こゝにてあやかりての給ふなり
かくきゝそめてのち　○源なり
かつ／＼いとうれしく　○右近か詞なり
いたづらにすきものし　○夕皃上のむなしくなり給しは源ゆへなりと右近かすてしかこちて申なり
いたうもかこちなす　○源の詞なり
かくてつとへたるかた／＼　○人のあまたある中にも夕皃上ほとの人はなきとなり
わが心なかさを見はつるたぐひ　○花散里末摘なとの類なり
御せうそこ　○六條院にむかへとらんとて先玉かつらの御方へ消息をつかはし給ふなり
かのすゑつむ　○是より床しうおほさるゝなりけと

云迄草子則也末摘のことにこり給へるなり
ものまめやかに　○眞實のおやめきてかき給へるな
り文の趣なり
しらずとも　○そなたには知せ給はずとも誠のおや
のすぢはたゆましきとなりみくりはすぢといはん
爲なり水草なり
みづからまかてゝ　○右近なり
うへにもかたらひ　○紫上へも我むすめ尋出たる由
を申聞せ給ふなり
御くしげとの　○大臣家にもあり衣服をしたゝむる
事を司る物なり
さうしみは　○玉かつらなり
かごと　○すこしなりひだち帶のかごとはかりとい
へるか如し
右近聞えし　○源の心つかひ念頃なるに心をつかひ
給ふやうを云ひ聞せ奉る也
たひらかに　○其身安穩にたにもましまさはつゐに
は親子の道はたゆましきとなり先源にまかせ奉り
給へとなり
數ならぬ　○詞つゞき殊勝の歌なりうきは渉涯なり

筑紫に聽しみてありし事よとなり
てははかなたちて　○手跡は玉かつらはおくれたり
螢巻にも見えたり何事も紫上におとりさまなるこ
とはなきを手跡はおくれたるなり
みなみのまち　○紫上の御方
けせうに　○顯證なりあらはなるなり
さふらふ人の　○中宮の御方はすみ給へき方はあれ
と皆宮つかひ人のつらに人の思へきなり
あひずみも　○花散里と相住も能るへしとなり
かのありしむかし　○夕良上の事を只今語給ふ也
かくは御心に　○紫上のうらみての給ふなり
わりなしや　○源の詞
人のうへにても　○我身の上にあることなれと人の
うへに云ひなし給なり
おもはぬなかも　○思ふ中に思はぬ中もと云心なり
略していへるなり女の道にまとひたるは不可然と
なり
をのづからさるましき　○涯分に心をゝきしなり
あはれとひたぶるに　○あまたの中に夕良上のやう
なるはなかりしなり

きたのまち　○明石上なり
さりともあかし　○紫上の詞紫上も明石上をはおし
　けちがたく思給ふなり
又ことはりそかしと　○此姫君の母上なれば源の捨
　がたく思給はことわりと思給ふなり
すか〳〵しくも　○早速にはなりかたきなり
にはかにまとひ　○俄に上洛し給程になり
その人の　○玉かつらの族姓をばあらはさゝるなり
十月　○一本十一月とあり何れも可然なり
ひんかしの御かた　○花散里なり
あはれと思ひし人の　○源の詞
おうなになるまて　○年たけたるなり今年玉かつら
　は廿二歳歟
中將を　○夕霧中將とこゝにて始て見たり夕霧をも
　御子の如く能あつかひ給ふをいへり
けにかゝる人の　○花散里の詞
かのをやなりし　○源の詞夕顔上をいへり
御心も　○花散里をさしての給なり
つき〴〵しく　○花散里の詞
とのうちの人は　○源の御かたの人々の思なり

むかしひかる源じ　○玉かつらのつき〴〵の人なり
　あてき大貳のめのとなとなるへし
右近かいはなては　○妻戸となるへし
このとくちに　○源の會釋にかくの給なり
わりなく　○玉かつらなり
右近かゝけてすこしよす　○灯のことなり灯といは
　すしてかける筆法奇特なり
おもなの人や　○是も會釋にの給ふなり無面なり
としころ　○源の詞なり
あしたゝす　○三四歳の時より田舎にくたり侍なり
能似合たる返答なり三とせになりぬの歌詞にての
　給ふなり
ゑみ給へる　○源の詞
いふかひなくは　○此いらへをしかるへく思給ふな
　り
うへにもかたり　○紫上にも語給ふなり
あやしの人の　○紫上の詞なり
まことに君をこそ　○紫上をもかやうにしておきて
人の心にも見たるへき物を我物に定めおきて後悔

あるとなり
すゝりひきよせ　〇源なり
こひわたる　〇身とは源氏の身なり夕顔上を忘れす戀わたる身は同じわが身なりいかなるすぢとは玉かつらは誠のおやに尋逢たき志のあるへきなり
けにふかう　〇源の淺くはおほさぬよと紫上の思給ふなり
人かすならず　〇夕霧の玉かつらの方へまいりての詞なり
かたはらいたき　〇夕霧は眞實の兄弟と思給なり
心のかきりつくしたり　〇豐後介國にて我心のかきりつくして玉かづらをあかめたりしことも只今此御すまゐを見ればかきりもなく田舍びたることにて有けるよとなり
をやはらから　〇夕霧なとなり
いまぞ三條も　〇前に大貳の北方ならすは當國の受領の北方にと長谷寺にて祈りしことなり
けんかいぎざし　〇太夫監か事
ぶごのすけもなりぬ　〇豐後介も家司になるなり
いかてかかゝりにても　〇此介などはかゝりそめにも此殿中へは出入しがたきを今家司になりて心安く出入して結句人をしたかふるとなり
てうじたるも　〇調ずることなと田舍びてはとおぼしてこなたよりもしたてゝ奉り給ふなり
かた〳〵にうらやみなきやうに　〇紫上へ申給ふなり
世になき色あひ　〇紫上かやうの方へたらひ給へるなり
うちとのより　〇板引に今はする物を昔はうちたるなりさやうのことをする所をいへり
御そびつ　〇御の字みと讀へし
きたまはん人のかたちに　〇人々の御形を大方知ん爲にかくの給ふなり
さていつれをか　〇さては紫上は何れをき給ふへきぞとなり紫上の御ための事也
それもかゝみにては　〇我身も鏡などにて見るはかりにては知かたきことなり是も源にはからひ給へとなり　花鳥の義いさゝか異ある歟
この御れう　〇紫上の御ためなり
さくらのほそながに　〇櫻色は面て白なり

かいねり　○紅なり
かいふのおりもの　○大浪にみる貝なり
夏の御かた　○花散里なり
くもりなく　○うはぎなり
にしのたい　○玉かつらなり
うちのおとゝ　○さては實父の内大臣に能似たるよとおほす
かたちのよそへは　○紫上の人の程を見給はんの心なれば源氏のかくは宣ふ詞なり
ものゝ色はかきりあり　○玉かつらへのは結構に見へたると紫上の思給ふとおほしくてかくの給ふなり
そこひある物をとてかの末つ玉　○此句うつり奇特なるかきさまなり
こきか　○紫なり河海說あやまれり
ゆるし色　○うす紅なり上古は尼も用なり朽葉に重ねたる花說可然
おなし日　○皆元日の御れうなり
げにゝげついたる　○紫上の似よせて見給へき爲めことはりなりとなり

やまふきのうちき　○使の祿なり
いでや給へるは　○文の詞なり
あふよりにたる　○奥字なり上古なりあまりふるめかしきなり
御けしきあしけれは　○此祿あまりに比興なれば源の御氣色もあしければ御使ははやく罷出たるなり
さかしらに　○末つむ返事の能らぬをさかしてありとの給へり
はづかしきまみ　○源氏のまみなり
から衣　○末つむはから衣と云歌を多くよみ給ふなりこゝにてはついでに歌よむことを云り
まろも　○源のわれも此類となり
まとゐはなれぬみもし　○われ人會合の時は必すまとゐしてなどよまてはと思なりみもしとはまとひの三字なり身といへる本あり未決
あた人　○けさうだちたる事にはあだ人と云ことを必すよむなり河海說はあた人のとあり然れはあたひとの云は五字なり然れは五文字なり云々未決也
やすめ所　○中の五文字なり
よろつのさうし　○歌枕とは名所の歌をあつめたる

草子なり
ひたちのみこの　○蓬生君の父宮
みよとて　○源へまゐらせ給ひしなり
よくあないしりたまへる　○かやうの事能習ひ傳給
　ふ成へしと也
いとまめやかにて　○紫上の實にの給なり
ひめ君にも　○あさむきての給ふなり
すへて女は　○をしへのさま妙なり
こゝろのすぢを　○又心をたてんとせば腹あしきや
　う成へし
御かへりことは　○かく物語をして末つむの返歌を
　し給へきことゝも思ひたまはさるなり
おしかへし給はざらん　○文の返事に歌のあるには
　おしかへし返歌の有へき常のことなり返しやりて
　ん袖をぬらしてとあるにをしかへしたまはさらん
　といへる詞面白し
なさけすてぬ　○かく紫上の給ふにつけてなり
かへさんと　○かへしやりてんとあるをこれは夜の
　衣に取成してよめる殊勝なり源の我身の問事もな
　きにはことはりとなり

初音 巻名以歌並詞號之源卅六歳の正月より竪の並なり御幸のまゝまて月次出行也

としたちかへる ○正月一日になりたれは冬の空にひきかへたるなり元日立春なるへし

數ならぬ ○六條院を云たてんとてまつ公界をいふなり

ましていとゞ ○六條院なり平生さへきらをつくしたる殿の中なるにまして年始は翠簾なとやうの物までもひきつくろひてみところあるなり

春のおとゞ ○三段に書分るなり發端に春の始の總別の樣をいひて數ならぬかきねのうちといひてまして玉をしけると云ふ又春の大臣の御前紫上のかたなりかく三段にわかちてみるへし

いける佛 ○生佛國は極樂國なり

さすかにうちとけて ○前の詞にいかめしく書たるに對していへり此語妙也紫上は今本臺なる故におもてはかりかさりたるにてはなくてうち〳〵もあるへきさまなりとて又人のよりつくましきやうにはなく仕なし賜なり

姫君 ○明石の姫君なり

としのうちの ○舊年にはあらす今年の年中をいへり

そほれ ○そほれは戯なり

いとしたゝかなる ○源のさしのそき給を人々はしたなく迷惑して思へきゆへに詞をかけて過給なり源の仁恕ある故なり

中將の君 ○源に祗候の人なりすまのうつろひの時紫上の御かたへまいる人なり源の心かけ給人なり

かねてぞみゆる ○近江のや鏡の山をたてたれはかねてそみゆる君か千年は私の祈はなし唯君をこそ祝へとなり

さんざ ○參賀なり花散里などの御方を始めとしてあなたこなたをありき給なり

けさこの人々 ○齒固事なり

うへにはわれみせたてまつらん ○紫上へは源のあなたこなたへ御出なきさまに御前にてまいらせ給へきとなり

うすこほり ○源と紫上とかけをならへんとなり

けにめてたき ○双子地なり

くもりなき ○紫上の返歌なり六條院の躰なり廣大

に面白き歌なり
なに事につけても　○草子地なり源と紫との御あはひをいふなり
けふはねのひ　○元日子日なり
北のおとゝ　○明石上なり姫君の實母なり
えならぬ五えう　○作り枝なるへし　實拾遺松のうへに啼鶯の聲をこそはつねの日とはいふへかりけれ　此歌の心にて書く松に鶯は初ねの緣あれはなり
おもふ心あらん　○おりにあひたるつくり物なればうくいすも心ありてんと書り
とし月を　○姫君紫上のかたへ御出ありては四五年になるなり對面ありたき心なりせめて御返事のはつねをも聞たきとなりふる人古の字と經歷の義と兩說なり經歷の義可然か
こといみも　○今日は元日なればこと忌すへき日なれとも哀の催すとなり
はつねおしみ給　○直の御返りをし給へとなり
あけくれみたてまつる　○母の心を源の思ひやりたまふなり

つみえかましく　○かくひきはなちてをき給をの給ふなり
ひきわかれ　○もとの根さしは忘ぬとなり
をさなき御心にまかせて　○草子地なり評してかくなり歌といふ物はことはりをいひたる計にては叶ましきなり餘情を今ちと添加へたきと也心をつけてみるへしとなり
夏の御すまゐ　○花散里なり
ときならぬ　○夏の方なれはなり
わさとこのましき　○いつと取わきたるさまもなくふれずさめずなと云やうなり
あなかちにちかやかなる　○一宿などはし給ぬなり
すこしをしやり給へば　○總して花散里は心もちひうちむきて如此可然人なり源のみ心のまゝにておはするなりふりのよきなかなり
はなたは　○絹くはりの時に見たり花鳥に詳なり
やさしきかたに　○本式にあるへき事にてはなけれともちとかやうにもしてつくろひ給へかしと源の思給なり
われならさらん　○源の心中なり花散里は容顏美麗

にはなきを我心のかはらす思ふをわれなからもう
れしく思給ふなり
御心のおもき　○花ちる里の御心なり何事につけて
も恨給御氣色もなきとなり
ふるとしの御物かたり　○年のうちよりの御物語な
り
にしのたい　○玉かつらの御方なり
まだいたくも　○去年十一月より住給ふほどに未た
よくも住つき給ましきをよく住なし給となり
さうじみも　○人からも可然となり
やまぶきに　○衣くばりの事花鳥に詳なり
物思ひに　○田舍なとに居給し事なり
かくてみさらまし　○我物にしてもみたきとなり
さはらかに　○あら〳〵とかゝりたるさまなり
かくいとへたてなく　○二義あり源の心といふ義も
あり然とも玉かつらの心にてよきなり源の玉かつ
らをば眞實の御子のやうにしたまへども眞實の父
にてはなき故にへだてなくなれても猶實の親なら
ねはまほならずもてなしたるとなり
とし頃になりぬる　○是より源の詞なり去年よりか
くのことく住居給ものをとなり
つゝみなく　○今は物つゝみもし給ひそ紫上の御方
なとへも御出あれとなり
いはけなきうゐごと　○明石の姫君なり
うしろめてき　○紫上のことなり
の給はん　○玉葛の詞なり
さもある事そかし　○草子地なり心は玉かづらのい
らへのやうしかるへきなどの心にや
ちかきわたとのゝ　○明石上はいさゝかゝと〳〵し
き所のあるとなり
からのとうきやうき　○居給とおほしき所なり
東京錦とは白きから錦なりよのつねの茵なり
ゐひかう　○ゐいと云説もあり
こと〳〵しうさうかち　○しと〳〵とめやすく書な
り
こまつの御かへり　○姫君よりさきの御かへりなり
めつらしや　○花のねくらには姫君の紫上に養はれ
給を云り谷のふるすとは今日姫君の御返歌のある
を云なりとづる鶯と云説あり河海に猶とへる鶯な
るへし

聲まち出たる　○引歌未勘末摘也
さけるおかべ　○御ちか〳〵にある故にともしくも
あらすと云心をとるなり　梅花さけるおかへに家
しあれはともしくもあらす鶯の聲
ひきかへし　○草子地なり
ゐざりいて〻　○明石の上なり
なをおほえことなり　○人々めざましく思となり
かうじも　○明石上の心なりあなかちにかく夜ふか
く歸給へきことにもあらすとして思給なり
まちとり給へるはなまけやけしと　○けやけしとは
花鳥に云世に勝れめざましき心と云々然とも爰の
心は煩しきとなり紫上のさこそ思給へきとて源の
かくのことの給なり
りんしきやく　○河海惡きよしに花鳥に見えたり
おもがくし　○紫上の嫌疑をまきらかし給なり
ろくなとになし　○臨時客には祿はなきを是も殊に
ことをくはへたるなり
いうそく　○花に詳なり
なすらひなる　○源には似たる人もなきとなり
この院にまいる　○源の院號のこと藤裏葉にこそ見
へたるをかくいへるは生得六條院と云かとなり
つねのとしよりも　○今源の玉葛をえ給ていかなる
聲もなとおほす折節なれとなり
花のかさそふ　○常ならば梅か香とこそ云へきを花
と云て更に梅といへる妙語なり古今花の香を風の
たよりにたくへてそと云も梅をいへればなり
物のしらへ　○花此臨時客には響の例になずらへて
笛の筥などめしけるにや物のしらべといへるおぼ
つかなし但物のしらべとは立曲につきて時の調子
をもいふべし樂器の有無にかゝはるべからず
このとの　○催馬樂
物へたて〻　○紫上の外は皆よそに聞給なり
はちすのなか　○紫上をは生佛國にかけり其餘の御
方々は尤花鳥の說可也下品下生にかくなり此殿の
中にありなからかくよそに聞給はかの蓮の中に劫
をふるに三不足あるがことし三不足とは一には不
見佛二には說法をきかす三には佛を供養せずと云
々
まして東の院　○三段に書なり末摘空蟬なとなり
つれなき人の　○源なり

をこなひ　○うつせみなり
さわかしき日頃　○ちとゝりしつめてとふらひ給なり
人めのかさり　○末摘は人からなれば人めのかざりはかりを常にし給ふなり
たきのよとみ　○古今の歌は瀧の水上のかみと云字をもちて髮にたとへてくろきすちなしと云るを是は髮を瀧に喩へかへたるなり
やなきはけにこそ　○前の絹くはりの時此御方には柳色をまいらせ給しことなり
くろきかいねり　○つしみ色なるなり
かさねのうちきなとはいかにしなし　○うつぼにきたまふなり
御心にもあらす　○源の御心なり
御几帳引つくろひ　○花に詳なり
いまはかくあはれ　○とにもかくにも源を賴給はかりなるか哀なるとなり
われたにこそはと　○源の仁恕ある所なり
御そとも　○源の問給なり
かはきぬはいとよし　○源の詞

あへなん　○相當せんと云心なり
いたはりなき　○煩もなきとなり
をのつからなんと　○自忘ることにあれはとなり
むかひの院　○二條院なり東の院より向といへり
ふるさとの　○今細々も住給はぬ故なり花は紅梅なり下心は常陸の君の心なり
佛はかりに　○心ある住ゐのさまなり
袖くちはかり　○絹くはりの時は我御れうのをかさねてとあり
松かうらしま　○音に聞まつか浦島きてみれはむへ心ある海士も住けり
むかしより　○源の詞
かゝるかたに　○空蟬の詞也
あさくはあらす　○源を淺くは思まいらせすとなり
つねにおり〳〵　○源の詞なりなか川のやとよりてのかた徒に心をつくし給しことを今はおり〳〵は佛に懺悔し給なりそなたにも又思みることもあるかとなり
かのあさましかりし　○空蟬の心中なりまゝ子の紀伊守か色々に云し故にあまになることを源の聞し

召ての給ふかと思なり
かはかり　○常陸の宮の是程の用意もあれかしとなり
かくれたる　○人々此外にも多きなり
かぎりある　○限りある別のみこそ悲しけれ誰も命は空にしらねは
いつれをもほと〳〵に　○源のすて給はぬとなり
われはとおほし　○源は今一天下をたなこゝろにいれ給へともいかなる人々をも捨給はぬはありかたきとなり
男踏歌　○新儀式西宮抄にあり日本紀持統天皇云々
河海にひけるやう聊誤あり隔年にあることなれは今年はとかけり
にしのたいの姫君　○玉葛なり
こなたの　○明石の姫君なり
みづうまや　○本文は宇佐の使より出たり廿二人役者ありつたひありくゆへに驛に摸するなり蒭驛と
飯驛とは同し物なり人の飯を食程なる所にては馬
にもわらを飼故なり爰は水驛なり世俗の語にすや
かと云は此義かと云々杜子美詩奴には與二白飯一馬

青蒻とつくれり
あを色の　○高巾子(カウコシ)をきる物六位の中に有麹塵の袍なり
しらかさね　○しらかさねはしろき下襲なり
殿中將　○夕霧なり
内大殿　○柏木なとなり此二人歌頭なり
たけかは　○催馬樂うたふうたなり
かよれる　○辮なり
ゑにもかき　○聲は繪にもかきとめかたきとなり
かうこし　花別勘にあり狂言かましき物にきするなり狂言烏帽子なとなるへし
辨少將　○紅梅の大臣なり聲よき人なり夕霧を褒美しての給なり
いにしへ　○延喜天暦との時代をほめんとてかくことく書なり
中將など　○夕ぎりなり
もてしづめ　○人は實法なるはかりにてもかなはぬ物となり花實を相兼すしてはとなり
わたくしの　○踏歌の後宴に摸して源のゝ給なり
人々こなたに　○御方々かへりわたり給ひぬと云て

又こゝにこなたにつとひ給へるついてにとあり相違のやうに聞へたり然れとも唯かやうのついてにと云心なるへし不審抄此物見のたより以後御ちなみもむつましくなりけるにや此女樂のこと花鳥に云女かくあるへき用意ありされとも有增はかりにて其ことありともみへすと云々然とも竹川巻に薫中將に冷泉院の御物語のつかいてに此女樂のことあるうへは必ありしとは見たり此物かたりの習ひかきいたせは則そのことありと心得へきなり

胡蝶　巻名以歌號之初音と同し年なり

やよひの

つねよりことに　○新造の翌年なれはなり

ほか里には　○はや余所には昔くあるへき時分なれとも此所のさまのめづらかなれは末よそにはかやうの花とりはあるましきとおもはるゝなり

山のこたち　○雪きえたる時分に汀なとをも行てみたきと人々も思へきとて舟をつくらせて此經營あるになん

たろしはしめ　○船のことなり

中宮　○秋好なり

かの春まつその　○少女の巻「心から春まつ園はわが宿の紅葉を風のつてにたにみよと秋古よりよめる御返歌をこゝにてよみ給はではと云義なり

此ころやとおぼし　○紫上の心なり

おとゝの君　○源の心なり

つゐてなくてかろらかに　○同し六條院の中に今中宮はましませともかろらかにこなたへわたりましますことはなきとなり昔の中宮なとはかやうに同し院の中にてもたやすくはわたり給はぬ所を心をつけてみるへきことゝなん

わかき女はう　○中宮の女房なり
みなみのいけのこなた　○未申の町と南のたと〻とのゐはひより漕出るなり
ちひさき山をへたての　○なか島あるなりこなたよりみればへたてたるやうなれとも船にてまわれはひとつなるなり
つり殿　○亭なとなり
こなたのわかき人々　○紫上の方の女房達こ〻より同じやうにのりてあそぶなり
龍頭鷁首　○前にからめいたると云も此ことなり龍はもとより水を心にまかするものなり鷁は風をうけてよく行ものなれはなり
なかしまの入江　○前の山の木たちなかしまのわたりと云々心もとなく思と云にかけてみるなり
ほかはさかりすきたる　○花鳥の義是も面白し妙也
らうをめぐる　○文集繞レ廊紫藤架挾レ砌紅葉欄（秦中吟）
風ふけば　○山吹のさきに近江と云々此外には歌にもみえず此歌ともは中宮の御方の人々南のおと〻の人々の歌なり作者はさして誰ともなし
かめのうへの　○文集の句を引こ〻の心は不老不死の藥は此六條院なり何別求蓬萊哉と也
春の日の　○眼前の景氣うつくしき歌なり
行かたもかへらん里も　○武陵の桃源なとのことし
わうじやう　○平調の樂なり此私云明星抄になし三光院殿了簡歟　私云平調を用る事時の調子にあらす不審に似たり平調の根本をいへは金の聲秋なり雖然平調は呂律相兼て其中を得たる此故に祝言の調子に用レ之
心にもあらす　○日もはや暮るゝ程に心にもあらすとなり
こゝのしつらひ　○此つりとのはさせる莊嚴もせざるていなり
たまへの庭　○堂上にも樂をするなり
ものゝ師　○舞人なり
そうてう　○春のしらへなれはなり春のしらへひゝきはいとことにまさりてと云々
人々おほしわくらん　○春は一段とものゝしらへも殊なるを聞人々は云に及はす樂をし給人もこそおほしわくらんとなり
かへりこゑ　○律に成也是も明星抄になし喜春樂は

黄鐘調律なり皇麞は平調律呂なり
あをやき ○りちの歌なり
中宮は物へたてゝ ○かくの聲なとなり
いつも春のひかりを ○此六條院は温和なる所はありなから紫上の御腹に御子も御女もましますをのみあかぬことに人々思てすくよかなるかたはかりにて此程はありしを玉鬘のおはするゆへに萬たらひたるやうなるとなり
にしのたいの姫君 ○玉葛なり
こともなく ○この玉かつらは無事にてよきとなり
おほしふもしるく ○花鳥
中のおもひにもえぬべき ○堅固に司位も賤しき人はこゝろにはもとより思へともうち出ぬ人多きとなり
ことの心をしらて ○實は兄弟なる物をとなり
内のおほいとのゝ中將 ○かしはきなり
兵部卿宮 ○螢兵部卿宮なり
さうとき ○うき〳〵とされたる躰なり
おとゝもおほしゝさまかなふ ○此籬の中にあるもかゝるくさはひのなきと連々の仰有し事ありとなり
むらさきの ○藤を淵にとりなすこと 後撰より出たり「限りなきなにたふふちの花なれはそこひもしらぬ色のふかさよ」此歌より出たり此物語にはおほきなり義花に詳なり
おなしかさし ○藤の花のかさしなり
ふちに身を ○此邊を立さらすしてとなり未だ源のゆるし給はぬ詞なり
中宮の御ときやう ○三月へ延引したるなるへし二八月にあることなり定めて例あるか御讀經とは大般若をよむことなり
日の御よそひ ○束帯なり花鳥説可然直衣は宿衣なり束帯は日のよそひなり
あなたにまいり給 ○中宮の御方へなり
おとゝの御いきほひ ○源の着座し給ゆへなり
いつくしき御ありさま ○源にひかれて此中宮も一段光華ましますとなり
春の御うへの ○紫上の御方よりも供花をし給なり
鳥蝶 ○是則舞人なり如此の樂には蝶鳥なとは必ずあるものなり

鳥にはしろかね　○花鳥

みなみのおまへ　○昨日のことくに船にのせ給なり

かめのさくら　○作花にてはなしまこと（實）の花なり

わさとひらばり　○蝶鳥の舞ある程にかくやあるへ（樂屋）きをそれをもわざと略せらるゝなり

あくら　○花説用之

わらはへ　○蝶鳥の八人なり

殿の中將　○夕霧なり

花そのゝ　○秋好中宮は秋をさためて侍給へきそことなり松虫なとは此蝶をはうとくみるへしとなり

昨日の女はう　○昨日舟にのりたる女房ともなり

花にをれつゝ　○情を折なり面白き書さまなり

うくひすのうらゝかなる　○折ふし鶯の啼たる音なり鳥のかくにあへり

きうになる　○鳥の急なり蝶は日本樂なり　或説鳥の急にもよほされて誠の鶯も水鳥も鳴又此蝶の樂に誠の蝶も飛出るといふ義あれどもこれをもちひす

宮のすけ　○中宮のすけなり

わらはへ　○蝶鳥のわらはへなり

しろき一かさね　○きぬなり

こしざし　○花鳥

ねになきぬへき　○我宿の梅のほつえに鶯の音になきぬへき戀もする哉」心は昨日そなたの御ゆかしかりしことなり

こてふにも　○心ありて隔て給はすは今はゝかなきてふにさそはれてもまいりたきとなり

すくれたる御らう　○紫上又中宮などにすきたる當時藹たかき人は誰かあらんそなれは歌なとも一段とあるへきかと思へはさせることもなきは所詮歌と云ものは思樣にはなき物と草子地に評たる也

まことやかのみもの　○昨日舟にのりたる中宮の御方の女房たちなり

こさくはしけれはむつかし　○昔と云まて草子地なり

にしのたいの　○紫上へは踏歌の時より玉葛といひかはし給なり

ふかき御心もちひや　○あさくもいかにもあらんと云までを讀きりて氣色いとらうありと讀なり此段むつかしきやうなれとかく讀切ては心得やすきな

心は玉葛の心もちひをほめたるなり　玉葛は心深
きとも又淺きとも心の奥はうちみるにはしられさ
る人となり
けしきいとらうあり　○たゝうちむきてなつかしく
らう〳〵しきとなり
いつかたにも　○誰もへたてゝは思はぬとなり
きこえ給人　○玉葛をねんする人おほきなり
すくよかにおやかり　○我物にもしたきと思すなり
ちゝおとゝ　○内大臣なり
殿の中將をすこしけちかく　○玉葛の方よりは心へ
たて玉へとも夕霧はまことの兄弟のあひしらひを
し給なり
內のおほいとの　○柏木なとなり是は實の兄弟なれ
は女君もむつびたがり給ふなり
この君に　○夕きりなり
そのかたのあはれ　○花鳥
さやうにももらし　○實の親にあひまいらせたき由
をさすかに源にもえ申給はぬとなり
ひとへにうちとけ　○源をひとへに頼み給ふ計なり
にるとはなけれと　○夕かほの上に似たるとはなけ
れとなり
衣かへ　○四月になるなり
たいの御かた　○西の對玉かつらなり
思ひし事と　○玉かつらの方へかた〳〵よりの文あ
るなり　されはこそと源のおほすなり
はやうよりへたつる事なう　○兵部郷宮は源の御連
枝と云なから其中にても一段とへたてなくむつひ
給へとも好色の方にては源に心へたて給ふをかや
うの人出來て御心の色をみるこそおかしけれと源
のゝ給ふなり
すこしもゆへあらん　○兵部郷宮をさしをきてはた
れになひくへきそ心あらん女は此宮にこそ心をは
とゝむへけれとなり
右大將　○鬚黑なり實法なる人なり
くしのたふれ　○いかなる實法をつくる大將も戀の
道にはかり心をまとはし給ふ程に孔子ほとの人な
りともいかゝとなり俗に龍のけつまつきなと云か
ことし說々無ㇾ用
思ふとも
はか〳〵しう　○玉かつらのこたへ給はぬなり

右近めしいてゝかやうに　○女のをしへなり殊勝也
我にてしりぬ　○源のわれにてしるとなり
あなさけな　○其時は心なくおもふなり
わさとふかゝらて　○自然の情に物なといへるを返
事なとせざれはそれより思くはたてゝいひやまさ
ることも出來る物なりさやうなるをはゝやく返事
をさせ奉りてはらしたるよきとなり
物のたよりはかりのなをさりこと　○又等閑ことに
云ことを口とく返事をするもわろしとなり
そのつもりあちきなきを　○はてはなけきの森とな
るらめの心なり
宮大將　○兵部卿宮と鬚黑と兩人なり
なふな〳〵　○ねんころなるなり
この頃の花の色　○夘花なり
さはいへとゐなかひ給へりしなこりこそ　○右近は
玉かつらを田舎ひさるやうにみしなりされと源の
御心にはそのはしめはいなかひたるとみ給ひしな
り今はみなをし給ふなり
こと人にみなさん　○よそ物にみなさんは口惜とな
り

さしならひ　○源と玉かつらとは年は十三ちかひ也
右近は心に源のものになしてみたく思なり御親に
はちと似けなきと右近か思なり
さらに人の御せうそこ　○右近か申詞源のしり給へ
る外の文はとりいれさるとなり
御かへりはさらにきこえさせ給おりはかりなん　○
源のそゝのかしてかくし奉られし外にはなきとな
り
さてこのわかやかに　○花鳥
これはしうねく　○たび〳〵かへしたるを御使がし
うねくとゝめていたはると云なり
見るこ　○花鳥
いとらうたき　○くせ事也文なとゝりいれたるやう
にはあるましき事となり
公卿といへと　○人の族姓を云なり
しつまりたる　○實法なり
をのつから思あはする　○實の兄弟なれはなり
かうなにやかやと　○源の玉葛にの給ふ詞なり
おほす所やあらんとやゝましう　○やゝましとは心
やましきなりかく申事ともをもなにとか思すらん

も御心はしらぬ程に心やましきとなり
こゝらとしへ給へる　○父大臣のかたは継母の御な
かなれはなり
猶世の人のあめるかたに　○たれにても可ㇾ然人の
室になして其後實父にしらせ申へきとなり
宮はひとり　○さて誰人にかと思に兵部卿宮はとな
り
めしう人　○召人なり手かけ物なり
なたらかに　○手かけ物なとの所をもなたらかに思
ひてあるへきと思玉はゝ兵部卿宮になり給へとな
り
大將はとしへたる人の　○此北のかたは平少し物く
るをしきほどにいとひかてらに此玉かつらを求給
ふとなり此北の方と云は紫上の姉なりされは源の
身にちとしわつらひ給ふなり
かうさまの　○かくのことときのことは父なとにもえ
いはぬことなりされともいはけなき御年にてもあ
らばやなれば我身を夕貌上とも思ひなすらへて心
へたてすの給へと源のゝ給ふなり
御心にはわい給　○わいは分別なり

なにごとも　○花鳥
のちのおやを　○後の親のことなり世俗に云なり
うちなけかれて　○かへるへきとし給へどかくのこ
とくにの給なり
ませの内に　○花鳥
ゐさりいてゝ　○玉かつらの禮あるさまなり
いまさらに　○玉かつらは源を實の父にとりなして
實の根さしなとをは中々尋ましきとなり
さるは心の中には　○花鳥
むかし物語　○すみよし物語なとにも親にもうとく
なりしてとあり
とのはいとゝ　○とのは源なり
うへにもかたり　○紫上になり
いにしへのは　○夕顔のうへなり
ほめ給ふ　○源の玉かつらをほめ給ふなり
たゝにしも　○紫上の心に源のたゝにはおはしますす
ましく思給ふなり
ものゝ心えつへくは　○花鳥
うらなくしも　○紫上のおしあてに源へ申給なり
たのもしけ　○源の詞なり如此たのもしけなくの給

ふものかなとなり
いてや我にも　○花鳥
いとみしらすしも　○玉かつらもさやうのかたの心
あらはみしり給はてはとなり
和して又きよし　○文集四月天氣和且清
まつ此ひめ君　○たまかつらなり
むかしおほし　○夕顔上に似たり
中將のさらにむかしさま　○夕霧は葵上には似給は
ぬ程に人と云ものは母には似ぬものと思たれは此
玉かつらはよく夕顔の上に似給ひたるよと也
袖の香を　○われをは夕顔上に比し給ふ程にわれも
源ゆへにはかなくなるへきよとなり
なにかかく　○源のことはなり
このをとつれ　○宮大將なり
いとかう　○源のみかつらの給ふなり
うしろめたく　○源程に玉かつらを思ひかしつくへ
き人はおほえさる物をと源の自稱なり
風の竹になる程　○和且清の末の句なり初着[二]單衣[一]
與[レ]體輕此句も文集同詩のなかの句なり
まことのおや　○前にはかうさまのことは親なとに

もさはやかに我思ふさましてかたりいでかたきと
云て源をありかたく思給ひしを今又爰にては又た
ちかへりうたてく思給ふなりへたてある所とへた
てなき所とを書分たる妙なり
かうおほする　○源の詞なり
もてはなれ　○花鳥
ゆめけしき　○花鳥
うち世なれたる　○大方の世の人のならひ男なとに
なれ給ひぬへきことはかけても玉かつらは未だし
り給はぬとなり
兵部卿なとも　○玉葛の乳母の子なり
たくひなかりし　○これよりふみのことはなり
うちとけて　○實義もなきとの心なり
うけ給はりぬ　○これより玉葛のふみの詞なりたゝ
の字は上につく字なり
大田の松　○花鳥説尤殊勝
むけのおやさま　○實の父と人はおもふなり
よろつにやすけなう　○玉かつらのいろ〱におも
ひみたれ給ふなり
いはもる中將　○前にかのぬしたちをはいかゝさは

はしたなめんなと源のゝ給ひしを此中將はつたへきゝてとなり
かたよりに　○一方むきになり

螢　巻名以詞幷歌號之源卅六歳五月のことなり堅の並なり
いまはかく　○源の今は攝政し給ふなりさておも〳〵しきとは云なりされとも內大臣に每事讓りてをき給ふなり天下をばたなこゝろのうちに入てましますなり
みな思ふさまに　○六條院の有樣也源の御光にかゝりて皆々思まゝなるなりまへの巻にもみえたる也
たいの姬君　○玉鬘よろづは源を賴給內に心をかけ給へる事の心やましきと也
かのけん　○源を大夫監なとの類(スヂ)に思へきにてはなけれども外聞不可然となり
かゝるすち　○實の源の御子とこそ人もおもひしことをとなり
なに事をも　○玉葛の年もたけたるゆへにおぼししとなり
母君　○夕顏也
おとゝもうちいでそめ　○大田の松のなとまへの巻にみえたり
けさやかにはしたなく　○人からを思給ふゆへなり

わらゝかに ○にごやかに人あひ可然となり

御らうのほとは ○年月をへ給ふことはなけれとゝなり

さみたれになりぬる ○五月には人にはあはざる愁をいへり五月を忌こと花鳥に見たり

すこしけちかき ○兵部卿宮よりのふみなり

人々もことにやむことなく ○玉葛の御身になるへき人もなきとなり

御をぢなりける ○夕顔の上の伯父は父三位中將の弟也官は宰相ほとの人也其娘を今宰相の君といへり夕顔の上にはいとことなるべし

物なとの給さま ○源と兵部卿宮となにことにもへたてなけれと好色の道には心をへたて給るを此物の給ふさまはゆかしきとなり

うたてある物なけかしさ ○源の心がけ給へるをのかれんの心にて兵部卿宮にもさたまりぬべくおほすなり

をのれ心げさう ○兵部卿のけしきをみんとてしたまち給ふなり

そらたきもの ○源のとりもちてかくし給ふなり

うもれたりと ○源のかくの給ふなり

いとゝしき御にほひ ○源のましますゆへなり

うちいてゝ思ふ心の程にを ○宮よく詞をかはし給なり

さいしやうの君 ○宮の御消息をつたへ申なり

いとあまりあつかはしき ○これより源の教訓のことはなり

よろつのことさまにしたかひて ○それ〳〵のしなほと〳〵にしたかひてあひしらひ給ふへきなり此宮なとをばさしはなち給ふへきてとにてはなきぞなり

いとわりなくて ○玉かつらの心なり

はひいり給ひぬべき ○源のことなり

なにくれとことなかき ○宮の御返事に思ひわつらひ給なり

ほたるをうすきかたに 以二螢火一見レ女例 伊勢物語にかのゐたる螢をとりて女車に入れたりけるを車なりける人此螢のともす火にやみゆらん云々

あふきをさしかへし ○玉かつらなり

おところ〳〵ひきひしかり ○源のかく思給ふなり

我むすめと　○此宮は源の女と聞給ふによりてかく
　まて心ことめての給ふなるへし
かへしもくしたる　○源の心に具したると思給ふ也
まことの　○草子地なり實子の明石の姫君なとなら
　はかくはし給ふましきものをとなり
ことかたより　○源のかへり給ふなり
宮は人のたはする　○人とは玉かつらなり
ほのかなるひかり　○是さへ心をとゝむるつまとな
　るなり
あのこと　○あんのことくなり源の推量にたかはさ
　るなり
なく聲も　○啼くこともなき虫の思さへきえかたき
　を人の思ひはいかゝとなり
かやうの御かへり　○久しく思案するもいかゝとて
　やかてよみ給へるなり
ときはかり　○適時に讀給へるなり
こえはせて　○ことにいてゝいへはなくさむことも
　あるへしさてはを音なかぬ螢の思こそふかく見え
　侍れたゝいま宮はかくうたなと讀給ふては思ひも
　慰み給ふかたのあるへきとたさへたるなり

いとはるかに　○はるかになるよしを恨み給ふなり
ぬれ〳〵　○實事もなけれは夜の更さるさきにとて
　出給ふなり
ほとゝきすなと　○草子地なり「五月雨に物思ひを
　れは郭公夜ふかくなきていつち行らん」の心にて
　かけり物思のあるによりてきゝも入給はさるなり
御けはひなと　○宮は源に能似給ふとなり
めをやたちて　○母のことくとりもち給ひしこと也
うち〳〵はしらて　○源の父ならぬことをしらぬ也
かくさすがなる　○心がけ給ふ方なくはうれしかる
　へきとなり
おやなとにしられたてまつり　○實の父母なとにし
　られたらましかばあるましきことかはとなり
人ににぬありさまこそ　○今玉鬘のありさまは類も
　なき由なり源の實子のやうに聞へありてさるむつ
　かしき方の事出來ぬれは人きゝも如何とたもひ給
　ふなり
さるはまことに　○源のゆかしけなくわか物にすへ
　きとは又思さため給はさるなり源の天然の心くせ
　なり

中宮　○秋好なり
やむことなきかたの　○中宮はけたかきかたにて玉鬘のことくにはえし給はさるなり
うまはのたゝに　○東の御方の西の對に玉鬘居給ひし程に馬場に近き故なり
いかにそや　○夜部の宮のことを問給ふなり
わつらはしき　○さのみちかつけまいてせそとなり
人の心やぶり　○思女のあはひは大事なるとなり
いけみころしみ　○前に此宮だちをさへさしはなちたる人づてにきこえ給ふましきことなりかしとの給ふて又愛にはいたくもならし聞えじ煩しきけそひ給へる人ぞやとの給り扱いけつころしつの給ふとはいへり
つやもいろも　○つやとは色の外にあるものなり顔色を色つやと云がことし
つねのいろも　○詞つゝき殊勝なり源のことをいつくにくはふれるきよらにかあらんとかきてかやうにかける妙なり菖蒲はつねにみとりなる物なれと五日には別したる色をそへるなり只人のもてなしによれるとなり

思ふ事のなくは　○玉鬘の事なり
ひろきうすやう　○あやめのねにたよりあり
見る程こそ　○草子地なりその折の興あることも後にかたれはさもなきことのあるなりこれも世上のをしへをかけり
けふさへや
ためしにも　○一段となかき根なるへし
けふの御かへり　○源のいさめ給ふなり
これかれも　○人々も申となり
御心にもいかゝとおほしけん　○自返事をし給へり
あらはれて　○あやめもわかすとは無分別にとなり
かくの給はかへりてあさくみゆるよしなり花鳥に委し
わか〳〵しくと　○かやうの文かきはわか〳〵しきとなり　宮の臆し給ふ詞なり
てをいますこし　玉鬘手跡なり
おほししつみつる　○筑紫に居給してとなり
おなしくは人のきすつくはかり　○源のこゝろかけ給ふことなり

ひんかしの御かた　○花散里なり
けふのつかさの　○夕霧は左近なり人々ひきつれて
まいるへきとなり
さゝ心し給へ　○用意し給へとなり
あやしくこゝには　○かりそめにし給ふ事も六條院
にてあることをは人々きそひ給ふとなり
こなたのらうより　○花散里の住給ふ方なり
たいの御かた　○玉かつらなり
こなたのは　○花ちる里のかたなり
おほやけことに　○一義は公事にはかたむやうなる
ことのあるをさもなきとなり一義には中將もまし
はりたるを云へり花鳥兩説あり何れも可然
身をなけたる手まとはし　○あらそひきほふ也
らんざう　○勝方亂聲には必す大鼓なとうつことな
りいまも賀茂の競馬にも此おもかけのある也
兵部卿宮　○源の詞也
人よりは　○人にはすくれたるとなり
よしといへど　○形のよき人はあれど是程の人はな
きとなり
御をとうとにこそ　○源よりは弟にてましませとも
源はわかく見へ給ふなり
むかしのうちわたり　○花散里の詞なり久敷みまい
らせ給はさりしとなり
そちのみこ　○兵部卿宮の弟なり花散里此ついてに
帥の宮のことを云ひ出給ふなり
おほきみのけしき　○孫王めくとなり
ふと見しり　○花散里はよくみしり給ひたるよと思
給ひて源の返答にもをよばざるなり
人のうへをなむつけ　○かやうの所心をつくへし
右大將なと　○鬚黑なり今螢の宮のことを云出給ふ
も玉葛のことをとやかくやと思給ふ故なり
ちかきよすか　○源の聟にてみんこと
いまはたゝおほかた　○花散里と源とのあはひ也い
もせのかたらひは今はなき由なり
なとてかくはなれ　○は文字兩説なり一義は詞のそ
へ字なり一義は離なり
けふめつらしかりつる　○ことなる御あそひなとは
こなたにてはなきをけふは夏の御方の得分にて此
ことのありしとなり
そのこまも　○菖蒲をは馬は食せさるなり花散里の

はへなきにたとふされと今日のあそひはこなたの町のおりにあひたると慰みたるとなり
にほとりに　○かけをならふる鳥なれはまくらことはにをけるなりわかこまは若ごもなりこもとあやめとに對して影をならふるとは云へりひきわかるべきとは花散里と源氏の御なかとのことを戯の給なり花鳥説聊にくげある也不用之
あいたちなき　○花散里は我愁を云出し源も夫婦のあひたのことはかりの給へりいつれも優ならさる歌となり
のとやかにおはする　○花ちる里なり
ゆかをゆつり　○源にゆつり給へり
なかあめ　○五月雨なり
つきなからぬわかき人　○玉鬘の御方には繪なとかくこともつきなからする人あまた侍るなり
わかありさま　○玉鬘のありさまなり
すみよしの姫君　○花鳥に委し
さしあたり　○其時を思やるま可然となり
ほと〳〵しかりけん　○おそろ〳〵しきなと云詞なり
かゝる物とも　○かやうの物語繪なとなり
さみたれかみ　○髮といへり「郭公をちかへり啼けうなひこかうちたれかみの五月雨の頃
またかゝる世のふることならでは　○かやうのことならては何ことにてなくさみ給ふへき事そとなり
いたつらに心うこき　○古今序繪にかけるおほなをみて徒に心をうこかすかてとしと云り
らうたけなる　○古き物語にかやうのことあまた侍り姫君の心つくこともやといさむる心なりかた心とはさやうなるかたのこゝろつくかしとなり
しすかに又きくたひそ　○二度ともよめはすちなき事と思ひとることもまつうちみるには興あることゝ思ふことのあるなり
さしもあらし　○かやうの物語なとはすちなきことのみの給ふなり
けにいつはりなれたる　○此以下玉鬘の詞くみ侍らん　○源なとは僞をし馴たる人なれは我御心ならひにさしくみて推量し給ふとなり
こちなくも　○皆實事なる物を無骨に申おとしてありけるよと也源の輕慢しての給ふなり

その人のうへとて　○源の詞なり下には紫式部此物語を作れる大意を擧て云り莊子寓言のことし寓言と云は以テ二己之言一借テ二他人之名一以言也と註せり

よきもあしきも　○慰めての給ふなり

よきさまにいふとて　○されは人をほめていはんとてはさま／＼にとりつけて云へるなりされと世間になきことをは一もいはさるなり

人のみかとのさえつくりやう　○さえは才なり一本さえつくりやはかはるとありいつれにても煩なきなり日本と唐土との才學は文章にかきなす所の作やうこそかはれ總別は同し物なりこの時やうとある可然

おなしやまと　○文體古今にかはれることも異朝本朝の作意又そのうちにてあさきふかきこそあるへけれ一向になきにてはあるましきと爰にて繪物語をたすけての給ふなり

佛のいとうるはしき　○此段安くきこえたりされと教にあはせてみるなり諸抄に見たり如來に衆生の心惱を即時に蘇すへきとてまつ花嚴をとき玉へるなり

はうへんといふ事ありて　○是則方等なり最初より大乘を説給ふこと佛の本意なれと衆生の機いたらされはまつ大乘をやはらけて權教を説給へりそのなかに阿含は一向に小乘なり

さとりなきものは　○未衆生の機縁熟せさる間四教の大小乘をならへてとき給ふ也此時に昔のさとりをも今のさとりをもわさる人ある也此時に狐狼野干とはなるとも二乘の見をなすへからさる由をの給ふをきゝて迦葉なきて三千にふかひ善吉惘然として手に一鉢をなくと云り其後畢竟空のことはりをきゝて聊さとりてうるなりはうとう經の中にあるとは此ことなり

いひもてゆけは　○塵々法々一色一香併純一實相にして別の法なきなり

ほだいとぼんなふと　○人の善惡は菩提と煩惱となり悉皆天台の法文を以てかけり紫式部は天台宗の許可までを受て宗旨をきはめたり

さてかゝるふること　○源の自稱なり

しれものゝ物語　○愚癡なるなり

さらすともかくめつらかに　○玉鬘の詞なり

めつらかにやおほえ　○源の詞我をは世にためしなきことゝの給ふことわりなれと又玉葛のことくにつれなき人は奮にまれなるとなり
思ひあまり　○源の歌なり玉かつらを實の子にしての給へるなり
ふるきあとを　○源のことくなる心のあるは古き物語なとにもまことにためしなきとなり
かくして　○草子地なりなにと行末はあるへきことそとなり
むかしのありさま　○紫上の昔のことを思出給なり
まろこそなをためしに　○紫上をは隨分によく養ひたてたると自稱し給ふなり
けにたくひおほからぬ　○草子地なり又は紫上の詞なりこのみあつめ給へりとは草子とものことにや源のみあつめ給ふことなり好又は見集給歟
ひめ君　○源の詞
たいの御かた　○玉鬘のきゝ給はゝ誠の御女にはかやうの心つかひのありけるよと思給へきとなり
うつほのふちはらの君　○花鳥に見たりあまたの人々にもなびかで内にまいりし人なりこれもあまりなるとの給ふなり
すくよかに　○よめる歌もすくよかなり
うつゝの人も　○今現在の人もかくあるなり餘に思ふ所をたてたる人をいへり
よき程にかまへぬや　○此やの字にて讀切るへしたゝよき程にすへきことゝなり中庸をたつるありかたし
よしなからぬをや　○至極養ひたてたるとてたゝおほやうなる許にてなにことにもをくれたるは曲もなきことゝなり
げにさいへと　○よくそたてだる人はさすがなる所のみゆるとなり人をそだつべき樣を紫上に云きかせ給ふなり
ことばのかぎりまばゆく　○花鳥に物語の作りさまとあり如何爰は唯世のありさまを云なり
すべてよからぬ人に　○崔子玉座右銘云無レ使ニレ名過一レ實云々奇特なる語也無分別なる人のほめそこなはるゝことのあるなり
まゝはゝのはらきたなき　○はらぎたなきとは心のあしきを云也まゝ子をにくむ心のあるなりさやう

のかたをかける繪物語などをば心みえじとてえり
のそき給へるなり花鳥の說如何
中將の君　○夕霧なり
こなたには　○紫上の御方なり
みなみおもての　○姬君の御方の南面なり
たいはん所　○紫上の御方なり
おほかたの心もちゐ　○夕霧をほめたるなり
かの人のもろともに　○雲井鴈のことを思ひ出給な
り
あながちになど　○今ちとしひての給はゞ內大臣も
ゆるし給ふべきを夕きりの心には昇進もありての
給ふへきとて斟酌あるなり
たふるゝかたに　○倒なりをれたる心なり
さうじみばかりには　○雲井鴈ばかりには心ふかく
見え給ふなり
せうとの君だち　○柏木などなり
右中將　○かしは木なり
いひよるたより　○みる子などなり
人のうへにては　○夕霧詞なり雲井鴈のこと心にあ
り

むかしのちゝおとゞ　○致仕大臣と源氏との御あは
ひ又いま夕霧とかしは木とのましらひの符合した
るなり
そのおひいてたる　○此內大臣は男子あまたもち給
へるをいへり
おほしゝ事　○立后のこと也
姬君も　○夕霧をひきさけ給ふこと
かのなてしこ　○玉鬘のこと
物の折に　○雨夜のものかたり
ものはかなかりけるをやの　○夕良上なり
きみたち　○柏木なとにさしての給ふなり
なか比なとは　○中比はうち忘れ給ひしなりいま源
の玉鬘をかしつき給へるをきゝてさらにおもひい
て給ふなり
ゆめ見給ひて　○內大臣の夢なり

細流巻八

とこなつ　かゝり火　野わき　みゆき　ふちはかま　まきはしら

以歌爲巻名竪の并也源三十六の夏なり

常夏

いとあつき日

中將の君　○夕霧なり

したしき殿上人　○六條の院の家司なり

にしかは　○桂川なり此川禁野と云如くに禁河なり

ちかき川の　○賀茂川をいへり時の景氣ともなり

おほとのゝきんたち　○柏木などなり

ひみつ　○ひやゝかなる水なり

すいはん　○今の世にもありてひめといへる物なり

さうとき　○ひしめきて喰なりいそかはしき體なり

風はいとよく　○夏の景氣面白し

水のうへいとむとくなる　○源の詞かくまで六條院は涼しき所なるにたへがたきは殊の外なる暑にてあるよしなり殿閣生二微涼一の心あり

いとかゝるころは　○するわざもなきとなり

宮つかへするわかき人々　○人々にうちとけ給へとなり

めつらしきことゝふと　○人々の心なり

いかてきゝしことぞや　○源の詞なり

こと〳〵しく　○辨の少將の詞也

夢かたり　○螢巻の奥にあり春の夢なり

ふれはひ　○觸なり睦觸縁したる心なり

けそんなる　○落胤腹などのあるは人の家損なるとなり

まことなりけり　○さては誠なるよと治定し給へるなり

いとおほかめる　○源の詞なりさしも內大臣は御子ともあまた侍るものをとなり

をくるゝかり　○兄弟多きをいへり

ふけつけきそ　○あまりに事過たるとなり此詞槿巻雪まろはしの所にありいつれも貪たる心なり

いとともしきに　○源の御子のすくなきにとなり

名のりも物うき　○我身をばさしもなく思故やらん名のり出る人もなきとなり

らうかはしく　○內大臣もそのかみ亂たることもありしなり

そこきよくすまぬ水に　○おとり腹ならは別したる事もあるまじきとなりくもりなき月も濁れる水に

は影くもらては叶はさるなり
中將の君　○花鳥夕霧と云々如何是は柏木なり此事
　柏木悉皆とりもちてし出し給事なれば辨少將にさ
　して此事をの給ひかくるなり箋曰花鳥說可然此眉
に柏木は參會なし中將の朝臣と云は柏木なり
くはしくきゝ給へる　○源の此事の子細をくはしく
　しり給へる故に柏木は口をもあき給はさるなり
少將さとう侍從　○こゝにて見えたり皆連枝をあけ
　て云なり
朝臣や　○夕霧をさしての給ふなり雲井鴈にはきら
　ひ給ふことをくちをしと思給故なり
あなしかざし　○內大臣の御子と云ばかりにとなり
ろうじ給ふ　○嘲弄なり
かやうの事　○源と內大臣との御あはひなり
かうきゝ給につけて　○近江君を尋出し給事を聞給
　ふにつけて玉かづらを見せ奉りてはとおほすなり
もてなされなんはや　○はやは詞の字なり
いとものきら〳〵しく　○內大臣の事なり
よきあしき　○人の善惡のけぢめのある人なり
おほえぬさまにて　○一向に知せてさし出したきさ
　なり
いときひしく　○玉かつらを內のおとゞに見せ奉ら
　ば一かどあるやうにもてなしてかく養育ありしは
　隨分の高恩そと思はせ奉らんと源氏の心の中なり
心やすくうちやとけ　○源の詞也
にしのたいに　○玉かづらの御方
たとゝひめ君を　○おとゞと讀きりて心得へしとい
　では外へ出給へとなり
ゑのひて　○うちしのひて源のゝ給なり
少將侍從　○是より源の詞なり
中將　○夕霧の實法をいへり
なほ〳〵しき　○たゞうちの人さへ窓の中なる程は
　床しく思へる常の事なり
くた〳〵しき　○さほとなき事をも人のもてあつか
　ふ習ひなるにこれはことはりとなり
ねかひ思ひし　○人々の心の程をも見るへき本意に
　叶へるなり
みなたちよりて　○殿上人なとなり床夏の事なり玉
　かつらの事を含めり
いうそく　○源の詞なり玉かつらはよき親類のあま

たあるとなり
右中將　○柏木なり
いかにそやをとつれ　○岩もる水の歌の後は文はかよはさるかとなり
はしたなくも　○さしはなちたるさまにはし給ふまじきことゝなり
中將の君は　○夕霧なり別に傑出するなり草子地なり
中將をいとひ給ふこそ　○源の詞也雲井鴈をゆるされざることなり
まじりものなく　○后なとに皆立べきとなりこと王孫などはいやしきなるへし
きゝさばとい　○玉かづらの詞雲井鴈のことなり催馬樂の詞にてかけり
いてそのみさかな　○源の詞同催馬樂の詞
たゞおさなきとち　○三條宮にましくける時のことなり
まだ下らうなり　○源に任せ給はゞあしくは有まじき物をとなり
うめき物　○齎陶し給ふなり

さはかゝる　○玉かつらの心なりさては源と内大臣との御中かやうの隔てもありけるよとなり
かやうの事は　○和琴をいへり玉かづらはかやうの方はすき給はざると思ひあなつり給ひづればよくしらべ給ふとなり
いとたくふかくはあらて　○月を見る故はしちかきよしなり
ことくしきしらへ　○しどけなしとなり
このものよ　○和琴なり
おほくのあそひもの　○色々の遊ひ物の音柏子をとゝのふる物なり
やまとごとゝ　○皆或は高麗唐しの樂器多也
ことくにの　○女などの爲にしいてたる物かとなり
ものなとにかきあはせて　○昔は和琴をも樂に合せしなり近代大かた絶たる歟
ふかき心とて　○和琴は琴などの如くにさのみ深き事はなき物となり
ほのく　○玉かづらはちと心得給ふなり
さりぬへき御あそひ　○玉かつらの心なり内大臣のひき給ふを聞こともあらんかとなり

あやしき山がつ　○誰もひく人はあまた侍れどすぐれたるは有かたきとなり

さかしあつま　○源の詞

名もたちくたり　○あやしき山がつなどゝ云にかゝれり田舎びたるやうなるなり

ふんのつかさ　○花鳥に見えたり

これをものゝおやと　○和琴を物のおやといへる妙なり

こゝになども　○このわたりにてさりぬべき御あそびのをりなどにもありつる返答なれはかく宣ふ也

ておします　○こゝなとにて手を惜まずひき給へるは有かたきとなり

ことつひ　○ことつひは源のかきならし給ふ體をいへり花鳥に見えたり

きびう　○きびうば心得ざる事なりいかさまうつくしきかほつきなり

これにもまされる　○只今源のひき給へるがたぐひなきに是よりまされる事はいかゝあるへきそと思ふ給也

ぬきかはの　○やはらたまてかけるはうたふ時にたもじまで上のふしにつきて聞ゆるをいへり花鳥に見えたり

おやさくるつま　○二義あり源の内大臣をさけ玉ふをいへり又の義は源のおやのやうにも玉かづらのし給はざるを云なり

さえは人になんはぢぬ　○一切の藝能人にはぢては成がたきよしなり尤人のをしへなり

おもなくて　○はぢ給はて誰にも合奏し給へとなり

さるゐなかのくまにて　○玉かづらの心なり

ふるおほきみ　○ふる宮なとの女のはてなり

しはしもひき給はなん　○玉かづらの詞源に今少あそはし給へとなり

みゝがたからぬ　○心にしめて聞給ふ故にとなり源の我心をかけ給ふすぢのことを聞もいれ給はざるをいへり

なてしこを　○まへにありし事なり

いかておとゞにも　○玉かつらの事をふくめり

いとつねなき　○世は定めなき物なれはなり

いにしへも　○雨夜の物語の事

いとあはれなり　○夕顔上をおぼし出たり

なでしこの 〇玉かづらのなつかしく思給ふよしを內大臣へ申給はゞ夕顔の上の行衛を尋出給はゞ還りて煩はしかるへしなり
まゆごもり 〇いぶせきとなり
山かつの 〇玉鬘をも母上をも卑下したるなり
こざらましかば 〇引歌未勘心は只今こゝへ御出なくはかゝる一ことをも聞給まじきとなり
たゞこの御ことのみ 〇さま〲に思案し給なり
はるのうへ 〇紫上なり
さてそのをとり 〇皆々のなみにては出もあるまじきなり
さたもてはなれ 〇兵部卿宮大將などのふとゝりて行給てはとなり
きは又さてゝながら 〇宮大將をむことりて迎へてをくへき歟となり關守つよくとも物なといひかはすたよりにはよかるへき歟となり
思ひ入なはしけくとも 〇つくば山は山しげ山しげゝれと思入にはさはらさりけり
いとけしからぬ 〇草子地なり
いまの御むすめ 〇近江君なり
ほきたる 〇ほうけたるなと云詞なり
少將のことのついでに 〇源の問給ふ由を父おとゞへ語給なり
さかしかしこにこそ 〇是より內大臣の詞
少將かのにしのたいに 〇玉かづらをほめ給ふなり
おぼろげには 〇おほかたにはなくすぐれたるとおほしきとなり
いてそれはかのおとゞ 〇內大臣の詞源の御むすめと聞より名も聞ゆるなるべし
おもだゝしき 〇紫上の御腹なり
おほかたの子すくなく 〇源には生得御子のすくなきとなり
いまひめ君は 〇玉かづらなり實子にてはあるまじきとなり
しえたまはん
みこゝそはまつは
猶ひめ君の御こと 〇雲井鴈なり
いふかしがらせましものをと 〇床しがらせんとなり
くらゐさはかりこ 〇夕霧公卿にもなり給てゆるし

給へきなり
れとゝもねんころに　○源の御方よりの事なり
ゆくりもなく　○雲井雁の御方へふとわたり給ふな
り
あふきをならし　○内大臣なり
うたゝねはいさめ　○はしちかきうたゝねなどはい
さむるとなり
女は身をつねに心つかひして　○をしへなり心をつ
くへし
うつゝの人にも　○現在の人にもさし向はざるをい
へりちと人ぢかなるよきとなり
きさきかねのひめ君　○明石の姫君なり
かと〳〵しき　○何事もおぼめかしき事なきなり
この君の　○明石姫君なり
おもふやうに　○雲井雁にうちむかひての給ふなり
思ひしすぢはたかふ　○夕霧のこと故春宮への事な
とは思ひたへたるなり
こゝろみごとにねんごろ　○夕霧の事なり念比に人
も心には入れずはなびき給ひそとなり
むかしはなにごとも　○昔は何の分別も無りき今な

ん過し方も取かへしはづかしきとなり
かくの給か　○内大臣のかくの給へるなり
れとゝこのきたのたいのいま姫君　○近江君なり是
より近江君の事をいへり
女御のきみに　○弘徽殿の女御なり
なとかいと　○女御の御返答なり
中將などの　○柏木などのかねては然るへき人なる
べきと思ひ給ひしにかはりたるといふばかりなる
べしさりともと心にくゝ女御は思給ふなり
かたへはかゝやかしき　○昔とり〳〵にの給ふ故に
かゝやかしくて何事もわろき歟となり花鳥說いか
ゝ
この御ありさま　○女御なり
中將のさはいへど　○内大臣女御へ申さるゝ詞なり
柏木は第一の嫡子なれど遠慮なくてむかへとりた
るなりさてといへど心わかきとはいへり中將など
のになく思ひ侍りけんとある詞をうけたり
やかてこの御かたより　○此ついで近江君の御方に
立より給ふなり
五せちの君　○近江君のつかひ給ふ人なり

てをいとせちにをしもみて　○此段悉皆物語の狂言なり
せうさい〳〵　○ちいさきめをこふ也あいてのさいを取てもみたるなり
この人も　○五せちの君なり
御返しや〳〵と　○大目をこふにやあいての五節かさまなり
とうをひねりて
なかに思ひは　○引歌よく叶へり　「さゝれ石のなかに思ひは有ながら打出ることのかたくもあるかな
ひちゝか　○泥土ちかなるとなり下す〳〵しきなり
つみかろげなる　○河海兩説あり何も可然但猶第一の義よろしきに哉
こと人と　○我身にも似たる所有ると内大臣の思給ふなり
かくてものし給ふは　○まへは立のぞき給ふなり爰よりは内大臣うちへ入ての給ふなり
ことしけくのみありて、○關白なれば隙もなきとなり
かくてさふらふは　○近江の君の詞也
てうたぬ　○河海說いかゝ双六の心ありて手をうち出さぬ心のするなり
けに身にちかう　○内大臣の詞也
なへのつかうまつり人　○たゝうちの人にてあらはこそとなり
ましてと　○ましてとはましてわかむすめなどゝいはんためなりいひさし給ふをも近江君はきゝとがめ給はざるなり
なにかそは　○近江君の詞
おほみおほつほ　○しと筒やうのことなりおほみとは大口をおほみおほくちと云ひ御帶をおほみおびと云が如し
うちわらひ　○内大臣なり
したの本上　○近江君なり
めうほうし　○近江國にあり
あえもの　○あやかりたるなり舌ごき物のうぶ屋に來とる故なり
なげき侍たうひし　○侍給ひしなり

いかでこのしたござさ　○内大臣感し給ふなり
おしことごもり　○河海に委し
女御さとに　○内大臣の詞也
さる心して　○女御の里にまします時参給ふべきか
となり
いとうれしき　○近江君の詞也
いふかひなしと　○内大臣の心也
いとしかおりたちて　○内大臣の詞水をくみとある
詞を請て薪ひろか給はすともといへり
かのあへものに　○舌疾をなほし給へとなり
をこことに　○をこの物などの如し
おぼろけの人　○此内大臣は大かたの人だにはづか
しく思て見えにくき事にするを此近江君は何とも
思ひ給はさるなり
わたり給ぬ　○かくいひすてゝ出給へるなり
よき四位五位　○内大臣の供奉なり
あまりこと〳〵しく　○これは近江君の御ためには
あまりに過分なると云なり
よろしきおや　○是程までこと〳〵しくなくとも能
かしづくおやをもち給は似合ぬべきとなりあまり

にかけあはざると云なり
れいの君の　○近江君の詞
ことなるゆゑなき　○まつ公界の事をいへり心をつ
けて見るへし
うちきくみゝことに　○ことには異なり
おとゝの君天下におはすとも　○内大臣とそあかす
べし給ふとものこりの連枝達にしられすしてはと
なり
あしがきの　○是より文の詞引歌抄に見たり皆略之
むさしのといへは　○御ゆかりなど申はかたしけな
けれとゝなり
くさわかみ　○もと末聞へさる歌なり只第四の句を
詮とするなり
おほかは水の　○おほかはのへを用かへたるなり
うちゑみて　○随分と思給なり
ひすましわらは　○下女なり
さうのもしは　○女御の御詞なり
もとするゑ　○歌の事なり
ゆへ〳〵し　○きと御返事を申されよとなり
おかしき事の　○ふる事どもの多きなり中納言の君

の申詞なり
ちかきしるし　○文の詞なりあしがきのとあるをうけたり近きしるしもなく對面なきはうらめしきとなり
ひたちなる　○四ヶ國をよめるなり立出よと云を詮とせり無心所着の歌なり
あなうたて　○女御の御詞なりまことに女御のかき給へると思給ふてはうたてありとおぼすなり
それはきかん人　○中納言の君の詞也きく人分別すへきとなり
まつとの給へるを　○此歌は立出よといへる詮なるを只まつとはかり心得たるなり
御たいめん　○草子地なり悉皆狂言にかけり

篝火　巻名以詞幷歌號之竪並也源三十六歳の秋の始の事あり
このころ世の人のことぐさに　○近江君の事を聞て源の〻給ふなりいま姫君とは近江君なり惡事千里を行心なり
ともあれかくもあれ　○よくもあれあしくもあれ女子ならばうちにこそをかるべきを女御殿にあづけ給ふはしかるへからざると源は思給となり
いときは〳〵しく　○内大臣の心つかひなり
ふかき心をも　○よく兼ても尋ねずしてふと悦はせ給ふ事遠慮なきと源のもどき思給なり
かゝるにつけても　○玉かづらの心なり
右近もいとよく　○源の御心の有がたさを云ひしらするなり
せこがころもゝ　○河海の引歌あれどこゝにては只せこが衣とはうらさびしきと云ん爲の枕詞に見るべし古今に「我せこが衣のすそを吹かへしうらめつらしき秋の初風」の心成へし
御こと　○和琴なり
かゝるたくひ　○玉かづらの心なり

わたり給なんとて ○かへり給はんとてなり
うちまつ ○池水なとのうへに篝火の臺を置て打入
打入する松なり
たえす ○源の下知し給ふなり
夏の月なき ○秋に成ぬと書て夏の月なきと云る面
白し夏のうちも涼しけれは秋といひ秋の中も殘暑
なれは夏と思へる心のあれはなり
かゝり火に ○我思ひは此篝火にもをとらさるを猶
さりに見給ふかとなり
いつまてとかや ○引歌「夏なれは宿にふすふる蚊
遣火のいつまて我身下もえにせん」とあるを是は
下にもえぬもくるしきとなり
ゆくへなき ○篝火の焼させはやかて消る烟の如く
なる思ひならはやかて空にきえぬへきとなり
人のあやしと ○玉かつらの心なり
くはや ○源詞さらはなと云心の詞なり
頭中將 ○柏木なり
わさともふきなる ○吹なすなりほめたるなり
こなたになん ○源のせうそこし給詞なり
三人 ○夕霧 頭中將 辨少將成べし

風のをと ○源の詞也
しのばれて
すゝむしにまかひ ○花の說に及はさるなり聲よき
虫なれは喩たるなり
中將にゆつり ○柏木なり
みすのうちに ○源の詞玉かつらのことなり
さかつきなと ○盃なとのついてに實父のことなと
をかいひ出給ふ事のありてはとなり
あはれときゝ給 ○あはれの字はねかはしき心のあ
るなり又つねのあはれにてもあるへし
この中將は ○柏木なり花鳥に司馬相如か琴心にて
挑む事を引けり面白し

野分　巻名以ㇾ詞號ㇾ之源三十六歳の八月の事也竪並なり

中宮のおまへに　○秋好なり

くろきあかき　○皮なからなる木を黒木とは云なり皮もなきは赤木なり

つくりわたせる　○秋の野をうつしてつくりなずなり

凉しくれもしろく　○春のほとはあたゝかなる心のあるなり

なたゝる　○紫上の御方なり花におれてなといひしかともとなり

世のありさまに○　時おりふしに隨ふ世の習ひなり

春秋のあらそひに　○若菜巻にもあり萬葉第一近江大津宮御宇天皇詔ニ内大臣藤原朝臣ニ大職官競ニ憐春山萬花之艶秋山千葉之彩ヲ時額田王以歌判ㇾ之歌「冬木成春去くれは不ㇾ喧鳥も來鳴ぬ不ㇾ開花もなけれと山をしけみ入てもとらす草深みとりても見へす秋山の木の葉を見ては黄葉をは取てそしのふ青きをば置てぞなけくそこし恨し秋山われは

御覽しつきて　○中宮此花故に里すみ久しくし給ふなり

御あそひなとも　○先坊の御忌月なれは遊なと斟酌あるなり

野わきれいのとし　○八月は必大風の吹なりこゝに野分吹たる由をかける作者の奇特なり乙女に紅葉のことあり胡蝶に其御かへしあるを又其かへしの造意あるをさやうにては盡期もなき事なるへきを此野分にて秋の花皆色もなくなれる心妙なり總して天道この心ありたゝうちには見る可らさるなり

さしもおもひしまぬ　○中宮の御心には一段と身に入て思給へきとなり

おほふはかりの　○大空に覆ふはかりの袖もかな春さく花を風にまかさじ

秋の空にしも　○妙なる詞なり春の花をいへるをかく取なせる尤面白し

もとあらのこはき　○引歌風を待こと君をこそまてと風を待といへとも餘りに事の外に吹をいへりはけしかれとは祈らぬ物をといへるか如し

中將の君　○夕霧なり

こさうしのかみ　〇かみは上なり紙にはあらす上なり
かはさくら　〇薄紅梅の花成へし古今にいへるかには櫻のことなり
うちわらひ　〇紫上なり
いたりふかき　〇見る人の只にはあるましきと源の至り深き御心にておほろけにも見せ給はさるよと夕霧の思給なり
いとうたて　〇源の詞なり
ものきこえて　〇源紫上へ物の給へるなり
いままいれる　〇只今參り給へる樣にして夕霧のこはつくり給へるなり
風こそけに　〇河海の説無益歟只風のちからを云岩ほを吹あくる事までのなきことを云てあまりなるまて吹を云り紫上の面影をもおほろけにも見る事もなきを只今見奉るは誠に風のいはほを吹あけたるか如しとなり
うしとらの　〇南はのとかなるなり紫上のさきよりのとかにて居給へるこゝにて見へたりこなたはのとかなるなり

中將は　〇源の詞なり
三條宮に　〇夕霧の詞なり祖母の御方に侍ひしとなり
わかき子のやうに　〇物おちをし給へるなり
けにはや　〇源の詞なり
かうさはかしけに　〇三條宮への源の御言傳なり
三條宮と六條院と　〇夕霧のつとめたる事なり九條右丞相の遺誡にも凡非レ有二病患一日々必可レ謁二於親一若有二故障一者早以二消息一可レ問二夜來之寧否一云々
おとゝのかはらさへ　〇瓦なとも落るなり禮記に曰風飄碧瓦雨摧垣也
かくてものし給へる　〇かくわたり給へるはうれしけれと道すからも此あらき風にはあやうしとなり
そこら所せかり　〇三條宮の事なり
つねなき世なり　〇權門なりし人にてありしも今は人の參ることもまれなるとなり
なか〳〵すこしうとく　〇へたてあるとなり
こひしと思ふ人　〇雲井雁なり
ありつる御おもかけ　〇紫上の事なり

さしかた行すゑ　○たくひなき紫上の御ありさまとなり
おとゞの御心はへを　○花散里をもかすまへてをき給へるを殊勝なる御心と父おとゞを思給なり
人からのいとまめやかなれは　○夕霧は實法の人なる故ににけなき事有ましき事と思給なり
さやうならん　○かくの如き人をこそとおほすなり
風すこししめり　○景氣面白し
なに事そや　○紫上の御事なり
やまの木とも丶　○庭の山なり
うれへかほ　○草とものあるにもあらぬさまなり
中將のこはつくる　○源の詞なり
おとゞうちわらひ　○紫上と物の給ふけしきなり
いにしへたに　○源のたはふれの給ふなり
ゆるひなき　○ひまなき御あはひとなり
たちのきて　○夕霧の退き給ふなり
いかにそ　○源の詞也
しかはかなき　○夕霧の返答也
いまいくはくも　○源の詞也
内のおとゞ　○宮も常にの給へるなり
人からあやしう　○内大臣の事を源のゝ給なり
おやなとの御けう　○こまかにしも有ましうといふにかゝれりおもてむきはかりの孝あるとなり
さるは心のくま　○心にいさゝか深き處ある人なり
うるさなから　○うるはしきなり
なんなきことは　○難のなき人はまれなるとなり大方は無雙なる人なれとゝなり
この君して　○夕霧を御使にまいらせ給なり
よるの風　○源の詞
たこりあひ　○風の心のおこりあひたるなり面白き詞なり
ためらひ　○養生してとなり
あさほらけ　○夕霧のかたちなり
みすまきあけて　○中宮の御方なり
うちとけたるは　○立よりてはいかなるへき人とは知ねともよそめは床しき人たちとなり
あはれけなる　○風に吹ちらされたるなり
ふきくるをひかせ　○此事心得さる事なり
ふれはひ　○ふるまひ給ふとなり總しては袖ふる丶なとなり中宮の御ふるまひも立そひたる歟となり

たき物の匂ひなと成へし
人々けさやかに　○夕霧の御いであるにはちたるなり
御まいりのほと　○入内の初なとは夕霧は童形にて女中にも居給ふ故はち給はさるなり
御せうそこ　○源の御ことつてなり
宰相のきみ内侍　○二人なり
わたくし事も　○物語なとし給なり
これはたさいへと　○紫上はたくひもあるましく思ひしに是も又すくれて上臈しきなり
かくすみたる　○花説いかゝ是はたゝ上臈しきを云なるへし
あらき風をも　○御返事なり源よりの御をとつれを待しとなり
いまなん　○只今の御音信になり
あやしくあへるに　○源の詞也
御袖くち　○紫上なるへしとをしあてに思となり
中將のあさけ　○源紫上へ申給なり
わか御かほは　○草子地の判なり
宮にみえたてまつるは　○源の詞

おもうちあかみて　○紫上なり
猶あやしと　○源の心なり
おもふ事のすち　○雲井雁紫上の事也
こうちきひきおとして　○明石上禮あるさまなり
いといたし　○ほめたる也
たほかたに　○源の音信すてゝかへり給を云なり野分をはいはてそのありさま殊勝なり
にしのたいに　○玉かつらなり
こと〳〵しくさきなおひそと　○同家の中なれはなり
かう心うけれは　○玉かつらの詞なり
風につきてあくかれ　○源の詞なり風にもあくかれ給ふへきことはあまりにかろ〳〵しかるへきとなり
さりともとまるかた　○心のとまることあるへきとなり
けにあやしくも　○あしくいひたると玉かつらの思給なり
わらゝかなる　○にこやかなるなり
中將　○夕霧なり

おやときこえ　○夕霧の不審し給なり

ことくなれ〳〵しき　○平生かくなれ〳〵しきかとなり

もとよりみなれ　○幼少の時よりひきはなれてそだち給故かと思給ふなり

きのふみし　○紫上なり

いかゝあらんまめたちて　○玉かつらの方より源の出給なり何事とはしらすけしきまめたちて出給ふよと夕霧の思給なり

した露に　○下露になひかはあらき風にはあたるましきとなり我にしのひてなひき給はゝよかるへきとの下心なり

なよ竹を見給へかし　○なひくによりてをれぬ心なり

ひんかしの御かたへ　○花散里なり

ほそびつ　○ぬりをけなとの類歟○枕草子上端にもあり

中將のしたかさね　○源の尋給なり

御前のつほせんさい　○禁中の御あらましありけれと停止せられけるとなり

御なをし花文れう　○夏の直衣なり顯文紗なと云かことし

このころつみいたしたる　○月草の事なり鴨頭草也

中將にこそ　○源の詞也

またあなたに　○紫上の御かたにましますとなり

ものさはかしけに　○夕霧の詞なり

こと〳〵しからぬ　○夕霧の詞也

いなこれは　○私の硯をとの給なり

きたのおとゝの　○花鳥義いかゝ姫君はきさきかねなれは執し給へるなりされと明石上のかたを思へはさのみさやうにいふへきことにはあらすとの夕霧心の中歟

されとあやしくさたまりて　○夕霧の歌の口つきなり儒業を學てその才學のみにてはな〳〵と優なる方のかけたるなり草子地なり

かせさはき　○雲井雁の歌成べし此歌にて見えたり

かたのゝ少將は　○侍ふ人々の云なり花の色に紙の色をもとゝのへたるなり

さはかりのいろも　○夕霧卑下しての詞也

いつこのゝへの　○いつくのいかなる野邊の花につ

くへきことそと戯れ給なり花鳥いかゞ是は雲井雁へなるへし
又もかい給て ○これは別のかたなるへし
むまのすけ ○夕霧の家人なり
わたらせ給とて ○姫君こなたへわたり給なり
見つる花のかほとも ○紫上のかば櫻玉かつらの山吹等なり
さもありぬへき ○此人々は朝夕にへたてなく見奉るへき人々なるを源のあまりにへたてはてさせ給ふとなり
さは宮の ○三條宮なり
ひめ君を ○雲井雁を久しく見さる由を宮のゝ給ふなり
いまこのころの ○内大臣の詞也
心つから ○夕霧の事をふくめりきゝしれにの給ふなり
心うくて ○宮の御心なり
ふてうなる ○内大臣の詞近江君の事なり
むすめといふ ○おとゝの御むすめと云てとなり
それなん ○内大臣の詞也

きこえ給とや ○式部我書たる所をかくしてしるせり巻々に此心見へたるにや

御幸　巻名以レ歌號レ之大原野の行幸なり　源三十六歳の十二月なり三十七歳の二月までの事なり竪の並なり初音巻も三十六歳なり

かくおほしいたらぬ　○玉かつらを源のおほしける心なりいかなる然るへき縁もがなとなり

このおとなしの瀧　○源したに心かけ給ふことなりいかにしていかによからんをの山のうへよりおつる音なしの瀧此歌可叶歟

かのたとゝ　○内大臣なり

けさやかなる　○内大臣の玉かつらのことをしり給て又源の密通をあらはしてけさやかに内大臣の御方へのきこえあらは我御心なからおこかましかるへしとなり

朱雀院より　○西の朱雀なり行幸の道つがひは上卿陣の座につきて仰するなり野行幸の例花鳥に見えたり十二月の例は仁和の例を引用此巻は延喜六年の例を用と見えたり榊巻に齋宮母そひて下り給こと又親王供奉のことは皆仁和の例なり太政大臣供奉せさること延長の例なり

たけたち　○人からせいころよき人達なり

あを色のうへのきぬ　○一日の晴にはあを色を必着る也今の六位藏人極臈の着する袍是なり主上は必す如此時はあか色を着御し給ふなり

みこたち　○鷹つかふ人はみな衣裳を野にてあらたむるなり兩抄にみえたり

そゑのたかかひ　○諸衛なり六府を云みなすりかりきぬなり左右にわかちてあか色あを色あるなり

うちはしのもと　○行幸の道の橋なりはしわたしの官人とて檢非違使の故實あること也

にしのたい　○玉かつらなり

みかとのあか色　○御輿の内より外には心を求めさるなり立ならふへきこともなきとなり

わかちゝたとゝ　○内大臣なり此父大臣も帝より外に目うつるへきものなしとなり

まして　○其外のわか殿上人はましてならふへきものなしとなり

かたちありや　○平生はその人かの人と形よき名ある人々も皆いできえたりとなり

兵部卿宮　○螢なり

右大將　○鬚黒なり

おもりかに　○そゝけさる人となり
やなくひ　○大納言の大將は行幸の日は弓箭を帯する也大臣の大將は行幸の日もやなぐひはおはずして隨身にもたしむるなり
いかてかはつくろひ　○大將は年ふくるまてけさうするなり此大將は鬚かちなるゆへにけさうなと似合ましきとなりかくとりわきいへるは唯今玉葛に心をかけ給ふことの切なる故なり
おとゝの君　○大臣は源なり玉鬘を内侍のかみにまいらせ給ふへきのことなり
なれ／＼しきすち　○玉かつらの心なり宮仕のことはくるしく思へと御あたり近くつよふまつらはやとは思よれるとなり
御そうぞくともなをし　○なをし兩義あり一説直衣と云々一説なをすの義なり改の義可然となり
六條院より　○源氏より一獻を申さるゝなり
けうつかうまつらせ　○草子地なり源の障ありてつかうまつらさるよしを申さるゝなり
くら人のさゑもん　○此野より源へまいらせ給ふなり

たほせ事には　○女房の身なれはかゝさるとなり
ゆきふかき　○ふるき跡とは延喜野の行幸有りしことなり
太政大臣　○先蹤もあれはまいり玉へかしとなり
此歌を訓釋せるなり
をしほ山　○大原野行幸今日始たるによりてこれ則万代のはしめたるへしと稱美申さるゝとなり
そのころほひ　○又作者の書なりさやうのをりのことまねふにわつらはしくなんと云る語にかゝれり
きのふうへは　○源の文の詞也
かのことはおほしなひき　○内侍のかみにまいり玉ふへきことなり
あひなの　○あは／＼しきことゝなり
よくもおしはからせ　○玉鬘の心たり
うちきらし　○くもる心也きりわたりしらみたる也
みゆき　○雪を行幸にそへたりかやうに歌にてこたへ給へる面白し
おほつかなき　○たしかにもみ奉らさる由なり
しか／＼の事　○内侍のかみのあらましのことを紫上へ源の此つゐてにかたり給ふなり

こゝなからのおほえには　○中宮をも源の御子としてまいらせ給へり今又此内侍のかみまいり給て玉鬘に寵をうはゝれ給ては中宮の御心びんなしと也
おのおとゝに　○實父の内の大臣の御子の事をあらはしてまいり給ひても又弘徽殿のおほすところいかゝとなり
わか人の　○主上へは誰も心をとゝめ給ふへきとなり
あなうたて　○紫上の詞也
いてそこにしも　○源の詞そことは紫上をいへり
又御かへり　○前は源より文許にて歌なかりしを玉かつら歌にて返事をし給へりさて又返歌のあるなり
あかねさす　○天子を日にたとふるなり目をきらすはきりふたかる心なり
なをおほしたて　○宮仕のことを思立給へとなり
よたけく　○私勘此巻よたけくとかける詞三所にありいつれも聊心のかはりある歟爰に書るはいかめしくこと〳〵しきを云歟又萬うゐ〳〵しく萬よたけく是はまごほなる心歟よたけき御ふるまひとはこれは待かねたる心歟師説よたけくとは長閑なる心と云々
女はきこえたかく　○人の女なといひて誰ともなくてをしかくしておけるなりさて氏神なとをもあらはさてあるなり
このもしなほしよる　○内侍のかみなとになり給はゝ春日大明神の心もいかゝとなり
わさとかましきのちの名　○實父にしらせ奉らては源の私あるやうにや後のきこえもあらんすらんとなり
あらたむることの　○たゝ人なとこそとりおやなとすることのあれとなり元服の加冠の如し
御こしゆひ　○男女兩樣なり内大臣へ申さるゝなり
大宮こその冬つかた　○内大臣斟酌あるなり
いかにせまし　○源のこゝろ也
御ふくあるへきを　○玉かつらの祖母なれはなり
三條宮に　○源三條宮にまいり給ふなり
いまはまして　○源の御ありきたやすからさるなり
御心ちのなやましさ　○面白き書樣なり
けしうはおはし　○源の詞さしては煩給はしと思ひ

侍るとなり
なにかし　○夕霧なり
なれ〳〵しき　○おろかなるなりほれ〳〵しきなり
としのつもり　○大宮の詞老病の事なればと也
いてたちいそき　○往生をいそくとなり妙なり
さる事ともなれは　○源の心なりことはり有こと〻なり
うちおと〻は　○源の詞也日々にまいり給ふかと也
おほやけこと　○大宮の詞殊勝なり
中將のうらめしけに　○雲井鴈の事也
たてたるところ　○內大臣の天然の性をの給へり
大宮の御ころにはこの聞えしらせんと源のゝ給ふは此雲井鴈のことゝ推量したまひかくの給ふなり
いふかひなきに　○源の詞初は夕霧もおさなかりし時分のことなれは口入もすへきと思しをくつろくもなかりしゆへに初申へく思しも悔思へるなり更に申へきことにあらすとなり
よろつのことに　○たちにし名と前に有をうけてその名をもあらふにあらはれざることはあらしとなり
かくくちおしき　○內大臣をそしりたる詞なり少々のことをは聞すくさてはさのみ何事も底よりきよきことはありかたきとなり
するになれは　○人のおちふるることを云り
さるはかの　○內大臣のしり給ふへき人を尋いてたるとなり
そのおりは　○たつね出たるおりは誰人の子ともしらさりしとなり
さる物の　○御子のすくなき許なり
むつひもみ侍らす　○むかへはさりなからむつひさりしなり
かのところの　○內侍所なり
こらうのすけ　○二人あるすけの轉任あるへき歟又籠望のかた〴〵もあるさなり
いへたかく　○可ㇾ然人を撰ふへきとなり又云私の家に居なから奉公の例もあるとなり
家のいとなみ　○私の家のかへりみせさる人となり説々あれと此義可ㇾ然なり
したゝかに　○すけ二人は年月の勞はあれと具(?)可ㇾ

然人がらを撰はるへきとのさためなり
にけなき事とも　〇此仰事は尤なるなり
宮つかへはさるへき　〇總して宮仕に出たつことは
しかるへき寵をもえへきの心がまへもあるへしさ
れば内侍所の政をしたゝめんの心あれは人のむす
めなどまいらせんは本意なきことなり女御更衣こ
そ望をもかくべきことなれと又此ことをきらひは
つへきことにてはなきなり
よはひの程なと　〇内大臣の御子にて可然なり源の
御子にては聊ちかひたるとなり
御なやみにことつけて　〇大宮の御なやみなり御腰
結のことを故障ありしことなり
よろしう　〇大宮の御病のよろしきなり
宮いかに〳〵　〇宮の御詞なり不審し給ふなり
かしこには　〇内大臣なり
かゝるなのり　〇近江君もとめ出し給ふことなり
このとし比　〇大宮の詞なり義あまた侍れとたゝ源
の憐愍の心ふかきよしを聞をよひて實父の方をさ
しをきて御子になり給へるかと當座のとりあはせ
に大宮のゝ給ふなり

なりぬるにや　〇源の御子のぶんにて居給へるにや
となり
さるやう侍る　〇源のことは
六條のおとゝ　〇大宮のふみの詞
なに事にか　〇内大臣の心なり
つれなくて　〇夕霧のおりたちても云より給はさる
をいへり
又なとかさしも　〇いまたゝめらび給ふなりこれ内
大臣の御心くせなり
ふとさもあひて　〇なれあひたるなり
しうとく　〇宿植徳本の心なりさきの世に植たる徳
に今の光華あるとなり
あゆまひ　〇歩さまなり
えひそめの御さしぬき　〇直衣布袴といへるいてた
ちなり
かうしたゝかにひきつくろひ　〇此段兩義有なすら
へても見へ給はさりけりと云までを源の容儀に見
る義あり又義はひかりこそまさり給へと云まて源
のことなり其末は内大臣なりきら〳〵しき所は内
大臣はまさり給ふへきとなり二義共用レ之

とう大納言春宮大夫　○内大臣の弟なり
さいはひ人　○人々の云なり大宮の幸人なるとなり
さふらはては　○内大臣の源へ申給てとなり
御かうしや　○考事なり勘當なり
かんたう　○源の詞なり
この事にや　○雲井雁のことにやと思給ふなり
むかしより　○源の詞
ことかきりありて　○萬機の政をし給へるいとまなきなり
いにしへは　○内大臣の詞也
たい〳〵しき　○あまりに緩怠なるまてとなり
はねをならへたる　○須磨にもつはさならふると歌にもあり卑下しての給ふなり
思給へしらぬ　○源の御恩を忘るゝことはなきとなり關白なとゆつり給へることなり
そのついて　○玉鬘のことを云出給ふなり
おとゝいと哀に　○内大臣なり
そのかみより　○内大臣の詞なり
もらしきこしめさせし　○もと語り申しとなり
はか〳〵しからぬ　○近江の君尋出給ひたる事なり

あはれに思ふ給へ　○玉葛のことを思出給なり
ひめ君　○葵上のたはせましかはとなり
中將の御ことをは　○雲井雁の事なり
かのおとゝ　○内大臣もよきついてなる物をとなり
こよひも御ともに　○内大臣の詞
さらはこの御なやみ　○源の詞御裳着のことなり
又いかなる御ゆつり　○花鳥説いかゝ天下の執政をも源の讓り給ひしに又何事をかと世間に皆思也
おとゝうちつけに　○玉鬘をいつしかゆかしくおもひ給ふなり
やむことなきかた〳〵　○紫上なとのつらにし給へは人めを如何と思すなり又さりとて聊爾にはし給はしとてあらはし給ふなり
それをきすと　○源のきよきことはあるまじと思へとそれもとがなきことゝなり
ことさらに　○わさともこそ源の御あたりへはまいらせをくへけれとなり
みやつかへさまにも　○内侍のかみにまいり給はゝ女御の御爲いかゝとなり
よろしくおはしませは　○大宮の御病を云り

れいのわたり ○源の玉鬘の御方へなり
あへきことゝも ○内大臣に逢奉らせ給ふへきことゞなと懇にをしへ給ふなり
あはれなる御心は ○玉かつらの心なり實父よりもねんころなるとなり
おほすものから ○此からの字妙なりかく懇なることは類なけれと今實父にしられ奉るは一段とうれしきとなり
むへなりけりと ○野分の日のあやしかりしに思ひあはせ給ふなり
かのつれなき ○雲井雁なり雲井雁よりはまさりさまなるものをとなり
されとあるましく ○夕霧の實法なるなり
三條宮より ○玉かつらのふみあるなり
きこえんにも ○文の詞也いま／＼しきとは其身尼にてましますゆへなり
なかきためし ○命なかきためしなり
あはれにうけ給はり ○我御孫なるのよしなり
御けしきにしたかひて ○かくは申せとも御けしきにしたがふべしとなり

ふたかたに ○玉かつらは内大臣の御子なれとも大宮の御孫又源の御子ともいへとも葵上のまゝ子なれはこれも又孫と云々
いたしや ○いたはしやなり
御てふるひにけり ○ふるい也
三十一字のなかに ○歌よむことを爰にて諫めて式部が云るなりあまり縁の詞の過たるもあしき事なりそへたることのかたきなりとは堅固過たるなりから衣きつゝなれにしつましあれはも此歌の類なりされとそれは折句なれはえさらぬことなるべし古人とたしたることなり
からのたき物の ○河海兩義いつれにてもあるへし
あはせのはかま ○なか重なきなり
しらきりみゆる ○しらみくろみたる色なり
おいらかなり ○おとなしきなり
かへりことはつかはせ ○源の仁恕あるなり人からを思ひ給ふゆへなり
しゝかみ ○ちゞみたるなり
ゑりふかう ○假名はうき／＼としたるよきなりゑりいれたるみくるしとなり

ましていゑは　○侍從なさありしときは誂へ給ひし
を今はさやうの人さへなくて自身苦勞して讀出し
給ふへきさなり
から衣　○玉かつらの返事は別にあるへし此歌は源
のかき給ふ也唐衣さ云歌をしけくよみ給へるゆへ
なり
みせたてまつり給へは　○源かやうにかきて玉鬘へ
みせ奉り給ふなり
君いさ　○君は玉かつらなり
ろうしたる嘲　○哢なり
よしなきこさ　○草子地なりかやうのことをかける
はよしなきさなり
さしもいそかれ給ふましき　○さく對面ありたきの
心なり
やうかはりて　○源の心にいりたることなり實子に
てもなし又室家にてもなきをいかなるこさにかく
まて心にはいり侍るそさなり
ゐの時　○御對面あるなり
すこし光みせて　○かやうの時の灯は光ほのかなる
へきをこれは實子を此次てにあらはしてんの心に
てわささあらはにし給ふなり
よのつねのさほう　○内大臣の實子ご云ことは末世
間の披露なき故にあるへき作法にと源のゝ給ふな
り
けにさらにきこえさせ　○内府の詞源の念比なるこ
とを云り
かきりなきかしこまり　○かくもてあつかひ給ふか
たしけなさは限りなきこさゝなり
うらめしや　○いまゝてしらてすきけるよさなり
しほたれ給　○歌にあまの心よさあるによせたり
よるへなみ　○我身のよるへはいつくさもなかりし
をそなたより尋もし給はさりしよさなり源のをし
はかりて返事をかくし給へり
いさわりなき　○今まてたつね給はぬをわりなしさ
かこちたるなり
づき〳〵　○次々なり
御けさう人も　○兵部卿宮鬚黑なさなり
中將辨　○中將は柏木なり
人しれす思ひし事　○兄弟さもしらて心かけし事を
からくも思ひ又實のはらからなれは嬉くも思ふさ

なり
さまことなる　○六條院のさま〳〵のことをし給へるをいへり
中宮　○秋好なり
なをしはし御心つかひ　○源の内大臣へ申給ふことはなり
たゝ御もてなし　○内府の返事
御をくり物　○裳着の祿例よりもことくはいたるなり
内より御けしきあり　○内よりの御左右をまちてとなり
なまかたほなる　○源のかく念比かり給ふは玉鬘の大かた可然人ゆへにてこそあるらめと思ひやり給ふなり
かの御夢　○螢の巻に見へたり
女御はかり　○内大臣語給ふなり
さかな物の　○近江君なり
ふたかたに　○源と内大臣となり
あふなけに　○奥くもなとなり
中將　○柏木なり

しかしつかるへき　○ふたかたにもてなさるらんと云にかゝれり
あなかまみな　○近江君の詞
内侍のかみあかは　○内侍のかみ闕あかは中將辨こそのそみ申へきにと嘲哢していへるなり
けにしあやまりたる　○近江君尋出したることはあやまりたるとなり
少將はかゝるかた　○少將は情々しくなくさめて云給なり
かたきいは　○抄に見へたりかく書なせる面白也はらたちたるさまなり御心しつめてこそあは雪のきゆることく思ひのきゆることもあらめとなり
あまのいはと　○兄弟のことに奇特なるとりあはせなり少將はなくさめての給ふをかしは木はさやうにはらたち給はゝひきこみて居給へとなり
御まへの御心　○女御なり
いそしく　○いそかしくなり
をといとけさやかに　○をとはいらへたるなり
むねに手をゝき　○驚きたる心なり

ゐみ給ひて　○内大臣をかしく思へるを堪忍あるなり

いとあやしく　○草子地なり實もなき御くせとなり

さもおほし　○内大臣の詞

ひゝしく　○師説秘々なりねんころになと云心と云々今案ひゝしくの心にて可然歟

人のおやけなく　○草子地なり

やまとうたは　○近江君の詞なり

つまこゐ　○本人の申給ふことに言をそへていはんとなり

世人は　○なにか爰へむかへ給はゝかくはし給ふまじき事となりたゝ此人のよろしからぬはぢをまぎらはしてかくあつかひ給ふと世の人のさま〴〵いふとなり

蘭　源三十七八月九月の事あり物語には三月より五ヶ月の事はみえず

内侍のかみ　○玉鬘内侍のかみのこと行幸の巻に粗さたあり五ヶ月の間に内侍のかみになり給へるなるべし里ながら内侍のかみに任ずる例花鳥に見えたり

たれも〳〵　○源氏と内大臣となり

おやと思ひ　○玉鬘の心中なり源の心がけ玉を云り

心よりほかに　○自然帝(ミカド)の寵にもあづかることのあらばとなり

いづかたにも　○たま〳〵親にしられ奉りて又程なく女御などに心をかけ奉りてはとなり

うけい給人々　○咒咀の心なり爰にてはたゝあしざまに思ふ心なり

さりとてかゝる　○宮仕に出たつことあしきことにてはなきとなり

まことのちゝ　○源の心がけ給ふべきと内の大臣のおしはかり給ふ故にわか物にもねとりもちし給はさるなり

いつかたも〳〵　○源内大臣なり

うすにほひ色　○三條の大宮なやみ給ふこと前卷に見えたり此卷にてうせ給ふとは見えたり三月廿日と藤裏葉に見えたり三月なるにや今玉鬘祖母の服を着給へり

宰相中將　○夕霧參議に昇進の事爰にて見えたり行幸蘭の卷のあひたにて昇進あるべし

こまやかなる　○いろの濃なり輕服は心の淺深によりてこきうすき色のあるなり夕霧は最愛の孫たるによりて色の濃なるなり

はしめより物まめやかに　○玉鬘實の兄弟のよしをいひしらせ給ふゆへに夕霧は實のはらからのことくし給へるなり

いまあらざりけりとて　○今更にうと〳〵しくし給ふべきもいかゞとなり

との御せうそこ　○源より玉鬘への御ことつけ也

内よりおほせ　○内より夕霧を御使として源へ申されし其由を頓て玉鬘の御方へ申給ふなり

御かへり　○玉鬘源への返答なり

かの野わきのあした　○玉鬘を夕霧のみ給しことなり

うたてあるすちに　○實子にとりては餘りむつましく心得かたく思給ひしなり

なをもあらぬこゝち　○夕霧の我身もあらぬ心のつくとなり

さはかりみところ　○みかどゝよき御あはひ成べしとなり

をしきさまなる　○中宮女御の御爲にはわづらはしきことあるべきなり

人にきかすましと　○夕霧のつくりことにかくの給ふなり

うへの御けしき　○前に人にきかすましと侍つるといへることの子細を訓釋するなり

御ぶくも　○玉鬘物の給ふけはひみまほしくてかく云かけ給なり八月なり三月廿日大宮の御忌日なり八月廿日迄輕服の日なり花に四月とあるは誤なり

たくひ給はん　○玉鬘の詞也

この御ぶくなと　○今内大臣實子のとは此三條の宮の御服を着給へるによりて人あまたしるべきなり

いとらう　○遠慮をめぐらす功勞の有なり

もらさじと　○中將はしのびかたき物をとなり秀能

か歌「露をだに今は形見の藤衣あたにも袖を吹嵐かな」とよめるも此語勢なり

さてもあやしう　○兄弟かと思へばさはなくて輕服は同じやうに着たるは心えさることゝなり此衣なくてはとなり

なに事も　○玉鬘の返答夕霧さへ分別なきなればましていかゞ分別すへきそとなり

らにの花　○らんしらに諸本異あり　拾遺愚草物名はんひとはじめはよめるをはにびと後に改めたるなり假名のならひはぬる字をは二文字にたくる也しをんしをにの類なり

これも御らんすへき　○蘭は類あまたあり蘭兄薫弟と云ことあり兄弟のことにとるか紫のゆかりをいへるか

うつたへに　○總じてはひたすらになど云心なり一向にの心なり松かねを磯邊の浪のうつたへにの心はうつたびにと云義あり如何爰の心は一向に思もかけずしてとり給へるなり河海の說如何

おなじ野の　○上句三條宮の御服を同じやうに着給へるを云なり蘭(フヂバカマ)は藤衣の緣ありかごとは誓言なり爰の心はたゞ少し許と云心なり

たつぬるに　○此歌花鳥の義も面白きか玉鬘夕霧は此程までは兄弟なりされは同野と云べき程もなきとなりばるけきなかにてもなきほとにかこつべき由もなしと云遁(ノガ)れたるとなり又の義は玉鬘と夕霧との中をよく尋ぬれば兄弟にはあらずはるけき野邊なりされど又遙によそ人と云べきことにはあらすうす紫程のゆかりは有べしとなり實はいとこなる故なり

あさきもふかきも　○夕霧の詞なり玉鬘の心にとまることはあるらんとの給ひまつはるなりいかさまにもはなれたる中にてはなきとなり

えしつめ　○とかく申出すへきにてはなけれともとなり

いまはた　○前にはかごとゝ云ひ爰にははや云出ぬれは身をつくしてもあはんといへるなり

頭中將　○柏木なり

かたはらいたけれは　○作者の詞なり

かんの君　○はじめてかんの君と云り內侍のかみなり

心うき御けしき　○夕霧の心なり
いりはて給ぬれは　○奥へ引いり給ふなり
いますこし身にしみて　○紫上なり
たまへにまいり　○源の御前なり
御返など　○玉鬘よりの御返事を申さるゝなり
この宮つかへ　○源の詞也
れんし給へる　○れんじは念比なるなり又調練なり
さても人ざまは　○夕霧の返答なりいづかたさまにして可然そとなり
いみしき御おもひ　○中宮弘徽殿にをよふことはありかたきとなり
わざとさるすち　○内よりは女御になどさりがたき仰にてもなければ出たち給はんも如何となり
さる御なからひ　○源と兵部卿宮となり此御なかはさてはひきたかひがたきことゝなりさしもおりたちて念比にの給ふ物をとなり
かたしや　○源の返答難義なる事となり
わか心ひとつ　○我實子にてもなきとなり
大將　○鬚黑なり
かゝる事の　○かやうのくるしきことをもかけはなれてよそに聞べき物を我子のごとくし給ふて今は後悔なるとなり
かのおとゝ　○又父おとゝのひきとり結ふへきやうもなきとなり
人からは　○眞實は兵部卿宮の室家にて可然となり
みやつかへにも　○褒美しての給ふなり
けしきの　○夕霧の源の心をみんとて申さるゝなり
としころ　○夕きりの詞也
ひがざま　○源の心なとかけ給ふ由人のいへるなり
かのおとゝも　○内大臣なり
かた〳〵　○源の詞
御心ゆるして　○實父の許諾にこそしたかふへけれとなり
女は三にしたかふ　○禮記に婦人は從レ人者也幼則從二父兄一嫁則從レ夫々死從レ子註云從謂レ順二其教令一
ついてをたかへ　○今は内大臣の義にこそしたかふへけれ其次第をたかへては己か心のまゝにはいかゝとなりおのがとは源の自の給ふなり
うち〳〵にも　○内大臣の心なり紫上其外の人々なり思人たちおはきことなり

そのすち　○紫上などの御方々の數にはなすらへかたきとなり
おほぞうの宮つかへ　○かく宮仕に出し給ふことは玉鬘の下心をばおしこめてし給ふ事と内大臣かたにはの給ふさなり
らうろう　○罕籠なり鳥を籠にいれ獸を罕にいれたるがごとし
けにさは思ふらん　○源の心なり
まか〳〵しき　○曲なり正直になきなり
いたりふかき　○内大臣の心ならひさなり世間に心をまはす也
おもひくまなしや　○かくるゝ所もなきとなり
御けしきは　○夕霧の心なり
かしこくも　○人はおそろしく思よるとなり
御ぶく　○八月なり
月たゝは　○九月は忌む月なればなり
うちにも心もとなく　○内にはひきたかへなとし給ふてはとおほすによりて急給へるなり
たれも〳〵　○兵部卿宮大將なとなり
よしのゝたきを　○手をさへて吉野の瀧はせきつとも人の心はいかゝとぞ思ふ

中將も　○夕霧なり
たはやすく　○夕霧のさまなり
とのゝ御つかひ　○内大臣よりの御使にて柏木まいり給へるなり
なをもていてす　○頭中將は實の兄弟なれと未しの び給ふなり
かつらのかけ　○庭の桂の木なるへし
見きゝいるへくも　○はしめはへたて給ひて今はさもなきとなり
宰相の君　○侍ふ人なり夕顔上のいとこなるか
なにかしを　○柏木の詞なり
たえぬたとひ　○兄弟のことなり
こたいの　○めつらしからぬふるきこととなり
けにとし比　○玉葛の返事
かくまてとかめ　○かくの給へは却てへたてがましきとなり
なやましく　○又柏木の詞なり
まいり給はん　○いつ比まいり給ふへきそとなり
なに事も　○内大臣は何をも人目を憚り給ふとなり
いつかたにつけても　○頭中將の詞兄弟と云又委き

ことはしらて文などまいらせしこと旁々にとなり
まつはてよひなと　○隔てなくうち〳〵へもまゐり
ぬへき物をとなり
きたおもて　○内々の方なり
きんたちこそ　○宰相などこそ物へたて給ふべけれ
となり
げに人きゝを　○積りたることをも申たけれどなほ
さりにてはなきとなり
すぐよか
いもせ山　○いもせは兄弟をいへり兄弟ともしらで
文などまいらせたるよとなりをだえの橋には心は
なし只ふみ迷と云戀によせたる許なりふみまよひ
けるよと歌より詞に書つゞくるなり古今に「津の
國のなにはおもはず山城のとはにあひみしことを
のみこそ　と云る名所二をよめる此作例なるへし
まとひける　○なに故ともしらざりしとなり
おのつから　○宰相の君の云なりかく疎遠にてはあ
りはつましきことゝなり
よしなかる　○柏木の詞也
らうつもり　○奉公の労なり

大將は此中將　○右近の大將右近の中將なり
人がらも　○大將をいへり
かのおとゝ　○源なり
さるやうあること　○源の心ざし給ふゆゑこそと内
大臣の疑推なり
式部卿　○紫上の兄弟なり
六條のおとゝ　○紫上の姉大將の本臺なれは是を押
のけては如何と源は思給へるなり
かのおとゝ　○實父なり
女は宮つかへ　○玉鬘の心の中なり宮つかへは物う
けにおほしたりともりきゝ給ふなり
おほとの　○源なり
辨のおもと　○此人大將にあはせ給しなり
たのみこしも　○八月なるへし
數ならは　○我身數ならば九月は人の忌むなる月な
ればいとふべきを此月たゝは内へまいり給ふへき
故にいみある月をもはゞからで一筋に急きたるな
り
月たゝは　○十月に内へ參り給ふことをよく聞給ふ
なるへしとなり

いふかひなき　○宮仕に出給ふ事
あさ日　○花鳥義ありはやく消やすき身なるをよくはからひ給へとなり又の義は内に侍らひ給はゞ天顔にふれてましますへきなりされは朝日さす光を見てもといへり我むすほゝれたる思をは忌給ひそと也此義可然歟
いとかじけたる　○篠を云り歌に譲りたるなり
うちあひたるや　○両方の御使の行逢ひたるなり
式部卿の宮の左兵衛のかみ　○これも玉葛に心かけたる人なり爰にて始て左兵衛のかみの傳をかけり
おほしたえぬ　○内へ参り給ひなはかやうのことかきたえぬへきなり今を名殘なるへきとなり
宮の御かへり　○兵部卿の宮斗の御かへりあるなり
心もて　○けたずもあらなんとあるをうけたり葵は必日にむかふ物なり衞足とて身をたもちたる物なりされど日にむかふとて霜をばえけたざるものなり其ごとく玉葛の宮仕に出たつことも我心づからなることにてはなきなり人まかせなるをいへり
あはれをしりぬへき　○我御心からにてはなきとあるを宮はうれしく見給ふなり

女の御心はへは　○花鳥いかゝ玉かつらの心はへを本にすへきとなり紫上をは第一にして次には玉鬘を女の本にはすへきといふ心なり此物語に此よし所々にみえたり

眞木柱　巻名以歌號之源卅七の十月より卅八の秋までの事あり但末に十一月にいとをかしき兒をさへいたき出給ふとあれば十一月までの事ある歟

うちにきこし　○玉鬘鬚黑の大將に逢給へることをいへり

しはし人に　○源の心中なり世界へ廣くしらせじとなり公私のため不可然となり

ほとふれど　○大將の心なり玉葛の心に大將の御心の思ひの外なることゝおぼしてうちもとけ給はざるなり

みるまゝに　○大將の心なり此人を自然兵部卿宮によことられてはと思給ふなり

女君の　○玉葛なり心よくも思給はさるゆゑに出頭もなきなり

心あさき人　○河海心あさき人とは鬚黑をいふと云る義あり是も面白し又の義は鬚黑の本臺の北方の物の氣をさま〲祈給ひしかとも其驗もなかりしなり其故は物の氣のしうねきゆゑなり今玉鬘のとを祈給へるにはゝやく成就するなりこれは玉鬘は心あさき人なる故に利生もすみやかなるとなり此時は心淺き人とは玉鬘をいへり此說しかるへきか

たとゝも　○此もの字は源も玉鬘も本意にてはなきとなり

たれも〱　○實父などはゆるし玉ふ也

ぎしきいとになく　○大將の出入の義式なりかやうのことをも源のよくさたし給へるなり源の性殊勝なり

わがとのに　○大將の御方なり

かしこにまち　○赤本の北方ましませばなり

ちゝおとゝは　○內大臣の御心にはうしろみなき宮仕よりは大將のぬしづき給ふことば可然事と思ひ給ふなり

心ざしはありながら　○涯分の程はゝぐゝむへけれとも女御をゝき奉りてふたかたにはいかゞと思ひ給ふなり

三日のよ　○嫁娶の三日めなりもちゐなとの儀式なり

このおとゝ　○源の心はかけながら實事なき由を父大臣のきゝあきらめ給ふなり

内にもきこしめして　○天聽にも達するなり

みやつかへなと　○よすがさたまりたりとも時々は
參り給へとなり
しも月になりぬ　○神事の月なり内侍のかみの所へ
すけ以下來りてことを云あはするなり
兵衞の督　○これも玉葛に心かけし人なり大將の本
臺の兄弟なりされはかた／＼に口惜く思ひ給ふな
り
女はつらゝかに　○にこやかになり
もてかくし　○大將に對しては和したるさまをもも
てかくして機嫌あしきさまをつくり給ふなり
心もてあらぬさま　○玉鬘の心ならす大將にあひ給
ふことなり此心をは源は委くしり給ふまじきとて
はづかしく思ひ給ふなり奥の巻にも玉かづらの心
ならざるよしをほめて源のゝ給へる事あるなり
宮の御心さま　○玉鬘は兵衞卿宮に心ひくなり
とのもいとほしう　○源を人の疑しもいまけがれざ
ることはあらはれぬへきとなり
うちつけに　○うちつけなることは源の心ぐせにて
きらひ給ひたるなり
いまさらに　○源の心くせなれは今よりこそ大事な
るへけれとなり
大將のおわせぬ　○源の御出あるなり
けゝしき　○かと／＼しきさまなり
すくよかなる　○此程大將にならひて今源にむかへ
ば別の物にみゆるとなり
よそにみはなつ　○源の心なり我物にしてもしるへ
きものをとなり
おりたちて　○一二句源の實事なきを云り手をとり
てひき渡す程のことはありしとなりわたり川は三
途なりされとこゝにてはたゝ川と見て可然歟
思ひのほか　○歌を足したるなり
みつせ川　○此歌義あまたあれとたゝはかなくよめ
る歌なりかやうのことの出來ざるさきにきえたき
となり又は定れる死期のきたらさるさきにきえた
きとなり五文字はわたらぬさきといはん爲におけ
るなり
心をさなき　○源の詞なりたれも三途河は必すわた
ることとなり
よきみち　○三途川のことなり善道と云説有非也
御てのさきはかり　○夫婦のかたらひをはじめたる

人三途川をひきわたすなり實事なしとても夫婦のかたらひをいひしらせたる故に引渡すほとのことはあるへきことなりここを枕にてなどありしなど許にても云べきなり

まめやかに　○玉鬘も思しり給ふことあるべきことなり志しのことなり

世になきしれ〳〵し　○子のことくし給ひなから心かけ給ふなり

又うしろやすく　○かくはくゝむことはえ忌れ給ふましきとなり

いとおしうて　○源の別のことに云なし給ふなり

うちにの給はする　○源の詞也

なをあからさまに　○暫時にてもまゐり給へとなり

おのかものと　○大將のことなり

おもひそめ　○源の心はまつ宮仕に出して後にはともかくもと思ひしとなり

二條のおとゝ　○父大臣なり系圖に二條のおとゝとあるは弘徽殿の太后の父大臣のことなり

あはれにも　○玉鬘なり

たゝあるへき　○心づかへををしへ給ふなり

かしこに　○大將の心なり暫時も參內とは心にゆるし給はさるなり內侍のかみにては必す拜賀に參し給ふへきことなり

そのついてに　○參內あらば直に大將の亭へわたすべき心あればさもと思ひなり給へるなり

きたのかた　○大將の本臺なり

なよひかに　○大將の事なりたゝ實めなるかたはかりなる人なればかく思ふことをもえ思ひかへし給はさるなり

ひたおもむき　○一方むきなり

女君人にたどり　○大將の本臺なり

ちゝみこ　○先帝の親王なり

かのうたかひ　○大將の心に源に密通を疑しこともさもなきを嬉しと思ひ給ふなり

式部卿の宮　○式部卿宮よりよひとり給ふなり

やさしかるへき　○はづかしきなり年の思はんこともやさしくと云るも此心なり

おのかあらんこなた　○こなたとはあらんあひたはと云心なり行末を云にはあなたと云なり

うちはへ　○うちたえなり

いまはかぎりの身にて　○一度ようすが定りて又立かへり給ふべきこと面目なきとなり
心おやまり　○物の氣なり
たまをみがける　○大將の心なり玉をみがけるとは玉鬘の住給ふ方なり
きのふけふの　○鬚黑の北方にの給ふ詞可然人と云物は何事をも思ひのどめてこそあるべきものをとなり
身もくるしげに　○北方の身くるしげなる故にさのみはえうち出さるなり
年ごろちぎり　○大將も哀と思ひ給ふなり
よの人にもにぬ　○物の氣を云り我は涯分かんにんすへきとなり
おぼしうとむな　○此なの文字制禁の心にはあらずうとみ給ひけるよと云かけたる詞なり
女の御心もみたりかはしき　○女は遠慮なき故に世のありさまをも御覽じはてざるなるべし
宮のきこし　○女こそあれ父宮の同意し給へることを心得かたきなり
かうじ　○かんだうなり

いとねたげ　○かく大將の云給ふを北方は嘲哢しての給ふと思ひ給ふなり
もくの君中將　○もくの君は大將の御方の女房中將は北方に侍ふ人なり何も大將の思ふ人なり
みづからを　○北方の詞我身のことはかりにてはあらで父宮の御うへをさへの給ふことゝなり
宮の御事を　○大將の詞
玉のうてなに　○玉鬘をむかへんとなり
御なかよくて　○玉鬘をむかへは御中よくてましませとなり
人の御つらさは　○北方の詞なり
おほとのゝ北のかた　○紫上なり
かく人のおやだち　○玉鬘を大將にあはせ奉ることは紫上のわざとゝりもちてし給へると式部卿宮かたにはいへるなり
こゝには　○何とも爰には思はざることなり
もてない　○ともかくもと北方のゝ給ふなり
いとよう　○かくの給ふまては可然物の氣おこりてはとなり今はうつし心にておはすと云心なり草子詞なり

おほとのゝ北のかた　○大將の詞也
いつきむすめ　○紫上は末人のいつき女めのごとく
　して我身をさへ人まかせなるやうにし給へればま
　して人のうへまでのことはいがゝとりもち給ふべ
　きぞとなり
人の御おやげなく　○式部卿宮をいへり
くれぬれば心もそらにて　○大將の玉鬘の御方へま
　いり給ふへきの心なり
この御けしきも　○北方のこと
むかへひ　○河海に見えたり
かうしなども　○格子も夜にいれどもおろさゝるな
　り
いまはかきり　○尤哀なり云かひあるまじきとみさ
　ため給ふなり
かゝりには　○大將の詞也
おとゝたち　○源內大臣なり
たちとまりても　○北方の詞也
袖も氷も　○思つゝねなくにあくる冬の夜は袖の氷
　のとけすもある哉
みつからは　○北方なり
ならひなき御ひかり　○源なり
おゝしき　○おとこ〳〵しきなり
よやは　○世なり
中將もくなど　○北方の心によせて私の物えんじも
　あるへし
さうしみ　○北方なり
このしたなるつる火とり　○袖にひき入たる火とり
　にはあらずまへに御火とり召ていよ〳〵たきしめ
　奉り給ふとありし火とりなるべし
いかけ給　○沃懸なり
きよらをつくし　○玉鬘のわたりをいへり
心たかひ　○大將の心なり是は物氣のするわさとな
　り
よはひのゝしり　○呼叫
うたれひかれ　○行者のうちたゝきなとすることな
　り
こゝろさへ　○雪もよは樺の卷にもあり非$_{二}$夜字$_{一}$語
　の助なり
づしやかに　○實なるなり
心ときめき　○夜がれのあるをも玉鬘は何とも思ひ

給ふましきを大將はいかゝと思ひ給ふなり
心のうちに　○大將のこゝろなり
御さうそく　○北方はいつも物の氣かちにのみまし
ませば大將の御裝束不沙汰し給ふて萬うちあはさ
るなり
ひとりゐて　○獨を火とりによせたり
なこりなき　○もくの君の詞也
かやうの人に　○大將心なり玉鬘をみるにはさても
此もくの君などに物をもいひふれてありけるよと
思ひ給ふなり
なさけなき　○是は情なきことゝ草子地の評なり
うき事を　○大將の返歌なり
ちうけん　○玉鬘へも北方へもよくつかで二佛の中
間なと云がごとくにてはとなり
一夜はかりの　○玉鬘の方に居給へり
ちゝ宮　○式部卿宮なり
人のたえはてん　○つめては堪忍しかたきことも出
來ぬへきとなり
かたへは　○少々はと云かことし
えさらす　○父の御方をえさらすなり

かのおとゞだち　○源内大臣なり天下のてとは此二
人によくしたかふべしとなり
むかし物語　○住吉物語に嫡女を父は念比に思ひし
かと繼母のいひしによりてをろそかに成し事なり
かたのやうに　○北方の母と云形計にてなからへて
あるだにかやうのことのいで來ぬれば行さきなほ
おほつかなしとなり
いまなともきこえで　○姬君は大將の愛子たるによ
りてかくつよく名殘を思ひ給ふなり
かくゝれなんに　○日は暮侍れば玉鬘の方へこそ急
給へけれこなたへはなにかとなり
ひわだ色　○ふるき柱の色によせたり
いまはとて　○哀なる歌也是より眞木柱の君と云り
なれきとは　○柱は無心の物なりとも思出ることの
ありとも此宿りにとまるべき身にてはなきとなり
あさけれと　○石間の水は中將なりかけはなるへき
かけを影によせたり
ともかくも　○我もたほえざるとなり
かくるゝまてそ　○君か住む宿の梢をゆく〳〵もか
くるゝまてにかへりみしやは　○文選別賦に顧ニ

喬木於古里」といへり
きみかすむ ○またふたゝひかへりみすへくも思はさるとなり
宮には ○是より式部卿の宮の御方へ出給ふてのことなり
いみしう ○一度嫁娶して後は故郷に立歸ることあるまじきことなればなり
はゝ北のかた ○紫上の繼母なりよからさる人のよし前々の巻にも見えたり
おほきおとゝ ○源のことなり
女御をも ○秋好中宮を入内させて式部卿宮の女御をばなしけつやうにし給へることなり
御中のうらみとけさりし ○須磨への音信なかりし事なり他人にはうらみもなきを紫上のゆかりを思給はゝ世の憚りもあるまじき物をとなり
人ひとりを ⊙紫上を寵し給はゝその兄弟などゝてはぐゝみ給ふこともなきをと云なり姉妹兄弟皆列士とこそいへる物をとなり
すゝろなるまゝに ○玉鬘を鬚黑にあはせ上ることは紫上の造意ときこえのあるなり

ふかう ○不幸なり
そのれひとり ○御賀のありしことなり
いよ〱はらたちて ○北方なり
かんの君 ○いとまを申て宮の御方へわたり給ふなり
きのとしぬき ○ここは綺なりおりものなり
なとかはにけなからん ○玉鬘にならへても可然となり
まづとのに ○大將の御方なり
をゝしく ○男々しくなり眞木柱の歌などゝみ給ふなるべし
よの人にゝす ○物の氣のことなり
年比の ○祈禱など念比にし給へることなり
思ひのまゝならん ○心づよく隨意ならん人はいまゝでうちそふべき事にはあらずと也北の方の事を鬚黑の思ふ也
たいめんし給へとも ○大將の北方の事なり
なにかたゝ ○大將の心の今さらなるにてもなきなり年比うかれ給へるとなり北方は逢給ふへくもあれと宮のかくさゝへ給へるなり
いさめ申 ○父母のいさめ給ふなり草子地也

いとわかく\しき　○大將の詞なり
のどかに　○心の油斷ありしとなり
いまはたゞなだらかに　○今ちと堪忍ありてことの
さまをも御覽し定て大將のとがをさらぬやうに治
定し給ひて人にもことわらせて進退をもさため給
ふへきことゝなり
女君の御さま　○玉鬘なり
うちたへて　○餘りにはしたなくもてなし給ひしに
ことつけて其後は音信もなしとなり
春のうへ　○紫上なり
かたき事なり　○難義の事となり
をのか心ひとつ　○實父まかせなれはなり
おのづから人の中らひ　○眞實なき事は遂にはかく
れなきことゝなり
この參給はん　○内侍のかみのよろこび申にまいり
給へるなり
なめて　○無禮なり
としかへり　○源三十八の年なり
おとこたうか　○見物かてらなり
かたく\のおとゝたち　○源内大臣なり

宰相中將　○夕霧なり
せうとのきんだち　○柏木なとなり
承香殿　○紫宸殿のうしろに仁壽殿ありそのうしろ
にある殿なり鬚黑の妹の居給へる所なり
にしき宮の女御　○當代の女御式部卿宮の女御なり
御心のうちは　○玉鬘とはたゞ今心の隔てあるへき
と草子地をしはかりていへり
ここにみだりがはしき　○當代は更衣なとはなくて
皆中宮女御なと計ましますとなりさしもなき人の
なきころほひなるへし
中宮弘徽殿　○中宮は秋好弘徽殿は內大臣の女め此
宮の女御は式部卿宮の御女め承香殿の西に住給ふ
女御なり
左の大殿　○行幸の卷より左大臣紅梅卷の時分まて
ありし人なり
中納言宰相　○此兩人系圖に不載之
春宮の女御　○朱雀院の女御鬚黑の妹春宮の母義な
り
宮はまだ　○春宮なり未若くおはしませども母女御
は時にあひほのめくなり

はふき ○省略なり
むかひはらにて ○當腹をいへり
大將殿の太郎君 ○前に十計にて殿上したりし由ある人なり鬚黑の妹子母式部卿宮御女也
よそ人と ○何も玉鬘のよそ人と非すとなり
この御つほね ○玉鬘の御局なり
しはしはすぐい ○玉鬘も侍ふ人もしはしは此まゝ內住してあるへきことをねかはしく思ふとなり
けはひにきはゝしく ○大將の用意を加へ給ふなり
とのゐ所に ○大將の直廬なり
おなし事を ○玉鬘へ申玉ふなり
さふらふ人々は ○あたりより御返事を申なり
さはかりきこえ ○大將の心なり
ねんしあまりて ○兵部卿宮文を參らせ給ふなり
それよりとて ○大將の方よりと聞給ひて見給ふなり
みやまきに ○五文字は大將を云大將にしたかひてましますよとなり
さへづるこゑも ○もゝちとりさへつる春は物ことにあらたまれとも我そふり行 我そふり行の心有

うへわたらせ ○此御返事を思ひ案し給へる所へ渡らせ給へるなりかきさま面白し
かの御心はへ ○かのとは源なり源は面は親のことくにし給へりさてにけなきことゝ思ひしなり
いとなつかしけに ○宮仕に出給はてひきたかへ大將になひき給ふことを恨の給はするなり
あやしう ○勅定なり
よろこひなとも ○玉鬘三位に叙することあり
かゝる御くせ ○玉鬘のくせなり前に仰られしことのありしも御返事をも申されさりしことあるへし
唯今も同し事となり
などてかく ○とゑき契りといはん爲なり紫は灰をあはする物なり下心は三位に叙し給ふを云也
こくなりはつましき ○うすき契りとなり
たかひ給へる ○六條院にたかふ所ましまさゝれはふと源と覺てかく御返事を申給へるなり
宮つかへの ○此歌の註を草子地に書なり
いかならん ○奉公の勞もなくて昇進のことなり
今よりなん ○向後こそ一段と奉公も申べけれとなり

そのいまより　○勅定なり
うれふへき　○此事を聞しる人に聞せられたきとなり
やう〳〵こそは　○連々にもとおぼすなり
いそきまとはし　○退出のことを急給ふなり
みつからも　○此人故に我身も時宜にしたかひてはとなり
ちゝおとゝ　○内大臣なり
さらはものごり　○勅定なり
人よりさきに　○勅語なり
むかしのなにがし　○おさへてもとゞめ給ふべき物をとなり平貞文か歌河海に見えたり
われはわれと　○主上の御心なり
御てくるま　○内侍のかみ退出なり
こなたかなた　○源内大臣の人達なり
きひしきちかきまもり　○近衛大將を云り面白き書さまなり
九重に　○只今退出ありては雲上は遙に思ふへきとなり
野をなつかしみ　○春の野にすみれつみにとこし我と野をなつかしみ一夜ねにけり　玉鬘の心は一夜の契なとはありもすへきことゝなり
をしむへかめる人　○大將なりこれもことはりなり
いかでかきこゆへきと　○今行末はいかなるたよりにて仰せかよはし給ふべきぞと思しめすなり
かばかりは　○玉鬘の歌なり香ばかりなりさすがにわすれはて給ひそといへる心也
したいならぬ　○不進退なり
女もしほやく　○思はぬ方になひく心なり　須磨の海士の鹽やく煙風をいたみ思はぬ方にたなひきにけり
ぬすみもて　○大將の心なり
かの宮　○式部卿宮なり
たゝ思ふことの　○玉鬘の事なり
たゆめられたる　○たはかられぬるとなり
わらゝかなるけ　○大將はきすくにて和したるかたのなきなり
かきたれて　○さりとも源をは忍ひ給ふへきとなり
いかてかきこゆへからん　○いつかきこゆへからんとなり

この人にも　○右近なり
なかめする　○うたかた義さま〳〵なり河海に見えたりいづれもたゝ暫時の心なり
いや〳〵しく　○敬なり
ひきひろけて　○軒のしつくのとある歌なれは面白き書さまなり
むかしのかんの君　○朧月夜なりその世のことも思出給ふなり朧月夜ゝ内侍のかみ玉鬘も内侍也宿世いかにとなり
さしあたりたる　○まつ時にあたることなれはこれは堪かたきとなり
いまはなにゝか　○自今以後は何事にか心をみたるへきとなり
さましわひ　○思ひさますなり
たゝもはなかりそ　○此事ふと書出したる不審なり心あるべし心はたゝ今ひきはなれても又必ずあふへき心を含める歟案之徒讀杜詩傳解師和睦士卒晃藻註言歟從知見識ニ水藻ニとあり此心なるへき歟
あかもたれひき　○たちて思ひゐてもぞ思ふわきもこがあかもたれひきいにし妾の退出の時を忘れ給はさるとなり
なをかのありかたかりし　○源なり
春の御まへをうちすてゝ　○西の對へわたり給ふなり
咲かゝりたる匂ひ　○山吹の事面白し
色に衣を　○海河に引る河六帖歌相叶歟又續古今に讀人不知「思ふともこふともいはじ山吹の色に衣をそめてこそきめ」此歌可然歟玉鬘をは山吹に比したりしなり
かほにみえつゝ　○面影にみゆるとなり夕されは野へに鳴てふかほ鳥のかほにみえつゝわすられなくに
けにあやしき　○宮仕に出して時々いたし奉らんの心にてありしにたかひたるとなり
かりのこ　○鳬（カモ）の子なり
おほつかなき　○文の詞
おなしすに　○ざれたる歌なりかへりし巣に又みえぬことをよめり
女はまことの　○實父さへ女はさはなき物をと大將

の實の心よりつよくの給ふなり
まろきこえんと　○大將の書給ふなり
すかくれて　○本より數ならですかくれてある身なれはさなり大將のかくよみ給へるは數ならねは細々に源にまいらせ給ふ事もなきと云心なり
よろしからぬ　○源にかしこまりたる心なり
この大將　○此文なと書給ふことはのつらしとなり
ほけられて　○しれおろかなるなり
ひめ君をそ　○槇柱の君なり
わかい御こゝろ　○槇柱の心なり
あやしう　○草子地
十一月に　○男子誕生なり是は十一月の末のことなれと先云出してをくなり此巻は秋までのこと也
わざとかしつき　○玉鬘は内大臣のわざとかしづき給ふ弘徽殿などにもおとり給はざるとなり
宮つかへにかよひありて　○今男子をうみ給へるにも宮仕ならは宮をもまうけ給ふべき物をとなり
おほやけことは　○内侍のかみにて其職をは里にてし給ふなり
まいり給ふてこそ　○内侍のかみは必しも宮中にさふらはさることもあればなり
さてもありぬへき　○かやうにもあるへきことかさなり草子地なり
内侍のかみのそみし　○近江君なり
宰相中將　○夕霧なり
れいならす　○平生の實法をいへり
あふなき　○無與なり
よになれぬ　○夕霧なり
この御かたには　○夕霧の心なり此女御の御方にはかく用意なき人はあるましき物をさては此聞をよひし近江君なるへしと推し給ふなり
よるへなみ　○夕霧のかへしなり舟人は近江君を云なり思はぬかたへよることはなきものをとはしためたるなり

細流卷九　梅かえ　藤のうらは　若菜上

梅かえ　巻名以詞號之源卅九歳正月のことなり

御裳着の事　○明石の中宮十二歳なりうつほのあて宮も十二歳にて裳着のことありなすらへて書るにや
春宮も　○今上なり十三歳なり
大貳　○太宰大貳は一任五ケ年にて改れるなりされは須磨の巻にいへる大貳にてはあるへからすされと其時奉れると云義もあるなり
なをいにしへのには　○新渡の香具ともなり
故院の御世のはしめ　○源を鴻臚館にて相せしとき奉りし物とも成るへし
ひごんき　○金襴などの類なり
此たひのあやうすもの　○大貳の奉れる新渡の物ともなり
かうども　○沈香なり
ふたくさつく　○あなたこなたわかちて薫物を合せさせ給ふなり
うちにもとにも　○御元服御裳着のことなり
そう王　○仁明天皇なり兩抄に見えたり
ふたつのほう　○累方侍從なり不得男といふ制禁のあるをいかてか源は傳ふらんとなり
心にしめて　一段と執し給ふなり
うへは　○紫上なり
はなちいて　○花鳥に委所詮は兩方に小寢殿ある母屋の中をなからにして御帳をたつる物なり母屋の中をいへり外様むきをはなちいてとは云なり晴の心なり
八條式部卿宮　○兩說に見えたり
にほいのふかき　○源も紫上も同し方を調合あるなりさて勝劣をわかつへきとはいへり
人のをやげなき　○草子地なり紫上をは源の御子のことくし給ひしことなり
かうこ　○御厨子のをき物なり
所々の心をつくし給へらん　○匂の勝れたるをとりていれんとなり
兵部卿宮　○螢宮なり
御いそき　○裳着なり

むかしよりとりわきたる　○源と宮とのことなり
前齋院　○槿なり
きこしめす事　○源の心がけ給へることとなり
ほゝゑみて　○源なり
いとなれ〳〵しき　○薫物調合の事を申されしと也
こゝろは　○箱のなかにうち枝のやうに作りて糸にかけられたるなり黒方は霜雪にもれかされぬ匂にたとへたり絲は黒色にたよりあり松にたるかた〳〵心あり
えんなるものゝ　○兵部卿宮の詞なり
花の香は　○此合せ給ふたき物は匂もなけれどもうつし給ふべき人の袖がらなるべしと我身を卑下し給へるなりたゞかはかりぞ袖にのこれるもこのこゝなり
こうはいかさね　○花鳥の説可然
なに事かは侍らん　○源の詞文をは枝につけをき給ふなり
花の枝に　○人のとがめん香をはつゝめともこのたき物の匂をはえつゝむましきとなりかりそめに物申事なと此匂ゆへつゝみかたきとなり
とやありつらん　○宮の床しかり給ふ程にかく歌をよみてありつるげなと申給ふなり
まめやかに　○源の詞也かく薫物合せなと方々へ申給ふはこと〳〵しきやうなれと明石姫君は源の一子なれはかくし侍るとなり
いとみにくければ　○源の卑下の詞なり此明石姫君形ちもみにくけれは他人はゝづかしく思て腰結ひのことを秋好へ申となり
はつかしき所の　○秋好のことなり
あえ物も　○宮の詞やかて中宮に立給ふへきとなり
これわかせ給へ　○源の詞薫物の勝劣をいへり
しる人にもあらす　○色をも香をも知人ぞしるなり誰にかみせんの詞にかゝれり
いひしらぬにほひとも　○宮の辭退し給へるをいかさまにもすゝみをくれの聊なきことはあるましきと源の申給ふなり
一くさなとか　○其中になとか一種のすゝみをくれはなくてはとなりてにをは聊すはりにくき樣なれとこれ又文體なり
右近の陣のみかは水　○承和例抄に見えたり

これみつの宰相　〇惟光參議に任する事爰に初めて見えたり
兵衛の尉　〇乙女に童にて有し者なり
おなしほうこそは　〇みなもとは同し方なるへきを各別に見たりいかゝしたることそとなり
さいへと　〇源も紫上も黒方を合せ給へれと是はいつれよりもしつやかなるけのありて勝れたることこなり黒方のふりはかやうにあるへきことゝぞ薫物の家に云ことなる歟
しゝうはおとゝの御　〇侍従はあはせ給ふ人々もあれと其中にて源の勝れたるとなり
みくさあるなかに　〇梅花をくはへて三種なり春のおとゝなるによせて梅花を勝れたりとするなり
この比の風　〇梅花なれはなり
冬の御かた　〇明石上なり
とき〲によれる　〇梅花荷葉菊花落葉なとは時にあひつゝ人々もあはせ給ふへきとて斟酌あるなり
さきのすさく院　〇花鳥に見えたり舊記なとには宇多帝也此物語には承平帝也
思ひえて　〇前のけたれんことあいなしとおほしてと思ひえてなり
心きたなき　〇源の詞いつれをも捨すの給へはなり
おとゝのあたり　〇殿のあたりなり
くら人所　〇六條院の殿上なり
あすの御あそひ　〇御裳着の御遊あるへしとなり
けさん　〇見參とて外記か奏する此心なり
梅かえいだしたる　〇此卷名これによれるか
たかさこうたひし　〇榊巻にありしことなり
うくひすの　〇催馬樂の梅か枝謡ひしに感したるなり心しつめつるとは焼物に心をしめつるにとなり
千世もへぬへし　〇花しちらずはの心なり祝の折なるによりて此詞たよりあり
色も香も　〇源の歌なり此あたりをたえずとひ給へとなり
鶯の　〇頭中將の宰相中將にさすとて笛竹をよめるなり
こゝろありて　〇吹とほせと云をうけたり
なさけなくと　〇人々花のため情なしといへるなり
霞だに　〇夜の明れば鳥に心よげに鳴もの也されは

霞たになくば夜のあけたると思て鳥も心よけにほころふへきとなり

まことにあけかたに　○此歌をうけてなり

てふれ給はぬ　○未試もせぬたき物なるへし

花の香を　○兵衛卿宮我袖なとにはとめかたきとなりえならぬ一説艶ならぬなり卑下の詞又義只今送り給へる御直衣のなにとなく優なる心也

くつしたりや　○屈したりとなりいもやとかめんといへるをわらひ給なり

御車かくるほと　○車に牛をかくる程なりおひつきてつかはし給なり

めつらしと　○花の下のことなれは花の錦と云なりいもやとかめんと云るを慰さめて讀るなり又曰此直衣なと參らせ給ふことを云りよのつねの人ならはかくは云給ふましきを此宮と源とは一段と隔てなき中なれはかくはの給ふとなり古來此二說あり後日仰云此歌奢りたる歌なり花宴巻に二條の大臣の我宿の花しなへての色ならはと讀るは其性奢たる人なれはなり源氏は此心あるへからす如何案之兵衛卿宮は北方と一夜の夜かれもなき人なれは今夜の夜かれを程久しき樣に思ひ給ふへし只今歸給ふをは故郷へ歸るときて歸りたるやうにめつらしきことに北方は思給ふへきとなりいとくつしたりと笑ひ給ふといへるによく叶へるか

又なき事に　○我か家を又なき人と思ておち給ふとなり

かくて西のおとゝ　○秋好の坤の殿なり

宮のおはします　○中宮なり

御くしあけの內侍　○髮上のことなり

宮はみたて　○中宮明石の姫君を始て見給ふなり

おほしすつまじき　○源中宮へ申給ふ詞なり

のちの世の　○中宮の行啓なとは後代の例になるへきと思ふ故に忍ひ侍るとなり

おこともおほすさま　○源の思ふまゝに繁昌なるとなり

はゝ君　○明石上なり

かゝる所の　○紫式部か筆なり

よろしきに　○大方のことだにあるに此所のありさま筆もをよはさるなり

大將　○系圖になし

この御かたは　○明石の中宮なり
宮にも　○中宮なり
よろつのこと　○紫上に源の語り給ふ詞
ふるきあとは　○むかしは眞行草の文字許にて今の
やうにはなきなり
とよりて　○外へよりてなり上古をはあふよりてと
云なり
女手　○今の假名なり
中宮の母みやす所　○六條御息所なり
くやしきことに　○御息所はくやしきことに思ひ給
ひしとなり
さしもあらさりけり　○我身心かはりはつゐになか
りしなりかやうのこと皆紫上に語給ふなり
かとやをくれ　○つよき所なきとなり
故入道の宮　○薄雲なり
よはき所　○花の義可然
院の內侍のかみ　○朧月夜なり當世の手書なり筆の
きゝたる所あるなり
かの君と　○朧月夜なり
こゝにと　○紫上なり

このかすには　○紫上の詞なり
いたうなすぐし給そ　○源の詞さのみ慢し給ひそと
なり
にとやかなる　○むくやきあるとなり
まんなのすゝみたる　○河花の釋義いつれも心得か
たき歟是は紫上の手跡を源のゝ給へるなり今もあ
ることなり女に眞名をつよく好みて書人ありさて
眞名にのみ心をとむる人は假名に心もとめすして
すて筆おほきなり紫上はかやうに見えたり
兵部卿　○螢なり
左衛門督　○不レ入ニ系圖一
ひとよろひ　○一雙なり
けしきはみ　○宮なり左衛門督のかける程はかき給
ふへきとなり
式部卿宮の兵衛督　○紫上の兄弟なり
れいのしんてん　○たきもの合せ給ふ所なり
しろきあかき　○皆色紙なり
けちえん　○白き赤きひらは執し給へるなり
御しとね　○源はまへより茵をしき給ふなるへしさ
てそへさせ給ふといへり

つれ〳〵に　○源の詞也
かの御さうし　○草子を持参あるなり
すくれてしも　○不悪なり源氏の目には無上ならぬことなり
みくたり　○歌と云義あり但草子の詞文字すくなゝる歟
かうまては　○源のほめ給へるなり
かゝる御なかに　○宮の詞此みな〳〵の中にはおもてつれなきことなれば涯分心をつかひ侍るとなり
すくみたる　○こは〳〵しきなり
なこう　○なこやかなるなり
女手　○假名なり
筆のおきてすまぬ　○我心にまかせたるなり心正しけれは筆正しといへることくに人々のこのみあることなり
うたなとも　○異様なるなり
いとまいりぬ　○隙のいるべきとなり
つぎかみ　○ふるき手本ともなり
御子の侍従　○兵部卿宮の御子なり
古萬葉集　○嵯峨天皇の手本などのため歌をえらみて書給へるなるへし萬葉全部にてはあるへからす
おなじきたまの軸　○あさぎなる玉のちくのことにや
たんのからくみ　○段々の文なり
やかてこれはとゝめ　○源へまゐらせ給ふなり
をんなごなどを　○たとひ實子なりともみはやすべき器量なき女子などは傳ふまじく思しに今姫君の御爲に奉れる本意なるとなり
しゝうにからの本　○源の返報なり

上中下

かのすまの日記　○繪合には須磨明石の兩巻こそ出されたれ其外日記あるなり
ひめ君　○雲井鴈なり
かの人の御けしき　○夕霧なりすゝみての給ふこともなきなり
人しれす　○人しれす後悔あるなり
ひとかたに　○夕霧のとがばかりにもと云なし給はざるなり
かくすこしたわみ給へる　○内大臣の御心くつろきたる由を聞及ひ給ふなり

あさみとり　○六位すくせと云しことなり
おとゝは　○源なり夕霧の獨住わび給ふなり
かのわたり　○雲井鴈の事なり
右大臣中務宮　○皆系圖にみえす
かやうの事はかしこき御をしへ　○源も思ひしりたることなり桐壺の御門の御敎訓にもかやうのことはしたかひかたかりしとなり
しりびに　○後よはきなり
くらゐあさく　○淺位なるほとは身もちも自聊爾なるとなり
女のことにて　○此段殊勝の段なり心を付へし河海に見えたり
とりあやまり　○逢そめたる人を中空になさゝるやうにすへしとなり
もしはおやの心に　○親のためを思ふべし
それをかたかとに　○一かどにとなり
かやうなる　○夕霧の心なりなほふかく雲井雁のことを思すて給はさるなり
女もつねよりことに　○雲井雁の心おとゝは內大臣なり

たがまことをか　○引歌よく叶へり「僞と思物から今更に誰まことをか我は賴のまん折々夕霧の文をかよはし給ふも唯僞とは思なからさなくては誰誠を賴むへきそとなり
中務宮　○前にありし中務宮夕霧を聟にとらんとのことなり
なみたをうけて　○內大臣姬君へ申給ふなり
いかにせまし　○內大臣の心なりすゝみても云へきかとなり
あやしく　○思はすなる淚となり
御ふみあり　○夕霧よりの文なり
つれなさは　○雲井雁のつれなさはよのつねにあるさまなりかくつれなきを露も忘たずしたひきにける其心ふかさは我身の如くなる類又もあるまじきとなり
けしきはかりも　○かくこまやかなる文に此中務の宮の方より聟とり給ふべき有增をばほの聞給ふべきを聊もさやうのかたをほのめかし給はざるあやしき事となり
かぎりとて　○夕霧も世の人のならひにやといふ心

なり
とあるをあやしと　○此ほどまではかやうのおもむきの返事はなかりしをいかなることにやと夕霧の心に不審あるなり此中務宮のことをばしり給はさる故なり
見居給へるとそ　○巻々のおはりの詞皆かくのことし

藤裏葉　巻名以詞號之源卅九の春より冬にいたれり
御いそぎのほど　○御裳着のことなり
宰相中將はなかゝかちにて　○雲井雁のことなり
かつはあやしく　○夕霧の心中なりかく强ちに申さは内大臣の退屈ありて免し給ふへきを同じくは内大臣の方よりをれ給ふやうにありたきとなり
たとゝのかすめ　○梅か枝の巻に内大臣のゝ給ひし事なり草子地なり
かの宮にも　○中務の宮も夕霧にけしきばみ給ひしことなり
わが御かたざま　○夕霧を引たがへては雲井雁のためあしかるへしとなり
しのふとすれと　○前に夕霧密通の事なり
なほまけぬへき　○内大臣のこゝろ
うへはつれなくて　○内大臣と夕霧となり親昵なから此恨みはあるなり
三月廿日　○蘭巻三條大宮の忌月四月とあり誤なり爰にて見えたり

こくらく寺　○河海に見たり代々攝政の墓所なり古今「ふかくさの山烟たにたてとよめるも此所也唯今内大臣此所へ參詣あるなり

このおとゝをは　○雲井鴈の事故に夕霧の心うちとけざるなり

めとゝめ給ふ　○只今ゆるすべきかなと思ひ給ふ故なり

よろづをとりもちて　○外祖母の御事なればなり

心ときめきに　○夕霧のしほたれ給ふ氣色みとがめ給ふとなり

なごかいとこよなう　○內大臣の詞也

けふの御のり　○祖母のゆかりを忘れ給はずば我をはよそになし給ひそとなり雲井鴈のことを含めり

うちかしこまりて　○夕霧なり

過にし御おもむけも　○大宮のことなりなにとこも內大臣を賴み申べき由をの給ひ置しとなり

心あはたゝしき　○心ならずあはたゝしく歸給ふなり前にあまげありと書て爰にてあはする筆法心有物也

君いかに　○夕霧なり內大臣思なをり給ふかと思給ふなり

一日の花のかけ　○極樂寺にての事なり

わかやどの　○尋ね給へとゆるしたる歌なり

なかく〳〵に　○五文字面白し前の歌は內大臣至極ゆるしたる歌なり此うへにてはまどひはすましきことなるをかく名殘なく免し給へばかへりて中々まとひぬへきとなり

くちをしく　○夕霧の臆して返事をもはか〳〵しく申さゝるなり引なをして申給へとなり

御ともにこそ　○頭中將の詞也供奉申へきとなり

わづらはしき　○夕霧の詞

おとゞのおまへ　○此音信を源へ見せ奉り給ふなり

思やうありて　○源の詞雲井鴈のことなるへしとなり

さもすゝみ　○こなたより進み申にこそあれとなり

すきにしかたのけう　○大宮の敎訓ありしをも聞給はて不孝に思しに今思ひなをり給ふは孝心の至りなりとなり

御心おこり　○つゐには內大臣はまけ給ふとなり

さしも侍らし　○夕霧の詞也思ふやうありてといへる詞にかゝれり

わさと使さゝれ　○源詞なり
いかならんと　○夕霧の心なり
なほしてそ　○源の詞なり
非參議　○三位中將などの程こそあれ今はふたあひの色こきは似あはさるとなり
中將をはじめ　○頭中將なり
なほ人にすくれ　○夕霧なり
かれは　○源なり
たはれて　○たはやきたるなり
この花　○藤を評したる面白し
月はさし出ぬれと　○前には四月一日とあるを河内方種々の沙汰ありされど是は七日なり末に見えたり一日比といへる面白きなり
みだりかはしく　○夕霧にしひ給へり
さる心ちして　○夕霧心して斟酌あるなり
君はすゑの世には　○內大臣の詞
よはひふりぬる　○我身をみすて給ふとなり
文籍にも家禮　○雨抄に見えたり所詮は父子の禮を他人に用ることもあれば我身外舅なれば所をもをかるへきことゝなり
なにがしのをしへ　○雨抄の義不然歟是はたゞ儒道のことをいへるなり
いとう心なやまし　○內大臣の我心をなやまし給ふ物かなと恨み給ふなり
いかてが　○夕霧の詞なり
むかしを思ひ給へ　○致仕大臣大宮葵上などの御ゆかりを思へは身をすてゝもつかふへしとなり
御ときよく　○內大臣の時宜よきなり
さうときて　○夕霧を饗應し給ふなり
ふちのうらば　○內大臣の詞
むらさきに　○雲井鴈のことをほのめかすなり女を紫に喩ふるなり松よりさきこすを松より過てとは云り松をまつによせたり我むすめの數ならぬにより て我待にほとふるとなり
はいしたてまつる　○禮をし給へるなり
いくかへり　○あまたの年を過つるとなり花のひもとくとは今日のことなり能宣か歌に　「いくかへり咲ちる花をすくしつゝ物思ひくらす春にあふらん　の心なり
たをやめの　○是も雲井鴈に思よそへて云り

つき〳〵すんなかる　○すんじなかると云義ありと云々
七日のゆふつくよ　○四月七日の由爰に見たり朔日比と上に云るは上旬比と云なるへし
けにまたほのかなる　○花もほのかに殘れるなり
あしかき　○河海に見だり今うたふ心は夕霧の方より女のことを親に申たるやうにとりなしてうたふなり
けやけよも　○てきめんなると内大臣のゝ給ふなり
としへにけるこの家　○花鳥とぶろけるを年へにけると展轉書寫の誤と云々此義いかゝ唯わさと用かへて謠ひ給ふなるへし今祝言の席なればさところけるなとは心つかひあるへきとなるを辨少將ふと用意もなくてありのまゝに謠ふべきとおぼして内大臣爰に聲を加へてうたひかへ給へるなるへし此こと爰に限らす常のこと也毛詩なご謠ふにも漢家に此例多し又孟子なごにも毛詩の詩尙書の詞所にしたかひ用にしたがひて文字讀をもあらぬさまに用かへたることめつらしからさることなり孥々書寫の誤とは見るべからず

いたうそらなやみして　○夕霧なり
朝臣や　○大臣頭中將をさしての給へるなり
花のかけ　○ゐたなりと云心なり内大臣の免し給へるを云り
松にちきれる　○面白き返答なり六帖「常磐なる松に契れる藤なれはをのかころとそ花はさきける
ねたのわさや　○頭中將は我方のまけたるよとねたく思給なり
おとこ君　○夕霧也
いつかしうそ　○よく堪忍したるよと思ひ給ふなり
よのためし　○夕霧の詞
いたきぬしかな　○いた〳〵しくいひたる人なるとなり
かはくち　○河海花鳥昔のことを云と云り如何なりいかにまもり給へともつゐにはまけてゆるし給ふよとなりかやうに當代のことにみるへきなり
あさき名を　○雲井鴈の歌大臣を今あさきとの給ふはいかさまにもらし給ふにかとなり
こめき　○大やうなるなりほめたるなり
もりにける　○くきた奥州也菊多剌關也俗にくきだ

の闕と云ふ
あかしはてゝ
御文は　○もとの如くいまだ忍び給なり
中々けふは　○忍ひ給し時よりも今日は中々返事を
もし給ひにくゝ思ひ給ふなり
つきせざりつる　○夕霧の詞也つれなくましますよ
しなり
とかむなよ　○今よりは忍ぶまじきそとなり
うちゑみて　○内大臣なり手跡を褒美し給ふなり
けさはいかに　○源の詞
御こともみえす　○御子ともみえさるなり
うすき御なほし　○色の薄きなり
しろき御そ　○直衣に重なりたる衣なり
丁子そめ　○かさねなり
くはん佛　○抄に見えたり
わさとならねと　○夕霧の一方にさたまり給へるを
うらめしと思ふ若人あるべしとなり
さし比のつもり　○ことかたに夕霧の心うつらさる
を云なり
女御の御ありさま　○女御は御幸心よからさる故也

きたのかた　○雲井の鴈の繼母也
あせちのきたのかた　○雲井鴈の實母なり
六條院の御いそぎ　○明石姫君の春宮へ參給ふこと
なり
たいのうへみあれに　○紫上なり此時分紫上の榮花
の盛なり若菜よりは思ふことのあるなり
中宮の御はゝみやす所　○六條院御息所の事を思ひ
ての給へり
なけきおふやうにて　○葵上のことなり此事只今の
給ひい出つれは禁忌なれば云さし給ふなり
中將は　○たゝ人にておひ出給ふをいふなり
宮はならひなき　○秋好なり中宮に立給ひてならひ
なき人となり[illegible]ひてそのむくひあるかとなり
かんたちめ　○紫上の棧敷に居給へり
そなたに出給ひぬ　○源の我御棧敷なり
藤内侍のすけも　○惟光が娘夕霧の心かけ給ふ人な
り
たゝならず　○藤内侍の心なり夕霧雲井鴈にさたま
れることとなり
なにとかや　○とをくなるをいへりかつ見つゝはか
く見つゝなり

おりすくし給はぬ　○わざと問給ふことなれはなり
かさしても　○そなたにてそよくしり給ふへけれとなり夕霧は及第の人なれはなり
はかせならては　○桂の葉風なり博士の心もあり
なほこの内侍　○夕霧心をとめ給ふなり
きたのかたそひ給へき　○紫上のそひ給ふへきとなり
かの御うしろみ　○明石上なり
かの人も　○あかしの上なり
この御心にも　○姫君なり紫上もさやうに思給へるなり不然ば何としても眞實の母戀しく思給て恨み給ふへきとなり
あなたにも　○明石上へ源のゝ給ふなり
その夜はうへそひて　○紫上そひて參給ふなり
たちくたり　○明石上はまつ今夜は斟酌有也
人のめおとろく　○事そき給ふなり
人にゆつるましう　○紫上の御腹ならましかはとなり
たちかはり　○紫上は退出ありて明石上かはりに參り給ふなり

御たいめん　○紫上明石上に御對面あるなり
かくおとなび　○紫上の詞
これもうちとけぬる　○このもの文字は姫君をも成人ありては始めなりと云心なり
ものなとうちいひたる　○明石上を可然人と紫上の思給あり
又いとけたかう　○明石上の心なり紫上を云り
そこらの　○源の方々の御中にも紫上をとりわきたるやうにし給へるも理りとなり
かうまてたちならひ　○是に立ならふことはと我身をも思あがれるなり
御てくるま　○紫上のこと花鳥姫君の御事とありいかゝ
いて給きしき　○紫上の退出を見れは及びなきてとなり
ひゐなのやう　○姫君の御事なり明石上の心なり
ひとつ物とも　○嬉きもうきも心は一つにて分れぬものは泪なりけり
おもふさまに　○姫君の御ありさまなり
宮もわかき　○春宮なり

うへもさるへき　○紫上なり
さりとてさしすき　○可然人と明石上を思給へり
なかゝらすのみ　○源の御命のうちにとなり
御まゐりのひある　○これも源の嬉く思ひ給ふなり
宰相の君も思ひなく　○雲井鴈のことを許し給事也
太上天皇になすらふ　○花鳥義可然
つかさかうふり　○年官年爵なり
むかしのれいをあらためて　○ての字清濁両義なり
　濁る時は太政大臣の御封にかはらすとなり
うちにまゐり給ふへき　○軽々しかるましきとなり
内大臣あかり給て　○内大臣より太政大臣になり給
　ふなり
あるしのおとゝ　○内大臣なり
中々人にをされ　○雲井鴈はなま〱の宮仕よりは
　夕霧に定り給ふを可然と思玉ふなり
たいふのめのと　○雲井鴈の乳母なり
あさみどり　○六位を云なりこき紫は三位なり花鳥
　義尤可然
はつかしう　○たいふの乳母なり
ふたはより　○なたゝるは名に立たるなりさやうに
　も思はさりし物をと陳したるなり
三條殿に　○大宮の住給ひし御所なり
せんさいとも　○楽天句童稚盡成人園林半喬木とい
　へるかことし
ふた所　○雲井鴈夕霧なり
なれこそは　○水こそあるしなれとなり
なき人の　○大宮などの御名殘もなきとなり
中納言　○夕霧なり
ありつる御てならひ　○前のやり水の歌ともなり
おきなは　○太政大臣なり花鳥夕霧と云々如何
そのかみは　○こといみしてとはの給ひつれどかく
　歌を讀給なりわかき人達成人して我身は老木とな
　れるとなり
つらかりし　○大臣をうらめしと思しことなり
六條院に行幸あり　○以下例さゝ両抄に見たり
御づし所　○御厨子所は主上の御膳を司さる所なり
　それによせられたる鵜飼なるべし
にしのおまへ　○中宮の御方なり
御さふたつ　○朱雀院と六條院となり
せんじありて　○主じの座をひきさげたるを同座に

改めさせ給ふなり
かきりあるゐや〳〵しさを　○冷泉朝覲行幸の作法
もありたきとなり
御ものに　○御膳にまゐるなり
色まさる　○たちならびしことゝなり
此きはゝ　○尊號に至りては及ひなしとなり
ときこそありけれ　○引歌能叶へり「秋をゝきて時
こそありけれ菊花うつろふからに色のまされは
みしかき物とも　○小樂なり
ふんのつかさ　○樂器をあつかる女房なり女司の圖
書なり
うたのほうし　○和琴なり
秋をへて　○朱雀院の御在位のうちにはかゝること
はなかりしとなり聊御述懐の心あり
よのつねの　○たゝ常しきの紅葉にあらずとなり
たゝひとつ物と　○源とうへと一つものとみえ給へ
り
中納言のさならひ給か　○夕霧なり是も又源によく
似給ひしとなり目さましとはこれをもほめ[illegible]る心
なり

若菜上

朱雀院のみかと　○此上巻は玉鬘源氏へ若菜參らせ
給ふことあり下巻には朱雀院の五十の御賀に若菜
奉らせ給へき由あり仍て巻名とせり上下にわかつ
ことは異朝の書籍等にあまたあり兩抄に見えたり
元來上下にわかちたる書もあり又後に註釋多くな
りて上下にわかちたる書もある也我朝には則日本
紀神代上下物語にはうつほの物語上下にわかてり
河海に後漢書卅巻の沙汰ありそれまてはむやく歟
但非ㇾ無ㇾ興哉此巻は源氏卅九の冬よりかけり女三
宮裳着のことあり四十の御賀事並に明石の中宮懐
姙の事四十一の三月明石中宮御産の事以上三ヶ年
の事ある也
ありしみゆき　○六條院への御幸なり
きさいの宮　○弘徽殿の大后なり
御母后崩御の事前巻に見へす今始て書出すなり孝
心にての仰なり
なをそのかたに　○御出家の事
みこたちは春宮　○朱雀院の御子達也春宮は今上の
御事なり當代は冷泉院なり
ふちつほと　○薄雲の女院の御妹なり式部卿宮なと

と兄弟なり
たかきくらゐ　○立后もあるへき人なれとさもなきとなり總して朱集院の御代には立后なし其故は内侍のかみこそ立后あるべき人なるを源と名をとり給ふ故にたゝ宮仕にて立后なきなりその外には可然人も參り給はさる故なり
御心のうちに　○朱集院の御心よはく御座ます故なり
にし山なる　○仁和寺なり抄に見えたり
みてらつくりはてゝ　○一本作りいてゝとあり
はゝ女御も　○承香殿の女御鬚黒の御妹なり
御うしろみ　○女御達の事なり明石の中宮などなれはなり
この世にうらみ　○朱雀院の仰なり
思ふやうなる　○御位にもつき給はゝとなり
三宮なん　○御愛子たるによりてなり
女御にも　○承香殿なり
されとはゝ女御　○此承香殿の女御は藤壺の女御の寵にはおしけたれ給し人なれば行末とてもさのみ心にはいれ給ふましき物をと草子地にいへるなり

御くらゐはさらせ給へれと　○近臣はなほしたひ奉る人多きなり
故院のうへ　○朱雀院の御詞なり
此院　○源なり
いまのうちの御事　○冷泉院なり
はかなき事　○すまの左遷の事
春宮おと　○明石の姫君をまいらせ給ふこと
この秋の行幸　○藤裏葉の行幸なり十月なれと秋と書る尤優なり此類前にもあり
すき侍りにけん　○是より夕露の返答なり一向幼少の時のことなればなにともしり侍らずとなり
年まかりいりて　○夕霧の自らの事なり
大小
いにしへのうれはしき　○前にはかなきことのあまりに心おかれ奉ることゝありし返答なり
故院の御ゆいこんのことも
御位におはしましゝ　○其比源氏は年もわかゝりしなり末上に致仕の大臣なとおはせしかは我心の程奉公なきことをの給ふなり
まつりことをさりて　○只今閑にましますす時に其心の行衛をもとけさる口惜きことゝなり

廿にもまたわつかなる　○夕霧今年十九歳なり
おほきおとゝのわたりに　○朱雀院の御詞なり雲井
　雁にすみつき給ふことなり
さすかにねたゝ　○女三の宮の御うしろみにもとお
　ほす心なり
はか〳〵しくも　○夕霧の詞
かの院　○六條院なり
かれは　○六條院なり以下源のことをほめて朱雀院
　の丶給へるなり
うるはしたちて　○禁中公事等の時の事なり
廿かうちには　○源は廿一歳にて參議に任し給へり
　聊も奢る心もなく昇進なとも卑下し給ひしとなり
それにこれは　○夕霧は昇進早速なるなり
これもをさ〳〵　○夕きりのことなり
姫君の　○女三宮なり
式部卿のみこのむすめ　○紫上なり
中納言は　○乳母の詞也
かのわたり　○雲井雁のこと也
かの院　○六條院なり
やんことなき御ねがひ　○紫上の外に本臺をもとめ
　給ふ心のあるとなり
せんさいゐん　○權なり
ふれはわせ
女われならは　○女にてあらば必す源にはあさむか
　るへしとなり
御心のうちにかんの君の事も　○草子地なり
左中辨　○系圖の外の人なり
うへなんしか〳〵　○乳母左中辨に物語するなり
かの院　○六條院なり
辨いかなるへき　○左中辨の詞也
やむことなくおほしたるは　○紫上のことなり
それにことよりてかひなけなるすまゐ　○紫上によ
　りきしたる樣にてみなあるかひもなきとなり
御すくせありて　○自然みなかた〳〵のかひなきす
　ちにてまし〳〵ては如何となり
なほいかゝとはゝからるゝ　○さま〳〵思案して猶
　しりがたしと思へる面白き語なり
さるは此世のさかへ　○源の自稱なり我身の上に不
　足なることはなきを本臺しか〳〵ともなきのみ不
　足なるとなり紫上も人からはよけれともじき〳〵

にむかへ給へる本妻にはあらす
かた〳〵につけて　○方々多けれと皆じうぶんならざるたゞ人となり
それにおなしくは　○女三宮はにつかはしきことゝいへるなり
ほど〳〵につけて　○乳母詞なりたゞ人さへかたかたのある中には如何となり
いまの世のやうとて　○上古の事は淳素にてたほやうにてましますもよきことなるを今の世は何事にもたつして我心と分別し給はてはと當時の習ひを云に此女三宮は何事も餘りにおほやうにてましますとなり
おほかたの御心おきて　○上のおきてにしたかふなれはなり
しかおもひたどるに　○朱雀院の仰なり
いひもてゆけば　○高下同事なり宮なと申せはとて同ことゝなり
すべてあしくもよくも　○善悪につけて親の定めたることは主のとかをはのかるゝことゝなり
をやにしらせす　○孟子曰　不待父母之命媒約之言鑽穴隙相窺踰墻相從則父母國人皆賤之
みつからの心より　○花鳥三界唯一心云々
あやしくものはかなき　○女三宮の御事なり
これかれの心にまかせ　○乳母達の心にまかすへからすとなり
いよ〳〵わつらはしく　○乳母の心なり
ふかきほいも　○御病をもきによりて佛法修行も成就しがたきとなり
あまた物せらるべき　○方々のあるをもしらずかほにし給べきとなり
兵衞卿宮　○螢宮なり
ならひ　○餘によはき所のあるなり
大納言のあそん　○系圖の外なり家司は女三宮の勅別當をのぞむことをいへり
むかしも　○嵯峨天皇延喜帝の御女の事抄に見えたり
うゑもんのかみ　○柏木なり
内侍のかみ　○六君なり太政大臣の室は此内侍の督の兄弟なり
あねのきたのかた　○二條大殿の御むすめなり

兵部卿宮　○玉鬘を望み給ふてその本意をもとげ給はざるをいへり
權中納言　○夕霧なり
女君　○雲井のかりなり
のちの世　○後代のことなり
この宮の御事　○六條院にはさき〴〵より聞をよび給ふなり
いくはくたちをくれし　○朱雀院は源氏に三歳の兄にてましますなり
それたにいと不定　○次第々々といへばとていくはくのちがひもなし況んや不定の世間なればなり不定のさだめなさと書たる重詞にあらず假名のものはかやうにかけること常のことなり
たゝうちにこそ　○入内可然となり
まつの人々　○はやくよりまひりたる人とて別に寵のあることはなきとなりさやうの所にはかゝはるへきにてはなきとなり
故院の御時　○先蹤をひけり弘徽殿の大后は薄雲に寵をうはゝれ給ひしことなり
いきまき　○威勢ありてとなり

かのみこの御はゝ　○女三宮の母と薄雲と姉妹なることなり
かたちもさしつぎ　○藤壺につぎては此女三宮の御母形ちよきに聞えありて源も床しく思給ひしなりされば此姫宮をは源はゆかしく思ひ給ふべしとなり
としもくれぬ　○十二月になるをいへり歳暮にはあらす奥に年もかへりぬとかけるにて年の暮は見えたり
かへ殿　○栢梁殿朱雀院にあり
もろこしの後のかさり　○花鳥に見えたり
いまふたところ　○左右の大臣なり
かのむかし　○齋宮に立給ひし時のことなり
宮のこんのすけ　○中宮の權亮なり
かゝることぞ　○院へ見せ申さるべきことゝなり
さしなから　○さしながらはさながらなり櫛に縁ありて面白しそのまゝ爰に傳受したるとなりかみさひにけるとは久しきなり卑下の心なり
あえ物　○あやかり物となり秋好中宮は幸人なれはなり
むかしのあはれをは　○大極殿にてのことなり今日

は祝言の方はかりなり
さしつきに　○中宮のさしつぎに此女三宮をみる物
　にもかなとなり
よろしきほとの人　○中品の人さへとなり
御いむ事　○授戒の阿闍梨なり
おさなき宮　○女三宮事なり
御たうばり　○源の事なり
こと〳〵しからぬ事　○常の檳榔毛の車なるべし庇
　の車などは中古より出來ぬるものなり
かはり給へる　○御落飾のさまなり
故院に　○源の申給へる詞
このかたの　○出家の志のことなり
けふかあすかと　○院の御返事
心さしもかなふ　○今御本意の志をし給ふへき御氣
　力もなきとなり
たゝこの心さしに　○かく念誦などすへき志の故に
　かけとゝむるかとなり
御心のうちにも　○源の心中なり
たゝ人よりも　○源の詞なり
女の御ため　○何事も春宮の御心のまゝなるへけれ
と女の御爲などには御心のまゝにはありかたきこ
　ともあるへしとなり
猶しひて　○可然御うしろみをさため給ひてよかる
　へしとなり
さやうにたもひよる　○院の御返事なり
いにしへのためし　○嵯峨天皇御子を忠仁公に給ひ
　し事
ましてかく　○院の卑下しての給ふなり昔たにさや
　うのことは侍り今はましていかなる人にも給はる
　へきことゝなり
しかすつる中にも　○面白き詞なり
中納言のあそん　○源の詞也
ふかき心にて　○源の御身は深き志もあるへきとな
　り
たはします御かげに　○何事も御在世にかはること
　もあるまじきをされど我身の行末もみじかゝるべ
　きことを如何となり
せんかう　○沈香のかけはんなり
御はち　○御出家の後たるによりて鉢を用給なり
あはれなる　○草子地なり

なま心くるしう　○源氏紫上にかたり給はんことい
　かゝとなり
さしもあらじ前齋院○紫上の心なり槿の齋院をも念
比にはし給へともとりたてたることはなきなり其
類なるべしと思ひ給ふなり
なに心もなくて　○紫上のさまなり
みさため給はさらん　○只今に心の程は見定め給ふ
　べきとなりかやうのことの出來ぬるにつけては一
入大切にもすへきとなり
いまのとし比　○近年となりては夜かれもなきとな
り
その夜は　○朱雀院より歸り給ふ夜なり
院のたのもしけなく　○源の詞也
あちきなくや　○紫上なにとか思給ふべきとなり
かの御ため　○女三宮なり
はかなき御すさひ事　○紫上は是程までなきことを
　だに嫉妬の方はふかき人となり
いとつれなくて　○色にはいたし給はざるなり
あはれなる　○紫上の詞也
めさましくかくては　○紫上の此まゝにてあるも人
たにもとかめすは此まゝにてあるべきとなり
かのはゝ女御　○紫上の姑なりされは他人にてはな
　きなり
あまりかう　○源の詞
人のくちといふもの　○人のなかことを云をいへり
河海孟子をひけり
心ひとつにしつめて　○よく〳〵遠慮をめぐらすべ
　しとなり
心のうちにも　○紫上の心中なり
我心にはゝかり給ひ　○いさめなどもすべきことに
　てはなしとなり
おのがどちの心より　○源の御身よりし出し給ふこ
とにてもなきなりされば我身の物思なるさまをは
見えじとふかくつゝみ給ふなり紫上の天然の性の
奇特なり
式部卿宮のおほ北のかた　○紫上の繼母眞木柱の姫
　君の祖母なり
おいらかなる　○いかなる人のうへにもかやうの方
　の思はあるとなり草子地なり
いまはさりともと　○紫上の今は本臺になりてなら

ふ方なく見へしにかやうのこと出來ぬるは是則盛
　者必衰の理りあらはれ侍り
年もかへりぬ　○源四十歳なり
きこえ給へる　○螢兵部卿宮柏木藤大納言なとなり
さるはことしそ　○源四十歳なり
左大將殿の北方　○玉鬘なり賀の時若菜を用ること
　常のことなり古今　君かため春の野に出て若菜摘
　の歌の例なり
しのびたれと　○當時玉鬘は太政大臣の御女め左大
　將の北方なればならひなきいかめしさなり
みなみのおとゝ　○六條院の母屋なり
いしなとは　○忍び給ふ故に略するなり奥に紫上の
　し給ふにも倚子はなきなり
御ちしき　○唐莚に縁をさしたる物なり
よつすへて　○四十の賀たるによりて四あるなり
夏冬　○四季を云り
かうこ　○かゝけの箱うちみだりの箱なとの類あり
かざし　○作り花をたいにさして老をかくすへき表
　示なり
おましに　○外さまに出給はんとて先內にて玉鬘に
　對面あるなり
ひがかぞへ　○源の御さまのわかくきよらなるをい
　へり
をさなき君も　○玉鬘の子達なり花鳥の義尤可然
かんの君はうちつゞきても　○玉鬘の心には此子達
　をば源には見せ申まじき由思ひ給しなり
すくるよはひも　○源の詞
かゝるすゑ〳〵　○御孫達なり
いつしかと　○雲井御腹なり
人よりことに　○此御賀を第一にし給へることなり
わかはさす　○御子達ひきつれてまいりて御年をい
　はふ由なり
せめておとなひ　○せめてはしゐての心なり源氏に
　はぢながらおとなしく云ひなし給へるなり
さえはかり　○幽玄なり祝儀の氣色ばかりなり
こまつはら　○末遠き人の齢にひかれて我身も年を
　はるかに摘出つべしとなり
式部卿宮は　○眞木柱の祖父宮なり玉鬘の所をおは
　して大將のし給へることなる故に遲參し給へるな
り

御うまごの君たち　○大將の御子達式部卿の宮の孫達なり
こもの　○獻物籠物兩義なり
おりひつもの
おほんつき　○御器
御ふね　○管の惣名なり名物ともを調へ給ふなり
をさ〳〵をとるましく　○父大臣におとらざるなり
わらゝか　○和なり愛敬づきすみのほる音のあるなり父大臣はした聲にゆる〳〵としたるかたのあるとなり
かうしもは　○日比はかくはかりの上手とはきこゑさりしとなり
兵部卿宮　○螢なり
宜陽殿　○昔は樂器書籍等ををさめをかるゝ所なり
故院　○桐壺の帝なり
一ほんのみや　○朱雀院の同腹の姫宮なり
御つたへ〳〵　○一品の宮へ太政大臣申うけ給へるそのつたへ〳〵をおぼし出るなり
かへこゑに　○呂の律になるなり
あをやきあそび給ふ　○此青柳に鶯もおどろきぬへしとかけり面白し然も青柳をかた糸によりて鶯のといへる心もあれはなり
わたくしことゝ　○公義はてとかきりありてさたまれる法式はかりなり是は私ことなれはこと加はへて一段と結搆し給へるなり
かう世をすつる　○源の詞
とし月の行ゑも　○かそへしる人なかりせは徒に谷の松とや年をつまゝしよくかそへしらせ給ひけるよとなり
世にすみはて　○大將の室に定り給ふ事源の御恩ぞとなり
十餘日　○とをかあまりと讀なり
うちにまゐり　○入内の義をまねふなり
けいしのそみ　○藤大納言なり
御車よせたり　○臣下の禮は自ら車をよするなり今源は院號蒙り給へばさはあるまじきをこゝは源の謙退の義なり
たゝ人におはすれは　○草子地なり内まいりにてもなし
むこのおほ君　○催馬樂の心なり

いとゝありかたし　〇紫上を源のありがたく思ひ給ふなり
にくけにをしたちたる　〇嫉妬などの給ふことはあるましきとなり
とし比さもならひ給はぬ　〇紫上の心なり一夜もよかれ給はざりしにと也
御ぞどもなど　〇紫上なり
などてよろづの事　〇源の心の中なり紫上をさしをきて又ともみるへき人もなき世なりとなり
心よはく　〇我心よはき故となり
中納言をは　〇夕霧は雲井鴈の外にはまたわくる心もあるまじと見こめ給てしいての給ふこともなかりしを我心よはき故となり
こよひはかりは　〇源の紫上へ申給ふ詞
すこしほゝゑみて　〇紫上なり
みづからの御心なからだに　〇是より後のとたへあらんこそ身なからも心づきなかるべけれとあるをうけたり
すゝりを引よせて　〇紫上なり
めにちかく　〇さためなきことゝなり

いのちこそ　〇此二人の契は世間の定めなき契りの類にてはなきとなり
とみにも　〇源なり
とし比さもやあらん　〇紫上の心なり権の齋院なとの事なり
いまよりのちも　〇世間の不定なりいかなることもいてきたりぬへきとなり
つゆもみしらぬ　〇紫上なりあらぬさまをつくり給ふなり
かう人のたゝならす　〇紫上の心なり
がくこれかれ　〇紫上の詞也
ひとしきほとおとりさま　〇何事も人からによることなれは聊も此宮に對しては心をたつへきこともなきとなり
むかしはたゝならぬ　〇此中務中將君なりはしめは源の御方の人なり
かせうちふきたる　〇餘寒時分なり
かのゆめに　〇源の夢なり
夜ふかきもしらす　〇鳥の音にかこつけ給ふなり
やみはあやなし　〇侍ふ人々のことなり

猶のこれる雪と　○樂天詩子城陰處猶殘雪子城とは
北方を云ふ紫上の方は北也誦し給へる心面白し
ひさしう○夜かれも久しくなかりしとなり
そらねをしつゝ　○源をこらしめんのためなり
こよなくひさしかりつる　○源の詞なりそらねをせ
しことなり
かぎりなき人と　○女三宮は族性天下第一なりされ
と紫上程の用意はなきとなり
しんてんには　○女三宮の御方なり
けさの雪　○文の詞也
さきこえさせ　○文にはあらで詞にて云るなり
ことなる事なの　○源の心也
女君も　○紫上なり
けさはれいのやうに　○五日目なるへし
こゝにはづかしげもなき　○人がらを執し給ふ故に
かう執し給へり
しろきかみ　○すく〳〵しきさまなり
なかみちを　○さわるべき程の雲にはあらされども
なり

やかてみいたして　○何となく紫上にはしのび給心
あり
花をまさぐり　○文につけ給し花の殘りたるなるへ
し
袖こそにほへ　○をりつれは袖こそ匂へ梅花ありと
や爰に鶯のなく鶯を聞て歌の心によせて花をひき
くし給ふなり
御かへりすこし程ふる　○やがてみいたしてとある
このまゝにて御かへりをもやかてみ出給ふべきの
心あれど程ふるまゝにいり給ふなり
はなといはゝ　○梅を評していへり
さくらにうつして　○花鳥說一義は可然されどたゞ
花のうへはかりを評して云るにて面白歟此文なと
つかはし給へは紫上の機嫌はとるへきとてかやう
に花の上なとを云てまきらはし給へるなり
これもあまた　○たゞ爰もともやかくやと云てま
きらはし給へるなり悉皆紫上を慰めんとて　さま
〳〵のことをの給ふなり花鳥の義無益也
御かへりあり　○女三宮よりの御返事なり
御てのわかきを　○女三宮の手跡の幼稚なるを紫上

にはゝかり給ふなり
みぬやうに　○紫上の用意なり
いとおしくて　○こと人のことならましかはとやか
くやとの給ふへき物をとなり
心ことにうちけさうし　○源の御かたちなり
いまたてまつる　○三夜の後はひるはゝしめてみた
てまつる人々なり
いてやこの御ありさま　○紫上程の御おほえは此宮
にはましますへからすとなり
ちこのおもきらひ　⊙いときなきさまなり
おいらかに　○大やうなり河海の說可然なり
えみはなたず　○わらひがちなり
むかしの心ならまし　○源のわかき時の心のまゝな
らはいとひもし給ふべきとなり
よそのおもひは　○いま此宮をあつかり申ことはよ
そからの思ひやりはいかめしかるへしとなり
さしならひ　○紫上をば我よくそだてたるとなり
月のうちに　○二月中なり仁和寺にうつり給ふなり
いかにきく所やなと　○こなたの聞えなとをいかゝ
と憚り給はてともかくもあるへしとなり

をさなき人の　○院の御文の詞
たつね給べき　○よそほかの人にてはましまさゝる
となり三女宮の御母は紫上の御をばなればなり
すむきにし　○此世子によせたり
たゝ心をのへて　○懐をのぶるはかりなり
そむく世の　○此世に殘る御心あらはしゐてかけは
なれ給ひそとなり
いとおしきよのさわき　○すまのうつろひのこと
むかしの中納言の君　○昔の源の心しりをしたる人
なり
哀にかなしき　○御山ごもりのことなり
心のとはんこそ　○なき名ぞと人には云ひてありぬ
べし心のとはゝいかゝこたへん此歌君子たるへき
ものゝ心をつくへき歌なり　論語　內省不疚と云
り
いにしへわりなかりし　○弘徽殿の大后在世にたに
もありそめしことゝなり
しのたのもり　○和泉守なれば云り
あやしく　○朧月夜の詞
御とふらひ　○御山ごもりの御とふらひなり

されはよ　○源の心なり朧月夜聊かろ〳〵しきさまなり
いとわかやかなる　○源の詞
たまもにあそふ　○春の池の玉もに遊ぶ鳰鳥のあしのいとなき戀もする哉鳰鳥を鴛に書かへたる面白し
平仲　○そらなきに非すと云り
とし月を　○此障子を相坂によせたり泪かとはなみたかななり
なみだのみ　○あふみちは近江にそへたり
花はみなちりすき　○散過なり
このふち　○朧月夜の心なり
さるかたにても　○中納言君の心なり朧月夜は源の人にてまし〳〵てもにくからさる物をとなり
故宮の　○大后のことなり
やう〳〵さしあかりゆく　○朝日をいへり
しづみしも　○昔のこともさらに忘れざれどもとなりすまの心あり
花のかけは　○朧月夜の心に源を心にかけしとなり
身をなけん　○源の身をなげんとよめるをことはれるなり眞實身をなくへき淵ならば浪のかゝるをもいとふことあるましきことなれは浪もかけしとよめるなり
心なからも　○互にゆるさぬことゝなり
そのかみも人より　○草子地なり
いみしく忍ひいり　○源の御さまなり
女君さはかり　○紫上は大方推量し給へるなり
またもらすへき　○紫上へは語り給ふなり
うちわらひて　○紫上なり
なかそらなる　○とにかくに我身は中空になるへしとなり
かう心やすからぬ　○源の詞也
きりつぼの御かたは　○明石の姫君なり十三なるへき歟物語の上に惣じて源の外は他人の年の沙汰勘るに及ばさるなり
めづらしき　○御懐姙なり
姫宮のたはします　○女三宮のまします西のたいの東なり
明石の御かた　○實母のつき給へるなり
姫君しも　○女三宮に紫上此ついてに對面あるへし

となり

うちゑみて　○源なり

宮よりも　○紫上の心なり明石上を恥く思給ふなり

たいに侍る人　○源女三宮へ申給ふ詞なり

しげいさ　○桐壺なり

はつかしうこそは　○女三宮の御返事なり

人のいらへはことにしたがへて　○源の詞なり人の何事をか云べきを其返答とてかねては敎がたきことゝなり

なに心もなき　○源の心也女三宮何心もなきさまを紫上の見しり給ふへきことの恥きとなり

さの給はんを　○紫上の思よりての給ふをかへさひの給ふべきをいかゞとおほすなり

われよりかみの　○紫上は式部卿宮の御女めなり我身をは隨分と思給ひしとなり

身のほどのはかなきさま　○しき〳〵の嫁娶の義なきを口惜となり

おのづからふることも物おもはしき　○怨者其吟悲の心なり

宮女御の君　○宮女御のわかくうつくしき目うつしにも紫上のなほ類なく見えたまへばいかばかりのよき人なるらんとなり

身にちかく　○我身の人の秋にあひぬるよしなり青葉の山名所にてはあらざる歟夢のうきはしの巻にもあり夏山を云るなり爰も其類なるべし又名所にもあるにや

みつとりの　○源の歌なり五文字面白し夏山は色かはるものなれど此水鳥の青羽はかはることなきことくに源の心は不變なるとなり萩の下葉は紫上の心にとりなすなり

ことにふれて　○紫上の御恨み深きとなり

こよひはいつかたにも　○紫上も宮も御隙なれはなり

かのしのび所に　○朧月夜なり

いとあるまじき　○心にはよく思しり給へどもなり是世間のならひなり人のつゝしむへき所なり

春宮の御かたは　○明石の姫君なり花鳥の說可然春宮の女御なれはなり

しちのはゝ君　○明石上なり

思ひへだてす　○紫上の御方よりも思ひへだて給は

ざるなり
いとをさなけに　○女三宮の御さまなり
むかしの御すぢ　○紫上とはよそならざることなり
中納言のめのと　○女三宮の御乳母なり
おなしかざし　○御親類の由なり
たのもしき　○乳母の詞也たのもしき御かげとは母女御朱雀院なり
そむき給にし　○朱雀院もかくの給ひしとなり
いとかたしけなかりし　○紫上の詞也
世中の人もあいなう　○互に嫉妬の心は必すある世間のならひなり
ことなほりて　○世間にさま〳〵のこと云しも此御對面の後はことなほりたるとなり
さがのゝみたう　○源のたて給ふ堂なり御賀のことあり
としみ　○年滿なり玉鬘も正月廿三日に御賀あり源の御身にとりて子細ある日なるべし自然誕生日などなるか
この院は　○六條院なり御祈は嵯峨にてありて御賀はこなたにて御遊以下のことあるなるへし

かた〳〵も　○花散里などなるへし
たいどもは　○曹局をもはらひてかざり給ふなり
うらの心は　○おほひどもをしたるなるべし
かさしのたいは　○前にもあり老をかくす心なり例花鳥にあり
式部卿宮　○紫上の父なり
せんすいたん　○だんは庭の壇などか一本瀧とかける本あり是も宜しき歟
つかさくらゐ　○古へは源は中將致仕の大臣は頭中將なり只今二人なから官はことの外すゝみたるとなり
きたのまん所　○紫上を北政所と云べし皆家司などを補する物なれはなり源は今院號を蒙り給ふ程にさはあるましきを源の謙退の心にてあらためずしてある義なり
御ことゝもは　○樂器ともなりもとからの名物にて手ならし給器なり桐壺の帝の御代を思ひ出給ふ也
故入道の宮　○薄雲なり
故宮の　○うすくもなり
中宮、○秋好なり

ありかたき御はくゝみ　○中宮の御心の中なり
ちゝみやはゝ宮す所　○二親の御さたなかりし念な
さを今源の御ためにとりそへて沙汰あるへしとな
り
かうあなかちに　○何事も省略あるへきよしを源は
申給へは心ならす事ともとゝめ給ふとなり
四十の賀といふ事は　○源の心はかやうに方々の沙
汰を無益と思給ふ故にかく云すさめ給ふなり又命
長き例もあれと先多分につきてかくの給へり抄に
見へたり
おほやけさま　○公事なれはなり
おはします　○六條院の坤の町なり
さき〳〵にことにかはらす　○前の御賀の時のこと
し
ろくなと　○前々には樂人の祿はかりなり爰には中
宮のなれはかくのことくとなり
なたかきおひ　○石の帶なり
故前坊　○中宮の父宮なり
ふるき世の　○一のもの
むかし物かたりにも　○草子地なり

うちにはおほしそめてし　○主上には行幸もなかり
しことを御心の外におほしめしたることなり
中納言にそつけ　○用意し給へるをむなしくし給ふ
へきにあらされは夕霧にゆつり給へるなり
右大將　○系圖になし
此中納言　○大將の闕あるによりて夕霧を大將にと
おほすなり
うしとらのまち　○花散里の御方なり
所々のきやう　○内裏よりし給へるゆへなり
頭中將せんしうけ給はり　○藏人かたの沙汰なり
けふはおほせ事　○内よりのおほせなり
うちの御て　○宸筆をそめ給へるなり
からのあやのうすたん　○屛風の面なり
御馬四十疋　○上より給はる御馬也例花鳥に見へた
り
まんさいらく　○此外に樂あまたあるへしされと緣
あるはかりをあけて書るなるへし
けしきはかりまひて　○舞を略して御前の御あそひ
になれるなり
こゝのさうの本　○手本なるへし

うち春宮一院　○一院は朱雀院なりいつれも源をはなれ給はぬ御中なりとなり
かのはゝきたのかた　○葵上と六條御息所となりされと其御末々は猶繁昌あるとなり
こなたのうへ　○花散里なり
三條の北のかた　○雲井雁なり
こなたには　○花散里なり夕霧を子のことくし給へるによりて今日のことの數に入り給ふとなり
としかへりぬ　○源四十一歳也
ちかつき給ぬる　○御産近きとなり
ゆゝしき　○いま／＼しきとなり葵上のことなり
あへかなる御ほと　○明石姫君十四歳歟
所をかへて　○物の氣の故なり
あかしの御まち　○明石上の住給ふ町なり
はゝ君　○明石上なり
たほあま君　○明石上の母なり
このありさまを　○三歳以後ははしめて姫君をみたてまつるなり
けにあはれなりける　○姫君の御心の中なり
いとあまり　○草子地なり

仙人（センニン）
御かたまいり給て　○明石上なり
日中（ニッチウ）
あなみくるし　○明石上の詞
くすしなと　○いしやなとこそかやうにしてはさふらへとなり
よしめきそして　○年よりたれとよしめきすくしたるなりそしては殺の字なり河海の說如何
かはらかに　○さはやかになと云詞なり
こたいのひかことゝも　○明石上の詞なり
いまはかはかりと　○委きことは御身の位をさたまりて申へきと思し物をとなり
あなかたはらいた　○侍ふ人々のたもへるなり
おいのなみ　○さすかに人もとかむへきとは思へるなるへし
しほたるゝ　○姫君の御歌委きことは今日此尼君の申給ふに始めてしり給へるなり
世をすてゝ　○入道のことなり明石はあきらかなる方によめり心はあきらかなる方にあるへしされと子を思ふみちはゝれかたかるへし

ゆめのなかに　○夢におほえ給はさるとなり

おとこみこ　○此御子後の春宮なり

春宮のせんしなる内侍のすけそつかうまつる　○うぶ湯にまいり給ふなり

うち／＼の事も　○明石の姫君の母と云ても口惜からさるとなり

そのほとのきしき　○草子地なり

朱雀院　○朱雀より有べき事なれど御隠遁なるによりてなり

たほやけ事には　○中宮よりし給へる故に何事もきらをつくしたり公義は限りあれはさもなき物なり

大將のあまたまうけたる　○上古の風たほやうなるなり

にくらかにも　○明石上をほめたり

見えかはし給て　○紫上と明石上となり

宮の御とく　○心のへたても今はなきなり

思ひはなるゝ　○獲麟一句なり

このとしころは　○是より文の詞

わかおもと　○明石上なり

すみの山を　○須彌の山なり花鳥に過去因果經をひけり妙なり王道のひろき心なり

右の手に　○明石上をまうけたるなり女なれは右なり

月日のひかり　○月は明石の姫君也日は今の若宮也

みつからは山のしも　○入道は世に心なき故に恩光にあたらさるなり

山をはひろき　○四海を掌にいれ給ふなり

ちひさき舟に　○はんにやの舟に棹をさして彼岸に至るへきなり花鳥の義尤可レ然

又この國の事に　○近衛の中將を捨て播磨守になりぬることなり

わか君を　○明石上の果報を頼みしとなり

わか君國のはゝとなり給て　○是は姫君の御ことなり國母となり給ふへきとなり

このひとつのおもひ　○現在の因をみて未來の果を可レ知なり

ひかりいてん　○春宮の世をたもち給ふへきことをいへり又は入道の闇より明におもむく心もあり妄想とは思へとも今語りいつるとなり

月日かきたり　○文の日付を命日とも思ひ給への心

あり
ねかひ侍所に　○安養國なり
いまはと世をそむき給し　○殘り侍りけりと書る面
白し一年の別れの悲しさにつきたりと思ひしにた
ゝ今此音信を見侍て思へは猶かなしさの思ひはか
きりもなき物なりけりとなり
佛の御てし　○佛は常在靈鷲山なるたにも弟子とも
は悲しみ侍しに此尼君のなけきことはりなりとな
り
おもしく　○明石上なり
たほろけならては　○おほろけならぬことならては
となり
わか身をさしもあるましき　○年月我身をあかめ給
しは此夢のたのみなりけるよ又行末もたのもしき
となり
にはかにかくおほえぬ　○源の御ことなり
人にすくれん　○明石上の詞行末のことは何とも思
はさるなり
數ならぬ身には　○姫君をも我物なから我ものとも
えし侍らぬとなり

さるへき人の　○父のためとこそ思ひしにとなり
きのふもおとゝの君　○明石の上の侍らひしを源氏
の御覽せしなり
あか月に　○南の對へまいり給ふなり
わか宮は　○尼君の詞
いまみたてまつり　○明石上の詞
女御の君　○姫君なり
院も　○源なり尼君のことをいつれもの給ひしとな
り
又うちゑみて　○尼君なり
このふはこは　○入道の方よりの文箱なり
宮よりとくまいり　○春宮よりなり姫君にとくまい
り給へとなり
みやす所は　○明石の姫君なり爰にて始て息所と書
り后かねなる人を云なり此物語には大略皇子誕生
以後を御息所とはいへり
たいのうへなとの　○紫上なとの我御方にわたり給
て人すくななる時なり
おまへに　○姫君のおまへなり
思ふさまに　○明石上の詞なり國母なとになり給て

のこと〻思へともとなり
かはかりとみたてまつり　○姫君も成人ありつれは
　我身世をそむくとも心やすきとなり
身にはこよなく　○明石上の我身よりはまさりて紫
　上を千秋萬歳と思ふとなり
かくむつましかるへき　○明石上のれいふかきさま
　なり
いとあはれに　○姫君なり
姫君の御かたに　○女三宮の御方なり
みつからは　○明石上なり
わか宮は　○今度誕生の若宮なり
御かた　○明石上几帳すこしひきよせてかくろへて
　ありなから此御返事を申せり
いとあやしや　○源の詞
こなたにわたりて　○紫上のこなたへまいり給ふへ
　きことゝなり
いとうたて　○明石上の詞
うちわらひて　○源なり
御中ともにまかせて　○我身は口入はすましきかと
　なり

まつはかやうに　○几帳に隠れなから物申給を云り
ありつるはこ　○文箱なり
なそのはこそ　○源の詞
あなうたていまめかし　○明石上の詞なりわか〳〵
　しくなり給へる御心ならひにかやうの事を承るよ
　となり
物あはれなる御けしき　○源のあやしく思給なり
わつらはしくて　○あやしみ給ふことのわつらはし
　さにありのまゝに申なり
あはれなるへき　○源なり
こゝらのとし比　○明石の入道年比をつむによりて
　罪障の消滅もことの外なるへしとなり
さかしきかた〳〵の人　○貴僧高僧とてあまたみ侍
　しうちにも名利にのみそみて眞實の道者は明石の
　入道程の人はなかりしとなり
かやすき身ならは　○今一度對面ありたきとなり
いまはかの侍し　○明石上の詞
さらはその　○源の詞
ふかきちぎりの　○一入のことなるへしとなり
此夢かたり　○明石上の事なり

いまはとて　〇都へのほり給し時のことなり
猶こそあはれは　〇面白き詞なり
とり給て　〇文箱をとり給てなり
なをほれ〳〵しからす　〇年老たりとも見えすと手
　跡をほめ給ふなり
たゝこの世ふる　〇後世のことはかりを思ふなり
かのせんそのおとゝ　〇河海に小野宮九條右丞相の
　ことを引り
女子のかたに　〇只此物語の上にて明石の姫君のこ
　とをの給ふなるへし花鳥は女子の方より相續のこ
　とを引り是もよろしき也但此物語の上にてみるへ
　しとなり
つきふし
この夢のわたり　〇夢のことを書ることとなり
すゝろにたかき心さし　〇明石の入道の志なり
よこさまにいみしき　〇入道のきせいにより源氏の
　左遷のことも出來ぬるとなり
心のうちにをかみて　〇渇仰してとり給ふなり
これはまたくして　〇源も御願文あるへしそへてた
　てまつるへきとなり

いまはかく　〇源姫君へ敎訓なりことの由來は入道
　の文にきゝ給へはとなり
あなたの御心はへ　〇紫上のことあなたに思ひ給ふ
　ましきとなり
もとよりさるへき　〇夫婦兄弟抔は申に及はすと也
よこさまの　〇非道なる他人の心をすかし給へるは
　一段の志なるへしとなり
こゝになとさふらひ　〇今明石上姫君にそひ奉り給
　ふにもかはることなくあつかひ給へる紫上の志の
　殊勝なるをいへり
いにしへのよのたとへ　〇繼母のうはへ計なるをし
　りてもおもての儘にむかへるがよきとなり
思ひなほる　〇かくうらなくたのめはかへりて思な
　ほることのあるなり
むかしの世のあたならぬ人は　〇あたならぬ人とは
　實ある人なり實ある人は人に恨をのこさゝれは人
　のなかことを云へともそれはやかてはるゝ物とな
　り
さしもあるましき　〇かと〳〵しくいへはおのつか
　ら踈遠なるなり

おほくはあらねと　○源のみ及ひ給ふ人々をの給へり

ゆへよし　○ゆへとは本性なりよしは心もちひなりものを分別する心つかひなり此段はゝきゝの巻の品さための心にかよへり此物語の本意くりかへし〳〵心をならふへき事をいへり殊勝のものなり

さま〳〵　○それ〳〵に人の心はあるなり

えたるたかありて　○すつへきもなく又取へきもなきなり

このたいを　○紫上なり

かたへの人は　○紫上の外の人は思やりたると明石の思ふなり

むつひかはして　○紫上とむつひ給ふとなり

の給はせぬさ　○明石上の詞也

めさましき　○若紫上めさましき物にし給はゝ此御前あたりにちかつきまいるともあるましきとなり

つみなきさまに　○紫上何ことをもみかくし給ふなり

その御ためには　○明石上には御志はあるましきなり女御を念比にし給ふ故となり

うちそひても　○内すみし給へるに紫上は不斷そひ給ふことのかなはさるかはりにと明石上を思ひ給へる故にや心安く思ひ給ふ故となり

それもまたとりもちて　○明石上卑下して實母のやうにし給はさるかよかるへしとなり

なほし所なく　○よき人となり

さりやよくそ　○明石上の心なり

さもいとやんことなき　○明石上の心なり

宮の御方　○女三宮なり

おなしすちには　○紫上も式部卿宮の御むすめにて卑下あるへきならねと今一きは及はさるなり

我すくせは　○明石上の宿世を思ふなり

山すみ　○入道の隱居を云なり

ふくちのそのに　○耶輸多羅が福地の園に種まきてあはん必有爲の都に此歌奥入に是を破る伊勢物語しほしりの註俗なるによりてたゝしらすとてありなんと云る殊勝のことなり此類なりたゝふくぶんのたねありと心得てあるへきなり

大將の君は此姫君　○夕霧女三宮の御ことを思へり

かたち人　○みめよき人なり

なに事ものさやかに　〇はなやかなる人たちはかり
なる中にも又長閑なる心もちたる人もあるへし又
したに思のある人もましる也されどのどかにうち
しつまりたる人々もこのはなやかなる所にひかれ
てその方に皆なるなり人の心はともたち又住舘に
よりてうつる物なりかやうの處心をつくへし
ひとつさまに　〇一偏に世間はなしとなり
けにこそ　〇院の御氣に逢ましきと夕霧の推し給也
紫の御ようい　〇世にもり出さるとなり
しつやかなる　〇妙なり
みしおもかけ　〇野分のまぎれに紫上を見給し事也
わか御きたのかた　〇雲井雁なり
おたしき　〇雲井雁をえては又こと心もなきを今源
の女三宮をえ給へるをみて心も聊みたるゝとなり
みたてまつりしる　〇人目はかりにし給へるを不可
然となり
院につねに　〇朱雀院なり
かたしけなくとも　〇柏木の我はわくる心もあるま
しき物をとなり
けにたくひなき　〇女三宮なとにたくふへき身にて
はなけれともとなり
こじゝうといふ　〇女三宮の乳母子柏木の乳母のめ
いなり
おとゝの君もとより　〇源の隱居の志あれはその時
はとかしは木の思給ふなり
兵部卿宮　〇螢の宮
しつかなるすまゐは　〇源の詞公事なとなき月なり
うしとらのまち　〇花散里の御方なり
みたりかはしき事の　〇まりをいへり
これかれ侍つ　〇夕霧の詞
しんてん　〇此程は桐壺のまし〳〵たる方なり
わかみやくし　〇内へまいり給へるなり
やり水なとの　〇やりみつはれたるなり一本行あひ
はなれてとあり水邊とだえて鞠場に宜き所なるへ
し
よしあるかゝり　〇木陰なるへしよしある所と云な
り花鳥に西の對の東面に鞠のかゝりありと云々い
かゝ鞠のかゝりをうふることは保元に内にてきり
たてあり是始めと見えたり又西の對と云るおほつ
かなしたゝししん殿の東とは晩景には西へよりて

蹴鞠ありと見えたり階の東なるへし
辨の君も　○辨官は儀式官なれはなりかやうの遊なとをは面には沙汰せさる官なるへし
上達部　○衛府の司なれはなり自然源をはゝかりて掛酌もありやとてかくの給ふなり
かはかりのよはひ　○源の詞上古には老後は蹴鞠は掛酌あるなり成通も未滿五十まて蹴るなり頼輔六十七の年上鞠せしは一段のことなり
さるはいときやう／＼なりや　○前にはみたりかはしきことのさすかに目さめてとほめ爰にてはきやう／＼なるといへりかやうにひきあはせてみるへきなり
もえき　○花はちりたるあとなり
さくらのかけによりて　○次第に西によるなり
すみのかうらん　○ひんかしなり
さくらのなをし　○俗直衣なり
さしぬきのすそつかた　○花鳥さしぬきのすそとる事家々の説かはれりと云々是はまりをけるにつきて種々の説ありと云々此時分はさやうの沙汰あるへからすとりあへすいつもの指貫姿なるへしうきもんのさしぬきともいふなるへし
しほれたるえた　○鞠にあたりてしほたれたるなるへし
さくらはよきて　○引歌に不可及
宮の御まへ　○女三宮なり
春のたむけ　○三月の末なれは春の暮て行手向を云なり道祖神に手向るぬさにきぬのつまともをまかへたるなり拾遺雜の上「物へまかりける人のもとにぬさをむすひ袋にいれてつかはすとてとあり
はしよりにし　○みはしのまの二間めなり
すき／＼　○つき／＼なり
七八寸ばかり
我心ちにも　○夕霧なり今さらとはみまいらせたく思へともとなり
たいのみなみ　○紫上の御方なり
つはいもちゐ　○まりはにてもちひる物なり
から物はかり　○さかなゝるへし
いてやこなたの　○紫上の御方なり
さいしやうの君　○柏木なり參議にて右衛門督を兼

たるなり
よろつのつみ　○此はしちかなることなとをもなにとも思ひ給はさるなり
物のすちは　○鞠なとのはかなきことまては委く教給ふことあるましきを天然の奇特なるすちにてありけるよとなり
うちほゝえみて　○右衛門督なり
いかてかなに事も　○源の詞なりかやうの事は傳なとにのせてもよかるへきとなり
なをこのころの　○柏木の詞
院には獨此たいに　○かしは木の詞
この宮いかに　○女三宮なり
たい〳〵しきてと　○夕霧の詞
こなたはさまかはり　○紫上はおさなくより養ひたて給ふそのしたしみのあるなるへし
いてあなかま　○柏木の詞なりないひかくし給ひそ委くきゝたるとなり
いかなれは　○柏木の歌なり女三宮の御方にとまり給はぬとよめり
櫻ひとつに　○鶯は花の木にとまらずと云々
いてあなあちきなの　○夕霧の心なりむやくの柏木のとりあつかひやとなり
み山きに　○はことりのこと花鳥に見えたり深山木にすみなから花をも忘れしとなり女三宮はへたてはあるましきとなり
ひたなもむき　○櫻ひとつにはなにかとなり夕霧のむつかしく思て云まきらはし給ふなり
かんの君は　○柏木なり思ある心の中なり
おほいとのゝ　○父おとゝの東なり
くしいたく　○花鳥兩説なり
ふかきまとのうち　○おくふかきをいへり詞をかりたるはかりなり
こじゝうかり　○かりは小侍從かもとへと云心なり
花鳥の說いかゝ
日かせにさそはれて　○文の詞なり
みかきかはら　○院中のかきの內を云なり爰は名所にあらす
あやなく　○みすもあらす　立かへり又や分まし俤をみかきか原の忘れがたさに
一日の心も　○柏木ほのかにみたてまつりしことを

は小侍從は不レ知なり
心くるしけなる ○小侍從か我心なからしらざる也
たゝにはうちをきかたきとげんざんにいるゝ也
いどうたてある ○女三宮の詞
心のうちそ ○草子地なり
御さしらへ ○さしいらへなり
れいのかく ○いつもかやうに小侍從かくなるへし
ひさひはつれなしかほ ○文の詞也
つれなしかほ ○まいり給し時はつれなきさまをよ
くつくり給しさなり

細流卷十 若菜下 柏木

若菜下 此卷上下に分てれども前と一つ事也事多
きに依て分てる也但上卷は六條院の御賀下卷は朱
雀院の御賀上下卷ともに若菜を本とせる心ある歟
上卷の奥にかひなきことをとあり小侍從かくいへ
るもことはりとは思へともと云也源四十一歳の三
月より四十七歳の末に至れり四十二より四十五ま
での四ヶ年の事は此物語に見えす花鳥四十一歳二
月までの事は上卷にありと云々然れとも上卷の末
も三月の事ある也
ことわりとは思へ共 ○小侍從か返事の口惜きと也
いてやなそ ○小侍從がかくいへる計にては堪忍し
難きと也
院の御ため ○六條院也
つこもり ○三月晦日也
三月はた御き月 ○母后薄雲の御忌月なれは延引あ
る也避二忌月一流例花鳥に見へたり高倉院治承五年
正月崩御なれは安德天皇の御代は踏歌の節會なか
りし也仍後圓融院の御代十六日節會舞樂あるに依

て停止あり後の事なれとも例にひけり
この院　○大やけには停止なるに依て源にて此事あ
る也
左右大將　○ひけくろと夕霧也玉かつら故一つに能
云通玉ふ也
すけたち　○中少將也
かちゆ見　○かちだけなと云事也馬上ならすして射
也
まへしりへの心てまとり　○あひてぐみ〳〵を能定
めらるゝ也
けふにとちむる　○三月卅日也
いとゝたつ事やすからす　○本歌のとりさま殊勝也
かけもの　○あなたこなたより出さるゝ也
やなきのはを　○養由基ともいひつへき上手とも也
すこしこゝしき　○こゝしきは大やうなる也射の道
強ちあたるはかりを本とすへきに非す論語にも射
不レ主レ皮と云り
かたはし心しれる御めには　○夕霧ふと見しり玉ふ
也
身つからも　○柏木也

人にてんつかるへき　○人に指をさゝるへき事也
女御の御かたに　○弘徽殿也柏木の兄弟
かゝる　○兄弟さへかくけさをけれはましてはるか
にと思と也
春宮にまゐり給て　○女三宮の御兄弟なれは似通ひ
給所も有へきの心あり
おほろけに　○おほろけならすの心也
ゆくりかにあやしくは　○女三宮の御事也
さはかりの御ありさま　○春宮なとの御うへを申せ
はたろか也
うちの御ねこ　○柏木の心
あまたひきつれたり　○猫の子をうみたるかた〳〵
に分れてある也
六條院の　○柏木の詞女三宮の御方にある也
ねこわさとらうたく　○春宮猫を愛し玉ふ御心あり
からねこ　○柏木の詞
きりつほの御かたより　○明石中宮よりつたへて猫
を女三宮へてひ玉へる也
たつねんとおほしたりきと　○春宮の御心に必す尋
玉へきと見をき奉り玉へれはと也

又この宮に　○春宮也柏木春宮へしたしく參りて御ことをもをしへ申給ふ也
いつらこのみし人　○柏木の詞也六條院にて見し由也見し人とは松も昔の友ならなくにの類也
けにたかしきさま　○春宮の御詞也
これはさるわきまへ心　○柏木の詞猫は主を不知物と也
人氣とをく　○猫の次第になれたる也
うたてもすゝむるかな　○我物思ひをすゝむる也
こひわふる　○なく音をなく猫といへる義あり不用之
左大將との北のかた　○玉かつら也
大殿の君たち　○實の兄弟也柏木なと也
右大將　○夕霧也はしめは源の實子のやうにありし事也
心はへのかと〳〵しく　○夕霧の性をいへり
しけいさ　○明石中宮は實の兄弟なれとうと〳〵しき也
おとこ君　○ひけくろ也玉かつらを大切にし給へる事也

この御はら　○玉かつらの御はらには女子なき也
おほち宮なと　○式部卿宮也
みこの御たはえ　○式部卿宮御門の御をち也御むすめ女御にておはすれは世のおほえもうちの御心よせもこよなしと也
この宮　○式部卿宮當時の權門也
ひめ君のおほえ　○何方につけても槇柱の君おほへことなると也
まゝはゝ　○玉かつら也
兵部卿宮　○螢也玉かつらを取はつし給へる事なと也
さてのみやはあまえて　○さいひても不ㇾ叶ㇽ由也
このわたりに　○式部卿宮へ申給也
大宮　○式部卿宮の室家也
いたくもなやまし　○やかて領狀ある也
あまりうらみ所　○餘りに心をもつくさゝるをいふなり
大宮は女こあまた　○嫡女はひけくろの室今は離別せり又王女御とて內にまいり給ひしも秋好中宮にけおされて后に立給ふ事もなき也

ものこりしぬへけれと　○我御むすめ達の幸のなき
にこり給ふへけれど丶也
宮はうせ給にける北のかた　○螢兵部卿宮也もとの
北の方を忘れ難くて其形に似たる人をと尋給ふ也
母君　○眞木柱の君の實母也
かんの君も　○玉かつら也
かくたのもしけなき　○此兵部卿宮のあた〳〵しき
御さまをき丶給ふにはかしこくそ我身のつれなか
りしと思給ふ也
これよりもさるへき　○玉かつらより槇柱の事をあ
つかひ給へる也
せうとの君たち　○眞木柱の兄弟申通給ふ也
みこたちはのとかに　○大將のの給ふ也内へ參らせ
すして宮に奉るはさやうの所を心易く思はかり也
とおほして云心也
宮ももりき丶　○兵部卿宮也
た丶さるかたの御中にて　○二年はかりかくて居給
へり此後紅梅の大臣の室になり給へり
はかなくてとし月も　○源氏四十二より四十五まて
の事此内に有へし明石中宮夕霧の御子ともあまた
になり給へること此中にあるへし
十八年　○みをつくしにて即位明る年より御位に登
れは源の四十六の年則十八年にあたる也清和天皇
の例をひけり
つきの君　○皇子ましまさざる也
日ころいとをもくなやませ　○陽成院依二御惱一脱履
の事ありき
おほきをとゞ　○柏木の父也
左大將　○ひけくろ也　關白になり給ふ也
女御の君は　○承香殿の女御鬚黒の兄弟也春宮の母
女御也
かきりある御くらい　○皇太后宮を贈給ふ也
六條院の女御　○明石中宮也
冷泉院の御つき　○朱雀院の御方よりつき給ふ事を
源は口惜く思給ふ也冷泉院と爰にて初めて書り凡
おり居の帝をは冷泉院と申也初めは冷然院と書る
を此院しけく火災ありさて冷泉と書て火災をさく
る心也冷泉の院とのもしを入てもよめり又の文字
略してもよめり兩義也
おなしすちなれと　○六條院の御子なるかくれのあ

れは也
すゑの世までは　○末までは相續し給はさることゝ也
人にの給ひあはせぬ　○源の心ひとつに思給ふ也
春宮の女御　○明石中宮也十八年とかきて年を送り
し間のこと也
源氏のうちつゞき　○薄雲秋好明石の中宮皆王孫な
れは何れも源氏にとる也河海榮花物語をひけり
冷泉院のきさき　○秋好也
かくしをき給へる
院のかみと　○冷泉院也
ひめみつやの御事　○女三宮也
大かたの世にも　○内にも大切にし給へる也
たいのうへの　○されと紫上には及かたきと也
いまはかう　○此六條院は物さはかしき所也閑なる
所にて行ひをもしたきと也
あるましく　○源の詞也
たゞこなたをまことの御おや　○明石中宮紫上を實
母の如くし給へる也
けにかゝる御いきほひならては　○天下の國母なと
ならてはさた有難き事とも也
さえ〳〵しく　○才學かましき也

しはしかりそめに身やつし　○眞實變化の物かと也
このたひはこの心をは　○明石入道の願とはなくて
まうて給ふ也
うらつたひのものさはかし　○須磨より明石への道
すからの願をはみをつくしの巻にてはたし給へり
たいのうへも　○御堂殿の例花鳥に見えたり
衛ふのすけとも　○花鳥に見えたり
へいしう　○東遊のため也
くはゝりたるふたり　○加陪從とて諸家の諸大夫な
とめし加らるゝ事のある也
御かくらのかたには　○住吉にて神樂有へし
女御殿たいのうへ　○明石中宮紫上同車也第一の車
也
心しりにと　○案内者にてのる也
むまそひ　○馬そひのさふらひする事もありことね
りわらはの中間分の品也
うへの御かたの五　○紫上方の女房衆也
あかしの御あかれ　○あかれは流也
人めかしく　○源は一かど人の目立程にして參らせ
んと也尼君の老後に滿足させん爲也

いとしろく　○河海の説不審也只舞人の時の興にせしことなるべし
いり給て　○綾敷なとに居玉へる歟
二の車に　○明石の尼の方への歌也
世をそむき　○入道のこと也
すみのえを　○落句妙也我身のことをしるらんといへる面白し誠にいけるかひあるなきさ也
むかしこそ　○尼君のひとり詠と云々又は明石の歌ともいへり両義ともに用レ之
すみのえの　○紫上の歌也　唐めきたるさま也
ひらの山さい　○此歌の事花鳥に委く見へたり　松のうへの霜の深くをけるを見て彼歌よみし時もかくやと思出せる也
中務の君　○紫上の女房
はふりこか　○是は前の歌をうけてよめりはふりことよむ祝子也神官を云也
つき〳〵　○草子地也
ゑいすきにたる　○神楽には勧盃ある故也
うへのきぬの色々　○四位五位ましはる也
あをにひのおもておりて　○織て覆たる也いひつゝ
のこりのいのち　○ゆかしがり給ふ也
さるへきにて　○明石上なとはことはりのこと也此尼君は一段の事也
おとにのみ秋をきかぬ　○引歌のとりやう面白し紅葉せぬときはの山は吹風の音にや秋をきゝわたるらん
ことにうちあはせたる　○和琴也
つゝみをはなれて　○あつまあそひは大鼓なき也
所からは　○住吉也
やまあひにすれる　○舞人の着する小忌をいへり藍にてすれる也
まかひいろふ　○まかひ色めく也いろふの詞種々の義ありしかとも無二殊事一歟猶可レ尋
かたぬきて　○花鳥に見へたり
すはうかさねの　○此の文字有無両本あり只下かさねのこと也
ひきほころはしたる　○かさねたるをぬきたる成へし
けしきはかり　○おりふしの景也
松はらをは　○面白さま也

くるもうるさくむつかしきことくもなれはと讀切也面白き書留也
かゝる御ありさまをも　○かやうの事をうき世にありて聞て立ましらはさしもあかぬことにて有へきと也
かたき事なりかし　○此入道のやうに世を背く事は難きこと也
世中の人　○草子地也
ましらはしもみくるしやう　○外祖父などゝて立まじりては見苦かりなんの心也
入道のかみさは　○朱雀院也
春秋の行幸　○朝覲の行幸也
この院をは　○源をば大かたのことにてと也よくはくゝみ玉へと内へ申玉也
二品になり給て　○女三宮二品に叙し玉也
たゝ一ところ　○源をたのみ上るはかり也
あまり年つもりなは　○寵は年をへて衰へぬへき也
さかしきやうにや　○紫上の心づかひ妙也
うちの見かとさへ　○女三宮の御事也内のみかどさへ心に入玉事なればおろかならすし玉へる也

さるへき事　○紫上の心也
女一宮　○明石中宮の御腹也後に薫大將の心かけ奉りし人也
夏の御かた　○花ちる里也
すくなき御つぎさ　○明石中宮の御腹夕霧の御子あまた侍れば末は繁昌ある也
右大とのゝ　○鬚黑也
姫宮のみそ　○女三宮也
女御君は　○中宮はおとなび玉へば心やすくおほして今は此女三宮の御事をのみ源は心つけ玉ふ也
朱雀院のいまはむけによちかく　○をはりちかき心也
たいめんなんいまひとたび　○女三宮の御事也
このたびたり給はん　○今年朱雀院の御年四十九也明年五十に滿玉へり源は四十六歲也
わかなと　○御賀也此卷の名也
いもゐの御まうけ　○よのつねの御賀にさまかはりたり
右の大との　○鬚黑也をさなき人々に舞を習はせ玉也

なゝつよりかみ　〇七歳より年の行たる也
宮はもとより　〇女三宮也
さりともきむばかりは　〇源の琴ばかりは教玉ひつらんと朱雀院にも內にもゆかしくをぼしめすと也
そらのさむさぬるさ　〇花鳥師曠をひけり
ゆしあんする　〇由はゆる也あんするはおす也
女御の君　〇明石女御也
十一月　〇一本十一日とあり十一日は神今食潔齋の日なれ也又十一月は神事の月也兩本ともに用之
なとてわれに　〇明石女御の御心也
冬の夜の月は　〇人のめでさる物にいへとも此物語には多評する也
たいなどには　〇いそがはしとて　春はまいりて閑に聞くへしと也
院の御賀　〇朱雀院の御賀先內よりし玉ふへき故也
女樂こゝろみさせん　〇女三宮は試樂也朱雀院にて所作有へきため也余の人々にはたゞ女樂まで也
いまのものゝ上すこともこそ　〇世間の物の上手と云もなきとて源の平生のこと申玉ふ也

いとふかくはつかしき　〇隨分尋もとめし內にすぐれたるは無りしと也
又このころのわかき人々のされよしめき　〇當代の物の器用なるは臨説あり正體なることのすくなきと也
きんはたまして　〇琴は女三宮ほとつたへたる人もなきと也
二十一二はかり　〇今年二十一成へし源へわたり玉ふ年十四歳と見えたり其後八年になりぬ
月だゝば　〇二月になりなばと也御賀のことを云也
しがくめきて　〇ことごとしく人のいひなすへしと也
しん殿に　〇女三宮のまします方へ紫上をわたし玉ふ也
こなたにとをき　〇女三宮にうとき人々をばのぞき玉也
わらはへ　〇紫上のわらは也
あか色　〇あか色のうはき也
女御　〇明石女御也
あらたまれる　〇正月なれば也

わらはゝ　○明石女御のわらは也
あをしのかきり　○茶碗の青甆なとの色也
宮の御かた　○女三宮也
あをに　○ふかく青き也
院のをはしますへき　○源也
宮にはかくこと〳〵しき　○女三宮は如此名物はいまたえひき玉はしとて用意ある也
大將をこそ　○夕霧也
春のことのねは　○古來心得難き事と云々
花はこそのふる雪　○梅なるへしあまきる雪のなべてふれゝばの心成へし
かる〳〵しきやうなれど　○源の詞
うちかしこまりて　○夕霧也
なをかきあはせはかりは　○夕霧にひき玉へと也
さらにけふの　○夕霧の詞也
さもある　○源の詞也
ふかき御らう　○よく稽古し玉ふ故と也
ふつゝかに　○つよきかたをいへり
月心もとなき　○廿日頃の夜のさま也
火よきほとに　○月のかすみたるをいへり

宮の御かたをのぞき給へれば　○夕霧ほのかにのそき玉ふ也
ふくらかなる　○懐姙あるを云なり
花といはゝ　○殊外にほめたる也揚貴妃を牡丹に比したり唐朝に花といへるは皆牡丹のこと也我朝の花といへるは櫻の事也されは双もなきの喩也さてものよりすくれたるとはいへり
ねをきくよりも　○前に神さびたるといひ此に又かくいへる面白し
さつきまつ　○橘は五月に必ずさく物なればいへる也五月まつやま郭公うちはふきの歌は四月也
見しおりも　○野分のあしたの事
院はたい〳〵　○朱雀の御事也
この御かた　○紫上也
あなかちにあるまじく　○夕霧の實法にて身を能おさめ玉ふ也
夜ふけゆく　○餘寒の時分也
ふしまちの月　○二月十九日也
春のおぼろ月夜よ　○源の御詞也おぼろ月夜と讀きりて心得へし春のおぼろ月夜はあれとも秋の哀は

猶すみのほる物と也

むしのこいよりあはせたり　○虫の聲と物の音と寄合也

花の露も　○秋の千種也

はるのそら　○笛の音などすむことは春はますへきと也夕霧は當時をほめていへり

いなこの御さためよ　○源の詞也

こくのものとも　○曲也

りちをばつぎの物に　○日本は呂律の陽陰と用來る也唐には律呂と云は陽をさきにする也

いかにたゝいま　○是より當時のいうそくの人を源の尋玉也

そのかみと　○人にまさりたるをいへり師兄と云か如し

あやしく人のざえ　○此女達の奇特にひきとり玉へる也此舘は奇特にかやうのことのはやくなると也源の自稱也

それをなんとか申さん　○夕霧も申たく思しを斟酌して有つると也

のほりての世を　○昔のことをよくもしらさると也

かのをとゝ　○致仕大臣也

いとかしこく　○紫上のをほめ玉ふ也

いとこと〲しき　○源の詞也

びはゝしも　○明石上の琵琶計は源の口入せざると也

おぼえぬ　○明石にてきゝ其後大井の里にて聞しこと也

われがしこ　○前より爰にてはましたると也是さへ自稱あると人々の思ふと也

よろつの事　○諸道を敎へ給ふ也

たとりふかき　○よく尋とるべき師範のまれなると也

心をやりて　○大涯にてもあるべきと也

きんなんわつらはしく　○琴は根源をきはめ難きと也

よろづの物の音のうちにしたがひて　○諸の樂器琴の音にしたかひたる也

かなしみふかき　○琴の德也抄に見たり

このくに　○うつぼの物語にてかける也

大將けにいとくちをし　○夕霧の相續せざることを

いへり
このみこたち　○明石の腹源の御孫也
そも　○それもと云詞也
二宮　○後に式部卿宮と云人也
りんのて　○臨説也
かへりこゑ　○葛木は呂也律のかきあはせ也
ごかのしらべ　○五ケ條のしらべ也
五六のはち　○不知事と云々
こなたより　○紫上より也
宮のおはします　○女三宮より源にまいらせ玉ふ也
いつれも〳〵　○源の皆御弟子と也我と思ひしり給ふ也北の邊大臣諸藝を兼備せし人也源の才藝を比してかけり
わか北のかた　○雲井雁也
たいへ　○紫上の御方也
うへは　○紫上いまだ宮の御かたにさふらひ玉ふ也
宮の御こと　○源の詞也
さかし　○源の詞也
いとまいるわざなれば　○たれ〳〵にもむつかしくて琴をば教へ玉はさりしと也

むかしよつかぬ　○紫上の幼少の時の事其時分は源も隙のなかりし也
かやうのすち　○紫上の詞なり樂なとも心にをかさると也
いとかくぐしぬる　○かやうによろづを具したる人は難き由也
ことしは卅七にそ　○女は卅七重厄也薄雲女院も卅七にて崩じ玉へり惣じては紫上は源に七ばかりの妹と見えたり然は源は四十七也紫上は四十成べきを紫式部思様ありてかくかける成へし
おほきなる事とも　○大法也
こそうつ　○北山僧都也紫上の伯父也僧都入滅のこと此に初めて見えたり
みづからはをさなくより　○源のみづからのこと愛よりの玉也内すみにて生長せし也
おもふ人　○夕顔上葵上薄雲なと也
それにかへて　○福祿壽を備ることはかたきと也
君の御身には　○紫上也
かのひとふし　○すまの別の事也
そのかた　○さやうの方と也

この宮　○女三宮也
御みつからの　○自身は知らさる事と也
の給やうに　○紫上の詞也
さは身つからの　○さればと也
ことしもかくしらすかほにて　○卅七也
さき〳〵もきこゆる　○さまをかへて心安く有へしと也
それはしも　○源の詞也
おほくはあらねと　○これかれ見玉ふ内に眞實の實法なる心用ひの人はまれなると也
大將のはゝ君を　○葵上也元服の夜より見玉ひし也
つねになかよからす　○後悔也
又わかあやまち　○子細のある也其子細を下にいひのべ玉ふ也
さかしとや　○賢なる也
思にはたのもしく　○本臺には可然さま也
中宮の御はゝ宮す所　○六條の御息所也
うらむへき　○恨の深き本性也
いとあるましき　○中そらに源のなし玉ふと也
さるへき御契とはいひなから　○秋好中宮の冷泉院との御契は定りたる事にてそ有らめとはいひなから悉皆取たてゝ源のまゐらせ玉ひし事也
あの世なからも　○後の世にてもと也
みなをされ　○後世より見直し玉へきと也
いまもむかしも　○よしなき事に名をたつと也
うちの御かた　○明石上のこと也さしもなき人と思ひしに思の外に心深き人と源のほめ玉也
こと人はみねば　○紫上の詞御息所葵上なとをば見ざる人なれば不ㇾ知此明石上は見る人のことなればば也
たとしへなきうらなさを　○紫上の心あさゝを見ゆへき口惜と也
さはかりめさましと　○源の心也
君こそは　○源の詞それ〳〵に心をやり玉へると也
くまなき　○かくれたる所なく心とき人と也
いとけしきこそ　○物ゑんじゝ玉ふばかりぞ難なると也
宮にいとよく　○此たびの女樂に琴を能ひき玉し事を申さんとて女三の宮へ源のまいり玉ふ也
われに心をく　○女三宮の御さま也

いまはいとまゆるして　○源の詞也
たいには　○紫上也
の給つるやうに　○前に紫上を思ひもなき人とし玉ひし事也
人のしのびがたく　○女の身は嫉妬第一の物思ひなれは也
女御かたより　○明石女御也
御つゝしみのすち　○卅七歳のこと也
御かゆなと　○源の事也
御賀　○女三宮のし玉へる御賀也
かの院よりも　○朱雀院也
きこゆる事を　○出家の事也
かぎりありて　○源の心也
むかしより　○源のみつからのこと也
宮の御方にも　○女三宮の御方也
院のうち　○六條院也
人ひとりの　○紫上一人也
たゝにもおはしまさて　○懐妊也
わか宮　○女一宮也
ゆゝしく　○人々の云也

けしうは　○大事はあるましきと也
をきてひろき　○紫上の徳ある心をきてを云顯し玉ふ也
まことや衞門のかみは　○此以下柏木の事をいへり
此間は參議にて衞門督を兼たり
ときの人なり　○時にあへる人也
思事のかなはぬ　○女三宮の御事也
この宮の御あね宮　○落葉宮也
更衣はら　○更衣誰ともなし
なくさめがたき　○花鳥東宮の御をばにははせていへりと云々此義に及べからす我心慰兼つの歌も大和物語の本說にかゝはらず月を見て慰めんとすれご更になぐさめ難しとよめる歌也今此宮を得ては慰むべきと思へりしにかへりて思ひをますと也されは宇治に中の君二條院にましませは更にをはすて山の月すみのほりてといへるも只なくさめかたき心はかり也
かくて院もはなれ　○源紫上なやみ玉故にあなたにのみましますと也
むかしより　○柏木の詞也

院のうへだに　○朱雀院也女三宮の御事を人の申と
　也源はかた〳〵にいとまなき故に人におされたる
　樣にてましませば後悔し玉と也
けにたなしをすちとは　○昔よりしみたる事は忘れ
　ざると也
院には　○朱雀也
たゝいますこし　○花鳥說いかゝ朱雀院今少憐愍あ
　らば我に給はるべき物をと也
いとかたき　○小侍從が詞
かの院　○源也源の念頃に所望申さるゝ也
このごろより　○中納言に昇進あること也
いふかひなく　○小侍從が事なり
いまはよし　○柏木の詞也
これよりをほけなき　○小侍從か詞也
いてあなきゝにく　○柏木の詞也
女御きさき　○二條后などの例なるべし
ましてその御ありさまよ　○女三宮也
うち〳〵は心やましき　○紫上におされ玉ふ事
院のあまたの御中にて　○院とは朱雀院也
さしもひとしからぬきはの御かた〳〵に　○明石上
　なとの同輩よと云くだしたると也
つきゝり　○いひきり玉ぞと也
人にをとされ　○小侍從か詞
めてたきかたに　○今更いかなる方になひき玉べき
　事にてもなしと也
これはよのつねの　○おやざまにとはじめよりの玉
　しかば寵愛のかたは苦しからざると也
よろつにいひこしらへて　○柏木也
まことはさはかり　○柏木の詞也
物ふかゝらぬ　○小侍從也心よはきは自他あしきこ
　との出來ぬる也
いかに〳〵ど　○柏木也
わか心にも　○柏木の心也
みそきあすとて　○齋內親王の禊の事也
上らうはあらぬ　○わらは下づかへなればみづから
　もかくいとなみ侍也
源中將　○あぜちの君の思ひ人也
さまでもあるへき　○物語の評也又は柏木の心也こ
　れ程までも思ひよらざりしと也
かすならねと　○柏木の詞也

うこかし侍にし　○心を動かす也
せきかねて　○心を制しかねたる也
つみをもき　○實事はあらじと也
ひたふるなる心も　○宮をおとし奉る心也
よその思ひやりは　○よりつきにくき樣にあるべし
とかねて思ひしにはかはれると也
いつちも〳〵ゐてかくし　○伊勢物語白玉か何そと
人の問し時と詠る心も可有
てならしゝねこ　○懐姙の事也夢ㇾ獸懐胎之相ノ
なにしにたてまつり　○夢中の心也かたみと思ふべ
き物をと惜みける心也
猶かくのかれぬ　○柏木の申玉詞也
院にも　○源也
人の御なみたをさへ　○面白き詞也
いかゝは　○柏木の詞也
いとすてがたきに　○かくつれなくましませは命も
此にて捨つへきと也
こよひにかぎり　○命をいへり
あはれなる夢かたり　○猫の夢のこと
秋の空よりも　○四月なれは也

たきて行　○行べき方も不知と也結句花鳥説はいつ
くのをそこらのと心をやりて見るへしと也　又正
徹説此時柏木心も心となきうちの歌なれはてにを
はの分別もなきと也神なりけんと云心もありと也
されは此類あまた侍り　後撰戀三涙川流すねさめ
も有物を拂ふはかりの露や何なる同戀四思ひ出て
音信しけん山ひこの答にこりぬ心なに也此外此類
あまたあるへし不審に及はさる歟
あけぐれの　○前には物もの玉はざりしを今柏木の
出玉に慰みてかく詠玉成へし
まことに身をはなれ　○誠の字妙也あかさりし袖の
なかにや入にけんの心あり
女宮　○落葉宮也
くるしくをほゆまし
この院に　○源也
かきりなき女　○世の人を云也世なれたる人こそう
へは實法にて下にほのすく人ある也是はいつくも
深き御心もなきと也
御心をつくし給事に　○紫上の病惱にうちそへて也
かの御心ち　○紫上事也

かんの君　○柏木也
まつりの日　○酉日也
女宮　○落葉宮也我身は過分なりなといひなし玉也
くやしくぞ　○摘に罪をよせたり
さうのこと　○落葉宮也
いま一きは　○女三宮をいへり
もろかつら　○葵のことをいへり女三宮と落葉宮と
　は兄弟なれば也是より落葉宮とはいへり
いとなめげなり　○草子地也
さりとも物のけ　○爰にて源の心をおこしてつよく
　心を持玉へる也
ふごうそんの　○定業亦能轉の心也河海に見えたり
是善無畏三藏の師欲滅弟子爲受灌頂善無畏行此法
悉受權頂也
たゞむかしみ給ひしもののけ　○葵上の時出し物の
　氣のさま也
わか身こそ　○物の氣の歌也我身こそ生をかへたれ
　と也
ものいはせじと　○源の物はいはせじとし玉ふ也
中宮の御こと　○物氣の云也

をもふごちの御物かたり　○前に紫上へかたり玉し
　事也
うちをもひ　○惡鬼などになれば暫時立よるといへ
　とも病者の爲殊の外になやみあると也
此人を　○紫上也
まもりつよく　○源はまもりつよくてよりもつかざ
　ると也
御宮におはしましゝ　○齋宮は經佛を手にとり玉は
　さる也
けふのかへさ　○賀茂祭也
いけるかひありつる　○かく皆打つけ事をいへり
二品宮　○女三宮也
衞門督　○同車して也
かくいひあへるを　○紫上の頓滅の事を云ひあへる
　也
式部卿宮　○紫上の父也
いかに〳〵　○柏木の詞也
いとをもく　○夕霧の詞也
かくこれかれまいり　○源のきゝ玉也
らうろう　○花說いかゞ只不㆓自由㆒心なるへし前に

ありしと同し參らで叶ざればこそまゐりたれと也
うつし心　○源の心也御息所はうつゝの時さへ氣の
取苦しかりしと也
いひもてゆけは　○女は業障深しと也
なきやうなる　○紫上は物もおぼへぬうちにも源が
御心まどひを悲しく思玉也
ひめ宮は　○女三宮は懐姙也
かの人は　○柏木也
夢のやうに　○柏木女三宮に又もかよひし事なるべ
し
いたくよしめき　○柏木のすがた也
さるたぐひなき　○源にをさなくよりなれ玉ふ目移
しにはいかゞと見たり
かくなやみわたり　○女三宮懐姙の事也
見たてまつりとがめて　○皆御懐姙を人々不審する
也
わたり給　○六條院へ源わたり玉とかきて未だ二條
院の事をかけり是此物語の筆法也
女君は　○紫上也
さもこそ　○小侍從也

とところ　○二條院也
あはれにいまゝて　○はやきへいり玉し物をと也
かれ見給へ　○源の詞也
ありじはや
みつからも　○紫上也
きえとまる　○紫上の命露のやうにしはしの程かゝ
りたるをとよめり我命は邂逅にと也
ちぎりをかん　○心へだて玉ふなど也源の歌也
めにちかき　○紫上也
かゝる雲ま　○病のひま也
日ころのつもり　○源はいかゝと思玉也
例のさまならぬ　○御懐姙也
あやしく程へて　○源の心也
いかに〳〵と　○紫上を心もとなく思玉也
わか君　○女三宮也
かの人も　○柏木也
こゝには　○源の詞也
いたくしめりて　○女三宮の御さま也
月まちて　○女三宮の詞夕くれは道たど〳〵し源氏
のさらば道たど〳〵しからぬ程にとの給ふより此
歌の心を答給ふ也

ゆふ露に　○此日晩のなくを聞てはよそにましますとも御出あるへき物をと也
まつさとも　○二條院にもまたるへき物をと也
かはほり　○今の扇也
これは風ぬるく　○檜扇なるへし
すこしまよひたる　○まよふは亂也万葉にも亂の字をまよふとよめり
その人の　○柏木也
あないわけな　○源の心也我身の見つくるは苦からざると也
いて給ぬれは　○源の二條院へ出玉也
いふかひなの　○小侍従か心也
いつくにか　○小侍従か詞也
人々まゐりしに　○人々のまゐりしをたに我は憚りし物をと也
いらせ給し程は　○源の御出ありしはしはし逗留も有つる物をと也
いさとよ　○宮の詞也
あないみし　○小侍従が詞
かの君も　○柏木也
人にも見えさせ給けれは　○鞠の時見え玉ひし事也

かくまてをもひたまひし　○見へ給し故にこそ強にはせめ玉へと也
はゝかりもなく　○草子地也主君にはかやうには物の云難きを憚からず申と也
をこたりはて給にたる　○紫上は平愈なる物をと也
としをへて　○文の大躰をとりてかけり
いとかくさやかに　○源の夕顔の上への文には手を書かへ玉へり又すまの巻に朧月夜の御方へあふせなき泪の川とかき玉へりあひみてもあはぬ由をこそかくへきを此文の書さま用意なしと也
さてもこの人をは　○源の心也
めつらしきさま　○懐姙也
猶さりのすさひ　○其身かすならぬものゝかりそめと思たにもまこゝろのあるはつらき物をと也
ましてこれは　○柏木もあまりなる事と也
いふかたことなり　○したへいひのふる也
たほろけのさだかなる　○さだ〳〵と見えぬ程はまきるゝ事ある也
かくばかり又なき　○此女三宮也源は紫上をもさしをきて心を女三宮につくすと也

みかどゝきこゆれと　○公方の御志の淺きに私のねぎごとの深きには心をかはす類多しと也

わか身なから　○柏木に思かへておほしめす事と也

故院のうへ　○桐壺帝也薄雲の御事也

きえのこり　○紫上の心は我を見捨難くして女三宮の御事を思なやみ玉かと也

心ちはよろしく　○紫上の詞

さかし　○源の詞

内のきこし　○紫上の詞

げにあなかちに　○源の詞深切に思ならは人の助言も入ましきを是は國王の御心はかりをかさりてつかうまつるは淺き志也と也

わたり給はん　○紫上六條院へかへり玉べき時まゐるへきと也

こゝにはしばし　○紫上の詞

いてやしづかやかに　○柏木の此事思ひさまさんとてかく思なし玉ふ也

かつさふらふ人に　○めしつかう人にも可然人を撰ぶへきと也

あやにくにうきにまきれぬ　○源のわたり給へる也

花鳥引歌面白し

身つからいとわりなく　○女三宮也

女御　○明石の女御也

右のおとゝの北のかた　○玉かづら也

むしんの女房　○小辨をいへり

契ふかき中なりけれは　○鬚黒と玉かづらとの契深き中なれば玉かづらの心とゞけ玉ふとも又さらずとも同事にて有べけれど人の許さぬ事ならばうたてあらましと也

いといたくもてなして　○玉かつらの心也

二條の内侍　○朧月夜也

ついに御ほい　○朧月夜出家し玉へり

いまなんと　○案内も無りしと也

あまのよを　○此尼になり玉へるをもよそには聞まじき也我身すまのうつろひもそなた故なれはと也

とくおほし　○朱雀院の御山こもりの時かく思立玉し事と也源のさまたけ玉しなるへし

むかしより　○内へまいり玉はぬさきよりの契と也

つねなき　○女の詞

あまぶねに　○明石上故に明石までは下り玉へる也

我身故にては無りしと也
ゑかうには　○普及於一切の心也
さえぬること　○今をとちめなれは也
はづかしめられたれ　○此歌の事也
けに心つきなしや　○皆かやうにそむき玉ては友も
なしと也
かくみなそむき　○権齋院出家の事爰にて見えたり
人のありさまを　○齋院ほどの貞女は無りしと也
かの人の　○女三宮也齋院の御事歟私
としふかくいらさる　○年わかき時也
わかき宮を　○女一宮也紫上の養ひたて玉ふ也
はか〲しき　○紫上の詞
いかならんとて　○面白きかきざま也
かんの君に　○朧月夜也
六條の東の君　○花ちる里也
法ふくだちて　○あまりに世を背きたるやうにはす
ましきと也
つくも所　○金銀細工所成へし調度の爲め也
八月は大將の　○葵上の忌月也
九月は　○朱雀院母后の御忌月也

衛門のかみの御あつかりの宮　○落葉宮也
かんの君も　○柏木此程出頭無りしを是をついでに
出給へる也
宮もうちはへて　○女三宮懐姙のさま也
院は　○源也
御やまにも　○朱雀院也
月ころ　○源の女三の御方へかきたへ玉由也
うちわたりなと　○朱雀院の御心也内裏にさふらふ
事女御更衣の上をさへさま〲取あつかふ事のあ
れはまして二條院に源のましますは御留主にはいか
なる事もかと御心にかゝれる也
そのこと　○朱雀院の御文の詞
いと〲をしく　○源の心也
心くるしき御せうそこに　○源のため迷惑と也
まろこそいとくるしけれ　○源の身こそ面白無れと
也人めにたつはかりのうとき事は無りし物をと也
たがきこえたる　○誰人朱雀院へは申侍るぞと也
ものおもひくし給へる
いまよりのちも　○又いかやうの事もあるへきと也
うへの御心にそむくと　○うへとは朱雀院也そむく

とは女三宮の御心に源のそむき玉ふと也
いたりすくなく　○朱雀院いたりすくなき人の申まゝにや聞召けんと也柏木の事下に含めり
又いまはこよなくさたすきにたる　○年よりたると女三宮の見なし玉らんと也
いにしへより　○我は道心の深くありし也
たとりうすかるへき　○朧月夜槿齋院にをくれたると也
いまはとすて給けん　○女三宮をあつかり申事也
もろともに　○紫上はかりは我身もろともに出家しても惜からぬ年と也只女三宮一人に心とまれると也
我もうちなき　○源也
人のうへにても　○昔は人を我もむつかしく思し也
かゝせたてまつる　○院の御返事也
かのこまかなる　○柏木の返事思やり玉也
まいり給はんことは　○御文の詞也
ふるめかしき　○懐姙故此頃おとろへ玉と也
霜月は　○みつからとは源の父桐壺帝の御忌月也
又はみつからとは朱雀の御ため父帝の御忌月と也

この御すがたも　○懐姙の御すがた也
みんにつけても　○女三宮の御事をかの心にほれほれしとや思はれんと也
院にはた御あそびなと　○紫上なやみ玉故に御遊も無れば御用などもなき故とや人々は思へる也
すき物は　○柏木事也
けしきとりし　○猫の故也
いとかくさたかに　○かくのことくなりとまては思よらさる也
十よひ　○十日あまり
二條院　○紫上もかへり玉也
このたひのみこ　○匂兵部卿宮也薫に一歳の兄也宇治に到りて薫よりは弟にかけり
てうかく　○花ちる里の方にてし玉故に別に試樂見物には出られさる也
とりはきて　○別してめし玉也
例もほこりかに　○平生もほこりがになさはなき人也猶一入しめりたると也
思やりなき　○所存の外なると也
その事となく　○源の詞

見この法じ ○女三宮の御賀の事也
いもゐ ○院御出家にてまします故にいへり
家におひいつる ○源の子孫也
月ころかた〳〵に ○柏木の返事也紫上女三宮なとの御なやみ也
みたりかくびやう ○脚氣と云々只病の惣名歟但ふみたつるといへるは脚病なるべし
つく所なし ○致仕大臣着座せん所なしと云說あり如何只より所なしといへる心なるへし
いまはいよ〳〵かすかなる ○思ひすましてましませは大略事を省略せられて然るへしと也
いかめしくきゝし御賀 ○女三宮の御賀し給しを致仕大臣のとりなしにいひなして女三宮の御賀のあるへき事をいかめしくいへるを源のらうありとほめて思玉也
たゝかくなん ○何事も省略し侍るをかくいかめしきやうにとりなし玉へれは能とゝのへたきと也
されはよと ○されはこそ世間には此御賀をことことしくいひなすよとおす也
かの院 ○朱雀院也

式部卿 ○紫上の父也
兵部卿の宮 ○螢也
御むまこを ○皇麞を舞人也
衛門督心とゝめて ○すこし心ありての玉也
けしきはかりにて ○酒をものみ玉はぬ也
よそ〳〵にと ○一條宮（落葉宮御方）にましますをよひよせ玉也
女宮 ○落葉宮也
あひなだのみ ○此程は行末を思しに今は後悔也
はゝみやす所 ○落葉の宮の母也
世のことゝして ○柏木にの玉也
ことはりや ○柏木の返事
とまりかたき ○柏木の命の事也
またはゝきたのかた ○柏木母也
人よりさきなり ○柏木嫡子也
いまはとたのみなく ○落葉宮へ申給也
たゆく ○たゆみたる也
いとゝしきおやたちの ○内よりも院よりもかく念頃にとふらひ玉へるに付ていよ〳〵おしくあたらしく思玉へる也

つき〳〵　〇月々也
女宮の　〇女三宮也事の外の大宮にてありつる故に
　かく障礙のある也
五十寺　〇年の數也五十ヶ寺也
をはします御てら　〇仁和寺也
まかびるさなの　〇此結語古來さま〳〵の說あり
諸抄に見たり不載之或云後漢書逸民傳韓康傳公是
韓伯休那といへる那の字同心と云々所詮は此物語
は發端と結句とをさま〳〵にかへて書へき造意あ
りされはかく種々にかくへきとてかやうにかける
なるへし心はあらはに聞え侍るにや
吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりも行く人の心
の

柏木　卷名源四十八歳の正月より秋の末までをか
　けり若葉の下は四十七の歳の十二月まて也
衞門のかんの君　〇病おこたり玉はで年かへりぬる
　と也
おとゞきたのかたおぼしなけくさまを　〇此以下柏
　木の心也
なのめならすおもひのほり　〇攝政にもなりぬへき
　人也
ひとつふたつ　〇女三宮をとりはづしゝ事など也
人にもすこしうちしのはれぬへき　〇今なくなり侍
らば女三宮も此事故とおぼし合する事もあらんす
らんとなり
なげのあはれ　〇ふかく思はぬ人のあはれと也
ひとつをもひに　〇夏虫の身をいたつらになす事も
　ひとつ思ひによりて也けり
我も人も　〇我身のため女三宮の御ためかた〴〵に
　なからへては不可然と思とり玉ふ也
なめしと　〇源の無禮におぼさん事も死後にはなほ
　るへしと也
うちかへし　〇妙なる語也源もさすかにおほし出す

へきと也
なとかく　○程へてもあらはれさる事もこそあれと
也
いまはかきり　○小侍従方への文也
おもふこと　○病者のさま也
いまはとて　○終焉の煙も此世にとまりぬへき思ひ
也と也
われもけふり　○宮の御詞也
御心本上の　○草子地也
はつかしけなる　○源也
おとゝは　○父おとゝ也
このひしり　○かつらきより參る聖也おとゝの今對
面し玉をいへり
まぶしつべだましくて　○つべ〳〵しきなと云詞也
おそろしき心也
いよ〳〵しぬへくこそ　○時平公三男敦忠中納言天
慶六年に薨せりかの病惱の時十二神の名號倶毘羅
と云をきゝてくひくゝらんと聞なして絶入し玉事
あり
おとゝのかゝる物ともに　○させる貴僧ならぬ験者
には對面もなきを此柏木を大切に思玉故にかく對
面ある事尤哀也
かれきゝ給へ　○柏木の詞也父おとゝの詞を聞て小
侍従にかれとの玉へり
さる御しう　○女三宮の靈ならはうれしかるへしと
也
猶けはひ　○源の御威光の一段なると也
見あはせ　○試樂の時の事也
今さらに　○あはれなる詞也
この世はかうはかなく　○一念無量劫云々
心くるしさ　○懐妊の事也御産平安なるを聞たきと
也
みしゆめを　○猫の事
をそろしう　○女三宮の御ためおそろしきと小侍従
思へる也
御かへり　○宮の御返事也
心くるしうきゝなから　○文の詞衛門督の病體をを
しはかりのこす事はなしと也とあるはとは草子地
也と云々是古來の說也　今案心くるしうきゝなか
らはいかてかはをしはからてはと也のこらんとあ

るはとはまへの柏木の歌にたえす思ひの猶や殘らんとあるをうけたるなるへしさて此歌にけふりくらへとはよめる也然れはたゝ草子地とはみすして悉皆文の詞に見るへしと云々
たちそひて　○內裏歌合順德院可避禁忌事道のへの野原の柳もへそめてあはれ思ひの煙頃へや後鳥羽院勅勘
いでやこのけふり　○此歌こそ此世の思出にて侍しと也
御かへりふしなから○又御かへりを申玉也
夕はわきて　○引歌なし唯煙とならんの夕の心あるへし
とがめきこゆ　○我身なくなりなは人目もくるしからずと也
今さらに　○此事故と人の思へきかとて也
むこに　○無期也
めのとも　○侍從がをば也
なにか　○柏木の詞
そのみけしきと　○御產の氣也
御心のうちには　○源の心也
うまれ給ぬ　○薫誕生也
いちしるきかほつき　○柏木に能似てはと也
又かく心くるしき　○男子は猶さりになし玉もくるしからぬ方ありと源の思かへし玉也女ならはあつかひ愚かにし玉難しと也
さてもあやしや　○源の思つゝけ玉へる也我身の因果にてありけると也此物語一切むくひをかけりこの世にてかく思ひかけぬ　○此世にてむくひを見れは後世はさりともとたのもしきと也
心ことなる　○事の心を不レ知人の思へる也
大夫　○中宮の大夫也
院の殿上人　○冷泉院也
御あそひ　○御遊はなしと也
むつかしけに　○下心はあしく思玉也
かたみゝに　○宮のかた御耳也
世中　○源の詞
猶えいきたるましき　○宮の御詞
いとうたて　○源の詞
御心のうちには　○源の心中也
心をかれ給はんか　○女三宮の源に心をき玉はんと也

猶つよくをほしなれ　○源の詞也
かきりとみゆる人も　○紫上のちかきためしをの玉へり
世中を　○朱雀院の御詞也
わつらひ給　○源の詞也
よゐのかち　○院の御詞
さる御ほい　○院の仰也
行すゑをき　○行末に亂れあらはかへりて人のそしりあるへしと也
日ころも　○源の詞
さけなと
ものゝけをしへ　○院の御詞也よし物の氣のいへるともあしかるへき事にてもあらはこそと也
御心のうちには　○朱雀院の御心のうち也
かゝるおりに　○今更には又何とせらるへきぞなれは也
よをうら見たるけしきならで　○今出家あるべき事はかた〳〵に然るへしと也
おほかたのうしろみ　○大方に後見申へき人はあまたありしかと源はおやさまにと思てたのもしかりしに其かひもなきと也
たゝあつ氣をきたてまつり　○源を背きはし玉ひそと也
御そうふん　○三條宮也後には薫のおはしまたりし所也
いむ事　○戒をうけ玉をきゝて結縁にすへきと也
なとかう　○源うちにまいりて女三宮へ申さるゝ也
かへりいらんに　○朱雀院也
え御らんせられ　○源のかしこまりたる御禮をえ見まいらせぬと也
世中のけふり　○院の御詞也
又しる人もなくて　○女三宮をあづけ玉へき人ならてと也
さまことにかはりて　○尼になり玉て此院に住玉へき事もいかゝ也又今更山里などに住玉へきにも非すと也
さらにかくまで　○源の詞
かしこうとりかへし　○紫上をいへり
女宮の　○落葉宮也
いまひたひ　○柏木に對面也

かの宮にとかくして　○柏木一條の宮へ今一度參るへきと也
さらにゆるしきこえ給はす　○父母ゆるし玉はさる也
宮みやす所は　○系圖になし
このおとゝ　○致仕大臣也
二品宮　○女三宮の御事御心にも叶はさるやうなれはかく思定玉ふ也
きゝたまひしをかたしけなう　○柏木の心也
たえぬちきり　○不堪契也
はゝうへにも　○柏木此宮の事を母へも申玉ふ也
いてあなゆゝし　○柏木におくれゐるへきにても無しと也
左大辨の君　○後に紅梅のたとゝといへる人也
いよ〳〵かなしう　○かく權大權言に推任なとあるおほへを思へはいよ〳〵あたらしきと也
御よろこびにも　○昇進を賀せらるゝ也
はやうより　○幼少より也
けふはよろこひとて　○夕霧の心のうち也
なとかく　○夕霧の詞

いとくちをしう　○柏木の詞
ひさしう　○夕霧の詞
心にはおもくなる　○柏木の詞
月日もへて
さるはこの世のわかれ　○みなから口惜事也と末へ云のへたる也
君につかふまつる事も　○河海の說いかゝ唯いまた半の程にてうせ玉也
これかれあまた　○兄弟也兄弟達にもさま〳〵いひがたき子細にてと也
人かすには　○我身を源は人數とはおほすましけれと也
さうけん　○讒言也
いかなる御心の　○夕霧の詞
けにいさゝか　○柏木の詞
一條にものし　○落葉宮也
女御をは　○冷泉院の女御也弘徽殿柏木の妹也
この大將の御かた　○雲井雁也
右大將殿のきたのかた　○玉かつら也
やむくすり　○扁鵲と云とも何の益かあらんの心也

我こそはみぬ人戀る病すれあふより外にやむ薬なし
女宮にも　○落葉宮也
としころしたれ心　○柏木と女三宮との中の事也
見しかゝける　○恨むへきふしもなしと也女宮の御心也
御息所も　○落葉宮の母宮す所也
あま宮　○女三宮也柏木をうたてしく思玉しかともと也
この君　○薫也
ものかたりなと　○嬰兒のうちゑみなとする也
御心ちは　○源の詞也
れいのさま　○さまをもかへ玉はずはうれしかるべき物をと也
日々にわたり　○源の性奇特なる也
かたちことなる　○尼君にてましますをいへり
なにか女に　○男子なれば此御祝の席にも尼のすかたくるしかるましと也
いと心くるしう　○河海に兩說共に然るへし天文二年九月十日謙云此まはゆきわさとは源の御子にてもなきにかくまてはあるましき事なると云說あり今案只今は柏木の事ある時節なれは心つきなくまはゆき也　薫のためまはゆき心なるへし
もとの心をしらぬことなればとりちらしなに心もなきをいと心くるしうまばゆきわざなりやとおほす
御ぐしの末の　○さけあまのさま也髪をばゆはさる物なれは也
すき／＼　○次々也
いであな心う　○源の詞
すみぞめこそ○にび色也かくなり玉ふがうたけれどもと也
めもくるゝ　○くらき心也にび色によれり
ふりがたう　○泪のふりもせで今もたゆまずおつる心也
とりかへす　○かのふしきなる事をとりかへしたきと也
いまはとてをほし　○かく尼になり玉とて源を一向におほしはなれ玉そと也
かゝるさまの　○宮の御詞也世を背きはてたる身なれはと也

かひなの事や　○源の詞
おほしゐかたも　○柏木の事下心にあり
あはれのこり　○源の老年なれは也「今更に何生出らん竹の子のうきふしゝげき世とは知らずやの心あり
女御の御宮　○明石中宮腹の宮の事
わうげづきて　○王相ある也
おほえたりかしや　○柏木に似たり
まなこゐ　○眼の中也
しつかに思て　○樂天が句也河海に見えたり
うちすこし　○すんしたる也
五十八を　○源氏四十八歳也
汝がちゝに　○樂天か句を引て柏木の事をしたにの給へり薫に對して實父に似そとおほすらんと草子地おしはかりていへる也此かきざまこそ此物語の第一とも云へきと也
この事の心しれる　○女宮と柏木の媒也
ふたついはん　○我ためよりは女の御ため苦しと也源の云出し玉はぬ殊勝也
なに心なう　○薫也

心しらさらん　○人の思よらぬことなれは似たりと云人もなしと也
おやたち　○致仕大臣　柏木の母上など也
人々すへり　○御祝などはてゝ也
この人をは　○源の詞也
たか世にか　○あづさ弓いそべの小松たか世にか万代かけて種をまきけん其種はたがまきしと云べきそと也面白歌也
ことはりと　○源もことわりと思玉也
いかにかおほすらん　○宮の御心に柏木をはいかゝおぼすらんと源の思玉也
大將の君は　○こゝよりは夕霧柏木の遺言の事を思玉へり
はらからの　○柏木の連枝也
女みやの　○夕霧の心の中におもひあはせ玉也
むかしより　○柏木女三宮に心かけ玉しこと也
いとようもてしつめて　○柏木の躰をいふ夕霧の定心にてかく思玉也紫上を見玉て物思しかどあやまち無りし事可レ知
よわきところ　○人は大丈夫の心なくては身をもて

そこなふ事ある物也

さるべきむかし 〇因果なるべしと也

女君にだに 〇雲井雁也

われになきかせ 〇致仕大臣の語也父母の心をまどはすは一の不孝也

一條の宮には 〇柏木に臨終の對面なき事也

みなつく所なく 〇鷹飼など所役なき故也

あはれことのゝ 〇さぶらふ人々の云へる也

大將とのゝ 〇草子地也

辨君さい相 〇柏木の兄弟也

御息所 〇落葉宮の御母也

いみしき 〇夕霧の詞

いまはの 〇一條の宮の事遺言ありつる事也

たれものとめかたき 〇われも人もとまらす世なれと我身のあらんかきりは奉公を申べしと也

神わざ 〇二月神事などしげき頃也

かゝる御なか 〇夫妻の中也

あはれなる 〇御息所語也無常の習と思さますと也

さらにおぼしいりたる 〇落葉宮のさま也

おのつから近き御なからひ 〇柏木と夕霧とを云也

はじめつかた 〇此宮柏木にあつけ玉事御本意にて無りし事と也

みづからの 〇御息所の心の及ざるにやと思ひしをと也

はかなき身つからの心のほと 〇今ちと心づよくいひとゝめ申へき物をと也

それもかやうにしも 〇それもかく早世あるべきとは兼て思ひしにはあらずと也

みこたちは 〇只みこたちはあながちによすがさだまり玉事本義と思はざるむかし心にて申せしはかり也

いづかたも 〇中そらなる也

御とふらひのたひ〳〵 〇夕霧のまゐり玉事は今初也此程人してたび〳〵尋玉と見えたり

さらはかの御ちぎり 〇柏木存生の時は此宮を思はれたる樣にはあらざりし也かく人々に遺言し玉へるをきけば有かたき事と也

あやしう 〇夕霧の詞

こよなくおよすけ 〇柏木の性をいふおよすけはおとなしき也

あまりよのことはり　○無常の道理にて世間の榮に
　心をゝかぬ人と也
心うつくしからす　○過不及の心也
あさやかなる　○明なる樣なる方也道心はおこりや
　すくてさめやすき物と連々いさめしと也
心あさしと　○夕霧をは心淺き人と思はれし也
よろつよりも　○誰々にもまさりて二宮おぼしなげ
　くらんと也かく申出すもひんなしと也
かの君は五六ねん　○柏木夕霧よりは五六年の兄也
あいたれて
をゝしく　○男々しき也
あひみん事は　○ことしばかりはの歌はいま〳〵し
　きとてずんしかへられたると也夕霧の心は落葉宮
　をねんするによりてあひみん事はといへりあはん
　と云かたばかりにと也「春ごとに花の盛はありな
　めどあひみん事は命也けり
この春は　○御息所の歌也泪をよせてよめり
めやすき　○昔更衣の中には聞へことならぬ人なれ
　と只今返歌し玉へるやうたいめやすしと也
御いて井　○つねの殿也

おやのけさうよりも　○親の喪にこそかたちつくら
　ぬ事なれこれは子の事なれはかくはあるましき事
　也惣して此大臣は三條の宮にも實に孝をいたされ
　ぬ人也さるによりてかくかけるなるへし
君の御はゝ君　○致仕大臣の詞葵上の事也
つかさくらゐ　○我は官位の事なとは思はすと也
けふぞめとゝめ　○夕霧の御出によりてと也
この御たゝうかみ　○御息所の歌のそはにかきそへ
　玉也
木のしたの　○子の服也嫡子たるによりて也かすみ
　墨によせたり
なき人も　○柏木も思かけ玉ましきと也
うらめしや　○我身のせんとの春をもうちすてたる
　也
大將とのゝ北の方　○雲井鴈也
殿は　○夕霧也
れいのわたり　○夕霧也
にはもやう〳〵　○あるしもなきやど也
物のかくれの方に　○かたはらのかけ也
むしのねそはん　○近代果守僧正の歌夕立の一村薄

露ちりて虫の音そはぬ秋風そ吹と詠るもこゝをと
　れるにや
いよす　○服者のすまゐ也
猶めおとろかるゝ　○衣かへにてはあれと鈍色なれ
　は也
かしはきと　○連理のやうなる也
ことならは　○如此ならばと也かしは木かへでの樣
になるゝ枝にてあらば故衞門督のゆるしありしと
申へき物をと也葉守の神柏木にありと基俊の説と
云々新古今冬時しもあれ冬は葉もりの神無月まば
らになりぬもりのかしは木法眼慶算金葉秋部月前
落葉源俊頼朝臣と嵐をや葉守の神もたゝるらん月
に紅葉の手向しつれは
なよびすかた　○夕霧はかくなよびたる方もありけ
　るよと也
かしは木に　○御息所の返歌なるべし此やとはやも
め住にて葉もりの神まさずともゆるしはあるまじ
　きと也
　後撰枇杷左大臣贈答をにせてかけり
うき世中を　○御息所の詞

おもほしなけくは　○夕霧の詞
よろつの事　○いかなるなげきもかぎりそある物な
　るをと也
この宮こそ　○夕霧の心也
人わらはれ　○中そらなるへきと也
かたちそ　○女三よりはかたちのおとり玉と也
なとてみるめに　○世間の人をいへりみるめと心は
　せとの二也此二ならは心こそ本なるへけれと也
さまあしや　○さま〳〵の事をいへるはさまあしか
　るへし
いまは猶むかし　○夕霧の詞柏木におほしなずらへ
　よと也
かのおとゝ　○源氏の事と云々今案柏木と云々かの
殿といはん爲也おとゝと云につきて源とみる也
是は柏木の事にて然るへし此院の女房は源をみ奉
る事はあるましき也かた〳〵に柏木なるべしと云
々
ゆうしやうぐん　○草初て秋とあるをあをしとうた
　ひかへ給也前に庭もやう〳〵あをみ出る若草見え
わたりとありさてかくうたひかへ玉也　柏木は右

衞門督也金吾將軍なれはかくいへり
それもいとちかきよの　○保忠の大將の卒去は承平
六年ことなれば也
ちかうとをう　○今古をしむ物也
むへ〳〵しき　○人に仁恕ありし也
うへには　○今上の御琴の師範也
えもんのかみ　○もといひつけたるまゝにもとの宮
をいへり
このわか君　○薫也
はゐいざりなど　○例のかきとめなり也
寫本三光院殿實枝今川氏眞有之者也

細流巻十一　横笛 鈴虫 夕霧

横笛　巻名以歌號之源四十九歳二月迄事有柏木巻は四十八歳の秋までの事也此巻は薫二歳匂宮三歳はかりとあり

故権大納言の　○柏木逝去事前の巻に見えたり

おほかたにつけて　○源は大方の人をさへおしく悲くし給御心なるにまして柏木のことは一入の事におぼすなり

いかにそやおぼしいづる事は　○女三宮の御事なり

御はてにも　○今年二月一周忌なり

よろつもしらすかほに　○薫二歳なり

御心のうちに　○薫のためなり

心もしらて　○父おとゝ薫は實子なる事夢にもしり給はぬ事なり

おとゝうへも　○おとゝは致仕大臣うへとは落葉の宮の母上なり

山のみかどは　○朱雀院の御心なり二宮は落葉宮なり

入道の宮　○女三宮なり

おなじみちをこそ　○女三宮も尼になり給へばなり

そのわたり　○仁和寺なり

はしに　○御ふみの端かき給ふなり

春のやまかすみも　○御ふみの端書の詞なり

世をわかれ　○女三宮はすでにさまをかへ給御身なればあながち山ずみなどし給はずとも後世の無上菩提の道にはおくれ給そとなりおなし所とは後世菩提なり

いとかたきわざ　○河海に地藏本願經を引るいかゝ是は只佛道の難解難入の心なりいさめ給ふ御詞なり

らいし　○薢など入る物なり河海に見えたり

けふかあすかの　○院の御ふみの詞まへに春のやまかすみもたと〳〵しけれどゝあるは端書なり

おなしところ　○ひしりたちたれどもしろき詞となり

かきかへ給へり　○書替給なり書そこなひ給つるなるへし

うき世には　○世の中にあらぬ所もゐてしかな年ふりにたるかたちかくさん

このあらぬ所もとめ給へる　○六條院をはなれ給はんことをうらみ給なり源の心には面目もなしとな

り
つみえぬへく　○尼になしたてまつる事なり
またいとこよなう　○宮の御方よりは尼に成給て後
は一向にへたてはて給へり源の方よりはかけはな
れては思給はさるなり
わか君は　○薫なり
御そてを　○源の袖なり
からのこもん　○唐小紋なり
まみのひらかに　○柔輭の相なり
思ひいてらるれと　○源の心に柏木に似たりと思ひ
給ふなり
かれは　○柏木なり
女君ものし給　○明石の中宮の御腹の宮たちなり此
薫美男たるべきとなり
はなのさかりは　○春ことに花の盛はありなめと相
みんことは命なりけり此歌柏木巻にて夕霧のす
し給へるは同歌なから心かはれり相みんことを詮
とせり爰にては命たのみ難しと思心にて口すさみ
給なり
うたてゆゝしき　○さふらふ人々の詞也
いとねちけたる　○源の詞薫の事なりねちけたると
はよからぬなと云心なり笛をくらひ給さま色好か
なとは行末には好色をたつへき人とたはふれての
給なり花鳥説いかゝ
うきふしも　○柏木のことなり柏木のことはわすれ
難けれとゝなり面白き歌なり
ゐてはなちて　○笛を引とる心歟又薫をひきとるに
てもあるへし
月日にそへて　○草子地なり
この人の　○源の心なり一世ならぬ宿縁となり
みつからの御すくせも　○源の何も思やうなりしに
女方に心をつくし給となり
あまたつとへ給へる　○紫上もしき／＼にむかへ給
はさるを云り
この宮をこそ　○女三宮なり
すきにしつみ　○柏子女三宮等の罪なり
大將の君　○柏子の遺言を源へ申あきらめたきの心
なり
秋の夕　○秋へうつして書る奇妙なり
ふかくもえとりやらて　○樂器ども成べし
わか御とのの　○夕霧の三條の宮の事なり
虫のねしけき　○君かうへし一むら薄柏木巻にも一
條宮をとふらひ給所に一むらすゝきもたのもしけ

にひろごりて虫の音そはん秋思やらるゝとあり引
あはせてみるへき歟
りちにしらへ　○秋のしらへ折にあへり又律は女に
よれり
がやうなるあたりに　○夕霧の心なり我身の實法な
る所を云り
こきみのつねに　○此器は柏木平生もてならし給し
となり
この御ことにも　○女二宮の御琴の音にそ柏木の名
殘はこもり侍るらんとなり
ことのをたえにし　○御息所の詞知音をさへいへる
にまして夫妻のあはひにてはいかゝひき給へき事
にてもなしとなり
女宮たち　○女二宮は琴なとよく引給と聞しとなり
世のうきつまと　○淺茅生の小篠かはらにおく露そ
世のうきつまと思ひみだるゝ只今は琴などひかん
も柏木のことを思出るつまとなるべしさて物うく
し給となり萬事如此此怨者其吟悲にて事にふれて
あはれを催す物なればこ御息所宮の御心をおしは
かりての給ふなり
いとことはりの　○夕霧の詞也
かぎりだにある　○かきりもなき物おもひとなり柏
木を思心にて下には女二宮を思心あり
戀しさの限だにある世なりせばつらきをしゐてな
けかさらまし
かれ猶　○御息所夕霧にひき給へとすゝめ給へるな
り
みゝをたにあきらめ　○琵琶引如聽仙樂耳暫明云々
しかつたはる　○夕霧の詞夫妻の御中なればなにと
しても宮の御琴の音にこそつたはるへけれとなり
しゐても　○用意あるさまなり
月さしいてゝ　○夕霧の心なり
つらをはなれぬ　○鴈不亂行之心なり
さうのことを　○和琴をはひき給はておりふしの感
にたへずして箏をひき給なり
さうふれん　○夕霧琵琶を彈し給ふなり
おもひおよひかほなる　○夕霧卑下の詞なり
ましてつゝましき　○猶はぢ給ふ心のあるなり
ことにいてゝ　○夕霧の歌なりいはぬは云ふにます
心にて事加へ給はぬとなり
たゝすゑつかたを　○樂の末つかたなり
ふかき夜の　○大方の時節を感してかく樂の末つか
たをもひくより外の心はなしとなりことよりほか

にとは言にいはてはいかゝあらんいはぬをまさる
といふ心にてはなしとなり
ふるき人の　○想夫憐のことなり夕霧の心にしめて
　思へるなり
うらめしきまて　○夕霧の心なり
すき〴〵しさを　○夕霧の詞なり
むかしのとかめ　○柏木の事なり
こよひの御すきには　○草子地なり花鳥說いかゞ
そこはかとなき　○夕霧の詞御物語にものたもひま
　きれたるなり
たまのをにせん　○心の程をほの〴〵あらはし給ふ
也
かたいとをこなたかなたによりかけてあはすは何
を玉のをにせん
ふえをそへて　○別にをくり物あるにそへたるなる
べし
これになむ　○御息所の詞まへに夕霧の詞に此御こ
　とにもこもりて侍らんかしとある詞をうけたり
御さきにきをはん　○みさきの聲にあらそひて笛の
　聲のせんをきかまほしきとなり
につかはしからぬ　○夕霧の詞さきの聲との給ふに
つきて隨身といへり身にしたがふべきもいかゞと
なり
これもけに　○柏木の秘藏なりし物となり
さらにこれがねのかぎり　○故右衛門督のゝ給し事
　を今思ひ出るなり
むかしをしのふ　○和琴を引しことはゆるされ侍べ
　し此器の音はえ吹とほさゞるよし柏木のゝ給し物
　をまはゆしとなり
露しげき　○御息所の歌なり笛を虫になしてよめる
　歌なり八雲にもこゝをのせ給へり
横笛の　○むなしくなりしは柏木をわすれすとなり
ねたるやうにて　○雲井鴈なり
いもとわれと　○催馬樂なり
こよひの月をみぬさとも　○里といへる殊勝なり
　人と云へきを人と云ひては優ならさるなり
はしちかく　○名殘あかぬ心なり
かゝる夜の月に　○かくはかりおしと思ふ夜をいた
　つらにねてあかすらんの心なり
君たちの　○夕霧の御子たちなり
ありつる所の　○一條宮なり
いかなれはこ君　○柏木の心にもいれ給はざるをい

へり
見おとりせん ○ちかくてはいかゝと思給ふなり
おほかたの ○世間萬事如此物なり
わか御中 ○ならひなきことなる故にかやうのあり
きをも雲井鴈はあるましき事とえんし給へるなり
ねいり給へる ○夕霧の夢なり
わつらはしう ○夕霧の心なり
ふゑたけに ○夢中柏木の歌なり此しらへの如ㇾ風
につたはる物ならば我思かたへ傳へたきとなり
おもふかたことに ○花鳥女三宮の事と云々いかゝ
わか君の ○夕霧の御子なり
つだみ ○乳などあます事なり
いとよくこえて ○雲井鴈なり
御ちはいとかはらかなるを ○乳のいてさるなり
なやましけに ○雲井鴈の詞なり
いて給ね ○雲井鴈の詞なり
いまはのとぢめ ○臨終の一念に生所は定れるとい
へり臨終一念生死是定云々
をだき ○柏木の葬も此所にや諸人の葬所なればな
り
心よせの寺 ○致仕大臣方の寺なるべし極樂寺など

に准ず藤のうら葉にあり
ほとけの道に ○僧に施さんもいかゞとなり
女御 ○明石女御なり
三宮 ○匂宮なり
こなたに ○紫上なり
大將こそ ○三宮大將をよびての給ふなり
みづからかしこまりて ○我身と御身をかたじけな
げにの給ふなり
みすのまへ ○紫上の方の御前なり
なを〳〵 ○しゐての給ふなり
まろかほはかくさん ○大將のかほを人の見ぬ樣に
かくさんとなり
二の宮の ○明石の女御の御方へわたりての事なり
若君とは薫なり六條院たつみの方紫上南のしん殿
女三宮その中の程の間明石の女御の御方なり
おほやけの御ちかきまもり ○面白きかきさまなり
幼少の時よりよく教訓すべき事見へたり
うちゑみて ○源なり
公卿のみさまなり ○御座なり源氏夕霧の事をの給
へり
わたり給はんと ○源紫上の御かたへわたり給へり

宮のわか君　○薫なり
なをしのかきり　○河海に見えたり
なまめとする　○夕霧柏木の事を心にもちて見給へるなり
まなこゐ　○眼中なり
ちゝおとゝ　○致仕の大臣なり
いていかて　○夕霧の心にうちかへし思給なり
たいへ　○紫上御方なり
よへかの一條の宮に　○夕霧の源へ物語あるなり
ほゝゑみて　○夕霧のすき心を思ひ給なり
むかしの事　○ふるき事はいらへ給ふなり
かのそうふれん　○源の詞なりまことに哀なるべきおりからの事ながらとなり
女は猶　○夕霧をゝしへての給ふなり
さかし人のうへ　○夕霧の心中なり源の御身の上にてはさは有ましきとなり
なにのみたれか　○夕霧の詞なり
中々よのつねの　○今絶々ならば結句人もとかむべきとなり
さうふれんは　○夕霧の方より引出したる事なればにくからぬ事となり
よはひなども　○年の程もさのみわかび給はざればさしすきてもくるしからさる事となり
またあざれ　○我身の實法なるによりつゝましからすし給へるかとなり
かの夢かたり　○笛の事なり
おほしあはする　○源の此笛を請給なり
古式部卿の宮　○桃園なるべし花鳥紫上の父と云々いかゞ紫上の父は此時いまだ薨せざる也故とは云ましきなり
するの世　○源の心なり
この君も　○夕霧も此心あるべしと源の推し給ふなり
いましもことのついで　○今思出たる樣にて申給ふなり
いまはとせし　○柏木終焉のみきりにとなり
されはよと　○源の心なりされはよ夕霧はしゝ給ひたるよとなり
しる人の　○源の詞
おほしけるとぞ　○とぞとは又例の作者の筆法なり

鈴虫　巻名以歌幷詞號之源氏五十歳の夏より秋までの事なり竪の並なり

夏ごろはちすのはなのさかりに　○六條院池の蓮なり

入道の姫宮　○女三宮なり

このたびおとゝの君　○持佛をばせられどもいまた念誦堂はいできざる故に六條院にて源の悉皆し給へるなり

めぞめ　○染つくる物なり

よるのみちやう　○佛壇にかまへたり

よおもてなから　○四方の帷をあくるなり

花の色　○蓮花なるべし

曼荼羅　名義集七　滿荼邏　此翻壇新云　正名曼荼羅　名義三香是離穢之名入中臭氣上熏於空四十萬里諸天淸淨無不厭

からの百ふの　○唐の方にてあはせたるなるべし

けうじの菩薩　○脇士觀音勢至なり

觀經無量壽佛住立空中觀世音大勢至是二大士侍立左右

かえうのほう　○これは日本の方なり

みちをかくし　○蜂蜜なりたき物に蜜をのそきたる故にほろ〳〵としたるなり經營香なるによりて蜜を略する歟

みづからの御持經ぞ　○女三宮の持經なり

これをだに　○源と女三宮と今生の契りはうすく成たるに依てなり

はしを見給ふ　○かつ〳〵みゆるよりなり

これはことに院のくゑそく　○源の自筆の經は別に置なりその外のは導師の前に有へし

そらにたくは　○そらだきのやうを敎給ふなり

かうせちの　○講說なり人々ひそかにして聽聞あるべしとなり

しづめて宮にも　○前は人々の用意ををしへ爰よりは女三宮へ聽聞あるべき事とも申きかせ給ふなり

おましをゆつり　○女三宮の夜の御まし佛壇にしなし給へるを云り

はちす葉を　○五會讃一々池中華蘂滿花々總是往生人各留半座乘華葉待我閻浮同行人といへり

かうそめ　○尼の扇なり

へだてなく　○女三宮の歌なり源の心は此世にとめ

給へきと云くだし給ふなり
七僧　○讀師　續師　咒願　三禮　唄　散華　堂達
むつかしう　○草子地なり
この世にすくれ　○女三宮御出家の事
ゆだけきさきら　○辨舌なり
これはたゞしのひて　○内々の事となり
院にまうけ　○六條院なり
ぞぐと　○省略なり
ゆふへの寺に　○御布施の多を云り講說にはりたる
時分のさま面白きかきさまなり
重疊煙嵐之斷所晩寺僧歸
いましも　○さまをかへ給ふによりてかく心にいれ
給ふとなり
院の御かとは　○朱雀院なり三條宮をもよくつくり
ながらいまだうつしたてまつらずしてをき給へる
なり
かの宮をも　○三條宮なり
御てしにしたひ　○尼になるなり
おもひはなれぬ　○源なり
れいの御心は　○女三宮なり

十五夜の月　○これより又うつしてかけり前の段と
は別なり
秋のむしの聲　○源の語なり
中宮　○秋好なり過にしかたの事なるべし
しるくなきつたふる　○野などより放たせ給ふしる
しにいちじるくなくべきにさもあるはなしとなり
名にはたかひて　○松虫をいへり
人きかぬ　○うちとけ心なき虫となり人氣にとをき
となり
おほかたの　○今めきたると源のゝ給をうけて云り
いかにとかや　○源の詞かくすゞ虫を執し給ふとは
初てしるとなり
心もて　○女三宮を鈴虫に比していへり我はすては
てさる物をとなり
宮の御こと　○琴をは源にならひ給ふ故に心とゞめ
てきゝ給ふなりかきさま殊勝と云々
月さしいてゝ　○前にまた影かくしたる夕暮とあり
うけてみるべきなり
いとつれ〳〵にて　○源の詞なり
うちの御まへに　○内の御遊なり

月みるよひのいつとても　○三五夜中新月色「いつとても月見ぬ秋はなき物をわきて今夜のめつらしき哉
故權大納言　○柏木なり
いとうるさかり　○うるはしきなり
みすのうち　○源の心なり女三宮の御心ををしはかり給ふなり
御せんの御あそび　○是よりは冷泉院より御せうそこ有ける程に草子地にかけり左大辨は紅梅のたとゝ式部大輔は系圖に見えず
雲のうへを　○院にてましませはなり物わすれせすとは月はわすれぬ心也
たなじくは　○あたら夜の月と花とを同しくは心しれらん人にみせばやの心有同じくは源まいり給へかしと也
月かけは　○御返妙也心みにほかの月をも見てしかなわかやとからのあはれなるかと　花山院の御製なり此心なり
人々の御くるま　○すゝ虫のえんにてあかさんと有りつれともにわかにまいり給へるなり
左衛門督　○致仕大臣の子なり系圖になきよしの説もあり
うるはしかるへき　○源の樣をほむるなり
ねひとゝのひ　○冷泉院の御さまなり
心はへふかう　○さかりなる世をすてゝしづかにすみ給へる心はへともなり
中宮の御かた　○秋好なり
いまはかう　○源の詞なり
なにゝもつかぬ　○院號などかうぶりて何にもつかぬと卑下の詞なり
さき／＼も　○我かとひろけ給へと申せし事なり悉皆我かたさまの事は心にかけ給ふへしとなり
れいの　○秋好の御さまなり
こゝのへの　○秋好の詞禁中にてよりも今は隙もなくて六條院へも細々にまいり給はぬとなり
みな人のそむき　○皆人のそむきはてぬる世のなかにふるの社の身をいかにせん
その心のうちを　○何事をも源をたのみながら此心をばいまだ申さゞるとなり
けにおほやけさまに　○源の詞也
さためなき世といひなから　○世間は大方無事をは

誰も知ながら無意趣にては云ひかたしとなり
おもひかかつらふ　○たゝ人さへかゝづらふ事たほきとなり
なとかその人まね　○前に皆人のそむき行世をいとはしう思なる事も待ると云へるにかゝれり
ふかう　○中宮の御心なり
こみやす所の　○六條御息所なり靈に出給ふ事源はふかくかくし給へともゝれ聞給ての給ふなり
かのゝ給けん　○物の氣の云ひつる事きかまほしきとなり
なき人の　○御息所なり
さるしるしあらはならでも　○物の氣なとならでも罪はふかゝるべき事なりとなり
ものゝあなた　○只別のかなしさのみにて後世のくるしさをば思やらざりしよとなり
いかてよういひきかせん　○かやうの道理をもよくときゝかする人のことばを聞たきとなり
身つからたに　○出家なとしてなり
やう／＼つもるになん　○年のつもるなり
けにさも　○源の心

そのほのを　○源の詞
あさ露の　○命の事なり
目蓮かほとけにちかき　○目蓮救母經は僞作の經なり只盂蘭盆經によれりちかきとは佛に親近する義なり
やう／＼さる御心さし　○形をかへ給はすとも漸々に心にしめ給へとなり
しかおもひたまふる　○源もさ思となり
猶やつしにくき　○草子地なり
春宮の女御　○明石女御なり思ひ給へと冷泉院をは女御夕霧よりも猶大切に思給へるとなり
院もつねに　○冷泉院なり
何ことも　○秋好中宮の滿足なり

夕霧　卷名以歌號之源五十歳鈴虫は八月十五夜迄を書り此卷は鈴虫卷の末より十二月までを書り

まめ人の名をとり　○夕霧實法なる名をとり給へるを云り

御息所　○落葉宮の母みやす所なり

はしめより　○夕霧の心の中なり

みつからなど　○女二宮のきこえ給ふ事はなきとなり

小野といふわたり　○花鳥にしるせり比叡の山麓惟喬親王の住給へる所のあたりなるへし

御いのりのしにて　○河海惠心僧都をひけり其義に及べからざる歟只平生歸依の人なるべし

ちかきゆかり　○柏木の兄弟をいへり

辨のきみ　○柏木のさしつぎの弟なり柏木の遺言せし人紅梅のおとゞなり

ゐてはまうて　○伊勢物語にゐていきてあらんとありゐてはわざとなど云心成べしつゐてならではとなり天正廿一六八記之

この君は　○夕霧なり

宮そ御かへり　○女三宮御息所にかはりてかき給ふなり

いよ／＼みまほしう　○夕霧の心なり

きたのかた　○雲井鴈なり

わつらはしくて　○夕霧の心なり

秋のけしきつきて　○此けしきづきてと云にてよみきりて見るべし是までは道すがらを云り

宮こにゝなく　○こよりは小野の山荘なり

箋曰はかなきこしはかきと云より山荘のことなるへし

宮はおはしまゝす　○宮は京にましませとの給ひし也

人にうつりくるを　○物の氣の事なりさてすこしへたてゝ居たまへるなり

いとかたしけなく　○宮す所の詞人つての詞なり

わたらせ給ひ　○夕霧の詞供奉すへき物をとなり

こ／＼しからぬ　○かりそめの旅所のさまなり

さはかり　○女宮と推量し給へり

あなたの御せうそこ　○御息所の御かたほとゝをしとなり

れいの少將　○小少將なり御息所のをひの大和守かいもうとなり落葉宮のいとこなるへし

かうまゐり　○夕霧の詞
としころも　○柏木の後三年になり侍なり
よはひつもらす　○夕霧そゝろことにもなれさるによりてかくさしはなたせ給ふことはあるましき事と思となり
たれてとしふる　○おれてのて文字古抄に濁てよめり宮の御心と云々いかゝこれは夕霧の自歎なりかやうに情をおりて堪忍する人はありかたきよしなり
されはよ　○そばより御返事申べき事にてはなかりけるよと人々の申なり
みつからきこえ　○宮の御詞なりみつからとは御息所の事なり
こは宮の御せうそこ　○夕霧なり
心くるし　○夕霧の詞也
かたしけなけれと　○宮す所の御事を何かと申も二宮への奉公にてあるとなり
たゝあなたさまに　○我身の志を御息所の方へのみとりなし給へるはかひなしとなり
たつこゑもゐかはるも　○不斷經時をひきてよむさまなり
いて給はん　○夕霧なり
きりのたゞ　○山里のさま也
まかてんかたも　○夕霧の詞也
山さとの　○此歌巻の名となれり夕霧の歌には秀逸なり
やまがつの　○二宮の返歌心そらなるとは常に云へるにはかはれり夕霧のかくあるましき心の有けるをいへりさやうの人をはとゞめしとなり
中そらなる　○夕霧の詞霧の深き空をいへり
やらはせ給　○人はとゞめすとあるをいへり追出給ふとなり追儺をおにやらひといふがごとし
つきなき人は　○かやうの事にならはぬ身にはつきなしとなり
としころも　○宮の御心なり
人をめせは　○夕霧立出て人をめしての給ふなり
くるす野のさう　○未決の事なりくるす野は勸修寺の邊なり花鳥河海沙汰有一説夕霧の在所の遠近をよくも分別せずして小野といふにつきての給へりと云々されど花鳥にくはしくしるさゝる是可然哉

道たと／＼しけれは　○夕霧の詞也
ことさらめきて　○宮す所の御かたへ御出あらんも
　いかゝとなり
御せうそこ　○宮す所より宮への御消息なり
あさましうて　○御消息つたへし人々なり
かはかりにて　○夕霧の詞なり
いと心うく　○夕霧の詞なり
御心ゆるされては
いひしらぬ御けしきの　○いふべき事なしとなり
さはいへと　○外聞はかたちよしとはきこえざりし
　なりさはいへとしかるへしとなり
うちとけたる　○うち／＼の御姿なりかやうの事は
　思ひかけざる事となり
かうしもさなから　○御格子もまいらざるなり
猶かうおほししらぬ　○夕霧の詞なり
よつかぬまて　○好色の道によつかぬなり障子のへ
　たてなごこのまゝにてある事なり
なにことにもかやすき　○夕霧詞人かずならぬ物こ
　そしらぬよしにて置く事のあれ御身にこそよれな
　ごゝいへるなり

しつめはつまし　○かやうなれはわれもおもひのと
　めかたしとをごしたるなり
世中をむけに　○柏木になれ給へは世間を思しり給
　はぬにてもなしとなり
世をしりたる　○落葉宮の御心なり
うきみつから　○落葉の宮の詞也
我のみや　○前に世中をむげにおぼしゝらぬにしも
　あらじと夕霧の申給へる事をいへり我身の心おほ
　き名をそうべしやとなり
わか心につゝけて　○たしかにもきこえさるを夕霧
　の吟し給へる
いかにいひつる　○宮のおぼすなり
けにあしう　○夕霧の心なり世中をおほしゝらぬな
　と申せし事なり
大かたはわれぬれきぬを　○猶申かくし給ふなり
この君の御事　○柏木なり
すきにしかたに　○柏木にはおとりとおほえすと也
御心のうちにもかれは　○宮の御心なりかれとは柏
　木なり
おほ殿なと　○致仕おとゞなり

院にも　○朱雀院なり
あさましや　○夕霧の詞なり
あさ露のおもはん　○あたらしきかきさまなり
かうおこかましき　○向後猶はるかにもてなし給てはとなり
しらぬ事々　○我心なからも何ともしらぬ事とちとおごして申たまふなり
ならはぬ御心　○まめ人なれはとなり
わか御みつからも　○夕霧の自の心なり
おきはらやそほちつゝ　○心はこゝをたちわかれなは八重たつ霧をへたつる心なるべしとなり
ぬれ衣は　○かくよくいひこしらへて出し給へれどとなり
心のとはん　○實事だになくはと宮はおぼすなり
わけゆかん　○凡人はぬれ衣をほさんとこそする物なるをそなたよりきせんとし給ふは心の外となり
心はせ人に　○世の人にかはりて心はせある人にて又すき〳〵しくなるとなり
六條院のひんかし　○花散里の御方なり
ましてかしこには　○小野の里を思やり給へるなり

夏冬　○花散里かやうのかたよく沙汰しおき給へり
かしこに　○小野なり
人々ありしまゝに　○なにとなく御息所へ人の申侍れかしとなり
おやこの御中　○かやうの事は親にはかくす事常のならひなりされどこれははやく人の口よりきこしめさゞる先に申せとなり
あやしう　○宮の御詞なり
さるは　○文のさまなり
たましひを　○心ならす魄もあくかれて行なり
ほかなるものは　○身をすてゝいにやしにけん思ふより外なるものは心なりけり
ゆくかたしらす　○夕霧の心やるかたなしとなり
なに事につけても　○夕霧の御心の切なるをいへり
かゝるかたに　○いもせのかたなり
大日如來　○律師の自歎なり
ごうしやう　○花鳥說可然業障なり
そよやこの大將は　○思ひごめなくふと云ひ出し給ふなり

いてあなかたは　○法師の語のさまなり我身になか
くし給ぞとなり
せちにもあらぬ　○大切にもあらずなり
故大宮　○夕霧の祖母事なり
ほんさい　○雲井鴈なり
さる時にあへるぞうるい　○そうるいは親類なり
みこの君　○女二宮なり
人の御いかり　○物ゑんじなどの事也
いとあやしき　○御息所詞
いとまめやかに　○夕霧の事也
はふきすて　○省略なり
宮もほのかに　○ありのまゝに申せとの給し事なり
ものもの給はて　○御息所なり
みたてまつるも　○少將御息所のさまをみたてまつ
るなり
とてもかくても　○御息所の語なり
けだかう　○此宮を何ともしてけたかくしなしたき
となり
かうすこしものおほゆる　○御心ちひまあり只今こ
なたへ御出あれとなり

つれなくて　○女宮の御心なり
あしの氣　○脚氣なり
ものをいとくるしう　○あしの氣のゝほれる故をか
きのふるなり
この御ことほのめかし　○御息所しり給よしを申せ
り
なげい給へる　○御息所此事に又なげき加へ給ふよ
しをは申のこしたるなり
されはよと　○女宮の御心なり
このことにのみも　○柏木のことにも心をつくし給
しなり
この人　○夕霧なり
まいていふかひなく　○夕霧を云ひのかれても又い
かなる人もか心をかくる事のいてきてこれよりも
人きゝぐるしき事いできてはといさゝかは思なぐ
さみ給ふとなり人の事とは人言なり
かはかりになりぬるたかき人　○皇女などは一人に
だに見え給事はあるまじきに此夕霧の事さへいで
きてはとなり
中のぬりこめ　○閑道よりわたり給へり

いとみたりかはしく　○御息所の詞なり
のちかならず　○來世の再會はありかたしとなり
又めぐりまいるとも　○生あふとてもたかいにしらしつるべからずとなり
くやしきまて　○あまりへたてなかりしも今はくやしきとなり
ものつゝみを　○宮の御本上を御息所の思やり給ふなり
たゝ御心ちの　○御息所の御病惱のひまあるとなり
人しれすおほし　○夕霧念頃にもあらはさ御息所の心の中にいさゝかゆるし給ひてした待給へるなり
猶きこえたまへ　○御返事をし給へとなり
くるしけれと　○此御ふみを御息所へたてまつるなり
あさましき　○文[illegible]也
せくからに　○夕霧をいとひ給はゞかへりて御名はあらはれぬべしとなり
こよひもつれなきを　○御息所の心なり只大かたの心さしにてありけるよとなり
大との丶わたり　○雲井鴈なとの思給はん所となり

とりのあとの　○御息所かき給ふなり
たのもしけ　○おりふし女宮御息所の御方にましますとなり
たゆめけるにや　○物の氣のまつたゆめてとり入んとするかとなり
六條院のひんかし　○花散里なり
さし月にそふる　○雲井鴈の詞也
うちわらひて　○夕霧なり
まかふかたなく　○人ひとりをまほりたる心也
あまたが中に　○あまたおほき中にてすくれたることそ一段の事となり
おきなのなにかし　○竹取よりは守レ株事猶可然歟となり
おれまとひ　○愚癡の心なり
をこづりとらん　○了簡してとらんとなり
いとにほひやかに　○雲井雁なり
ふりぬる人　○ふりたる物こそとなり
かねてより　○かねてよりつらさを人にならはさて俄に物をおもはする哉
にはかに　○夕霧の詞何事のいてきぬるぞとなり

かのみこゝりの袖　○ちとあたりての給ふなり
あひなき人の御ため　○女二宮の御事をいふなるへし
つゐにあるべき　○つゐにはあるべき事なればさのみはの給はざるなり
大輔のめのと　○雲井鴈のめのと六位すくせといひし人なり
あさりとらて　○不ニ求取一
我もいまおき給やうにて　○夕霧只今はじめておきたるやうにし給へるなり
ふみはおこかましう　○女宮の心なり
みやまかせ　○宮といふ事下心にあり
いとこのひかと　○夕霧の詞
よひとに○夕霧を世の好色の人並になの給ひそと也
この女房たちも、○こゝにさふらふ人たちもとなり
心くるしき　○女郎花の歌あるなり
あだへかくし　○心のあだ〳〵しくざれたるなり
任てをける義也仰云與かうして如此してなり雲井鴈を雅意に任せておける故とわかあやまちと夕霧の思なり

心やすくたいめん　○まゐりても對面なくてはなり
人もかくのたまふ　○御息所はゆるしかたにの給へはけうは坎日なれは憚あるとなり
いとめつらしき　○夕霧の文の詞也
この御とかめ　○一夜の枕のことなり
秋のゝの　○實事なしとなり分いりしかりにて枕をむすひし事はなかりしとなり
よべのつみはひたやごもりに　○先夜わたり給はぬをひたやこもりにつみをえ給べきなり無意趣罪（ヒタヤコモリ）をかくる事なり
一夜のたいふ　○つかさのせうといひし人なり
のちのきこえ　○御息所の方より文にてすゝみ給ひしなときこえやあらんずらんとなり
中々さうしみ　○女二宮は何ともおほきぬなり
いと心くるしう　○御息所の心なり
ものをのみおぼしそふへかり　○御息所の心なり夕霧故にものおもひをし給べきとなり
いまさらに　○御息所の宮に申給ふ詞
おもひのほかに　○柏木にあひ給し事も心につかずとなり

わか御あやまち　○院の定め給し事なればなり
いとかう人の　○夕霧の事なり
よのつねの御ありさま　○夕霧の念頭にたにもあら
　はとなり
なさけなき人の　○夕霧此二夜三夜とふらひ給はさ
　る事也
をしこめて　○實事の有無をばをしこめての給ふな
　り
なにゝ我さへ　○一夜ばかりの宿をかりけんの歌の
　事なり
だんこほちて　○大日如來そらことし給はずはなど
いひしかど其驗もなきなり定業はかきりある事な
　り此物語かく驗かたにも成就不成就をよくかけり
　悉皆世間のありさまなり
宮はこの御せうそこ　○山の御門の御消息なり
日ごろも　○是より御文の詞也
つねにさこそあらめと　○御息所遺言に久しくのこ
　し置くべからずやがておさめよとありしなり
けふよりのち　○夕霧詞
ほとさへとをくて　○心にいそく故なり

ゆゝしけに　○穢氣をひきへだてたるなり
つねなきよのありさま　○殊勝の語なり
よろしう　○これより夕霧の詞なり
夢もさむるほど　○常は夢を短事にいへりこれは夢
　よりもみしかきよし尤おもしろき詞なり
おほしたり　○御息所は大將の事故多は心をみたり
　給ひしと宮はおぼすとなり
いかにきこへ　○さぶらふ人々申なり
なき人ことならぬ　○御ありさまにてなんと讀きる
　べし
わたらせたまへる　○是より夕霧へ申詞なり
かのおぼしなげきし　○夕霧の事を思歎給ひしと也
こよひも　○葬禮なり
かく心ほそくては　○出京あれとなり
のちの世の御つみに　○御息所の罪障にと云り
こと事のすちに　○異事のすち
大宮のうせ給へり　○葵上の母なり夕霧の昔の事を
　思出給なり
中々ねんころに　○致仕大臣よりは源氏の念比成し
　となり

故右衛門督　○致仕大臣よりも柏木はかなしく思ひしとなり我かなしく思ふ事に心をおなじくする人はうれしき物をとなり

女君　○雲井鴈なり

あはれをも　○あるは女二宮なりなきは御息所なり

なきかよそへや　○おろかなるよそへやとなり

いづれとか　○きえ歸るとは留れるなり消やらぬ露も草の上についに留らざるなりいづれもおなじ世となりはかなきのみとなり

かくおほつかなく　○御息所の後なり

御いみなとすへして　○待遠なれば先おとつれ給なり

たゝよつきて　○虚名にはなすましきとなり取持て女二宮をはくゝむべきとなり

きたのかたの御おもひやりを　○あるや戀しきなきや悲しきの歌の事なり

さうじみつよう　○女郎花しをるばかりのとありし御息所のゆるしをとらへ所にての給へり

うれへかほなり　○我心より愁をもそふるなり

猶ちかくてを　○近くてとなり

きぬのいろ　○服を着たるなり

なほ〳〵と　○まいりよるべきよしなり

かくつきせぬ　○夕霧の詞

その夜の御かへり　○少將の詞

すきにし御こと　○柏木逝去の時も此女宮のおぼす所をおほして心づよくしてまし〳〵たるなり

この御なげきをはおまへにはたゝわれかの御けしき

○二義あり御前とは御息所と云々夕霧の通ひ絶給し事となり又の義は御前とは女二宮の御事なり御息所なくなり給へる事なり

そよや　○夕霧の詞なりさのみかくまてなげき給ましき事となり此時は御まへとは二宮の心にてよき歟となり

いまはかたしけなくとも　○今はより所なき御身なるべしとなり

御山すみ　○朱雀院なり

まづはかゝる御わかれの　○世中心にかなふ物ならば柏木にわかれ給ふ事の出來ぬべきかとなり又は御息所の別となり

我おとらめや　○秋なれは山とよむまでなく鹿に我

をとらめや獨りぬる夜は
さとゝをみ　○小野のしのはら爰は名所にあらず草の原を云り
ふぢころも　○少將の君の歌なり
いまはかく　○女宮の御返事なり
をくらの山も　○引歌に及はずくらき所もあるまじきとなり
大納言　○柏木の事也
とのにおはし　○三條殿なり
さも見くるしう　○夕霧のさまを云り
うへは　○雲井鴈なり
いと心つきなしと　○雲井鴈の心なり
いつとかは　○今はかくあさましき夢の世をと前にある詞をうけて　いつとかはなり夕霧の心に待給ふを夢さめてとかとはよめり
うへよりおつるとや　○いかにしていかによからん小野山の上よりおつる音なしの瀧雲井鴈のかくきゝなし給へるなり
御返事をたに　○雲井鴈の心なり
むらさきの　○小少將か返事なり

ありつる御文　○夕霧の文に手習し給へるなり
めにはみ給うて　○御覧し給ひたるよとなり
あさゆふ　○此歌に音無瀧とあり夕霧の文にいかにしての詞有と見えたり
音なしの瀧とあり夕霧の文にいかにしての歌の詞ありと見えたり
とやとりなすへからん　○ひきやりたる文なれば讀あはせてみるなり暫時にかきすつる事にも心をつくべきをしへなり
御てなども　○見所あるなり
うつし心　○本心にてはなきとなり慚愧の躰なり
おとゝなども　○致仕大臣の方にも心よからざる事ともなり雲井鴈の方に心ぐるしかるべし
さまてをくらかし　○紫上の心なり
女はかり身を　○紫上身上を思給故大方の世の事を思給へり
ひきいりしづみなどすれば　○あまり物のあはれをもしらぬやうにすればおやの養育したる所もいかゝと思物なり又あはれをも知りがほなれはうき名

のたつ物なりとにかくに大事なるとなり
むこんたいしとか　○河海に見えたり無言の行も是より出たり
法師はら　○今も無言の行とてする事なり
我心ながら　○中庸を云り女の一生を無事におくらん事はありかたきとなり
宮す所の　○源の詞也
三とせより　○柏木のうせ給て三年となり　勘靑表紙三十年とあり尤可然
ゆふへの露の　○樂天か朝露貪名利の心にて夕露とかきなせり
さものとやかなる　○今日すきあすと打過るを云り
まてとにおしけなき　○夕霧の詞をしげなき人だにも何かとはなれかたき事おほき世なるとなり
四十九日
院よりも　○源の詞也
かのみここそは　○女二宮なり夕霧の心をみんとて問給へるなり
御心はいかゝ　○夕霧の詞也
かはかりの　○源の心なり或說いとつれなしと云より源の心と見るなり
女かたの心あさき　○致仕大臣も不審し給て夕霧は實人なれば猶女宮の御方の心あさきなるべしと思給ふなり
これもかれも　○紅梅の大臣などなり
ときの人の　○世に用らるゝ人とひとしきとなり
宮はかくて　○此小野に住はて給へきとなり
おほしたつ事　○出家の心さしなり
けにあまた　○出家の事なり
やうの事と　○同しやうの事となり
よのうきにつけて　○人きゝしかるべからずとなり
このうきたる御なをし　○草子地なり夕霧の事なりうむしたまへると　○かやうのことにおもひうんし給へるかとなり
さりとて又あらはれて　○夕霧の事なり
かの御心に　○宮の御心なり
宮す所の　○故御息所のかくしなし給へるといひなすべきとなり
なき人　○御息所なり
さらがへりて　○夕霧は今まてはかやうのすき〳〵

しきことをもせてすくしつる物をとなり
一條に　○一條宮にわたし給へるなり
さこそいへと　○此一條宮は横笛巻にもうちあれたる心ちすれどあてにけだかくすみなし給ふとありされども女どち住給ふにより草深くあれたるなるべしさてさこそいへとはいへり
われおはしゐて　○夕霧一條宮におはするなり
くにのことも　○大和國の事なり
いにしへも御心にかなはぬ　○柏木のことも十分ならさることとなり
女の御心ひとつに　○かたき事となり
君たちの　○さふらふ人たちなり
かつはさるまじき　○無用の文なとゝりつき給ひそめし事なり
左近少將　○二人の女房達なり
身つからの御心には　○人々はよろしくみたてまつれどさもおほさぬとなり
夜もふけぬへし　○時とりたかふへしとなり
のぼりにし　○すまの海士の鹽やく烟風をいたみ思はぬ方にたなひきにけり此歌を引かへたるなり御息所の烟となりし同けふりともなりたきとなり
御はさみなと　○自然髮をそき給なとしてはとてなり
かくもてさわがざらん　○女二宮の御心なりかく皆心つかひをするをも心にはかけ給はざるなり我身の事はあるもなきもおなじ事となり
うちわたりあく　○此小野へわたり給し時の事なり御息所の御心のわづらはしきうちにもかきなてつくろひ給しとなり
御はかし　○女もまもりにもちたるなり
くろきもまだしあへさせ給はす　○服者の調度は皆黑染なるべけれどいまだとゝのへあへず又此物一は御息所の御形見と思ひ給へばとゝめ給へり
ず經にせさせ　○草子地なり
うらしまのこか　○河海説なり
おはしましつき　○一條宮におはしつきてなり
あらぬさまなり　○此宮のしつらひがゞやきみがきて人々もやうかはりて見しにもあらぬ心を云り
殿は　○夕霧なり
三條との　○雲井鴈の御かたり

なよらかに　〇夕霧は好色だつ事をばきらひ給ふなり
ゆくりかなる　〇ふと俄なる心もいてきぬるとなり
されと年へにける　〇年比もありし事となりさまさま云り
かく女の御心ゆるひ　〇二宮の御心ゆるびなき事とは誰も思はざるなり
とてもかうても　〇草子地なり
御まうけ　〇服中なれば嫁娶の義式やうかはりたるとなり
御心さし　〇少將君の語なり
なに事も身のため　〇少將の言なり人は身のためにてこそ申せ御心にちがひては詮なしとなり
あやしう　〇夕霧の詞なり心得かたき御心となり
あか君　〇我君なり夕霧をさしていへり
またしらぬよかな　〇または又なり少將の語なり女二宮の御心も又夕霧のの給ふもいづれをことはりとも批判しがたしと云義あれどわつらはしき義なり只夕霧の語にて可然となりかやうのことは世にたくひあらじとなり

さすかに　〇少將の心なり
またしらぬは　〇少將君の語なりは心またしらぬとはかく此宮へうつしまいらせ給ふ御心かまへはいまたしらぬ事なればいつれかますべきとなり
いとまたしらぬよりにくゝめさまし　〇今按夕霧の語なり人よりはたほしをとしたると夕霧のうらみ給ふなり
いとおしうもありし　〇是は同しく夕霧の心なり如此は申されどもかくわひ給もことはりとなり
またしらぬは　〇是より少將の君の語なりいとまたしらぬと前の詞をうけてそなたの心かまへてそいまたしらぬ事なれとなりこそはとはと云にて讀きりて
ことはりは　〇いかに人にもことはらせんと云語をうけてことはらせは其ことはりはとなたかあらんすらんとなり
右の丸四天文八六二日對宗なり讀之時用此義也
これもいつまてに　〇宮の御心なり
かはかりにてはなにのもて　〇さふらふ人々もとなり

山どりの心ち　○夜は雌雄一所にねざる鳥なり獨宿
の事を云り
たゝいさゝか　○物などきこえんとなり
うらみわび　○關の岩かどはさしこもり給ふを云り
又は空のあけかたき事に云り
一條の宮　○花散里の詞
み木丁そへたれど　○花散里のさまなり
さやうにも　○夕霧の詞人の云ひなす事もあるべし
こ御息所は　○御息所遺言ありしとなり
かのさうじみ　○二宮也
けんきはなれても　○尼になり給てもおなし事なる
べし
院の　○源にもかく申給へとなり
人のいつはり　○花散里の詞なり
三條のひめきみ　○雲井鴈なり
らうたけにも　○夕霧の詞也
御ありさまどもにても　○源の御かた〴〵をいへり
あきたしや　○人にあく心つくなりなだらかにして
あるよしとなり
みなみのおとゝ　○紫上なり

この御方　○花散里なり
いさゝかあた〴〵しき　○夕霧の事とのみの給て源
の我御うへをばさし置き給ふ事よとなり
さなんつねに　○夕霧の詞まへの卷にも此道の敎訓
ありしなり
おまへに　○源の御前なり
とのに　○三條宮なり
いつことて　○雲井鴈の詞なり
御心こそ　○夕霧の詞也
めでたいさまに　○雲井鴈の詞也
かく心おさなけに　○夕霧の詞也
かう〴〵しき　○神々しきとなり鬼神のき恐ある氣
をそへたるとなりおそろしからぬ由なり
なにこさいふぞ　○雲井鴈の過言なりおいらかにと
は眞にとなり
さてもちきりふかくなる　○夕霧にもとも死給ね
との給は契りふかき方にとりなし給なり
いとわかやかに　○雲井鴈は心あさき人となり
かれも　○女二宮なり
けふも御かへり　○夕霧より女二宮へ御文まいらせ

給ふと見へたり

きのふけふ　○雲井鴈の事なり夕霧のまします故也

むかしより　○夕霧の詞也

けしきはみし　○あなたこなたよりけしきばみしにも雲井鴈一人に心をとめたりし事なり

おほしすつましき　○御子たちあるなり

なるゝ身を　○五文字二義ありなるゝ身とはなれたる人のつらきを恨みんよりはとなり夕霧をさしていへり又の義は自身の事なりなるゝとはふりぬる我身を云り恨てあらんよりはさまをもかへてあるべしとなり二義共用之

うつし人　○引歌に及へからす無益なり

さも心うき　○夕霧の詞也

松しまの　○夕霧をなれて心よからすと思へども又こと人にや思ひかへ給へきその名をとり給はん事はよろしからすとなり

うちいそぎ　○いそぎてよみ思へばよからずとなり

かしこには　○一條宮なり

うらめしかりける　○御息所夕霧のことをなけき給て俄になくなり給しゆかりとなり

しらぬ人なく　○世間にはかく人のしる事になれるをと夕霧のなけき給ふなり

心うき御かまへ　○夕はかりて小野より出し給ふ事なり

こゝの人め　○さぶらふ人々なり

内々の御心つかひ　○御心をやふる事はあらしと也

けにともおもひ　○少將の心なり夕霧の心をもけにと思ふなり

みたてまつるも　○女宮の事なり

これよりまさる　○此夕霧ほとになき人の事をも皆とりつくべき心なるべしとなり

いとかたし　○夕霧の詞也

たけき御名にか　○むら鳥のたちにし我名の心にていへり

こ君　○柏木なり

おりさへ　○御服の中なり

れいのたまし　○つねの御方なり女宮の御方なり

こと〳〵しきやうに見へぬもの　○繪樣なとこそ〳〵しからぬ物なり

女所にて　○御息所はかりすみ給へばなり

君たちも　○夕霧の御子達なり
れいのわたり給　○雲井鴈里にて住給かたには居給
　はざるなり
いまさらに　○夕霧の詞也
ふさはしからぬ　○此句決前生後の詞なり
なにごとも　○雲井鴈の返事なり
あやしき人々　○子達なり
なたらかの　○夕霧の詞也
たかなかをしき　○引歌に及べからざる歟
かしこに　○女二宮なり
いかなる人かうやう　○心づくしなる事となり夕霧
　はなれ給はざる事なればなり
かきりとのたまひ　○眞實に思さだめ給かとなり
かしこなる人々　○をさなき人々なり
すか〳〵しき　○一條宮へひき具して行給ひてはと
　なり
おとゞ　○致仕大臣なり
この宮に　○落葉宮なり
ちきりあれや　○あはれと思は柏木なりうらめしと
　きくは夕霧になひき給ふ事なりとにかくに契ある
　事かとよめり
猶えおほし　○此あたりをははなれ給まじき事とな
　り
たぶいりに　○内外なき樣なり
まいりなれにたる　○少將の詞
せんじかき　○せんじがきは然るべからすとなり
こうへおはせましかは　○宮の御心なり
なにゆへか　○身ひとつをさま〳〵にの給ふいかゞ
　したることぞとなり
時々さふらふに　○少將の詞也
いまよりは　○夕霧のましますほとにとなり
内外なとも　○ないげ
大との君　○雲井鴈なり
内侍のすけ　○故内侍の典侍なり少女卷に見えたり
我をよそゝもに　○雲井鴈いつも此内侍のすけをね
　たみ給ふほとに今此宮の事を聞て雲井鴈をとぶら
　へるなり
かすならは　○我身數ならば我身のうへにもぬらす
　べき袖なるを今は雲井鴈のためにぬらすとなり
けやけし　○わつらはしとなり

人のよの　○我身は人のうへにて我身にかへては思
はさるとなり
おほしける　○藤内侍のすけは如此思となり
この御はらには　○雲井鴈の御腹なり
ひんかしのたとゝ　○花散里なり
いひやるかたなくこそ　○例の作者の躰なり

細流巻十二　みのり　こうはい　まほろし　竹かは　にほふみや

御法　巻名以歌號之　源五十一歳の春より秋ま
ての事なり
むらさきのうへ　○一とせ煩給ふ事わかなの巻に見
えたり其以來とにかくにわつらひ給なり
しはしにても　○源の心なり
みづからの御心ちには　○紫上の心の中なり
うしろめたきほたし　○御子のなきをいへり
ほいあるさまに　○さまをかへたきとなり
さるはわか御心にも　○源の心なり紫上の背き給は
ゝそれを能次なるべしとなり
いと心くるしき　○紫上の心くるしさなり
あさえたる　○花鳥にはあざれたると云詞と云々河
海はあさき心とはいへり河海説然へき歟
わか御身をも　○御子なしされはつみおもしとなり
前にはうろめたきほたしだにましらぬ御身なれは
と云しかども此には又かくいへりさてさまをかへ
て後世をつとめたき由なり
こと〳〵しき　○源は兼てもしり給はさるなり

きさいの宮たち　○后たちとあるは一人は秋好なり
一人は明石の女御なるべし明石女御立后の事此に
て初て見たり
いそのかみ　○ふりにたる願といはんためなり
みなみひんかし　○二條院なり
にしのぬりこめ　○紫上の聽聞所なり
ことなるふかき心もなき　○結緣する人も功德ふか
きとなり
うちやすみ　○法事の末つかたなり紫上心ほそげに
て羊の步み近くおぼすべし
三の宮して　○匂宮五歲になり給ふ也
たしからぬ　○このみは採菓汲水の心なり此身を菓
に寄たりよのつねは卑下していへるを只今うちむ
きていへる面白きとなり
御かへり　○大事なる返事となり心ぼそきすぢなご
はいま〳〵しきと人の褒貶もいかゞとてまきらは
してよめり
たき木こる　○于時奉事經於千歲 提婆品 千歲給侍の
心なり千歲の給侍をしたる樣に今日を始めにて千
歲の齡をもたもち給へきと祝したるなり

なほはるに心とまる　○紫上平生春に心とめ給へは
なり
れうわう　○河海兩說共可用之
みな人の　○見物の人々なるべし
のこりすくなしと　○紫上の心中なるべし
なつふゆの　○六條院にていひかはし給ふ明石上花
ちる里などをいへり
たえぬへき　○御法身をそへたり聞法の値遇は生々
にわするましきとなり今日緣を結びぬれば我身世
をさりぬとも聞法の契は絕ゆましきとなり
むすひ置く　○明石上は思惟をして後の人のそしり
を思て祝してよめり此歌はありのまゝなり是花散
里の性なり
中宮　○明石の中宮なり
ひんかしのたい　○寢殿には紫上のましますなり東
にはいつも中宮のましますなりされば東の對にて
中宮を待給なり說々あれど此義可然
きしきなと　○紫上の心なり
こよひはすはなれたる　○源氏中宮の御まへにわた
り給て又わか方へわたり給なり

かた〳〵に　○花鳥中宮の詞と云々いかゞ是は紫上の詞なり中宮のわか御かた御出あらんはびんなし又紫上のまゐり給はんはわづらはしき故にしはし爰にましませとなり
宮たちを　○明石中宮の御腹の宮たちなり
なとかうのみ　○中宮の御心の中なり何とてかくまてよはくはましますそとなり
ゆゝしけになどは　○こゝにてはこと〳〵しき心なり
さしころ　○紫上の御方にさふらふ人々なり
みと經なとにより　○中宮の季御讀經なり此事にまきらはしきとて紫上我所にかへり給へり
三宮は　○匂兵部卿宮なり五歳なるべし
うちのうへより　○今上なり
宮よりも　○中宮なり
はゝをこそ　○紫上なり
たとなになり給なは　○紫上詞
さるへからんおりは　○紫上我身にとはの給はぬ心・妙なり西行か佛には櫻の花を奉れ我のちの世を人とぶらはゞとよめるも此心なるべし
ひめ宮　○女一宮なり
かことかまし　○かこつけかましきなり
さるは身にしむはかり　○秋ふくはいかなる色の風なれは身にしむはかり人の悲しき
あなたにも　○紫上中宮の御方へもまいり給へきやうもなきなり
宮そ　○紫上の御方へわたり給なり
こよなうやせ　○紫上なり
この御まへにては　○中宮の御まへなり
かはかりの　○紫上の心なり
おくとみる　○はかなき身にてある物を御心もはれ〳〵しけなめりなどの給をいへりおきゐたるによそへたり
おりさへしのひかたき　○かくいへる折ふし風の吹出たるをいへり
やゝもせは　○源の歌なり紫上におくれ侍まじきとなりきえをあらそふべきとなり
秋風に　○中宮の御歌なり世間の無常をいへり我身も草におかぬ計をといへる歌の心なり

かくて千とせを　○不常住の心なり
いまはわたらせ給ね　○紫上中宮へ申給詞
いとなめけに　○終焉まで禮をみたらざる心つかひ難有
宮もかへり給はて　○いまはのとちめを見給ふ事を中宮はかきりなくうれしく思給なり
あけくれ　⊙明闇なり夜の明る時分歟
さかしき人　○心おさめたる人なきとなり
御ものゝけなと　○大將の詞
一日一夜　○出家の功德もこの事なり
まことにいふかひなく　○御心もなく成はて給てはかひなき事となり
御いみに　○されど僧をば請出給ふなり
としころ　○夕霧の心なり
ありしはかり　○野分のあしたなり
御とのあふらをちかく　○源の紫上のさまを見給ふなり
この君の　○夕霧なり
かくなにことも　○源の詞也
しをりあけて

つや〳〵　○光の字なり
ひのいとあかきに　○燈なり
とかくうちまきらはす　○つくろふ事もなきをいへり
しにいるたましひ　○面白き詞なり夕霧の心なり
いにしへも　○夕顔上葵上等の事なり
人にかゝりて　○源のかちにて野に出給んと見えたり
月のかほ　○八月廿日葬送なりしなり
十四日にうせたまひて　○紫上は十四日にうせて十五日にやかて葬れるなり葵の注にかけるなり古人の說わつらはし只此義よしとなり
よろつになくさむ　○大將の孝行なり
風のわきたちて　○大將の心なり
又かきりのほど　○終焉の時見給し事なり
あみた佛　○源氏の詞なり
いにしへの　○ありし野分の夕を今はのきはに思出給ひし事なり
ぞなごりさへ　○歌より詞にかゝれり
いにしへより　○源の心なり

かゝみにみゆるかげを　〇すまへの時紫上の鏡を見てもとの給し事と云説ありされど只これは我身のうへをつく〳〵と思つゝけて我ながら誇たる詞なるべし

いはけなき　〇母上祖母桐壺帝などに別給ひし事也

やゝましく　〇心やましきなり

このころ　〇八月なればなり

かの御身ををしみきこえ　〇葵上を惜給父母もいまはなくなり給へるなりうせ給し人々の数多き由なり

いにしへの　〇葵上をいへり

露けさは　〇世間の無常の悲き事をいへり

御心のまゝならは　〇愁腸も猶こま〳〵とありたきをゝつゝみて残し給へるなり歌にも見たり

めざゝめたまひ　〇致仕大臣の見とがめ給へきとなり

うすゝみさ　〇輕服なり

世中に　〇紫上をほめたるなり

れいせん院　〇秋好中宮なり

かれはつる　〇春秋のあらそひの事をいへり

のぼりにし　〇煙とのぼり給し紫上も我秋はつる心をはかへり見そし給らんとなり秋をはさし置きて面白き歌なり

女がたに　〇我身のほれ〳〵しさに外様をはゝかり給なりまほろしにも見えたり

けふやとのみ　〇世をのがるゝ事を今日々々とのみ思ひ給ふなり

中宮　〇明石なり

まぼろし　紫名以歌號之源五十二歳の正月より十二月までを次第々々にしるせり紫上を忘れかたき心日々月々にたえまなき心を顯せりかきざま心有ものなり

はるのひかりを　○百千鳥さへづる春は物ごとに改むれども我ぞふり行の心あり

さにはれいのやうに　○御法の巻にも女がたにぞおはしますとありなげき給ふさまを人につゝみ給ふなり

兵部卿のみや　○螢なり

わがやどは　○春宮兵部卿宮に比していへり

かをとめて　○源氏恨めんが為に來りたるなり大かたの春にてはなきとなり

こうはいのしたに　○兵部卿宮の御さまなり

さし此へにけるは　○其外の人は服を改めたる心なり

まぎれなく　○源の出頭なき故に人々たえす見まいらするをなくさめにするなり

ひきさけ　○けの字淸濁兩義あり濁て讀時は次の閒などに引さぐるなり淸てよむ時は引避なり兩說とも可用之

さしもありはつまじき　○紫上の心みだり給し事也

ひとわたりづゝは　○槿齋院朧月夜などの事なり

そのおりのこと　○さふらふ人々なり

入道の宮　○女三宮なり若菜卷になほ殘る雪とずんじ給ひし時の事なり

夢にても　○逢事も今はなきねの夢ならでいつかは君を又は見るべき

あけぼのにしもさうしに　○曙にしも此しもの字にあたりて見るべし

うき世には　○其きはにも源は身を捨んと思しも人めに憚て打過ぬる由なり

よろしうおもはん　○なほざりに思はん事にてだにとなり

袖のしがらみ　○あすか川心のうちに流るれは袖のしがらみいつかよどまん

この世につけては　○源の詞なり

ほとけなどの　○無常をさとさんためとなり

めならす人々　○さふらふ人々なり

うなひまつ　○花鳥に見たりなき人のかたみと見る

由なり
人にむかはん　○人に對面なきいはれをかきのべたるなり
おもひほれて　○世間の用意なり
かく心かはり　○愁腸ゆえ心も平生にかはりたる事なり
涙の雨　○墨染の君か袂は雲なれやたえず涙の雨とのみふる
きさいの宮は　○明石中宮御歸參なり
三宮　○匂兵部卿宮なり
はゝのゝたまひ　○紫上の遺言をの給へり
うゑてみし　○鶯は花の主るしの行衞をは何くへ行
　そこなり此歌よみ給まては二條院にての事なり
はるふかく　○是より六條院の事なり
おほかたこの世のほか　○源の心なり
おそくとき花　○かくしなぐ〵を能わきてうへおき給しなり
わか宮まろがさくら　○此語にて二條院の事と見ゆ
　義ありされど此六條院の花をもまいらせ給ふ歟と
なり又は六條院二條院の分別なくしての給ふ幼稚の心なるべき歟
たほふはかりの　○大空にたほふはかりの袖もかな春さく花を風に任せじ　の此歌は有難事をいへり
此几帳をたてめぐらすべき事は安き事なればかしこうはいへりと判し給へるなり
きみになれきこへん　○三宮にむかひて隱遁あるべき事を申給へり
いともの〔し〕と　○三宮の心なり
はゝののたまひし　○紫上のゝ給しやうに又源も殘すくなしとの給をいま〵〵しとなり
御ぞの袖を　○御ぬしの袖にても又源のにてもあるへし
れいの色あひ　○除服のしたる人なり
みつからの御なほし　○平絹のなをしを着給へり志の淺深によりて心喪の服は用ゐるなり
いまはとて　○紫上の心とゝめて木草をもうへ給し所を我身の世を遁れなばあらしやはてんといへり
こなたのわか君　○こゝにてたしかに六條院と見えたり

宮はほとけの　〇女三宮なり
あさへ給へる　〇淺き心なり
あかのはな　〇昨花を佛の供養に折さゝせたるなり
春に心よせし人　〇紫上なり
たいのまへ　〇紫上の御かたなり
うゑし人なき　色もかも昔のことに匂へともうゑけん人のかけそ戀しき
たにゝは春もと　〇女三宮の返事なり何となくの給へど物思もなしといへる所源の耳にたちて聞給となり「光なき谷には春もよそなれば咲てとく散物おもひなし
そのことのさらでも　〇これにつけても紫上の事を思出給なり一ふし愛ぞ思ひたかふと思し事のなかりしとなり和泉式部か一今は只そよそのことく思出てゝ忘るはかりのうき事もかなといへる心と同し
又かうざま　〇又紫上を思出給なり
人をあはれと　〇是より源の詞なり
大かたの世につけて　〇すまへくたり給し事なりわかゝりし時は命とはかろく思ひしなり

ひとつすぢの　〇紫上の事ひとつの様にはの給はざるなり
おほかたの人めに　〇明石上の返答なり
いにしへのためし　〇道心はおこり安くて又さめやすき物なり花鳥に花山院の御事をひけり遍昭なとの類はまれなる事なり
猶しばしおほしのとめさせ給て　〇思惟あるべき事となり
宮たち　〇今上の宮たちなり
うこきなき　〇御即位ありてとなり
さまてたもひのとめん　〇源の詞なり
こきさいの宮　〇薄雲なり
心あらばと　〇深草の野への櫻し心あらばの心なり
それはおほかた　〇昔まさらはし給なり
みづからとりわく　〇公界の事にも道心はたこる物となり
としへぬる　〇紫上なり
かゝるなかのかなしさ　〇いもせのなかをいへり
かくてもあかしつべき　〇こゝにとまり給べき事となり

女も　○此もの字影略して見るべし源もと云心あり
なく／＼も　○鴈によせたり三月の事なればなり
身のうへは　○明石上の我身をばさしおかれて源の
なげき給をかなしく思給となり
かりかゐし　○源を鴈に比したるなり源の今は花に
もめて給はざるとなり我身も同し心にて花見んと
も思はさるとなり又の義は紫上の後は源の御影を
も見る事のなきとなり
ふりかたう　○明石上の書さまなり
なまめさましき　○初は紫上明石上をはめさましき
ものにし給しとなり
人はさしもみしらさりき　○人は見しらざるへし源
はよく見知たるとなり花鳥説いかゝ
夏の御かたより　○夏にうつしてかけり
夏ころも　○今日ばかりとは今日はと云心なりふる
き思もすゝみ待るへしとなり紫上かやうの衣裳な
ご調べ給ひし事時節につけて思出し給べきとなり
すゝみやはせぬとは増進すべしとなり
はころもの　○仏界へかけてよみ給へり殊勝の歌な
り
さとに玄のひて　○源の仁恕あるなり
くれなゐのきばみたる　○柑子色なり服者のはかま
の色なり
この名こそ　○逢といべる心なり
さもこそは　○よるべの水の事河海に委くしるさる
此歌はよるへはたよりの心なり祭の日なるにより
て神社に事よせていへり　中將君は紫上をよるへ
にしてさふらひ待なりみ草ゐめとは今紫上ましま
さすして便を失ひたるなりされば葵のかざしなご
も忘れたり源もあふひと云事をは忘れはて給ぬる
よなり
おほかたは　中將君ひとりにはあふと云名をもけが
さるべしとなり罪を摘によせたり
さみたれ　○時節をうつしてかけるさま面白し
ちよをならせる　○祝して申給へり郭公を待なり
いろかへぬ花橘に郭公ちよをならせる聲聞ゆなり
まどをうつこゑ　○蕭々暗雨打窓聲
いもかきねに　○紫上にきかせましかはとなり夕
霧の心なり「獨してきくは悲き郭公いもかき

ねにおとなはせはや
ひとりすみは　○源の詞
心にはたゝ　○源の御さまなり
かくのみは　○夕霧の心
ほのかに見し　○野分の朝の事
昨日けふと　○夕霧の詞八月の周忌も近つく由なり
なにはかり　○源の詞
なにかしそうつ　○誰ともなし
かやうのこと　○夕霧の詞曼陀羅經なとの事を紫上
はよくしをき給へは心やすしとなりうしろやすき
わざなれどと讀きりてこの世にはと云より段をた
てゝ見るへし
それはかりそめならず　○源の詞紫上にかぎらず何
方にも御子はすくなし源の御みつからの宿世なり
となり
そこにこそ　○夕霧御子達もあまたあるをの給へり
いかに志りてか　○古のことかたらへは郭公いかに
しりてかふる聲になく引歌まへの詞にいたうもの・
給ひ出ぬにとかきたる妙なり源の萬端愁腸の心中
いひもやり給はさる折ふしのさまなり

ほとゝきす　○君とは紫上をいへり
女房など　○草子地なり
おはせしよに　○紫上の在世を云なり
いとあつき　○六月なり
いかにおほかる　○花鳥義尤可然
日くらしのこゑ　○蜩の聲を聞て我のみや哀と思は
んきり〳〵すなく夕かけの山となてしことといへる
を思出給なるへしひとりのみ見給ふとかける我の
みやあはれと思はんの心面白し
つれ〳〵と　○日晩を虫といへる面白し心は我至極
なきくらしぬるに日晩さへかくなきくらすよとな
りかごとがましきことはわりなくなと云心なり
夕殿にほたるとむて　○楊貴妃の心なり
よるをしる　○我身のみきゆる期もなしとなり
たなはたの　○あふせは雲井はるかにて紫上にわか
れし時の心はたへさるとなり
ついたちころ　○八月一日比なり
いまゝでへにける　○人の身もならはし物を今まで
にかくてもへぬる世にこそありけれ
御正日　○總じては正日とは四十九日をいへりこゝ

には周忌を云り
ふりしかと　○神無月いつも時雨はふりしかどかく
　袖ひつる折は無りき
雲井をわたる　○つらをみたらさる由なり
おほそらを　○鵬をさきへて幻術の士に比するなり
　幻士は飛行自在なる事を思へり貴妃か心あり
なにごとにつけても　○花鳥の色にも音にもとなり
殿上し給て　○わらは殿上なり
頭中將　○雲井鴈の兄弟
いにしへあやしかり　○つくしの五節に文やり給し
　事なとなり
みや人は　○日蔭のかつらによせていへり我身には月
　日の行末も知さるとなり
世をさり給へき　○嵯峨院に隱遁し給へる事宇治宿
　木の巻に書りて見えたり
かの御て　○紫上の手跡なり
千とせのかたみ　○かひなしと思なわひそ水くきの
　跡そ千とせの形見なりける
してのやま　○おとは筆跡なり
めゝしく　○女々しくなり

かきつめて、○かきあつめてとなり
行すゑなかき　○佛名の導師の源氏の行末を祈る聲
　なり
かしらはやう／＼　○白頭ニシテ夜禮ス佛名經ヲの心あり
御あそびなとも　○周忌過ぬれはなり
時によりたる　○朗詠などなるべし
春までの　○色つくとは蕾ひらくるなり
その日そ　○此程はこもり居給へり今日初て外様に
　出給ふとなり
わか宮　○匂宮なり
ものおもふと　○教忠歌の上句そのまゝ用なり
ついたちの　○院の拜禮今年はかりなるべしとて用
　意あるなり　金葉第九堀川院時源依主か式部丞申
　ける申文にそへたるうた　日の光あまねき空のけ
　しきにも我身一つは雲かくれつゝ

にほふ宮　巻名以詞書之匂兵部卿宮とも又薫大将ともいへり　抑第二十六に雲隠巻あるへき事古人は難義とせり然れとも無ニ別義ニ河海花鳥に委くしるさる雲隠ニ云事人の逝去の事にのみ古来用来れり禁忌の詞なるへきなり但作者の式部か歌雲隠れにし夜半の月かなとよめるはあなかち哀傷にあらさる歟凡此物語は河海にも云る如く天台の法文にてかけり作物語なる故は空諦なり桐壺帝を延喜帝に比する等の類は假諦なり此雲隠は中道なり釋尊五時の教此物語の中に備れり五十四帖皆亦有亦空門の心通好色の道も終には佛道に歸する媒なりと也畢竟此雲隠は名はかりにて不書之説尤可然其故は物語一部の中哀情をかける人さま〳〵にて事つきたり此外に源氏崩御の事をしるさは言語も及へからす又同じさまの事なるへし仍略之作者の趣向玄之玄者也　○幻巻と此匂宮の巻との間九年なるへし此巻よりは薫の年齢にて年紀をたつる也幻巻にては五歳なり今年十四歳にて元服の事あり六歳より十二歳までの事は雲隠の中にゆつりたるなり總してやとり木の巻にて年紀錯亂せり別にしるせり花鳥十四歳より十九歳までをのせたりとあれとも二十歳の春までの事見えたり

ひかりかくれ給にしのち　○源崩御の後をいへりそこらとは夕霧の御末なり箋曰明石中宮御腹の宮々と詞の中に含めり

おりゐのみかとを　○冷泉院源氏の御末と申さんは隠密の事なればこれをさしをくなり

たうたいの三の宮　○匂宮なり

宮のわか君　○女三宮の御腹の薫なり

まはゆきゝはには　○抜群の人にはあらすとなり

さる御なからひに　○源氏の御末なとゝ人の思故に源の幼少の御時よりは人のおぼへこよなしとなり

これも源氏の御威光故となり

かしつききこえさせ給なれは　○匂宮取分御愛子たるなり

心やすきふるさとに　○二條院なり

六條院のみなみ　○紫上すみ給し方なり

二の宮　○匂宮の同胞の兄なり

右の大いとのゝ　○夕霧なり

ついてのまゝ　○此匂宮へもまいり給へしと人々思

へり
わか御心より　○好色の故なり
やうのもの　○おなしやうの物となり
うるはしうは　○まことにあるべき事なと云か如し
六の君なん　○宿木の巻に匂へまいらせ給へり
さま〱つとひ　○六條院の人々なり
ひんかしの院　○二條院の東也御そう分は所分也
三條院　○朱雀院より給はり給へりまへに見へたり
いまきさき　○明石中宮なり秋好中宮にまきらはさしとて今の字を加へたるなり
世のならひもつねなく　○門前冷落鞍馬稀の心也
うしとらのまちに　○花散里のすみ給方なり
三條とのと　○雲井鴈なり
二條院　○明石上方の人はかり殘給べき宿縁なりけりと見へたり二條院には匂宮六條院には女一宮二宮なとのすみ給へる事なり
たいのうへの　○紫上の明石上なとのことくしてましまさぬ事口惜く思ひ給へり
春の花のさかりは　○のこりなくちるそめてたき櫻花の心なり

二品の宮のわか君は　○薫なり源氏薫の事を申をき給へるなり
きさいの宮　○秋好なり
十四にて二月に侍従になり給　○花鳥十六歳の秋中將に任と云々如何これは竹川巻の年紀の相違ある故なり只十四歳の秋中將に任する義可ㇾ然なり
御たうはり　○冷泉院の御給なり叙㆓四位㆒なり
いつこの心もとなき　○心もとなき事もなきに小早速昇進し給ふなり
おはしますおとゝ　○冷泉院ちかくすませ給なり
うへにも宮にも　○宮とは秋好なり
こちじの大いとの　○冷泉院は御子すくなし女宮一所なり　柏木の妹冷泉院へ參て弘徽殿と聞ゆる御腹なり
きさいの宮の　○秋好中宮なり冷泉院の女宮とかしつき給にもをとらす又秋好中宮も薫をもてかしつき給事をなとかさしもとまて人の見てまつるとなり花鳥說いかゝ
はゝ宮は　○女三宮なり
おさな心ちに　○柏木の事なり

せんけうたいし ○他流本くい太子とあり善巧は羅睺羅別名なるへし未決事なりいかさま柏木の事たしかに知度の由なり

おほつかな ○出生以來の事云ひ聞する人もなきを打佗たるなり

いらふへき人もなし ○面白き書さまなり佛法にいはゞ無始已來生死のありさま無分別となり

宮もかくさかりの御かたちを ○女三宮なり

いつゝのなにかし ○五障なりさはりといはすしてなにかしとかけり餘情にくひなし

すき給にけんも ○柏木なり

内にもはゝ宮の御かたさま ○内には女三宮蓮枝にてましまず故なり

きさいの宮 ○明石中宮なり

するにうまれて ○薫の事を源のゝ給しとなり

それみ給人 ○こき殿の大后二條大臣なとなり

ついにさるいみしき世のみたれ ○左遷の事なり歸京ありては恩にて仇を報するやうにさらに恨をのこし給はさるを云り 身を全し給へる殊勝の事となり花鳥説いかゝ

のちの世の御つとめ ○嵯峨院に隱居し給へる由見へたり

をくらかし給はす ○あらましの末をおこたりおはざるを云り

この君は ○薫なり美譽芳聲もはやく聞ゆるとなり

いとこの世の人とはつくり出さりける ○佛菩薩の化現かとなり

かのかうはしき ○大品經廿七に八十隨形好云々四十二者毛孔出二香氣一四十三者口出無上香云々

うちしのひたちよらんも ○うちふるまひ給ふ匂ひもしるかりけりとなり

とりもつけ給はねと ○にほひなともし給はぬとなり

もとのかをりはかくれて ○匂の深きよしの書樣妙なり

うつしを ○薫物なり荷葉梅花なと云か如し

おと／＼御心うつし給はす ○花鳥給はすとは給ふと云心なりとあり然らはすの字清てよむへきとなりいかゞ是は只すの字濁るべきなり花鳥の心は女郎花吹すきてくる秋風はめには見へねと香こそし

るけれ又萬葉には秋田かるかりほのやどり匂ふまてさける秋萩見れどあかぬかもなどいへれは皆香草にとりてかく釋し給ふと見へたりされど女郎花秋萩なとは蘭菊などの如くには匂ひもなき物なれは心をもつけ給はめと見るべき歟されはしたい詞にわれもかうなとはと此はの字にてよく見えたり

源中將 ○薰なり

やうことなき ○やんことなきなり

さしあたりて ○草子地なり

十九になり給ひし ○薰十四より十九までの事こゝに見へたり 次の卷は又たちかへりて先年のことあり

をのつからおよすけ ○柏木の事心にあるによりて心操もおのづから實法に見え給へるなり

ひとつ院のうち ○薰冷泉院にのみ侍ひ給なり

わかかく人にめでられ ○天然の風情なり人もなひきやすなる故にしのひ所も多かるへきに心はとめ給はざるなり

三條宮 ○女三宮の御方ならたゞさかにも薰の御ありさまを見るべき心なり

心にはかゝらるゝ ○かひなき事とは思ながらなり

宮のおほし ○宮は女三宮なり薰の心の中におもへるなり

やんことなき ○雲井鴈の腹をいへり

一條宮 ○落葉宮なり

いつくしう ○さのみをくふかならし給へる也

のりゆみのかへりあるし ○薰廿歳の正月なり此時夕霧右大臣にて左大將かけ給へるなるべし

きさいはら ○明石中宮の御腹なり

れいの左 ○此物語左右にわかてる事大略左勝なり繪合韵ふたぎ皆左の勝なりさて例のとかけるにや

宰相中將は ○薰は右なり劣かたなるに依てかへりあるしの亭へはむかはさるなり

おしとゝめ ○車なり

ゑか ○近下なり調律の心なり

もとめこまひて ○風俗のやをとめをもとめこさかけるなり

やみはあやなく ○春の夜のやみはあやなし

かにこそにたる、○ふる雪に色はまかひぬ梅花香にこそ似たる物無りけれ

右のすけも　○夕霧の詞薫はまけ方なれど此亭にては別してとりもち給べき事となり
神のますなど　○神のますは求子第二段の始なりなどゝは例の作者の詞なり　若菜下まかひるさなのとかける筆法に同じきなり

紅梅

巻名以詞號之匂宮の巻の並の一なり或説竹川を一の並とせり其故は薫の幼少の時よりの事あるによりてなりされども只紅梅竹川と次第したるよき也此巻は竪の並となんいへり但横の弁とも云べきにや薫廿一廿二歳の事なり花鳥三ヶ年の異あり幻の巻と此巻とは十七八ヶ年の間なり

そのころあぜちの大納言　○此時は紅梅の右大臣なりされどもまへの按察大納言にてありし故に人のいひ習したる分をかけるなり

わらはより　○榊巻に高砂うたひし人なり

もとよりのは　○誰人ともなし

のちのおほきおとゞ　○ひげ黒をいへり野路後の両説あり河海忠仁公を古今にさきのおほきおほいまうち君とかける義あり後の義尤可レ然乎

式部卿の　○槇柱の祖父なり

故兵部卿のみこ　○蛍兵部卿宮なり此宮薨じ給よしこゝにて初て見えたり

しのひつゝかよひたまひし　○紅梅大臣かよひ給へるなり

御子　○紅梅大臣の御子なり

故宮の御かたに　○螢宮なり
おの〳〵　○御まゝこなればなり
わか御かたさまに　○人のをしへをかけり
大納言との丶　○あね君なり
宮の御かた　○兵部卿宮のひめ君なり
こなたかなた　○父宮祖父宮よりの御ゆつりあるべし
きこえたまふ人おほく　○のそみをかくる人おほきなり
中宮　○明石中宮なり
左のおほいとの　○夕霧の女なり
十七八のほど　○紅梅の嫡女なり
兵部卿の宮の　○匂宮なり
このわかきみ　○槇柱の腹の若君なり匂宮めしまつはし給となり
けうさをみて　○匂宮の詞
さなんと　○紅梅の大臣にかたり申なり
いとかひありと　○紅梅大臣の心なり
かすかの神の　○秋好の中宮にたゝ給事なり乙女にも源氏のうちしきり給べき事をいへり伊勢大神宮ましますに所にはあひ殿とてかならず春日大明神おはしますこと〳〵后には必す藤氏の人あべきなり君臣の約神代よりの事なるよしなり
とのはつれ〳〵なる　○紅梅なり槇柱の花春宮へまいり給へれはなり
にしの御かた　○中の君なり
ひんかしのひめ　○螢兵部卿御女なり
こなたをしのやうに　○宮の君に中君なとのならひ給なり
ものはぢを　○宮の姫君なり
かく内まいりや　○紅梅の大臣の用意なり我實子はかりをもてあつかふやうなるもいかゝとなり
さるへからん　○紅梅の大臣の詞槇柱の君へ申給なりこれは前の事なり
おなしことゝ　○實子に差別あるまじきとなり
さらに　○母君の詞
いつれもわかす　○紅梅大臣の心
みかたちを　○物ふかきさまみへたり
うへおはせぬ　○母上の御留守なるにはとなり
よのなかひろき　○我女にまさる人もありけるとそ

ねみたるなり
月ころなになく　○紅梅大臣の詞
にしのかたに　○中の君なり
なまかたはに　○蹉跎を評してかけり
源中納言　○薫の中納言こゝに見えたり紅梅も大臣たるへし
さふらふ人さへ　○大臣の詞
わさとうるはしき　○直衣姿なり
れいけい殿　○紅梅の嫡女春宮へ参たりし人なり
ゆつりきこえて　○花方にゆつるとなり又は若君にゆつるとなり
かはふえ　○嘯なりうそふきてしやうかなどして柏子とり給なるべし
のきちかきこうはい　○巻の名となれり
あはれひかる源氏　○昔の事をいひ出し給なり
あなんが光はなち　○河海大論をひけり
きこえおかさんかし　○中おかして見るべきとなり
心ありて　○まつ鶯とあるまつの字両義あり待と先となり
なれきこえ　○匂宮になれまほしき由なり

中宮　○匂宮中宮より出給へるをりふしに参り給へり
うちならて　○二條院の事なり
春宮に　○匂宮の詞
時とられて　○姉君のまいり給へる事なり
まつはさせたまへりし　○若君の詞
おまへ　○匂の御まへにはさふらひよしとなり
我をは人けなしと　○匂の詞紅梅大臣を恨給なり
ひんかしときこゆなる　○螢兵部卿の御むすめの事なり
うちゑみて　○匂宮なり
そのにゝほへる　○梅を評しての給へり紅梅は必ず匂後れたる物なり此枝は色も香も具したるとなり
このはなのあるしは　○宮の君の事なり匂宮不審し給へり
しらす　○若君の詞
心しらん人に　○あたら夜の月と花とを同くは心しられん人に見せはや
わかかたさま　○紅梅大臣は我實子の中の君を匂へ奉るべきの心あるとなり

思こゝろは　○匂宮の御心は宮の君にふかく思しみ給へり

けさやかに　○宮の君に心ある故に中君の方をはけさやかにもの給はざるとなり

花のかに　○よその事にいひなし給へり

さてなを　○大臣へしらせ奉らて導くべき由を若君にかたらひ給ふなり

かひあるさまにて　○若君の心に此宮の君を匂へまいらせはやと思なり

いとはなやかに　○れいけいてんの女御を寵し給ふ事なり

これはきのふの　○父へまいらせ給ふなり

ねたけにも　○大臣の詞なり

左のおとゝわれらか　○夕霧や紅梅大臣の見奉る所にては實法をたて給となり

もとつかの　○匂宮は天然の匂ひある人にてましませは梅も匂をますべしとなり猶中君を奉るべきよしなり

御心ときめき　○眞實に申給となり

はなのかを　○これも公界にいひなし給へり

きたのかた　○眞木柱なり

人はなほと　○天然の若君のにほひと人は云なり

宮のいと　○宮とは春宮なり御推量ありしとなり北方のかたり給しなり

さかし梅の花　○紅梅大臣の詞さる事ありしとなり

おなしはなの　○梅に天然奇特なるにほひのあるとなり源中納言のにほひよりいひ出し給なり

この宮なとの　○匂宮梅を執し給へることはりとなり

宮の御かたは　○宮の君の事なり

さしむかひたる　○此宮の君は父宮ましまさゝるによりてのそみ申人もなくて紅梅大臣の御女をのみ人も申かゝり給へりされと此匂宮はあながちに宮の君に御心さし懇なるとなり

ふさいのかたに　○匂宮は我身にふさいたるべしと思給なり

ふかく心かけ　○紅梅大臣はあながちに我むすめをと心かけ給なり

なにかは人の御ありさま　○北方は可然事に思給へり

八の宮のひめ君　○宇治の中君の事なり此あたりの巻々雜亂せりしけうかよひ給ふ事は椎本巻にあたれり

さかしらかり　○母君時々御返事を申給へり

竹川　巻名以歌並詞號之横の並なり又末は竪の如し薫十四はかりと書て次の年正月より七月まて書て又次の年の事あり又年頃ありてとありて年々うつるさまみへたり

これを源しの御そうにも　○此發端紫式部か作と見せすよその人のいへる事の様にかけり源氏の御そうにもはなれとは花鳥の説いかゞひけくろを云にあらず玉かつらを云り其故は鬚黒の室なればひけくろのあたりとかけり玉かつらは源氏の猶子なり實子にあらぬよしなり

のちの大との　○前に見えたり

むらさきの　○紫上をは源の猶子にて後に北方なり玉かつらは猶子にて後にかけはなれ給へりやうたいかはりたりさて似さめれどとはかけり花鳥説いかゞ

ひかことゞものまじり　○花鳥に委しくしるさる可然

われよりもさしのかす　○老たる女房ともの云ける詞なり

いつれかまこと　○前を決して式部かかける語なり

内侍のかみの御はらに　○此以下玉かつらの事をいへり
あえなくうせ　○鬚黒の薨し給へるなり
いそきおほし丶　○内まいりの事なるべし
かんの君の御ちかきゆかり　○致仕の大臣かたの事なり
もとよりもしたしからさりし　○鬚黒は致仕大臣をへつらひ給ふ事も無りしとなり
こと丶なさけ　○巧言令色なきなり
むら／＼しさ　○をくれたる所あるなり
なをむかしにかはらす　○玉かつらにそうふんあり
中宮　○明石の中宮なり
右の大殿　○夕霧も大切にし給ふなり
ひめ君たちを　○玉かつらの心なり
おさなひ給ひぬらん　○をとなひ給ふ程をはからひ給ひてもよほし給ふなり
はるかにめをそはめ　○上陽人の詞
いまはまして　○冷泉院よりの御詞なり位をさり給ふ事なり
いか丶はあるべき　○玉かつらの心なり

人からもいとおかしかりし　○おかしかりしのし文字心は過去のし文字なれど當時の事なり
いつかたにつけても　○夕霧の息藏人の少將は玉かつらのをいなり玉かつらは源氏の猶子なればなり
かんの殿も　○玉かつらなり
は丶きたのかた　○雲井のかりなり
いとかろひたる　○淺官なるをいへりおほしゆるすかたとは親眤なるをいへり
ひめ君をは　○玉かつらの返答なりあね君は父おと丶遺言にて内參りの事あなかちにの給ひしなり次のをは藏人少將昇進もありてゆるすべしとなり
こよなきこ丶とのは　○あるまじき事とは思はざれどもとなり
きこえつく人をば　○自然ぬすみとり給べき方の事をもかたく制止をくはへ給なり
六條院の　○此以下薫の事なり
四位侍從　○薫なり十四五はかりとあるは匂宮の巻の始にあたれり
このとのはかの三條の宮と　○このとのとは玉かつらの殿三條の院は女三宮の在所なり

六條院の御けはひ　○薫は源氏に近しと思なす故か
となり
なつかしう物きこえ　○玉かつら兄弟の思をなし給
ふなり
むつきのついたち　○玉かつらの御方へ参し給なり
たかさこうたひしよ　○此大納言の註にかけり
こおとゝの太郎　○これも藤中納言の註にかけり
御かたちよりはしめて　○夕霧をいへり
としこほとよりは　○夕霧の君たち各昇進も早速な
るとなり
おもふ事ありかほ　○姫君の事を思給へり
そのことゝなくて　○夕霧の詞
いましめ　○奉公すべきよしを申となり
いまはかく　○玉かつらの詞
過にし　○源なりかやうにとふらひ給へるも源氏の
遺德となり
院よりのたまはする事　○冷泉院より姫君の事を仰
なり
内におほせらるゝ　○夕霧の詞
そも／＼女一宮の女御は　○冷泉院の女御致仕大臣
女女一宮の御母なり其女御と玉かつらとは兄弟な
り
女御なん　○玉かつらの詞
これかれこゝに　○玉かつらの御方なり
三條宮に　○女三宮の御方なり夕霧に供奉して人々
もまいり給ふなり
すさく院のふかき心　○是も註なり朱雀院又源氏何
方につけても女三宮をは人々心にいれ奉るなり
このとのゝ左近中將　○玉かつら腹なりひけ黒の御
子三人なり
ゆふつけて　○薫玉かつらの御方へまいり給へり
にほひかなと　○にほひと香となり
ひめ君ときこゆれと　○世をしらぬ姫君も心はひく
へきとなり
すかせたてまつらまほしき　○あまり實法なるさま
のし給へればとなり
おりてみは　○色々しき氣をそへはやとなり
くちはやしと　○ちと口とき人なりと思てなり
よそにては　○もき木は枝もなき木なり我身色香な
きやうなれともとなり

さらはそてふれて　○袖ふれて見給へかしとなり
いろよりもと　○これよりは人々のいふ詞なり
まめ人とこそつけられたれ　○薫のほのかにきゝ給ふなり
あるしの侍従　○昇殿もいまたせさる人なりまへに三條宮へは夕霧の御をくりはかりに参り給なり所々の参賀もせてひまあるなり
おとゝは　○夕霧の事なり玉かつらの詞
この君は　○薫なり
かうさまにそ　○源氏の事を思やり給ふなり
くつかへる　○再三めてたるなり
しゝうのきみ　○薫の心なり
藤侍従　○玉かつらの子の侍従なり
おなしなほし　○薫とおなし直衣なり
しん殿のにしおもて　○詰にかけり
くるしけや　○薫の心なり
いさしるべし給へ　○薫蔵人少將にの給ふなり
つまとをしあけて　○うちの女房なり
女のことにて　○心得かたき事なり女の方よりはつけにくき事なるをよくつけたるなりいたしとはほめたるなり
ひはもになく　○琵琶すくれたる由末にも見えたり
侍従の君して　○あるしの侍従なり
つねにみたてまつり　○玉かつらの心なりこゝに初て致仕大臣うせ給ふ事見えたり
この君はあやしう　○柏木に似たりとなり
うちすくしたる人も　○年老たる人もなしとなり
ことふきを　○祝言をすゝめてうたはせたるなり
おなしこゑに　○河海說いかゝ只同調子にうたふ成べし
うけひかす　○薫など酒を辭したるなり
なにそもぞ　○何事そつきなし思もかけすといひてきぬを辭したるなり
みつうまやにて　○竹川は踏歌の時うたふ歌なればかくせりなしていへり下心は思事かひなきを云り
人はみな　○人々は源侍従に心うつるべしとなり
おりからや　○女房のなかより讀り花の匂はかりに心をうつすにてはなきなり何事もおりからをあはれと見るはかりなり誠には心をうつさじとなり

よへは　○薫の文の詞
見たまへと　○玉かつらにも見給へとおほしくて假名にかけり
たけかはの　○はしは橋と歌の端とを兼たり姫をゆるし給への心もあるなり
この君たちの　○玉かつらの御子たちなり
よへはみつむまやを　○先夜水むまやにてとくかへり給ひしを人々もとかめしとなり
たけかはに　○我身を卑下して薫をかこちたるなり
けにこのふしを　○薫の藤侍從の曹司におはするなり
はしちかなるつみ　○人しけからぬ所なればひめ君たち端ちかなるとかもなしとなり此油斷にて少將にも見え給へり
十八九のほとにや　○ひめ君たちなり
いま一ところ　○中のひめ君なり
にほひやかなるけはひは　○あね君は増りさまなり
あるしの君けんぞ　○見據也　そぞ同
あに君　○侍從の兄なり中將辨の君二人なり
中將　○後に兵衛督なり宮つかへにひまなくてとなり
辨官はまいて　○宮つかへに隙なくて思はすにおこたりて細々まいりこさるとなり
うちわたり　○兄の中將の詞なり
ことのおはしまさましかは　○内まいりの事なとなり
廿七八のほとに　○中將なり
この御ありさまとも　○故殿素意の如くにありたきとなり
おまへのはなのほとも　○姫君たちをらせて置給へり
うへはわか君の　○玉かつらはいもうとの君のと定め給し事なり
いときはなきもの丶しらねと　○幼童の時なきの丶しるまての事は無りしかともとなり
人のむこ　○中將の事なり誰人のむことは見へす
花に心とめて　○花ゆへにのとかに居給ふとなり
おほくはこの御ありきま　○玉かつらを思すて給はぬとなり
この君たち　○兄弟たちなり中將なとなり

春宮は　○中將なとの申給なり
いさやはしめより　○夕霧の第一の女の女御にまいり給し事なり
とのおはせましかは　○鬚黑なり
さくらをかけもの　○花鳥面白し王荊公か事をひけり與ある事なり又宇治に菊をかけ物にすることもあり
れいの少將　○藏人少將なり
うちつれて　○侍從をも中將辨君のうちつれて出給なり
さくら色　○あね君なり
右かたせ給ぬ　○いもうとの君勝給なり
こまのらざう　○高麗の樂なり競馬の時右の勝たるにはこまの樂をするなりそのためしにかくいひたはふれたるなり
なに事と　○少將の心なり
さくらゆへ　○思ひくまなきとは思へともそのかひなしとなり我身にはかたせさる事をいへり
宰相君　○あね君の方なり
風にちる　○まけしの心なり風にちるは恨はなしとなり世間の道理なればなり　枝なからは木なから我方によるとなり
さくら花　○袖はありやとはいつくにかあらんと也心せはけに　○まへの歌のおのか物とその句を云なり
かくいふに月日はかなく　○とかくして姫君も年たけ給ふなり
女御うと〳〵しく　○女一宮の母女御なりうと〳〵しくとは我をむつかしく思給ふかとなり
うへはこゝに　○冷泉院の女御をにくけにおぼしたるとなり
はゝきたのかた　○雲井鴈なり
いとかたはらいたき　○雲井鴈の文の詞
おほししるかたも　○人の子を思道はたれも同事となり
くるしうも　○玉かつらの心なり
いかなる事　○玉かつらの詞
をとこは　○いもうとの君には思ひうつるべくもなきなり
人はかう　○少將の心なり

れいかたらふ　○女房達なり少將の文など取つたふ
る人なり
うへに　○玉かつらの御まへなり
いとはらたゝしう　○少將なり
このまへ申も　○中たちの女なり
つらきも　○引歌未ㇾ勘ㇾ之「うれしくはわするゝ事
もありなましつらきぞなかきかたみなりける心は
此歌の心なるべし
いひやるべき　○はや事さたまりたる事なればなり
かのなくさめ　○中のひめ君をといふことなり
けにかの夕くれ　○中將の心なり棊うち給時あらは
にならべて見給しかばいもうとの君には心はうつ
るまじきと思なり
きこしめさせたらは　○中將の云なりのぞき給ひし
と玉かつらへ申てはとなり
いてやさはれ　○藏人少將の詞なり
おいらかに　○常にはおとな〱しきと云詞なり愛
にてはまことにと云心なり助言など申がたかりし
となり
いてやなそ　○冷泉院へまいり給は我身數ならぬ故
となり
わりなしや　○更に心にまかせざるなり助言も曲あ
るましきとなり
あはれとて　○少將の歌なり我いき死をは君にまか
せたるなり
またの日は卯月　○更衣の平座なとあるべし
はゝきたのかた　○雲井の鴈なり
おとゝも　○夕霧なり少將の心をかけたる事なり
おふな〱　○念頃になり
たいめんの　○正月一日に談合し給ひし時少將ふか
く思給としらはあなかちに申べき物をとなり
さてれいの　○藏人少將の歌なり
いきしにをと　○まへにありし歌の事なりいきしに
をといひしさまのと讀きるべしことにのみはあら
ず思ひいれたるさま中將の君の申なり
とりかへありて　○中のひめ君をとなり
おりしもこのふみ　○花をみて春はくらしつの歌な
り
けふそしる　○公界にとりなしていへり御まへなる
人のかくなりけふぞしるとそらおほれしてよめり

あないとほし　○傍の人のいへり
九日にそまいり給　○四月九日なり玉かつらの嫡女院の女御にまいり給ふ京極御息所の例なり
右の大殿　○夕霧なり玉かつらの兄弟たるよしなり
きたのかたも　○雲井鴈なり
あやしう　○雲井鴈の文の詞うつし心もなきやうなる人とは藏人少將この姫君の御まいりの事をうちわびたるをいへり
うけたまはり　○御まいりの事なりそなたよりも驚かせ給へき事にてある物をとなり
たいらかなる　○さらぬやうにてうらみたるとなり
みつからも　○夕霧よりの文の詞也
つゝしむ事の　○物いみなとなるべし
なさけは　○玉かつらの心なり
大納言殿　○紅梅の大臣なり
きたのかたは　○此姫君は槇柱の君と別腹の兄弟なり中通し給事もまれなるとなり
藤中納言はしも　○ひげ黒の息槇柱同腹の兄弟なりしもといへる詞は槇柱は同兄弟なれと音信し給はざるをいへり

とのゝおはせましかは　○人々の心なり
れいの人に　○媒せし中將のおもとなり
とのゝおほしのたまひし　○内まいりなどのことなり
たゞきたのかたの　○此藏人少將は父母相具していかめしき人にて何事を思べき人にてもなきにかゝる思をする事のあやしきとなり殿おはせましかはとよろつに思給へる心より感したる心にてかく思給へるなり
かきりとあるを　○まへのいまはかきりと思はつるとありし詞をいへり
あはれてふ　○おほめきたる歌なり命の限をは知さるなりなべての世の哀をはしれどもあはれと云事はいかなる人にいひかくる物ともしらざると也
ゆゝしきかたにて　○いまはかきりとありし詞を云り
かういひやれ　○中將にの給なり
かきりなう　○少將の心なり
おりをおほしとむる　○今日院へまいり給とちめとなり

たちかへり　○やかて又申給へり
たか名はたゝじ　○戀しなはたか名はたゝし世中の常なき物といひはなすとも」此歌をかこちて引用るなりそなたの御名こそ立へけれとかこちたるなり此かことはかこつなり
いけるよの　○けふをかきりと思身も心に任(マカセ)ざれはさても一言をも承らで命もたへぬべきかとなり
つかのうへに　○季札か事なり河海に見えたり　豈以レ死倍(ソムカンヤ)ニ吾心ニ乎と云語の意を用たり
うたてもいらへを　○姫君の御心なり
かきかへて　○かきあらためすしてやりけるよとなり
おとな　○御つき〳〵の人々なり
女御の御かたに　○玉かつらの兄弟の女御なり
うへに　○冷泉院なり
后　○秋好なり
たゝ人　○院の御事なり
かんの君を　○玉かつらなり
くちおしう　○院の御心なり
この御方にも　○ひけくろの姫君の御方なり

したにはいかにみ給らん　○玉かつらの御方にて此姫君へはとき〳〵見へ奉りしさなり
まほにはあらねと　○いにしへ心かけし事なり
てにかくる　○薫の歌也松山の心あり我心のまゝならはよそにはなすましき物をとなり
我心にもあらぬ　○藤侍従の心には薫にあはせばやと思し事をよめり
むらさきの　○紫は兄弟の事をいへり我心にはまかせざる事となり
まめなるきみ　○藤侍従なり父おとゝの風のあるなり
いと心まとふ　○薫の心なり
たえてをとつれす　○少將中の君には心をゝいれざるなり
院には　○少將は此姫君まいり給て後は院參もなきなり
うちには　○故おとゝかならず内まいり有べき事を云をき給しに引たかへ今院へまいり給事を口惜くおほすなり
中將をめして　○姫君の兄なり

御けしきよろしからす　○中將母上に仰の旨を語り申詞なり
おほしさる　○玉かつらの思ふ給すちもあるべしとなり
いさやたゞいま　○玉かつらの返事兼てより思まうけたる事に非す女御よりもねんころにの給し故なり
これもさるべき　○宿世なるべしとなり
そのむかしの　○中將の詞
中宮をはゞかり　○明石中宮を憚り給ふとも院には女御ましませばこれもおなじほどの事なるべしとなり
うしろみやなにやと　○院の女御を後見のやうにおぼすともさしもあらじとなり
よしみきゝ侍らん　○よし〳〵只今見ゆべき事よとなり
ふたところ　○中將と辨となり玉かつらの子達なり
さるはかきりなき　○これより冷泉院の御寵愛のまされるを云り
ことはりそかし　○美人なるをいへりけさう人のおほかりしもことはりとなり
いかてかは　○草子地なり
梅かえにあはせ　○梅か枝うたひし時和琴をひきし女房なるべし
御前より
御息所も　○いまの姫君なり初て御息所といへり
右の大とのちしの大殿　○夕霧致仕大臣の外には人はなしとなり
この院をは　○冷泉院なり
み給らんかし　○姫君み給べきに心つかひしたるなり
たけかはうたひて　○去年正月の事を思へり
うへも　○冷泉院なり
ひとりをのみ　○少將心のおにゝかく思へり
かさうは　○冷泉院の御詞なり御自愛の詞なり
わたとのゝ戸くち　○薫なり聲聞知たる人となり
一夜の　○踏歌の夜の後なり
かつらのうけにはつる　○はつる或本侍つとあり少將は美男なれば桂男にもはつべきにてはなけれと此院中にてさほとも見へざると也說々あれども此

義を用るなり
雲のうへちかくては　○院中をいへり
やみはあやなきを　○少將の事をばさし置て薫の事を云出したり
月はえいますこし　○月にはえたるなり
たけかはの　○むかしあそひし事なりしのふはかりのとは卑下したる詞なり
なみたくまるゝ　○ふかく思ふにやはかなき事と思しに涙の落るとなり
なかれての　○薫の歌なり何事も頼む事は空くなるなりさりとも行末はとなり
人のやうに　○少將のやうにとなり
うちいてすくす　○薫の心なり
あなかしこ　○とはすかたりもしつべしとなり
こなたにと　○院の御方なり
こ六條院　○院の薫にかたり給へり
右のおとゝ　○夕霧なり初音にて女樂ある事はたしかならさるなりこゝにてたしかに見えたり
御息所の御ことのね　○薫兼てきゝしよりは増りたり院のよくをしへさせ給へるなるべしとなり

うた　○つけ物なり
こくの物　○曲は樂の曲なり
かたちはた　○以下草子地なり
卯月に　○去年七月よりの懷妊なり
かの中將の君の　○女御かたよりくせ〳〵しき事のいてきぬればさきに中將の申給し事ともをけにと玉かつらはおほしたりさすがに兄心なるとなり
おほやけさまにて　○此以下中のひめ君の事なり公役をさせ奉らんとて讓任あるなり
おほやけいとかう　○内侍のかみは重職たるなりされば玉かつらも辭せんとをほしたれど其人からなきによりてゆるし給はざりしを只今讓任し給なり
こおとゝの　○鬚黑なり幽玄の事なれど女官なとはさもありぬべしとて讓任あるなり鬚黑は當代の始の關白にて奉公他にすくれたりさて一はさやうの方にもよせあるとなり
この君の　○中ひめ君内侍のかみになり給べきすくせのあればにやさして望申す人もなくて玉かつらの辭退をもゆるし給はざるとなり
辨の君して　○玉かつらの御子なり

内の御けしきは　○夕霧の返事
おほやけのことに　○公役などにても宮つかへし給
　へとなり
中宮　○明石なりこのたびとは院にては女御の御け
　しきを取給しとなり
おと丶おはせまし　○鬚黒の事をいへり
あねきみは　○主上の御心なり
さきのかんのきみ　○内侍の督を譲任あるによりて
　さきの字を加へたり
かた〳〵に　○ひめ君たちなり
院にはわつらはしき　○院の御けさう心なり
いにしへをおもひ　○院の御心をかけ給ふ事ゆへ參
　り給はざるをさは御息所へは顯し給はざるにより
　て恨給へるなり
さるいみ　○院の御心かけ給ふことなり
我をむかしより　○御息所の心なり
かんの君は　○玉かつらは中の君に櫻の爭ひの時も
　心よせ給ひしとなり
としころありて　○こ丶にて年をふると見えたり
世のこと丶して　○世間の習ひ本蓋の方に道理をつ
　くる物なり
おほうへは　○玉かつらなり
なりのほり　○昇進なり
きこえし人々　○藏人少將を初として御息所に心か
　けし人々なり
さい相の中將　○匂宮の卷に薫十九歳にて宰相と見
　えたり
やんことなききみこたち　○薫をむこにとるべきよし
　あるをもき丶いれ給はずとなり
少將なりし　○藏人の少將なり
うるさけなる　○院中のくせ〳〵しき事をいへり
この中將　○藏人の少將なりし人三位の中將なり
左大臣　○氏族不分明なり系圖には竹川の左大臣と
　あり
みちのはてなる　○姫君に猶心かけたるなり一東路
　の道のはてなるひたち帶のかことはかりもあはん
　とぞ思ふ
内の君は　○内侍の督なり
左大臣　○前にみゆ
右は左に　○夕霧の右大臣左大臣になり給へり

藤大納言　○河海藤大納言の事九條右丞相の事を引り尤興ある事なり

このかをる中將　○薫の中納言の事紅梅の巻にあたれり

この御そう　○皆夕霧の一族なり

おまへのにはにて　○親眤なるによりて拜し給へり

かんの君　○玉かつらなり

むかしの御事　○源の事なり

かゝれは院のうへは　○薫の心なり冷泉院の思ひすて給はざることはりとなり

よろこひなとは　○薫の詞なり我身には何とも思はされと御覽してめやすくおほしめすべきとてまいりぬるとなり

をろかなるつみ　○懇に思ふを愚なる罪にいひなし給ふかとなり

けふはさだすきにたる　○玉かつらの詞我身のふりたる愁となり

たいめんなくて　○人つてには中かたしとなり

院にさふらはるゝ　○御息所なり

いつかたにも　○女御秋好なり

宮たち　○今度誕生の宮たちなり

みつからはかくて　○御息所里にをきたてまつるとなり

さらに　○薫の詞なり

さはかりのまきれ　○かやうの事は女御后の御くせなりかほどの事あるまじきと兼て覺悟し給はて出立給ふかとなり

たいめんのついてに　○玉かつらの詞なり

あはの　○あは〱しきなり

入のおやにて　○玉かつらをいへり

御息所も　○薫のおしはかり給ふなり

うちのひめ君　○宇治八宮の姫君あけまきの君の事なり

ちかうもみましかば　○玉かつらの心なり薫をむこにても見ましかばとなり

大臣殿　○紅梅大臣殿なり

このとのゝ　○玉かつらの殿の東なり

兵部卿宮左のおほいとのゝ　○相撲の事は見へす定て前にありし由なるべしかやうの事に匂宮御出ありつる例にてけふも請し給へり

かしつき給　○紅梅大臣の女なり
宮そ　○匂宮なり心をとめ給はさるなり
おさ〻もきたのかた　○紅梅大臣同北方なり
となりのかくの〻しりて　○玉かつらの殿の東なれ
　ば隣なり
むかしの事　○ひけ黑の大饗の事思出給へるなり
こ宮うせ給て　○螢兵部卿宮の事也其後槇柱の君に
　紅梅大臣通ひ給事いか〻のやうに思し事又此御息
　所もかく物おもはしくて居給へり世間のありさま
　如此と玉かつらの觀し給へるなり
左の大殿の宰相中將　○藏人少將なり
おほやけの　○昇進なとなり
廿七八のほと　○宰相中將の事なり
みくるしの　○玉かつらの心なりみるにくるしとな
　り
いますからふや　○ましますやとなり
ことのおはせ　○鬚黑なり故殿ましますせならは我
　子達もかやうの方に心をみたらまし物をとなり
右兵衛督　○さきに中將といひし人なり昇進の心の
　ま〻ならざる思ひのあるよしなり
としよはひ　○年齢は未た若けれど母の御心には昇
　進など不足に思給なり
さい相はとかく　○夕霧の息宰相中將なり玉かつら
　の方へ猶つき〳〵しくむかしの事をいへる心歟又
　は昔なからのたえぬ思ひをいへるなるべし
　此詞耕雲の本には無レ之
寫本三光院殿實枝御筆今川氏眞有之者也

細流卷十三　椎本　總角　橋姫

橋姫　宇治十帖は紫式部の娘大貳三位の筆といへる說あり師說不用之其故は文躰前にはかはれり紫式部か筆にあらすといへる義なれと是はわさと文躰をかへたる也かはれるをもてえ部が筆の妙とは可心時四代時也其故は得四代年七十年以來の事を書る故に其間には人の詞つかひなともしらすしてかはりもてゆく末代になれる趣を見せたるなり尤式部か筆成へし　宇治と號すること花鳥菟道稚子の事を引り尤有興薫の年をもて年紀をしるせるによりて花鳥に三ケ年の異あり可勘薫十九歳より廿一歳の冬までの事見へたり此年の次花鳥にをきに一の遺闕と見たり則花鳥作者後成恩寺源氏物語年立とて同制作の物あり件の抄には年齡無相違なり巻名以歌號之也

そのころよにかすまへられ給はぬふる宮　○ふる宮は八の宮なり此宮の事前に未レ不レ書程に彼幼少の時よりのことを大かた書出せるなり其比といふは當代今上の御時をさす可レ成東宮にもたち給へきことありしとなり

はゝかた　○大臣のむすめの女御と見えたり

すちことなる　○八宮春宮にも立給ふへきなり

時うつりて　○冷泉院春宮に立給ふ事なり弘徽殿の太后は此八宮を取立んとし給へりしか成就せさるなりさて中々とはいへり此沙汰無りせはよかるへしとなり

おやたちのをほしおきて　○八宮春宮に立給はゝ北方も立后あるへしと父なとはおほしたるとなり

女君　○あけまきの君なり

うせ給ぬ　○母君なり

みすてかたく　○八宮北方を戀きこへ給なり

かきりなる身にて　○上らうの事なり限りなきとは天子をいへり限あるとは親王なとをいへりかろかろしくなとはえせさるとなり女君達のことを思わひたるなり

のちにむまれ給ひし　○中の宮此宮をうみ給とて失給へるをいへり

いてやおりふし　○いて人はことのみそよきいて我を人なとかめそさてもと云詞なり

かきりのさま　○北方の遺言なり此中の宮を能養育
し給へしとなり
ひめ君は　○あね君なり
いたはしく　○中君なるへしとり〳〵なるなり
つき〳〵　○次々なり
わか君の御めのと　○めのとなとも人躰をも撰ばす
あるに任せてをき給ふなり
ほとにつけたる　○下臈に付たる心淺さに堪忍の思
ひなくて若君の成人をも見さるとなり
おなし心に　○北方と諸共に見し事なり
なとかさしもわかるゝほとの　○夫婦の別離レ堪と
なり
ありふれば　○わすらるゝ事もあるとなり可レ然緣
にもなと人は申事の有なり
へんつき　○玉篇なとのやうに字の篇をそろへてか
きつらねておほゆる事にするなり
いけの水とり　○ひとり住なる故に物毎に感する心
も深くあるなり
うちすてゝ　○かひの中に命こめたるかりのこは君
か宿まてかへらさらなん北の方のことをうち捨て

といへりかりのこはかものこによせてよめり心は
假の世なり大方不定なる世中にかやうの別のある
は不定かうへの不定とよめるなり
かたちいと　○八宮をいへり
なをしのなへはめる　○假にも打とけてはましまさ
ゝる躰見えたり
すゝりには　○河海に見えたり　みるいしのおもて
にものもかゝさりきふしのやうしもつかはさりけ
り管家
いかてかく　○あね君の歌なり北方にをくれては何
としてかは人となりつるそとなり
よからねと　○草子地此歌を評していへり
なく〳〵も　○中君の歌八宮のましまさてはすもり
なるへしとなり
御そこもなとなへはみて　○八宮の御心なり此君達
の衣裳なともきら〳〵しからす又さふらふ人もな
きを心苦しとおほすなり
いかゝおほさゝらん　○草子地をしはかりていへり
さうかをし給　○御琴をしへ給とて唱歌し給へり
ちゝみかとにも　○桐壺帝にも母女御にも早く別給

て何事も世間のありさまをも能もしり給はさると
なり
おほちおとゝ　○八宮の母は大臣の女なり其大臣よ
り傳りたるをいへり
うたづかさ　○雅樂寮の樂人なりその方とは樂道を
いへり
源氏のおとゝの　○八宮の事をいひ出せり花鳥面白
きかきさまと云々
おほ后のよこさま　○八宮を東宮にやと弘徽殿の大
后思ひかまへ給へることなり
あなたさま　○源氏かたをいへり
かの御つき〳〵に　○源氏の類親ばかりになる世と
なり
野山のすゑ　○さして遙なる所ならねど野山といへ
る幽玄にて面白し
むかしの人　○北方なり
みし人も　○ありのまゝをいへり尤あはれなる歌な
り
いけるかひなく　○草子地なり
ひしりたちだる　○喜撰などを思ひていへる歟

こゝろはかりは　○有八寶池八功德水
としころ　○八宮もとよりも才學ましますにつきて
もてあそひ給ふ法文の深重なることなと說きかせ
奉るなり
冷泉院　○前に大やけ事にも出つかへずといへるは
外樣むきなる公請にはしたがはずとなりとき〳〵
院へはまゐるなるへし
れいのさるへき　○聖教などなり
いまだかたちは　○院の御詞なり
宰相中將　○薰なり十九歲の歲なるべし紅梅卷の時
分なり
われこそ世中を　○薰のは柏木の菩提をも弔らはば
やの心より道心のすゝむなり
みゝとこめ　○俗なからつとむる事を耳よりに思ひ
給へるなり
出家の心ざしは　○聖の御返事なり
けにはたこの君たちの　○聖の語申なり
この院のみかと　○冷泉院の詰に書なり
朱雀院の　○院の御心なり入道の宮のためしとは女
三宮を源にあづけ給ひし如くにとなり

なか〳〵みこの　○薫の心に出家よりも此八宮の趣
心に叶へるなり
世をいとふ　○冷泉院の世を厭給ふ御心のすゝまざ
るは八宮の御方よりへたて給ふかとなり
この御つかひを　○聖にも御言傳ありて此歌をば又
別に御使にてまいらせ給ふとなり
あとたえて　○我身一すぢに世間を思捨てあるには
莽すと喜撰が歌よりも何なけく心のあるなりむす
び何眞實の道心より詠出せりかの高光か雲の八重
たつ山はすみうしとよめる類なるべし
ひじりのかたを　○院はやかて述懐のあるやうにあ
はれに御覧じとかめたるなり
宮世の中を　○八宮の詞也因縁なくては道心は發ら
さるものなるをとなり
こゝにはさへき　○八宮の御身はさるへきことと佛
のすゝめ給ふやうなる世のうきにてこそかく厭ひ
ぬれとなり
みづからも　○薫なり
思ひなしこそきたり　○思ひしよりも世をはなれ
たるなり

水の音波のひゞき　○宇治のわたりのさまなり風と
もいはて吹拂といへるわたり殊勝なり
よのつねのをんなしく　○薫の推量なり
されとさるかたを　○薫の打かへして思へる心の中
なり
あざれ　○淺なり
ひしりたつ人さえある　○薫の心なり
又その人ならぬ　○持律持戒の人を云なり
こちなけに　○無骨なり
よき人は　○貴人也花鳥の義用之
こひしう　○宇治にも戀しく思給なり
三年はかりに　○薫十九廿廿一の年なり花鳥年の巽
あり薫宰相にて三年はかり宇治へ音信給と見ゆ其
後中納言と見えたり
秋の末つかた　○八月なり四季に七日つゝの念佛な
り
河のこなた　○宇治宮は當時のはし寺の邊かとなり
宇治橋は孝徳天皇大化元年丙午歳造此橋云々
しげきの中を　○一說滋き野中と云々不用之茂木の
中とよむへし

山おろしに　○あやなくはあぢきなくと云心なり花
鳥俊成歌を引り
しばのまかき　○道すがらのさまなり
わうしきてう　○河海に見えたり
さうのこと　○近くなるにしたかひてきこゆるなり
しか〴〵なん　○とのゐ人のいへるなり
なにかはしか　○薫の詞
みにくきかほ　○とのゐ人なり
しばしやと　○薫のよびかへし給ふなり
御けはひかほかたち　○薫のさまをとのゐ人の思へるなり
人きかぬ時は　○とのゐ人の詞なり
あぢきなき　○薫の詞
あなたのおまへは　○とのゐ人の詞なり
をしへよせさせたてまつれり　○此とのゐ人の心しかるべからずず姫君達を殘なく見せ奉る不忠の事なり用意あるへきことなり
ひとりははしらてすこしゐかくれて　○是大君なり
そひふしたる人　○中君なり
いるひをかへす　○中君の詞なり出處たしかならさる事と云々
およばずとも　○大君の詞琵琶の隱月に撥をは納むるものなればかくいへり
よそに思ひやりし　○前によのつ子のをしなしくなよひたるかたはとをくやとをしはからるゝとあり
むかし物かたり　○住吉物語うつほの物語を思へり抄に見えたり
又月さしいてなん　○むら雲のさまなりさやかに見ゆへくも非ずかきて又かやうにかける面白し
京に御車　○夜もあけぬへきとてかく云やれり
おりあしく　○宮の御留守をいへり
まゐりてきこゆ　○只今まいりたるやうに申せとなり
かくみえやしぬらん　○前にのぞき給ふとは知給はざるなり
ありつるみすのまへ　○申傳べき人も見へされば也
とのみすのまへ　○薫の詞なり
をんなはらのおくふかき　○此御返事なと申させ給はんとてをくなる人をおこしいつるとなり

なにごともおもひしらぬ　○あねの詞なり
かつしりながら　○薫詞なり世間のこと知ながら知らざるさまをつくるも世の習なりされども身ひとつにかくおほめきたるなり
ありがたう　○八宮の御事なりそれにたくひ給ふ御身なれば何事をもすゝしくをしはかり給ふへき事となり
さやうのかたは　○すき〳〵しき方の心はなしとなり
たどしへなく　○たとへなくなりことの外なると云なり老人の出ていへるなりさの座いへりみすの内にこそとよみきるへし
いともあやしく　○老人の詞
いとつゝみなくものなれたる　○薫の心なり
いとたつきもしらぬ　○薫の詞なりたよりもなかりつるとなり
さしすぎたる　○老人の詞なり薫の御心いかゝとなり
たほかたさだすぎ　○薫の心なり涙もろなるは老人の習なれどもゝ其分にすぎたると見給へるなり

こゝにかく　○薫の詞也
かゝるつゐて　○老人の詞
三條の宮　○女三宮の御事なりほのいゝ出せるなり
小侍従　○女三宮のめのとのむすめなり此老人は辨の君にて柏木のめのとのむすめなり
はるかなるせかひ　○ゐなかなとよりなり
このころ藤大納言　○紅梅の大臣の事なり
我手をおりて　○はや廿年はかりになりぬるとなり
故權大納言　○柏木なり
さすかに　○奇妙なるかきさまなり
あやしく　○薫の心なり
さしぐみに　○うつつけになと云詞なり
そこはかとなく　○薫の詞
御覧しとかめられぬへき　○姫君達をはちたるなり
おもひたまふる　○心のまゝならはかくて侍ひたきとなり
かのおはします寺　○八宮のましします御寺なり
この姫君たちの　○薫の只今立よりて聞たに折ふしの物悲しき鐘の聲をきゝしてたえす聞給ふ御心いかにと思となり

かくいさおくまり　〇姫君たちの人さをきもことはりさなり
あさはらけ　〇折ふしのさまなりまきのを山は宇治の名所なり
れいのいさつゝましけにて　〇大君なり
雲のゐる　〇たゝありなり歌のさま尤哀なり霧さへ雲に重りたる所のさま御心の中はおしはかり給ふべきさなり
なにはかり　〇薫の心なり
なか〳〵なるほさに　〇一言も申承らでは殘多きさなり
よの人めいて　〇薫は大かたの世の人めきて心置給ふべき心のある身にてはあらずさなり
あじろは　〇御さもの人の云なり網代の氷魚をさらんさするなるべし
たれもおもへば　〇氷魚のために殺生し柴を運て世を渡る何れも利を爭ふ心は同事さなり
われはうかばず　〇我はしつのわざなごはせされごもさりさてそれを至極さも思ふべきに非ず何れも同しかりの世さいへるなり

はしびめの　〇橋姫のこさ兩說何れにてもなり此歌は姫君を橋姫によそへていへり下句は薫の身によそへたり
さきこそは　〇疾なり早速がさなり
さしかへる　〇姫君我身の上を悉皆いひ給へるなり今案一二句は薫のうたをうけて三の句以下姫君に見るへき歟さなり
身さへうきてさ　〇さす棹の雫にぬるゝ物故に身さへうきてもおもほゆる哉
かへりわたらせ　〇八宮歸給はん時にさなり
おい人の物かたり　〇くい太子の我身に問けんささりなさねかひたまひしゆがりのことなれはなり
おもひしよりは　〇姫君達のさまなり
おもひはなれかたき　〇世を親したる心なり
うちつけなる　〇文の詞なるべし
あいなくさゝめ侍りて　〇委く申へけれさもさゝめ侍るさなり
さこんのそう　〇左近將監なり
さておはしますほさ　〇此七日御念佛の間の布施にさ

心にまかせて身をやすくもふるまはれす　○杜子美か詩に錦鯢巻ヲ還レ客ニ始漸ク覺フ意ノ和平ナルコトヲ　と云る類なり
君はひめ君の　○君とは薫なり宇治よりの返事なり
こめかしき　○巨の字なりほめたる心なり
宮にもがく　○八宮へも此由を申給へり
なにかはけさうたち　○八宮の詞なり薫には許し給へるなり
なからんのちも　○かやうにをもむけ給ひしとなり
御みつからも　○八宮なり絹綿など奉りたるを深く悦給へる其志をも申さんとて薫のまうて給へる成へし
三の宮　○匂宮なりかやうのかくろへたること見出したきの心深くましましたる事なり案之匂宮宇治に通ひ給ふこと紅梅の巻にありこゝにてはしめて聞給へば此巻は紅梅よりも前のことなり
のどやかなる夕暮　○匂宮へまゐり給へり
さかし　○薫の詞なり
うもれたる身にひきこめて　○我身一つには引こめてはあるまじきとなり
いかでかたつね　○かろ〳〵しくいかにして通ひ給ふべきぞとなり
かやすきほどこそ　○匂宮はかやすからぬ御身なればなり
さるかたに見所ありぬへき　○惣じて世のことをいへり
このきこえさする　○八宮の聖だち給ふあたりにさへかやうの事のあれば其外にかくろへたることは必す有へきことゝなり
おほろげの　○匂の御心なり薫のかくほめ給へは一入床しく思給ふなり
よだけきを　○大やうに上﨟しき心なり
人をすゝめ給て　○薫をすゝめ申さるゝなり
おかしくて　○薫の心なり
いてやよしなくてそ　○薫の詞
いであなこと〳〵し　○匂の詞ひじり詞は聖詞なり
なにかそのひをむし　○蜉蝣をいへり朝あれども夕をしらぬ身ぞとなり
あじろ車　○昔は女なとのみ乗し車なり
宮まちよろこひ　○八宮なり

ぎなと　○義理などなり
ありしゝのゝめ　○姫君の御事を思出るなり
さきのたひ　○薫の詞なり
いろをも香をも　○八宮の詞なり
しるへする　○しるへし給はゝ思出す事もあるへき
　となり
さらにほのかに　○薫の詞なり一日きゝて忘難かり
　し音は器から歟と思ひしに只今しらへて見侍れは
　さもなきとて彈し給はさるなり
いてあなさかなや　○八宮の詞なり
このわたりに　○八宮の詞なり中君の所作をの給へ
　り
ようにたつ　○用にたつなり
かきならし　○八宮のすゝめ給也
そのつゐてにも　○此姫君をかくてをき給ふことは
　薫の心もはつかしきとなり
わさとの　○薫の詞なり等閑あるましきとなり
うれしき事と　○八宮の御心なり
ひめ君の事うしろみ　○こゝにて辨の君の傳を書な
　り椎本巻に系圖をよくかけり

けによその人のうへと　○薫の心なり
なをかくいひつたふる　○薫辨の君に問給ふ詞なり
　又知人ある歟のよしなり
小侍從と　○辨の君の詞なり
かの御かけに　○柏木のかけなり
むなしうなり　○柏のことなり落るなり
ふちころも　○柏木の藤衣に我母かしはきのめのと
　の服をかさぬるとなり
としころよからぬ　○辨を妻とせし人ありきとなり
　大貳少貳などに具して行けるにや
その人も　○西國へ具してくたりし人なり
この方はちゝかたにつきて　○姫君と親類なり
れいせん院の女御　○致仕大臣の女柏木のいもうと
　なり
れいのあけはてぬ　○前にも物語にて夜もあけぬさ
　て例のとは云り
よしさらは　○薫の詞なり
御まへにて　○薫の御前なりやきすて給へといひし
　なり
我猶いくへくもあらす　○柏木臨終にかくの給ひし

ことなり
やかてわかれ侍り　○西海まてくたりしこそ私の悲
ことなり
つれなくて　○此文をば薫のとりておき給ふなり
うちの御ものいみも　○八宮へ申給ふなり
院の女一宮　○冷泉院の女一宮御事なり
かくしは〳〵　○八宮悦喜し給へるなり
かの御名　○柏木の判形あるなり
御ふみのかへりこと　○女三宮の御文なり
かの御手にて　○遺言なり女三宮へまいるへきもの
なり
やまひはおもく　○柏木の文の詞なり
ゆかしう　○對面もなきことよとなり臨終なればな
り
御かたちもかはりて　○女三宮さまをかへ給ふ事也
めのまへに　○御さまをかへ給ふなり古今「聲をた
にきかて別るゝ玉よりもなき床にねん君ぞ悲しき
の心なり
めつらしく　○薫のことなり
うしろめたうし　○源の御子とて人々愚かには思ま
しきことなり
しみといふむし　○十題虫部いたつらにうちをく文
も月日へてあくればしみのすみかとそなると定家
卿のよめるも此心なるへし
跡はきえず　○かきつくる跡はちとせも有ぬへしわ
すれず忍ぶ人や無らん
宮の御まへに　○女三宮なり

椎本　巻名以歌號之薫二十二の春より次の年二十三歳の夏までの事なり花鳥異あり不可用之

ささらきの二十日　○宿願をはたし給へるなり

宇治のわたりの御なかやとり　○南都御幸なとにも中宿りにし給ふ所なりもとはなしまの頓宮にて春日祭の使なとは中宿をせしなり　まつ人の山ちの月もとをけれはさとの名つらきかたしきの袖定家うらめしといふ　○喜撰か歌を下に含めり花鳥定家卿歌をひけりそれも此詞を思ひて詠せられたるなるへし　初霜のなれもをきいて淺る夜にさとの名恨みうつ衣かな家隆

なへてむつましう　○姫君達故に宮のなつかしく思給ふもわりなきことゝ草子地の書さまなり

右の大殿　○源より夕霧の傳領ある所なり今の平等院なるべし

おとゝも　○夕霧の匂宮の御下向の御むかへに參給はんとなり

宰相中將　○薫なり

中々心やすくて　○夕霧の參給はてすさましと思召すへきことなるを薫の參り給へは心やすくて夕霧の參り給へるよりうれしく思給へるを中々心やすくとはいへり

御この君たち　○夕霧の御子なり

かのひしりの宮　○八宮昔を思出給へるなり

ふえをいとおかしう　○薫の笛なり

宰相の君は　○薫なり八宮の御心なり

さしも思よるましかめり　○法文なとをのみ習給ふを云り

つれ／＼と　○かやうの遊なとをし給ふを聞給へは一入つれ／＼もまさりぬへし

心やり給へる　○匂宮の御方なり遊なとにてあかし給ふ故なり

ちるさくらあれは　○櫻さくさくらの山のさくら花散櫻あれば咲櫻あり

川そひやなきの　○河海六帖貫之か歌をひけり案曰本紀第十五顯宗天皇御歌に―いなむしろ川そひ柳水ゆけはなひきおきたちそのねはうせす　此御歌尙川そひ柳とよめる始なるへき歟

由風に　笛の音は隔てされと心のへたてこそつけられとなり

ほすあたりと　○匂宮御返事あるなり
をちこちの　○そなたより心なへたて給そとなり
中將は　○薫なり
かんすいらく　○花鳥說可然
水にのぞきたる　○八宮のまします宮の廊なり
さる心して　○都ひたるやうにしなし給へり
一こつてう　○こゝろにとは櫻人は呂歌にて双調なるを一越調のわたし物にしたる也櫻人の詞にそのふねちゝめよといへる詞ありちゝめはとゝめよといへる詞にやさてこゝにてうたひ給ふなり
みゝなれぬけにや　○面白興ある手を引給ふなり
ことにつけたるあるじ　○饗應なり
まらうとたちは　○草子地なり
かのみや　○匂宮なり
山さくら　○姫君のあたりを床しく思ひて此かさしををるとなり「我宿とたのむ吉野に君しいらは同
しかさしをさしこそはせめ
のをなつかしみ　○春の野に菫摘にとこし我そ野を
なつかしみ一夜ねにけるゆかりを慕ひたる也
かさしたる　○卑下したる歌なりこなたの御志にてはあるへからすかきねをすきぬはかりをとなり
野をわきてしも　○河海引歌不叶歟心はこなたへはかりの御志にては有へからすとなり
藤大納言　○紅梅なり上よりの仰ことにて參り給へり薫は私にまいり給へるなるへし
宮はまたさるへき　○匂宮なり
四方のかすみも　○草子地なり
しるへなくても　○薫のしり給はても文はかよはし給へり
宮もなをきこえ給へ　○八宮なりけさうたち給はて御返事し給へとなり
中々心ときめき　○さもなきことをけさうたちてあへしらへは我も心ときめきするやうなる物をとなり
ひめ君　○あね君なり
ねひまさり給　○八宮の御心なり
かたはにも　○かたなりにもあらはとなり
宮はおもく　○八宮此巻の末にて薨し給へり其序に書出すなり
すゝしき道にも　○姫君達を見捨難く思給は宮の御

心のうちをいへり
三宮　○匂宮なり
さるへきにや　○然るへき人にてましますゆへ故昇進も
早速にし給ふとなり
その秋中納言に　○花鳥年のあやまりはこゝより出
來ぬるなり其秋とは匂宮宇治にて春あそひ給ひし
年の秋なり薫二十二歳なり薫宰相にての秋と見る
にて年の誤あるなり竹河に人々の昇進の事をかけ
り其時と同なり
いかなる事といふせく　○薫の心中なり昇進あるに
付てもさま〳〵思ひつゝけ給ふなり
すき給にけん　○柏木の事なり罪をも輕めたきとな
り
かのおひ人　○辨の君なり
宇治にまうてゝ
七月はかり　○まへにその秋中納言にとまつかきて
七月はかりになりにけりといへるを不審する人あ
るへしかやうの所より誤り有へし昇進も七月なる
へし
をとは山　○松虫の初聲さそふ秋風は音羽山より吹
はしめけり
まきのやまへ　○引もて行さまなり宇治の近邊をい
へり橋姫の巻にもあり
なをたつねきたるに　○尋來たるによき時節なると
なり
宮はまいてれいよりも　○まへの詞に宇治にまうて
て久しうなりにけるといふ詞をうけたりさて例よ
りもとはかけり
一ことにても　○薫の詞なり
はふき　○何事をも省すてたるとなり
たのもしけなるおひさき　○道心深くあれはたのも
しけなき身なから命の限りははく〻み奉るへしと
なり
このころの世はいかゝ　○八宮の詞當時の事を思ひ
やり給ふなり
くちう　○九重と云儀あれとも宮中可然なり
とり〳〵にうちあはせたる　○男方の上手なとをい
へり
をのかしゝはいとましく　○下にはそねみねたむ心
の有なからうへには情をかはすなり

なにことにも女は　○我御むすめのうへをいはんとて公界の女のうへをかく〳〵の給へり
いかゝさおほさゝらん　○草子地なり
すへてまことに　○薫の詞我身は管絃の無才覺なるは思すてたるけにや心にはとめされと人のを聞て心を動すは此道なりとなり
さかしうひしりたつかせう　○河海に見えたり優婆塞の宮に對しての詞なれは似合たるとにて面白し
ひとこゑきゝし　○立聞給ひし姫君の御琴なり
うと〳〵しからぬ　○八宮の心なり薫をたのみ給ふへきはしめにとなり
ならしそめつる　○琴を手ならすなり
よこもれる　○わかき人をいへり行末をこむる人となり
我なくて　○一ことは琴の心なり末はたゆましきとなり
いかならん　○我心はたかふましきとなり
とはすかたりの　○辨なり
三宮　○薫の匂宮の御事を思出給へるなり
心ほそく　○八宮のなからん後のことなと語ひ給ひしことなり
女は　○匂宮眞實に思給ふ事とは知給はてなをさりことのやうに返事をもし給へるなり
宮はいみしう　○八宮なり
念佛をも　○あさりの寺にてし給へるなり
世のことゝして　○八宮の詞
過給にし　○母上の事なり
ひたふるに　○一向に思ひとけはとなりいかにして過ける年月はとなり八宮もふるき宮囘祿の後此宇治にも何かとして住付給へるなり
ともかくも身のならん　○姫君たちの心の中なり
心のうちにこそ　○八宮の心のうちなり
にはかにわかれ　○すてゝ行がつらにてはなけれとゝなり
あすいり給はむ　○境界緣のはなれかたきなり
もとよりかやすく　○下﨟なとは大方に見許さるゝ事のあるなり
かるきは　○宮たちの御末なとをいへり
にきはゝしく　○榮辱升沈影與レ身なれはなり
こなたにわたり　○姫君の御方なりかり初に寺に入

給ひなから下心には世をさりなんのことを思へり
ひとり／＼　○誰におほせて藤衣きんの歌なとの詞によれり
三昧　○念佛三昧なり
つかうまつりけり　○阿闍梨看病し給ふなり
はかなき御なやみ　○阿闍梨の申詞なり
君たち　○姫君達なり
いまさらにないて給そと　○此寺にて終をとり給へとなり
あり明の月の　○此詞浮舟の巻にもあり詞の面白き故歟
そなたの　○此寺の方なり
なみたもいつちか　○花鳥杜子美か句をひけり
かきりある道　○尤あはれなり
いまさらに　○あさりの申さるなり
入道の御ほい　○姫君達故にかゝつらひ給ひしとなり
中納言殿　○薫なり
もみちのさかりに　○まへにありしことなり
をしかなく　○折ふしの哀をいへる歌なりこ萩は姫君達によせたり
なかめらるゝころになん　○是まて文の詞
けふまてなからへて　○中君の詞なり
やう／＼かう　○歎きも限りあれはとなり愁歎の心尤哀なり
たちかへりこそ　○御使のいへるなり
いとほしふて　○あね君のかき給へるなり
ふみたのみ
むつかしけなるさゝのくまを　○しはし水かへの歌又木幡の山に馬はあれとなとの歌にてかけりさゝなとの生たる所をさゝのくまとはいへり
さき／＼　○さき／＼は中君の手跡なれはなり
またあさきり　○手跡かはりたる故にやかてつかはし給へり
もろこゑは　○思ひにはこなたもおとるましきとなり
あまりなさけ　○君たちの心なり
なき御たまに　○面白き詞なり
これこそは　○匂宮の御文のさまなり
みつからまうて　○薫なり

ひんかしのひさし　○姫君只今服者たるによりてかくやつれてすみ給へり禮記十三喪大記父母之喪居ニ倚廬ニ不レ塗寝レ苫枕レ凷といへり

やみにまとひ給へる　○薫のさまなり

かやうには　○薫の詞なり

なよひけしき　○我は好色の方はなきとなり

あさましう　○大君の詞

こと〻いへは　○薫の詞其事といへはとなり

月日のかけは　○月日の光にも我身の方よりむかはこそあらめ月日の方より照すをはいか〻し給ふへきとなり

あきらめ　○の給ふことあらはあきらむるかたも可レ有となり

けにこそ　○侍ふ人々の詞

むかしさまにて　○八宮現存の時より度々わたり給ひしことなり

ありつる日比　○八宮のましまさ〻れはゆつる方無てあへしらひ給へることなり

色かはるあさち　○秋の末なれは也服の袖をいへり此やつれたる袖は誠に露のをき所なるへしとなり

はつる〻いとは　○藤衣はつる〻糸はわひ人の涙の玉の緒とそ成ぬる

ひきと〻めなと　○薫の心なり

ありかたく　○柏木の事なとなり

いはけなかりし　○薫の詞源にをくれしことなり幻巻にては薫五歳なりされは源の崩御は年へたるなり

心くるしうて　○姫君たちなり

かけ〳〵しき　○河海弁花鳥説吉可用之

なからへても　○我身もまたや〻つらふとなり

御ふる物かたり　○柏木の罪をもすくひたきとなり

た〻それかと　○柏木に能似給ふとなり

おほ〻れ居たり　○涙におほれたるなり

この人はかの大納言　○辨の事なり系圖をかけり八宮の北方とは辨はいとこなり

は〻君も　○姫君の母なり

かのとのに　○致仕大臣かたへはうとく成行なり西國へ下りたるなり

むかしの御事は　○柏木の昔の事なり姫君にたに漏

さゝるとなり
中納言君は　○薫の心なり
又もてはなれては　○かやうの事をも委く知給はゝ事の廣まらさるやうに我物にしなしたく薫のいよ〳〵思給なり薫の遠慮なり
いまはたひねも　○故宮ましますく時は法文なと問奉りしに今は詮なしとなり
これやかきりの　○かく八宮のの給ひしをも尋常のことくさのやうに思ひしとなり
秋そはかはれる　○去月は八月今は九月なり同三秋の內なれはいへり
秋きりの　○薫の心の中の晴難きをいへり雁をかりなるによせたり
いまはしめて　○初たる山すみのことさなり
かたき事かなと　○姬君の心なり
このころ　○冬ふかき時なり
としころに　○あさりの詞なり
御くしなと　○故宮落髮の有增ありしをうき事に思ひしに今はさやうにてもましまさましかはと思給ふなり

君なくて　○兄弟語らひてよみ給へる歌なり君とは故宮をいへりかけみちのけの字清濁兩說也下句故宮うせ給ひにし後山へ人をもかよはし給ふことのまれなるをいへりあさりの何とか見るらんとなり又は何とかは見るとは姬君の心にてもあるへし兩義共可用之
おく山の　○松のうへの雪はをちてはかなき物なれと又ふりそふことの有なり消にし人の歸り來ざるを打わひたる也此歌伊勢大輔集に松のゆきのこほりたりしにつけて紫式部「奥山の松の葉にこほる雪よりも我身世にふるほとそはかなき」返し「消え安き露の命にくらふれはげにとゝこほる松の雪かな」作者の自歌を此物語に用たること前四十四帖には見へさるか　至二宇治一此歌の上句並に里の名を我身にしれは山城のといへるも新拾遺に入たるか兩首を採用たるいかに思へる所あるにか
うら山しくそ　○歌をたしたるなり
れいよりも　○此雪中の志の深切なるなり
すみそめならぬ　○只今姬君の御調度は皆墨染なれはなり

宮のまちよろこひ　○故宮なり

かやうにて　○薫の心なり

なをうつりぬへき　○薫の心なり人の心は移り安なる物となり

宮のいと　○匂宮なり

あはれなりし御ひとこと　○故宮の遺言を匂へかたり給しかたしかにはおほへ侍らすとなり

またいとくまなき　○おしあてにの給ふかとなり

こゝになん　○薫の心のまゝにてあるへきとてせめ給ふとなり

もてそこなひ　○薫のつれなきさまにさまたけぬるにやなとの給へるとなり

さとのしるへ　○この宇治の里のしるへは我身申さてはとなり「あまのすむ里のしるへにあらなくに恨みんとのみ人のいふらん」此引歌我身しるべせてはと云心なれはよく叶へり

なにはいとさしも　○何とてかくつれなくはいらへ給ふそとなり

すい給へる　○匂宮の好色をいへり

なをさりことなと　○心淺き人のなひきやすなるをは珍らしけなく思給へる性のましますを色々しき方に人の申なすとなり

なに事にも　○公界の事を薫の云て姫君に聞せ奉り給ふなり大方人の大とけほけたるはよからぬ人のことなり心なかくて我氣にうちふせさることをもうちまかせたるは能やうには見ゆれとつゐにはさもあらさるとなり

くすれそめては　○是もよからぬ人の心さけ初ぬれは又名をけかすことあるとなりにこる名といはんためにたつた河とは云なり

心のふかく　○匂宮はさしもなき事を名をたち又御氣に叶さる事をうちをき給ふ性はなき人なり始終心にちかふ事はなき人にてましますとなり

人のみたてまつり　○薫は匂の御心をはたれ〳〵よりもよく知れりとなり

みたれあし　○河海の説用之

わか御みつから　○姫君の心なり

いかにとかは　○姫君の詞

かけ〳〵しけに　○かゝつらひの給ふなり我身はかけはなれぬへき物をとなり

かならす御みつから　○薫の詞兵部卿宮の御事はかりとは思給そとなり

雪をふみわけて　○わか身の事をいへり

かの御心よせは　○中君にとなり

ほのかに　○匂宮中宮に音信ありしことなり

いさやそれも　○いつれかいつれとは人の定難き事となり

御返なとは　○薫の聞給なり

ようそたはふれにも　○かしこくそと姫君の思ひ給へるなり

雪ふかき　○君ならてとは薫の方へはかり申かよはし給ふそとなり

つらゝとち　○上句は艱難なる道を云たてたるなり下句は匂宮よりもまつ我身のあふせをいそく心なり川をわたるとは人にあふことをいへり古來稱美の歌なり

かけさへみゆる　○うちのへて云るなり淺くは思はさることなり「あさか山かけさへ見ゆる山の井の淺き心けわが思はなくに

れもはすけは　○大君の心なり

けさやかに　○薫の心たり大君のありさまをこのましく思ひ給なり

心くるしう　○薫の詞なり我御方にわたしてんとなり

なかの君は　○中の君かく薫のの給ふを聞て更にさはあるましき事とおほすなり

かつらひけ　○おもつらひけなとなり

いかにそおはしまさて　○故宮の御のちなり

世の中にたのむ　○そのゐ人の詞

三十よねん　○三十餘年とこれはこゝろによむへき歟云々

おはしましゝ　○故宮のましく〱ける方なり

佛のみそ　○のみは而已なり此說を可用なり

ほいをも　○薫の出家も有ばとあらまし申せしと也

たちよらん　○此歌にて卷の名たり

みさうなと　○薫のましますとて御庄なとより人々參たるなり

おい人に　○辨君の方へつかはし給ふなり

としかはりぬれは　○薫廿三歳なり

みきはのこほりとけたるに　○姫君の心の解さるよりかく思へり
ありかたくも　○今までも難ゝ有世にかくまて有けるよと観したるなり
なにのおかしき　○姫君の心なり
きみかおる　○大君の歌なり八宮の在世にてそなたよりたまはゝいかにかひあらましとなり
雪ふかき　○中君の歌なり我身の有さまは誰爲につみはやすへき事もなき身となり
中納言殿よりも　○已下草子地なり
花さかりのころかさしをおほし　○去年の春の事なり同しかさしをおりてけるかなとよめる時の事なり
つてにみし　○匂宮より姫君の御方への歌なり去年の春はよそなからみしを此春はかすみ隔てす我物に中君を見はやとなり
みところある　○なひく心はなけれと御文のすて難きはかりにとなり
いつくさか　○霞の中の花は尋難き由なり服者のうへをはいかゞをりてんといふ心なり墨染は服者の家の心なり
まことに心うしと　○匂の心なり
あためいたる御さま　○匂のあた〱しきことの見へたる時は薫のかくいましめ給ふなり
心にかなふ　○匂の返答なりさして思ことの叶はさる間のことゝなり
おほとのゝ六の君を　○夕霧の六君を匂宮にとありし事なり
まめやかなる人の　○薫の事なりあまりに思のとめたる心にて大君をも取はつし給へるなり
にはかにまうて　○薫なり
見をき給へり　○薫細々に参り給へは能見置給也
ひきかへる　○薫の立歸らんとせしなり
あなたにこそらん　○姫君達のあなたに入給はんとするを見給なり
まつひとりたちいてゝ　○中君なり
おひはかなけに　○かけ帶なり
女一宮　○今上の宮明石の中宮の御腹なり薫はのかに見奉りし事有へし

またゐさりいて丶　○大君なり用意深きさまなり
あなたに屛風も　○さふらふ人の云なり
のそきたまはし　○薫のことをいへり
かみさはらかなる　○髪のすこし落ほそりたるなり
いろなりとかいふ　○色髪なといへるなりさのみく
ろからぬをいへり等と云義不レ用レ之翡翠はうつく
しき色をいへり
たちたりつる　○中の君なり

角總　巻名以歌並詞號之あけまき神樂には總角
とかけり童の心なり催馬樂には角總とかけり是は
糸にてむすふをいへり此巻の名は催馬樂を用へき
歟薫廿三歳の秋より冬まてのことなり
あまたとしみゝなれ給にし　○此宮に住給ふこと年
をへぬれと八宮薨し給ひて更に物悲しきさまなり
御はての事　○八宮一回なり
よその御うしろみ　○薫のし給はてはとなり
みやうかうのいと　○名香糸にて結こと慥なる所見
なし河海說可レ然哉
かくてもへぬる　○糸の緣面白し「身をうしと思に
きへぬ物なれはかくてもへぬる物にそありける
うちかたらひ給ほと　○姬君たちかくいひて打語ひ
給ふ折ふしなり
たゝり　○糸をくるなり花鳥延喜式をひけり未勘之
令神祇第六凡天皇即位——其弊者三月之内令ニ修
理ニ訖注金水桶金線柱(ダヽリ)奉ニ伊勢神宮ニ
わかなみたをは　○薫糸をより給へることゝ心得て
かくいへり「よりあはせてなくなる聲を糸にして
我淚をは玉にぬかなん此歌は七條の后の失給へる

時伊勢かよめるなり
伊勢のこ　〇こは御なりかしつきていへる詞なり
物とはなし　〇姫君の心なり「糸による物とはなしに別れ路の心ほそくもおもほゆるかな〇貫之か歌なり古今には物ならなくにとあり
御くわんもんつくり　〇願文の事をあさゝも薫に申讀し給成へし
あけまきに　〇薫の我心をほのめかしたるなり催馬樂の歌にまろひあひにけりかよりあひにけりの心なり又は名香の糸をあけまきに結たれはそれをいへりあけまきの結ひたるやうによりあはんとなり
れいのこ　〇大君の心なり
ぬきもあへす　〇玉の緒に契をむすふへき身にてもなしとなり
あはすはなにを　〇片糸をこなたかなたによりかけてあはすは何を玉のをにせん
身つからの御うへは　〇薫の我身のうへをいひ給へれともあらぬさまに取なし給へれは匂宮のことを便に申給ふとなり
さしも御心に　〇匂宮の事なり

かやうのかたに　〇匂宮の好色の方にすゝみたる御心をいへり
まことにうしろめたうは　〇眞實に思ひいれ給へるとなり
うたてとを／＼しく　〇こなたより疎遠にし給ふとなり
ともかくも　〇大君の御心をのこさすうけ承はりたきとなり
たか聞えへし　〇大君の詞なり薫にたかふましきとなり
けにかゝるすまゐなとに　〇かく世はなれたる閑なるすまゐには萬つを思ひしるへきとなり
なに事にもをくれ　〇萬つに心をくれなる心の中なれともとなり
いにしへも　〇よつきたるすちをは故宮は事のつゐてにもの給はさりしとなり
猶かゝるさまにて　〇今思出るによつきたるすちをは思ひ絶ねとおほしたる成へしとなり聞へん方なくてといへるまて大君の我身の事をいへるなり
さるはすこし　〇是より中の君の事なり

けさやかにおさなひ　○薫の心なりけにもみつから
の事はけさやかにはの給ひにくき事成へしとなり
としころは　○薫の詞
もの心ほそけに　○故宮の御末なりこの御事とは姫
君達の事なり
宮の御事　○匂宮なり
かうきこゆる　○我媒申事をもし疑給ふかとなり
猶いかに〳〵と　○もしことかたへ御心むけ有にや
となり
もとよりかく人に　○辨か詞なり姫君の御事を云な
り
おはしまし丶　○故宮の御時をいへり
こたいなる御うるはしさに　○あまりにおちふれた
る事はいか丶となり
松の葉をすきて　○すきては食なり
わかき御心ともみたれ給ぬへき　○辨なと姫君に教
訓のことなり
たはむへくも　○教訓にもより給はさるなり薫のこ
とばに御こ丶ろばへとものいとどあやにくにもの
つよけなるはいかにおほしおきつるかたのことな

るにやといへる返答さてたはむへくもなしとはい
へり
かの御かたを　○中君なりかく山深く薫の度々尋さ
せ給へる御志には此中君をと許し給へる御心とな
り
宮の御ふみ　○匂宮なり
あはれなる　○薫の詞故宮の御遺言をいへり
さまて　○さやうにまてなり
心のひくかた　○大君に心のひくなり
きさいの宮は　○花鳥秋好中宮とありいか丶是は明
石の中宮なり薫と兄弟の由なり
三條の宮　○女三宮なり
なほさりのすさひ　○好色のかたなり
まいて心にしめたる　○大君の事なり我思をは色に
出して申事もなしとなり
宮の御事をも　○匂の御事なり
あさやかならす　○大君の心なり
とにもおほとなふら　○薫の居給ふ所なり無禮なる
となりいさめてといへる面白し
うちとくへうも　○薫の心にしみて思給ふなり

こゝちのかきみたり　○大君の詞なり
山ちわけ侍り　○薫の詞なり
へたてなきとは　○大君の詞なり
あはめ給へる　○制し給ふなり
へたてぬ心を　○薫の心なり隔心なきと云處は分別のゆかぬ故となり
しれ物　○愚癡なるなり
心にくきほとなる　○前に佛の御灯もかゝくる人もなしといへる詞にかゝれり
かう心ほそう　○薫の心なり
わりなきやうなる　○薫の心のとかなるさまなり
かゝる御心の　○大君の心なり
ゆゝしき袖の色　○鈍色なり
いとかうしも　○薫の心なりあまりにいとひ給ふもいかゝとなり
さはかりのいみおくへく　○服の程を過してなとの給ふへきにあらすとなり
はつかしうも　○大君の心なり
みやうかうのいと　○いとは最なり糸にあらす
人よりは　○薫の佛に心さしの深きをいへり

宮のうたまひし　○八宮なり
水のをとになかれそふ　○邊風吹斷秋心緒瀧水流添夜涙行
うまとものいはゆる　○征馬連斷行人出
なにとはなくて　○薫の詞なり
やう〳〵おそろしさも　○大君の心なり
かういとはしたなからて　○大君の詞
いまたに　○あけはてゝはいかゝとなり
ことありかほに　○薫の詞なり
あさましう　○大君の心なり
いまよりのちは　○大君の詞
あなくるしや　○薫なり
あかつきのわかれ　○またしらぬ曉をきの別には道さへまよふ物にそ有ける
山さとの　○薫の歌なり聲々とは峯の嵐もまかきのも心ほそけにといひ又村鳥のたちさまよふ羽風夜ふかきあしたのかねのをとにはとりもいつかたにかあらんといひて次第々々に明行さまをとりあつめたるとはいへり　俊成卿歌　曉はかねの音より鳥の聲千鳥友よひ鳴の羽かき

とりの音も　○大君の歌なり
この人の御けはひ　○薫なり
この人の御さまの　○是も薫なり大方のはつかしげ
さならはとなり
れいならす　○中君の心なり
御ぞひきゝせ　○あね君のつまをひきゝせ給ふなり
又あね君にひきゝせ給へると云々
とのゐ人　○橋姫の巻にありしなり
あけまきを　○大君の心なりあけまきの歌をよみかは
し給ひしをもいかゝ中君の思ひ給ひつらんとなり
ひろはかりの　○催馬樂のかよりあひけりの心にて
昔り中君あやしく思給ふへきとなり
日はのこりなう　○故宮の正日をいへり
心ば　○常には金にてするを是は糸にてし給ふなり
月ころくろう　○重服なりうすにひは輕服になるな
り
おや心に　○薫に娵すへきと大君の思給ふなり
かの人は　○大君なり
なか月もしつ心なくて　○八月におはしたるなり九
月まてはしつむる心なくてとなり

御ふみにて　○薫宇治にて姫君の御方へ申給ふなり
いまはとて　○文の返事なり
この君を　○薫を人々たのみたるなり
むかし物かたりにも心もてはや　○昔も我心と打と
くる心は無となり
せめてうらみふかうは　○つよく恨給はゝ中君をさ
し出すへきとなり
ほのかにもみそめては　○薫中の君に逢初給はゝ必
す慰み給ふへしとなり
ことにいてゝは　○薫の心より中君にもとは打出し
給はしとなり
ほいになんあらぬ　○薫の領狀は有ましきなり其故
は大君にと心さしの有つるにひきかへし心をうつ
し給はゝ色々しき名を思ひ給ふへきとなり
うけひくけしきのなかなるは　○無也
けしきをたに　○中君のおほさん所を思ひ給へはな
り
むかしの御おもむけも　○大君中君へ申給ふ詞なり
やうの物　○おなしやうの物となり
いかにおほすにかと　○中君の心なり

ひと所をのみやは　○中君の詞大君はかゝりにかくてましませと取わけ故宮のの給ひをきたるにかと也

猶これかれ　○大君の詞なり

ことはりなるよしを　○辨薫をことはるなり

ひとところ　○父にても母にてもとなり

身をこころとも　○いなせともいひはなたれすうき物は身を心ともせぬ世なりけり

れいの色の御ぞ　○服衣をぬきて常の色の御ぞをきせ奉らんとなり

やまなしの花　○世中をうしといひてもいづくにか身をはかくさん山なしの花

さはいへと　○さはいへとゝは年老たる人は遠慮の有へきにさもなくてあさく老ひかめる心しらひなりといへり

この君の　○中君なり

猶かやうによろしけに　○薫へ此趣を申へしとなり

いとあはれと　○辨の君なり

さのみこそは　○辨の君の詞

さはえおもひあらたむまし　○薫はかやうにの給へりとなり

それもおもふやうなる　○辨の詞

二所なから　○父宮母北方なり

かしこけれと　○かたしけなき申事なれとゝなり

いとにくゝ　○大君の心なり

またけはひ　○八月なれはなり

いかなれは　○薫の詞なり

何心なくねいり　○中君なり

あらましことにてたに　○大君の心なり中君を大君教訓ありし時さへいしみきこと(に)思ひ給ひしとなり

いまはとて　○故宮の御事なり故宮のましますせならましかはと思給故にかく思出給ふなり

ひとりふし給へる　○大君の獨臥給へるかと心ときめきせしなり

これをも　○薫の心なり

このひとふしは　○大君への志をとけすは口惜き事となり

なかの宮いつくにか　○人々のしらてかくたとれるなり

みたてまつるにしはのふる　○薫のさまをいへり

何とてか大君はかくはいひのかれ給ふそとなり
おそろしき神　○世俗の諺に嫁すへき時過ぬれは神のつくとなり萬葉第二大伴安麿娉ニ大納言巨勢人女歌ニ玉葛みならぬ木にはちはやふる神そつくといふならぬ木ことに
あふ人がらにしもあらぬ　○大君ならねは本意ならねと是も心のとまるをいへり
人やりならぬ　○我心一つにて定むへしとなり
心うくつらき　○あね君の事なり
昨日の給し　○前に萬つに打語ひて昔の御趣けも世中をかう心ほそうて過しはつとも中々人わらへにかる〳〵しき心つかふなとの給ひおきしをなとゝ教訓ありしもかやうの事の心かまへにてありけるとおほしよるとなり
かへのなかのきり〳〵す　○大君壁のつらにかくれ給へるをいへり
かたみに　○大君中君なり
ゆかしけなう　○兄弟ともに薫の見給へることなり
きしかたの　○薫の詞
身もなけつへき　○引歌に及へからす
すてかたく　○花鳥故宮の御事と云々是も可然歟但是は只今大君の中君を捨をきてはひかくれ給へるにて尚然るへし
かけ〳〵しき　○何方にもとは兄弟なからとなりかけ〳〵しきすちをは思はなれたるとなり
宮なとの　○薫よりは好色なれは姫君をもねんころにきこへかはし給ふ故にその方に心のひくにやと恨み給ふなり
もしおろかなる　○中君をよそに思給ふてはとなり
御ふみあり　○薫よりあね君の御方へ御文あり
れいよりは　○中君への後朝の文なるへしと大君の悦ひ思給ふなり
おなし枝を　○薫は大君にこそ心をそめたるを大君は知給はぬさまなるを此枝の如くにあきらめ給ふへきとなり又の義は匂と薫とは親昵なる連枝とはいへり何方にか心のひくとは委く尋たきとなり説々あれとも第一番の義可然なり
そこはかと　○大君の心なり
きこえ給へと　○後朝の文なれは中君の書給ふへき事かとなり

かきにくゝ　大君の心なり
山姫の　○うつろふ方とは中君をいへり尋常ならは妬心なるへしされとも此歌は大君の心は中君をゆつる心ありてよめるなり
となしひに　○無事に也なしみと可讀事無ぶりに也
猶えむしはつましう　○薫の心なり大君をはつゐに恨はつましきとなり
身をわけて　○大君常に中君をゆつり給ふ事なり
はしめのおもひ　○最初より大君に心よせし事なり
おなしゐたり　○姉君妹君なとこなたかなたいひよらん事を歎き給ふなり
兵部卿の宮御方に　○夜もすから思あかし給へるなり薫の心に中君を先匂宮にぬしつけて姉君の遁所なくして我本意をとくへしと案し出し給ふなり
六條院　○薫こゝに住給へり二條院と程ちかきなり匂宮は內にも曹司あり又二條院も里なり又六條院の內にも曹司ありと見ゆ
おもひつるもしるく　○薫の推し給ふにたかはさるなりかゝる有明のころはさためてなかめおはしますへきとなり

はしをのほりも　○馬道にて對面なるへし
かのわたりの　○宇治の事なり
さもおはせなんと　○匂宮を中君に定めんとの心也
をみなへし　○匂の歌なりおほ野名所にあらすひろき野と云心なり薫の惜し給ふとなり
きりふかき　○薫の歌志のふかき人ならてはみ給ふましきをとなり
あなかしかまし　○秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一とき
としころ　○薫の心なり
なに事も　○中君の何事も可然事をいへりちか増りすへしとなり
さはたえおもひあらたむましう　○薫の心は姉君ならてはとなり
いつかたのうらみをも　○中君をは匂に主つけは匂に恨みあらじ又中君に我つれなき云恨みもあるましきとなり
心せはう　○薫の下心は知給はさるとなり
れいのかろらかなる　○匂宮の御心のかろ〳〵しきをいへり

おやかたになりて　○行末までのことをおやかりて
薫の申給ふなり
よしみ給へ　○匂宮の詞
かの心ともに　○薫の詞なり
廿六日ひかんのはて　○時正ともいひ天正ともいひ
て吉日なり
ふなわたりなとも　○此宇治の宮は川のこなた也舟
わたりすへきにあらされと匂宮をはあたなる所に
はやとし難しとて川よりこなたに可然家の尋てや
とし給ひたる事なり
みとかめたてまつるへき　○宇治の宮のさまなり
うつろふかたことに　○大君は中君にゆつりて心安
しと思給へり
おもふかたことなめり　○薫の心は大君より外には
心もうつるましきと思給へは心安く中君はおほし
たり
心うかりし　○大君の心しりにて薫をみちひき給へ
るにやと中君はうらめしく思給ふ故なり
なにやかやと　○大君へ薫の申給ふなり
こゝもとに　○薫の詞中君へ一言申たきことのある
となり
おほしはなつ　○大君は薫をみはなち給へは面目も
なしとなりひたやこもりは無意趣なり
いつかたにも　○辨の詞なり
さなんときこゆれは　○大君へ申なり
されはよ　○大君の心なり
かのいり給ふへき　○中君の方へ入給へき道ならぬ
方にて大君薫に對面あり
ひとこと　○薫の詞
さうしのなか　○障子のはさまなり
いとうたて　○大君の心なり
こと人と　○中君へうつろへ給ふてよとなり
宮はをしへ　○匂宮は薫のをしへのまゝにいり給へ
るなり
さき〳〵も　○匂宮の御心なり
ひめ君は　○大君なり匂宮の御事は夢にも知給はさ
るなり
おかしうもいとおしうも　○薫の心なり
宮のしなひ　○薫の詞
このさかしたつ　○辨なり

なかそらに人わらへ　○薫の我身の事なり
いますこし　○大君の心なり
めもあやに　○おそろかるゝなり
かうよろつに　○大君の詞
いまはいふかひなし　○薫の詞
やんごとなき　○大君は匂宮を心よせに思給へとも
　匂宮の御志は中君にとのみおほしめすとなり宿世
　はせん方なき事とねたみいふなり
猶いかゝはせんにおほしよはりぬ　○宿世はせん方
　もなしたゝ我かたになひき給ひねかしとなり
しるへといさなひ　○匂宮なり
こしらへんと　○すかしやるへしとなり
このゝ給　○大君の詞
しらぬ涙のみ　○行さきをしらぬ涙の悲きは只目の
　まへにおつるなりけり
さすかに　○薫の心なり
山鳥の心ちして　○山鳥はひとり／＼ぬるなり
れいのあけゆく　○とりあつめたる朝ほらけかなと
　よめる時の心なりさてれいのとはかけり
いきたなくて　○匂宮の御さまなり薫のこはつくり
　給ふなり
しるへせし　○薫の歌なり人のしるへをせし身にて
　我身はかへりてまとへる事よとなりあけくれのみ
　ちはまよへるかたをいへり
かた／＼に　○大君の歌なり中君の事をも思ひ又我
　歎きをもかた／＼にとよめり此物思は皆薫の心よ
　りのしわさなりさやうの所をも思知給へとなり
夜へのかたより　○匂宮なり
道のほとも　○匂の御心なり
夜をやへたてむ　○わか草の新手枕をまきそめて夜
　をやへたてんにくからなくに
らうに御車よせて　○六條院の廊なり
おろかならぬ　○薫匂宮へ隨分の奉公なるとなり
しるへのおこかましさ　○我身ひとりねにて明した
　る事をは申たまはさるとなり
たのもし人　○姉君なり
よのつねに　○はるけさ道をわけこしは猶さりなら
　すとなり
おほかたにつけて　○大君の心さき／＼猶さりこと
　のやうにて御文を見しを今はこのまゝにてわすれ

給ふてはとうしろめたき心のそひたるとなり
われさかし人にて　○さき〳〵は大君のかはりて返
事し給ひし事なり
しをん色い　○御使の祿なり今日初て顯し給ふ故な
りみへかさねとはうらおもてありて中倍ある袴な
り
よへのさかしかりし　○祿を給へることなり
その夜も　○文たてまつる夜なり
にく〻おほす　○薫なとさそへ給へとさはりを申給へ
はなり
いか〻はせん　○宇治の宮なりした待給へるなり
うれしき　○今夜は喜ひ給ふなり
さかしき人も　○姉君なり
世の中に　○あね君の詞
はか〳〵しからぬ　○大君の心ひとつなり
しらさりしさま　○我身しらぬよし申さは其分にて
もをき給へとなり
にくしとなおほしいりそ　○あねなれはおやの心な
れは罪もこそうれとはいへり
おほしおきてしを

さる心もなくあきれ　○匂宮の心にしみ給へるをい
へり
あはれとも　○中君何とも思給はすとなり
いひしらすかしつく　○公界の事なり
いへにあかめ　○此宇治の宮になり
さるはこの君しもそ　○中君也
おまへにて　○大君のおまへなり
このかみ心にや　○まへにはさるは此君しもといひ
て中君をほめたりこ〻には此かみ心にやといひて
大君をほめたるなり
みやつかへのらう　○奉公の勞なり
おいつきかき給ふ　○ちらしなともせさるなり
宮の御方に　○女三宮の御方に所在の分なり
た〻なるきぬ　○染もねりもせさるなり
御れう　○大君中君のれうなり
さよ衣　花鳥には中君のこと〻あり然れとも是は大
君のかけはなれてあつかひ給ふをいへる義にて然
へし
こなたかなた　○兄弟なから薫の見給ひし事なり
御つかひかたへは　○御使かつけ物なと有へき心つ

かひ成へし
へたてなき ○心はへたてなくともなれし袖とはいひかたしとなり
心あはたゝしく ○ありのまゝに思すちをいひのへたるを云り草子地の評なり歌はいかなる時も心つかひあるへしとなり
まちみ給人 ○薫なり
宮はその夜 ○三日の夜の事なり
中宮 ○明石中君の匂宮を教訓なり
なに事もものこのましう ○一切の事なり我このむ所をたてゝするはあしき事となり母の御詞にて可然かくの給ふ中に好色もこもれるなり
うへも ○主上なり
いさくるしと ○匂宮なり
よく御けしきを ○薫の心に匂宮のおほしめす御心のほとをしらんとてなり
日比へて ○日比をへて参内ありてとなり
たいはんところ ○女房の侍ふ所臺盤所と云なり
わつらはしきみやつかへ ○奉公もかへりて不忠なるへしとなり

いときゝにくゝそ ○匂の詞なり
ところせき身の ○御身のおも〳〵しきを思煩ひ給ふなり
いとおしう ○薫の心なり
こはたの山に ○宇治の道なれはいへり馬といはんためなりいとゞ物の聞えやと我はといひ出して又我と然るへからさることゝなり常に人のいへることに此類あることとなり
御ともには ○薫の詞
中宮の御かた ○明石なり宮とは匂宮なり
あまた宮たち ○明石中宮いまた若くおはしますとなり
いかならん折に ○女一宮の御あたりちかく侍ひたきとなり
それにたに ○薫の我實法なるさへ宇治には心のとまるとなり
ことさらにみえしらかふ ○匂宮の御かたにさふらふ女房達なり薫にわさとみへしらかふもあるなり
おほかたはつかしけに ○中宮の御かたの人々よくもてしつめたるうちにも下の心ほのすきたるもあ

るとなり

おもひありき　○世をつねなき物に思ふなり

こゝ〳〵しけに　○今夜はさうやくもやと思給ふれとなとの給ひしことなり

さかりと見えて　○中の君なり

さはかりよき人を　○匂の御目にも可然思給へり

さかりすきたる　○こゝにめしつかひ給へる女房達なり

あさやかなる　○きぬともなり

われあしとやは　○我も〳〵と我姿をは思物となり

大君の心たくひなし

大宮のきこえ　○明石中宮の給ひし教訓のことなとかたり給ふなり

たえまあるへう　○中君の心なりかく絶間あるへきさまにのたまへるは匂の色々しき御心にての給ふかと思へるなり

いつきすゑたらん　○女一宮なとなり

おもひなしの　○后腹なとの思なしにやとなり

かれは　○薫なり

よそにおもひきこえし　○匂の事なり

なかたえん　○心より外のよかれと云へるなり

たえせしの　○一二句面白し

されたる御心かな　○草子地なり

けさそものゝあやめ　○昨日なとは夜ふかゝりしなり

あくる日ことに　○毎日となり

みしと思し　○大君の思給なりかやうの夜かれ頻はしく世をしりてこそ中君をもたやすくあはせ奉らざりしをとなり

をりおしはかりて　○折節をおしはかり給ふなり

ふるの山さと　○初時雨ふるの山里いかならん住人さへや袖のぬるらん」引歌よく叶へり宇治をやかてふるに取なしたるなり

秋はつる　○九月十日なり暮秋の月なれはなり

さかしら人　○薫なり

けに人はかうは　○大君の心なり薫のやうなる人はまれなるとなり

この君は　○薫は内々へまいり給へり

うらみ給ふもさすかにいとおしくて　○大君の心なり

人のうへにても　○中君に匂のたへ〳〵なるを見るにもとなり

あはれと思人の　○よそにしてあれはあはれなるへき事も夫婦の中にてはつらきふしになれること丶なり女の心もちゐ殊勝の事なり

宮の御ありさま　○匂宮のありさまを薫へ大君の問給ふなり

かすめつ丶　○匂宮好色かましきことをほのかに答給ふなり

されはよと　○大君の推し給ふ事となり

おほしたるさまけしきをみありく　○匂の中君をおろかにおぼすかと御けしきをもたへす心にかけて薫の見るとなり

ありしやうにて　○まへのやうに逢たてまつりたきとなり

つねよりもわかおも影に　○此比は殊の外に衰へたることなり此詞宇治十帖の内第一の詞と云々服の故にても有「夢にたに見ゆとは見へし朝な〳〵わか面影にははつる身なれは

うとましと　○御らんしすてんもさすかなるとなり

宮はまた　○薫のかくひとりねなるとは匂宮はしり給はさるなり

女君　○中君なり

左のおほい殿　○夕霧なり

なへてにおほす　○大方におほす人ならは宮づかへ人の如くにもてなして心やすかるべけれども中君はさやうにはおぼさすおも〳〵しくおぼすと也

もし世の中うつりて　○東宮御位につき給ひて後は此匂宮を東宮にもと思す也その時は御息所にもなり給ふへき人からなるとなり

さるへきさまにてわたしたて　○薫は大君をわたしてんとのあらましごとなり

かうかよひ給よしを　○露顯すへしと薫は思給ふなり

ころもかへ　○十月になるなり薫の方よりをくり給なり

左のおほい殿のさい相中將　○夕霧の息なり藏人少將にてありし人なり

かしこには　○御中やとりには此宇治宮を用給へしとなり

かつはゆかしげなけれど　○背薫より沙汰し給へる事どもなればゆかしげなしとなり
さうじみの　○匂宮なり
もみぢを吹たる　○花鳥承保の例をひけり
たなばたばかりにても　○年の一夜の契なりともとなり紅葉をふきたる舟とかきてかくいへる紅葉を舟の心尤面白
御舟さしよせて　○宇治院の事なり此時の御やどりなり今の平等院也
あふみのうみ　○みるめなき心なり
をちかた人の　○中君なり
人のまよひ　○かの宮に御出あるべしとなり
さい相のあに　○夕霧の息也
数ならぬ　○不肖の人は權門のまじはり成がたしとなり
中納言の君もなか〳〵たのめ　○兼て案内申せし事なり
去年の春　○泊瀬まうでなり
をくれてこゝに　○故八宮にをくれて姫君だちしまゝすべきことなり

宰相中將　○夕霧の息
いつぞやも　○その字清て讀べし
あるじがたと　○薫によみかけ給ふなり
さくらこそ　○さくらをみて世のつねなきを思ふとなり
いつこかり　○秋は行けんといへる艶に面白し
見し人も　○是は年老たる人にて八宮を見奉し人成べし末の詞に見えたり木草はつれなく殘れること也
秋はてゝ　○此宮を思ひいれたる歌なり
ほのかにしる人は　○以下草子地也
かしこには　○宇治宮なり
さるなほ〳〵しき　○下つかたの人こそ虛事はすなれと思しことなり
あためき給へるやうに　○故八宮も匂宮をばあだ〳〵しく聞置き給ひしとなり
さうじみは　○中君なり
御こゝちもまことに　○病にもなるとなり
この君を　○中君なり
かきりなき人にものし給とも　○匂宮をいへり此まゝに打捨給ひてはとなり
山ざとの御ありきも　○泊瀬詣紅葉御らん何れも此

姫君故となり
宮はまして　○匂宮なり
御心につきておぼす　○明石中宮の申給なりおぼす人あらばこなたへよび給へとなり
すぢことに　○このたび春宮にもと匂をば思奉る故にとなり
しくれいたうして　○十月なり
よそへらるゝ　○我御身の上に似たるとなり
かしこへたてまつらんと　○此繪は宇治へ奉らるべしとなり
在五が物語　○伊勢物語の繪成べし琴の事河海に大和物語に有云々然れ共流布の本大和物語にはなし
をしまきよせて　○匂のおし巻給ふなり
すこしものへたてたる　○別腹などをいへる可成是も人の女子の道人の用意にかける也されば毛詩にも兄弟父子にさかれといへり
わか草の　○あるべき事とは思はさるとなり
この宮をは　○匂宮なり
ことしもこそあれ　○女一宮の御心なり
ことわりにて　○女一宮のことわりなりとなり
うらなくものを　○伊勢物語に云る心は妹をいたはりてうつくしみにいへるなり又妹の心も我を懇切に思ひ給へる有かたきとなりこゝにて見るには心かはれりうらなくといへるはにくきことゝいへるなり
むらさきのうへの　○以下草子地なり
御心のうつりやすき　○匂の御心なり女一宮の御方の女房達なり
まうきこへ　○宇治なり
なやましけに　○大君なり
おどろきなから　○薫の詞なり驚つゝまいるとなり
宮の御心もゆかで　○薫の語なり大君をなぐさめ給ふなり人茂かりし故に紅葉御覧のついでをもうちすき給ひしとなり
こゝにはともかくも　○大君の詞なり妹の君は何とも思給はざるとなり
なき人の御いさめ　○故宮の匂宮をば色々しきなどの給ひて打とくまじきことにの給しにたがはざることなり
いと心くるしう　○薫の心なり

世の中はとてもかくても　○薫の詞
人の御うへを　○匂の御おこたりをとりもちていへるとなり
かゝるおりの　○薫の詞なり
いとみぐるしう　○大君の心なり
きのふばかりに　○昨日の如くにとなり
さらばこなたにと　○ひめ君の御かたへとなり
いとあはれに　○薫の心
さすかに　○薫のまづ帰給ふなり
所さり給に　○此つゐでに京へ出し奉らんとなり
この君の御ともなる人　○薫の供の人なり
女かたは　○六の君のかた人の事
わが殿こそ　○薫なり
めもあやに　○驚ばかり人のおもへるなり
さこそいひつれ　○かやうに語つると又傳にこゝの人の語るなり
きゝ給に　○大君の聞給なり
ひめ君もの思時の　○たらちねのおやのいさめしうたゝねは物思ふ時のしわざなりけり此歌にて末へかきのべたる也

ひるねの君　○中君なり
こ宮の　○中君の夢なり
うせ給てのち　○大君の詞也
人の國にありけむ　○反魂の香の事なり
おりはすこし　○しぐれうちしたるをりふしなり
御かたは　○中君なり
猶心うつくしく　○大君の教訓尤あはれなり
さやうなるあるまじき　○たまさかに匂宮のかよひ給ふなと人のしらばまたこと人のわつらはしく心かくる人はあらじとなり
おくらさむと　○中君の詞也
かぎりあれば　○大君の詞也故宮にをくれ奉りても今日までもなからへ侍れはとなり
あすしらぬ　○大君の事なり中君故こそ命もをしけれとなり
ながむるは　○今日のしぐれはいかなればにやかくたへ難きまで戀しきとなり
かく袖ひつる　○引歌能叶へり「神無月いつも時雨はふりしかどかく袖ひづるをりは無りき
みゝふれにける　○いつも僞のみの給へるとなり

なをあらしことゝみるに　○あるましきことゝなり
僞にてあるへしとなり
さばかり世にありかたき　○匂宮には人のなびきや
すきなるべしとなり
さはかり所せき　○中君はさりともとおぼすなり人
はさは思はざるとなり
あられふる　○都よりは時雨をいへり山里は冬深き
心をいへり
み山にはあられ降るらし外山なるまさきのかづら
色つきにけりの心あり
さばかりおほみなる　○五節の大忌によせてかけり
五せちなどゝくいでき　○十三日の五節なるべし
はかなう　○山里の人をばはかなき次手にも思召出
給ふなり
大宮　○明石中宮なり
まことにつらきめは　○中の君へ物思はせ奉らんと
なり
御心をしり給はねは　○匂の御心を宇治には知らざ
るとなり
中納言も　○薫も匂宮をは見おとし給ふなり

山さとには　○薫より宇治へ問給ふなり
この宮の御こと　○匂のかよひ給ふことなり
心うく　○薫なり
ありしかたに　○まへにいり給し所なり
心にはおほしなから　○大宮の詞なり
かくまたれ　○薫の詞なり
御くしなとすこしあつく　○温なり
なにのつみ　○薫の詞なり
日比みたてまつり給へらん　○中宮へ薫の申給ふな
り
ひたおもてには　○薫のようい見えたり
かたつかたの人に　○匂宮に思くらぶればとなり
いとくうつきて　○功のいりたる也若紫巻にもあり
はなし／＼うちかみ　○あざりのことなり
なにかしの念佛　○彌陀の稱名念佛の事なり
常不輕をつかせし　○つかせとは禮拜の事なり
君もいみしう　○大君なり
かの世にさへ　○姫君達の御事に心とまるへしとな
り
かのまた定まり給はさらん　○中陰にましますす時と

なり
ゑかうの末つかた ○我深敬汝等不敢輕慢等の文成
べし
まらうども ○薫の佛法に歸し給ふ心なり
不輕のこゑは ○薫中君に申給ふ詞なり
おも〳〵しき ○輕からぬ法事となり
霜さゆる ○薫の歌なりよのつねならば法の聲など
云べきを只千鳥の聲を持て不輕の聲になしてよめ
る殊勝のことなり毛詩關雎篇など后妃の德をいは
んとて雎鳩の事をいへる類なり
つれなき人の ○匂宮に薫も似たるとなり
あか月の ○物思人とは中君のみづからの事なり
につかはしからぬ ○辨が詞たるなり
かやうのはかなしことも ○中君大君の事をいへり
宮の夢に ○薫の心なり故宮の御ためなり
御いさめのよし ○薫なり願文をいだしてこゝにる
給へるなり昔はいく日と云願文を奏聞する定たる
事なり
おもふ事してん ○尼に成へしとなり
たのもし人にも申つかねは ○薫にも申さゝるなり

とよのあかり ○辰の日なり
ひかりもなくて ○雪のふるそらなり
かきくもり ○豐明節會なれば日かげのかづらをか
くる日なればなり
いかゝおぼさるゝ ○薫大君へ申給ふなり
ものおぼえず ○大君なり
よろしき ○くちをしきわざにこそといへるまで大
君の詞なり
枕よりおちたる ○奇特なるかきざまなり
とまり給はむ御事 ○中君なり
かくはかなかりける ○大君の詞
かくいみじう ○薫の詞
ひきさけ ○中君を避たるなり中君を一所にはとて
引わけ申也
むしのからのやうにて ○うつせみはからをみつゝ
もの心あり
御いみにこもれる ○薫のまします故に人々多なり
又なき人に見ね給 ○たくひもなき人となり中君か
た〳〵の物思ひになき人のやうに見え給ふとなり
宮よりも ○中宮の事なり
おもはすにつらしと ○中宮にとたへあることなり

かきりあれは御そのいろの　○薫と姫君とは一たひの契もなき故に服衣をき給はぬと也
くれなゐに　○本妻にてなき故なり侍らふ人々のきたるをうらやみ給なり
こほりとけぬ　○花鳥の説尤可然
この御かたには　○薫中君へ申給なり
この君は　○中君の事薫の心なり
むかひのてらの　○夜に成ていへる面白し今日もくれ又けふもくれぬと思心あるへし花鳥說いかゝ
よもの山のかゝみ　○此詞宇治に兩所にありしとみをろさぬさきの事なるべし
いきいてゝものしたまはましかば　○有ましきことまで思給へるなり
こひわひて　○雪山は藥のある所なりされば死ぬる藥もあるべしとなり面白き趣向なるべし
なかばなる偈　○諸行無常の偈の事なり薫の心は此世に跡をとめかたきとなり
心きたなき　○心といでたちてはいはずしてことつけたるは心きたなしとなり
わかきは　○若幼みないへるなり
この宮の御事　○匂宮なり
さすかにかの御かた　○中君には此事を思とはしられ奉らしと大君のし給へるなり
わか心なから　○薫なり
なに人かは　○京極黃門「たれはかり山路をわけて問くらんまだ夜はふかき雪のけしきにとよめる此わたりより出來たるへしけしきといへる詞爲家卿はきらへるなりされども此歌におきてはけしきとなくてはなり雪のけはひとあるをけしきといへる殊勝なり
御いみ　○四十九日のうちなり
おほしなげきつる　○大君の此御事を歎き給ひしことなり
いまよりのちの　○匂宮の心改るとも猶恨有べしとなり
これもいと　○中君の物思給へる御さまなり
御ありさまに　○薫の詞
かうがへ　○勘當なりこゝの詞帚木巻に恨み云へき事をもなとありし詞にあへり
かやうなる事またしらぬ　○かく人に恨みらるゝこ

さなどは此宮はいまた知給はさる人なるへしさなり
いよ〳〵　○中君の心なり此君とは薫なり
きこえしさまをも　○匂宮の能契置き給ひしことなり自然のとだへをは心かにけ給ふましき由はよく契り給しとなり
ちゞのやしろ　○誓つることとのあまたに成ぬれば千々の社も耳なれぬらん
くちなれ給けむ　○偽なるへしとなり
きしかたを　○中君の歌なり過にし方にて行さきはしらる〻となり
ゆく末を　○行末をみしかく思給はゞ先只今のめのまへをそむき給ひそとなり
人の見るらん　○匂の御心なり
ましていかに　○日比のとだへいかに思ひ給ひつらんと心をくみて匂宮のおぼすなり
いさいたう　○薫のさまなり
まめやかに　○匂のとふらひ給ふなり
うちいでんに　○薫の心よわきさまをいか〻とためらひ給へるなり
女ならば　○匂宮我身女ならば薫に心をかはすべしとなり中君の心をうしろめたく思給へるなり
かくつれなき物から　○つれなく宇治にゐ給て内わたりなどをもはゞかり給はねともなり
つれなきは　○いかてわれつれなき人に身をかへて苦き物と思知せん
年のくれ　○宇治のさまなり
御わさ　○七七日の事なり
かくてのみやは　○薫の事なり
かくおはしならびて　○人々の薫を思へるなり
時々　○清べし時々なり薫此宮に八宮の御時より参り給し事
きさいの宮　○明石中宮なり
女一宮　○さぶらふ人にことよせてなり
中納言も　○我も三條宮をつくりて大宮をわたし奉るへき物をとなり
宮のおほしよるめりし　○匂宮薫を疑給ひし事なり
おほかたの御うしろみ　○系皆の御後見は薫のさたなくてはと思給ふなり

細流巻十四　東屋　浮舟

東屋　巻名以歌並詞號之薫廿五歳の八月より九月までのことあり

つくば山を　○常陸國の名所なればいへり

たほしはゞかりて　○薫の上﨟しきさま也此浮舟君は八宮の御むすめにてはあれど只今の人きゝはなま受領のむすめとのみ聞えあれば文などつかはし玉はんも必ずかろ〳〵しき名を立ぬへきと思惟し玉ふ也

まめやかに　○母の心也

かみのことも　○常陸守は必す親王也されば守のなき時は介直務以下をつかさどるに依て介をかみとかけるなるべし

はゝなくなりにける　○前腹也

このはら　○浮舟の母也

こと人さ　○浮舟をば他人の如くへだてたる也

さまかたちの　○浮舟のみるめの然るべき故に母の心を盡すこと也

おなじこと　○この字清濁両義也濁義可然如の字也

いまはわかひめ君　○母の我腹の子ども也

こゑなど　○はしめは奥州の守などなるべし

かうけの　○豪家などをばおぼはゞかる也すきまなきことはほめたる也またき人と也

うたあはせものがたり　○歌合物語合也

かうしんをし　○守庚申也

かたちなんいみじかなる　○浮舟のきこえ也

さはいへど　○家中ともしきことこそなけれおぼえはさせることもなきと也

心ひとつに　○母の心也

ないけうばう　○今のおほとの非なと云所也

こくのもの　○曲の物也

しとおかしき　○師と也

さすかにものめて　○かみの事也

あこをは　○我子をば浮舟よりは疎かにし玉ふと恨むる也常陸が我子をばそれ程に思はぬと母を恨むる也

我心ひとつ　○母の心也

なみ〳〵の人　○少將をいへり

わかき人々　○むすめども也

おもふ人ぐしたるは　○ありつきたる也又父の事を

云歟
物たほししり　○此少將の心はへをいへり
けしきあしう　○少將のけしき也
はじめより　○少將詞也
いとをしくなりて　○媒の心也
くはしくも　○媒の詞也
きみいと　○少將也少將のけだかからず無興したるさまをかける也少將の利欲にかゝりてかやうにいふをあてやかならぬと云也
かやうのあたり　○受領の聟などになれる事本意ならずと也いき通はんと切て人のおさ〱と讀べし
源少納言　○兩人先腹のむこなるべし系圖になし
この人　○媒也
まことにかみのむすめ　○媒の詞
またわかう　○年わかき也質子をと申べしと也
いさやはじめより　○少將の詞也
かんのぬし　○守のぬし也うやまひたる詞也
この人は　○媒也
にしの御かたに　○平習のかたにある也守のかたへは行通ふ事も無と也
左近の少將との丶　○媒の詞也
かたらひがたげなる　○守のさま也
月ころ　○媒の詞也
はしめよりたゞきら〱しう　○守をあげていへり
さらに　○守の詞
らうたしとおもふめのわらは　○おくに十五六の程にてとあるむすめ也
大將とのに　○系圖不分明也此少將は大將なりし人の子と見えたり
この人の思給へん　○母の心いかゞと也
よろしけなめりと　○媒の心也
なにかと　○媒の詞也
一ところ　○守をいへり
ほとりばみたる　○邊ばみたる也其邊をへつらひたる心也守の質子にてもなきに行通ふべき事訓たるやうなるべしと也
人がらは　○これより少將をほめていへり
あそびてもおはしまさす　○實〻なる人と也
ころのおほんとく　○みなし子と云義あり是も一義は叶へるにや但此頃と云義可然歟守の詞に此ころの御とくとあり奥に見えたり

こたひのとうは　○今度の藏人の頭はと也勅定とい
へりこゝもとは悉皆虚言也よからぬ物の人の媒介
することも今もかくいへる類ある也かやうの所に心
をつくべき教にかけるなるべし
ごて給へる　○の玉へる勅定也世俗に云詞也きこへ
ごつと云同詞也諺にのちごてと云も同し
うしろやすき　○媒の隨分申と云也
ひなひたる　○田舎人也
このごろの御とく　○守の詞也前のころの御とくと
いへる此詞にて見えたり
かの御ため　○少將の御ためも也にやともしらすと
は自他の爲は何と有へきはしらず我は隨分奉公す
へき由を云也
いとうれしく　○媒の心也
君すこし　○少將也
そくらう　○贖の字清てよめり贖勞也禮を出すこと
也贖銅と律にいへる是也
さてかのきたのかたに　○母の心いかゝと也
なにか此のかたも　○媒の詞これも同じむすめなれ
ばと也

月ごろは　○少將の心に此媒の月頃の詞にはかはり
ていへるよと思と也
日をだにとりかへて　○浮舟に約束せし日を改めす
して行也かくいへど少將の通ふ事は奥に見えたり
是又文法也
御かたをも　○浮舟也
おやにしられ　○八宮に也
なかたちのかくこととよくいみじきに女はまして　○
かみをだにもことよくいひなせば母のすかされた
るはことはり也仍女はましてとはいへり
あこの　○我むすめをさしていへり
ようせさせたまふ君たちあらじ　○もてかしつく人
は有ましきとこなす也
めでたからん御むすめ　○浮舟をあざむきていへり
あふなく　○奥もなく也
北のかたあきれて　○母は浮舟を違變の事は初めて
きく也
こなたに　○浮舟のかた也
おなしこと　○同し事と也
この君のゆかり　○浮舟の事也

あひ〳〵にたる　○あひて〳〵似あひたる類の人なれば我は口入せじと也
あなおそろしや　○母の詞也
かく心くちおしくいましける君　○少將をいへり
左のおほとの　○夕霧也按察大納言は紅梅大臣式部卿は蜻蛉にうせ玉へり薫のをぢ也
かのはゝ宮　○女三宮也
宮のうへの　○中宮也
さはらかに　○あはらなる心也
御かたはきたおもてに　○此かしつくむすめの事也人は浮舟と云義あり可然也
人の御心は　○かみの詞
なにか人のこと　○人にとられじとてと也
そのよもかへす　○こゝにて來りそめたり
宮の北のかたの　○中宮也
このこゝ　○文の詞也かたゞかへと也
こみやのさはかり　○中宮の心也
たいふがもと　○さぶらふ女房達也
さるやうこそは　○大輔か詞也
いとうれしと　○母の心也
御かたも　○浮舟也
宮にとはおもふ　○居所もなき故に也
この御かたさまに　○浮舟のかたに類親なきをいへりさて人のあなづる也と思故に中君に強にまいりむつぶる也
人けとをく　○匂宮の御方におかるる也
としころ　○手習の母北方の事をいへり
いとあらまほしく　○中君のさま也
つかうまつるといひし　○宮仕せしのみちかひたる也
ここには御ものいみ　○匂の御かた也
こたみは　○常陸の妻匂宮を見奉る也まへにも見し事有べし
わかまゝこの　○常陸守か子前腹六位藏人式部丞なるべし
かかる御あたりにおはする　○中宮の事也
よそにおもふ時は　○まへにいひつる詞也兼て思し事は淺ましき事と也
わかきみいだきて　○匂宮也
こ宮の　○八宮也

なてうことなき　○こゝにてはさしゐなきと云詞也
　いせ物語の心はかはれり
かれぞこのひたち　○中君に傳ふ女房達此少將を見
　ていへり
きくらんともしらて　○母北方のきくともしらで也
御心ちよろしく　○匂宮の詞也明石中宮煩しくまし
　ますはと也
女君の　○母北方のまいりぬる也
こうへの　○故北方の事をいへり
よのつねに思ひなされてみたてまつりしらずなりに
ければあるを　○母北方のわかれとはしらざる世の
　事也
なをこの御事　○大君の事也
せかれしもしたまはさらましや　○當代の二宮にて
　ましますともせき玉はじと也
いさやゝうの物　○中宮の詞也我身も六君におされ
　たり大君もながらへ玉はゞ同じやうの身なるへし
　と也
かの君は　○薫也
かのすきにし　○母北方の詞也

一もとゆへ　○ゆかりといへり
けに心くるし　○中宮の詞也
人にあなつらるる　○これはみなし子のならひと也
むげにそのかたに　○中君は宇治にたえこもるへき
　樣に父宮のゝ玉ひ置し身たにかくなりぬと也
ねびにたる　○母北方のさま也
うきしまのあはれなりし　○常陸國にあるはしだの
　うき島の事歟然れども是は奥州の守になりたる時
　のことをかたる也しかれは鹽がまのまへにうきた
　るとよめるうき島なるべし
つくは山のありさまも　○ここにて常陸の國の事を
　云と見えたり國々の事をいへり
この君を　○浮舟也
けに見ぐるし　○中君の心也
むかひておはせし　○匂宮の中君にうちむかひてお
　はせしこと也
いかはかりなる　○匂をほめたる也
かしかましきまて　○大將なれは隨身のさきをおふ
　をいへり
うちより參り　○内裏より出玉なるへし

夜への宮　○薫の詞
御あやまちに　○匂の遅参し玉へるは中君のあやまちと也
宮はうちにこもり　○草子地也
いひそめてし　○眞實におもひ玉ふやう也と也
かゝるおほん心をやむる　○戀せじとみたらし川にせしみそきの心也
かれもなべての　○薫の心也
とき〴〵心やましく　○とき〴〵のやうならば濁るへしと也
いてさらは　○薫の詞也
御のがれこと葉　○大君の中君にゆづり玉ふに似たり
みし人の　○見し人とは大君也かたしろは人形也なで物とは人がたをなでゝ我身にそへて萬つ災殃を移して流すもの也我は此大君の戀しさをこれにうつしてはらふへしと也
みそぎかは　○なで物はすつる物なれば薫の心頼難しと也身にそへ玉はじとなり
ひく手あまたに　○大ぬさの引手あまたに成ぬれは思へどえこそたのまさりけれ
つひによるせは　○大ぬさと名にこそたてれ流れても終によるせはありける物を
いとうれたき　○薫の身を觀し玉也はかなき世間にかやうの事を申て戀路にまとはさるゝよと也
かきなかさるゝ　○かやうにして中君の薫をすて玉ふと也
くらふなるも　○中君の心也
かりそめに　○浮舟の母のこと也
さらはそのまらうと　○薫の詞也此思を能ととけ玉へと也
はしたなけなる　○母君のゆるしあらはうれしかるへしと也
いとうひ〳〵しく　○薫はかやうの戀路に練習せさると也
あまのかはをわたりても　○此詞あまた所にあり
さき〴〵めのとの薫のことをいひし事を今思出て母君もけにもと思へる事也
時々　○おり〳〵見る心也然らは下の時のとの字清て讀へし

やゝ玉品　○河海に見えたり山の㒵牛頭に似たり故
曰牛頭栴檀
君はしのひて　○中君也
をもひそめつる　○薫の性を云也
このよをそむき　○尼にもなすべきといひし事也
つらきめ　○母の詞也
それもたゝ　○中宮にまかせたてまつると也
いさやきしかたの　○薫の性を云行さきの事はしり
がたしと也
いはほのなかにとも　○世を背かせんとも又誰に参
らせんとも思めぐらすべしと也
この御かたも　○浮舟也
車ひきいつる　○母北方のむかへの車也
しのひたるさまにて　○網代車など成べし若君をお
ほつかなく思ひ玉てはやく出玉へる也
なその車そ　○匂宮とはせ玉へる歟
とのこそ　○常陸殿と殿の字を加ていふをいへり
くるまそひなと　○ゐ中ひあら〳〵しきと也
きゝにくゝかたはらいたしと　○中君也
たいふ　○侍ふ人也

なきなはたてゝ　○庭訓云たてゝは清也云々猶可尋
之「思はんとたのめし事もある物をなき名はたて
ゝたゞにわすれね
あくるも　○匂のこなたにてあかし玉へる也
御ゆする　○髪をあらふ事也
けにをはしきぬ　○大夫か申也
九十月　○なか月神無月とよむ也昔は髪をあらふに
も月日を撰ひたる也
いまわたらせ給なんと　○中君御ゆするの方より歸
らせ玉と云也
ひやうふのふくろ　○むかしは如レ此と云々
かく人のものし給へは　○常にはこゝは道にてもな
きを只今浮舟をすませ玉とて障子一まあきたる也
見たまへこうして　○久しくまもりゐたる也
れいの心うき　○中の君の詞也
少將とふたり　○右近とふたり也
心なきをり　○たはぶれにいへり眞實に云に非す
たれかまいりたる
なかつかさの君　○匂の兄弟也
大夫は　○中宮の大夫也

おそろしき ○浮舟の心也
かまのさう ○降魔の相也
かのとのには ○常陸守か宿所也
まらうとの ○右近少將也
御たびゐ ○母上よそにある事也
すべてこの少將の君ぞ ○此少將のこと故夫妻のい
　さかひも出來ぬると云也
きみは ○浮舟也中君のいかにおほすらんとなけく
　也
なにかゝく ○めのとのなくさめていへる也
はつせのくわんおん ○長谷寺の利生をいへり或は
　成就不成就をいへり玉かづらは利生成就此浮舟は
　思やうにもあらざる也此理を知せんため也
みやはいそきて ○匂宮參內あり
うちちかき ○內裏へまいり玉へるに此御方の御門
　近き故と也うらの門の事なるべし
うつしむま ○うつしの鞍をける馬也
うへいとおしく ○中君より浮舟の方へ人を參らせ
　玉へるなり
みたり心の ○浮舟の返事也

たゝなるよりは ○草子地也
いとくちをしく ○中君の心也
かくのみみだり ○匂の性をいへり
この君は ○薫の性をいへり云は出給はで下の心に
　恨のあるをいへり
あひなくおもふこと ○薫の人になくておはせは此
　事苦しき事と也
にくきこゝろ ○薫也
これにおほしつきなは ○匂の心をとゞめ玉はゝと也
物かたりいとなつかしく ○中君の物語也
むかしの御心さし ○大君の中君を思しやうにと也
さしころ ○浮舟の詞
夜への心しり ○右近少將など也中君のかくらうた
　けにし玉ふとも匂はたゝにおほしめしはすつまし
　きと也いみしくおほすともとは中君浮舟のことを
　念比におほすとも匂の御心の移りなは甲斐なかる
　へしと也
もてはなれて ○實事はなきよしを深くいひしと也
あひてもあはぬ ○まへによしあるふるごともす
　し玉ふとありし也一歐程もなくて明ぬる夏の夜は

あひてもあはぬ心ちこそすれ
いさやことさらにもや　○わざとつくりての玉事も有へしと也
ことありかほにも　○かくさま〴〵にとりあつかひたる也
さうしみも　○中君也
あやしく心おさなけなる　○母の詞也
いたちの侍らん　○花鳥の説いかゝいたちは狐の性の類也狐は狐疑とて物をつよく疑心のある物也其如くにいたちも疑心のあるもの也うしろやすくは思へども疑しき心のあると也いたちのまかげなど云も疑心のある故也
よからぬものども　○母のこなたへまいりてあひそひて侍ひたき心のあれともさもえし侍らざる也よからぬ物ともとは常陸守かたのもの也
いとさいふはかり　○中君の詞
まかけこそ　○いたちと云詞をうけてまかけとはいへり疑しき心をいへり
心のたにゝ　○母の心也
かくてさふらひ　○母の詞

ふかき山の　○まへに山里にすませんとのあらましせし事也みさをとは不變なると也
こゝになにごとか　○中宮の詞
けしからすだちてよからぬ人の　○匂宮の御事也
その心をみな人　○さやうのかたも皆心かひせば苦しかるまじと也
さらに御心とは　○母の詞也
かたはらいたう　○浮舟は故宮の御子にてはなきと云放ち給へば其かたははなれたると也
おほしはなつましき　○浮舟の母と中君の母とはめいをはなるをいへり
この御ゆかりは心うしと　○故宮の御子にてなき由を云放玉へばうとみはつべきあたりなれと浮舟の爲を思ひてむつびよりぬれば又かくむつかしき事の出來ぬると也
ことやうなりとも　○人々しき所にてはなけれともと也
心ちなくなとは　○母の性をいへり
かのいゑにも　○常陸か家也
この人により　○少將ゆへ也

かの宮の御前にて入けなく　○匂の御所にて此少將
　を見しに人氣無りし事也さて浮舟のむこに取へき
　の心は思さませると也
いざみしやうに　○こゝにては人物もあるやう也
こと少將なりけり　○こゝにては別の少將かと思を
　りふし也
兵部卿の宮　○匂の御所にて見し時のことを云也
ことだにをしき　○うつろはんことだにをしき秋萩
　におれるばかりもおける露哉
いてきえ　○匂の御まへにてのこと也
こゝろみに　○匂の方より歌をよみてやれり
しめゆひ　○浮舟にこそさして約束せし物をと也し
　めゆふとは領じたる也いもうとに心うつるをいへ
　り
いとをしく　○少將の心也
宮きのゝ　○浮舟を故八宮の御子と知たらば思ひう
　つるまじき物をと也
こ宮の御こと　○排の心也さては八宮の御子と云こ
　とを聞たること也
あいなう　○あぢきなうと云心也あやしうなど云心
　也
いたけれ　○いたましき也
わかき人　○浮舟也
わかものにせんと　○此少將の事也これを我物にせ
　んと思ひしも口惜き事と也
思つゞくるにいとかたし　○薫にと思心は成就しか
　たしと也
やんごとなき　○薫は當代の二宮を得玉へる人なれ
　は也
世の人のありさま　○公柔をいへり人の品々あるを
　云也
たひのやどりは　○三條の家也
あやにくたち　○匂宮也
はゝきみたつやさ　○やさ屋戸と云説ありと云々難
　用之了簡にはやさ疑たる心也はゝきみたつやさは
　此母君萬づを卑下してあれど今は本の母になりて
　おやたちて文を書と也
おろかならず　○浮舟の心也ともかくにも不運也
　かく念比にし玉へごもと也
いかにつれ〳〵　○母の文の詞

つれ〳〵は　○浮舟の返事也
ひたふるに　○こゝをも一向に浮世の外と思ひたき
と也
うき世には　○いかなる所を求めても浮舟を能もて
なすやうもあらば我身はいかにもとよめりあはれ
にある歌也
なほ〳〵しきこと　○思ふ所をありのまゝによめる
なほ〳〵しとはいへり歌をよむべき用意にかけ
る也かやうにかける所あまたあり歌をはいかにも
沈吟すべしと也
ものわすれ　○大君のこと也
いたうもことそかす　○故宮の御時省略せられし事
さら此たびはくはへられたる也
たえはてぬ　○故宮の事也
かの人は　○薫の詞也浮舟の事を傳へ玉へと也
ひとひかのはゝきみの　○辨が詞也
人々のがくおそろ　○薫の詞也
なにはかり　○大君の契也
さらはその心やすからん　○薫の詞也
みつからやは　○辨は出京はせざるかと也

おほせことを　○辨が詞也
なとてかともかくも　○薫の詞也
あたごのひじり　○河海は空也上人の事を引花鳥に
は柿本の僧正のことをひけり何れにても有べし心
は利生方便のためには山ごもりの人も出る事のあ
ると也
人わたすこと　○辨か詞也
れいならず　○薫はかく物をしゐての玉ふ事なき人
と也
あふなく　○奥もなく也
いがたうめ　○伊賀たうめ也國々にある也たうめと
は狐の名也と云々諸抄に見えたりこゝの心は媒を
云也媒の物を云は狐の人をばかすが如し
ふみはやすかるへき　○薫の詞也
人のものいひ　○薫の性の奇特也此巻の發端につく
ば山をわけ見まほしき心は有ながらとかけるも此
心也かんのぬしは常陸の守をいへり
うちわらひて　○辨也
宮に御覧　○女二宮也薫の室家也
かひなからず　○かひなきやうにはおほせねともい

またなれ〳〵敷はし玉はさる也
又道の宮　○女三宮也
宮づかへにすへて　○女二宮を方々よりおもくし玉
ふへき由なれは煩はしき心を宮づかへとはいへり
のたまひしまたつとめて　○あさてはかりとの玉ひ
し日の早々より宇治へつかはし玉へり
さうのものとも　○御庄也
つけよとの給　○付よと也
かならすいづべく　○必辨に出京せよと也
あはれに人しれす　○辨か詞也
かの宮にたに　○匂宮へ也
よひうちすつる　○宇治よりといはせ玉へり
さぐちに　○辨也
かうなりけりと　○薫也とたれもしりたる也
心やすき　○月頃の心の程をもいはんと也
君にくるしけに　○君とは浮舟也
かのとのに　○母の御方にと也
うひ〳〵しく　○辨か詞也
やかの　○家也
さのゝわたりに　○わりなくもふりくる雨かみわか
崎さゝのわたりに家もあらなくに
さとびたる　○説々あれども只山里ひたるかりそめ
なるすのこなるべし
さしとむる　○久しくまたせ奉るはもしへだつる人
もある歟と也われたちぬれぬと云る催馬楽の心も
ある也「あづまやのまやのあまりの雨そゝぎわれ
たちぬれぬ此戸ひらかせ
ひだのたくみ　○やり戸のへたてをいへり
かの人かたのねかひ　○大君のかたみになさとゝはの
玉ひまじき也初めて逢玉へば也人の推したる趣をい
へる事なれば語ひ玉ふべきとかける尤妙也
おにのやうなる　○道のかたはらなどにて見玉事の
あるなるべし
よもきのまろね　○説々あり只蓬生の宿にねたる義
を用へし
いりてふしなどする　○夜行せし人などはあけぬれ
ば入てやすむ也
九月にも　○嫁娶には忌の月也
まだきこのことを　○中君にははやくきかすまじき
と也
わかき人は　○侍従也

うすものゝほそなか　○昔は男女同車の時かくする
　也浮舟と薫と同車の内に鈎あるは此用也
君も見る人は　○薫也見る人は浮舟也
おとしかけ　○たかみよりひきゝ所へくだるさま也
かたみぞと　○大君のかたみと也
心にもあらず　○今はいひ出し給はずともの事と也
わかき人　○侍従也
あまたの年比　○薫浮舟にいひきかせ玉ふ也
さしかくし　○扇也
いとよく　○大君に似たり
こめいたる　○大君の事也
むなしきそらに　○わか戀はむなしき空にみちぬら
　し思やれとも行方のなき
たれにより　○大君故と也
おりては　○下車也浮舟すこし打やすめ玉ふべきの
　心しらひをし玉ふ也
あまきみは　○尼にては無けれど尼姿を憚たる也
わざとおもふべき　○薫の心也こゝはかりなる所な
　ればくるしからざる物をと也始終浮舟をおくべき
　所と思へる歟と也

みちはしげかり　○此程の小家の目移なれは也
うきてあやしう　○浮舟の心也
むかしのいさなえはみたりし　○大君也
宮の御くし　○女二宮也
かの宮にむかへ　○女三宮の御かたに也
たゝいとつゝましけにて　○此つゝましげなるさま
　はをしへても見るへしと也
むかしたれも〳〵　○浮舟に薫のの玉也八宮も大君
　もまします時ならはと也
あはれわかつまと　○和琴也あつまにておひたち玉
　へは也
やまとことは　○和琴なれば也よき返答也大和詞は
　歌の事也
こゝにをきて　○薫の心也
楚王のたいのうへ　○班女閨中秋扇色　楚王臺上夜
　琴聲
かのゆみのみひく　○あつまなれば也
さるはあふぎの　○白扇なごより思よりてうたひ玉
　也
こゝこそあれ　○薫の此句をうたひ出して後悔ある

也浮舟前表さま〴〵あしき事ある其一也
やとり木は　○大君にてはなけれともと也薫のとまり玉へは昔の心の出來ぬると也
さとのなも　○宇治也むかしの人はあらはやと也
とぞ　○例の作者の詞る也

浮舟　巻名以歌號之薫廿六の歳の正月より三月の末までの事也
宮はかのほのかなりし　○ほのかに語らひ玉し行末をおぼす也
こと〳〵しき　○浮舟のさま也
女君をもかうはかなき事ゆへ　○誰人とたしかにの玉はざるを宮の恨めしく思玉かと也嫉妬の心よりあなかちにかくし玉かと也
おもはずに　○中君の心也
やんごとなききさま　○薫の浮舟をすへおき玉ふ心をいへり
さてきゝすぐし給　○宮の御心をいへり
いつかたざまにも　○何れにも匂宮へ尋玉ひつへき事をいとをしくと也
ふさくへき　○中宮の我身のふせくべき事にはあらずと也
わかおこたり　○嫉妬の故とおぼすばかりはくるしからざる也
ことさまには　○中宮の心殊勝也よのつねの人ならば虚言をいひても我身のまへをばはらすへきを虚

言をいへるはしななき事と思て我おこたりになし
て居玉へり
かの人は　○薫也たとしへなくはたとへなく也
かやすくかよひ給べき　○よく心をとりおさめ玉へ
り殊勝也
神のいさむる　○わりなき心をいへり「戀しくは來
ても見よかしちはやふる神のいさむる道ならなく
に
されどいとよく　○薫の心に終には能すへしと遠慮
を回して思ひ玉へり
しばしは人の　○人を訓釈していへり
又宮の御方　○中宮をいへり假に浮舟に思うつりぬ
るよと思玉べき所をいへり
れいのこと　○草子地也
わたすへき所　○三條宮ちかき所也
すこしいさまなき　○薫は官位も高くなり玉へは家
中も隙なき樣なれど中君への心づかひは昔にかは
らざる也舊識をわすれさる殊勝の事也
見たてまつる人も　○昔の事を知さる人は見とがむ
るまで思へること也

世中をやう／＼　○中君世を思しり玉ては薫のめく
み大切に思なり玉へり
ねびまさり　○薫のさまをいへり中君の心也匂宮あ
まりに色々しくて頼しげなき時は昔大君の我身を
薫にゆづり玉し物をさやうならましかばと今は思
玉と也
とし月も　○侍ふ人々也宇治にてよりのむつびを知
さる人はと也
つき／＼しけれ　○此けれと云にて讀きりて心得へ
し皆侍ふ人々の詞也
中々かう　○中君の心也
む月のついたち　○薫廿六の正月也初てわたり玉ふ
と見えたり
つゝみぶみ　○花鳥説可然つゝみ文は浮舟の文也た
て文は右近が文なるべし
れいの御まへにて　○何れも宇治よりの文は御前に
て見玉程にといへり
このこは　○此わらはのめてゝ云也
たいふがり　○たいふにやれとなりがりはもとにと
也

さすがにそれならん　○もし大將のならばあまりに
あて〳〵しかるべしと思玉て也
おほつかなくて　○浮舟の文の詞也
山さとのいぶせさ　○物思ひの絶せざるをいへり
たはえなきを　○しらざる事と也
さしあらたまりて　○右近か文也
こゝにはいとめでたき　○宇治のすまひふさはしからずと也
つゝましくおそろしさ　○匂宮のむつかしきと也
うつち　○卯杖同じ事也年中の悪鬼を追也糸所より内裏には奉るもの也
おほき御まへ　○匂宮をいへり
いまはの給へかし　○匂宮の詞也
かの山さとに　○宇治也
おしなへてつかう　○匂の心也只宮仕人のつらとは見へざる文かきのさまと也
かのわづらはしき　○此詞にて思あはせ玉へり
またふりぬ　○いまだ手にもふれざると云心也堀川院百首俊頼卿歌にさらしゐの木の下陰に雪ふれは衣手さむし蝉はなけともといへる此心行ふるゝ也

若君の御ためにと也行末の千世をも待と也松によそへたりと云々
かくは給へき　○大將の文かとこそ思へしと也
少將　○中君の女房達也
をさなき人の　○まへにちいさきわらはのとりつぎたるをいへり
見たまへましかは　○さふらふ人のいふ也
あなかま　○中將の制止玉ふ也
このふゆ　○此わらはの事をいへり
わか御かたに　○匂宮也
大内記なる人の　○式部大輔と見ゆみちさだとなのる者也
かのとのに　○薫のかたに也
右大將の　○薫の事を問玉ふ也
いとうれしくも　○匂の心也たしかには聞さるよと問玉也
かしこにもとよりある　○此事を治定せんとてかく匂のわさとの玉也
あまはらうになん　○内記か詞也
をかしき事かな　○匂の御心也

左のおとゝ　○夕霧也
くせある　○匂の事をあざけりての玉也
この人は　○内記か旅姓をいへり
御心のうちには　○匂の心也前に此宮にて見玉ひし人かと見定めばやとおぼす也
このわたりには　○中君にしたしきはいかなる事にかと也
つかさめし　○親王は巡給にあづかりて人をこそすゝめ玉ふ事はあれ我身の昇進などには心をもかけ玉はざると也
この内記は　○除目の時分なれは我身の昇進の執奏をたのみ奉れるをりふし也
かしこまりて　○領狀申也
さかし　○匂の詞
やゝましけれは　○心やましきと也
いつしかはいかならん　○かくしても行あはではと也
我もさすかに　○内記也
これかかはまづかのほかけ　○二條院にて見玉ひし人と也
たいの御かた　○中君の事也
ものをるとて　○物を縫とておりめをつくる也
とみにしもえかへりわたらせ　○浮舟の母石山へ具してあすまうでんとせし夜也
をりしもはひかくれ　○薫の自然御出ありたるに出ちがひ玉ひてはと也
又あるは時しはし　○今京にけ出玉事は然るべからず薫の京にむかへ玉て後こそ能るへけれと也かく人々さまぐ〵にいへり
てのおとゞのいときうに　○此母の心也急なる人と也此母のとまゝかいひなしに此物まうてをいそきたると也
このまゝ　○まゝはめのとの名也此めのとを京へ出したるによりてこのさかしらをいひて母をもいひすゝめたる也こゝにとゝめて置へき物をと也
げににくき物　○匂のかの宮にての事を思あはせ玉也
宮のうへ　○中君也
かゝるさかしら　○中君には母もめのともなくてひとり立身し玉也か様のさかしらのなきしも中君の

幸と也
とのたにまめやかに　○薫たにも念比にし玉はゝと
也
君すこし　○浮舟也
なにはかりの　○匂の御心也しそくは親族也
かれは　○中君也
らうたけに　○なつかしき所のある也
ものへゆくへき　○よそへ行へきと見えたり
あてなるしはふき　○上らうしきを云也
あやしうおほえなき　○右近か詞也
ものへわたり　○匂宮薫のまねをしてかくの玉へり
なかのふ　○大蔵大輔仲信也系圖に見えたり大内記
道定かしうと也薫の家司也
道にていとわりなく　○盗なとにあひたると云心也
御ともの人なと　○薫の御ともの人はいつも辨尼の
方に行てある也こゝにはしらさる也
かゝる御ありさまを　○今夜の御出は深切なる御志
といへり
なに事もいけるかきり　○戀しなん後は何せんいけ
る身の為こそ人は見まくほしけれ

ときかた　○匂の家司也
いとあさましく　○右近か心也こゝにて初て匂宮と
はしれり
あやしかり　○かねて見玉し事也
けふ御むかへ　○右近こゝのありさまを委く申きか
せ奉る也母の物まうてせさせんとてむかへの來た
りたるへきと也
およすけても　○匂の心也
我は月ころ　○匂の詞也
御返りには　○母の方への返答をもをしへ玉也
なめけなることを　○おこしていへる也
時かたとおほせし　○右近が御ともの人の中にて時
方を尋たる也
さなんとつとふる　○そはなる人のをしへたる也
かうかへ給　○さまにかこちしかはにけてもゆ
かんと也かうかへは勘當也
とのは　○薫なりといひなしておく也
いし山に　○まへの物へゆかんといへるは石山の事
と[illegible]していへり
ゆめみさはかしかりつと　○夢みあしきとて物忌な

とかきて母君のみつからわたり玉ともけふはよせ
侍ましと也
御てうつ　〇浮舟に時膳をし玉へと右近が申詞也
浮舟の時膳し玉はゝとの玉也
心にくき人　〇薫也
時のまも見ざらん　〇匂の事也
しらぬを返々　〇浮舟の名のりをゆかしく思玉也
むかへの人　〇母の方よりのむかへ也
夜へよりけかれ　〇月のさはりのいてきぬると云な
したる也
大との丶君には　〇夕霧の六の君にはおとりぬへき
を只今は類なく思玉ふと也
女は　〇匂をたくひなしと見奉る也
すゝりひきよせて　〇匂宮也
なかきよを
つらかり　〇二條院にての心也
心をは　〇命を思へは心をは云ましき事と也たゝあ
すしらぬ命とあるをうけていへり
かはらんをは　〇匂の心也
えいはぬ事を　〇浮舟のうらみたる也

よさり京へ　〇太夫也出雲權守時方也
きさいの宮より　〇時方か詞也
ひんかし山に　〇時方かやうに申つると申也
けんそう　〇見所の人也かたはらの人迄と也
ひしりのなを　〇右近か詞也
いかてならはせ　〇かやうの御ありきはいかてなら
はせ玉そと也
いとかたしけなけれは　〇かねて知せ玉はゝよきや
うにたはかりてまし物をと也かたしけなけれはと
は宮を敬ひたる心也
まいりてさなんと　〇右近匂の御まへにまゐりて也
よのたとひに　〇世のならひ我身のとかをはおきて
人のあやまちにいひなす事のある也
まちとをなる　〇薫の我打捨をく事をはいはて浮舟
の身にかゝる事のあるとかこち玉へき事也
五位二人　〇大内記と時方と也
心ちこそ　〇匂の詞也
人のほいは　〇只今浮舟にあひ玉事にて思しり玉へ
り中君薫の事のうたかはしきと也
かくきゝにくき　〇中君の詞也大將の聞玉こはと也
へたて給御心に　〇浮舟の事をあかし給はさる事也

まめやかなる ○中君の心也薫との事人の虚言ある
へしと也
ものはかなき ○式々の嫁娶の義はなくて薫のとり
もち玉ひし事かと也
かの人 ○匂は浮舟を見つけ玉てかくし玉へるをさ
まく\にの玉をも中君はしり玉はてあへしらひ玉
也
ありやなしやを ○匂宮に薫の事の實否を聞へけん
事をたしかにきかてははつかしと也
昨日のおほつかなき ○大宮よりの御使の詞也
ひさしうも ○二日三日のへたてをも中君の御心に
久しと也
なやましけに ○薫の詞也
宮にも ○中君也
みるからに ○匂の御心也
れいはさしも ○草子地也
いさくるしけに ○薫の詞也
はつかしけなる ○匂の御心也
御文には ○匂の文也
たいふのすさ ○從者也

右近かふるく ○右近か料簡也右近かしる人の薫の
御供にて來しと也さらかへりて我にものいふこと
也
月もたちぬ ○正月もすぐる也
我はさしごろ ○浮舟の心の中也此比匂宮は御心ち
ま寄と玉と聞しは深く契り玉し事なきを思出るに
今かく大將のてゝへわたり玉へるをさこそは御心
にかゝりておほすらんと也
この人はた ○薫の躰也
こよなくまさり ○匂宮よりはまさりたり
おもはすなる ○匂宮の御事也
あやしう ○匂の事也
つくらする ○京へわたさんと也浮舟物思へるさま
なるを慰めていへる也
こゝよりは ○宇治の宮は川ちかき所なれは也
かの人の ○匂も京へうつすへしと也
御心はへのかゝらて ○かく物おもひしみたるさま
を見て薫のなくさめての玉也
ついたちころのゆふつくよ ○説々あれと無用也只
上旬の月なるへし藤裏葉の卷にもあり

かきゝき　○覚ゝ見へたりかきゝきといへる詞優なるにつきていへるなるへし
いさかゝらぬ　○おり〳〵の事もわすれかたきと也
みやこなれゆく　○浮舟のさま也
うちはし　○くちすましと也
たえまのみ　○とにもかくにも絶間あれはあやしうと也
いとようも　○薫の心也
すゝろなる　○草子地也
大將人にものゝたまはん　○匂宮の御とのゐ所より出玉し也
衣かたしき　○浮舟の事をおもへる也
ことしもこそあれ　○匂の聞とかめ玉也薫も大方には思給はさるよと也
ふみたてまつり給はん　○先夜題を賜りて明朝詩を奉り玉ふと見えたり
かの君も　○薫也
おなし程にていまふたつみつ　○此年の事不審也匂宮は若菜の巻に誕生あり薫は次の年の柏木巻に誕生然るを二三歳の兄といへるいかゝ案レ之匂宮はあた〳〵しき方の人なれはわさとわかくかきなせる歟是作物語のさま也荘子には時代相違の人をも相對してかける其類なるへし
さえなとも　○政道の方なるへし
いかなる心ちにて　○匂宮をりふしいかにしてかかゝる詩をも作り出しけんと也
かの人の御けしき　○薫也衣かたしきなといひてさらにおろそかに思とは見へさると也
いつかたも〳〵　○内記も式部少輔も皆儀式官とてこと〳〵しき官也
むつましく　○侍從也
ちいさき舟にのりて　○橋にても行へき道にやされと舟にては猶艶なるさまにかけるにや
あり明の月すみ　○此詞にて見れは文つくり玉しは二月十日の程也こゝは有明の時分なれは程をへたる也此雪のさま衣片しきなといひし時の雪に似たりさてやかての事の樣に見へたれと其間程をへたるなるへし
かれ見たまへ　○匂の詞也ついに霜雪にもうつるましきと也

めつらしからむ　○女の身にはかやうの事はめつらしと也
たちはなの　○此うきふねの巻の名たり
たすけられつゝ　○匂の抱玉て又人にたすけられ玉ふ也
かろらかなる　○狩衣也
これさへ　○右近か外にしる人をはゝかりたる也
いとめてたうと　○侍従か心也
いとおそろしう　○時方かく下知する也
かの人の　○一日大将にもかく打とけてむかひ玉しかとかへりてねたけにおほす也
二宮を　○薫か事也
かのみゝとゞめたまひ　○草子地也衣かたしきと薫のすんし玉し事也
いみしくかしつかるめる　○時方を此宿もりはしうと思てかしつくを宮はおかしとおほえかくたはふれての玉ふ也　又云匂のわれこそまらうとの主との玉てさやうにせは人も知へし慇懃は無用と也
山はかゞみを　○あけまきにもあり面白き詞見る體也

ふりみたれ　○浮舟の歌也
このなかそらを　○一かたならぬを匂の恨み玉也
こきゝぬ　○紫のきぬ也
しひら　○裳也
ひめみやに　○女一宮也
御ふみたに　○浮舟への文也人しけき故也
むすめのこうむ　○此程めのとは留守なりし今かへりたる也
我心にも　○浮舟也
おほしたえて　○匂の御出あらん様もなしと也
おやのかふこ　○いもにあはすての心也
なかめやる　○雨の中を思やりて見るへし
ことにいとおもく　○匂宮にこそ心はひくへけれと也
はしめより　○薫也
心いられし　○匂也
かのうへのおほさん　○たとひ寵ありとも也
あやしかりし　○かくれなき世也けれはと云ふて中君の所也彼二條にてほのかに見玉し行末をたにも殊に尋玉ひし御心なれは薫の京にすへ玉とてもお

ほしめしやむとは有ましきと也
わか心にも　○我身も匂の事をはわするましきと也
かの人も　○薫也
言葉おほかりつる　○匂の文也
なをうつりにけりと　○匂に思ひうつりぬるにやと
異本な也
ことはりそかし　○侍従か詞也
心ひとつに　○侍従ともろともにいひかはせる事也
いひなから　○薫の文の詞
水まさる　○宇治のわたりをいへり
まつかれを　○匂へのをいそく也
里の名を　○里の名とは宇治をいへり喜撰か歌より出たりいとゞといへる字妙也里の名と云てうきは見へたるを又重てうきといへる感ある事也此歌新拾遺題しらす紫式部とあり
のかき給へり　○男女をかき給へし繪也
くらし　○あま雲は雨雲天雲雨説とも用之雲は行末なき物也さやうに我身をもなしたきと也
ましりなは　○花鳥の引歌雲にはよく叶へり河海引歌はつるには身をなけんなと云心あれは浮舟の心に能叶へり二首共に用之
まめ人は　○薫也
つれ／＼と　○薫への返歌也
女宮に　○女二宮也
いかなる事に　○上臈しき御返答也
いとゞおほし　○匂宮也
この月つこもり　○三月也除目すきて任に赴くなるへし
さそふ水あらはと　○薫の方へしかと行へき人なれはさそふ水あらはといはん人にてはなしと也
けしからぬこと　○匂よりむかへ給はん事はいとあるましき事と也
あやにくにの給人　○匂の御心にては何くまても尋玉ふへしと也
けふもの玉へる　○匂より今日文のある由はたしかになけれと定てあるへし
なとかくれいならす　○侍の詞
あやしき事かな　○自然懐妊なとかと思へとゝ也
いし山も　○懐妊には有へからす月のさはりとて石山にも参り玉はされはと也

有明のそら　○橘のこしまの時の事を思玉也
おはしまさましかは　○辨の言也故姫宮のおはしま
　さましかはと也
思ひすめは　○母の心也浮舟も同し事と思也
こゝにまいる　○京に浮舟の出玉はゝ殊更にこゝに
　まいる事はありかたしと也
ゆゝしき　○辨か詞也
おも／＼しくおはします　○薫の事也よくそ嫁申せ
　しと也
のちはしらねと　○母の詞也
この宮の　○匂宮の事也
さるすちの　○中君にはゝかる心也
あなむくつけや　○母の心也女二宮ををき奉りなか
らかく我むすめをさしいたす事はおほけなき事と
也されともこれはかけはなれたる事なれは心やす
しと也
よからぬ事を　○匂宮の御方へよりたる事はいさゝ
　かもわつらはしと也
いとゝ心きもゝ　○浮舟の心也
年月をすこし　○辨尼かゝる處に年月を過しける
をあはれみたる心したりかほ也と云義ありいかゝ
只是は我むすめを久しくこゝに薫の打捨てをき玉
ひし事を母のいへる成へし年月と云によりて前の
義あれと只久しくといはんために年月といふなる
へし
さいつ比　○おそろしき所といへり花鳥に見えたり
みたらし川に　○匂の事故と也
人すくなゝめり　○京へわたさんにつけて人すくな
　にてはと也人からをもえらふへきと也
やんことなき　○女二宮の御わたりをいへり
かしこに　○少將のめの子うむ也
いと物おもはしく　○浮舟也
心ものあやしう　○浮舟の詞也母の方へ行たきと也
さなん　○母の詞也
この人々も　○京へ出玉ふ營みをも母の方にては人
　々もしあへ難きと也
たけふのこう　○催馬楽道口の歌也いつくにおはし
　ますともまいるへしと也
なを／＼しき　○身の數ならさる也
みつからとおもひ　○文詞也

宮は昨日の御かへり　○文ありし成へし昨のこゝに
ありし故に返事をし玉はれなるへし
風のなひかん　○一方にさたまり玉へきと也
あめふり　○まへのと同使也
少輔　○大内記也
まことはこのかうのきみ　○時方也出雲守のつかひ
と也
かと〱しき　○此隨身也
左衛門の大夫　○時方也左衛門の大夫にて出雲守を
兼たる也ふるき本にあやまりあり花鳥も時方か宗
ぬしとあり古來よりまちかひたる事なれとわづら
ひなき事也
とのにまいりて　○六條院より薫の出玉ふ處也
この人の　○文とりつく人也
とのもしかみしり　○子細ありと推し玉也
宮れいならす　○明石の中宮也
内記は　○政官にて詔書勅書宣命なとの事にいとま
なく又式部少輔なれは公務にひまなきゆへに遲參
する也
この御文　○宇治よりの返事也

たいけん所　○六條院の中宮なるへし明石中宮おは
します方の臺盤所なるへし
御まへのかたより　○中宮の御前也
さうしより　○曹司と云義あれと障子用レ之
おとゝも　○夕霧也
御ひもさし給　○うちとけたるさまを引つくろひた
る也
まかて侍ぬへし　○夕霧の詞也
あなたにわたり　○夕霧の方也
このとのは　○薫也三條まてなれはおくれ玉へり
ひともす程　○火なとともす間にと也
君あやし　○薫也
たいの御かた　○中君の事也
心の内のくまあらん　○論語顏淵篇内省不疚と云り
この宮の御具にて　○浮舟は匂宮の御具にて然るへ
しと也
やむことなく　○本臺なとゝせんにこそきすとも思
へけれと也
一品の宮　○宮つかふ人のつらにてあるへしと也
さて出たちたらん　○さやうにて一品の宮に宮つか

へに出立たるをきゝてはいとをしかるへしと也
けしきみまほしくて　○やうたいを見んとて也
みちさたの朝臣　○薫の詞也なかのふは薫の家司也
みちさたもおもひかくらん　○わさとまきらはしに
かくいひ玉へり道定は内記か事也
浪こゆる　○我をこそ待らんと思しにおこがましき
事と也
人にわらはせ　○宮をさしていへり
見給て　○薫の與ありてしたると思ひ玉也
つゐにわか身は　○浮舟の心也
よからすの　○草子地也文なとあけて見る事也よか
らすのわさやと也
この人々　○侍従右近也
右近かあねのひたち　○右近常陸につきてくたりし
時の事なるへし
ほと〳〵につけて　○上も下もかゝる事ありと也
まゝもいまに　○浮舟のめのとの親類也
さはかりうへの　○うへとは母を云也
いまひとり　○侍従也
ありし夜の　○ひとひの御ありきもあやうかりしと
也
たゝ夢のやうに　○匂宮の躰を云也
かくおほしめして　○右近也
かのありし返事を　○返事かへされし後也
とのにめし侍しかは　○内舎人か申詞也
さのことき　○さやうの事と也ひしやうは非常也
ふくろふの　○右近か心に梟をおそろしき物にして
かくいへり此内舎人か夢をいへり
こけのみたるゝ　○いつかはあふへきと也「君にあ
はんその日はいつそ松の木の苔のみたれて物をこ
そ思へ
むかしはけさうする　○花鳥に萬葉十六巻をひけり
身をなけたるは櫻児也又大和物語にはをとめつか
の事に略説をくはへたりこれも萬葉に見へたる事
也
このめき　○おほやうにけたかき方は浮舟になしと也
おすかるへき　○あつまの方にて生長せし人なれは
心うけなけなると也身を投へきの事也
かみつかひ　○料紙也うすやうなとの事也
なにかむつかしく　○浮舟也

はつかあまり　○三月の廿日也
かの家のあるし　○まへ〳〵に匂宮京へ渡すへきとて用意し玉へるめのとの夫の家の事也
さてあるましき　○浮舟也
ちいさき御身ひとつ　○右近か心に浮舟は匂の御方へ心のひくと見てかくいへり
かくのみいふ　○浮舟の詞也
あしかきのかたを　○内々の方也
こよひはふよう　○今夜は中々かへり玉へと也
かと〳〵しき人　○時方也
いかなるにか　○侍従か詞也
やかてさも御心つかひ　○今夜はいかにもひんなし此度わたらせ玉はん時かねて案内をうけ玉てかまへ心みるへしと申也
たいふ　○時方也
いさなふ　○侍従をさそひたる也
さとひたる　○犬の聲のさときと云義あり但山里ひたると云義可然也
あふりといふ　○河内本むかはきとあり
わか御こゝち　○匂宮也

かゝるみち　○好色のみちにと也
あたおにゝ　○いかなる怨敵鬼神なりともと也あたを鬼にと云本あり是猶可然歟心は鬼神はさして我身にとりてあたをなさんの心なきもあるへし我に怨敵の心のある上にて鬼神のかたちありともと也
たゝひと事　○匂の詞
やかてさおほしめさん日をかねてちるましきさまにさやうならん日を兼日にいひちらさぬやうにと云也
身をすてゝも　○侍従か我身をすてゝもと也
火あやしう　○夜行の云也
いつくにか
右近はいひきり　○右近は叶ふましき由を申せし由をいへると也
いりきて　○右近は申きりたるを侍従又申也
あやしからんまみ　○終夜涙にあかしたるまみを恥たる也
おひうちかけ　○かけ帯なるへし
かの心のとかなる　○薫の事也さま〳〵に思出玉也
うきさまに　○なきのちにさま〳〵きかれん事の口

惜きと也
心あさく　○死後の名はくるしからすと也
なけきわひ　○名の殘らん事の口惜きと也
みやはいみしき　○匂宮よりの文也
からをたに　○入水の心あり
いむといふ事　○河海に見えたり
とき〳〵たちよらせ　○薫の方よりの事也
かきりとおもふ　○浮舟の心也
のちにまた　○今生にては逢まし來生を期すると也
　おもてはさはなく見へたる歌也
ものゝ枝に　○誦經の枝なるへし
心はしり　○むなさはきのする也
くるしときゝ　○浮舟の心也入水の心あれは也
さかしかるめれと　○めのとのさまのさかしくあつ
　かひ聞ゆれと我身なくなりなはいかゝならんすら
　んと老たるを見てあはれと思玉也

細流巻十五　早蕨　宿木

早蕨　巻名以歌并詞號之但詞にはわらひとはかり
　あるなり薫廿四歳角總の次の年の春也
やふしわかねは　○日の光やふしわかねはいそのか
　みふりにし里も花は咲きけり中君の心の中なり春
　は無邊の光あり去年あね君にわかれて時節のおし
　うつるをも知らさりしに春はかはらさるを云へり
もとするゑをとりて　○歌なとの事なるへし上句を云
　ひ出し玉へは下句を續下句には上句をつきなと互
　に兄弟し玉し事なり又何事をもいひあはせ玉を云
　り
心ひとつをくたきて　○又云ひあはせん人もなきと
　なり
宮のおはします　○八宮なり
よにとまるへき　○世間の無常をかけり我も死ぬへ
　く思へとも心に叶はす又大君は惜むにもかひなし
　となり
としあらたまりては　○文の大涯詞なり
てはいとあしく　○手跡なり

ひきはなちて　○大略文にかきまする歌はそのきはを見せす詞に書つゝくるなるを是は歌をは引放て歌とたしかに見せて書る法師の沙汰おもしろし
君にこて　○故八宮の御時の嘉例を忘れさるこ也
大事　○中君の心なり阿闍梨此歌を一大事こ思てこそ案し玉つらめとなり
なをさりにさしもおほさぬ　○匂宮の御文よりは心もとまるとなり
この春は　○此歌巻の名たり八宮大君なともましまさねは我身かたみと見る詩なり
いとさかりに　○中君のさまなり
さま〳〵の御もの思ひ　○大君の事匂宮の絶々なる事なり
むかしの人　○おもやせ玉へるか故大君に似たるなり御前の女房ともの見たる心なり
ならひ給へりし　○人の兄弟のさまをよくかけり
からをたにとゝめて　○總角巻の虫のからのやうにてとありし事なり
かの御あたり　○薫のあたりなり
あたらしき　○薫の大君を戀玉事なり

宮は　○匂宮なり
ないえん　○大略正月中にある事なり親王公卿以下参して作文なとある事なり今は久しく絶たる事なり
をる人の　○匂宮の歌なり五文字は薫を云り上は實法をつくり玉へと宇治にかよひ玉ふ事今に絶さるは中君の事のうたかはしきとなり
みる人に　○かこざはかこつけなり心をつけておへき事にてありけるよとなり
ましてさはかり　○薫さへ涙もろなりまして匂宮の色々しき御心なれはなり
やみはあやなき　○此二人の御にほひを云なり夕より夜ふくる迄を書り
よにためしありかたかりける　○薫大君に實事なきよしを語玉なり
のこりありけに　○匂の御心ならひなり
さりなから　○疑玉なから又物に意得てあへしらひ玉ふなり
なけかしき心の中も　○匂宮の薫の心をもよくおしはかりての玉ふなり

宮もかの人ちかく　○匂宮中君を京へわたすへきよしの給なり
いとうれしき　○薫のよろこひ給なり
あひなくみつからの　○薫の媒介せし事なれはなり
大君も薫のあやまちのやうに思給し事なり
もしひんなく　○匂宮の疑給てはとなり
かのこと人と　○大君のゆつり給し事なり
いはせのもりの　○花鳥義可レ然「戀しくはきても見よかし人つてにいはせの森のよふこ鳥かも人つてならて相見し事のありしと也されはへたてはあるましきと云へきをそれをは云ひのこし給となり
心のうちには　○薫の心の内殊勝なり
さてもおはしまさん　○薫のとりもち給はては誰かはとなり
かしこにも　○宇治の宮なり
今はとてこのふしみを　○中君の心なりいさこゝに我世はへなんすかはらやふしみの里のあれまくもおしの心にてかけり此まゝこゝにて住はつへきと也やかて前の巻にもふるの山里いかならんと宇治の里をふるの山になして書りこゝもふしみを宇治にしなしてよめるなりまことの伏見の里にはあらす書さま殊勝なり
さりとても　○中君の心尤あはれなり
あさからぬ中のちきりも　○かくへたゝりては匂のかよひ給事も絶々にのみありぬへきよしをの給なり
花の木とも　○庭の梢なり
みねのかすみの　○春霞立を見すてゝ行鴈はの歌にてかけり悉皆我身を雁に比して云へり本歌は春霞とあるをこれは宇治の山里にての事なれは峯の霞とかける面白し
をのかとこよにて　○とこよとは故郷を云りすまの巻に見えたり中君は都にて生れたまひし人なれともとよりの宮はやけてあらぬ所にかへり給ふを云なり
御ふくも　○大君十一月にうせ給へり九十日の服なれは二月にぬき給へり
みそきもあさき　○中君の心なりあかす思給なり
おやひとゝころ　○母上をは見給はさる事なり姫君を母の如くに思給ふ事なり

御車こせん　○御祓に河原に出給はん用意なり
はかせ　○女にもまもりのため太刀なとそふる事あるとなり○思案はかせは陰陽博士なるへき歟御はらへのため御せんにそへて陰陽師をたてまつられたるへし
はかなしや　○一說中君の歌なり云々いかゝ是は薫の歌にて然へし今日の中君の御祓を思やりて大君の事を昨日今日と思しにはや中君の除服にもなりけるよとなり
けに色々　○けにとは歌をうけて草子地にかけるなり
御わたりの　○京へ出給へきの料なり京にて人々にもたまはるへき物なり
おりにつけては　○薫の念比に心をはこひ給事かゝるかたを　○物なとまいらせ給事を云へり
身つからはわたり給はん　○薫宇治へわたり給ふ事は二月六日也中君は七日に京へわたり給へりいさまこひにわたり給へるなるへし
まらうとゐ　○客亭なり
いまはやう〳〵　○大君おはせはとなり
我こそ　○大君をまつ京へうつすへしと思し物をとなり
さすかに　○あまりにおほやうにせし故となり
かいまみせし　○椎本にありしなり
うちに人々　○大君の事を思出るなり
あすのわたりも　○川によせて云へり京へ出給へき事なり
月ころのつもり　○薫人つてにの給詞なり
あらぬ世　○外様むきなるとなり
はしたなしと　○中君の返事なり更にさしはなつとは思はされともとなり
いと心はつかしけに　○薫のさまなり
面かけさらぬ　○大君のましまさはあへしらひ給へき物をと薫なとも名残と思出給なり
わたらせ給へき　○匂宮は二條院へ中君をむかへ給へしとなり
この頃過して　○三條宮へ薫もうつるへきとなり程ちかゝるへしとなり
つき〳〵　○世俗に云事となり次々なり
人の心さま〳〵　○中君の御心はいかゝとなり

やさをはかれし　○此歌いつれも不叶歎一義には此やとをはかれす住はつへきと思物をかくの給よとなり又の義は薫のまへの詞を受ていかに遠路を隔給ともかよはすへき物をちかくなとの給は猶もへたてたる心ちするとなり此義可レ然なり

いとようおほえ　○大君に似たるとなり

春やむかしのと　○詞を借たるはかりと見へたれとも下の心は二條の后を業平の昔にかはらぬ心をなげきたる心あり花不か心も薫と同かるへしと也

むかし思ひ出らるゝつま　○つまとは端なり

つれ〲の　○大君の此花をもてあそひ給し物をとなり

みる人も　○大君の事を薫のおはしますにつけて一入思出たるなり一義中君此山里をいつる心と云義あれとも不用なり

なつかしけに　○薫のすんし給なり

袖ふれし　○中君を昔の形見とは思てこそあるに只今都へいて給はゞ木を根なからうつしたることしとなり

たえぬ泪を　○薫さまなり

かたちもかへてけるを　○辨の尼又髮をおろしはてたるなり

めしいてゝ　○薫のめし出し給ふなり

こゝには　○薫の詞なり

いとふにはえて　○命の殘りたる心なり

うちすてさせ給ひ　○大君の事我をすて給ふなり

つみもいかに　○かやうの事を思つゝけゝる故に也

ひたひの程　○さけ尼の時にさまかはりたるなり

思ひわひては　○大君を戀しく思給ふによりてさま〲の事を思ひ給へたるなりかたちをもかへさせ奉てかけとゝむることもありぬへき物をと思出給なり

けにむけに　○辨かさまなり

さきにたつ　○人におくれすとは心のまゝならは大君におくるましきとなり

それもいと　○こゝを法文になして辨をなくさめ給なり

かのきしにいたること　○入水なとをしては佛の制戒にたかひ侍れは彼岸にいたる事かたかるへしとなり

なへてむなしく　○諸事空しく思へきとなり
身をなけけん　○人をはかく教化し給へども我身はな
　くさめ難きとなり
はてもなき　○無始無終なり
人のさかむる　○匂宮の所を思給なり
おもほし　○中君の御前にて語なり
いよ〳〵やつして　○辨なり
人はみな　○袖の浦は出羽なり新古今「なかゐする
あまのしはさを見るからに袖の浦にもたつ涙哉わ
か長ゐうらめしきと云なり永祿元十一月八日御説
殊勝なり
しほたるる　○中君の歌也ことなれやとはことなら
すなり尼君の袖にもおとらすとなりうきたる浪と
は都へのほり給事なり心からうきたる舟にのりそ
めてひとひも浪にぬれぬ日そなきの歌よく叶へり
よにすみつかん　○中君辨にの給詞なり
かかるかたちなる　○尼なるを云へり
むかしの人　○大君なり
かく人よりふかく　○辨かなけくさまなり
さきの世も　○大君を一段戀慕するをよそともおほ
しめさるるなり
みなかきはらひ　○掃除するなり
御車とも　○御むかへなり
御身つからも　○匂宮なり
心あはたたしく　○中君の心なり
ありふれは　○祈つゝたのみそ渡る初瀬川うれしき
せぶになかれあふやと「かかるせも有ける物をさ
まりゐて身を宇治川と思ける哉」兩首の歌の心な
り
辨のあまの　○中君の心に辨の尼の心はへにはかは
りたりと心淺く見なし給へるなり
すきにしか　○此歌は只うちむきたる道理計なり
かの御方をは　○大君にのみ人々心よせしを今はか
くなこりもなく思へるさまを云へり
道のほと　○中君は此道をは初て見給へり
つらきにのみ　○匂宮の絶々なりしも今ことはりに
思給となり
なかむれは　○我ありさまは月にかはりたるを云へ
り
さまかはりて　○我は山里をいつる事をいへり

としてろ　○匂宮にあひ見さりしさきは何事をかは
思しとなり
御車のもとに　○嫁娶の禮なり
いかはかり　○はしめは如何とおほつかなく思し事
の只今かくさたまり給を云へり
ものにもかなやと　○とりかへすものにもかなやと
おほすなり
しなてるや　○萬葉の歌をすこし引なほすなり河海
に見えたり薫の我身まほならねともあひ見し事は
ありし物をとなりしなてるやはこれは湖光の心な
るへし日本紀しなてるやかた岡山とよめるは別の
事なるへし只かたといはんとてしなてること枕詞に
おける歌多ししなてるやかたあすは川なともよめ
り
御ふみはとき〳〵　○六君の方へ匂の文あるなり
この君さへおほな〳〵　○此君とは薫なりおほなに
ほなは念比に云へる事をとなり
ぬしなきやと　○薫宇治を思やり給へり花鳥にひか
れたる淺茅原の歌可ㇾ用ㇾ之
こゝかちに　○二條院なり

れいのいかにそや　○とりかへす物にもかなやの心
なり
たちいて給て　○中君の御方へ薫のまいり給へり
むかしの心しれる　○宇治にてなれし人なるへし
あさゆふの　○薫の詞也
おまへの木すゑも　○中君の方よりへたてかましき
となり
けにおはせましかは　○中君の心なり大君のおはせ
ましかはとなり
花の色鳥の聲　○前にも此詞の面かけありふかく大
君を思給故なり
いとゝまさりける　○かく世にも出給やうなるにつ
けては一入思出給なり
人々も　○おまへの人々也
人つてならす　○思やすらひ給なり
なとかむけに　○匂宮の詞也
一かたならす　○中君の心なり
かの人も　○薫なり

宿木　巻名以歌號之薫廿三歳より廿四五歳まて
三ケ年の事あり然れは早蕨巻よりは前の事なり椎本の末よりあけまきさわらひの事もこもれり末に見えたり總して前の事を云ひ出せる事玉かつらの巻にも玉かつらの君の四歳の年よりの事を書て末は源氏の三十五の年にあたるなり此巻も藤つほ女二宮の御事をいはんとて前よりの事をかけるなりこれ此物語の例なり

そのころ藤つほと　○左大臣の三君なり麗景殿と號せり明石中宮よりもはやくまいり給へり

故左大臣殿　○此左大臣ふるき系圖には梅かえの左大臣とあり誤なり行幸の巻より若菜上までの左大臣にてある人なり今上の左大臣なり

また春宮と　○方々よりむすめをたてまつれる事なり

中宮にて　○明石中宮なり

この宮　○女二宮なり

ちゝおとゝ　○父左大臣なり

ゆゑ〳〵しき　○女御なり

十四になり　○女二宮なり

夏ころものゝけ　○椎本の夏なり薫朝すゝみに宇治へ行給時分なり

宮はまして　○女二宮なり

おちなとやう　○舅なり

大くら卿すりのかみ　○皆左大臣の息麗景殿の兄弟なり　すりかみは修理大夫なり

うつろひはてゝ　○うつろひはてすしてなりうつろふからに色のまされはの心なり

朱雀院のひめ君　○女三宮の例を思給へり

いてやあかずもあるかな　○宮なとはあなかち御うしろみなくともと有しかと今思へは薫を女三宮も持給てこそ御おほえもやんとなくましませと也

やかてそのつゐて　○女三宮の例にとなり

もとより思ふ人　○思ふ人ありとも女二宮なとをおろかにしたてまつるましき心なると薫の性を御覽せられしとなり

つゐには　○本臺さたまらでは叶ましきとなり夕霧の六君なとの事なるへし

中つかさのみこ　○中務の親王は今上の御子なり上野の親王は當代の親王にあらす

けふのしくれ　○勅語なり面白き仰なり
あそひなとすさましき　○藤つほにての事なり二宮御服なり管絃は如何となり
よきのりものは　○かけ物なり賭の字賭弓なと云なり女二宮の御事をほのめかし給へるなり
おりて　○下殿して菊を折たるなり
よのつねの　○雲のよの雛をはゝかりたるなり
霜にあへず　○女二宮は母女御もなくてましますによそへ給へり
れいの心のくせ　○薫の心のくせなり
いてやほひにも　○女二宮も本意にはあらすとなり宇治の大君の中君にゆつり給をも聞すくしてあれはなり
ひしりよのものゝ世にかへり　○世をひしりたる人の世にかへりたるの心なりひしり世と云へる面白し私云一本ひしりやうの物のとあり是も興あり
ことさらに　○人はかくはあらさるとなり
きさきはらに　○同しくはとなり
左大臣との　○古本作二右大臣一是も無二子細一歟但猶左可レ然也云々仍近代本皆左に改レ之花鳥釋義其義に及へからさる也夕霧は左大臣なる事分明の事也
水もるましく　○そはめをもせさる人をとおほせと思やうなる事はなし去とて下﨟なとを思定へきには非す猶さりにもあらは兵部卿宮にとおほすなり
中宮にも　○夕霧明石中宮をもうらみ申給なり
いとをしくかく　○明石中宮匂宮を教訓申給なり
うへの御世も　○春宮にもとおほすなり
かのおとゝのまめたち　○夕霧實法をたて給へと雲井雁の外に落葉宮もかくておはしますとなり
ましてこれも　○東宮にもとなり
わか御心にも　○匂宮の御心なり
ことうるはしけなる　○夕霧のわたりを云へり
かのあせちの大納言　○當時右大臣なり右大臣とかけは心得難に依て前のいひつけたる官をかけり
こうはゐの御かた　○螢兵部卿宮の御むすめ槇柱の腹なり右大臣のまゝむすめなり
そのとしはかはりぬ　○薫廿三の年の終あけまきの年になるなり
女二宮も御ふくはてぬれは　○薫の廿四歳の夏なり
はしたなきやうは　○何かは御ゆるしあらすはあら

んとなり
すき給ひにし　○宇治の大君なり
くちおしきしなゝりとも　○彼大君に似給へかしとなり
左大臣　○夕霧なり早蕨の卷の八月なり此巳下匂宮をむことるへき事
二條院　○中君なり
にはかにかはり　○此程夜かれもなかりしにとなり
ついには山すみに　○其まゝ山さとに住はてたきとなり
草のもと　○故鄕のやとりを云へり桐壺卷に此詞あり
づしやかなる　○心の不動なり
もし世におはせましかは　○大君の事也薰の心も望みなけれはなり
なき御かけとも　○八宮大君を云へり
なにかはかひなき　○匂宮へは思ひあるけしきをも見せたてまつらさるとなり
つねよりもあはれに　○ことかたの事の出來へけれはなつかしく語ひ給なり

れいならぬさま　○懷姙の事なり
八月になりぬれは　○六君の事なり
宮はへたてんと　○匂宮は云ひ出しかたくし給なりしのひたる事にも　○以下草子地をしはかりて云へり
かくわたり給にしのち　○中君のわたり給て後は一夜の夜かれもなくならはし給となり
このころは時々　○ならはさんの宮の御心なり
たゝつらきかたにのみ　○中君の心なり
女かたも　○夕霧のあたりの事なり
あいなしや　○薰の我物にして中君を置たらましかはかやうの物思ひはなかるへき物をとなり
むかしの人に　○大君になり
めゝしく　○めたゝしくなり
ゐてありき　○匂宮に媒介せし事なり
そのおりの事　○其時の奉公をも今はの給出る事もなしとなり
猶あたなるかたに　○朋友の交心をつくへき事となりあしさまなる御心もちゐとなり浮舟の事なとも然るへからさる事なり女の心もちゐのみならす一

切人のをしへたるへき事なり
かの人を　○大君なり
この君を　○中君は大君のゆかりなれば思ひはなれ
難しとなり
とまらん人を　○あけまきの巻にあり
なけのすさひに　○薫の心なり
さるはかの君たちの　○女三宮の御方にある人たち
なり此宇治の君たちにをとらさる孫王なともある
へし
あくるまさきて　○槿は常なき花の色なれやあくる
まさきてうつろひにけり
かうしもあけなから　○夜ふけてより次第々々にあ
け行さまなり
きたの院に　○二條院中君のおはするなり三條院よ
りは北に當れり
宮はきのふより　○匂宮御留守にてと申なり
色めきても　○天然の容儀なり好色の人には似さる
となり
朝かほをひきよせて　○槿のかつらのあるさまなり
けさのまの　○かくはかなく消やすき物と見る〳〵
も猶めてつへきとなり大君の事をいへり
をみなへしをは　○好色の方には心もとまらさると
なり
あけはなるゝまゝに　○夜のあくるにしたかひて霧
の深く見へたるさま面白し
あさまたききにけり　○引歌に及ばず早朝なるを云
計なり
女房の御けはひ　○御格子もまいりたるべし女房の
御けはひも見へたるとなり
おりて　○これより下車し給へり
宮の　○匂宮の御かへりと思ふとなり
これにさふらふ　○薫の詞なり
さらはいかゝは　○内の女房達の詞也
きたおもて　○薫の詞内にさふらふへしとなりふる
人なとゝは薫の自卑下しての給なり
それもたゝ御心なれは　○御心なりさしてうらみ申
へきこともなしとなり
をゝしく　○男々しきなり
うたてつゝましかりし　○中君の心なりつゝましさ
も少うすらくとなり

つねよりもしめり　○六君の事を思給へるなるへし
こまやかに　○薫のよくをしへならし給なりまことの兄弟のことしとなり
こゑなともわさとにたまへり　○大君によく似たり
人々しく　○薫の詞
心からかなしきこと　○悲しき事とは大君の事くやしき事とは中君を我物にせさる事なり
あかみもて行　○権を云へり
よそへてそ　○姉君によそへて見んとよみ給へり
露をおめさて　○薫の進退のしつかなるを云りわさとならす露もそのまゝありとなり
をきなから　○露は置なからとなり
きえぬまに　○下句は中君の自稱なり
なにゝかゝれる　○このはかなさは何にかゝれるそとなり　花鳥の引歌不叶歟
秋の空は　○薫宇治へ行へ給る事をかたり給へり
就中腸斷是秋色の心あり
こ院のうせ給てのち　○此宇治の宮のあれたるを見て昔のことを思出したるとてかたり給をいへり
さかの院　○花に見えたり大覺寺の事淳和太后正子奏して大覺寺と號し給へりと云々花鳥清和太后とあり改可為淳和也
かの御あたり　○六條院なり
わすれ草　○愁傷をわするゝ程をへてこそ夕霧もつり住給へとなり
かのいにしへのかなしさ　○六條院の世をさり給し事なり其おりは薫もいまだ幼少なりしとなり
ちかき夢　○大君の事なり
むかしの人を　○大君の事なり
まいて我も　○中君の心なり
世のうきよりは　○中君は山里にておひ立玉へれは世のうきことはしらせ給はされは思くらふへき事もなきを只今は世中にすみ給へは今こそは世のうきに思くらへて山里に歸りたき心の出きぬるなり「山里は物のさひしき事こそあれ世のうきよりは住よかりけり
この廿日あまり　○父宮の第三年なり四年と見る義あり不用之宇治へ行ておこなはゞやとなり
しのびてわたらせ　○中君の詞
あらさしとおほすとも　○薫の詞宇治の宮の事也

たうとき　〇宇治の宮を寺になすへしとなり
このうへも　〇中君故宮の忌日の作善をさせ給ふなり
あるまじき事　〇薫の詞
いつこにても　〇宇治にてもかく物へたてたる對面なりし事なり
さぶらひのへたう　〇さぶらひの別當右京大夫とあり諸大夫なるへし
夜ぺまかて　〇かく用意に申をきて出給へり
猶このけはひ　〇中宮の御けはひなり
そのまゝに　〇大君の後薫はいまた精進かちにてましますなり
はゝ宮の　〇女三宮なり薫の孝心ある故に道心あるさまをも母宮には見へたてまつらしとし給へり
左大いとのに　〇夕霧なり
いとしも御心にいらぬ　〇夕霧匂宮のをとづれ給はざるをいかゝと待給なり
おほす人　〇中君なり
こよひすぎんも　〇今日吉日なるへし
おほそらの　〇引歌元良親王の大空の月たにやとにいる物を雲のよそにも君かな行給といへるをすこし引かへたり
宮は中々　〇内よりすくに六條院へ行給へきの御心なり也
御ふみさこへ　〇中君へ文をまいらせ給へり
御かへりいかゝありけん　〇中君の返事如何ありつるやらんまつ二條院へわたり給へり
中將のまいり　〇頭中將なり大空の月さへやとるの歌の御使なり
いまいとゝく　〇匂の詞
世中を思ひとぶめたる　〇八宮の事なり
さりともこれは時々　〇此まゝに絶はて給へきにてはなけれと只今のつらさはやる方もなしとなり
さらにをばすて山の　〇なぐさめがたき心より見れはいつくに見るもをばすて山の月なり
しゐのはの　〇彼椎か本にはおとりたるとなり
山さとの　〇匂宮のうちすて給へるを云へり
きしかたはわすれに　〇昔の山風のあらかりしを忘れたるにやと歌を釋したるなり
月見るは　〇小町か集なか絶たる男の忍てかくれ立

て見るに月のいとあはれなるを見捨てねんこそくちをしけれとてすのこに詠めけれは男いむなる物をといふきかぬさまにて小野小町「獨ねの侘しき時はおきゐつゝ月とそ哀といみそ兼つる此歌の心なり又はかくや姫の物語にもかくや姫月のおもしろう出たるを見て常よりも物思ひたるさまなり或人月の顔みるはいむ事とせいしけれともともすれはひとまにも月をみてはいみしくなき給ふとあり樂天贈レ内詩莫レ對レ月明思ニ往事一損ニ君顔色一減ニ君年一

はかなき御くた物　○懐姙故なり

ゆゝしく思ひ　○大君もかく不食し給ひたりしとなり

この御事よ　○匂宮の御事也

人にはいはせし　○草子地なり

待つけきこえ　○六君の御さまなり

待ふみ　○六君の御さまなり

天下に　○匂宮の御心に中君にあまねくともとなり

いそきわたり給　○中君の御方へわたり給へり

ねくたれの　○中君なり

おもかくしにや　○少しはつかしさをまきらはさんためにの給詞なるへし

なとかく　○匂宮の詞也

かゝるかたにも　○かく實めなるかたをもよくの給物かなとなり

きこえさらんも　○中君の心なり

いとよくこそ　○匂宮の詞なりさはやかに云ひなし給へれとも下に心のあると也さき〳〵かやうなるもやかておこたれは祈までもなしとあるをかくさはやかなれとはの給へり

なをまたとくゆかしきかたの　○六君なり

いのちまつまも　○後世まて契給しかともはや此世の契はたかうやふなれは後世をこそ頼むへけれとなり「有はてぬ命まつまの程はかりうき事しけく思はぬものかな

日ころも　○中君の心なり

あはれなる　○匂の詞也

夜のまの心かはりこそ　○中君の返事なり

けにあか君や　○匂の詞

よし我御身に　○中君の身のうへになしてもたしはかり給へとなり母中宮のわりなく申すゝめ給へば

身を心ともせざるとなり
思ふやうなる世　○春宮にも立給はゝとなり
いのちのみこそ　○えそしらぬ今心みよ命あらは我
やわするゝ人やとはぬと
かしこにたてまつり　○六君よりの返事なり
あまのかるめつらしき　○玉もの事祿を云へり
いつのほとに　○匂宮はいつの程に文をかきてまい
らせ給つらんとなり
さしくみは　○さしよりなりうちつけの心なり
まゝはゝの　○落葉宮なり此六君を養子にし給なり
さかしらは　○文の詞也
をみなへし　○いかにをきけるとは落葉宮の六君を
見給へる心なり
かことかましけ　○匂の詞なり此歌はかこちがほな
るとなり
心やすくてしばし　○又思ふ人なくてあらまし物を
となり
人もこの御かた　○中君のことはりとは公界よりは
思はざるなり
もの〳〵しくかしつき　○中君なり

みつからの心　○中君の心なり
物おもはしき　○中君なり
ひくらしのなく　○日くらしのなきつるなへに日は
暮ぬと思は山の陰にそ有けるの心なり
おほかたに　○昔の山里のまゝならましかは大方に
のみ聞へき物をとなり
はしめより　○匂宮故にさま〳〵の思をするとなり
いのちみしかきぞう　○母も姉君も早世のすちなり
又いとつみふかく　○懐姙にてうせなは罪ふかゝる
へしとなり
きさいの宮　○明石中君の事六君にあひ給し三日め
の事なり
おとゝは　○夕霧なり
こよひのきさしき　○三ヶ夜なり
この君も　○薫なり此六君は前に薫にとの給しなり
只うちの人ならは匂にさだまり給へる事をは口惜
く思心のあるへきなりてゝもとは物かたりの作者
の心をやりて書なり
おとゝは人しれす　○夕霧はかへりてかく思給へり
もちゐ　○三日の夜のもちゐの事前にも見えたり

めつらしからぬ　○草子地なり
こみにも出給はす　○匂宮は六君の方におはしまして外様にても酒宴あるへき方へはおそく出給なり
きたのかたの御はらから　○雲井の鴈の兄弟なり
わつらはしきわたり　○前にとりこめられてはなと〻あらまし事を薫との給し事なとの心しれる人なる故にゑほ〻み給へり
されこみしらぬ　○薫のさまなり
ひんかしのたいに　○薫のさまなり
みへかさね　○常のきぬに中倍あるを云へり
ものこしもみなけぢめ　○きぬによりて腰も品々あるなり
もの〻色しさま　○法令の外にはすへき事もなければしざまを執し給なり
めしつぎとねり　○院のめしつぎなり親王家へわたしてめしつかひ給なるへしとねりは御厩の舎人なり
けにかく　○草子地なり
中納言殿の御せんのなかに　○物語の誹諧にかけり
君はいりてふし給て　○薫なり三條宮にかへり給へり
けにわれにても　○薫ゟ女子をもちたらは此匂宮にこそ奉らめとなり
宮にたてまつらんと心さし　○匂宮と我身とのひとしきを云なり
ふるめきたる　○卑下したるなり
うちの御けしき　○女二宮の御事なり
こ君に　○宇治の大君なり
あせちの君　○女三宮にさふらふ人なり
うちわたし　○按察の君の歌なり人めをは〻かるやうに夜ふかくいそぎ給事をゆるしなきさとはよめりかくは〻かり給へき事にてはなしとなり我身数ならぬ故なるへしと也うちわたしはをしなへて大方なると云心なりせき川は相坂の關の小川をかく云へり見なれそめけんとは見なれたるなり水馴によせたり
ふか〻らす　○薫の歌なり
ふかしとの給はん　○歌をことはりて草子地の書なり

まことはこのそら　○薫の詞なり
ことにおかしき事の　○薫の事を云へり
あなかちの世をそむき給へる宮　○薫ゆへあながちに女三宮の御方に祗候する人々を云へり
宮は女君　○匂宮はしめて六君を見給なり
たいの御かた　○中君なり
このみそし　○そしとは殺なりこのみすくしたるやうなる心なり花鳥簡略と云へりいかゞ
三條殿はら　○雲井鴈の事なり
かゝらんとする　○中君の心なり不肖故となり
一日の御事は　○文の詞八宮の第三年の作事薫のいみしくし給し事なり
さりぬへくは　○つゐてもあらば立より給てみつから申たきとなり
宮のいまめかしく　○薫の心なり匂は六君に思つき給へるなるべし
うけ給はりぬ　○薫の返事なり貴人へ返事にはかく書也
一日のひしり　○宮の御忌日の事なと大概に申となり

と思たまふる　○此佛事を沙汰するよし申とは中君宇治へ行給へきよしの給へきとて忍ひたるとなり前に宇治へわたり給へきあらましなとの給し故にとなり
なこりとの給はせ　○まへの文に御心のなこりなからましかばとあり
丁子ぞめの　○よのつねのかはほりの扇なるべし
あやしかり　○宇治にての事なり
さてもあらましをと　○宇治にての事
うらめしき人の　○匂をくらぶればとなり
わさとめしと侍らざりし　○薫の詞なりさりぬべくはみつからも文の詞にありつるとなりわさとめしにはあらざると云へり
宮わたらせ　○昨日は匂宮わたらせ給へりと聞しとなり
猶いとはづかしく　○中君の心なり
一日うれしく　○中君の詞也
いたくしそきて　○簾中の奥ふかきとなり
いとゝをくも　○薫の詞あまりに奥ふかなるとなり
宮の御心はへ　○匂の六君に思うつり給事

たゝ世やはうき　○我からなるとなり世やはうき人やはつらきあまのかるもに住むむしの我からそうき
山さとに　○薫へ申給へるなり
それはしも　○薫の詞宮のゆるし給はてはとなり
物にもかなや　○薫の心中に思給すちなれはあまた度此歌の心出來ぬるなり
さらは心ちも　○中君の詞也
さてもいつはり　○ひきとゝめんの心にてかく申給へり
しはしいりさして　○中君なり九月にとなり
あらすやしのひてはよかるへし　○前の中君の詞に宇治への事をたゝいと忍ひてこそよからめなにかよのゆるしなどことぐ〵しくとの給し詞をいへり
おもひの外なりける　○中君の詞也
過にし人の　○大君の心なり
中々むけに　○中君の心なり
かやうのすちは　○草子地なり
かひなき物から　○薫の實法なるさまなり
こしのしるし　○懐姙の着帶なり

いたづらに　○むかしもかやうの事はありしとなり
うけ給はらぬ　○返事なり
さはかり心ふかけに　○草子地なり
なにかは　○中君匂宮をはうらみ給はさるなり
いとゝあはれに　○匂宮の御心なり
かのはち給　○薫に恥給ふなり
うちとけぬ　○六君の御かたなり
かくのみことよき　○男はいづれも辨說ある物と思給なり
あなかちなる　○薫なり
この御ゆくさき　○立かへり思へば薫よりは匂宮の行末をこそたのむべけれとなり
ひさしくたえ　○匂宮のと絕の事也
身ぞせき所なき　○中君の心なり
おもひきこゆる　○東宮にも立給はゞつゐには立后なとも有へき事となり
竹川うたひてかよれるすがた　○禮記十一學記云故歌者上如レ抗下如レ隊曲如レ折止如二槀木一
われこそさきに　○人ならば我こそさきに忘なめつれなきをしもなにかたのまん　我こそさきに忘れ

めなど思きはにはあらざるべしかやうの御中にて
はあまりにかろ〴〵しき事となり
又御心おき給　○いくばくの夜かれにもあらざる物
をとなり
見なれぬる　○かばかりとはうつり香ばかりとなり
此歌も又大概に云ひなし給へり
かゝればそかし　○かやうの所に薫も心をかくべき
となり
さはかりかゞやく　○六君の御方のめうつしにとな
り
君はなよゝかなる　○君とは中君なりなよゝかはな
よらかなるなり
なに事もいとうるはしく　○六君の事なり匂宮の御
心さしより思くらべ給にはぢなきとなり
これをはらから　○兄弟などならぬ人は必ず近づき
よりなばたゞにはあるまじき中君の御さまなりと
なり
かの人の　○薫なり
六條院には　○六君の御方なり

さはいへとえおほしすてさめり　○かくねたくは薫
の心に思へと中君をすて給はざるはうれしきとな
り
人々のけはひ　○中君の御方にさふらふ人を思やり
給なり
たゝむ月のほうじ　○九月は齋月なれば法事あるへ
し
みつからの御れう　○中君の御料なり
むすびける　○腰の帯などをみ給事なり宮には契ふ
かくおはしましける事よとなり我身にはうらむへ
き事もなしとなり
おほす人のためなれば　○匂宮は中宮をは一段とお
ほしめすによりてこそこれ程もはくゝみ給へとな
り
いてやなど　○不足にのみめのとなとは申なすとな
り
このころは世にひゞきたる御ありさま　○六君の御
方なり
いまぞ又　○前にはとりあへぬ物どもなれば今は又
ことさらにしたてゝまいらせ給へり

あやのれう　○綾を織へき料なり
この君　○薫なり
いとおしの人ならはしやとぞ　○草子地なりよく思しらせ給ふ事となり
かくて猶　○薫の心なり
ひとへにしらぬ人ならば　○中君の心なり云はなたんもいかゞとなり
わかやかなるはみなあたらし　○皆新參の人たちなり
おとこ君　○薫なり
なやませ給おりは　○薫の詞醫師僧などの類にとなり
夜ゐのそう　○加持の僧なり
人のかくいふに　○中君の心殊勝なり
けにそしたやすからぬ　○中君の心なり薫と云義あれど非なり
いかなれば　○薫の詞なり
人にとひ侍しかば　○懐姙したる人の趣を尋ね問へばとなり
いとはづかしくて　○懐姙の事を恥給なり
むねはいつともなく　○中君の詞昔の人もとは大君なり
たれも千とせの　○うくも世の思ふ心にかなはぬか
　誰も千とせの松ならなくに
めしよせたる人　○少將なり
げにありがたき　○少將の心なり
いはけなかりし　○薫の詞なり
おろかならずおもひきこへ　○大君に心かけそめし事也
うしろめたく　○中君の詞こなたよりこそ申おとろかす事もありつれとなり
さやうなる　○薫の詞中君の方より薫にわたり給へとありし事をかしこき事にの給ふとなり
からうして　○それは山里への御用にこその給つれとなり
それもげに　○それをもうれしくは思しとなり
山のかた　○庭の山なるべし
かぎりたにある　○戀しさのかぎりたにある世なりせばつらきをしゐてなけかさらまし
おとなしのさと　○宇治の山里にこもりてありたき

となり「戀侘ぬ音をたになかん聲たてゝいつこなるらんおとなしの里
かの山さと　○宇治なり
むかしおぼゆる人かた　○大君の事なり
あはれなる　○中君の心なり
みたらし川　○人形と云へるにつきて云へり戀せしなどゝ云事は佛の道にはとをき事となり「戀せしとみたらし川にせしみそぎ
こがねもとむる　○昭君が如くにあしくかきなしてはとなり
そよそのたくみも　○不ㇾ言不ㇾ笑かたちはかひもなかるべしとなりかく云へるも中君に心あるとなり
はなふらせたる　○神變を現する巧ありともとなり
いますこしちかく　○中君なり
人かたのついてに　○中君の詞なり手習君の事語出し給へり
このちかき人の　○少將なり
さしころは　○中君の詞なり手習の事をかたり出し給へり
かたみなさと　○中君の我身よりはよく大君に似たる人ありとなり中君をばさぶらふ人々は大君には似ざるといへるなり
中めかたりにて　○薫の心なり
さるへきゆへあれは　○薫の詞也
いさや　○中君の詞
物はかなきありさま　○大君はおはせす物はかなき事は中君の我身獨のうへになれるとなり
又あひなき　○我身さへあるに又あひなき事をそへてとなり
の給けしきみるに　○薫の推し給なり
宮のしのひて　○故八宮なり
しのふ草　○落胤腹なとなるへしとなり「結ひをく形見のこたになかりせは何に忍ふの草をつまゝし
かばかりにてはおなしくは　○薫の詞也
たつねんと　○中君の詞
世をうみなかに　○蓬萊山をいへり揚貴妃の事也
いさやいにしへの　○中君の詞八宮の御子ともかずまへ給はざりしとなり
母なる人　○手習君の母は中君のいとこなり
佛にならん　○山里のほんぞんと云へる詞につきて

の給なり
さりけなくて　○薫の心なり中君の我身をいひのかれんためとは推し給なり
うちたゆめて　○いとまごひもせずして入給へるなり
おりたちて　○戀ちなとには薫はさのみいまだ練せざるとなり
人のほいにも　○我思に叶はぬ樣にありてはとなり
いとゝむかし　○大君の事なり
いとかしこけれど　○辨がさまなり
いかになかめ　○薫の詞也
人のうへにて　○辨か詞大君匂宮の御とたへをなき給し此ころにてありしとなり人の上にてさへかく深く物思をし給へる御こゝろなれは薫につゐになびき給はさるもかやうの遠慮のある故なるへしとなり
けにかのなけかせ　○中君只今六君故物思をし給へるよしを聞侍ればことはりと思あはせたるとなり
とある事もかゝる事も　○薫の詞なり我身媒申せし事なれは一入かなしきとなり

このころの　○匂宮の事なり
いひても〳〵　○殊勝の詞なりたれも〳〵とまらぬ世となり
御き日　○大君の一回忌なり第三年こ云義不ㇾ用ㇾ之
むかし人の　○八宮なり薫の心なり
とまり給はん人を　○故宮も姫君達のましますゆ故にこそ寺なとになすへき事を思わつらひ給つらめとなり
兵部卿の北のかた　○中君なり
ことさまにも　○此殿をは寺になして別に殿をたつへきとなり
とさまかうさま　○あさりの返答なり可ㇾ然となり
かはねをつゝみて　○河海に見えたりこゝの心は前の餘習を捨て佛道に歸入し給へとなり
たい〳〵しき　○退々なり可ㇾ然事となり
このたひはかり　○薫の心なり寢殿をこぼつべければなり
京の宮　○中君の方なり
こ權大納言　○柏木なり
めつらしく　○薫の誕生の事なり

かの御世に　○今薫のあたり近くなれ侍るは柏木に
よくみやつかへし奉し陰徳陽報なるへしとなり
宮よりも　○中宮なり
こめかしく　○巨なり
宮の御かたは　○中君の事なり
心ゆるさゝらん人の　○うとき人なとにはすく〳〵
しうあへしらひ給ふへき心なるにとなり
われには　○薫にはなさけ〳〵しく面には見えてや
みぬへき様にし給へり兄弟の心をとりあはせて思
くらへ給なり
かたしろの事　○中君のほのかにかたり給し事なり
浮舟の事なり
京にこのごろ　○辨が詞なり
さもやと　○八宮は我御子とはおぼしなからとなり
さて又ひたちに　○初は陸奥守なりしが今ひたちに
なりてくたれるなり
くはしく　○薫の心なり
はゝ君はこ北のかた　○系圖をかけりうき舟の母中
將君は辨がいとこめいなり
たいふか　○浮舟の方の女房なり

かの御はかに　○八宮の御墓なり
夜へおくれてもてまいれる　○薫におくれたるなり
こがらしの　○景氣たくびなしとなり
こたになと　○蔦の類なり云々
やどり木と　○昔の名殘を思はすはさひしかるへし
と也總して薫は一生をより所なく思給ふ間東坡詩
吾生如㆓寄耳㆒と云へる如くいつくをも定さると也
あれはつる　○あれたるかけを何共思はて一夜をも
あかし給へるは誠にあさからす昔を思給へるゆえ
とあはれなるとなり
をとこ宮　○おりふし匂宮もおはします時分なり
みなみの宮より　○二條宮を云へり前にも北の院に
まいらんにと云へり二條院の南なれはなり
日ころなに事　○文の詞也
峰の朝きり　○鴈のくる峰のあさ霧はれすのみ……
いとぶの字面白し都にてさへ晴がたしとなり
よくもつれなく　○匂宮の詞
すこしはけにさやありつらん　○草子地なり
かへりこと　○匂のそゝのかし給なり匂宮は見給ま
しきとなり
やまさとの　○返事の詞なり

さやうにて　〇寺になしてよかるへしとなり
ことさらに又いはほのなか　〇別の山を求めんよりもとなりことさらの詞妙なり何時もいるべきの心ありいかならん岩ほのなかにすまはかは世のうき事の聞えこさらん
おろかならす　〇おろかならすうれしかるへしとなり
かくにくきけしきも　〇匂宮の心なり
ものよりことに　〇こと草にまきれす尾花のすくれたるさまなり
また露　〇を花のさま妙なり
ほにいてぬ　〇薫のおり〱かやうの文かよはしのあれは下には思心のましますへきと匂の推し給なりしのすゝき別に一種類別にありと云へる説あり但ほにいてさるさきをいふ歟しのすゝきほに出るとよめる歌多し然ばほに出さる類別なりと云説非歟
なつかしき　〇匂宮の御さまなり
ちいさき御木丁　〇中君なり懐姙の時分なり
あきはつる　〇中君は匂宮の心のかはる比にとりなし給へり
我身ひとつの　〇大方の我身一つのうきからになべての世をもうらみつる哉
かゝるにこそ人も　〇薫の事なり
うつろひはてゝ　〇菊の盛りなるを云へりうつろふからに色のまさればの心なり尾花の時分よくかなへり
花のなかにひとへに　〇朗詠不三是花中偏愛二菊此花開後更無レ花
なにかしのみこ　〇西宮左府の事なり親王ならねと王孫にとりてかく云へる歟末代には奇瑞なともなければ出もなき事なり
御こと　〇琵琶なり
くちおしと　〇中君の心なり
心こそあさく　〇中君の詞面白詞なり當時こそ心あさくとも傳たる所は淺かるへからすとなり我身こそおろそかなれとなり諸道如レ此なり尤殊勝の詞なり
むかしこそ　〇中君の詞也故宮の御事を云へり
かばかりの　〇匂の詞なり

このころみるあたり　○六君なり
その中納言の　○薫なり花鳥の不審いかゝ
かの君　○薫にはかくし給ましきとなり此詞にて薫
　とはよく見えたり
ゆるひたりけれは　○琵琶は上に黄鐘調のかき合せ
　とあり
いせのうみ　○匂宮催馬樂をうたひ出し給ふなり
又かへりなまほしけに　○宇治へ歸り給へき心のあ
　るなり
かのとのには　○六君の御方なり
ことなる事なき　○夕霧の詞なり此院とは二條院な
　り六條院の御後久しく見ざるとなり
御身つからも　○中君なり
はかなくて年もくれぬ　○二年此卷にて暮ぬるなり
正月のつこもり　○薫廿五歲なり早蕨卷の年過て次
　の年にうつるなり中君誕生ちかつく故也去年五月
　よりの懷姙なり
みとせに　○かよひそめ給しより三年になるなり
ひと所　○匂の御志はかりとなり
さるは女二宮　○薫に給ふへきとて御服をはりぬれ
は御裳着の事をいそき給へり
つくも所　○物のかさりなとする所なり
ずりやうとも　○國守におほせつけたるなり朝廷の
　事何事も一事とある事あるをは國々の守に仰せて
　いとなませらるゝさだまれる法なり
やかてそのほとに　○薫に參給へとなり
れいの事なれは　○薫の心のくせなれはなり
なせし物とか　○除目の後執筆申行事なり其次に任
　官ある事なり近代久しく斷絕せるにや
右大いとの左にて　○紅梅大臣成へし竹川卷の昇進
　に見えたり此物語源氏の大將は必す左と見えたり
いとくるしき　○中君なり
おりてたうのはい　○花鳥に見えたり
つかさの人　○大將なれは中少將將監にいたる迄招
　請する事なり親王公卿垣下の衆とて請伴あるなり
おとるへうも　○中君も八宮御女なれは六君にさの
　みをとり給へき事にもあらすとなり
たちなから　○產穢なれはなり
五てのせに　○碁のかけ物なり碁手錢なり產所にて
　如此遊の雜具有之

ふすく　○點心なり節會の時に有レ之餛飩とも云へ
りうごんと云物の類なり
宮のたいふ　○中宮の大夫なり
大いとの　○夕霧なり
御みつからも　○中宮なり草子地なり
御かどの御むこ　○花鳥に見えたり
左のおとゝも　○夕霧なり
かのはゝ宮をは　○女三宮なり
われはまして　○落葉宮の事なり
大くら卿　○二宮の母方のをちなり
心のうちには　○薫の心なり
まかてさせ　○薫の私の家へいれたてまつらんとなり
はゝ宮は　○女三宮の事なり
はゝ宮　○勅書を女三宮へまいらせ給なり
心のうちには　○薫の心なり
心のなしにや　○薫のありさまなり昇進なともあり
又御門の御むこなるゆへなり
いまはさりとも　○中君の心なり
心にもあらぬ　○薫の詞なり
いとあさましき　○中君の詞也
おはせましかは　○大君の事なり
うちとけはてゞ　○中君の我身匂宮にうちとけて後
悔の心のやゝもとすれはすゝみ侍るとなり
さらなることなれは　○若君をめのとの出したるなり一段たくひなき事なれはなり
世の思はなれかたく　○道心をおこしかたしとなり
いふかひなく　○大君なり
おもたゝしけ　○六君の御腹にとは思はさるとなり
かくめゝしく　○悉皆草子地の書なりめゝしくは女々しくなり御門も御らんじこめたる所こそあらめとなり
くれぬれは　○二宮へまいり給へれはなり
夏にならは　○藤壺より方角のいみあるなり
ふちのはなのえん　○花鳥西宮記をひけり
左のおとゝ　○古本右とあり花鳥天暦三年右大臣上首たりと云々されともこれは左なるへし夕霧の事なり
藤中納言　○鬚黒の大臣の息右兵衛督と同兄弟なり
三の宮　○匂宮なり

宮の御かたより　〇二宮なり
入道の宮　〇女三宮なり
きんのふ　〇琴の譜なり
夢につたへし　〇柏木の笛なり
しろかねのやうき　〇やうきは盤の事なりすゑ物也
おとゝしきりては　〇天盃を毎度に上首給れり然る
を親王の中には珍しげなしとて大將にゆづり給り
をしとの給へる　〇不分明事なり
さしかへし　〇盃の疑濁をうつして天盃をは懐中す
るなり別盃をさしかへしと云なり
かきりあれは　〇位次なれはなり薫なり
あせちの大納言　〇誰ともなしと云々紅梅のおとゞ
なるべし右大臣とかけはまぎらはしさにかくかけ
るにや
この宮の御はゝ女御　〇藤壺女御（女二宮母）に按察大納言
の心をかけし事あり
ぶんだいの　〇草子地なり
かみのまち　〇上らふの品なるべし
御かざし　〇うへの御かざしををるとてなり藤の花
を御かさしに薫のをりて奉れる事有しなるべし歌の
詞書のやうに書けり草子地也
すべらぎの　〇およばぬ枝は女二宮を云へり
うけはりたる　〇我物にしたるとなり
よろつ代を　〇御製也行末萬々なるべけれどもまつ
けふもあかさるとなり〇藤の花都のうちは紫の雲
かとのみそあやまたれぬる
君がため　〇夕霧の歌なるべし
あせちも　〇紅梅なるべし
あかつきちかう　〇還御なり
宮の御かた　〇女二宮なり
こかねつくり　〇車のかさりの金物を云へり
本所の　〇薫よりの御むかへを云へり
このよにては　〇薫のあまりなる心なり
さてれいのくち木　〇前に辨か歌にあり
かや／＼と
をいや　〇領納したるなり手習の君なるへし
きたおもて　〇こなたには人もなしとなり
このしんてんは　〇新造なれはなり
御そのなれは　〇下のかさねはぬき給へるなるべし
御せんどものさま　〇共にある人は京なれさる様な

り
ものたもひいでらる　○大君に似たり
くるまはたかく　○女車は車の前板よりうち板と云物をしきておるゝ事なりこゝには此用意なかるへし
さもくるしけに　○人々の云しなり
あつまぢを思へは　○東國の道を思へば南都の道なとは安きとなり
かひなを　○常陸のせんじがむすめなとゝ云へくはなしとなり
ものけ給はる　○物承るなり
ほめつるさうそく　○前に此あづま人のほめたる事なり
かはらかに　○さはやかになり
あま君をはぢらひて　○辨をはづるとて薫のゝぞき給ふかたへむきたるなり
かれをも　○大君なり
宮の御かた　○中君也
世中におはし　○大君によく似たれは世におはしけるかとも云ひよりたきと也

人のとかめつる　○辨か用意なりのぞき給ふよと推したり
たりしもうれしく　○薫の詞なり
しかおほせこと　○辨か詞也
そのころほひは　○女二宮へまゐり給し時分なり
ゐ中ひたる人ともに　○薫のくちかため給し事也
うちつけに　○辨か詞なり
かほとりの　○薫の歌なり心は故大君をわすれざるによりて似たるを尋ありくとなり

匂宮　巻名以詞號之匂兵部卿匂宮とも號す一名薫中將　此一巻專以匂薫之儀爲本仍會此二名抑此以前之巻幻は當ル㆓第廿五㆒ニ其次第廿六雲隱巻を立て此匂宮巻を第廿七に當たり然れは雲隱を加入て本巻廿七巻也是に并十七巻を加て四十四帖なり此上に宇治十帖を副て時總都合五十四帖なり此時若菜下は五十帖之外なり雖然今現に雲隱巻無之故に冊數を云時は五十四帖不及異儀歟雲隱巻之事有㆓其實㆒此儀後人構㆓種々之謬説㆒穿鑿之義理出來不足用者也

一説紫明抄に六條院頓滅云々以外之誤なり其故は宿木巻に源氏世をそむき給て嵯峨の院に隱居し給二三年はかりすみ給へる由物語のうへに見へたるうへは頓滅之説不可用之由河海に衣破之花鳥同く此義に一味なり

又一説六條院有生而無死黄帝の昇仙に擬して天上し給由稱之或人丸武内大臣各不知其終本朝神仙傳此例繁多云々共不可用之中古まて秘事と稱して不顯露之河内方神構種々之義

有巻之名無其詞事

一説雲隱巻記㆓源氏薨遊之事㆒然るに見る人聞人愁歎に不堪之故是を燒捨たる故無其詞云々

一説此巻感慨甚重之故天人奪取て不傳于世云々

或云雲隱巻七巻有之云々此説々共以不足信用所詮作者之意業名號計を立て其詞を不顯なり其故は桐壺更衣より始め夕顔上葵上柏木紫上此等の人々に愁歎の心詞は盡たる事なれは何なる司馬遷斑固か筆も及まじき所然れども式部か筆の及まじきには非す書殘したる所に甚深の意趣あるべしさしも光源氏は才能人にすぐれ威光天下に耀きし人なれば其終も人に一きはかはりめ有へきなり然るを少もなからんは本意を失べし然りとてまのあたり天人聖衆の來迎の相をしるさんもかたはらいたかるべく世のつねの物語の類なるべし所詮書殘して奥深くあらんには源氏ほどの人の終はさそありつらんと推量をせんの作者にて題號を立をき其詞をは不載なり此義は面の義なり

下の心は此巻を詞にあらはさぬ所則是一部の肝心佛法の眼目也釋尊一代五時の八教も權實相兼ぬる

とはいへともきに機應するか故に方便を儲て眞實の理を顯す事なし誠には唯佛與佛の境界なれは言說の及ばざる所に眞實の理有べし此眞實の理は眞言と名て密法に傳はれり然れは五十四帖の詞の外に眞實ある道理を顯さんの心にて卷名計を立て詞をかくしたるなりされば此物語一部建立皆無實之所是空諦なり源氏紫上以下其名を顯して其人なき是假諦有なり今此雲隱卷は有空の二執を離たり是中道實相の眞實の所なり河海に此四諦法門を引花鳥に不及其儀之由衣註了此義不可然河海の說尤可用之也

有卷之名無其詞例

梵網經　將來之時依風浪沒海中今現在の經菩薩戒品の品一卷計傳于世而八萬威儀品以下の卷は名のみ殘て其無詞毛詩三百篇之內小雅の中

南陔　白華　華黍　由庚　崇丘　由儀　皆孝子をほめたり

此六篇は有其名亡其詞とて篇の名のみ殘て詩の詞は無之さるによりて後に東廣微が補亡之詩を作て補之然れは雲隱は其名有て其詞を亡たりと云毛詩の義に相叶へり

雲かくれの詞

古來人の逝去の事に用來れり　萬葉第二弓削皇子薨時○大君は神にしませは天雲のいほへのしたにかくれ給ぬ　○同三大伴皇子被死時○もゝつての岩根の池に鳴鴨をけふのみ見てや雲かくれなん○同三神龜六年左大臣長屋王賜死之時○大君のみことかしこみおほあらきの時にはあらねと雲かくれます○同天平七年新羅尼理願死去時大伴郎女悲嘆作歌○とゞめえぬ命にしあれば敷妙の家よりいてゝ雲かくれにき此物語の作者めくりあひてみしやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月哉是は何心もなきやうに聞へたれども多分は人の逝去の事にいひならはせり

年記之事

自此卷以薰之年齡立年序前卷幻は源氏五十二歲薰五歲なり當卷匂宮卷は今年十四歲にて元服の事あり然れは六歲より十三歲に至て八ヶ年の事は物語の面に不見なり皆是雲隱卷に籠れりと知へし然間朱雀院兵部卿宮致仕太政大臣鬚黑大臣以下の人々いづれも其終り物語に見へす悉く雲隱の卷の間に此事あるべしと見へたり以此義六條院の年齡を勘

れば六十歟又六十一歟の崩御なるべし
一說雲隱七帖有之云々不足信用者なり
二條院始桐壺更衣の里なり後に加修理造り改めて源氏住給其後紫上の御里亭として時々かよひすみ給
當代匂宮の御所なり（匂宮紫上御傳領之故なり）
六條院　源氏晋造の御所
南町（元紫上住給）當代女一宮（匂宮同母）住給
寢殿　もと女三宮住給當代は匂宮御一腹の御連枝二宮（式部卿宮なり）此所を住所にし給
丑寅町　花散里住給當代は落葉宮住給
三條殿　葵上母大宮住給後に雲井鴈と夕霧と住給
三條宮　女三宮の御所自朱雀院給り給云々

○今上
- 春宮（明石中宮）
- 式部卿宮（同）　號二宮
- 匂兵部卿宮（同）
  - 清若
- 常陸宮（更衣）
- 中務宮（明石中宮）
- 一品宮（中宮）
- 女二宮（藤壺女御）

光かくれ給し後　○源氏崩御之事始て詞に見たり此
一段總詞なり
かの御かけに
そこらの　○夕霧の御末也明石中宮御腹の宮々も此
詞に含めり蓑の手不側叢之詞なり
おりゐの御門　○冷泉院源氏の御末と申さんは隱密
の事なれば是をさし置く也
三宮　○匂宮也若君薫也女三宮御腹之故なり
おなしおとゝ　○同六條院の同殿の義なり
まはゆき　○源氏の如く拔群にはあるまじきにやさ
なり此べしと書たる所可付眼其故は源氏のおほえ
を取たる跡なれは世上の人の思なしも一かと有へ
きあたりさをしはかるうへに源氏よりも當代世を
おほえすくれたれは匂は今上御一腹の御兄弟薫は
今上の叔父なる上に冷泉院如御子養申さるれは源
氏の時代よりは一かと世の覺の重き也こゝを作者
退て案之に源氏は弘徽殿大后惡みそねみ給世の人
もうけひかさりしかと天然の德を備て世の譽を
得かく末々までもさかへ給へり只今の匂薫は一
は主上の御威光に引れ又は源氏の餘慶も殘れる故

の世覺へなれは天然備はれる德には非るべしとの
評儀なり末の詞に能分明に聞ゆ
めてたくおてに
さる御なからひ　○源氏の御末と人の思設になり
いにしへの　○源氏幼少の御時よりも世の覺ある也
かたへは　○傍なり外にはおほへあれと內證は實な
き由なり
こよなう　○殊外なり
河云瓠巴鼓琴瑟鳥舞而鳴魚躍而游矣列子云々
又琴書曰晋師曠晋樂官也上於琴作易寒暑古風雨晋平
公鼓之玄鶴飛下舞云々
箋曰河海所載在昔未詳追可勘決之
日本の末の世に生れ給
花云僧都上の歌に以ニ曇華ヲ一比ニ源氏ニ一輪王出世ヲ思寄タリ
仍有此詞云々
箋曰國栗散邊地也　是一時澆季之末也　是一
阿闍梨
七高山阿闍梨　近江國比叡　比良　美濃國伊吹
山城國愛宕　攝津國神峯寺　大和國金峯寺 葛城山
每年給穀五十斛春秋各四十九日於件山修藥師悔
過新天下五穀也承和三年
さはぬはつらき
君をいかて思はむ人に忘らせてとはぬはつらき物
としらせん奥入
忘れねといひしにかなふ君なれととはぬいつらき
物にそありける後撰　不當
いのちたに
命たに心にかなふ物ならは何かは人をうらみしも
せん奥入
一そう
箋一族　一孫河非なり假令そうるいは族類そうひろ
く族類多なり
一ツ后腹
紫上の父兵部卿宮與藤壺同母弟也
夜のまの風
朝またきおきてそみつる櫻花夜のまの風のうしろ
めたさに後拾元眞
おしつゝみ給へるさま
花云河海につゝみ文をたて文の如くに云へるおほつ
かなし替文は宇治巻にも見ゆたて文にては有るま

しきにや嫁娶記に見へたり艶書の疊み様は假令紫
或紅薄様二重に歌を書て押疊て引結て墨を引て其
を又薄様一重にて藥若は砂金なとの如く裹て同薄
様を細く切りて捻て頸を結なり〇是に墨を引不引
は兩説なり云々

さた過たる

河 奥津浪扇浪來依貞浦乃此左太過而後將戀鴨万十二
央学說文中也禮記集解方氏曰央以適當言之惟中乃
可言央一日久也詩夜未央注央且也師古曰半也猶未
半也箋云未渠央又未盡也

難波津

河 古今序に難波津淺香山の歌の事をこの二うたは歌
のちゝはゝのやうにて手習ふ人のはしめにもしけ
り云々手習の事なり非歌の贈答之儀一

はなちかき

河 放言也色葉一字々々不連書なり　河 素寂說放字
學とも書す其心難云々　河西円法師說閑花近と讀之
云々不可說之
花 うつほ物語　仲忠大將若宮御渐書まいらせたる手
本にも放書と云事あり

淺香山

淺香山影さへみゆる山の井のあさくは人を思物か
は古

山の井水

河花 くやしくそくみ初てける淺ければ袖のみぬるゝ山
の井の水

王命婦

河 王氏の命婦なり　續日本紀藤津主云々

くらふの山

奥入云黒まのくらぶの山に入人はたどる／＼そか
へるへらなる非此歌
其心支間此歌は鞍馬山なり此歌之心更不叶くらふ
の山の本歌有事之故更定有證歟未詳云々
河 淸云今案只暗字に寄せて夜の暗く可明之心歟云
々師說一同以暗字借夜也
抄云今 秋の夜の月の光しあかければくらふの山もこへぬ
へらなり〇くらふのふの字補闇之事たくらふる時
は淵暗の時に清也（花云六帖にくらふ山くらしさ
名にはたてれともいもがりと云は夜もこえなん
今案此歌雖不相叶暗之儀に用る證據云々〇定家

郭建暦三年三月内裏戀歌三首の内○やとりせぬく
らふの山をうらみつゝはかなの春の夢の枕や」又
抄花○今夜たにくらふの山に宿もかな曉しらぬ夢やさ
めぬさ
　通繼母事
河則天皇后初大宗之妾也後爲ニ高宗后ノ一○河光仁天皇后
井上内親王適桓武給見國史
　なきねふし
河一條院崩御之後上東門院御歌○逢事も今はなきね
の夢ならていつかは君を又はみるへき
　三月に成給へば
抄花自四月六月まで三ヶ月也非春三月ニスニ一本六月ニ書之ト
心一同也其時はみな月と訓して可讀之然るをむ月
と六ヶ月に讀て冷泉院十六ヶ月の御誕生と稱之說
有之大なる誤なり翌年二月十餘日御誕生十一ヶ月
に當れり尤說なり尤可然
　御乳母子の辨命婦
抄辨の命婦なり一人也王命婦の女なり○花云河内本には
句を切て爲ニ二人之名ト云々○箋曰二人の名可然辨
は息女命婦は母王命婦也○親子相置て非可爲命婦
也
　さまことなる夢
詩斯干篇乃占我夢吉夢維何維熊維羆維虺維蛇大人
占之維熊維羆男子之祥維虺維蛇女子之祥花云夢に
有ニ種類一　思夢思寢夢也○妾夢すちやかなもなきこさた見　忌想夢
なり　正夢まさしき夢なり○殷高宗夢傳說　丁固
夢腹上松生○江淹夢五色筆文藻日新　箋曰源氏夢
末卷に有此事ありしにまさる
花謙德公集　忘なん今はされもふ時にこそありしに
まさる物思はすれ　藤壺御事なり箋曰花說尤可然
抄に引歌無用と云々不可然河海引歌は不當あしま
になつむ舟そわならぬ○なつむ不レ行ヤラ體なり
えならぬは不自由なり
　おなし人にや
河湊入のあし分小舟さはりおほみ――戀んと思ひし
河○堀江漕棚無小舟行かへり――戀渡なん古今
　紫のねにかひける
紫の一もとゆへにむさしのゝ草はみなから哀とぞ
見る古今　○河海云紫の名い始なり此名字先達種々
に釋せりいつれも今案の了見なり根にかよひける

とは藤壺の御ゆかりと云なり古今の歌の心なり或むさし野といへはかこたれぬ或露分わふる草のゆかりを槿巻には君こそさはいへと紫のゆへこよなからす物し給めれ云々皆一本ゆへの義なり六條内府有房公云紫は色の最頂なり佛も紫磨金の稱と云今一部之内第一の美人なる故に有此號云々謬説なり

十月に朱雀院の行幸

朱雀院は後院なり天子脱屣之後の御在所なり三條朱雀に四町に衣造たり延喜御字宇多御門を朱雀院と申也○此行幸は末の巻紅葉賀の事也あらましを云なり

たちぬる月の廿日の程

紫上の外祖母於北山去九月廿日逝去なり○いみなと過て京の殿になるときゝ給へは程へてみつからのとかなる夜おはしたり

北山尼公三十ケ日之穢

細流第十六　かけろふ　てならへ　ゆめのうきはし

蜻蛉　巻名以歌並詞號之浮舟の終の其翌日の事なり五月にうつりて秋になるなり薫廿六歳なりかげろふの事蜉蝣蜻蛉陽焔等の説々ありこゝにては蜉蝣のごとき虫を云なりかけろふのもゆる春日とよめるには陽焔なり

かしこには　○浮舟君身をなけ給し跡の事なり

ものがたりの　○はま松の物語説可然河海説可然花鳥住吉の物語をひくそれは心かなはざる歟

京よりありし　○母の方より誦經させしつかひなり

かの心しれる　○右近侍從なり

このふみを　○母の方よりの文なり

ものへわたらせ　○薫の御方へなり

こゝにむかへ　○京の宿へわたすべきこなり

けふは雨ふり　○浮舟の入水せんと思立し翌日なり

手習巻に横川僧都にあひし時の雨なるべし

よへの御かへり　○母の方への返事なり

れいなりぬふしき　○いつくをはかと君もうらみんの返事せし事なり

ひとよいと心くるしさ　○一日あひたてまつらてか
　へり給しことなり
いつしかかひある御ありさまを　○薫の方へ出京あ
　るべきことなり
たいやしく　○雨抄に見たり又たゞをしはかりても
　いふべし
人にまれ　○人にてもあれ鬼にてもあれなり
猶の給へ　○時方か詞
御身のかはり　○匂の御身のかはりなり
けにいとあはれなる　○侍従か心也
心えかたく　○時方か心なり
なか〳〵めてたき　○浮舟のためには過分なるべけ
　れともとなり
かのおそろしさ　○女二の宮の御あたりより入のた
　ばかりていさなひ行たるかとなり
なきかけにと　○歎きわび身をはすつともなきかげ
　に憂名なかさんことをこそ思へ」とよみ給しこと
　なり
さてうせ給けん　○此事をくわしく母に申さてとな
　り
しのひたるゝ　○浮舟の心より出来ぬることにもあら
　ずとなり
やさしきほどならぬ　○はつかしから𛀁事となり
大夫うとねり　○宇治にさふらふとのゐ人内舎人右
　近大夫等なり
けすけすしく　○あまりに聊爾なるとなり
かたへおはする　○花鳥かたおやある人とありいか
　かかたへとは兄弟あるの義なるべき儀歟如何
かならず　○人のとりたる疑あるべしとなり
かなしきさあるべきこと　○悲もさむる事出来ては
　となり
入道の宮　○女三宮なり
いみしき事は　○薫よりの御使者となり
よへの事は　○葬送せし作法なり
大くらのたいふ　○なかのふのことなり
とのはなをいとあへなく　○薫の心なりとにかくに
　此宇治の里のうらめしきとなり
なやませ給　○女三宮わづらひ給ふ御あたりにはゝ
　かりあればなり
宮の御かたにも　○女二の宮の御方なり
さまことに心さし　○道心にすゝみたりし心なり

方便は慈悲をも　○歎をもと〻して佛の方便にてかくあるかとなり
まいらさらんも　○匂の御なやみを薫の尋給はぬもいか〻となり
その比式部卿宮　○八宮の兄なり源の兄弟なりかけろふの式部卿宮なり系圖に見たり薫の舅なりかく私のおもひのあるおりふし此輕服のこと出來ぬるさまを書出したる物語の作ざま殊勝なり古來の稱美なり
おそろ〳〵しき　○させる病にあらずとなり
め〻しく　○いやめなるさなり女々しくなり
さりや　○薫の心なり
こよなくも　○匂の心なり
まきはしらは　○浮舟のかたみには薫はこの人はあるまじきとなり○わきもこがきてはよりそふまき柱そもむつましやゆかりと思へは
いまはなか〳〵の　○薫の詞書より心へたてざるとなり上らうとは薫の昇進などしてなりのぼりぬることをみつから云へり
むかし御らんせし　○これより宇治のことを云いたし給へり
あひなく人のそしり　○女二宮を給はりし時分となり
なにかしひとり　○匂のき〻耳をいへり
もの〳〵しきすぢ　○浮舟の心本臺なとにたのむべき心はなき人なりされとた〻らうたしと見て過しとなり
いとあはれなる　○匂の詞なり
さるかたにても　○薫の詞なり匂に見せたてまつりたかりしとなり又御らんせられたることもあるべしとなり
宮にも　○中君の御かたなり
いみしくも　○薫の心なり匂宮の歎ぎたまふさまなり
さすがはたかき人のすくせ　○八宮の御子なればかく云へり
たゞいまのよには　○浮舟はたかきすくせとなり六君中君などをおきてこれに心をとゞめ給はゞとなり
われもかばかりの　○薫の我身も女二の宮の外に如

此思はとなり
のちのしたゝめ　○葬送の聊爾なるを云へり
はらからある　○母方受領方の人なれば世俗のことをいへるなり
月たち　○四月になりてなり
わたらましと　○浮舟を京へ出さんとかねて思給し日なり
やとにかよはゝ　○なき人の宿にかよはゝ時鳥かけて音にのみなくとつけなん
きたのみやに　○二條院に匂宮おはします時分なればなり
しのびねや　○ほのめかしたる歌なり
ふた所　○中君と匂宮となり
たちはなの　○ほのめかさるゝと思てよめる歌なり
かく物思所をば心して啼べきとなり
こと人よりは　○兄弟をいへるなり
こと〳〵しくうるはしく　○六條院にましませばよろつにこと〳〵しくもてあつかひ給へば物むづかしく匂はおぼすとなり
いりきたれは　○匂御使なり

かぎりのたひしも　○右近などが心の中に匂の御出の夜いさとかりしとのゐ人なとのことを思出たるなり
大夫も　○時方なり
ものゝ心もしり侍らす　○匂の猶さりならず心をまとはし給ふことなればついには右近などには行末久しく志をはこぶべき由を思しにかくむなしくなり給へはかひなしとなり今よりは私の志もふかくなりぬへしとなり
わざと御車　○時方か詞右近かむかへに車をやり給ふなり
ましてなに事　○侍従か詞也
なやませ給ふ　○時方か詞也
喪はたゝいま　○浮舟にはなれぬればつかへん人もなければ喪をは吉服のまゝにてあるなり
おはせましかは　○侍従か心なり浮舟の供をして出べき物をとなり
なにはかり　○侍従か事なり
あなたもてはなるべく　○中君もよそ外ならすとなり

かの御れう　○浮舟の料なり
たゝこの人におほせたる　○此人に似あひたるなり
こまかにいまめかしく　○くしの筥なとゝなり
かゝる御ふく　○御服の時分なればもて煩ふと也
あま君　○辨の君なり
あやしき事の　○匂の御ためにこそそらごとをもせしとなり
かくまめやかなる　○薫の實めなるにむかひたることなり
おほしかけぬ　○入水の事なり
さらにあらしと　○薫の不審に思給へるなり
されはよと　○右近か心なり
おほすさまならて　○八宮の宇治にてこそ生長し給べき人の思かけざるあづまの方へくだり給しことなどなり
もとよりの御身のなげきを　○薫に何事をもなくさみ給ひしなり
その御ほい　○京へ出し給べきことゝなり
つくは山　○母の事なり常陸守か妻なればなり
心えぬ御せうそこ　○波こゆる比ともしらての歌の心なり
いかなる事にかと　○薫の心なり
けんそう　○外と樣なるさまにし給しとなり
をろかにみなし　○我をゝろそかにさては思はれしよとなり
いまはかくたに　○薫の詞なり
おのづから　○右近か詞なり
あやしく侍りし所へは　○あづまやへ出たるなり
ふかきたにをも　○都などにすまば入水などの思よりはあるまじき物をとなり
人かたとつけそめ　○水になかすものなればなり
はゝのなをかろひたる　○葬送なとかろ〳〵しくせしと思へるに此事をきゝてことはりと思給ふなり
人のしのびたる事は　○匂の事なとはくはしくは母のしるましとなり
つみいとふかゝらん　○入水は自害のかとあればなり
いづれの底のうつせ　○河海の說いかゝうつせはうつせ貝なるへし
あさましき事は　○薫文の詞也

過にしなこり　○相かはらず中かよはし給へとなり
心のさかによろづを　○口にて御使にもの給へるなり
おさなき人とも　○常陸守の子どもなり
いたくしも　○御使をよみあけたるなり
いみじき事に　○母の御返事なり
こしごろは　○宇治にうちすてゝをかれしとなり
かたじけなき　○京へわたしてんとなり
かの君にたてまつらんと　○浮舟にまいらせて大將殿へたてまつらんと心さしたる帯なり
はんざい　○拜見なり花鳥に見えたり
すゝろなる　○只今はかやうのをくり物は無益となり
まいらせ侍て　○宗鑑申べしとなり
けにことなる事なき　○常陸守か子などめさんは人きゝもいかゝとなり薫のおもひやり深きこと殊勝なり
みかとにも　○浮舟眞實に常陸の守がむすめなりともあるべきにとなり
としころいつく　○浮舟の在所をなり

よき人かしこく　○此常陸守權門上﨟などをばこと〳〵しく思ふ心のある人なり
さるはたはせし　○薫の心なり浮舟の存生には母の方へ文などもつかはされざるとなり
いかなりけん　○何とむきに作善をもすべきことにかとなり
かのりんし　○此勞にて昇進すると見へたり
六十僧　○常は大般若をよめり讀誦六十人は僧なり此法事もさやうの類にや
宮にかしこまり　○女二宮にはゝかりてとなり
ふたり　○匂薫なり
あたなる御心は　○匂なりいかなることにてかなぐさむべきとて猶色好の方をたて給へり
かのとのは　○薫なりこゝにてふたりの心よく見えたり
后の宮の御きやう服　○式部卿宮薨給ゆへの輕服なり前にあり六條院におはしますなり
このみや　○匂なり
よき人の　○一品宮のあたりの物ふかきさまなり
つまおとちはちのおと　○琴琵琶なるべし

いたき物に　○つれなき人となり
いひやぶり給ふ　○匂宮小宰相に薫の事をいひやぶり給ふなり
などかざしもめつらしげなくば　○小宰相が心なり匂宮なればとてなひかぬ人もなくてはと心をたてゝ思へるなり
まめ人は　○薫なり
あはれしる　○世のあはれは人におくれねども数ならざる故にとはざるとなり
かへたらば　○心は浮舟に我身をかへたらばとなりあしき物によき物をかへたらばと云心なり引歌無之正徹室町殿にて此物語を講釈の時引歌なき由を申せしに慈照院殿の仰に云後撰歌第十九に「草枕もみち席にかへたらば心をくだく物ならましやと云る歌しかるべきかとあり招月尤しかるべきの由申さるゝ云々
つねなしと　○世間の無常はよくしれども人のしるべき程なけく事はなきをよくおしはかりて尋たるうれしきなり　○青表紙つれなしとあり是然るべき歟世間をつれなく思なしてゐる我身なり天文二十及此抄沙汰宗碩同之

もの〳〵しげにて　○薫のさまなり平生けだかき人なるとなり
人からもやんごとなき　○小宰相可然人と見えたり
見し人よりも　○浮舟よりもなり
なとてかくいてたちけん　○宮つかへには出たるぞとなり
人しれぬすぢは　○かけはなれてもてなし給へり
はちすのはなのさかりに　○夏になるなり此物語色々のことをかきもてゆく心は此思ひやなくさむとあなたこなたへし給さまをみせたるなり
五巻の日　○薪の行道の日なり
いつかといふ朝　○五日十座の御八講なり
きたのひさし　○寝殿の北面なり東は道場になる故に西にうつり給なり
なをしきかへて　○八講は束帯なり直衣にあらため給なり
しろきうすものゝ　○一品宮なり
つちなどの心ちそする　○長恨歌傳粉色如土とある貴妃の前にては其外の宮女は皆土のごとくみゆるといへるなり

物あつかひに　○氷をわる辛勞にとなり・
この心ざしの　○小宰相なり
左大殿の君たち　○夕霧の御子たちなるへしとなり
ひとへもはかまも　○すゞしなれはをともせざるなり　○此段女の心づかひを書なり小宰相かいひし事は又手でとにもてさはぐさま一品の宮の御ことば又下﨟女房の我さまをもわすれて來りしことさまゞゝ女しなをかけり
かの人は　○薫なり一品宮に心をとめ給へるなり
なかゝゝくるしく　○みそめたてまつりしことなり
女みやの　○女二宮なり
あなたに　○女三宮なり
れいの念誦　○薫なり
なそこは　○なに事にとなり
人おほく見るおり　○人のをしへにかけりうちゝゝの出たちはくるしからじとなり
ゑにかきて　○李夫人の事なり
一品の宮に　○薫の聞給ふなり
內にありし時　○一品の宮の御詞なりうへは內裏の御事なり

大宮の御まへにて　○明石中宮なり
いかゞうらみ　○女二宮の詞也
けすになりたりとて　○かく申べしとなり
おぼえ給へりと見るにも　○匂宮女一宮によく似給へり
大將も　○中宮の御前の事なり
いにしへの御事　○源氏紫上等の事なり
このさとに　○女二宮なり
かやうの物　○繪草子なとなり
なにがしかおろして　○薫の申おろしてつかはさば　曲もなく思給ふべしとなり
あやしく　○中宮の御詞なり
かれよりかは　○薫なり
もとよりかすまへ　○本よりうとゝゝしくましますとも今はことにしたしくなり給へる物をとなり
すきはみたる
ありしわたどの　○八講の時のわたどのなり
一夜の心ざし　○小宰相なり
おほかたには　○薫の詞也
をいの君だち　○夕霧の子達なり

いまより　○女房達の詞なり
大宮　○明石中宮の女一宮へ申給詞也
御ともに　○姫宮の御ともなり
まめ人の　○明石中宮の詞也
人より　○大納言の詞也
宮をこそ　○小宰相匂宮へはつれなく見へたてまつ
るとなり
いとあやしき　○大納言ありのまゝにかたり申なり
宮もいとあさましと　○明石の中宮なり
いざやげすは　○大納言詞なり
さらにかゝる事　○中納言の御詞也
かくてこそ　○薫の心なり
大將殿うちまさりて　○薫より又まさりたる繪など
をたてまつらせ給へり
せりかはの大將　○此物語今世につたはらざるなり
只今薫の心に思よそへられたる物語なるべし
おもひ／＼ての　○とにかくに大君なくなり給故に
こそ浮舟のことも出來つれとなり
又宮のうへ　○中君の事なり
あさましくて　○浮舟なり

みやをもおもひ　○匂宮をもうらみし我身のおこた
りとなり
心のとがに　○草子地なり薫の萬つ思しつめたる人
たにとなり
侍從はよそ人　○めのと右近なとよりはうとき人な
りしとなり
京になんあやしき　○浮舟は宇治より出京せり
さるすち　○中君兄弟にては又人のそねみもいかゞ
となり
きさいの宮　○中宮なり
みたてまつりし　○浮舟なり
せうとの　○蜻蛉の兄弟なり
御せうとのしゝう　○蜻蛉の式部卿の息の侍從なり
宮の君の兄弟なり
宮のきみ　○拾遺の詞書にもあり
裳はかりひきかけし　○きぬを略したるなり父宮さ
しもてあつかひ給しものをとなり
ちゝみこは　○浮舟といとこなり八宮と式部卿宮兄
弟なるをいへりそのゆかりをおほすなり
春宮にやなと　○此宮の君をまいらせんとありしな

りかくゝちおしき宮仕にいたしたてたることのお
とろへをいへり
水のそこに　○浮舟の入水も予知なしとなり花鳥説
いかゝ
この院におはします　○六條院なり中宮女一宮など
わたらせ給ふ時の事を云へり
左大殿　○夕霧の光輝をいへり
この宮　○匂なり
すゝしくなりぬ　○明石中宮御輕服すぎて内へまい
り給へり
この宮そ　○匂なり
あさゆふに　○匂の御さまなり
みやは宇治の御物かたり　○宇治侍従にかたり給ふ
なり
いま一所は　○薫なり
みつけられたてまつらし　○侍従なり薫にかくれた
るなり
おんなだにかう心やすく　○薫の自稱なり我ごとく
心やすき人は女にもあるまじきとなり
辨のおもとゝて　○女一宮の御方にさふらふ女房の
中におとなびたる人なり
そもむつましく　○そもとは詞の發端なり殊なる故
もなき物はそもはつかしきかとなり
ものはさこそに　○世間のことは何も如此となり
かならすそのゆへたつねて　○只今辨がいらへをす
るも必その故ありて打解て物を申にてはなけれど
ゝなり
かばかりおもなく　○はつかしく思まいらせぬにて
はなけれともかく宮仕人などの身にてあまりなる
物はぢは身に似あはざることなればとなり
はつべきゆへ　○薫の詞なり辨がはぢざるよしをい
へるをかこちての給へり
からきぬは　○辨がさまなり
をみなへし　○我實法なるをいへり女にましるとも
あだ名をばたて給ふそ心やすくはおもはでとの給
へり
このさうしに　○誰ともなく中將の君とてあなたに
とほりし人數となり
花といへは　○花といふ名はあだなれどなべての人
にはなびかじとなりあまりにすくよかなる歌なり

いまゝうのほり　○まいらんとせし人の薫に道をふたげられて居たるなるへし
おきなこと　○前の歌あまりになさけなくいへるとて卑下して翁言と取なすなり
やさかさは　○薫の歌なり
なにかはつかしめ　○薫の歌を云り女ともをはつかしめ給よとなり
おほかたの　○辨か詞をもしろき書さまなり惣してのことを申侍しとなり
はかなき事を　○薫のありさまなり
心なしみちあけはべりなん　○薫の詞戸口に居給へはかくの給へり
わきてもかの御ものはぢ　○女房とものはぢたるさまははづへきことのあるおりふしにやとの給へり
おしなへて　○辨がいらへたることを女房達のはぢたるなり誰もかくあるへきと薫の思給ふへきとなり
かの御かたの　○女一宮の中將君なり
この宮には　○匂へはたれもうちとけめなれたるよとなり

この御ゆかり　○女一宮かたさまのことなり
わがおもひ　○浮舟のことに心をつくせさ給返報をしたきと薫の思給へり
心ばせあらん　○心ある女は多分は我方によるへしとなり
されとかたいものかな　○人の心よろしきはかたき物となり
たいの御かた　○中君の我にはかけはなれたるさまにて又たのもしき方にはおもひ給へることを云り
こゝらの中に　○一品の宮の方をさしていへり
れいのにしのわたとの　○女一宮の御かたなり
なとかくねたましかほに　○人にねたましくおもはするやうに琴を引と也隈に見ん時はいかはかりおもしろからんの心なり此段皆遊仙窟にてかけり
にるへきこのかみ　○是も又遊仙窟なり花鳥に一品は女二宮御このかみとあり又の義は匂宮は女一宮の兄にてましませは女一宮を見たてまつらんと思給はゝ匂宮を見給へかしとなり
まろこそ　○薫の詞女一宮の御をちとなり是も同しき句を用たり

れいのあなたに　○中宮の御かたなり
いつこにても　○人々のいへるなり只かやうの御遊なとなるへしとなり
りちのしらへは　○律は秋なり又女にとれはなり
わがはゝ宮　○女三宮なり
みかと〳〵のおほしかしつきたる　○女三宮の父みかどは朱雀院女一宮は今上の御子なれはなり
ならへて　○女一宮を女二宮にならへてなり
このにしのたいには　○玉かつらの居給し所なり
みこのむかし　○式部卿宮薫にと思ひ給し物をとなり
みつけているさま　○人にはちたるさまなり
人しれぬ心よせ　○薫の詞也
ことよりほかを　○心にふかく思事は詞にはあらはしがたき故に言の外にもとめしり給へとなり「思ふてふことより外に又もかな君はかりをはわきてしのはん
いとおもほし　○うちよりの返事なり
なみ〳〵の　○薫の心なりなみ〳〵の人のやうに人つてばかりなりとなり
もとより　○薫の詞なりよそならさるなり
けにとおもひさはきて　○こゝにておとろきたるなり
まつもむかしのと　○今はしる人もなしと思しにとなり
もとよりなと　○もとよりおぼしすつまじと云る返答なり
たゝなへての　○宮の君のいらへをし給へるさまのかろ〳〵しきを云り大方の人ならは子細あるまし宮の君の御身の程にては今ちとかろ〳〵しきとなり花鳥の心はいかゝと見えたり
この人そ　○匂宮は必心したるへしとなり
ありかたのよや　○十分なる人はなしとなり
あやしかりける　○大略皆随分と思へる人も此宮の君のつらなる物なるを八宮の君たちたくひなしとありかたくふしきに思給なり
このはかなしや　○浮舟なり
あるかなきかの　○あはれともうしともいはしかけろふのあるかなきかにけぬる世なれは

手習 巻名以詞號之手習と云詞五所にあり薫廿六七歳の事なりかけろふの巻の始と同時分也浮舟のうせて翌日の事なり其年くれて次の年の春までのことなり小野にありてより手習の君とはいへり

その比 ○その比とは先時代をかけり僧都とは惠心僧都に比したる歟河海に見えたり

いもうと ○源信のいもうと安養の尼に似たり

ふるきくはんありて ○源信僧都の母長谷寺の觀音の利生にて僧都を生したることとありされははつせにまうでけるよせあるなり

むつましく ○僧都の弟子なり母に具したるなり

宇治の院 ○平等院歟朱雀院の御りやうとあれは別の所歟但宇多御門の御管領なれはさてかやうにかきなせる歟

はつせになん ○院もりは留守となり

おろそかなるしつらひなとして ○宇治の院をこしらへて僧都のもとへむかへにきたるなり

このはつせにそひたりしあさりと ○はじめ尼君にそひたりし法師と此弟子と二人なり

しそくへきいんをつくり ○退へき印を結なり

かしらのかみあらは ○法師なれはかくいへり身の毛たちたるなり俗人の髮ある人ならはとなりおちたるさまなり枕草子の下うれしき物の所に今そ御こしいでさせ給めてたしと見へたてまつる云々朝日はなく〳〵とさしあかる程に木の葉のいとはなやかにかゞやきてみこしのかたびらの色つやなとさへぞいみじきみつなはりて出させ給御輿のかたびらの中ゆるきたるほとまことにかしらの毛なと人の云ふはさらにこさならす云々

きつねの人に ○僧都の詞

けすとも ○尼君のまうけをするなりみつし所は食物を調する處なり

しるくやおもふらん ○變化の物にあらすとみさたむるなり

あやしのさまに ○やともりなり

むかしありけん ○目なし鬼のことをひけり

いかきさまを ○いか〳〵しきなり

雨いたくふりぬへし ○此雨則浮舟の入水の翌日なり

人におはれ ○普門品にも或被ニ惡人逐一といへり是

も横死なり藥師經に九の横死あり
御車よせて　○尼君達と来たるなり
けとられにける
うちきくまゝに　○いもうとの尼きみなり寺とは泊瀬なり
いかなりつらんとありさまみぬ人　○はじめてみつけたる人は鬼や何ぞと思ておちたるを今女とみさためてはおそろしくも思はていたき入たるなり
かみなとの御ため　○心經を神分とて加持の前に讀を云へり
あなかま　○僧都の云へるなり
からうじていきいでたりとも　○手習の君のことばなり
かりの物　○變化の物かとなり
ふたりの人を　○母の尼君と此女とをなり
そのわたり　○宇治なり
御さうそう　○浮舟の葬送なり
よへみやられし　○車をやりてけしきばかりせし事なれはことゝしくも見えさるへし
大將殿にみやの御むすめ　○大君の事なり

ひめ宮を　○女三宮をいふ
かたはらにいまひとり　○妹の尼なり
をのといふ所　○大原なり
夜ふけて　○精進なれは道にて逗留のあるなり
ゆめかたりも　○泊瀬にての尼君の夢なり
けしやく事　○護摩亦邪氣には芥子を護摩の煙に焼也
四五月　○聲によむなり卯月さ月なり
あがほとけ　○僧都をいへりこゝまてとは此坂まではと云なり
おほな〳〵　○念比になり
ようめい　○拜面默戒行の功德なるへしとなり
さにや　○思より給ふ事のあるかとなり
なにかは　○尼の詞
なにかそれ　○佛も種なき事はあたへ給ましきと也
むざんのほうしにて　○戒法の中に破る事おほけれとゝなり
六十　○今はたとへ名をたつともくるしからすと也
よからぬ人の　○弟子ともの云なり
いみしき事とも　○行者の物を祈るには平生の修練

の行をも此時の願にかけて祈るなり
人にかりうつして　○よりましなり　○紺青鬼のことをひ
けり
むかしはおこなひせしほうし
つきたる人　○浮舟のよわきさまなり
さうしみ　○浮舟なり
宮ときこえし　○匂宮と思しなり
ほいの事も　○入水の事なり
たほくの日ころも　○六月の比なるへし
おれ／＼しき人　○浮舟心やはらかなる人なり
ひさゝせたゝぬ　○老たる人達ばかりある所となり
天人　○此段悉皆竹取の翁のかくやひめを得たる時
　の心にて書り
たけとりのたきな　○かくやひめの物語の心なり萬
　葉の竹取は心かはれり
このあるし　○僧都の母なり
ねひにたれと　○尼君のことなり
むかしの山さとよりは　○宇治なり
ひたひきならす　○浮舟の心なり
かの夕きりの　○草子地なり在所の地形を云なり思

出られてと云にて句をきりて見るへし
山にかたかけたるいへ　○ひたひきならすの句にか
　ゝれり
少将のあま　○小野尼につかへたる人なり
かゝるわさは　○尼君の浮舟に問なり
むかしも　○浮舟の詞也
てならひに　○是より手習の君と云へり
身をなけし　○行末もうしろめたしとなり
われかくて　○尤あはれなる歌なりとりあつめて萬
　のことを思たるさまなり
わかき人のかゝる山さと　○此山さとにはわかき人
　なともなしとなり
じゝうこもき　○二人の名なりこもきはこもきみな
　り
みやこどりに　○花鳥説尤殊勝なり
よの中にあらぬ　○前に母との宇治にての贈答の事
を思出るなり別の引歌は無用なりあつまやの巻に
「ひたふるにうれしからまし世間にあらぬ所を
もはましかは浮舟の言也「うき世にはあらぬ所を
もとめても君かさかりを見るよしもかな母君の歌

なり宇治へ行ぬ前なり
くはしき事　○尼君もかくしたるなり
しのひやかにて　○浮舟の心に薫のことなと思出し
たり
としころのつもり　○尼君の詞也
心のうち　○中將の心中なり過にし方と云より中將
の詞なり
すみはなれかほなる　○尼君の世ばなれたるすまひ
故におのつから疎遠なるとなり
したひまとはさるゝ　○囘達すへきとて人々いとな
へるとなり
山こもりの　○尼君なり
すいはん　○ひめの飯といふ物なり
はすのみ　○蓮實なり
いふかひなく　○あま君の心なり中將をよそ人にせ
んは口惜きとなり
わすれかたみを　○我むすめに子なともなかりしこ
となり
とはすかたりも　○此手習の君の事なり
ひめ君はわれは我と　○尼君は昔のむすめのことを
思ひ浮舟は又我身の昔のことを思出たるなり
ひはた色　○尼の中にすみ給故に紅の袴もひはた色
なるへし
こと〳〵しくいらゝきたり　○浮舟の衣裳のさまな
り
あないみしや　○手習の君の心なり
かのらうのつまいりつるほと　○中將の廊のつまよ
りいりつる時のことを云へり
かせのさはかしかりつる　○雨のふり出へきさまな
り
たちいて給へり　○奥の方へ立さり給へることなり
ましてこまかに　○少將の心なり
すきにし御ことを　○少將の詞なり
かゝる事こそは　○中將の心なり
なにゝほふらん　○手習君かゝる所に住給あやしき
となり「こゝにしも何にほふらん女郎花人の物い
ひさかにくき世に
人のものいひ　○人々のいへるなり
とう中納言　○鬢黑の息と云々又別人ともいへりい
つれにてもなり

心うくものをのみ　○尼君手習の君にいへる詞なり
へたてきこゆる心も　○手習君の詞おやとてたのむへき人もなけれは尼君ばかりこそたのもしく思へとなり
せんしの君　○中將の弟なり
をのにたちよりて　○中將の詞也
むかし物かたり　○住吉物語なとを思へるにや
しのひたるさまに　○中將の詞なり
わつらはしけれと　○尼君の心なりわすれわひと云より尼君の詞なり
うちつけ心　○中將の詞也
おほしよそふらん　○昔の御むすめに思よそへ給へはとなり
こと〳〵にへたて　○萬事にとなり
あたしの丶　○あたなる風にはなひきそとなりあたし野名所と云へる義あれとも只あたなると云心しかる丶へし京極黄門も名所の中に不載之云々尋へし
きこえさせつるやうに　○前によにありて人にしられんことをくるしけに思てといへることなり
うつしうゑて　○尼君の歌なり

こたみは　○中將の心なり只今はことはりとなり
まつちの山　○誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人そあるらし」両義あり一義は此尼君の浮舟の心もゆかさることをそばより中將に契り給ふこともあるへしとなり又義は手習君の性しうねくて打解て物もの給はざるは別に契る人ある歟となり
此說可レ然歟
たいめんし給へるにも　○中將に尼君對面なり
よに心ちよけなる　○心ちよけなる人は我身にはふさはしからさることなり此うけ給はる物思のあるさまなる人こそ我心にはよくかなひたれとなり
心ちよけならぬ　○尼君の詞也
よをこめたる　○行末とをき心なり
人にものきこゆる　○手習の心つよきさまなり
あきをちきれる　○前の引歌をうけて云へり我をちきり給との給しと取なしてかこちかくるなり
まつむしの　○松虫は尼君になして云へり我身をまたる丶と思てきつれは我ぼのめかす人はつれなき故にその露にまどふよしなり
あま君はやうは　○はやうとはわかき時はとなり

秋の野の　○野への露にてこそあるらめ此やどの露
　けさにてはあるへからすとなり
うちにもなをかく　○手習君の心なり
かきりなく　○手習の君の心なり
しかのなくねに　○山里は秋こそことに侘しけれ鹿
　のなく音にめをさましつゝ
いまはしめて　○こゝへ來ては昔の事思出らるゝな
　り今此姫君は思すて給へばはたしもなしとなり
見えぬ山ち　○世の憂めみえぬ山ちへいるへきもや
　すき事と也「世のうきめみえぬ山ちへいらんには
をちなるさとも　○引歌未勘引歌なくては心得かた
　きなり
ふかき夜の　○前のあたら夜をと云へる詞をうけた
　り
かくなんと　○手習君のよめると尼君のいへるなり
山のはに　○ねやのいたまとはむねの思もはるゝや
　となり
このおほあま君　○尼君の母なり此段物語の狂言に
　かけり
むかしの事なと　○昔の尼君のむこの中將なとゝ云
　ことをもよくわきまへざるなり
いてそのきんのこと　○大尼君我むすめの尼君にい
　へる詞
くそたち　○女房達なりくそとは今の世にもこそさ
　人の名に付て云事なり
それなめりと　○中將の心にこれは尼君の母なりと
　推量したるなり
さためなき　○孫女をはうしなひて此老尼のなから
　へたるを不定の世とあはれに思なり
むかしきゝ侍しより　○尼君中將の笛をほめたるな
　り
山風をのみ　○いやしき耳故かとなり
いまやう　○中將尼君の琴を感したるなり
よひまとひもせす　○大尼君なり
をうなは　○嫗字なり老女の稱なり
いとしのびやかに　○中將なり
いとよしと　○大尼の氣にあひたるなり
とのもりのくそ　○とのもりの君と云なり
たけふちゝりゝ　○笛の音をしやうかにするなり
　たけふちちりゝたり唱歌なり

よへはかた〳〵　○中將の文の詞
わすられぬ　○おもしろき歌なり
おほしゝるはかり　○手習君をいひなびかし給へと
なり
しのはれぬへくは　○我身のしのびかたきとなり
いとゝわひたるは　○尼君なり
あやしく物おもひしらぬにや　○前にもはらかゝる
あたわさなとはし給はすと大尼君のいひしこと也
めつらしからぬ　○尼君の返事なれはなり草子地な
り
いとむつましくも　○手習の心なり
命さへ心にかなはす　○入水せんとせしも心にかな
はすとなり我身は觀音の利生もなきをいへり又は
波浪不能沒のちかひもあらはれたるなるへし
はかなくて　○はつせ川ふる川のへに二本ある杉年
をへて又もあひみん二本ある杉○花鳥の義二本は
匂宮薫をいふと云へり此說はあまりなるか心はた
ゝ年をふるとも杉のもとへは二たひ行へからすと
なり
ふる川の　○手習君誰人にてもあれ我子のことく思
ふとなり
しのひたれど　○泊瀬へ人々したひまいるへしとな
り
たのもし人　○尼君なり
くるしきまで　○少將の尼の詞也
きせいたいとく　○橘良利事なり抄に見えたり
さたすぎ　○手習君の心なり
心には　○何事も分別せさる身なれどもなり
御心さしのほとも　○時節の感をおぼしめせとなり
しみつかん事のやうに　○物いふ事きゝたる計に身
のきずにはならじと也
おはせぬよしをいへと
山さとの　○中將の歌なり手習君也物思ふ人なから
あはれをしらすかほなるはいかゞとなり物思ふ人
こそ思しるへきことをとなり落句おもしろき歌な
り
うきものと　○思はもとよりあれども卑下したり
我身は何のわきまへもなきとなり
ひとつはしあやうかりて　○本緣髓ならす師說心は
身をなげんとせし人の行道に一橋の危をみて道よ
りかへりたると云こと也　○本說たしかならされ

ご心かなへり可ゝ用なり
こもき　○わらはの名なり手習君のともにつれて大尼君の方へ行給つれど故中將にゐて丶又中將のおはする所へ行たるなり
みなひと丶ころ　○少將君左衛門などなり
いたちとか　○まかけをさしたるなり
おやときこえけん　○これよりは手習君の一生をいへり八宮をも見さゐことなり
はらから　○中君なり
さるかたにおもひさだめ　○薫なり
みやをすこし　○匂宮なり
こしまの色　○橘の小島は色もかはらしをとよみ給しことなり
のとやかにものし給し人は　○薫なりおり〳〵に思出るなり帚木の品定めにも此心見えたり人の心もちひを丶しへたるなり
からうして鳥のなくをき丶て　○引歌に及へからす鳥の音を聞て母を思ひ出たる尤あはれなり佛法をもきかすは長夜の闇にまよふへしとなり
などにはかに　○こ丶なる人の使に問なり

はなやかに　○僧都の面目なりと云へり
はつかしくとも　○手習君の心なり
さかしう人　○尼君長谷寺への留守なれば也
心ちいとあしくのみ　○手習君此大尼君に申給なり
ほけ〳〵しく　○大尼君領狀あるなり
か丶れとてしも　○たらちねはか丶れとてしも烏羽玉の我くろかみをなですや有けん
まろなるかしら　○圓頂は法師の事なり
は丶の御かたに　○僧都なり
ひんかしの御かたに　○尼君をひんかしの方と云なるへし
このおはせし人は　○手習君なり僧都の詞也
たちて　○僧都なり
ふいにて　○僧都の詞也
世中に　○手習君の返事也
またいと　○僧都の詞也
おさなく　○手習君の返答也
あやしくか丶る　○僧都の心中也
物のけもさこそ　○以前いのりし時の事なり
御いむ事は　○こ丶より僧都の詞也

きうなる事　○公請にて急なることなれはなり
かのあま君　○手習君の心の中なり七口すぎはかの
　尼君還向あるへしとなり
みたり心ち　○これより詞なりやうにてと云まで心
の中なり心ちつよくわづらふ故にしたる分にてあ
　るべきと心かまへをしたるなり
いとくるしく侍れば　○これより詞なり
夜やふけ侍りぬらん　○おもしろきかきさまなり
いつらたいとこ　○僧都のよひいたすなり
けにいみしかりし　○宇治にて見つけし人なればな
り
うつし人にて　○女房のかたちにて世にゐ給はんこ
　とはよろしからぬとなり
少將のあまはせうとのあさり　○僧都のつれ給人を
　あへしらへるなり
わが御うへ　○僧都の衣や袈裟なり
いつかたともしらぬ　○妙なり
あなあさましや　○少將なとの云なり
るてん三かい　○流轉三界中。恩愛不レ能レ斷、棄レ
　恩入二無爲一、眞實報恩者也

たちはてゝ　○恩愛不能斷といふをきゝて我身はお
　やなどをも思すてし身と云なり
かゝる御かたち　○僧都の出家の功德を說給へり
とみに　○手習の心なり尼君ゆるさゞりし事也
これのみそ　○佛の利生はこれのみ成就したるとな
り
かきりとおもひはてられて
なをたゝいまは　○手習の心なり
くらうなして　○人々をはぢたるなり
なき物に　○手習君の一生なり身をも人をもなき物
　に思ひすてたるとなり
おなしすぢ　○同心なる歌となり
かゝること　○いひやりたるなり
きこえんかたなきは　○文の詞なり
きしとをく　○此世の岸なり
心こそ　○うき木は舟なり世をすてはてたると卑下
　してかく世をはすてたれと猶さだめなしとなり
めづらしきにも　○中將の心なり
かゝる身にては　○尼君の詞なり
まことのおやの　○尤あはれなり

いと物はかなくそ　○尼君の詞なり
いよ〳〵いとたふとき　○案の内に僧都の験をあらはし給へり
おなし御丁に　○中宮と一品の宮となり
むかしより　○中宮の御詞なり
世中に　○僧都の詞
あやしうけうの　○希有なり
いとあやしう　○僧都浮舟をみつけし時の事をかたり給へり
その女人
しらすさもや　○僧都の詞なり宰相か詞に今はしられぬらんと云ひしにさもやあるらんとこたへ給なり
ゐなか人のむすめ　○きはめてゐなか人の中にもよき人あるとなり
つみかろきさまの人　○忍辱の人端正なる人に生るるとなり
そのころかのわたり　○浮舟のことなるへしと中宮の思より給へり
あね君のつたへ　○二條院よりのつたへなり大君も此宇治にてうせ給へはさやうにてもあるへしとなり
かたきたち　○自然かたきかましきことにてやと僧都もかくし給なり
この人にそ　○小宰相なり
いまはたゝ　○僧都の詞也
はかなき物に　○すてに宇治にてなき人と思し御身なれはなき物に思なし給ことはりとなり
あやうすもの　○僧都の御布施にとり給物ともなるへし
いのちは薬のうすき　○陵園妾顔色如花命如葉とて君恩のうすきことにいへり然るを無常の方にとりなしていへる尤殊勝と云々
松門にあかつきいたりて　○陵園妾の陵をまほりてあるに此手習の君のなりのよく似いるとなり
おもひよらず　○手習の心なり
山ふしは　○山ふしの身ははけしき嵐をも何とも思ましきを今日はたへがたしとなりこれも柏城終日風蕭瑟の心にて此段皆陵園妾の心にてかけり
われもいまは　○手習の心なりつゝと云へる詞にて

僧都ははや山へのぼり給ふと見るへし

はしのものに　○階なり

こゝにいさ心ちよけなる　○ほこりかなる人ありて
　は面もあるまじ此手習の君のやうなる人ならては
　となり

いさまあり　○中將の詞也

こからしの　○手習もさまをかへたれば心はとめ給
　ぞとなり

いつへのあふき　○髪のそかれてすそのひろこりた
　るをいふなり

けはひもきこえぬ　○中將の事なり

よのつねの　○中將の詞なり

きしかたのわすれがたくて　○故姫君の忘かたみに
　となり

またいまひとつ　○兄弟のさまにもむつひたきとな
　り

いさゆくすゑ　○尼君の詞手習のことを云

このあさきみ　○中將の心に思ふなり

ゆくすゑの　○中將の詞なり

人にしらるへき　○尼の詞也

いまはかゝる　○後世のことのみを思へるさまなり

おほかたの　○中將の歎なりもしは我身をいとひ給
　ふ故にかくそむき給ふかと思へは我身もうらめし
　きとなり

おもひよらす　○手習君の心なり

くちきなとのやうに　○死灰槁木のごとくにてある
　へしとなり

ゆきふかく　○冬になりぬるとなり

としかへりぬ　○薫廿七歳なり

君にぞまとふ　○匂の去年の春のことなり

かきくらす　○落句尤おもしろし

山ざとの　○姫君を祝したるなり

ゆきふかき　○尼君のためはかりかとなり

あかさりし　○薫にても匂にてもなり

こやに　○後夜なり

こぞおとゝし　○一任のあいたにとなり

ほけ〳〵しき　○大尼君のほけてかひなしとなり

こなた　○あま君なり

ひたちのきたのかた　○花鳥の説浮舟の母とあり如
　何これは當時の常陸守なるへし

とし月にそへて　○尼君の詞也音信もなきとなり
えまちつけ　○大尼君の老耄をいへり
我おやの　○手習と心也
こその春またうせ給にければ　⊙浮舟の事なり
おらすへきもの　○織へきものなり
いかてかは　○手習の心なり
かのひしりのみこの　○八宮なり
ほと〳〵すけもし給つへし　○薫のこと
かのわたり　○手習の心なり
やうの物　○おなしやうの物となり
いみしく　○薫浮舟を戀したひ給となり
わかく侍しときより　○我身はとりわき薫をたのみ
たてまつるとなり
世中のいちのところ　○攝政關白をいへり
ことにふかき　○手習の心なり
左大臣殿　○夕霧とはいつれそとなり
わすれ給はぬ　○手習の心なり
あまころも　○かゝる裝束を見て昔をしのひたるなり下の心はこのいとなみも我身の周忌の佛事の料なれは昔をおもひ出ていとあはれなるとなりかはれる袖をかけて忍はんとよめる歌なり
すきにしかたの　○こゝにて聊ほのめかしたるなり
さりとも　○尼君の詞也
むかしの人　○我むすめを云へり
しかあつかひ　○母をいへり
みしほとまては　○手習の詞也
はてのわさ　○三月の末也
かうふり　○大將紀傳をかうふりと云へるなりされとこゝは元服の事なり六位の藏人と見えたり
雨なとふりて　○四月なり
たれも心のよるかた　○前の巻にも宇治なとにとまり給ことは本意ならす思玉しなり
ところのさか　○大君浮舟のうせにし故なり所詮宇治は道心をすゝむへき所なるとなり
さいつころ　○浮舟の周忌になり
ひしりのすみか　○ひしりたちたるなり
かのこと　○僧都の申せしことなり
そこにはおそろしき　○中宮の御詞也
うちつゞき　○大君浮舟のことうちつゞきたる故はかりにかくの給ふかと薫の思給なり

猶かくしのふる　○中宮の用意ある御心なり
きみそこと〳〵きゝあはせける　○中宮の小宰相にの給ふなりこと〳〵くよくきゝしとほりを薫に物語申へしとなり
おまへにたに　○小宰相の詞也
さま〳〵　○中宮の御詞也
いとおしき　○匂の御詞あれはなりと推したるなり
花鳥説はいかゝ
たちよりて　○薫宰相のもとに立より給へり
めつらかに　○薫の心
うつゝの人の　○現在の人のことたにしのびがたしましてなき跡のことはさま〳〵人もとりあつかふへしとなり
なほあやしと　○薫の詞なり
おりたちてたつね　○薫の性殊勝なり
さてさなのたまひそ　○匂宮明石中宮へ薫にはかくし給へと申されしかごなり
みやもかゝつらひ　○匂の尋給けしきあらは我は一向にそらしらぬにてあるへしとなり
うつし人になりて　○我眞實の人になりてとなり後世の緣をたのみてありなんとなり前と一句に見るへし
きなるいつみ　○冥途なりそのまゝうせたる人と思へしとなり
いとおそろ〳〵しく　○浮舟の性を申給ふなり
きこえかたなき　○匂宮のすき〳〵しきことなり
心うくなんと　○御おや心なり
いとおもき　○中宮の御事なりくちかろくなとおはしまさゞるべし
せうとのわらは　○ひたちの守の子なり
その人〳〵には　○母めのとなとなり
うらみん夢　○まつ打みんにもあはれをそふへきたよりに此はらからを具して行給へり　ありけんとよみやるへし
さすかにその人と　○自然をかしけなる人に具してありてはとなり

夢のうき橋　薫廿七歳手習巻の末は五月邊まてのことなるへし此巻は其末の夏なり
巻名事河海にくはしく見ゆ夢の事經文等をひけり別ては一巻の名惣しては一部の名たるへしと云々此巻にとりては手習の君の一生さなから夢のことし或は陸奥にたたり常陸にわたり都にのほりてもこなたかなたうつろひ宇治にても様々物おもひにて身をもうしなひ小野にいたるまて悉く夢の外にあらすと云となし又一部の名にて見れは桐壺の巻より源氏の君の一生の事幻の巻におさまり薫大將の一生は此巻におさまれり盛者必衰の夢幻に古今にあらはして見せ侍るなり夢浮橋とつゝきたる詞なきを題號におくこと古来不審あり今案此物語は偏に莊子の筆法によれりしかるに彼逍遙遊篇も逍遙とはかりありて遊の字はなし又次の齊物論も物とのみいひて齊の字はなきなりいつれも心をもちひて名付たるなり此夢浮橋も夢といはんためなり夢ははるかにみぬさかひもゆきかへる道あり又橋は道もなき水の上にも道をなす心あるを用ひて名付侍るにや其心甚深なる者乎此巻はとりわき齊物論をもちてかけるにや齊物論のはしめには南郭子隠几形如槁木と云事よりしるして胡蝶の夢のとにて書とめたり此物語は手習巻の末にすへてくち木なとのやうにて人にすてられやみなんとかきて此巻にて昔の事思ひ出つれとさらにおほゆることもなくあやしういかなりける夢にかとのみ心もゑすなんとかきたる胡蝶の夢に周となれるかとかきたるに符合せるにや玄妙の事なり

やまにおはして　○薫中堂へまいり給へり小野に行たまふへき心さしの故なり手習巻月ごとの八日には必たふときわざをさせ給へは薬師佛によせ奉るにてもなし給へるたよりに中堂には時々まゐり給ふとあり

をのゝわたりに　○ひえさかもとゝ云所小野大原の山なり比叡坂本と云小野郷大原の村なり

おも〳〵しう　○僧都の心なり

しか侍り　○僧都の返答

ことやうなるところ　○よのつねならすみくるしき所となり

そのわたりには　○薫の詞夕霧のかよひ給し宮す所のすみ給しわたりなれはなり

こゝにうしなひたる　○薫のとかなるやうに人の云

ひかくるとなり
とはかりおもひにて
宇治の院　○平等院
らうけ　○所勞の義しかるへし
この人も　○浮舟の事なり
たまとの　○花鳥にいへるしかるへし又宇治のこと
なれは宇治稚子の宿にふしてうせにけることも相叶
へきかとなり　うち稚子事花鳥橋姫の巻にしるせ
り
三月はかり　○僧都のみつけたる三月の末のことな
り前に秋になりてとあれは四月五月六月の三ヶ月
はなき人のごとくなりしことなり
さてこそあなれ　○薫の心なり浮舟なりと治定し給
へり
夢の心らして　○こゝにてはしめて夢の字あり
かくおほしける　○僧都の心あり薫の愁傷をあやし
と思なり
なまわかん　○薫の返答なり
つみかろめて　○出家の事なり
夢のやうなる　○夢の字二

かたちをかへ　○僧都の心なり
まかりおりん　○僧都の返答也
かの御せうと　○手習の巻にうちみし夢のあはれを
そへんさいひし人なり
うちわらひ給て　○薫なり
三條宮　○女三宮なり
ふみかきて　○僧都の文なり
すゝろなるやうに　○浮舟をも我弟子にせし故にへ
だて給ましとなり
あをはの山　○名所にあらす夏木立なるへし
谷の軒は　○谷にあたりて見へたる軒葉なり
たがおはしますにか　○尼君の詞なり
ひきほし　○海草なるへし
いとこの世とをく　○浮舟の心なりうちつけに御随
身の聲もそれと思ふはせられたるなり
よかはにかよふ　○こゝのさまなり
人きかぬまに　○ひたちの守の子なり
うせにしいもうと　○浮舟のことなりあねなれと女
をはいもうとゝいへるなり
わらうた　○圓座なり

かやうにては　○此わらはの詞なり
なかきたまへり　○僧都の名なり
けさこゝに　○文の詞
こと〳〵には　○毎事はまいりて申へしとなり
こと人は　○くはしくは事の心をしらさる人はしる
ましきとなり
宇治にもとき〳〵
ゆめのやうなる　○夢の字三
うちおほゐ給へる　○浮舟に似たり
なにかいまは　○浮舟の詞
かゝる人にも　○小君なり
かの人もし世にものし給はゝ　○母の事なり
いとかたい事かな　○尼君の詞なり
このこもさはきゝつれと　○さは聞つれと此説可用
之一説さはぎ來つれとゝ云々
けそうの人　○見證の人なり
なそのたはせよ　○尼君の云なり
おほしへたてゝ　○童の詞なり
例のものめてのさしすぎ人　○草子地なり

さらにきこえん　○薫の文の詞なり
ゆめかたり　○夢の字四
だにといそがるゝ　○みづから申たきと也
われなからもとかしき　○我身さへもとかしまして
人いかに思らんとなり
のりのしと　○法の師にのみこそ僧都をはたのむへ
きにかく思ひかけさることにたのみたるとなり五
文字との字めつらしくおもしろきなり
いとよつかぬ　○尼君の心
いかゝきこゐん　○尼君の詞
いかなりける夢にか　○夢の字五
あるしそ　○尼君なり
うつしかたれと　○童の云へる詞を寫して語るなり
くものはるかに　○引歌未勘なり心は横川は雲の八
重たつ山とはいへれと此あたりはさまてふかゝら
さる所なれは風はけしくともおり〳〵はとふらへ
給へと小君にいひたるなり
山ふかくともと云ふ一本あり心はおなしかるへし
いつしかとまちおはするに　○薫なり
人のかくしすゑたるにや　○花鳥説いかゝもしかく

しすゑたる人ある歟となり薫の宇治にかくしすへ給へるやうにしてをきたるかとなり

本にはべめる　○紫式部此一部我身のかきたるさいふをしらせんとてむさ〳〵と夢やなにやのやうにかきてさて本にかやうの事あると云へる心なりかやうにして行末をかゝさる見はてぬ夢のさま甚深微妙の趣向と見たり

此奥書者三光院の明星抄の奥書と見ゆ

此一部永正十年受庭訓畢彼聽聞詞短心不足更非可令外見不能淸書送數年半爲蠧魚之巢爰或人難去所望之間如形加淸書終一部功參差漏脫之事繁多歟重而可加潤色而已

于時大永第八仲春十九日

此聽聞全部先年所令書寫之一本不慮失火無念至而所望之由懇切之嚴命難默止之間卒爾馳禿筆猥籍無極曾以不可有他見者也

　天文甲午暦于秋佳節終功畢亞三臺都督郎在判

寫本三光院殿實枝御筆今川氏眞有之者也

　天正十九年四月十六日一校了

源氏官職故實秘抄

全

源氏官職故實秘抄卷一　桐壺

桐　壺

女御更衣あまたさふらひける中に

[女御]とは一員にかぎらず又は上皇皇太子もあり抑此號は雄略天皇七年にはじまれりくわしくは下に見ゆ其後中絶久し然るに桓武帝復女御の號を與し給ふにや是より後國史にも其號多見え侍る也○日本紀雄略天皇七年是歲吉備上道臣田狹侍二於殿側一盛稱二稚媛於朋友一曰。天下麗人莫レ若二吾婦一茂矣綽矣諸好備矣曄矣温矣種相足矣。鉛花弗レ御。蘭澤無レ加。曠レ世罕レ儔當時獨秀者也。天皇傾レ耳遙聽而心悅焉。便欲下自求二稚媛一爲中女御上　○後宮職員令御說曰妃夫人嬪是女御之類也　○女御數多例藤原朝臣多美子貞觀六年正月廿七日爲二女御一八月十七日叙從三位九年三月十二日正三位　平朝臣寛子貞觀六年八月廿五日爲二女御一十一年正月八日授二從四位下一　嘉子女王貞觀九年四月朔日爲二女御一從四位下　源朝臣濟子貞觀九年八月廿九日爲二女御一　源朝臣貞子貞觀九年十二月七日爲二女御一　藤原朝臣諱貞觀八年十二月廿七日叙五位下高子爲二女御一十一年正月八日從四位下十三年正月八日從三位後日二中宮一至二皇后一長貞卿女也　忠子女王貞觀十二年三月廿六日爲二女御二　無位藤原佳數子貞觀十五年十一月廿六日爲二女御一　無位兼子女王貞觀十五年十二月七日爲二女御一　無位源朝臣宜子貞觀十八年八月廿一日爲二女御一　以上貞觀女御之例也河海所見擧二延喜女御之例一者是據二源氏物語之執意一故也然今擧二舊例一者既非レ有二別意一也

○上皇女御例元慶三年三月七日丁酉停二太上天皇清和帝從四女御從二位藤原朝臣多美子從四位上嘉子女王從四位上兼子女王忠子女王正四位下平朝臣寛子從四位上源朝臣濟子清貞觀九年八月紀作レ治從四位下源朝臣嚴子藤原朝臣頼子正五位下源朝臣暄子。藤原朝臣佳珠子源朝臣宜子十一人季祿月俸祿二太上天皇敕一也以上貞觀元慶例三代實錄上略○東宮女御例日本紀略正曆五年五月九日今日質一越東宮女御有二御產一云々○長德元年四月六日中宮并東宮女御行二啓彼里第一云々○周禮女御掌下敍二□子王燕寢一以二歲時一獻レ功事上註女御即八十一御妻也御猶レ進也侍也敍御以二九九一而叙進也歲時獻レ功當而獻二絲枲之功一事也

[更衣]女御の次にして其品劣れり凡四位五位の人の女なり或は公卿の女もありそれ更衣の號河海には承和三年八月の文をあげられたりしかれども是を國史によりみれば女御の號を載て更衣の名なし其文上女御の注にしるせり續日本後紀及三代實錄によれば更衣の人多みえたり本邦更衣のはじめ

は嵯峨天皇御宇に始る臣下もの次にしるしぬ或曰更衣は主上の御衣をめしかへ給ふ所のよせ名なりと又御息所といふと一物二名ときこえし御息所の註に記すべし○續日本後紀承和九年正月三日天皇朝覲太上天皇及太皇太后宮於嵯峨院是日詔授從五位下秋篠朝臣康子正五位下無位山田宿禰近子從五位上並太上天皇更衣也（太上天皇嵯峨帝也）○三代實錄貞觀八年三月十三日辛卯皇子貞數爲親王年三歲母更衣參議太宰權帥從三位在原朝臣行平女也皇女識子爲內親王年三歲母更衣故神祇伯從四位下藤原朝臣良近女也。皇子長頼賜姓源朝臣年二歲母更衣從五位下行信濃權介佐伯宿禰子房女也○同年十一月廿五日戊戌皇子貞眞年一歲貞頼年一歲並爲親王母更衣齋宮頭從五位上藤原朝臣諸藤女也○貞頼親王母更衣木工允正四位上藤原朝臣眞宗女也○同實錄仁和三年二月十六日庚申勅以更衣從五位上藤原朝臣元善爲女御中納言從三位山陰之女也○漢衛皇后傳皇后字子夫生微也其家號曰衛氏出平陽侯邑子夫爲平陽主謳者武帝即位數年無子平陽主求良家女十餘人飾置家帝祓霸上還過平陽主主見所侍美人帝不說既飲謳者進帝獨說子夫帝起更衣子夫侍尚衣軒中得幸師古曰尚主也時於軒中侍帝權主衣裳○軒中軒車之施幰者 ○漢灌夫傳起更衣師古曰更改也凡久坐者皆起更衣以其寒煖或變也

上達部うへ人

[上達部]とは公卿をいへり相當四位の官を帶する人たりとも其當三位以上ならば上達部也但當位四位の人にても參議なればまた上達部の列也猶委は箒木の卷にしるしぬ[うへ人]は殿上人なり四位五位の昇殿ゆりたる人をいへり ○淸少納言枕草紙上達部は春宮大夫左右大將權大納言權中納言宰相中將三位の中將春宮權大夫侍從宰相云々

父大納言

[大納言]の號は天武天皇御宇蘇我果安臣巨勢比登臣紀大人臣にはじまる是太政官の次官たり凡諸官に長官次官判官主典あり和名抄に太政官には大臣を長官とし納言を次官とし少納言弁を判官とし外記史を主典とすと見えたり大納言のつかさどり下にしるしぬ ○職員令大納言四人掌參議庶事敷

奏宣旨侍従獻替義解納言王者喉舌之官也言納二下言於上一宣二上言於下一也　○書舜典帝曰龍朕堲二讒說殄行一震二驚朕師一命レ汝作二納言一夙夜出二納朕命一惟允

母

北のかた

[北のかた]凡女はぬるに北の方をもて正さす故にしかいふ　○大和物語故中務宮（醍醐帝の皇子代明）の北方（藤原定方公女）うせ給りてのちいさきんだちを引ぐして三條右大臣殿（定方公）に住給りけり又同本院（時平公左大臣）の北方のまだ帥の納言のめにていますかりけるおりにとみえたり　○女官若室生礙二北方一事小右記寛弘九年六月廿九日左大臣殿大北方（一條左府姑）後拾遺集右大臣北方（右大臣藤原頼宗公北方中納言隆信卿女）中右記寛治三年九月十五日右府北方（與レ出二後拾遺一同人也）同記保安元年七月廿二日内府北方（内府法性寺殿北方民部卿宗通女）後拾遺集左衞門督北方（左衞門督…）山槐記保元元年正月九日亞將北方（…）增鏡富小路中納言秀雄の北方にておはせし

右大臣

[右大臣]の號は孝德天皇御宇蘇我倉山田石川麿にはじまる其職掌は左大臣におなじ　○職員令左大臣一人掌レ統二理衆務一擧二持綱目一總二判庶事一彈二正糺不一レ當者兼得レ彈レ之右大臣一人掌同二左大臣一

まうけの君

[儲の君]とは天皇紹運のまうけの君なり皇太子の御事をいふ　○日本紀履中天皇二年春正月己酉立二瑞歯別皇子一爲二儲君一（皇子反正天皇也）　○禮記郊特牲天子之元子士也天下無二生而貴者一也鄭玄註儲君副主猶レ云レ士也明下人有二賢行著德一乃得上レ貴也

うへみやつかへ

[うへみやつかへ]上臈の女房をいふ所によりて男にもいへり男女ともに御前ちかく召つかはるるをうへみやつかへといふ

○大槐秘抄君の臣をつかはせ給ふ事はよきたくみの木をえらぶがごとしと申なりまがれる木をば輪につくりなをき木をばながえにつくるなりかくのごとく人をえらばるればすてらるる人も候はぬなりつかはるる官のともがらもしは殿上人はみやづかへつかうまつりたるかひとつのことにて候なり

坊

[坊]とは春宮坊の事にして本式春宮大夫以下の宮

司政事を行ふ所なり太政官のごとし然ども又儲君の御事をも或は坊ともいへり。それ皇太子のおはします宮は東宮なり傳。學士の官は常に東宮につき大夫以下は春宮坊にあり故に傳學士には東の宮を用ひ。大夫以下には春の字をもちゆること唐朝已來例なり又春の字を東の音に假せるは是日本のならひなり加樣なる事おほし本邦東宮春宮の號は持統天皇の御宇にはじまれり　○日本紀持統天皇十一年二月丁卯朔甲午以ニ直廣壹當麻眞人國見一爲ニ東宮大傅一直廣參路眞人路見爲ニ東宮太夫一直大肆巨勢朝臣粟持爲レ亮○東宮職員令傳一人掌下以ニ道德一輔中導東宮上○學士二人掌ニ執レ經奉レ說○春宮坊太夫一人掌下吐ニ納啓令一宮人名帳考叙宿直事上亮一人大進一人少進二人大屬一人少屬二人云々以下監署官人略之○同集解穴云御子宮在ニ御所東一故云ニ東宮一也四時氣自レ東發故爲ニ東宮一即春推レ此爲ニ春宮一其義無レ別跡云春宮坊美子宮司也穴云以レ東換レ春更無ニ異義一也朱云春宮坊謂下東宮之內所レ行ニ政事一之處上也假令如ニ太政官一也　○春秋隱公三年傳東宮得臣疏正義曰四時東爲レ春萬物生長在レ東西爲レ秋萬物成就在レ西以レ此君在ニ西宮一太子常處ニ東宮一也或可下據ニ易象一西北爲レ乾乾爲ニ君父一故君在レ西東方震震爲ニ長男一故太子在レ東　○宋職源北齊有ニ門下典書二坊一唐龍朔中改ニ門下坊一曰ニ左春坊一改ニ典書坊一曰ニ右春坊一

御局

御局は桐つぼなり

御局とは曹子なり假令　內侍司　藏司　書司　藥司　兵司　闈司　殿司　掃司　水司　膳司　酒司　縫司以上十二俗に十二局といふ凡局といふもの皆宮室左右にある別屋なり和訓窄つぼやかなるねやの略なり桐壺は淑景舍の別名なり寢居より東北にあたれり○和名抄居宅類殿舍淑景舍岐利豆保在ニ昭陽舍北一○拾芥抄景淑舍南北舍各五間四面

うちはし渡殿

うち橋わた殿は所々にあるべし打橋はうちわたしたる橋也渡殿は殿舍より殿舍へのわたり殿なり乙女卷に廊わた殿のそり橋を渡りてまいるとあり○禁秘御鈔渡殿二行各二疊敷ニ黃端一

めだう

めだうは馬道とかけり是本殿にむかふの道なり

○和名抄辨色立成云馬道（音未字）向堂之道也

後涼殿

[後涼殿]は清涼殿の西にあり ○和名抄居宅類殿舍後涼殿在清涼殿西 ○拾芥抄後涼殿在清涼殿西或七九間

みこ三つに成給ふさし御はかまの着

[御はかま]はさしぬきにあらず白袴なり着袴の事必三才にも限べからず左に他の例をしるしぬ ○水左記承保二年八月十六日晴今日東宮（或文子時二才）著袴也關白殿左大臣清入參上御前此間有常饗庭燎事關白殿結御腰給云々余殿上不其儀著御畢左府歸著殿上座下官曰前前著袴之人不云上下無著指貫而今夜所被設御指貫也是不以前例仍申其由若是過言歟

○江談曰都督曰故右大將御童稚之時著袴之日夕從上東門院粗奉御裝束一襲（策曰依被申請也）不被調進奴袴時人或稱令忘卻給之由或重申可被申請之由殿下無返答不審莫限已至矣不著用給其後院聞食此旨仰云宜人者著袴之時不著奴袴也近代人人不知案內歟于時近會上達部殿上人非參議者濟々焉仍不傳聞歟尤恥辱多乎云々資業章信不知此旨猶以不及古賢也 ○世俗淺深祕抄著袴一度指入同足云々

くらつかさおさめ殿

[くらつかさ]は內藏寮なり履中天皇の御宇にはじまる

[おさめ殿]は累代の御物納る所なり ○至於後磐余稚櫻朝三韓貢獻奕世無絕齋藏之傍更建內藏分收官物 ○職員令內藏寮頭一人掌金銀珠玉寶器錦綾雜綵氈褥諸蕃貢獻奇瑋之物年料供進御服及別勅用物事助一人允一人大屬一人少屬一人以下 ○拾芥抄納殿累代御物納之在宜陽殿頭藏人爲預以藏人雜色出納小舍人爲預人

御息所

[みやす所]は更衣の別名にして一物二名と聞えし本書に更衣の曹子を外にうつさせ給ひてといひ又其としの夏御息所はかなき心ちにわづらひ給ひてといへるも同じ人なり河海には藤原の高子を貞觀七年御息所とすとみえたり然れども國史にはみえず又禎子內親王の例に引きけれども中右記によれば

其儀なし故に只院の御息所の例をあぐ答にも御息所の名はあり後世は親王の妻をもみやす所と申給ふにや彼是例おほし○大和物がたりに亭子院(宇多上皇)とみやすむ所たちあまたみぞうしてすみ給ふ事とし所ありて河原院をいとおもしろくつくられたりけるに京極(左大臣時平公女)の御やすむ所ひとところみざうしをのみしてわたらせ給ひにけり

てくるまのせんじ

てくるまは輦車なり宣旨をくだし給ふには上卿勅をうけ給て先検非違使弾正等におほせてそののちに宣旨を下さるるなり凡親王大臣の中老宿の人には此恩あり女は内親王女御尙侍出入ことに藏人奏聞をへて閤門の吉上に仰す或は僧正もまた宣旨を承る事あり從三位菅清公卿も侍讀の間老病羸弱行歩艱あるに依て輦てのれる由西宮記にみえたり○職員令主殿寮輿義解舉行曰輿輓行曰輦也○和名抄輦周禮注云居居宮中縱容所乘謂之輦(和名天久流萬)爲輕輪挽所行也○延喜内匠寮式腰車一具(屋形長六尺廣五尺)障子六枚韉幷輪料欅七十二枚註幷高欄鳥居等料(蒔繪)○續日本後記承和六年六月卅日(一作二四月)

(四日者非也)女御從四位下藤原朝臣澤子卒故紀伊守從五位下總繼之女也天皇納之誕三皇子一皇女也(宗康光時康人康新子是也)寵愛之隆獨冠後宮俄病而困篤載之小車出自禁中纔到里第便絶矣天皇聞之哀悼遣中使贈從三位也左京大夫從四位下藤原朝臣文山少納言從五位下藤原朝臣秋常等幷監護喪事

かゝるほとにさふらひ給ふ例なき事なれは

遺喪ひさを禁中に置給ふ例なければとも也喪葬令によるに凡服紀は君。父母及。夫本主の爲めには一年とみゆたり假寧令によるに父母の喪には一年解官するが故に假の限りなししかるに異説に七歳までは親子互に服をきぬやうに覺ゆるは誤なるべし同じき令に無服の殤は生れて三月より七歳に至るまで本服三月には假七日をたまふと義解謂未成人死を殤と云て其父母。服をきずして只七日の假をたまふを其子も亦父母の喪に服なきやうに思へるはあやまりたる儀也何ぞ赤子たりとも父母の爲に服なからんや故に源氏の君も稚けれど服き給ふにあらずや○法曹至要抄父母死去經年序雖聞之以

聞日一爲レ始猶可レ服二一年服一義按官戸奴婢遭二父母喪一亦給二假三十日一又徒流者在レ役而父母喪給二假五十日一見二令條一

をたぎといふ所にいかめしう其作法したるに

「をたぎ」は山城國愛宕郡なり愛宕郡鳥部山に葬送ありし例は上に續日本後紀を引ていへる女御藤原朝臣澤子の御事にあたれり是光孝天皇の御母なり天皇即位の日贈皇太后として其後國忌の例にいれられて毎年荷前の幣を奉らる「其作法」とは葬送の禮なり官位によりて替有るべし喪葬令に委しく載られたれども上古の法にして後世の儀に叶べからずしかれども粗下の文にしるせり

○三代實錄光孝天皇諱時康仁明天皇第三皇子母贈皇太后藤原氏贈太政大臣正一位總繼朝臣女焉元慶八年二月廿三日甲寅天皇即二位於大極殿一詔朕先妣藤原氏贈皇太后尊號乎追贈奉流六月十九日戊申勅曰贈皇太后承和六年六月晦日崩依二太政官今月十七日論奏一以二六月晦日一設二國忌於東大寺一頒二下百官及五畿七道諸國一訖十二月十六日壬寅定二贈皇太后山城國愛宕郡中尾山陵四至之堺一東限レ谷南田西隍北谷有レ山四町五段廿日丙午定三毎年獻二荷前幣一十陵五墓云々贈皇太后藤原氏鳥部山陵在二山城國愛宕郡以上略○延喜諸陵寮式中尾陵贈皇太皇藤原氏在二山城國愛宕郡鳥部郷一陵戸五烟山四町五段四至東限レ谷南限レ田西限レ隍北限レ谷○喪葬令三位轜車一具鼓四十面大角二十口小角四十口幡二百竿金鉦鐃鼓各一面

内より御使あり三位のくらゐを給ふよし敕使きて宣命よむなん

「三位の位」前の轜の所に例を出せり「宣命よむ」とは贈位の宣命なり草は內記に仰て作らしむ其宣命の文發端假令天皇我詔旨萬止 次に其人の姓名次に其人の德次に贈位の意趣次に天皇我敕命乎聞食止宣と黄紙に書て所々に揩がなを付て年月日を書とゞめしむ又位記別に有べし○西宮記二臨時宣命事神社伊勢縹紙賀茂松尾紅梅紙八幡一社諸宣命皆黄紙也見二延喜內記式一 山陵告文、立太子、立后、任大臣節會任二僧綱一比叡座主及喪家告文等類也上卿奉レ敕仰二內記一令レ作レ之先上卿進二御所一奏二草案一次又奏二正文一其宣制之儀觸レ事各略仍不レ縷レ記頭註云事物紀原云々紙而古高事云立令三年作二青赤縹桃花紙一又石季龍宣レ敕用二五色紙一蓋麟紙之制也此疑其起耳

弘徽殿

弘徽殿 これをうへの御つぼねともいふ○禁秘御抄上御局號弘徽殿上御局 是御行なんどある所也女御更衣可参上○玉海（安元三六廿一己丑晴）藤壷者代々妻后之居所也弘徽殿者世々母后之御所也○和名抄居宅類殿舎弘徽殿在清涼殿北○拾芥抄弘徽殿七間四面

御めのと

めのと とはめ（妻妹）のとの事なり又是を嫡母ともいふ凡御のめのとをたまふ事親王孫王員数わかちあり○日本紀神代巻鵜鷀草葺不合尊生之段に彦火々出見尊取婦人為乳母湯母及飯嚼湯坐凡諸部備行以奉養焉于時権用他婦以乳養皇子焉此世取乳母養児之縁也○後宮職員令凡親王及子者皆給乳母親王三人子二人所養子年十三年以上雖乳母身死不得更立替

ゆげひの命婦

ゆげひの命婦 とは中﨟の女房の呼名にして或左衛門の命婦或は右衛門の命婦などゝめさるべきのかへ名なり本儀ゆげひの義は男官の左衛門府の異名にしてこれは武職なれば靫を負の心なり靫は矢を盛の器なり和名抄には衛門府をばゆげひといへり八雲御抄には左右衛門をゆげひと見へたり又命婦といふには内命婦外命婦のわかちあり妃夫人嬪及女御更衣御くしげ殿などの類は内命婦なり中﨟格なるは外命婦といへり其命は爵命あるの儀なり○職員令中務省内外命婦義解謂婦人帯五位以上曰内命婦也五位以上妻曰外命婦也○禁秘御抄中﨟内侍外不著織物類也是皆號命婦侍臣女已下也○周禮春官肆師條内外命婦女註外命婦六卿以出也内命男朝廷卿大夫士也其妻為外命女 内命女王之三夫人以下命有爵命之義也

内侍のすけ

内侍のすけ は典侍なり宮人十二司の中内侍司其長官は尚侍次官は典侍判官は掌侍と書てよむにはないしのかみないしのすけないしのぜうとよめり但ぜうたる人はただないしとよぶならひ也是一つかさの職人なればなりそれ典侍は令條に四人あり後世のならはしにや第一なるを大典侍といひ第二なるを姓を加へて或權大典侍或源大すけなどいひ第三四なるは或權中納言のすけ或宰相のすけなど

と大の字をのぞきていへり掌侍も亦令條に四人とあれども後世又權官二人あり其一なるを勾當の內侍或長階のつぼねといひ其次々は皆姓をくはへて藤內侍源內侍管內侍なごといへるよし也事のたよりにしるしぬ凡內侍の號は名ふるし
○舊事本紀天照大神出二磐戶一段令三大宮賣神侍二於御前一天太玉命久志備所レ生之神如下今世內侍善言美詞和二君臣間一令中宸襟悅懌上焉內侍號始出二於此一
○後宮職員內侍司 尙侍二人掌下供二奉 掌侍奏請宣傳 檢二校女孺一兼 知內外命婦朝參及禁內禮式一之事上典侍四人掌同二尙侍一唯不レ得二奏請 宣傳一若無二尙侍一者得奏請宣傳掌侍四人掌同 典侍 唯不得二奏請宣傳女孺百人○禁祕御抄近代如二內侍一不レ候二內侍所 上古多以 溫明殿一爲二內局一○尙侍典侍四人掌侍六人自四人權二人 自二上古一有レ之此內以二一內侍一爲二勾當一隨二補日一爲二一二一也
御くしあげの調度めくもの
御くしあげの調度は理髮に用ひ給ふ所の物具なり
○類聚雜要抄理髮調度具櫛箱鏡子平髮搔髮搔泔坏櫛差櫛櫛掃
をまへのつほせんざい
前栽壺はつぼさ心にや其所は淸涼殿の東西の庭なるべし其外所々にあるべきか
○禁祕御抄前栽淸涼殿東庭幷同西庭朝餉幷臺盤所 藤壺近也延喜元年左右衞門栽二草架一
女房四五人
女房とは限りある號也上﨟小上﨟中﨟下﨟是をのぞきても女房といふ其外の仕女は女房とは申さぬと也女房のうち上﨟小上﨟は典侍掌侍の格にてよろしきなり中﨟は外命婦下﨟は女藏人也○禁祕御抄凡女房上﨟小上﨟內﨟外不レ入二夜御殿朝餉內一只中﨟渡二朝餉緣一下﨟不レ渡レ之中﨟不レ取二御服一
弘徽殿には久しうりへの御つぼねにまうのぼり給はず
弘徽殿上にいへる弘徽殿はうへの御つぼねをいへりここには此殿を御曹子に給はるひさをさして弘徽殿の女御といへることゝみ也○禁祕御抄后女御飛香舍弘徽殿已下皆有レ例東宮弘徽殿后又有二同殿例一也

右近の司のとのゐ申奏

右近司は右近衛府なりとのゐ申とは近衛の夜行とて宮中をめぐり警衛する儀なり亥子の尅は左近のつかさ丑寅の尅は右近の司のめぐる是亥の一尅より始り卯の一尅に終ると也○侍中群要宮中夜行右左近所二奉仕一也中重夜行左右兵衛勤行従二亥尅一至二子尅一左奉仕従二丑尅一至二寅尅一右奉仕矣至二左右衛門一可レ奉二仕者夜行一也藏人强不レ可二知行一左右近等有二懈怠一則召二官人一誡仰歟

夜のおとゞ

夜のおとゞは清涼殿の内にあり劒璽を置るゝ所也

○禁祕御抄夜御殿四方有二妻戸一南大妻戸一間也御帳同二清涼殿一東枕疊御座敷也御枕有二二階一奉レ安二御劒神璽一皆有疊蘇芳也御劒東南御帳四角有二燈樓一又御帳南西北敷レ疊爲二女房座一

あさまつりごと

朝まつりごとは毎朝殿上に出御なりて群臣百寮各着座して万機を聞しめす儀なりといへり

○續故事談昔平城天皇の御時までは此國にもあさまつりごとし給ひけり其儀式いまだほの〴〵の程に主上出御南面にをはします群臣百寮各座に接す四方の訴人さうなく内裏へ参集りて高机の上に憂文の筥といふ物を置れければあやしの民百姓まで申文をもちてまへり此箱に入史外記辨少納言など次條にとりあげて是をよみ申群臣をの〳〵評定して主上まのあたり勅定をくださるうたへもし左右にあればすなはちめしとはるかた〴〵の事の當時なければしりぞきてとはるべきよしを仰す申文をほくして事のほかに日たけぬればやがて其座にて供御をまいらす諸卿は御膳をおろしてこれをくふそのまつりごとしはてぬれば其後は舞樂御遊などもありける君の御心には民のうれへを聞しめすより外の大事なかりけり微忠取二衣頸一會者少しといへる本文是よりをこれる事也朝政に出給ふ事はいまだくらきほどなれば衣のくびをさくりみ給ふ事かたしといふ也○令義解上表文宵衣一宜室一恐二萬機之有レ衍晏食二合宮一念二兆庶之不レ愜○長恨歌君王不二早朝一承レ歡侍レ宴無二閑暇一

朝かれゐ

朝かれゐとはみかごかれゐといふ事也朝餉の間とて清涼殿の内にあり天子の御膳をこの間にて朝夕ともに供する也○江次第七月七日供節供采女房以下上レ髮雖ニ夜朝餉一不レ下ニ格子一供レ之○禁祕御抄御膳凡御膳大床子御膳（上古朝夕近代一度供レ之）朝餉御膳（朝夕夜供）皆一度供レ之○朝餉上﨟女房（典侍或召ニ聽レ色人一）候ニ朝餉南間端一中﨟（內侍又小上﨟）候ニ障子外一取ニ傳之一下﨟又傳レ之（中﨟下﨟）得選又傳レ之刀自持ニ參御膳一

大床子のをもの

大床子の御膳はむかしは常の供御なり朝かれゐより前に行なはる主上大床子の間に着御ありて藏人をものを奏す陪膳は藏人是をつとめらるゝよし也○木工寮式大床子一脚長四尺五寸廣二尺四寸高一尺三寸　侍中群要大床子御膳先御臺二本（銀箸臺一木置ニ銀箸一雙木箸二雙一）卽供ニ於御座前一次御臺一本次御盤一枚（居ニ四種四口一御飯一杯供ニ於一御臺一）次御盤一枚（盛八杯居ニ二御臺一）次小臓物（居ニ一御臺一）次御汁物等陪膳以ニ木箸一始レ自ニ御飯一每レ物一箸合ニ盛小土器一口一（件小土器預供レ之）置ニ件箸於本小土器一主上以ニ他箸一召レ之畢後陪膳折ニ供御御箸一置レ臺以ニ始木箸一立ニ御飯一凡每レ供可レ取ニ三把一歟藏人之外不レ役ニ供之一

なゝつに成給へは文はしめ

書始には大かた御注孝經序の五字をよみはじめ給ふ御儀式なり御年は何歳の御時とさだまらず其作法天子御書始には博士尙復御書の御事つかふまつる皇太子御書始には學士尙復御書の御事つかふまつり點の圖角筆などいへる物あり○江次第舊例七經召ニ明經博士一史書召ニ紀傳博士一群書治要或用ニ明經紀傳各一人一近代雖レ可レ御ニ讀七經一只以下紀傳道侍博學被レ聽ニ昇殿一之輩上多爲ニ侍讀之人一又尙復以ニ六位藏人昇殿人中成業者一便爲ニ都講一云々○御讀書始之事豫定ニ其書幷博士尙復一（此間文擧レ右）當日早旦御裝束垂ニ東廂御簾一晝御座前立ニ御書案一孫廂南第五間鋪ニ菅圓座一爲ニ博士座一（南面）第三間鋪ニ同圓座一爲ニ尙復座一（西面）第三間鋪ニ綠端帖一爲ニ王卿座一南廊小板敷鋪ニ黃綠帖一爲ニ出居座一其東鋪ニ同端帖一爲ニ侍臣座一時剋出御（著ニ御織物御直衣一御垂髮歟）攝政候レ座出居次將著座次王卿著座次博士著座次尙復著（博士尙復笏副ニ書卷一云々）次侍臣著（各挿ニ書卷一）次博士進ニ御案下一膝行取ニ御書一更開ニ書紐一小卷又置ニ御書案上一還ニ著本座一次尙復稱

レ文次博士開レ書讀曰御注孝經序（音讀）次尙復云（已己万天）次
尙復又讀曰御注孝經序次尙復退下次博士退下次王
卿退次主上入御次出居退下次公卿以下著二殿上饗一
祿事無二所見一

（高麗人）こまうどのまいれる
うた御門の御いましめ
右兩條河海抄にくはし

鴻臚館

[鴻臚館]は帝都いづ地にありとも蕃客朝聘のとき入るゝ所の館舍なり玄蕃寮是をつかさどる今の平安城にては七條朱雀の東西にありしと也河海の説に延暦遷都の始東西の大宮にをりるを弘仁中に東の鴻臚館を東寺となして弘法大師に給ひ西の鴻臚館を西寺となし修因僧都に給ひ其後七條朱雀に建給ふとみえたり國史には見えず此事東寺の僧に尋しかば鴻臚館を東寺西寺に給ふとは正説にあらずと申されし始より七條朱雀の東西に置るゝにやそれ鴻の字注大なるを鴻とし小なるを鴈とす臚は腹の前を臚といふ鴻のなく時に聲を出す所也故に鴻臚は音をつたふるといふ心なり蕃客朝聘のとき譯語（サ）といふ司ありて兩國のこゝろざしを傳るなり

○職員令玄蕃寮頭一人掌下蕃客（辭）見讌饗送迎及在京夷狄監二當館舍一事上謂二鴻臚館一也（節略）

○大槐秘抄七條朱雀東西に鴻臚館と申所は異國の人のまいれる時ゐる所にて候ける物がたりになんしつたへて候今は人領とまかり成て候めりいつよりかくまかり成たるにや候らん

右大辨

[右大辨]は太政官判官なり（天下事悉所レ決二此官舍一也）太政官の内に三局あり少納言一局左辨官一局右辨官（小丈）一局各局をわかちつかさどれり但少納言は太政官内の事のみつかさとりて外の事にはあづからず左右辨官は八省（中務省式部省治部省民部省兵部省刑部省大藏省宮内省）及諸國の事を分掌する官其少納言左右辨官は共に太政官の判官として各其職掌ことなるゆへに一局つゞわかち給ふとなり

○職員令太政官義解謂太政官内摠有二三局一少納言左辨官右辨官是也○左大辨一人掌下管二中務式部治部民部一受二付庶事一糺二判官内一署二文案勾二稽失一知二諸司宿直一諸國朝集上若右辨官不レ在則併行レ之

右大辨一人掌管兵部刑部大藏宮內餘同㆓左大辨㆒
左中辨一人掌同㆓左大辨㆒右中辨一人掌同㆓右大辨㆒
左少辨一人掌同㆓左中辨㆒右少辨一人掌同㆓右中辨㆒

辨もいと才かしき博士にて

博士は是晉より出たる和訓なり日本紀にはものしりとよめり○漢百官表博者博通㆓古今㆒士者辨㆓於古然否㆒

無品親王

親王今上の伯叔昆弟王子親王の宣下あり異邦亦同し親王宣下なきをおして親王とは申奉らざる儀也一品已下四品已上を親王の位とす其品位なきを無品といふ異說に無品は五品にあたるは非也たとひ無品たりとも親王宣下あるうへは三位已下の人は下馬せらるゝ由令條にみへたり是親王の品位は明位にして諸臣の位は正位なれはなり○繼嗣令凡皇兄弟皇子皆爲㆓親王㆒以外並爲㆓諸王㆒○官位令親王一品義解品位也親王稱㆑品者別㆓於諸王㆒云々○儀制令凡在㆑路相遇者三位已下遇㆓親王㆒皆下馬義解謂稱㆓親王㆒者有品無品並同若無品親王遇㆓有品親王㆒者不㆑可㆓下馬㆒

源氏になし奉るへく

源氏は王氏なかれて源氏となるといへり是皆皇子皇孫に源の姓を給はる也姓氏錄にいへる皇別とは是也夫源の姓を給ること嵯峨天皇の御宇にはしまりて仁明文德清和陽成光孝宇多醍醐村上花山以下の御後の源氏ありたとひ當代の天子の御子たりとも源の姓を給りては諸官の列に加はり其座席は位次にまかせ給へり天子の御子は一世の源氏といひ御孫は二世の源氏といふ也餘亦是に准してしるへし○新撰姓氏錄源朝臣信年六弟源朝臣弘年四弟源朝臣常年四弟源朝臣明年二妹源朝臣貞姫年六妹源朝臣潔姫年六妹源朝臣全姫年四妹源朝臣善姫年二信等八人是今上親王也而依㆓弘仁五年五月八日勅㆒賜㆑姓貫㆓於左京一條一坊㆒即以㆑信爲㆓戸主㆒今按據㆓或記㆒見㆓弘仁五年男女惣三十人賜㆓源姓㆒最可也乎○日本紀略弘仁五年五月庚戌詔曰男女稍衆未㆑識㆓子道㆒思除㆓親王之號㆒賜㆘源朝臣姓㆖節略○三代實錄貞觀五年正月三日丙寅大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定薨傳曰定嵯峨太上天皇之子也太上天皇在㆓鍾愛㆒弘仁五年特蒙㆓明詔㆒諸皇子未㆑爲㆓

親王一者皆賜二源朝臣一定是源氏之第六郎也其源之命レ氏始ニ於此一矣 備考 三代實錄貞觀八年三月二日文曰伏聞嵯峨遺旨母氏有レ過者其子不レ得レ爲ニ源氏一

はゝきさき

[きさき]とはきみさいはゐの略訓なり故にきさいとも稱す凡后に三つの品あり太皇太后皇太后皇后なり故に三宮と申奉る令條には其宮司惣て中宮職といへり然るを桓武天皇以來三宮の外に御母の皇太夫人なるを中宮と號せらる又一條院より近衞院の御宇に至て嫡妻二人を立給ひて中宮皇后宮とわかちをかるしかるべからざる御例なりと云へり但後白川院の御宇より二妻の儀を止給ひて唯中宮のみを立給ひし然ればそのつから令條のことしされとも女院號の始りてより後は太皇太后宮皇太后宮の二宮の號も相やみしといへり〇公式令平出條義解天子祖母登ニ后位一者爲ニ太皇太后一母登ニ后位一者爲ニ皇太后一嫡妻爲ニ皇后一〇漢外戚傳漢興因ニ秦之稱一帝母稱ニ皇太后一祖母稱ニ太皇太后一適稱ニ皇后一師古曰后亦君也天曰ニ皇天一地曰ニ后土一故天子之妃以レ后爲レ稱

兵部卿の宮

[兵部卿宮]は是親王の兵部卿に任し給ふをいふ兵部は八省の中なから武職にあつかる官なれは帶劒し給ふなり〇職員令兵部省卿一人掌ニ內外武官名帳考課選敍位記兵士以上名帳朝集祿賜假使差ニ發兵士一兵器儀仗城隍烽火事上 補以下畧之

藤壺

[藤壺]は飛香舍なり弘徽殿のにしにあり是も上の御つほねの號あり〇禁祕御抄號ニ藤壺上御局一后女御更衣參上所也〇藤壺藤懸ニ桃手木一上古非ニ桃手木一歟近比殊勝物也

春宮元服

[元服]は東宮親王諸王諸臣ともにうゐかうぶりし給ふ儀也又首服共いへり諸王諸臣の儀式は其人の輕重によりて各別也加冠理髮の人も官位の高下かはるべし東宮御元服御裝束委しく江次第に載らるといへとも加冠理髮の所作は見へす凡天皇御元服のときと同しき故にや今別の書をもて其所作粗左にしるしぬ〇元服記理髮作法理髮人參進其作法新

冠ウツフキ俯て御手をつき給ふ理髪の人御髪調様常の紙捻にて根元を結ひ其上を小結組業にて御髪程に巻て殘長き御髪を二つに分て先左の御髪を引合一枚を竪二つに折て御髪を巻巻やう常に物を巻ごとし其上を紙捻にて片輪穴に結て輪穴は髪の人の左方次に右の御髪の又如此調え輪穴とは理髪の人の右方たるへし巻紙を右の方のは逆に巻べし次に左の御髪を理髪の人紙のはつれ小鬢の間をはやすはやし様紙にて巻たる御髪を上の方へ押折て左の手にて髻に握りそへて右の手に箏刀タチをさか手に握て御髪をはやして件の御髪を筥に納め次に右の髪同之次に理髪人退次に加冠の人進よりて御冠を加へしめて新冠の左の手を取て冠をかゝへさせて加冠の人櫛と笄とを左右の手にてとり上て新冠の左右の御鬢を三櫛つゝ是を掻そめて復座次理髪人又参進して前の具を悉撤レ之次に新冠御冠を御手にかゝへなから起座せしめ給ひ傍にて御髪をあけあらため御冠を改着し御装束し給ひ更給出座ありて勧盃

南殿

南殿は紫宸殿ミアラカなり君南面に御座て万機をとり行せ給ふの正殿にて是北辰の居所紫微宮によせて紫宸殿ともいひ南殿とも申なれはむかしより此殿にては雑事クサ〴〵はかりにもおこなはせ給はぬよしなり

○禁秘御抄南殿御帳如レ恒無ニ几帳一有ニ師子狛犬一●立ニ御倚子一北障子號ニ賢聖障子一賢聖畫レ之上色紙形近代不レ書ニ本文一彼等藝能也此障子裏方畫ニ唐華一御帳間戸畫ニ師子狛犬一障子上畫ニ負レ書之龜本文心一障子戸三也帳外南面母屋モヤ庇無ニ指物一南格子常下上ニ額間一但又昔上常事也此子細不審事也推レ之只夜下晝上る歟帝拜之時上額間與ニ南第一間一也御後節會日下○蠡海集紫宮又曰ニ紫微一者紫宮微妙之所也是以天子之居亦曰ニ紫宸一面レ南拱レ北之情合矣

所々の饗

所々の饗は親王大臣大中納言参議散二三位以下に饗を給ふ所々をいへり内藏寮穀倉院儲レ之○江次第東宮元服篇春興殿東庭立ニ七丈幄一字一卯酉妻爲ニ獻物所一其東立ニ五丈幄一爲ニ殿上纏頭備所一云々春興南第三間立ニ胡瓶一並ニ西向一穀倉院居レ饌大盤立ニ本幄一階下東西座以ニ衛重一居レ饌大臣大中納言三位参議参議以上南座親王散二位散三位以上北座是裝束記文之意也節略

くらつかさこくさうゐん

内蔵寮穀倉院は寳をもふくる事をつかさどる

○延喜内蔵寮式備主上及殿上男女房饗兼亦内教坊音聲人等飯酒所司管之 ○同民部省式凡無主品位田移穀倉院令收其地子凡穀倉院所納穀者載京職税帳中之其匙二枚省收寮糟庫匙亦同○拾芥抄穀倉院在二條南朱雀西大路西納畿内諸國銅錢無主位職田及大宰稻等諸庄物勤年中釐有公卿及四位五位別當預藏人等

いしたて丶

倚子いろ〱あり或黒柿或螺鈿平文（ヒヤウモン）等なり南殿の御元服の外は御倚子を立給事なししかるを此書の物かたりの一躰にいへり源氏の元服は清涼殿の儀なるべし ○延喜木工寮式大倚子一脚高一尺三寸長二尺廣一尺五寸 小倚子一脚高一尺三寸長一尺廣一尺三寸
○江次第東宮元服篇平文御倚子冠者加冠共同○又云重明親王天慶八年記東宮御倚子無欄 ○永保裝東司通俊朝臣依彼記奏事由撤去之

ひき入の大臣

ひき入とは加冠の人なり下に所々侍中群要を引ける中にくはしくみえたり

みつらゆひ給へる

みづらは童形の御髪のゆひやう也みつらのゆへやう雛抄に委みえたり幼主東宮は上髻顔人臣童殿上のこときは下髻顔のよし或記にみゆ

大蔵卿藏人

大蔵卿藏人は大蔵卿なる藏人頭（クラウドノトウ）なり 如此の例あればめつらしくしるされたる歟但大蔵卿の職掌は御元服のことにはあつからず理髪の役は藏人の職につかうまつる也○公卿補任所見弘仁元年三月十日始置藏人頭○大蔵卿藏人頭人例寛弘元年篤藤原正光長徳二年四月廿四日補藏人頭于時從四位下四年十月廿二日任大蔵卿長保二年二月廿五日兼中宮亮元猶寛弘元年二月廿六日任參議

かうふりし給ひて御やすみ所にまかて給ひて御衣奉りかへて

御やすみ所は冠者の御休所なり御衣奉りかへてとは是童裝束赤色の闕腋袍なるを男裝束の縫腋黄袍にかへ給ふとなり

さふらひにまかて給りて

[さふらひ]とは殿上の事をいへり殿上人を侍臣といひ近侍ともいふにおなじ
○延喜大炊寮式内裏殿上侍所日米二斗五升
○侍中群要親王元服爲時剋出御親王自二侍方一參上著レ座餘文又引レ下

人々おほみきまいる

[みき]和訓說々多し或は三寸といひ或は御食の轉語なりといふしかれども又酒をいく薬ともいへば御氣の略訓にや酒生氣息皆通す大物主神の御氣の心ならんかし　○日本紀崇神天皇八年十二月乙卯天皇以二大田田根子一令レ祭二大神一是日活日大神掌酒自擧二神酒一獻二天皇一仍歌之曰許能瀰枳破和餓瀰枳那羅儒揶磨等那殊於朋望能農之能介瀰之瀰枳伊句臂佐伊句臂佐如レ此歌之宴二于神宮一　○本草綱目酒發明博物志云三人冒レ霧晨行一人飲酒一人飽食一人空腹空レ腹者死飽レ食者病飲レ酒者健此酒勢辟レ惡勝二於他食一之効也

おまへより内侍せんしうけ給り

[内侍せんしうけ給り]とは内侍みことのりをうけ給りて引入の人をめす事なり　○侍中群要理髮加冠訖畢親王退下改二裝束一引入理髮者下後内侍於二侍東戸下一召二引入人一進候二孫廂一女藏人取レ祿賜之此間主殿寮請レ下自二仙華門一罷出

うへの命婦

[うへの命婦]は内命婦也又殿上の命婦といふこれなり　○侍中群要王卿及男女房賜レ祿註殿上命婦衾一條

白き大うちきに御衣一くだり

[大袿]は祿に給へる衣の別名也納言以上は白袿參議はくれなゐ染袿なり是衣の別名と聞えし又[御衣一くだり]とは赤白橡の袍なり大臣には是をくはへて給るよし也　○侍中群要引入賜レ祿註白袿一襲御衣一襲大臣加二白橡表御衣一或歌遊之次召二馬寮牛列一匹一加二給之一

長はしよりおりて

[長はし]は淸涼殿紫宸殿の間にあり勾當内侍を長はしといへるとはことなり長階長橋のわかちあるを多一つことに覺えたりこゝにいへるは長橋なるべし

ふたうし給ふ

舞踏は庭上にての事なり先再拜次に笏を地に置きて起て左右左居て左右左ふしまろふやうにし給へり堀川百首に「かしは木をしゐのしついにをりそへて左右左まではふしまろひけり此うたは兵衛督の四位の拜賀の舞踏の義なりこゝには只左右左まではふしまろひけりさいへるを註に引のみ　○或秘記舞踏刷二衣裳平緒等一正レ笏先二拜次置二笏於地一起左右左次居左右左次取レ笏一揖次起二拜云々笏把樣左右左進退皆秘説有レ之

ひたりのつかさの御馬

左のつかさの御馬は左馬寮の御馬也左大臣に下さるゝがゆへに左のつかさとはいへりそれ馬寮の御馬は諸國の牧より獻る所なり諸國の牧の名延喜左右馬寮式にくはし馬の飼やう調習の事は厩牧令に見えたり　○職員令左馬寮右馬寮准之頭一人掌下左閑馬調習養飼供御乘具配給穀草及飼部戸口名籍事上助一人大允一人少允一人大屬一人少屬一人以下

藏人所の鷹すへて

藏人所は校書殿にあり別當頭五位六位藏人出納小舍人雜色所衆等あり藏人を置るゝのはしめは嵯峨天皇御宇弘仁元年三月十日頭及六位藏人二年二月廿七日に五位藏人延喜九年五月十一日より別當をくはへ置るゝ也**鷹**の事は仁德天皇御宇にはしまりて令條には主鷹司の官人をさため給ひしされとも貞觀二年以來は一向藏人所に宛送り給へり故に藏人所の鷹と云り○日本紀仁德天皇四十三年秋九月庚子朔依網屯倉阿弭古捕二異鳥一獻二於天皇一天皇一召二酒君一示レ鳥曰是何鳥矣酒君對言此鳥類多在二百濟一得レ馴而能從レ人亦捷飛之掠二諸鳥一百濟俗號二此鳥一曰二俱知一是今時鷹也乃授二酒君一令二養馴一未二幾時一而得レ馴酒君則以二韋緡一著二其足一以二小鈴一著二其尾一居二腕上一獻二于天皇一是日幸二百舌鳥野一而遊獵時雌雉多起乃放鷹令レ捕忽獲數千雉一是月甫定二鷹飼部一故時人號二其養レ鷹之處一曰二鷹飼邑一也○職員令主鷹司正一人掌下調二習鷹犬一事上令史一人以下

○三代實錄元慶七年七月五日勅弘仁十一年以來主鷹司鷹飼三十人犬三十牙食料每月宛二彼司一其中割二鷹飼十人犬十牙一宛二送藏人所一貞觀二年以後無レ置二官人一雜事停廢今鷹飼十人犬十牙料永以二熟食一宛二藏人所一

とんしき　へ

とんしき とは下つかさへ給はる食也屯食としるしてみやけと和訓せり河海抄注

おとゝの御さとに源氏の君まかてさせ給ふさほう

まかてさせ給ふさほう 是執レ聟の儀式なり先姫公のかたへ聟公入せ給ふ事也但異邦親迎の作法とはことなり ○江次第執レ聟事聟公来旬日往年留二鐙下一重ニ着二衣冠一御近代一夜間無二其事一迫二門車実二下車前駈取二松明一前行脂燭差二人進二出中門一冠衣以二御前火一付二於脂燭一前行聟公入自二中門一登白二寢殿腋階一但登階隨二所便一沓取人下レ階執レ沓同レ上件沓男姑相共懐臥之脂燭一人留二戸外一一人親本家之人取レ各南脂燭一到二帳前一火移二付燈樓三日不レ消聟公入二帳内一姫公出必用二蔓袒侍一依レ不レ侍人々必後出云々聟公解二装束一掩レ衾物告之女上臈褒車引入隨身色者於其所次供レ餅銀盤三枚有レ尻各盛二小餅一加二銀青臺銀箸一雙木箸一雙一件箸多作二鶴形一已上居二紫檀地螺鈿筥蓋一件筥蓋鏤鋼云々多合二夫婦年久子孫繁昌一者作レ之又令レ儀二件餅一聟公食二餅三枚一不食切一云々件膳是男膳也以上節略

藏人の少將

藏人の少將 は少將の藏人の職を帶せらるゝ也それ少將は近衞府次官にして天子をちかくまもる武職なるゆへに帶劍の官也其近衞府に左右ありくはしく紅葉賀の巻にしるすべし古註に執柄の息は藏人少將を帶するよしみえたりしかれとも執柄の息にあらされとも先に藏人の少將例あり

○藏人補任五位藏人任少將例藤原敦行仁和四年十一月廿七日藏人左少將在原友于仁和五年四月藏人左少將執柄家五位藏人任二少將一例藤原實頼延長四年二月廿五日藏人左少將藤原伊尹天慶二年二月十九日藏人右少將

修理職たくみつかさ

修理職 古造宮職といふ官ありしを桓武天皇延暦廿五年二月に此職をとゝめ給ひて木工寮にあはさしむ其後嵯峨天皇弘仁九年七月以來更に修理職を置きて其官位相當已下廢造宮職に准せらる たくみつかさ これは内匠寮をいふにはあらす木工寮の和訓にたくみの司といへる名目によれる也彼内匠寮は殿舍作る事にはあつからぬ官なれはなり

○類聚三代格弘仁九年七月十九日太政官符偁修理職官位馬料季祿等准二廢造廢造宮職一○寛平三年八月三日太政官符定二修理職官位一事右太政官去延暦十五年七月廿四日下二式部省一符偁造宮職官位宜レ准二中

職ニ但大馬特爲ニ七位ニ其馬料者少屬已上人別給レ之今修理職官位准レ之　○和名抄修理職（乎佐女豆久留豆加佐）職員令木工寮頭一人掌ニ營構木作及採レ材事ニ助一人大允一人少允二人大屬一人少屬一人工部二十人云々　○和名抄木工寮（古多久美乃豆加佐）○延喜中務省式（時服篇）木工寮一百卅四人（頭一人助一人大允一人少允二人大屬一人少屬二人史生十人筆師四人大工一人少工一人長上十三人將領十八人工部五十人飛驒工卅七人）修理職三百九十八人（史生八人長上十人將領廿二人工部六十八人仕丁二百廿七人飛驒工六十三人今按此職不レ載レ大夫以下屬以上ニ者不審）

源氏宮職故實秘抄卷二　箒木 空蟬

箒木

また中將なとにのし給ふときは

［中將］は大將少將のあいたにあり故に中將といへり天平神護元年始中將をくはへ置るくはしくは紅葉賀の卷に左大將の所にしるすへし　宮職秘抄舊例一府中將一人少將二人中古以降中少將各二人云々

内の御物忌

［物忌］とは儀軌の說には大鬼神王の名なりと凡御物忌のときは清涼殿の外他の殿舍に出御し給はぬよしなり又御物忌數日相つゝく事は不快の例なれは少々輕によれは破らる其物忌には御字をかくす柳をもて三寸計に簡をつくる御冠の纓の上にさし給ふ御はなち本鳥の時は左の御時に白紙に書て付給ふのよしなり柳の木の事荊楚歲時記には挑者五行の精邪氣を厭伏し百鬼を制すとしるせり又金烏玉兎集にも桃木の札をけつり用ひて禍災をのそきたる事みえたり○禁秘御抄物忌不レ加ニ御字ー以レ柳

造レ節（三分許頭注云レ薄作三寸）挿ニ御璽櫃上一御覧本島時付ニ左
御袖一（時ニ有被ニ合）北抗以後参入人不レ得以前可レ参乎　○
御物忌書障立レ札御鳳之御屏停レ而付ニ物忌一（書ニ紙）簡或一外
宿人不レ参ニ御前一　○續世繼迎昆羅衛國中有ニ桃林一
其下有ニ一丈鬼王一貪ニ物忌一其鬼王遂他鬼神不レ寄
愛大鬼神有閻羅利益六親有情實ニ吾名號一者若人宅物
恠屢現惡夢頻示可レ遭ニ諸凶害一之時臨ニ其日一書ニ吾
名一立レ門其故他鬼神不レ令ニ來入一書ニ吾名一令レ持
レ人如レ願可レ令ニ守護一

御とのゐ所

[とのゐ所]は源の宿直所宿直なりと令集解には宿と直と晝夜にわけて仕せられたり文字の心にはさもあるべけれど晝夜をかきらずとのゐといふべきか○職員令集解讃云間宿直一歟二歟答夜仕曰レ宿晝仕曰レ直朱云宿與レ直二事也

大となふら

[大となふら]とは大殿油とよむべきをのとあの二字をつゝめてなとよめる略訓なるべし是女嬬のつかさどる所なり

みつし

[みつし]公家私家かならず一つ成べからず又木地漆物いろ／＼あるべし寸尺も亦しゐて定るへからざると粗品見左にしるしぬ○續日本後紀嘉祥二年十月二十三日癸卯天皇四十寶算賀自ニ嵯峨太后一獻物中黑漆平文厨子十一月廿二日壬申天皇太子獻物厨子（二前以ニ黄檗一作レ之 二前以ニ紫檀芳一作レ之）云々○禁秘御抄清涼殿鑾繪御厨子（延注書入云當レ作レ雙也）日記御厨子置物御厨子○臺盤所黑漆厨子の朝餉螺鈿厨子○御手水間置物厨子（節略）

なを人のかんたちめ

[なを人のかんたちめ]なをは直と呼なり又たゞうどともよめりかんたちめとは公卿なり善悪をいはず三位を上階といふ是上階に達せらるゝといふ意なるべし此段は種姓いやしきよりなりのぼりたるをいふなを人の公達といふは別なるべし○伊勢物語十段父はなを人にて母なん藤原なり○大江佐國元永元年八月七日記云菅原院（勘解由小路西洞院烏丸）者是善の卿之家也當初其見南庭有童兒五六歲計是善問云汝是何家之子答云我是無居處又無父母欲以相公爲親也是善知其匪直人而許之此卽菅丞相也（歴代編年集職同之）

左りの馬のかみ藤式部丞

左の馬の頭は左馬の頭なり藤式部丞は藤原氏なる式部丞なり是殿上藏人の式部丞なるべし凡式部丞に選任すべき道品々あり職掌と共に下にしるせり○官職秘抄左右馬頭四位上臈公達任之近代及ニ諸大夫ニ○職員令式部大丞二人掌レ勘ニ問考課ヲ餘同ニ中務大丞ニ○官職秘抄式部丞兵部丞以ニ公卿二合諸司助文章得業生文章生ヲ任レ之多讓ニ賞ニ成業者一人ニ又於ニ藏人所ニ者雖レ非ニ二合ニ間任レ之

ずりやう

ずりやうとは諸國の守に任して其國にくだりて其國の事を知るをいふ近國は一任四ヶ年太宰府陸奥出羽國の遠國は五ヶ年にてかはるなり承和二年の格文にみえたり承和以往の例はたび〳〵ありて定まらず又國に下らざる守を遙授の國司と云又兼國あり是等は多く權守なるべし○職員令諸國大上中下國守一人掌下祠社戸口簿帳字ニ養百姓ニ勸ニ課農桑ニ糺ニ察所部ニ貢擧孝義ニ田宅良賤訴訟租調倉廩徭役兵士器仗鼓吹郵驛傳馬烽候城牧過所公私馬牛闌遺雜物及寺僧尼名籍事上○江次第除目請任ニ受領ニ注云備前權守多受領凡國司有ニ遙授兼任受領等ニ守爲ニ遙授ニ則權守必受領也

なま〳〵のかんたちめ

なま〳〵のかんたちめなま〳〵とは青き心なり下學集に青侍青女としるしてなま侍なま女と和訓せり皆生なりなるこゝろなり上達部の事桐つぼの卷にみゆ畢竟はやく參議に任せられがたき眞人をまづ三位にのぼせ給ふをなま〳〵のかんたちめといへりそれ三位をさきに叙せらるゝ家は參議に任し給ふ事も稍おそし其間に公達家の非參議の四位たる人の昇進はやきにおくれて終に下臈となられしは念なき事ならずや○江次第除目請可レ任ニ參議ニ者官中擧下散位三位經ニ年勞ニ者上是也

非參議の四位

非參議の四位とは四位の時に必參議に任じたまふべき人のいまだ參議に任じ給はざる間をいへり是公達家なり此時はなま〳〵のかんだちめよりは位階の下臈にて次座なるべけれど公達家の人なれば四位のまゝにて參議に任じ給ひやがて中納言從三位に任叙せられて大納言より大臣にすゝみのぼり給ふがゆへに非參議の四位を規摸にしたまふな

り上にいへるなま〳〵の上達部は先に三位に叙して三位の勞を久しう積て其後參議に任す參議の勞も亦久しうして二位を先途とし或は三位よりすぐに二位にのぼりて參議にも任せられぬ人もあり彼是其年勞の久しき間に非參議の四位なる人ははやくすすみ給ふにこえらるゝか故に本文になま〳〵のかんだちめより非參議の四位といへり夫非參議の號は太政官の事にまじはりはかるにあらずとの意なり前官の大臣已下三位已上も非參議といふ同じ又非參議の四位の人の昇進の次第左にしるしぬ○公卿補任藤原良房 天長十年十一月十六日從四位下左中將如ㇾ元承和元年七月九日任參議左中將如ㇾ元二年正月七日從四位上四月七日任二權中納言一叙二從三位一 同良相 承和十三年正月七日從四位下十三日左近中將嘉祥元年正月七日任二參議二三年四月十七日正四位下仁壽元年十二月廿五日任二中納言一叙二從三位中將一如ㇾ元 同基經 貞觀三年正月八日從四位下五年二月十日左中將六年正月十六日參議中將如ㇾ元八年三月廿三日正四位下十二月八日任二叙中納言從三位一 同良世 貞觀十年十二月九日正四位下皇太后宮大夫如ㇾ元十二年正月十三日任二參議一大夫如ㇾ元十四年八月廿五日任二叙中納言從三位 以上非參議四位昇進之道如ㇾ此大納言以上之位略之

なをしばかりを

[なをし]なをしは直衣なり なふしとよむ名目のならひなり其裁縫の體常の袍に同じ是雜袍の一ツにて宿衣 きぬともいふ 直衣かれてこのゐ衣ともいふ前にいへる直衣は夏のなをし成べし夏は文三重襷 大文共云なり 色は若年二藍 以二紅花及藍一染ㇾ之 次に花田より次第にうすくなして宿老の後は白かこさし装束諸抄に委みえたり直衣はなふしとよむ直衣の事は末摘の巻にしるすべし

○西宮記直衣王者以下及被ㇾ聽二雜袍一着衣 之中略 着二烏帽子一之間着二直衣一家中事也不ㇾ私事者不ㇾ得二出行一

○禁秘御抄聽二入立一之人定聽二直衣一其外侍讀聽ㇾ之不ㇾ然人不ㇾ聽ㇾ之可ㇾ然人少々聽ㇾ之

ひもなとうちすてゝ

[紐]の事直衣にも袍にも所々あり一つは頸かみの入紐古今戀部によそにしてこふれはくるし入紐のとよめる是也二つにはいにしへはらんにも入紐あり古今六帖紐部に草枕むすぶとしけんよひ〳〵はとけざりきやは下の入紐とよめる是也今の世になければ人不審せり故に左に江次第朝野群載等を引てあかせり三つには小ひもとて脇の下より内へ入て

むすぶ紐あり〇江次第内辨細記七日上略内辨仰云召ニ式乃司兵乃司二省丞來立注云近代昇レ自レ階不レ可レ然塡置ニ少石一踏レ之昇也仍此日二省丞表衣襴放レ紐節略〇朝野群載裝束進退傳中左右袖端各疊三重襴之紐付ニ黑色一節略

きんたち

［公達］とは或卑官孫源の姓を給ひ或執柄の息の中先途をとげざる輩なり是を古樣の公達といふ大槐祕抄によき諸大夫とあやしの公達にははるかに越席したるものなり五節などの殿上の座には諸大夫は座をよしある公達にはゆづりてしもにこそ候し

いゑとうし

［いゑとうし］は家童子にはあらで己が妻を卑下して家負といふべきよこなまりなるにや負を或は刀自としるせるがゆへに訛語しけるにや〇和名抄負俗作ニ刀自一劉向列女傳云古語老母爲レ負今按謂ニ老女一爲レ負字從レ目也今俗以レ貝爲レ自歟和名度之

ふるごたち

［ふるごたち］は年よりたる女也といへり女をごたちといへるは男子にさきたゝぬといふ義なり〇神代卷八洲起原段以ニ磤馭盧嶋一爲ニ國中之柱一而陽神左旋陰神右旋分ニ巡國柱一同會ニ一面一時陰神先唱曰憙哉遇ニ可美少男一焉陽神不レ悅曰吾是男子理當ニ先唱一如何婦人反先レ言乎事既不レ祥宜ニ以改旋一旋レ是二神却更相遇是行也陽神先唱曰憙遇ニ可美少女一云々

木のみちのたくみ

［木のみちのたくみ］いづれによらんや實其良匠成べし〇延喜式内匠寮才長上中務省式木工寮長上木工修理職長上木工大藏省式

ゑどころ

［繪所］は畫師の集る所也西宮記には式乾門のうち東の廂御書所の南とあり又拾芥抄には建春門の内の東腋御書所の北とありとみえたり時代によりて其所かはれるにやいにしへは畫工司ありて後には内匠寮にあはせ給へり後世内匠寮も其名のみにして實なければ別に繪所をたて給ふにや〇職員令畫工司正一人掌ニ繪事彩色一佑一人令史一人畫師四人畫部六十人云々〇類聚國史大同三年正月壬寅詔畫工司併ニ内匠寮一

りんじの祭のてうかく

臨時祭本文にみぞれふる夜とあれば賀茂の臨時祭と聞へし是十一月下酉の日あり兼日に調樂試樂の事あり或記云寛永九年十一月廿一日始て賀茂の臨時の祭を行る時に左近衛中將藤原の時平朝臣を勅使とし藤原敏行朝臣東あそびの歌を詠せらる十一月下の酉日あり當日の議式は石清水に同じ其前午日調樂未日試樂あり抑此祭は宇多みかどいまだ王待從にておはしましける頃賀茂の邊に狩し給ひつるに俄に霧降てくらく成ける其紛に賀茂大明神老翁に化し給ひて曰石清水には臨時祭りあり我宮にもありたきよし申させ給へば其議は御門へ申させ給へわれさやうの事に力及べきにあらずとこたへさせ給ひければ又日やうありてかく申なりとてあからせ給ひけるに程なくおぼしめしよらぬ御位につかせ給ひて此祭を奉らせ給ひけるといへり希代の例ごとなり祭のやう江次第に委しけれど先達の諸抄に多載られける間西宮記の文を左にしるしぬ〇西宮記臨時祭天皇服ニ位御服一（今按云ニ之黄櫨染一）把レ笏拜ニ給御幣一但諒闇時服ニ白御服一細[illegible]一其使四位裝束除ニ表衣袙等一之外皆以ニ御衣一從ニ殿上所一給レ之著ニ魚袋淺履等一但衛府者可レ著ニ闕腋袍一舞人裝束青摺布袍赤紐著ニ左方（但小忌時著ニ右方一）地摺袴蒲萄染下襲合袴絲鞋除レ袙之外自ニ殿上所一給牽ニ御馬一之時以レ鞭插ニ腰底一又倍從裝束青摺布袍赤紐表袴合大口淺履除レ袙之外從ニ殿上所一給其舞人雖ニ卷纓一不レ著レ緌陪從尙垂纓也又舞人擧倍之間其笏挿ニ腰底一（續世繼入云）扶桑略記寛平九年十一月廿一日賀茂臨時祭如〇元慶八年四月十三日賜ニ源姓一仁和三年八月廿六日制ニ源姓一列ニ親王廿七日即位見ニ國史一蓋王侍從闕之事無ニ所見一

笛とり出て

笛は横笛なりそれ笛には名物數々あり大水龍小水龍（以上天曆御時實錄）青竹葉二柯亭讃岐中管釘打庭鎬穴貴小螺鈿（以上見ニ江談一）富士丸拍子合平禮神兒寺赤疵丸（以上見ニ拾芥抄一）等也〇和名抄横笛（和名與古布衣）律書樂圖云横笛本出レ羌也漢張騫使ニ西域一首傳ニ一曲一李延年造ニ新聲二十八曲一

わこんをしらへ

わこん又やまとごとゝいふ是六弦にして柱には楓の木の小枝を用ひたり神代めきたる物也是も亦名物いろ〳〵あり〇和名抄日本琴萬葉集云梧桐日

本琴一面註云天平元年十月七日大伴淡等附ニ使監ニ贈ニ中衛督房前卿ニ之書所レ記也體似レ箏而短小有ニ六弦ニ俗用ニ倭琴二字ニ夜万止古止大歌所有ニ鴟尾琴ニ止比乃乎古止倭琴首造ニ鴟尾之形ニ也○禁祕御抄鈴鹿累代寶物也但每年御神樂萬人持レ之子細不レ及ニ左上ニ○江談和琴井上鈴鹿朽目河霧齋院宇多法師其鈴鹿是累代帝王渡物也河霧故上東門院仁渡天令レ持給之時大臣殿任ニ右大臣ニ令ニ初參ニ給引出物被レ獻仍在ニ殿下ニ宇多法師寬平法皇御和琴也御遊之時先御多奈良之止召

さうのこと

[さうのこと]八十三弦なり龍口龍角鳳池柏形天人座鳳足延足絃門絃納の名所あり多誰もしんぬべし岩越といふ所は柱の絃の上をいふ上東門院にて紫式部の付られし名なり又右の手の下を礒部といひ搔所を渚といふよし樂道故實抄にみえたり○和名抄箏風俗通云神農造レ箏俗云象乃古止或云蒙恬所レ造箏聲也蒼頡篇云箏形似レ瑟而短有ニ十三絃ニ今按箏有ニ云一二三四五六七八九十斗爲巾是十三弦名也阮瑀箏譜云箏柱和名古止知高三寸具ニ三才ニ也○江談箏大螺鈿小螺鈿秋風

頭のきみ

[とうの君]は藏人の頭なり君とはうやまひの詞なり頭は或左右大辨にて補せられ或左右の中將にても兼帶し給ふなり頭中將頭辨とは是なり

○頭中將初例公卿補任巨勢野足朝臣嵯峨弘仁元年三月十日補ニ藏人頭ニ于レ時左近衞中將正四位○頭右大辨初例藤原道雄朝臣弘仁十三年三月補ニ藏人頭ニ于レ時右大辨從四位下○頭左大辨初例藤原懷忠朝臣一條永延二年二月廿七日補ニ藏人頭ニ于レ時左大辨正四位下

文章生

[文章生]とは大學寮にて擬文章生に補したる人を式部省におゐて又こゝろみらるゝに詩賦を作らしむ其詩賦を作り得たるを及第して文章生に補す是を進士ともいふ或は御前にをゐて敕題をもつて試給ふ事もありとなり

○考課令凡試ニ貢擧人ニ皆卯時付レ策當日對畢式部監試不レ訖者不考畢對ニ本司長官ニ定ニ等第ニ唱示○凡進士試ニ時務策二條ニ帖所レ讀文選上帙七帖爾雅三帖其策文詞順序義理愜當並帖過者爲レ通事義有レ滯詞句不レ倫及帖不レ過者爲ニ不第ニ帖策全通爲レ甲

策通レ二帖過レ六以上爲レ乙以外皆爲二不第一〇凡秀才試二方略策二條一文理倶高者爲二上上一文高理平理高文平爲二上中一文理倶平爲二上下一文理粗通爲二中上一文劣理滞皆爲二不第一〇職員令集解天平二年三月廿七日格文章生二十人簡二取雜任及白丁聰慧一不レ須レ限二年多少一也〇延喜大學寮式凡擬文章生每年春秋簡試以二下第以上者一補二文章生一〇凡擬文章生以二廿人一爲レ限

極熱のさうやく

【極熱のさうやく】は蒜(ヒル)のよし也和名抄に本草を引て味からし温にして風をのぞく物なりとみえたり是僧尼のいむべき五辛の一なり但疾病藥分の爲には日をかぎりて食する事をゆるすよし也〇僧尼令凡僧尼飲レ酒食二宍五辛一者三十日苦使若爲二疾病藥分一所レ須三綱給二其日限一云云義解謂五辛者一曰大蒜二曰慈葱三曰角葱(アサツキ)四曰蘭葱(チヒル)五曰興蕖(クレノオモ)〇法曹至要抄有部毘奈耶雜事第三云病者食レ蒜者當レ獲二其晃氣一乃至爲レ病服食畢可二洗レ身令一レ淨二晃氣一皆除滅方入二本房中一若食レ蒜七夜葱三夜薤一夜爲レ令レ淨レ身故七三一夜如レ次可二應知一矣〇本草綱目葫【釋名】大蒜葷菜弘景曰今人謂レ葫爲二大蒜一蒜爲小蒜以二其氣類相似一也時珍曰大蒜出二胡地一故有二胡名一二蒜皆屬二五葷一故通可レ稱レ葷【集解】時珍曰大小二蒜皆八月種春食レ苗夏初食レ薹五月食レ根秋月收レ種北人不レ可二一日無一者也餘文略レ之【氣味】辛温有レ毒久食損二人目一震亨曰大蒜屬二火性一熱喜散快レ膈善化レ肉暑月人多食レ之傷レ氣之禍責久自見二養生一者忌レ之化レ肉之功不レ足レ論也餘文略レ之【主治】歸二五臟一散癰腫䘌瘡一除二風邪一殺二毒氣一

つまはしき

【つまはしき】前後二事ともにしゐて此事類にかゝらぬ事なれど蒜につきていへる事あり昔日本武尊信濃國の山中にて山神の白鹿に化したるにあひ給ひて一つの蒜をもつて眼に彈かけて殺し給ふ事あり是を下心によせたるつまはじきにもやと左にしるしぬ〇日本紀景行天皇卷日本武尊進入二信濃一是國也山高谷幽翠嶺万重不レ倚レ杖而難レ升巖嶮磴紆長峯數千馬頓轡而不レ進然日本武尊披レ烟凌レ霧遙徑二大山一旣逮二于峯一而飢之食二於山中一山神令レ苦レ王以化二白鹿一立二於王前一王異レ之以二一箇蒜一彈二白鹿一則中レ眼而殺之爰王忽失レ道不レ知レ所レ出時白狗自來有二導レ王之狀一隨レ狗而行レ之得レ出二美濃一吉備武彥自レ越出而遇之先レ是度二信濃坂一者多得二神

氣一以禳辟伊從レ殺ニ百鬼一之後擣ニ是山一者嚼レ蒜塗ニ人又牛馬一自不レ中ニ神氣一也

五月のせち

五月の節 本朝其起る所分明ならず天平十九年五月五日の紀によれば是日太上天皇の詔曰昔五日の節には常にあやめを用ひてかつらとせしよしみえたり其時に昔と仰られしはいつ頃の事にや分明ならず昔推古天皇十九年廿年昔に五月五日に藥獵の事ありし是なん菖蒲の濫觴と成けるや其後皇極天皇元年五月五日に射獵のことあり是又騎射のはじめなりける哉又續命縷(クスダマ)のことは仁明天皇嘉祥二年五月五日より始れるとかやむかしは參議以上に藥玉を給ける由西宮記にみえたり○續日本紀天平十九年五月丙子朔庚辰日當ニ五天皇御ニ南苑一觀ニ騎射走馬一是日太上天皇詔曰昔者五日節常用ニ菖蒲一爲レ縵比來已停ニ此事一從レ今而後非ニ菖蒲縵一者勿レ入ニ宮中一○延喜太政官式凡五月五日天皇觀ニ騎射幷走馬一辨及史等檢ニ校諸事一所司設ニ御座於武德殿一是日內外群臣皆著ニ菖蒲鬘一諸司各供ニ其職一事見ニ儀式一○同中務省式藏司五月五日續命縷絲五十絇紅花八三斤○同左右近衛府式凡五月五日藥玉料菖蒲艾總盛ニ一輿一雜花十捧居レ臺 三日平旦申ニ內侍司一列ニ設南殿前一諸府准レ此○明衡往來五月五日狀今朝自ニ武所一藥玉一流作以ニ百草之花一貫以ニ五色之縷一摸ニ草蟲之形一袖ニ其花房一芳艶之美有レ興有レ感古人云懸ニ續命縷一則益ニ人命一云云若レ此物之謂歟○西宮記五月五日節日 天皇服ニ位御服一王卿著ニ魚袋靴等一又天皇太子王卿以下百寮皆著ニ菖蒲縵一又太子以上參議以上從ニ御所一給ニ續命縷一各著レ之帶劍之人著ニ餝劍一衛府督將佐榆枝番長以下服ニ小儀一諸騎射之輩其裝束皆有レ例一本云乘人著ニ福錦褶冑一手纏足纏雲珠菖蒲形尾女杏葉倭鞍云々 小儀不ニ具記一

九日のえん

九日のえん は重陽宴なり本邦重陽宴の濫觴嵯峨天皇御宇にはじまれるよし也天皇南殿に出御ありて內辨外辨庶事を辨備せらる文人博士めされて各韻字をさぐり詩を作りて文臺の上にて講ずると也三獻ありて氷魚を給ふ御帳の左右に茱萸を綾と生の絹の袋に包たるを柱にゆひつゝ月比あるくす玉ととりかへて御前には菊花を瓶にさして立らる近代は宴の儀たえたるによりて宜陽殿にて平座さて

上卿以下着座ありて菊の酒を給ふよし仰らる其よしはかりなりとみえたり今世は猶内々の儀式と成けるかや（頭註書入云）大同四年四月朔日受禪即位

〇日本紀略嵯峨天皇弘仁二年九月壬辰朔庚子曲ニ宴前殿一令ニ文人一賦レ詩其文人五位以上賜レ被自餘五位幷文人六位已下衣 〇延喜式部省式 九月九日菊花宴 應レ召ニ文人一者前二日省簡ニ定文章生幷學生諸司官人堪レ屬レ文者一造レ簿預令ニ宣告一當日質明掃部寮設レ座如レ常輔以下就レ座計列ニ文人一即造ニ名簿一卿若輔以ニ名簿一奏ニ進內侍一 事見ニ儀式一 餘節應レ召ニ文人一者准レ此 九月九日文人雖レ未ニ進奏一日令ニ參入一又獻レ詩人省點レ之移ニ中務省一同注ニ記其省一函錄共至ニ積レ祿所一授ニ大藏省一即省共監ニ給レ錄事一 〇續齊諧記汝南桓景隨ニ費長房一游レ學累年長房謂レ景九月九日汝家當レ有ニ災厄一急宜レ去令レ家多作ニ絳囊一盛ニ茱萸一以繫レ臂登レ高飲ニ菊花酒一此禍可レ消景如レ言擧レ家登レ山夕還見雞狗牛羊一時暴死長房聞レ之曰代レ之矣今世人每レ至ニ九月一登レ山飯ニ菊酒一婦人帶ニ茱萸囊一

中納言の君中務

[中納言の君]これ女房とは上臈の召名也君と詞をそへたるは種姓よき人をうやまひていへる也

[中務]は中臈の中にて小上臈かけたる名也いづれも其女の格式のよび名にして官名にはあらず

御木丁

[木丁]三尺の几帳四尺の几帳あり帷夏大文或云ニ之三重襷一のすゞし 綸たかく 冬は織物 或二重織物或織物に綸あり 三尺の几帳は帷四幅 或細くして五幅あるもあり 長五尺三寸五分紐四筋濃蘇芳 白繪蝶鳥 長さは帷の定 一幅四わり 四尺の几帳は帷五幅 或六幅もあり 幅別に紐あり長さは帷の定なりいづれも裏あり帷の上にうはざしのいとあり其あまりを左右の端へながく出してあげ卷にして下るなり紐の下幅別に物見ボンをあくる也 〇類聚雜要抄几帳帷夏白生平絹以ニ白泥デイ一野筋秋草等畫レ之又次樣繪胡粉用レ之几裏白粉張也紐冬濃打又黑打夏生平絹黑染也冬面纐纈三丈裏三丈紐四丈五尺黑染几五幅長六尺幅別如レ巾紐付レ之又臨時美麗調レ之時者白唐綾纐纈文以ニ紫朱一繡レ之又以ニ金精一畫レ文夏唐生薄物以ニ金精一畫レ繪紐赤色織物 或與隨時也 〇桃華蘂葉 几帳事 建久二五廿七最勝講第二日中宮昇ニ給上御壺禰一御裝束其儀見ニ指圖一令レ略レ之以ニ夜御殿西一間一爲ニ上御壺禰一東西北三方立ニ廻五尺屛風一其中東西行敷ニ繧繝端二

枚其上敷東京錦茵一枚南西斜立三尺几帳一基（六幅表白大文薄物中重白生絹裏單文薄物）（薄青二重織物帷薜綸手）副南簾立四尺几帳（以緗青緣青畫鳳凰竹桐蝶小鳥等黑紐大文薄物染絲織之以桐枝書野筋小草蝶小鳥等）出彩袖二具紅薄樣辨重白生單衣紅引倍支青朽葉表著藍唐衣白腰裳等也

しん殿のひかしおもて

しん殿は寢殿なり是式正のことをおこなへる所なりくはしく下にしるしぬ　○江次第抄（大臣大饗）東三條第（貞信公家也）在町東二條南件第寢殿東西各有對屋東西中門廊各屬對也寢殿與對之間有透渡殿寢殿東西腋幷東對西面西對東面及南面各有階　○公羊傳莊公三十二年八月癸亥公薨于路寢註公之正居也天子諸侯皆有三寢一曰高寢二曰路寢三曰小寢文居高寢子居路寢孫從王父母妻從夫寢夫人居小寢在寢地錄內也　○爾雅（釋宮）室有東西廂曰廟無東西廂有室曰寢邢昺疏云凡大室有東西廂夾室及前堂有序牆者曰廟但有大室者曰寢月令仲春云寢廟畢備鄭玄注云前曰廟後曰寢以廟是接神之處尊故在前寢衣冠所藏之處對廟爲卑故在後

もやにつどひゐたるなるべし

もやは母屋なり或身屋本屋ともしるせり同じ事なりそれ母屋は寢殿の中央にして廂のうちをいへり又廂の外を簀子といふ（板敷なり）俗に是をゑんかはといへり　○江次第（大臣大饗）第一納言經階中央並簀子敷入有南廂西一間並母屋一間著南座

式部卿のみや

式部卿のみやは是親王の式部卿に任じ給ふ也此卿は多は第一の親王を任ぜらるゝ人臣も邂逅に任例あれども可なりせず　○職員令式部省卿一人掌內外文官名帳考課選敍禮儀版位位記校定勳績論功封賞朝集學策試貢人假使補任家令功臣家傳田事（上）

わらはなる殿上

童殿上はいまだ元服せずして殿上の簡（フダ）につくをいふ

故右衛門の督

故とは死者をさすの通稱也右衛門督は左衛門督とおなじく宮門をまもる職なり令條には左右なくして只衛門府たりしが嵯峨天皇の御宇より左右を

わかちて或は中納言或は參議の兼官とす其中右衛門督は非參議（是散二三位ないふ）たりとも任せらるゝと也右衛門と書て只ゑもんとよむならひなり ○衛門府分左右之始公卿補任弘仁二年十一月己未以二參議従四位上藤原冬嗣一爲二左衛門督一以二參議正四位下藤原緒嗣一爲二右衛門督一是左右衛門始也 ○延喜左衛門府式凡宮城門者並令二衛士衛一レ之（美福郁芳待賢陽明上東達智等門府衛レ之皇嘉談天藻壁殷富上西安嘉等門衛レ之但朱雀門左右相共衛レ之偉鑒門左右隔年遞以衛レ之）

まうとの後のおや

［まうと］天武御宇には第一のかばねとさだめ置給へりしかりといへども後世藤原朝臣の盛なりしより第二の戸となりて眞人の人も或朝臣に改給ふやうになれり但こゝにまうとゝいへるは下にあそんといへるにおなじ心にもちひていへり異邦亦稱美の號に用ひし例あり（まうとは眞人なり此和訓まことうといへる意なり今まうとゝいへるはまことうとゝいへるとうのかへしつによる哉）

○日本紀天武天皇十三年冬十月己卯朔詔更改二諸氏之族姓一作二八色之姓一一曰眞人二曰朝臣三曰宿禰四曰忌寸五曰道師六曰臣七曰連八曰稻置云云 ○事物紀原唐會要云天寶元年二月十二日追二贈莊子南華眞人一三月十九日李林甫奏二列子一號二沖虛眞人一文子號二通玄眞人一庚桑子號二洞靈眞人一宋朝會要云景德二年二月九日詔二沖靈眞人一宣レ進二號沖虛至德眞人一大中祥符五年十月廿六日禮議院請改二文子一爲二通元眞人一要節（頭註書入云）素問上古天眞論篇黃帝曰余聞上古有二眞人者一提二契天地一把二握陰陽一呼二吸精氣一獨立守レ神肌肉若レ一故能壽敝二天地一無レ有二終時一此其道生

中將の君

［中將］といへるは中﨟格なる女房の呼名なり

なけし

［なけし］是上の長押をいふにはあらず本文の心によれば下にある長押なり榊木の卷にみすはかり引きてなげしにおしかゝりてとあり殿舍の中に上段あり其上段の敷居の上になげしを付る是なり其長押の下は下段なり ○江次第（例見著二朝所一）登レ自二西面南階一（脫二履於階下一）於二長押上一突二右膝一之後進

あそん

［朝臣］是亦氏骨なり本姓の尊卑其ほど〳〵のあしらひにつきて給ふ所の戸次第あり後世のやう朝臣眞人宿禰連王公首臣造直忌寸縣主村主神主使主人

伊美吉史勝部氏伊吉阿祇奈君倉人等也拾芥抄にみえたり其中朝臣は天武天皇の御字には第二の戸なりしか不比等公に朝臣の戸を給はりてよりそのづから第一のかばねとなれり朝臣は是帝皇相したしみたまふの稱なり但朝臣は藤原の姓のみにかぎらず本姓のよきには是を給へり必しも私には稱しがたき儀也假令連といへるを朝臣となせるも改戸の宣下なければならぬ儀なり　○續日本紀寶龜四年五月辛己阿曾美爲ニ朝臣一蔡邕獨斷公卿中尙書衣レ帛而朝曰ニ朝臣一諸營校尉大夫以下亦爲ニ朝臣一

わかみくしげ殿

[御匣殿]は公家にも私家にもありや是裝束など調ずる所なりといへり　○禁祕御抄御匣殿御匣殿內藏寮外御服裁縫所也　△うつせ見

御消息もたえてなし

[消息]は安否善惡をおとづれといふ意なり日本紀にはあるかたちと和訓せり　○天平勝寶六年三月癸丑太宰府言遣ニ使專ニ訪人唐第一船一其消息云第一船擧レ帆持ニ奄美島一去未レ知ニ著處一　○事言要玄卷二音問謂ニ之消息一猶レ言ニ安否善惡一消消耗也息生息也○杜子美詩姦客無ニ消息一○易剝封君子尙ニ消息盈虛ニ天行也

わか車にて

[車]絲毛葉牛檳榔毛廂指唐車尼眉車半蔀網代文車いろ〳〵あり人によりてかはる也但小君か車は手引の腰車ならんと凡乘車は輪の木八枚にして輻の數廿四枚あり輪の木一つごとに輻三つゞゝさすが故に廿四枚也但雜車は輪の木七枚輪の數廿一枚ありといへり他の國のはじめ車を馬に引せり漢の時より牛車に乘れるよし也其牛車の事薄雲の卷にくはしくしるすべし（頭註曰）檳榔本字蒲葵也古說傳者不審和名抄古史考云黃帝作車引レ重致レ遠

いんかしの妻戸にたて奉りて

[妻戸]とはやり戸にはあらで左右二枚の戸を各妻あはせにひらきとづるやうにしたるをいへりこれ舍室のはし〴〵にあり然りといへども或は一枚ひらきにて妻戸といへるものあると也　○江次第茂賀詣前一日御裝束下ニ母屋御簾一其內懸ニ壁代一上下對ニ南廂一南御簾四間幷四面妻戸間御簾上

かうしたたきののしり

[かうし]晝はあけ夜はおろす內外のへだてなり隔

とも又は格子とも見えたり

碁うたせ給ふ

[碁]は圍碁なりまた殿上にも臺盤所にもをかるゝなり禁秘御抄に見えたり ○和名抄碁子囊經云白黑碁子各一百七十枚 ○博物志堯造二圍碁一 以敎二圍朱一 ○碁有二四象一班固弈旨論曰局必方正象二地則一也道必正直神明德也碁有二黑白一陰陽分也駢羅列布效二天文一也四象既陳行レ之在レ人蓋王政也或虛設豫置以自衞獲蓋象二庖犧網罟之制一堤防周起障塞漸決有レ似二夏后治一レ水之勢一作レ伏設レ詐突レ圍橫レ行田單之奇要厄相劫割レ地取レ賞蘇張之資確類書

こきあやの

[こきあや]とは濃いろあやなり紫にも蘇芳にも紅にも濃き色あればいづれよりとさだめがたし

一重かさねなめり

[一重かさね]五月五日より着用のよし裝束の諸抄に見えたりすゞしの草ふたつをひねりかさねたるをひとへがさねといふ

ふたあゐの小うちき

[二藍]の事はゝ木ゞの卷なをしの所にしるすがごとく赤花と青花とにて染るがゆへに二あゐの名を得たり赤花をあか藍ともいひ青花をあを藍ともいへる故也色は大概うす紫のごとし故に又二あゐ紫とも三條裝束抄にみえたり ○台記別記久安四年八月從三位藤多子入内之記文云廿八日癸丑使二仲行一申二禪閤一曰著二唐衣一之時著二小袿一乎皈來曰禪閤不レ悟仍問二女院一女院仰曰故四條太后曰著二唐衣一之時不レ著二小袿一不レ着二小袿一之時不レ著二唐衣一是禮也詣二神社一及奉幣之時著二唐衣一不レ著二小袿一也

みんふのおもとなめり

[みんふ]は女のよび名なり[おもと]とは近侍せる人也侍從をおもと人といふにおなじ

二條院におはしましぬ

[二條院]はさか木の卷齊王御行列のみち二條より洞院のおほぢをおれ給ほどに二條院なればとあるこれなりしかれば拾芥抄にいへる二條院にはあらで二條殿といふにあたれりしかるを二條院となぞらへていへるにや ○拾芥抄二條殿 二條南東洞院東入道大相國道長造レ之二條關白傳領

源氏官職故實秘抄卷三　夕顏若紫 末摘花

夕かほ

大貳のめのと

[大貳のめのと]は太宰府の次官によせたる名也其太宰府は筑前國三笠郡にありて西海道九國二嶋の西蕃國の藩鎭たり其長管は帥權帥大貳少貳判官大監少監主典大典少典以下の職名あり　○令條ににに委見へたり其大貳の號をかり用ひたる女のよび名なり又めのとの事は桐つぼの巻にしるしたり

はじとみ四五けん

[はじとみ]は半蔀なり物見のはざまのうへに戸をつりて外につきあぐるやうにこしらへたるをはじとみといふ○和名抄蔀周禮注云蔀覆レ曖障レ光者也

さきを追せ給はす

[さきをふ]とは前聲とて蹕の聲を發して前驅す是を警蹕といふ但公卿と殿上人の差別習ありとなり凡前を追事は出門の時は車副警蹕し辻々は隨身警蹕すと或記にみへたり今世には此儀絶たり漢書に師古註に警は戒肅なり蹕は行人をとゞむる也としるせり又邪鬼ををふ術共云つべし○枕草紙上達部のさきども殿上人のはみじかかれば大さきこさきと聞つけてさはぐあまたたびなれば其聲共も皆聞しられてそれぞかれぞといふに又あらずなどいへば人してみせなどするにいひあてたるはさればこそなどいふもおかし○江談或人云警蹕問云天子用レ之見ニ文選一私行之時何用レ此哉答云公卿皆隱公達隱也祕事云々○台記康治三年正月廿六日戊子參ニ仁和寺一仁和寺法親王問云春日南高藏東有ニ小社一余宅乾垣外其名何余答曰號ニ火御子一親王云今法皇御宇時御ニ春日南高藏西里亭宇治禪閤爲ニ執政臣一常自ニ北陣一出入公種法師爲ニ隨身一其比禪閤宅中侍男一人疑死三十日穢經ニ年暑一之後作神子火御憑レ人云我常畏ニ公種前聲一因殺ニ彼侍一不レ令ニ執政參内一也云々○唐類函莊子云警蹕叫呼而行世俗之所謂富貴也云々

きりかけたつ物

[きりかけ]は間垣なりこしらへやう說〳〵ありて一儀ならず江次第相撲の篇にもみへたり○大和物語にゐしうといふ大とく房にしける所のまへにきりかけをなんせさせけるそのけづりくつにかきつ

らける「まかきするひだのたくみのたつきをとの
あなかしかきしなぞや世中などいひてれこなひし
にふかき山にいりなんとすといひていにけり

御隨身

御隨身とは上皇執政著笠一伏を給ふ大臣及左右大將の行路の防禦の爲に上より給ふが故に御隨身といへり或中少將といへども事により隨身を給ふと見御隨身には將監將曹を除て多府生番長舍人等を給はる也但一員の隨身を給ふとある時は將監以下なり其員數は賜る人の官の高下によりて多少あるべし凡隨身の濫觴は養老年中舍人親王新田部親王に内舍人大舍人衞士等を給ふにはじまれり
この時いまだ近衞の官なし其後天平寶字中に藤原中麿に給ひ貞觀中には忠行公に給ひしより此かた御隨身を給ふ事綿々たり河海説には宮川勝といひし人聖德太子の隨身たりし由を載るといへども國史にもみえず況寓意の説なれば信用しがたき事也○續日本紀養老三年十月辛巳賜二一品舍人親王内舍人二人大舍人四人衞士三十人二品新田部親王内舍人二人大舍人四人衞士二十人一其舍人供二左右雜使一衞士一以充二行路防禦一於戲欽哉以副二朕意一焉凡在二帳等一並宜二聞知一

白きあふきのつまいたうこかしたる

白きあふきとは白き扇なるべしいたうこかしたるとは香にたきしみたる心なりといへり
○事物紀原曰古今注云舜廣開二視聽一求二賢人一以自輔作二五明扇一而黄帝内傳亦有二五明扇之起一以二五明一而制也陸機扇賦云昔武王玄覽造二扇於前一然則今以招レ涼者周武王所レ作云故傳有二武王扇レ賜之事一一曰夏禹也

あにの阿闍梨

阿闍梨とは梵語なり是を[illegible]と譯す是諸寺に寄置る其傳法灌頂職位を授べきよし官符を下さるゝなり臨時の受戒をも遂ることもから是に補す員數さだまらず又一身阿闍梨とは文字のごとくひとりなるべし一段規模の事なり○釋家官班記 山門阿闍梨 仁壽四年十月十四日傳燈大法師安惠惠亮等補二阿闍梨一慈覺大師奏二請官符一二人也安惠者第四座主惠亮者西塔院主是始也一傳燈法師位寺禪 一身阿闍梨 天祿四年三月十九日補レ之有二官符一慈惠和尚奏是初例也是茲惠

和尙弟子諡號慈恩九條右大臣師輔公息也○瑯邪代醉阿闍梨梵語云阿闍梨即唐云ニ軌範一今稱ニ闍梨一蓋梵語訛語也又云ニ阿闍梨夜一隋云ニ正行能ク糾ニ正弟子行一故也

揚名介なる人の家になん侍りける

揚名介 これ此物語にて三ケの大事の一つなる由なり但本儀には縣召の除目にて祕傳にこれ給ふ事と承りぬ舊例をみれば揚名の掾目史生などもありき然るに此卷のみを心得て只揚名介と計思人あり凡揚名の官には其任國にくだらざれば公廨にもあづからざるの名なりしとかれども後世には揚名の國とてをのづから數さだまりたるやうに成ける也是執筆の人の祕事なれば己ごときのあづかりいふべきにあらざるなり或人問任國にくだらず公廨にあづからぬ名なりと申聞らるといへども源氏本文におとこはゐ中にまかりてなむとありいかがといふ故に新續古今忠守朝臣の歌を引てあかせり○新續古今雜中源氏物語揚名介の事を忠守朝臣に尋るとて藤原雅朝歌につたへをく道にもまよふ夕かほの宿の主人のしるへともなれ忠守返歌に一心あてにそれかとばかりつたへ來て主さたまらぬ夕顔の花

しひらたつ物

しひら は褶なり男は袴の上にきる女は上裙にて具して着る物也といへり或は略して褶ばかりも着けるとなり是も女房のほど／＼によりて其色替るにや○衣服令内親王淺綠褶蘇芳深淺紫綠纈裙女王褶同ニ内親王一內命婦一位淺縹褶蘇芳深淺紫綠纈裙三位褶亦同蓋不レ見ニ褶制一略歟○同集解穴云女褶服ニ裙上一耳跡云婦女服ニ褶裙一男褶加ニ表袴上一女褶先著レ褶而纈纈裙表而褶下端顯也穴與跡文異也

しをんいろの折にあひたるうすもの丶裳

しをん色 は面薄色裏青也是は衣の色成よしにてうすもの丶裳は別なるべし雅抄にしをん色は常にきるものにあらず秋のはじめにきる物也とみえたり

物怪ノ所ニ云上童ナリ
さふらひわらは

さふらひ童 これ女にはあらず近侍せる男童成べし

さしぬきのすそ

さしぬき 奴袴なり官位によりていろ／＼かはる

なり委は蓬生の巻にしるすべし○和名抄楊氏漢語
抄云奴袴和訓佐師奴枳乃波賀万

右近の君

右近とは中﨟なる女のよび名なり

小舎人わらは

小さねり童は中少將たる人のめしぐせらるゝ由
也左右に親近せる通稱を舎人といへると也○漢高
帝紀舎人師古舎人親ニ近左右ニ之通稱也

御さうそくもやつれたるかりの御そを奉り

御やつれたるかりの御衣とは假の御衣にや又狩の
御衣といへる事にやことばかよひてわかちがたし
本文の心によりて思ふになをしをぬぎかへて狩衣
にやつし給ふ心ならんか

たいふ

たいふ本文かな書なれば叙爵の事をいへる大夫
か又は八省（中務式部治部民部兵部刑部大藏宮内）大輔をいへるかおぼつ
かなし但此書のうへにて其よるところのならひあ
るべきなり

白きあはせ薄いろのなよよかなるをかさねて

花鳥に白き袷の衣にうすいろのうはぎさきだめ給
ひし尤さもあるべき儀也但薄色にも織ものと染い
ろとの二やうあり染いろを又付いろともいへり
凡装束諸抄のならひうすいろといへるに他のいろ
はあらで必うす紫をいふなり只紫としるせるとき
はこき紫と心得てよし○名目抄薄色經紫緯白

なにかしの院

何かしの院何かしとはそれといはずして文段の
意味にて聞ゆべき事をしばらくひかへて何かしの
院何がしのおとゞ何がし寺何がしの僧都何がしの
たけなどいへり本文に其あたり近き何がしの院と
あれば六條院也此院又河原の院ともいへるよし也
○拾芥抄河原院（六條坊門南萬里小路東八町云云）融大臣家也後寛平法
皇御所本四町京極西號ニ東六條院ー

しもけいし

しもけいしは下家司なりいにしへは當官の三位
已上には家司下家司大從少從大書吏少書吏等を給
はりて召つかはるゝよしなり

べちなう

べちなうは別納なり是上皇の御爲に大藏省の納
物十分の二をさけて別納とする所也○西宮記所見

大藏省納物割二十分二一別納〇江次第別納供二御飯一 敎旨田地子

太刀をひきぬき

【太刀】いろ〳〵あり 衣冠直衣狩 衣などにて帶し給ふは野太刀なり或蒔繪螺鈿野太刀木地螺細野太刀蒔繪野太刀いろ〳〵あり野太刀別名又多し故にしるしぬ〇名目抄 野太刀或號二平鞘一太刀一或號二毛拔形太刀一或號二革緒太刀一非二武官一者不レ用レ之故號二衛府太刀一

うへわらは

【うへわらは】は侍はらは 也上にいへ る小舍人わらはなるべし

隨身もつるうちして

【つるうち】は弓弦をならす也是隨 身つか へゐます をしらしむるなり

瀧くちなりければゆつるいとつき〳〵しくうちならして

【瀧口】とは 淸凉殿の艮にある所の名也 一說御溝になが れ來る水口の由なり然るを此處に居る侍の名に稱するなり其瀧口の侍は寛平の御時より始てをかれ藏人所の被接の官としたもふ是も宿侍してゆづるうちならしとのゐ申をつとむることなりおもふに瀧口の事叓にかゝらぬ事なれども只事をよせていへる此書の一體なるべし〇拾芥抄瀧口本所在二御所近邊一淸凉殿艮邊歟寛平御時被レ置レ衆若十人若二十人云云〇藏人所篇日或云衆十二人有二內官一或所衆二十二人瀧口二十二人〇除目執筆祕抄 所衆瀧口勞帳 所衆瀧口勞帳者各上臈三人上日藏人所出納勘天 書二紙屋紙一通一也 書並 無二出納署一所衆注二晝夜一瀧口 注二夜計一各加二懸紙一加レ署柳筥一枚

內をおほしやりてなたいめんは過ぬらん瀧口のとのね申いまそとをしはかり給ふ

【なたいめん】とは問籍の時亥 の尅殿上の名謁 也次

【瀧口のとのゐ申】鳴弦して名謁あり〇侍中群要 名謁 亥二尅雖下不レ奏レ文宿侍三ケ日以後上隨二上臈氣色一進止待レ次天稱二姓名一但自問時頗出レ自二本座一突レ膝天問レ之 其詞云 たり 次第至天自稱二姓名一各名謁畢經簀子敷入レ自二南第二間上一孫廂長押上過レ東天北行 踏二自レ東第三 枚許返一行頭 令二有レ音 於二昆明 池障子一向レ巽 近來說下二簀子敷一云云 時瀧口衆列二居於御前一庭 東 次藏人先咳次瀧 口鳴レ弦二度問

誰にか侍る 一々名謁三人已上候時問レ之不レ足ニ三人ニ時不レ問 不レ足之由奏ニ口 不レ鳴レ弦陳ニ申殿上名 謁亦如レ此若御格子乃内留人候時可レ待ニ其人乃問ニレ之但至ニ于瀧口名謁ニ者在レ外職事至天問若名謁間燈消以ニ殿上燈ニ置ニ其燈樓ニ或暫居ニ高欄ニ云云或用ニ脂燭ニ○禁祕御抄問籍事瀧口於ニ北陣ニ 瀧口陳近 申レ之參ニ御湯殿北ニ次於ニ殿上口ニ申レ之有ニ公事ニ之時不レ可レ申レ之

南殿の鬼の何がしのおとゞをおひやかしけるためし

[何かしのおとゞ]は貞信公なり此事世續を引て諸抄にくはしければこゝにしるさず

くゝり引あけなとして

[くゝり]は指貫にさしたるくゝりなりさしぬきのくゝりを結ふにも上括下括の二樣あり下くゞりを上括に引あげたるなり ○桃華蘂葉下括之時若年人用ニ腹白括ニ 紫下白ニ而サスコナリ さしぬきの上へより貫レ之或籠括の末を組て無レ之或又籠括腹白なくても紫組一筋をもて括る也淺黄指貫には白組一筋をもちゆ

いかなるいきふれにかゝらせ給ふぞや

[いきふれ]とは觸穢の事をいへり

藏人の辨

[藏人の辨]に三つの道あり或は省の輔 治民兵等 に任じて藏人に補し辨官に任ずる一つ或は勘解由次官に任じて藏人に補し辨官に任ずる一つ或廷尉佐 任ニ左右衛門權佐ニ而蒙ニ使宣旨ニ云ニ之廷尉佐ニ 任じて藏人に補し辨官に任ずる一つこれなり○職原抄 五位藏人 補ニ藏人ニ之日帶廷尉佐 是第一 勘解由次官ニ 是第二 省輔等 是第三 以レ之知ニ朝奬之淺深ニ也自ニ廷尉佐ニ補ニ藏人ニ兼ニ辨官ニ此爲ニ至極之朝奬ニ所謂三事兼帶是也頗選中之選也

少將の命婦

[少將]は中﨟なる女の呼名なり命婦の事はきり壺の卷にしるしぬ

大德のこゑとうとく

[大德]は日本紀に法師とよめり大和物がたりにも同じ人を或法師といひ或は大德とみえたり○日本紀持統天皇元年八月壬辰朔己未天皇請ニ集三百龍象大德寺於飛鳥寺ニ奉レ施ニ袈裟ニ人別一領○事物紀原 僧號 後秦鳩摩羅什始號ニ法師ニ其後中國名僧亦稱レ之晋朝講ニ經草堂寺ニ有ニ廟臣太德 沙門千 餘人ニ此治有ニ大德之呼ニ

三位中將

三位中將はよき家の人ならでは任叙し給ぬ由なり先に中將に任じ後に三位に叙して猶中將元のごとくなるをいへり是より參議に任せずして中納言に直任し給ふが故に規摸なる事なり○官職祕抄至二于二位中將一者非二執柄子息一世源氏一者不レ叙二留之一而實能公始爲二三位中將一也

文章博士めして

文章博士は令外の官なり大學寮教授官にして神龜五年七月廿一日に始て置る是紀傳道儒の選なり菅江の儒及日野南家の人兼任し給ふといへり○類聚國史文章博士神龜五年七月廿一日置レ之大同三年二月丙辰減二大學直講博士一員一置二紀傳博士一員一承和元年四月庚子敕宜停二紀傳博士一加二置文章博士一員一其紀傳得業及徒亦停レ之　○三代實錄貞觀元年六月廿五日己酉文章博士職田元給二四町一今加二二町一

願文をつくらせ給ふ

願文とは四十九日の結願功德の願文なり文章さだまらず事ごとにかはるべし本朝文粹にも見たり

くしあふぎ

くしはけづりぐしなりあふぎの事は上にしるせり○和名抄櫛說文云櫛者梳枇總名也唐韻云梳細櫛也枇百刺櫛也○事物紀原梳實錄云赫胥氏造レ梳以レ木爲レ之二十四齒取二疏通之義一

わかむらさき

きた山になんなにかし寺

なにかし寺とは鞍馬寺をさしていへり凡本邦寺號のはじめは欽明天皇御宇蘇我稻目宿禰の向原の家を淨捨て寺とするにはじまる國史にくはしく見えたり又鞍馬でらのおこりは諸抄に皆しるされたり異邦寺のはじめは漢明帝のときにおこれり○事物紀原僧寺漢明帝於二東都城門外一立二精舍一以處二攝摩騰竺法蘭一即白馬寺也騰始自二西域一以二白馬一䭾レ經來初止二鴻臚寺一遂取二寺名一刱置二白馬寺一即僧寺之始也隋煬帝改曰二道場一後復曰レ寺

僧房とも

僧房房の和訓もつはねといふ寺と僧房と別なり僧の居住の所を僧房といひ尼の居る所を尼房といへり僧尼令にみえたり又僧坊と書たるもありそれ

もあひ通ずるにや　○和名抄伽藍具法華經云起塔寺及造僧坊他經等或云僧房供養衆僧其德最勝無量無邊○事物紀原房蘇鶚演義曰房方也室內之方正也又房防也防風雨燥濕也説文云房室在旁者也尚書顧命有東房西房詩有招我由房蓋周制也

僧都

僧都は推古天皇御宇にはじまる一僧有て斧を執て祖父を毆しより僧正僧都を任して僧尼を檢校さしむ是本邦僧正僧都の始也○日本紀推古天皇卅二年夏四月丙午朔戊午詔曰夫道人尚犯法何以誨俗人故自今以後任僧正僧都仍應檢校僧尼壬戌以觀勒僧爲僧正以鞍部德積爲僧都

しろききぬ山ふきなどの

山ふきはうはきのいろ也それやまぶき色は支子染よりやつし出したる名なり表黄裏紅なるをうらやまぶきといひ表うすくちば裏黄なるをはなやまぶきといへるよしなり○法曹至要抄元慶五年十月十四日宣旨支子染深色可禁黄丹不得服用而年來以茜紅交染尤濫其色自今以後茜若紅交染支子者不論淺深宜加禁制者兼明案之著件色之時雖禁制重近來之作法或稱欵冬色著用之或號黄朽葉色著用之

少納言のめのと

少納言とは女の呼名にては中﨟格なる名なりめのとの事はきりつぼの巻にしるしぬ

ひたいつきかんざし

かんざしは釵なり又笄ともしるせりおとなになりてかみあげしたる女のもちゆるもの也西宮記にもみえたり○事物紀原釵實錄云燧人始爲髻女媧之女以荊梭及竹爲笄以貫髪至堯以銅爲之且横貫焉舜雜以象牙玳瑁此釵之始也

故按察大納言

故按察大納言故の字の事帚木の巻にしるしぬ凡按察は大納言の兼官なれども或は中納言或は宰相兼任の例ありそれ按察使を置るゝ事は陸奥出羽の兩國の事を監察せしむべきためなり初任の例左にしるしぬ○續日本紀元正天皇養老三年秋七月庚子始置諸國按察使而其後停諸國按察使唯置陸奥出羽兩國耳常陸○公卿補任聖武天皇天平三年正月

日從四位上大野朝臣東人任ニ陸奥出羽按察使一兼ニ大養徳守ニ十一年四月十九日任ニ參議一

聖徳太子

[聖徳太子]は用明天皇第一皇子也本名厩戸皇子又稱美して豊聰耳皇子八耳皇子上宮太子といふ所謂聖徳の御名は謚號なり○日本紀推古天皇廿九年春二月己丑朔癸巳半夜厩戸豊聰耳皇子命薨ニ于斑鳩宮一是時諸王諸臣及天下百姓悉長老如レ失ニ愛兒一而鹽酢之味在レ口不レ嘗少幼者如レ亡ニ慈父母一以哭泣之聲滿ニ於行路一乃耕夫止レ耜舂女不レ杵皆曰日月失レ輝天地既崩自レ今以後誰恃哉是月葬ニ上宮太子於磯長陵一當ニ是時一高麗僧惠慈聞ニ上宮皇太子薨一以大悲レ之爲ニ皇太子一請レ僧而設齋仍親說レ經之日誓願曰於日本國有ニ聖人一曰ニ上宮豊聰耳皇子一固天攸レ縱以ニ玄聖之徳一生ニ日本之國一包ニ貫三統一纂ニ先聖之宏猷一恭ニ敬三寶一救ニ黎元之厄一是實大聖也今太子既薨之我雖ニ異國一心在ニ斷金一某獨生之有ニ何益一矣我以ニ來年二月五日一必死因以遇ニ上宮太子於淨土一以共化ニ衆生一於ニ是惠慈當ニ于期日一而死之是以時人之彼此共言其獨非ニ上宮太子之聖一惠慈亦聖也

○公式令謚集解一云上太宮太子稱ニ聖徳王一之類也

五葉の枝につけてこんるりのつぼ共に御藥とも入て藤さくらなどにつけて

[五葉枝藤さくら]是をも心葉といふ凡草木の枝に物を付る事は其色にしたがふよし也梅がえの卷に委見えたりくしのはこがうての筥の心葉の事は繪合の卷にしるすべし

とよらの寺のにしなるやとうたふ

是は催馬樂の呂歌に葛城といふうたひなり河海にくはしくみえたり

例のひちりき

[ひちりき]は篳篥也或觱篥ともしるせり其もとは胡中よりいつるよし也樂器の中他の器に劣りけるにや主上上皇の御藝能には用ひたまはざるよしなり名管はただ海賊丸といへるのみにや

○事物紀原觱篥說文云乃羌人所レ吹ニ屠觱一以驚レ馬何承天纂文云羌胡樂器出ニ於胡中一其聲悲本名ニ悲栗一令狐揆樂要云篳篥出ニ於胡中一或云龜玆國也徐景山云本胡人牧レ馬截レ骨爲レ筒用レ蘆貫レ首吹レ之以驚ニ群馬一因而爲レ竅以成ニ音律一今胡部在ニ管音前一

故世亦云二頭管一

さうのふえ

［さうのふえ］は笙なり此樂器は天子の御藝能にも用ひ給ふ例あり是は名管もかず／＼あり

○江談笙　大蚶界繪（ヲホキサケヱ）　小蚶界繪（コキサケヱ）　雲和　法華寺　不不替　小笙

○拾芥抄笙　交麻呂（笙昔家）　新交丸（同）　橘皮　節亂　小唐笙　無名　菊麻呂　不置丸　懷丸　下褄　一管　白樺　高市　白笙　太子　火桶　蚕拡（アモタカ）　赤笙　達智門

○和名抄笙（象乃匏豆在江俗）簧之大釋名云笙竹之母曰レ匏以レ匏爲二之横施一於管頭一曰レ簧以二竹鐵一作レ之（今案有十七管）○說文云笙十三簧象二鳳之身一癸曰列管以象二鳳翼一也或云笙其音倚雅云大笙謂二之簧一郭璞云列管匏中施二簧管端一　○事物紀原世本云女媧作二笙簧一高氏小史亦云

きんをみつからもてまいり

［きん］は琴なり此樂器中古以來斷絕のよしあり河海に白虎通を引て玉琴は禁なり邪氣を禁止し人の心をたゝしうすさいへり　○和名抄琴帝王世說云炎帝作二五絃琴一世本云神農作レ之琴操云伏犧作レ之以具二宮商角徵羽一至二於周文王一增二一絃一一說云文王武王各加二一絃一（音與レ弦同和名古止乃乎）文選琴賦云徽以二鍾山之玉一（今案俗說琴体有二龍池○鳳池○龍舌○龍尾蜂腰○鳳足○絃納古人肩等名一）○事物紀原琴文選西都賦云伏犧作レ琴琴操云伏犧作レ琴長三尺六寸六分琴書云伏犧氏王二天下一削レ桐爲レ琴

ひゐなあそびにも繪かい給ふにも

［ひゐなあそひ］の事說々おほし或は上巳のはらひの人形におこるさいひ或はあまかつしさいへり江次第によれはあまかつさひゐなは別なり（天鈿者是目勝二於人一者）大殿祭に雛をもちひ給ふなれは正しく御身のはらひとは見えたり但本朝上巳のはらひ未たはしまらざるさき崇神天皇御宇にわらはめの謳歌の中ひゐなあそひさおほしき句ありしかれば元は只女のわらはの天性もてあそぶ事にて有ける屋後世に至て彼號混合して用ひ給ふ事のやうにおもへり

○日本紀崇神天皇十年九月丙戌朔壬子有二少女一歌レ之曰瀰磨紀異利寐胡播揶（ミマキイリヒコハヤ）飫迺餓烏磨志齊務（オノガヲシセム）殊末句志羅珥比賣那素寐殊望（スマクシラニヒメナソビスモ）（一云於朋耆妬庸利于介伽卑氏許呂佐務苫須羅句塢志羅珥比賣那素寐須望）於レ是天彦命異之問二童女一曰汝言二何

辭對曰勿言也唯歌耳乃重詠先歌忽不見矣是武埴安彥將謀反之表者也是此歌之端詠比比奈遊之詞也注雛遊之事見日本紀曰春正月侍從奉勤雛像太子親服雛像分其男像女像定內儀外儀見男女別立之位之以先皇遺遊與諸童言動靜并以古禮教之為慰而語曰此遊非大夫遊向為幼女遊云々
○江次第立太子事書陪膳記或幼宮時以女房為陪膳上一本髮女藏人四人以上傳供之藏人一人居土器二口於御盤持參即受御三把奉帳中阿末加津云々但有常阿末加律土器撤其後供比比奈○釆女進差文神祇官奉仕大殿祭藏人引導指臨御下左依太宮中史宣旨比比奈科給本宮給之　○論語郷黨篇曰雖蔬食菜羹必祭齋如

王命婦

王命婦とは女王の命婦をいふ女王は皇孫のいまた姓を給はらざる人也たとひ一世にても內親王の宣下なきは王名を得給ふ也命婦の事はきりつぼの卷にしるしぬ　○繼嗣令皇兄弟皇子皆為親王以外並為諸王自親王五世雖得王名不在皇親之限　○後宮職員令外命婦准夫位次若諸王以上娶臣家為妻者不在此例義解謂不在下出外命婦之例上

朱雀院

朱雀院は代々の仙居なりといへり紅葉賀卷にしるすべし　○拾芥抄朱雀院累代後院或號四條後院三條南朱雀東四町四條北西坊城東

御帳のうちに

御帳はなつの御帳ならんか

にひ色のこまやかなる

にひ色は鈍色なり服者の着るいろなりこきうすきありこまやかは濃なり

四位五位こきませに

四位五位こきませにとは四位五位の位袍かきましへてなり四位は深緋五位は淺緋なり染やう延喜縫殿寮式に見えたり

すえ摘花

左衛門のめのと

左衛門は中臈格なる女のよひ名なり

大輔の命婦

大輔も亦右に同し

わかむとをりの兵部大輔

わかむとをりとは男女の諸王にして是いまた姓を給はらざる人々なりみをつしの卷にはなれ奉ら

ぬわかむとをりとあるは秋好中宮の御父前坊の親戚なる女王たちと聞へたり又乙女の巻にわかんとをり腹とあるは雲井の鴈の母は式部卿の宮の娘なる女王のよしなりしかれは此兵部大輔も常陸のみこに親戚なる諸王ならんかそれわかむとをり別王等倫なるべし

兵部の大輔は帯劒の官なり其職掌は糾彈のまさき兵部卿の所にしるせり　○日本紀曰景行天皇四年二月紀夫天皇之男女前後并八十子然除二日本武尊稚足彦天皇五百城入彦皇子一之外七十餘子皆封二國郡一各如二其國一故當二今時一謂二諸國之別一者即其別王之苗裔也

筑前守

筑前守は令外官なり此國には元より大宰府官あるか故に守以下の官を任し給はすしかるに大同三年以來別に守介掾目をおかるゝなり職掌は帚木の巻受領の所にしるせり　○類聚三代格大同三年五月十六日省二大宰府監典各二員一置二筑前國司一守一員介一員掾一員大少目各一員

故ひたちのみこ

ひたちのみことは常陸の太守なる親王をいへり上總常陸上野の三國は天長三年九月六日の格によりて親王を太守に任し給へり親王任するとき吏務をしり給はざるが故に件の國は介をもて太守のために吏務をしらしむるよしなり　○帝皇編年記天長三年丙午九月仲野親王爲二上總太守一賀陽親王爲二常陸太守一葛井親王爲二上野太守一以上垣武天皇御子親王任國自レ此治之

もゝしきに

もゝしき内裏を百敷といふ百官の座をしかるゝゆへなりといへり

すいかいのたたすこしおれのこりたる

すいかいは透垣なり

かりきぬすかた

かりきぬ元布衣と書てかり衣と和訓せり後に或狩衣又は獵衣鷹衣ともみえたり冬は裏あり夏はすゝしの狩衣なり但紗のかりきぬは四季通用して用ひらるゝ也五位以上は織物六位已下は無文定る制なり文色はしゐて定らす若年の時は紅梅萌黄の浮文盛年に堅文なり浮文は繁く堅文は遠文たり袖結は十五未滿毛拔形若き人は薄年の組青黄紅紫等の

打衣其次紫匂濃紫の方へよりたるをいふ次に薄色次に淺黃の組なり裏は表の色におなし此外名ある狩衣は表裏差別あり桜重藤重の類なり　○かりきぬは鰭をひねりかへして前後のすそはひねらす神結は白糸を左より右よりにして相まじへて二筋ならべてくくりとす但夏冬通用の事古記所見なしいにしへ通用の狩衣とは紗のかりきぬに裏付たるをもちひ給ふよし也又名あるかりきぬの文は其名によりてもちゆるよしなり凡狩衣は褻の服なれば參内の人は着用し給はぬよしなり但例はあれども然るべからず

○和名抄衣服類篇布衣文選云振二布衣一此間云布衣加利岐沼　○西宮記布衣 太上天皇已下隨レ便服用無レ所レ限　○中右記寛治八年閏三月八日己酉近曾有二新制一布衣鳥帽子者不レ可レ入二陣中一　○禁祕御抄舊記布衣者入二禁中一公卿雜色二人聽レ之宿仕人爲二陪膳一青侍一人聽レ之云々

こまふえとり出給へり

[こまふえ]は高麗笛なり又狛笛ともしるせり右方の舞樂にふく也右方狛樂(コマガク)なれは也是常の横笛よりは小き笛なり狛笛には名物ありともみえず

御しとねうちをき

[しとね]は茵なり唐錦茵方三尺五寸裏濃打物緣赤地小文弘五寸三寸の間東京錦緣茵方二尺五寸裏濃打物緣弘五寸と類聚雜要抄に見えたり今案作やうべりの隅々にさばくちに合せて中入には京莚二枚を縱横に打ちかへて其上下に綿を入て縫くゝむ也文色しゐて定まらざるか○大饗雜事抄茵一枚面白堅織物緣東京錦以二白地錦一云二東京錦一又云東京錦茵藤丸文白綾方一尺八寸緣白地錦四方二寸裏蘇芳平絹無レ緣也

えひのかいとなつかしう

[えひ]は衣被香也薫衣香の事也といへり

大ひちりきさく八のふえ

[大ひちりき]むかしはありて今たえたり[さく八]もいにしへは樂器なりと見えたり○和名抄篳篥律書樂圖云大篳篥小篳篥篳篥二音俗云比千利岐尺八律書樂圖云尺八爲二短笛一縱向吹者也

たいこをさへかうらんのもとにまろはしよせて

[たいこ]に堂下にてうつへきを高欄のもとにまろはしよせたりと也○延喜四年三月廿四日覽二舞樂一左大臣時平公仰令レ推二太鼓階前一自打レ之花鳥餘情

御たいひそくやうのもの

ひそく河海に秘色に磁器也越州より奉る物なり其色翠青にして誠にすぐれたり仍是を秘藏して尋常に用ひざる也故に秘色と號すと也

内教坊

内教坊は女に樂ならはす所なり別當あり大中納言の中其道に堪たる人補之といへり○續日本紀天平寶字三年正月戊辰朔乙酉於朝堂作女樂於舞臺奏内教坊踏歌庭○西宮記臨時一内教坊頭預承和四二廿九別當奏補五節師以内侍宣被仰本人及内侍所以舊舞姬爲師

内侍所

内侍所の事桐壺の卷にくはし

齋院にまいりかよふ

齋院は賀茂齋王の入らせ給ふ院なり齋院の始は嵯峨天皇弘仁九年五月皇女有智子内親王を齋王に立給ふ是天皇と平城上皇と御不快の時の御願なり其後八代ごとに天皇即位のはしめ齋王をあらため立給ふこと伊勢におなじといへり猶葵の卷にしるすへし○類聚國史嵯峨天皇弘仁九年五月乙巳九日始置齋院司宮主長官一員次官一員判官一員主典二員

ゆるしいろのわりなううはしらみたる

ゆるしいろとは紅にても紫にてもうすきいろをいふこきいろは禁色なり但此段ゆるしいろのうはしらみたるとあればふるめきたる紫の衣也と聞えし御幸の卷にむらさきのしらきりみゆるとあるにおなし一說には紅の色のうすきといへりしかれとも紅のうすきは黄ばむものなり寶物集にくれなゐの戀のなみだのいかなればはてはくちばとなるぞかなしきとみえたり

なこりなうくろきうちき

なこりなうくろきは何いろのふるびてくろくなりたるともみえわかたぬをなごりなうといへりうちきの事はうつせみの卷にしるせり

うはきにはふるきのかはきぬ

うはきはうちきぬの上小袖の下にきる物也ふるきのかはきぬとは黒貂の裘なり○和名抄毛群名篇黒貂唐韻云貂有黄貂黑貂出東北夷黒貂和名布流支○江次第春日祭使途中次第篇小一條大將時爲使

脫二黑貂裘一給二兼時一後有二悔氣一上代以二此裘一爲二重物一之故也兼時得二其心一後日令二レ入貢一レ之〇又云昔蕃客參入時重明親時乘二鴨毛車一著二黑貂裘八重一見物此間蕃客纔以件裘一領持來爲二重物一見二八重一大驚云々

きし記官のねり出たる

「きし記官」は政官なり辨少納言內記外記史なとの威儀を見たさるる職のことことしくあゆみねるさまをいふとみえたり練にもいろ〳〵の名あり早練細練猕蟲のやうあるよし也是は內辨のねりやうにて江次第にも見えたり

みちのくにかみのあつこえたる

「みちのくにかみ」は檀紙なり奥州よりすきはしめたる故に陸奥紙となつくみちのくのまゆみの紙といへり檀の字をまゆみとよむとなり

つゝみにころも筥の

「つゝみ」は平つゝみなりうはさしあり「ころも筥」は蒔繪あり包樣は先ひら包をかもてを下にひろげて衣筥を置ていれかたひらを入て單袙大口表袴入べし袙は袖たけにすそを折て右の袖をうへにしておくべし表袴はこしきりにをるされともころも筥になをあまる也其うへにうへのきぬを背折にしてなかをりに又しているべし是も右の袖をうへにして御さほなどにかくるやうにたゝむべしさて後平つゝみのすみずみ折て取あはせてわづかにむすぶべし御なをしも又此定なるべし雅抄にくはしく見えたり〇延喜內匠寮式衣筥六合鷹具各長一尺五寸五分廣一尺三寸深二寸五分

いまやう色のえゆるすまじ

「いまやういろ」とは紅のうすきゆるし色をいへり深色は禁制にして今此いろほとにはゆるさためし色を給ひたるを今樣色と云り但此書「えゆるすましく」とは深方によりたる成るべし〇法曹至要抄紅染事延長四年十月九日宣旨云紅染深色可二禁制一之由去延喜十八年三月十九日給二本樣色絹一已畢而年來之間不レ隨二樣色一彌好二深染一宜下重下知從二新嘗會一以後一切禁遏上矣兼明案件色雖下被レ聽二禁色一之輩上依二此制一尙以不レ著用不レ賴之類不レ知二憲法一恣著用猶從二破却一可レ處二笞三十科一宜二決放一レ之

つやなうふるめきたるなをしのうらうへひとしうこまやかなる

なをしは例の直衣にはあらで上にいへる今やう色のこき方によりたる直衣にてうらうへひとしうこまやかなるとあれば紅梅直衣と聞えし然れども花鳥の御説は上にいへるいまよういろはきぬ此直衣も今やうのうらおもて同し色なるをいふにやとしるし給へり○明星抄松殿裝束抄云法成寺關白直衣布袴紅梅織物直衣紫織物指貫皆練衣著レ之○永久三年十一月四日五節童御覽日法性寺關白紅梅浮文直衣萠黃指貫皆紅衣○禁祕御抄後冷泉院御時後通雅忠類聽ニ雜袍一著ニ紅梅直衣一近代無ニ子細一參ニ御緣邊一者也

たゝ梅の花の色のごとみかさの山のおとめをばすてゝとうたひすさびて出給ひぬ

求子のうたひものなり春日社にてはみかさの山とうたふ餘社にては各其處をうたふと河海にみえたり

かいねり好める花の色あひ

かいねりは火色の類なり皆練火色は物のやうに人の思へるはしかるべからず下の文にしるせり是此本文は衞門府の風俗の歌也○冬平公裝束抄助無智祕抄云火のいろの下襲はかいねりとかはりたるもの也火の色は裏おもてともに打ものにて中重を入たる也かいねりとは只うらは紅のはりたるにてなかへなきなり○政事要略衞門府風俗歌云多多良女乃花乃加以禰利好牟夜減紫色好牟夜

右近の命婦ひこのうねめ

右近の命婦は中﨟なる女の呼名也肥後の采女凡うねめは諸國より貢する女なり國さだまるへからず垂仁天皇の比よりあるにや倭姫世記にみえたり○日本紀孝德天皇大化二年正月甲子朔凡采女貢ニ群少領以上姉妹及子女形容端正者一（今按令條亦同）○續日本紀聖武天皇天平十四年五月庚午采女者自今以後每レ郡一人貢ニ進之一○延喜中務省式凡諸國所レ貢采女名簿者辨官經レ奏下ニ知省一訖錄ニ其申一送ニ內侍一○後漢鄧皇后紀入ニ掖庭一爲ニ采女一註采擇也以因ニ采擇一而立レ名也

えひそめのをり物のは衣

えひそめのをり物といふ時は經赤緯紫のいとにて織たるをいへり裏えひぞめなどいふ時は紫色のうすきなり下襲などの表裏かけてえひ染といふ時

は表すはう裏花田なるをいへり所によら事によりてかはる也○名目抄蒲萄染經赤緯紫○和名抄葛類䕨紫葛和名衣比加豆良 文選蜀都賦云蒲萄亂潰

おとこたうか

「おとこたうか」は正月十四日に行はる聖武天皇天平元年正月十四日にはじまるよし也十六日を女踏歌といへりくはしくは玉かつらの巻にしるすべし

七日の日の節會はてゝ

「七日の節會」のはしめは景行天皇五十一年正月七日群卿を招て宴數日聞しめすとみねたり是濫觴ならんか但青馬の節會といふ時は嵯峨天皇弘仁二年正月七日より始るよし也河海には光仁天皇寶龜六年正月七日に始るとみねたり（後日以下可考）されども此事國史に所見なし「院宮にも引始よし賢木の巻乙女の巻にも見たり」

○日本紀景行天皇五十一年正月壬午朔戊子當二七日一招二群卿一而宴二數日一矣○帝皇編年記嵯峨天皇弘仁二年辛卯正月七日始覽二青馬一○續日本後紀仁明天皇承和元年正月壬子朔戊午當二七日一天皇御二豐樂殿一觀二青馬一宴二群臣一詔授二廿二人各姓名見二本紀一位階一同六年正月甲寅朔庚申天皇御二紫宸殿一覽二青馬一宴二百官一○文德實錄文德天皇仁壽二年正月戊辰朔甲戌幸二豐樂院一以覽二青馬一助二陽氣一也賜二群臣一如レ常

御なをしなど奉るを

「御なをし」此段の直衣は冬の直衣なり凡冬直衣は表白しゞら綾文浮線綾丸白糾張裏平絹若年は紫成長次第に色をうすくなして次に花田是も次第にうすうして年老ては大略白かことし後には一向白しといへり猶宿德の人は表裏白平絹を用ひ給ふとなり凡冬直衣は十月朔日より三月晦日に至るとみねたりそれ直衣をゆる事禁色をゆるとは又各別也いにしへは御簾中入立の人には直衣をゆり給ふよし禁祕抄にみねたりしかれども内々にてはゆりざる人も着用ありしにや殿上人の直衣もみえなり後世は家々の先例に依て或は參議或は納言の時ゆり給ひ又能家には元服の時直に禁色とともに雜袍をゆり給ふよし也裝束諸抄のむねかくのごとし帚木の巻にもくはしくしるしぬ○公卿補任右少將正五位上藤原兼賴萬壽三年二月九日聽二禁色一而十日聽二雜袍一宣旨云

々○餝抄平絹直衣篇舊頭曰前内府云平絹直衣指貫事上下平絹者可レ似ニ諒闇一仍故實一物著ニ有文一云々

かゝけのはこ取いてたる

かゝけのはこは搔上筥はり方八寸三分懸子深七分身深四寸三分角々打入て形木瓜のごとし臺高四寸五分土居深さ二分半共に四寸五分筥臺各蒔繪螺鈿也懸子鋏鑷子髮搔櫛掃耳決などいる身の内には三寸八分丸鏡筥一合を入るよし類聚雜要抄に見えたり

むもんの櫻のほそなか

さくらのほそなかさくらは表しろくうらはこきすはうとも又は裏えひ染ともみえたり細長は幼少の貴女の着する物也かりきぬのくひかみのやうにたててみはたはりのものゝよし也その裁縫はくはしく圓大曆に見えたり○玉蘂細長事建曆元年四月十日姫君有ニ眞菜一姫公白重織物細長同織物小袖ニ重用ニ細長一之時不レ用ニ袙袴等一是先例也

はくろめもまたしかりける

はくろめの事いつれの御代にはしまると云事をしらすしかれども女子は十三歲のときよりはしめて齒牙を染る事といへり其子細も慥ならねども久く本朝のならひとなる又男子といへども華宗貴族の人は皆染らるゝ也此事異國にも傳聞たるや日本の風土を記したる書の中にも牙を染ることをいへり○和名抄容飾具篇文選注云黑齒國在ニ東海中一其土俗以レ草染レ齒故曰ニ黑齒一俗云波久路女今婦人有ニ黑齒具一故取レ之○類聚雜要抄齒黑女盤齒黑女筆齒黑壺○全浙兵制染牙其土官本身宗族子姪並首領頭月皆以ニ鏽鐵水一浸ニ烏桕子一未ニ悉染ニ黑牙一與ニ民間人一以ニ黑白一分ニ其貴賤一女子年及ニ十五已上一不レ分ニ良賤一亦染ニ黑牙一始嫁

源氏官職故實祕抄卷四

紅葉賀
花宴

紅葉賀

朱雀院の行幸は神無月十日あまりなり

【朱雀院】此院は代々のをり位の帝のをはしまし給る所なりを承平のみかどを朱雀院と謚り奉られしより後には此院號なしといへり【行幸】とは天皇他行の御事をいふそれ車駕の至る所にはよろこびさいはひをなす事多きが故に行幸といへり河海に延喜十六年三月七日同八月二十八日康保二年十月二十三日朱雀院に行幸の例をあげられたりそれを此卷の意味によせていへる成べし凡行幸には內舍人刀を帶て車駕の前後を分衛し又衛府の官車駕出入の前駈後殿の事を掌り或前後を分衛しけるよし也職員令にみえたり又行幸の間禁衛の作法留守の官の事下にしるしぬ御所の儀式路途の行列は事長々しければこれを略す

○宮衛令凡車駕出行兵衛衛士先按行及道邊隱映處撿㆓察非常㆒前後呵叱觀人大言登㆑高者使㆑下若有㆑所㆑幸㆑皆先防㆓禁門巷㆒馳㆓斥所㆑不㆑當㆑留者㆒○凡鹵㆓簿內不㆑得㆓橫入㆒其監㆑仗之官撿校者得㆓去來㆒○凡車駕有㆘所㆓臨幸㆒若夜行㆖部隊主帥各相辨識是雖㆓侍臣㆒從㆑外來者非㆑敕不㆑得㆓輙入㆒○凡車駕行幸卽閇㆓諸門㆒隨㆑便開㆓理門㆒其留守人者各自㆓理門㆒出入幷駕還仗至乃開○凡車駕出入諸從㆑駕人當按次第如㆓鹵簿圖㆒去㆑御三百步內不㆑得㆑持㆓兵器㆒其宿衛人從㆑駕者聽㆑之○儀制令凡車駕巡幸及還百官五位以上辭迎留守者不㆑在㆓辭迎之限㆒若不㆑經㆑宿者不㆑用㆓此令㆒○公式令凡車駕巡㆓幸京師㆒留守官給㆓鈴契㆒多少臨時量給（義解謂留守官者皇太子若不㆑在者餘官留守者亦是也）○獨斷幸者宜幸也世俗謂㆑幸爲㆓僥倖㆒車馬所㆑至民臣被㆓其德澤㆒以僥倖故曰㆑幸也先帝故事所㆑至見㆓長吏三老官屬㆒親臨㆑軒作㆑樂賜㆓食皁帛越巾刀珮帶㆒民爵有㆓級數㆒或賜㆓田租之半㆒是故謂㆓之幸㆒皆非㆓其所㆒㆑當必而得㆑之

試樂を御前にてせさせ給ふ

【試樂】とは行幸の當日より以前にこゝろみの樂をせさしむるなり

源氏の中將青海波をぞ舞給ひける

【青海波】は左方の舞也承和御時良岑朝臣安世卿敕

をうけて此舞を作り給ふ元は平調なるを又敕によりて盤渉調にあらため給へりと諸抄にみえたり青海波のとき殿上舞人には青色袍を給ふ例なり武藏人の袍をめして給へり表袴も文小葵なれば是御服と聞えたり蒲萄（エビ）染の下襲（蘇芳文海浦 面裏花田平絹）おなし半臂なりそれ海浦の文（海松 貝等）付らるゝ事は舞手向一方寄波引波の體をうつさるゝ故也太鼓もならひ說あるよしなり○安元行幸記云輪臺はてゝ青海波出替りてまふ維盛業宗共に右の袖を肩ぬく海部の半臂螺鈿の細太刀紺地の水の文のひら緒胡簶をさきて老懸をかく舞おはりてはじめのごとくつらなりて樂屋へいる

家の子はことなる

［家の子］とは良家の子といへる心にや世繼を引て東三條院の御家舞人家の子の君達としるされし御注よく聞えたり河海に良家の子としるさるゝと同じこゝろなり○三代實錄 貞觀五年廿日壬午命二雅樂寮伶人一作レ樂以二帝近侍兒童及良家稚子一爲二舞人一大唐高麗更出而舞新伎散樂競盡二其能一

名を得たる舞のし

［舞の師］唐樂高麗百濟新羅伎樂（クレガク）雜樂師品々あり○職員令雅樂寮頭一人掌二文武雅曲正儛雜樂男女樂人音聲人名帳試二練曲課一事上助一人允一人少允一人大屬一人小屬一人（以下記レ下）

もろこしてまとつくしたる舞とも

［唐樂］は左方舞［高麗］は右方舞なりかはるがはるいてゝまふ○職員令唐樂師十二人掌レ敎二樂生一高麗百濟新羅樂師准レ此樂生六十人掌レ習レ樂餘樂生准レ此高麗樂師四人樂生二十人百濟樂師四人樂生二十人新羅樂師四人樂生二十人伎樂師一人掌レ敎二伎樂生一其生以二樂戸一爲レ之

つゝみのをと

［つゝみ］とは太鼓鞨鼓等なり

かいしろなと殿上人地下も

［かいしろ］は垣代也又壖代とも書なり舞人の立そひなり猶下にくはし［殿上人地下］いにしへは公達家といへとも殿上ゆりさるは地下といひ諸大夫といへとも昇殿ゆりたるは殿上人といふ○官職祕抄（中務治部兵部 刑部宮内省輔）殿上地下公達多任レ之但治部已下は殿上地下諸大夫任レ之

いうそくのかきり

[いうそく]は有識なり

○續日本紀延暦九年秋七月百濟王等上表文曰應神天皇命上毛野氏遠祖荒田別使於百濟搜聘有識者爲二皇太子之師一（節略）

宰相ふたり左衛門督右衛門督

[宰相ふたり]とは參議左衛門督參議右衛門督なるへしそれ今の參議は大寶二年五月より始る正官ならすといへとも敷語をもて官名に名付る也凡宰相と稱するも參議と號するもすへて公卿以上の通稱なり職員令には大納言四人庶事を參議ことを掌るといひ義解には右大臣以上と共に天下の庶事にましはりはかるといふ又寶龜五年三月の國史に諸宰相といへる是也然れとも三四位の人を朝政にましはりはからしめて參議と號するなれは宰相の號も亦をのつからこゝによせていへるにや今の宰相は異邦の參知政事の官に似たる歟 ○續日本紀大寶二年五月丁亥勅二從三位大伴宿禰安麻呂正四位下粟田朝臣眞人從四位上高向朝臣麻呂從四位下下毛野朝臣古麻呂小野朝臣毛野一令三參二議朝政一

四十人のかいしろいひしらす

[かいしろ]の事上にもいへり輪臺の輪つくるといひて舞臺の下にまろく立めくる也輪臺は青海波の前にある樂なり堂上地下相ましはるといへり ○江次第相撲召合篇若舞二青海波一時王一人著二麹塵袍蘇芳緒螺鈿劔紺地平緒海浮牟臂不レ論二左右官人並舞人相撲長一無二垣代一（打二篇皮一）○長秋記元永二年十月四日記輪臺破四人序四人垣代三十六人舞人闕白左右大臣隨身取二反鼻一立（節略）○安元行幸記古鳥蘇はてゝ左右の胡床をとる藏人以下殿上人四十餘人西之中門より御前をわたりて樂屋の未申の庭にむらかりたつ垣代のれうなり出納久親へんひをくはる此時笙の調子を吹次に笛輪臺をふく垣代やう〳〵いつ其道太鼓の後左の鉦鼓の北よりいつ先輪臺の上らふ二人頼實清經次に右の舞人四人次に輪臺の下臈一人爲時もとは笛吹てありしか舞人の闕たるによりて俄に入たれは万歳樂の外はいまたならはねとかいしろはかりに立くはふる也次に殿上人各あゆみつらなりて大輪をめくる左右の舞人はすり鼓を打各めくり立て後東にこれをめぐる其中間よ

り頼實清經出て舞此時に大納言隆季實國中納言資賢中將貞能樂屋より出て頻代にくはゝる音取さうかの有樣こまかにしるすにいとまなし輪臺はてゝ青海波いてかはりてまふ

菊を折て左大將さしかへ給ふ

「菊を折て」とはかさしにし給ふ也

「左大將」大將の官號は聖武天皇神龜五年八月以來よりあり時に中衞及近衞の大將なり其後平城天皇大同二年四月あらためて左右の近衞を置れて大將中少將將監將曹府生番長舍人のりくはしくは左にしるしぬ

○續日本紀聖武天皇神龜五年八月甲午是日置中衞府大將一人（從四位上（頭注云）據延暦十一年四月格作從四位上者是予當作正四位上）少將一人（正五位上）將監四人（從六位上）將曹四人（從七位上）府生六人番長六人中衞三百人（號曰東舍人）使部以下亦有數其職掌在大內以備周衞事在格 ○廢帝天皇天平寶字二年八月甲子中衞府鎭國之衞且此爲先故改爲鎭國衞官亚位准故大將爲正三位官改曰大尉中將爲從四位上官曰驍騎將軍員外將少將爲正五位下官曰次將○同八年九月丙辰勅逆人仲麻呂執政奏改官名宜復舊焉 ○日本紀略桓武天皇延暦十一年四月乙巳中衞大將依舊爲正四位上官○平城天皇大同二年四月巳酉改中衞府爲右近衞府大將爲從三位官（以上） ○同紀廢帝天皇天平寶字三年十二月甲子置授刀衞其官員督一人（從四位上官（頭注云）據延暦十一年格作從四位上者是予當作正四位上）佐一人（正五位上官）大尉一人（從六位上官）少尉一人（正七位上官）大志二人（從七位下官）少志二人（正八位下）○稱德天皇天平神護元年二月甲子改授刀衞爲近衞府其官員大將一人正三位官中將一人從四位下官少將一人正五位下官將監四人從六位上官將曹四人從七位下官○日本紀略桓武天皇延暦十一年四月乙巳近衞大將依舊爲正四位上官○同十八年四月辛巳勅近衞大將今爲從三位官○平城天皇大同二年四月己酉改近衞府爲左近衞府（以上）按左右中將以下官相當有異同大同以來左右一同

○公卿補任大同二年四月廿二日以右大臣正三位近衞大將藤原朝臣內麻呂改近衞爲左近衞大將以中納言從三位勳二等征夷大將軍中衞大將坂上大宿禰田村麻呂改中衞爲右近衞大將是左右大將始也

入あやの程

「入あや」とはさらに取て返し面白く舞事也舞によりて入あやなをも有へし

承香殿の御はらの

「承香殿」を御曹子に給りたる女なるへし　〇拾芥抄承香殿（仁壽殿北九間四面）

秋風樂

「秋風樂」は左方の舞是盤渉調の樂なり

源氏の中將三位し給ふ

「正三位」に叙して中將もとのことくなるを叙留といふ夕顏の卷にもしるしぬそれ正從一位已下の位階は文武天皇の大寶元年三月にはしまる于時ふるき冠位を止給ひて三位以上には正從をわかちて六階となし八位以上は正從上下をわかちて卅階となし初位は大少上下をわかちて四階となして合三十階の爵級をさため給ひし也委續日本紀にみえたり又正の字は濁りてよむならひなり俗說に神位の時は清てよむといふは僻言なり神位人位わかちなくにごりてよむ秘說ある事也〇續日本紀文武天皇大寶元年三月甲午中納言直大一石上朝臣麻呂直廣一藤原朝臣不比等正三位

頭中將正下の加階し給ふ

「正下」爰に正下といへるは正四位下なり頭中將なればなり

まんところけいし

「政所家司」とこゝにあけたるは假令家の事をとり行ものによせていへるにや式正は私ならぬ事也

三條のみや

「三條のみや」其さす所をしらず東三條西三條三條院と拾芥抄にありいづれによせけん哉

命婦中納言の君中務

「命婦中納言の君中務」は女房三人の呼名なり命婦の事は桐壺の卷にしるせり中納言の君中務の事は箒木の卷にしるしぬ但人かはりても同じ事也

御ふく母かたは三月こそはとて

「母かた」は「三月」とあれば外祖父母の服なり凡三月の服には廿日の假なりといへども外祖父母の爲には三十日の假を給はるなり令制かくのごとく但刊版の假寧令には是を漏せり故に法曹至要抄を引て之をあかす〇法曹至要抄（三月服廿日假）喪葬令云服紀者爲

祖父外祖父母伯叔姑妻兄弟姉妹夫之父母嫡子三月

○假寧令云給レ假外祖父母卅日三月服廿日假（兼明）案レ之曾祖父母以下夫之養父母 以上皆三月服廿日假也但外祖父母卅日假也

まはゆき色にはあらて

[まはゆき] は映（マバユキ）曄（同）眩（同）と書なり是かゝやく色にはあらでといへる心なり

紅葉山ふきの地のかぎりをれる御小うちき

[紅葉欵冬] は文のいろ〳〵也地の限りとは地のみえぬほど文を織たるなりといへり

朝拜にまいり給ふとて

[朝拜] 此所は小朝拜なるべし朝賀にあらで私の禮なり元正にてあれば天子を拜し奉るべきよしを申請てをこなへる公事也延喜年中或はとゞめ或は元のごとく行はれし也朝拜の略なれば小朝拜と申よし也作法委江次第にみえたり

○年中行事秘抄（小朝拜）御記云延喜五年二月朔日仰二左大臣一（時平）止二小朝拜一同十九年正月朔日依二左大臣（忠平）申一復レ舊如二今日御記一者年來有二親王拜一止二臣下拜一故也委旨見二本御記一○又云 大臣以下殿上六位已上於二東庭一拜舞巡方魚袋著レ靴螺鈿劔 但六位衛府白帶絲鞋野劔水豹尻鞘各取レ笏雖レ有二親王一猶一上卿奏レ之太子朝覲時不レ奏太子拜畢直參進（西條記）○江次第抄雖二藏人頭一依二位階一立近代貫首亂二位次一立レ上然間非職殿上人不レ列二小朝拜一

なやらふとて

[なやらふ] とは追儺の事也十二月晦日の夜禁中より始て諸家に至るまである事也後世俗家には節分の夜此事をおこなふ也くはしくは下にしるしぬ○延喜大舍人寮式凡年終儺親王以下執二桃弓葦箭桃杖一儺二出宮城四門一（東陽明門南朱雀門西殷富門北達智門）其方相假面一頭（黄金四目）（若有二損壞一者內匠寮修理）緋皁袷袍各一領緋皁罝裳各一腰（料皁緋帛各一匹）子八人紺布衣八領（料紺調布四端）楯一枚（長五尺廣一尺五寸）桙一枚（長九尺）緋幡一流（料帛二尺）並納二寮庫一當時出用（長子裝束度二主殿寮一事畢返納）若有二破壞一申レ省受レ替其弓箭杖受二陰陽寮一○河海 金谷園記爲二陰氣時絕陽氣始來一陰陽相微化爲二疾癘之鬼一爲二人家一作レ病黃帝使二防相氏一黃金四目身著二朱衣一手把二桙楯一口作レ儺儺之聲以逐二疫癘之鬼一至二今歲除夜一爲レ之○月令季冬命有二大儺一旁磔注曰此月有二癘鬼一將レ隨二強陰一出害

レ人敬旁ニ禮於四門一洞満

御ぐしなどまいるあいだ

御ぐし は御髪なりまいるあいだとは御理髪など
のあいだなり

御さうぞくし給ふにも名たかき御帶

名たかき御帶 は石の帶の中にすぐれたる名物也
凡有文巡方無文巡方有文丸鞆無文丸鞆の帶馬腦犀
角の帶の中にて名物あり○延喜彈正式凡白玉腰帶
聽ニ三位以上及四位參議著用一玳瑁馬腦斑犀象牙沙
魚皮紫檀五位已上通用○凡紀伊石帶隱文者及定摺
石帶參議已上刻鏤金銀帶及唐帶五位已上並聽ニ著
用一紀伊石帶白晳者六位已下不レ得レ用レ之○凡烏犀
帶聽ニ六位以下著用一但有ニ通天文一者不レ在ニ聽限一
○和名抄腰帶類篇革帶唐衣服令革帶玉鉤注云今按
革帶以ニ其所レ附(ロイ)ニ金玉石角等一爲レ名有白玉帶隱文
帶馬腦帶波斯馬腦帶紀伊帶出雲石帶越石帶斑犀帶
烏犀帶石散魚帶等其體有ニ純方丸鞆(鉈イ)上等之名一革
帶是其惣名也○台記久安四年六月廿三日侍從通長
申レ慶著ニ束帶一帶黄朽葉(丸鞆在ニ法成寺一)○同五年十月廿六
日師長昇殿帶巡方猶錦○久壽二年四月廿一日賀茂
祭皇后宮使權大進憲親帶用ニ鴛鴦通天一今按 以上犀
角帶

御その裾うしろひきつくろひなど

ひきつくろひ とは御衣文掻給ふなるべし

御くつさらぬばかりにし給ふ

御くつ は淺履靴なり○延喜彈正式凡内外諸司不
レ論ニ把レ笏非レ把レ笏者一公事公會所悉著レ靴自餘時
著レ履(把レ笏者雖レ非ニ公會一雨泥之日聽レ著レ靴)又庶人等通著レ履

ないえんなどいふ事も侍なるを

ないえん はうちうちの宴會也仁壽殿に行はる文
人を召て題を給り詩を作てやがて御前てに講せら
るゝよしなりくはしくは若葉の卷にしるすべし

しゐてさらせ給ふ

さらせ給ふ とは石の帶をさらせ給ふ也上手(ウハテ)をも
亦さすといへり雅抄に帶をも平緒をもさすと見え
たりしかればあつるといふは俗語なるべし○台記
天永四年正月一日主上御元服前日習禮日攝政尋ニ
申左大臣ニ云御元服日指ニ有文玉巡方帶一飾劔之由
承レ之可レ然哉如何左府答申云於ニ或說一者不ニ知給一
但於ニ寛治度例一者有文玉帶帶ニ飾劔代一隨又古大殿

如レ此者今度存二其旨一御禊節下上卿時指二有文巡方帯一法錺劒云々

一院

〔一院〕とは　おりゐのみかどあまた　おはします時第一なるをいへる也

あざれたるうちぎすがた

〔あざれたる〕は雑禮なり〔うちぎ〕は直衣の下にきるなり

さうのことは中のほそをのたへがたきこそ

〔ほそを〕とは箏には大弦四筋中弦四筋細絃四筋合十二筋此外に中の絃一筋は十三絃の中極て細き故細絃といふと古注に見えたり

ほそろくせり

〔ほそろくせり〕は河海に長保樂（大食調古樂）破（保曾呂倶世利）序（賀利夜須）樂の目錄などにはほそろくせりとかりやすは別なりといへり

うねめ女藏人

〔女藏人〕はうねめより遙によき格なる女房なり禁祕御抄に下﨟とある是なり采女の事は末摘の卷にしるせり○禁祕御抄下﨟諸侍賀茂日吉社司等女也

皆稱二候名一也不レ及二國名一但其内宿老者或賀茂祭爲二命婦一渡後或國名をもよび或候名も有也是近代如レ此皆下﨟藏人也但近代中﨟品上品藏人多歟

御うちきの人

〔御うちきの人〕古注説々多く日中行事といへる御記に御手水の間にてみうちきの人めす其人召によりて馬形の障子にかけたる蘇芳の袿をうへに打着て參る御鬘かきおさめ御裝束し奉りて其人はまかりいづ又云袿色或は紫といひ或は蘇芳とあり裝束諸抄の中にも紫蘇芳は共にかよひて用ひらるゝなり○侍中群要定二御美字知支（ミウチギ）一注云奉二仕御理髪一之人不レ著レ袍之名也（薄紫染絹生袍）候二御藏一故奉二仕御理髪一之人稱二御美字知支一

温明殿

〔うんめい殿〕は内侍所なり綾綺殿の東にありて七間四面のよし拾芥抄にみえたり○禁祕御抄（所賀）垂仁天皇御宇始爲二別殿一御二温明殿一

びは

〔びは〕名物多し玄上牧馬井手渭橋良道元興寺木繪

小琴琵末濃無名（已上稱二之十名物一歟） 賢圓齋院師子象白龍大鳥流泉巖黃菊等江談及拾芥抄にみゆ○和名抄琴瑟類篇琵琶今按琵琶頸有二四柱一又琵琶體有二反首轉手覆手承絃撥面落帶滿月半月等之名一俗云反首名也轉手者如二琴軫一者也覆手者在レ腹如レ屈レ掌者也承絃者所三以承二絃之末一者也琴箏等皆有レ之撥面者當二於用レ撥處一以レ革爲レ之滿月半月者在レ腹之孔名也各自二其體一名也○傳玄琵琶賦序云故老云漢遣二烏孫公主一嫁二昆彌一念二其行レ道思慕一使下知レ音者裁二箏筑空侯之聲一作中馬上之樂上以二方語一目レ之曰二琵琶一釋名云本起二於胡中馬上所一レ鼓石崇以謂昔公主嫁二烏孫一令二琵琶一馬上作レ樂以慰二其思一隋音樂志云曲頸琵琶出レ自二西域一非二華夏舊器一也事始云或云碎葉國所レ献

うりつくりになりやしなましと

［うりつくり］催馬樂山城 呂三段 のことはをとるよし諸抄にくはし

すりのかみにこそ

［すりのかみ］は修理大夫の事なり くはし 桐壺の巻にしるしぬ

かうふりなどうちゆがめて

［かうふり］今の冠のおこりは文武天皇の御宇にはじまる但其制古今相ことなるもの歟厚額薄額半額礒額透額の名あり五位以上は有文六位以下は無文衣服令の制なり若年の時はうす額の冠を用ひらるゝよしなり○衣服令一品以下五位上並皂羅頭巾六位以下初以上皂縵頭巾義解謂無文繒（カトリ）也○儕抄年少之人用二薄額一近代依レ有二事煩一不レ依二年齒一用二厚額一儕事也中年人或用二半額冠一礒額隨二人面一立レ之○事物紀原幞頭後周武帝依二周三尺一裁爲二幞頭一此始也唐會要云全幅皂向レ後幞レ髮俗謂二之幞頭一

おひは中將の成けるわか御なをしよりはいろふかし

［おひ］はなをしの帶なり昔直衣をゆる人は直衣の切を帶に用ひらる［わが御なをしよりは色ふかし］とは凡夏の直衣の色最初二藍次に花田を用ひらる二藍も花田も官位すゝみ給ふにしたがひて色うすくなる也しかれば同じ二藍にても三位と四位とは各別なればわが御なをしより色ふかしといへり夏のなをしの事委帚木の巻にしるせり

はた袖もなかりける

はた袖とはなをしにても袍にても身は二はゞにして袖もかた〳〵二はゞづゝなればはた袖內袖の名あり但はた袖は內袖よりせばし

七月にきさきゐ給ふ

きさきゐ給ふとは立后なり立后の作法江次第にくはし后の事は桐つぼの卷にも粗しるしぬ猶下にくはしくしるすべし

源氏の君宰相になり給ぬ

宰相の事上にしるしぬ河海に宰相の中將の初例をあげられたれどもそれは傍例也仁和以往源氏たる人の正三位の中將にて參議に任せらるゝ例は公卿補任にみえず寓言の一體なるべし

をなしきさきと聞ゆる中にも

きさきとは令條によれば太皇太后宮皇太后宮皇后宮別あり是を三宮とも惣ては中宮ともいへり但桓武天皇御宇より御母皇太夫人なるを三宮の外に中宮と稱し給へり其後代々なほかくのごとし然るに此書にをなじ后とあるは是一條院御宇より嫡妻二人を立て一人を皇后とし一人を中宮となし給ふによせたる文なるべし其事左にしるしぬ

○藤原定子（中關白道隆公女伊周妹也）正曆元年十月五日爲二中宮一（元女御）長德二年五月朔日中宮出家爲レ尼（依二伊周隆家等事一也）六月廿二日復入內人不二甘心一長保二年二月二日改二中宮一爲二皇后宮一十二月十六日依二御產事一崩天下心喪服○藤原彰子（御堂殿女也）長保二年二月廿五日爲二中宮一（元女御）于レ時中宮皇后二妻相並（以上古記及百練抄節略）

花の宴

南殿は櫻のえんせさせ給ふ

南殿は紫宸殿なり桐壺の卷にしるしぬそれ南殿の櫻は元梅なり桓武天皇遷都の御時うつし植らるゝ承和年中巳に枯たりしを仁明天皇改て櫻をうへさせ給しと也新千載集南殿宴「もゝ敷やみはしの花はいにしへにいつまて梅の匂ひ成けんとよみ給ひしも其下ごゝろ也其後天德四年九月十三日內裏燒亡のとき櫻又燒失す大內をたて給ふとき重明親王の家の樹をうつさる件の木芳野の山櫻也其後もたび〳〵燒失のとき每度栽らるゝとなり又花宴の事河海にくはし其一二を取て左にしるしぬ○建曆御記云此木は殿の巽の角にあり是大略草創よりの樹なり貞觀に枯といへども根より纔に萠けるを坂

上﨟守敕を奉て是をまもり枝葉ふたゝび盛なりと云々延喜御記にも櫻樹の東の頭に群列すなどあり。天德に燒たりけるを康保元年十一月に植らる則枯同二年正月に又植られて三月に花宴あり兩度の間一は重明親王家の樹一は西京より移栽らる其後度々の燒亡に每度植らるゝもの也〇又延長四年二月十七日御記云此日殿前櫻花盛開仰下召ニ文人一聊開花宴一昨暮預令レ召ニ可レ候文人一今日遣ニ使召ニ常陸太守貞眞親王左大臣ニ左大臣有ニ所煩一不參中刻常陸太守親王參入同刻仰ニ藏人一立ニ倚子於東北廂自レ北第二間一敷ニ菅圓座兩三枚於北階南簀子敷一爲ニ親王納言座一櫻樹下給ニ座兩面一爲ニ文人座一酉刻左衛門督藤原朝臣參御着ニ倚子一令レ召ニ親王藤原朝臣等一即參來侍レ座仰令レ召ニ文人一即文章博士公統朝臣民部大輔博文朝臣右中辨文江民部少輔諸蔭侍ニ内御書所一大内記橘正臣以下文章生以上七人令ニ入仙華門一著ニ樹下座一侍臣給ニ紙筆一仰令レ獻レ題藤原公統朝臣昇レ殿進ニ藤原朝臣座前一給レ之令レ書ニ題目一奏 花房紅蝶珠 仰又令レ上又書奏書レ之 櫻繁春日斜 仰以ニ後所ニ上又仰令レ採ニ韵字ニ右近權少將實頼採レ韵奉レ上次親王以下就ニ文臺一採レ韵仰清平朝臣元方在衡維時尹甫等採レ韵令レ就ニ進中座一于レ時内藏寮給ニ酒肴一中納言藤原朝臣參入仰令レ採レ韵其後仰召ニ樂所一管絃者四五人時時令レ奏ニ音聲一以レ助ニ謳吟一及ニ子刻終一頭取ニ文臺一以ニ公統朝臣一爲ニ講師一讀レ詩仰文人等近侍ニ砌下一令レ講其後管絃頻奏吟レ詩不レ止仰常陸太守親王彈レ箏中納言藤原朝臣彈レ琴及ニ丑刻一親王納言給ニ御衣一文人給レ綿侍臣及樂所人等給ニ疋絹一寅二刻入レ内侍臣退出 以上河海

中宮のかくてをはするを

「中宮」の事桐つぼの卷又紅葉賀の卷にくはしくしるせり但河海に桓武天皇の御時中宮をゝくとしるされたりこゝにいへる中宮とは各別なり言惣意別とて文字は同くして其意は別なり桓武天皇の御時には御母高野皇太夫人を尊稱して中宮と申させ給ひし也清和陽成の二帝の御時も亦かくのごとく國史に見えたりこゝにいへる中宮は正しく天子嫡妻なり上古中古後世の品それ〴〵にかはるべし

春の鶯さえつるといへる舞

「春の鶯さえつる」とは春鶯囀なり樂名考曰抑此曲

は唐太宗皇帝御製作なり是左方の舞壹越調なり○南宮横笛譜云昔華傳二此曲一者有二左大臣源信朝臣及臣勢式人等一仍承和御時敕二信朝臣一以二此曲一令二傳習一畢成康親王合二于御笛一傳二於清涼殿前一視レ之者無レ不二感泣一河海

春宮かざし給はせて

かざしは挿頭なり左方に櫻花右方は欵冬花各替るなり臨時の祭の使のかざしは舞人と又別なり樂道故實抄に舞人は左右ともに挿頭の花は右にさすべしといへり頌歌に「櫻右欵冬同じ藤左かざしの花はかくやさすらん使は藤左にさす也とみえたり今按是或神社行幸御幸或臨時祭等の當日社頭舞樂の作法なるべし但試樂の時又内宴御賀のときは舞人といへども左にさして難あるべからざる歟如何となれば使の人の斟酌なきゆへなり○餝抄仁安二年十月廿三日日吉御幸試樂殿記少將隆房挿頭指二右手一也而左如何後日大納言殿仰曰使レ指レ左而爲レ違レ指レ右也試樂日指レ左有二何事一乎

柳花苑といふ舞を

古き抄に此樂上古は舞有て今は斷絶す舞の圖女の形也吉祥天女のごとし舞の體柔々静々たり婆羅門僧正將來といへりむかし大唐にて人の死たる時葬送にあたらして作りたる樂也さて吹てみたれば吉の聲あり不審なりとて棺槨をひらきてみれば彼死人蘇生したりそれより吉の樂に用る也といへり

そちの宮の北かさ

そちとは太宰帥なる親王なるべし凡太宰の宮の事粗夕がほの卷にしるすといへども猶くはしくはこの所にてしるすなり○職員令太宰府帥一人掌二祠社戸口簿帳字二養百姓一勸二課農桑一糺二察所部一貢二擧孝義一田宅良賤訴訟租調倉廩徭役鄣驛傳馬烽候城牧過所公私馬牛闌遺雜物及寺僧尼名籍蕃客歸化饗讌事一有二權帥一令外官大貳少貳大監少監大典少典一以上流内大少判事同大少令史大少工博士陰陽師醫師算師防人司正佑令史主船主厨以上被接史生流外等略○文德實錄仁壽二年二月乙巳參議正四位下行宮内卿兼相模守滋野朝臣貞主傳曰貞主上二表曰夫太宰府者西極之大壤中國之領袖也東以一長門一爲二關西一以一新羅一爲二拒加一以二九國二島群縣闊遠一自レ古于レ今以爲二重鎭一夫謀レ事必就レ租廢レ政古二古語一因一檢舊記一大

唐高麗新羅百濟任那等悉託二此境一乃得二入朝一或緣二貢獻之事一或懷二皈化之心一可レ謂諸藩之輻輳中外之關門者也因レ玆有德爲二帥貳一才良爲二監典一若無二其人一選二取辨官式部一

後宴のことあり

［後宴］は花のえんの後朝の御遊なり

北のぢんより

［北の陣］とは花鳥に中の重の北陣は玄輝門なりとみえたり

かのしるしの扇は櫻のかさねにてこき方にかすめる月をかきて水にうつしたる心ばへ

［あふぎ］は杉の横目の扇なりといへり［櫻のかさね］今按衣の色によりてみれば表白裏えび染或紫或赤花或蘇芳と說々あり皆かよひてもちゆ大概は似たる色なりしからば此扇にても表白く或うら蘇芳に彩色たる成にや［こき方］とは蘇芳色のかたならんかその方に泥にて霞を引て月を出し水にうつしたるなるべし白き方にも何にても繪あるべし河海に清少納言枕ざうしを引給ひしはかはほりの事にやと覺ゆ其あとに注せられし文談は一向落着しがたき事也又異本に櫻のみへがさねとあるはこれも河海の心によりたるか

やはらかにぬる夜はなくて

催馬樂律貫川の歌なり

明王の御世四代をなん

［明王四代］說々あり河海にくはしく出せり

廿餘日あまり右の大殿の弓のけち

［弓のけち］は弓の結なり爰にいへるは公のことにはあらで私の結とみえたり

宮たちの御もぎの日

［宮たち］は姬宮たち也［御もぎ］は密々の儀なりと也着袴と同日にもあり後世の例なれども左にしるす

○台記康治元年十月十四日癸酉酉刻左衛門權佐親隆召二主計助泰親一使レ勘二申着袴日時一時酉又申云今日可レ有二著裳一可二勘申一乎待賢門院入内日有レ著レ裳被レ勘二日時一也余對曰如二長元九年經賴記一者著レ裳密儀乎不レ可レ及二日時勘文一如レ之今日同時可レ著更不レ可レ勘者昏黑右將軍新黄門左京兆尹藤相公來二集正寢西廂一（豫備レ贄）余先於二正寢南相一令レ著レ袴（諸約結レ之以二脇一斷闕方一爲レ右）次著レ衣次著レ袴（結二大腰一諸約結レ之）先例多是女

令レ著今度無ニ可レ然人ー因予爲レ之次著ニ唐衣ー抑著レ裳日著ニ唐衣ー不レ依ニ不審ー問ニ女房等ー無ニ明答人ー鄙生愚心所案不レ如著レ之因令ニ著畢出ニ賓座ー 以上是女御著袴著レ裳之例也

櫻のからのきの御なをしえびぞめのしたかざねしりいとながくひきて

[さくら]は表白裏えび 末摘花の巻細長の所にくはしくしるしぬ[唐の綺]は御なをしの表なり綺はうすき織物なり文は唐織物なればさだまるべからず[えび染の下襲]是はうらをもてかけていへるえび染なりそれえび染は本色紫のうすきをいふしかるにしたがさねにて表すはう裏花田となせるは紫の色をうらおもてにわけたる心なり

[しり]は裾なり是下襲のしりをながくひき給ふ也直衣に指貫下襲を着し裾を引給ふを直衣布袴といふ劔を帶せらるゝなり ○綺和名抄蔣魴切韻云綺似レ錦而薄者也注俗云岐一云於利毛能又一訓加無波太○裾又曰陸詞云裾衣下也注和名古呂毛乃須曾一云岐沼及之利 ○布袴桃花蘂葉常袴に下襲指貫を着すこれを布袴といふ着用の事は先規に隨ふべし布袴の時は無文丸鞆帶野劔を帶するよし文治三年十月の御記にみえたり又布袴に帶劔せざる事もあるなり又云直衣布袴といふは直衣に下襲指貫を着することなり源氏物がたりにもみえたり邂逅の事なり

みな人はうへのきぬなるにあざれたるおほきみすがた

[うへのきぬ]とは袍の和訓也位袍とて其位に隨ひたる色のきぬ也[あざれたるおほ君すがさ]とは花鳥に御幸の巻を引てしどけなきおほきみすがたこあればあざれたるはしどけなき心にやとしるし給ひぬ又おほきみとは玉の字なり大人の姿などいふ心なりとみえたり

袖くちなど

[袖くち]をいたす事晴なる時の儀なり内々の事には有べからず女房の居こぼるゝ體に袖口ばかりを御簾の下よりいだすを押出といふ打出(ウチデ)といふにはあらず打出は又一段はなれなることにや各いだしやう雅抄にくはしく見えたり後世の例なれども左にしるす ○桃花蘂葉押出事建久二年四月十三日

於二南殿一有二舞事一寢殿東南廊[illegible]出[illegible]九條二如レ常
南面打出事[illegible]之外女房打出事一 打出二具所二著
[illegible]西子午廊之際三箇間同出レ之
[illegible]
禁中にも出二妻并殿計一也仍今日如レ此建久二十一中宮淵醉
○打出事建久二年十一月廿一日中宮淵醉殿上之妻
戸有二打出一[illegible]木紅單紅打衣紅梅表[illegible]唐衣

[illegible]

扇をとられて

[扇をとられて]とは催馬樂石川にいしつのこまうどにかひをとられてとあるを扇とうたいかへたまへりとなり

源氏官職故實秘抄卷五 紅葉賀 花宴 賢木 花散里

あふひ

今きさき

[后]の御事桐つぼ紅葉賀花宴卷にて委しるしぬ但爰にいへるは帝母の御事なれば皇太后宮と聞し

大將の君

[大將]初例は紅葉賀卷別注にくはし今爰にいへるは源氏の君の參議兼任の大將なるよしにて河海に參議の大將の傍例をかず〳〵あげられしかども源姓の人の例見えず是も例の一體なるべし

前坊の姫君

[前坊]爰にいへるは東宮の或は早世し給ひ或は辭退し給ひたるを申か延喜帝皇子保明親王又御孫慶賴王後世の例にては三條院皇子敦明親王（號二小一條院一是なり）などのごときによせていへる歟　○帝王編年記皇太子保明親王（醍醐天皇第二皇子）延喜四年二月十九日立坊（年二歳）延長元年三月廿一日薨（年廿一歳）同慶賴王（保明太子第一男）延長元年四月廿九日立坊（年三歳）同三年六月十八日薨（年五歳）又敦明親王（三條院皇子號二小一條院一是也）長和五年正月廿九日立坊寛仁元

年八月九日奉ニ勅廿五年准ニ太上皇ニ并ニ院宮ー

齋の宮にゐ給ひしかば

【齋宮】の御事垂仁天皇の御字に皇女倭姬命を齋王とさだめ奉らせ給しに始る後世には天皇御代の始ごとに改かへさせ給ふ也先卜定次齋院次野宮次伊勢の宮に參入し給ふ其儀委延喜式にみえたり ○日本紀垂仁天皇二十五年三月丁亥朔丙申離ニ天照太神於豐耜入姬命ー託ニ于倭姬命ー爰倭姬命求ニ鎮ニ坐大神ー之處上而詣ニ菟田筱幡ー更還之入ニ近江國ー東美濃ー到ニ伊勢國ー時天照太神誨ニ倭姬命ー曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可怜國也欲ニ居ニ是國ー故隨ニ太神教ー其祠立ニ於伊勢國ー因興ニ齋宮于五十鈴川上ー是謂ニ磯宮ー則天照太神始自ニ天降ー之處也

○延喜齋宮式凡天皇即位者定ニ伊勢大神宮齋王ー仍簡ニ內親王未ニ嫁者ー卜之 若無ニ內親王ー依ニ世次ー簡ニ定女王ー卜之 訖即遣ニ勅使於彼家ー告ニ示事由ー 神祇祐已上一人率ニ僕下ー隨ニ勅使ー共向ニ卜齋院神部以ニ木綿ー著ニ賢木ー立ニ殿四面及內外門ー其後擇ニ吉日時ー西宮臨ニ大祓ー ○凡定ニ齋王ー定畢即卜ニ宮城內便所ー爲ニ初齋院ー祓禊而入至ニ明年七月ー齋ニ於此院ー更卜ニ城外淨野ー造ニ野宮ー畢八月上旬卜ニ定吉日ー臨ニ河祓禊ー即入ニ野宮ー自ニ遷入日ー至ニ明年八月ー齋ニ於此宮ー九月上旬卜ニ定吉日ー臨ニ河祓禊ー參ニ入於伊勢宮ー ○凡齋宮諸門常立ニ著ニ木綿ー賢木上 ○凡齋內親王在京潔齋三年即每ニ朔日ー著ニ木綿鬘ー參ニ入齋殿ー遙ニ拜太神ー

齋院とおりゐ給ひて

【齋院】の御事其始はすゑつむ花の卷にしるしぬ其儀式は下にくはし

御禊の日かんだちめなど

【御禊】これは齋院を卜定して二度の禊あり ○延喜齋院式凡天皇即位者定ニ賀茂大神齋王ー仍簡ニ內親王未ニ嫁者ー卜之 若無ニ內親王ー者依ニ世次ー簡ニ定女王ー卜之 卜食訖遣ニ勅使於彼家ー告ニ示事由ー 神祇祐已上一人率ニ僕下ー隨ニ勅使ー共向ニ卜部解除神部以ニ木綿ー著ニ賢木ー立ニ寢殿四面及內外門ー 卜部解除所司供之 事畢賜ニ祿中臣忌部以下各有ニ差其後遣ニ參議已上一人於上下兩社ー奉幣告ニ定齋王狀ー 內藏寮備ニ幣ー卜部一人隨ニ使ー使就ニ川頭ー向ニ社解除 ○凡定ニ齋王ー畢即卜ニ宮城內便所ー爲ニ初齋院ー即先臨ニ川頭ー祓潔乃入 ○凡齋王於ニ初齋院ー三年齋畢其年四月始將

レ參ニ神社一先擇ニ吉日一臨レ流祓禊敕使 大納言 中納言各一人參議二人四位五位各四人內侍一人辨外記史各一人太政官史生一人辨官史生二人官掌一人神祇內藏縫殿陰陽大藏宮內大膳木工大炊主殿掃部造酒主水左右馬等官省職寮司供奉禊事 既畢賜ニ饌幷祿一詑廻歸使留ニ野宮一〇凡齋王每年四月中酉日參ニ上下兩社祭一節略

女房車おほくて

女房車は物見車なれば皆手びきなるべしてびきの車これを腰車といふ延喜式の所見屋形長六尺廣五尺とみえたり尤轅高欄輪等あり牛車は又各別なり

あしろのすらしなれたるしたすだれ

あしろは籧篨なり又網代とも見えたり下簾は車屋形の內より前へさがりたるきぬなり其色車によりていろ〳〵あり餝抄などにくはし

袖ぐち裳のすそかざみなど

袖くち裳のすそかざみは皆車の 打出の 衣なり其かざみは汗衫の音より出たる和訓なり是はうはのさうぞくにしてすそながきもの也枕ざうしに春はつゝじ櫻夏はくちば青朽葉とみえたり委繪合の卷にしるすべし〇新葉集兼昌歌もろ人のあそぶなる哉乙女子がかざみのすそのながき世ぞかし 〇和名抄汗衫唐令云諸給ニ時服一夏則汗衫一領 衫音所衒反衣名也

ひとたまひ

ひとたまひは副車なり河海に人給と出たり又出車ともいふ也花鳥に枕草紙云所もなく立かさなりたるによき所の御車ひとたび引つゞきておほくくるをいづくにたらんとすらんとみえたり〇和名抄副車漢書注云副車 和名曾閇久流萬俗云比度太萬比 後乘也〇事物紀原副車禮記有貳車鄭康成云副車又有佐車然則副車周事也

しぢなどもみなをしおられて

しぢは榻なり 寸尺定法延喜內匠寮式にみえたり是女車にかぎらず車に乘とき踏給ふもの也轅もたせなり牛車にも腰車にもなくてはかなはぬもの也〇和名抄榻唐韻云榻 吐盍反和名之知 床也

すゞろなる車のごうにうちかけたれば又なう人わるからん

すゞろなる車とは車ふたつよるいへる副車なるべしごうとは轂を俗に筒といふ也と榻を

押おられてなければ副車の轂にくび木をうち懸たるなるべししからば又なう人わるからん○延喜內匠寮式轜料榻二枚一黒己之漆（又點ぞう）○和名抄轂說文云轂古禄反漢語抄云車乃古之岐俗云ゝ轂　輻所ゝ湊也

大將のかりのずいじんに殿上のぞう

【かりの隨身】とは花鳥に權大納言の大將以下左は左右は右の番長一人近衛舍人五人すべて六人の隨身をゆるされてめし具する也其上に拜賀などの時は將監將曹府生を又一人づゝ具するを一員ともかりの隨身ともいふいづれも皆地下の輩のよし也と

【殿上のぞう】とは六位の藏人の將監なるをいふそれを一員に具する事は例なき事也弄花の口傳に此物語の偶言の躰と心得べし源氏大將をほめんために事たる成べしとしるされたりと○和名抄職名篇近衛府曰大將為長官（和名加美）曰中少將為次官（和名須介）曰將監為判官（和名萬豆利古止比止）曰將曹為主典（和名佐官（頭注云）主典一作佐官非也）

右近の藏人のぞう

【右近の藏人のぞう】は六位の藏人右近衛將監かけたるをいふ六位藏人の間は殿上するがゆへに上本文に殿上のぞうとあり是も叙爵すれば地下となる也須磨明石みをつくし松風の巻にも見えたり

さらぬ御隨身どもゝかたちすがたまばゆくとゝのへて

【さらぬ御隨身】とは右近のぞうの外の御隨身なり

【まばゆく】とは人目はへにとゝのへたるをいふ凡隨身裝束は布袴衣（左獅子錦袷右熊錦袷或左山雀錦袷右蔦茜袷）或布染分袴（左二藍右萌黄）（或左蘇芳右朽葉）或白布袴（或云三之白襖袴）弓壺胡籙（左鷲羽右鷹羽）或狩胡籙白帶劔冠（細纓緌）かくのごとく裝束に見えたり

つぼさうぞくなどいふつかさにて

【つぼさうぞく】とは打かけたるきぬのまへの兩つま折てまへにはさむといへり古注にくはし

まつりの日

【まつりの日】とは卯月中酉日なり此祭においてはいづれの祭といはずして賀茂祭の事なりといへり䑛江入楚に曰賀茂祭は卯月に兩度あり中の申日日あるは國祭といふ是は欽明天皇の御宇四月に吉日をえらびて祭らるゝよし所見ありと見えたり委は江次第にみえたり それ賀茂大神宮は山城國の地主にておはしませば中の申の日は國より奉る祭

也中の酉の日は內裏よりの祭なりといへり〇河海藤裏葉卷・賀武祭欽明天皇御世天下郡國風吹雨零于レ時敕ニ卜部伊吉若日子一令レ卜乃賀茂神祟也撰ニ四月吉日一馬繋レ鈴人蒙ニ猪影一而驅ニ馳馬一以爲ニ祭禮一〇續日本紀文武天皇二年三月辛巳禁ニ山城國賀茂祭日會ニ衆騎射一〇大寶二年夏四月庚子禁下祭ニ賀茂神一日徒衆會集執レ仗騎射上唯當國人不レ在ニ禁限一〇元明天皇和銅四年四月乙未詔賀茂神祭日自今以後國司每年親臨撿察焉〇類聚三代格天平十年四月廿二日敕頃年以來祭ニ賀茂神一之日會集人馬悉皆禁斷自分以後任レ意聽レ祭但祭禮之處勿レ令ニ鬪亂一〇續日本後紀承和三年夏四月乙酉天皇御ニ紫宸殿一閱ニ覽賀茂祭使等鞍馬調飾幷從者客儀一賜ニ使等祿一以ニ播磨守從四位下橘朝臣永名一權爲ニ內藏頭一令レ供ニ祭使一

齋宮のまたもとの宮に

【もとの宮】とはいまだ初齋院に入らせ給はざるまへ私の第をいふ也上の齋宮の注に延喜式を引てくはし

曆のはかせ

【曆の博士】は推古天皇の御宇よりはじまるか〇日本紀推古天皇十年冬十月百濟僧觀勒來之仍貢ニ曆本及天文地理書幷遁甲方術之書一也是時選ニ書生三四人一以俾レ學ニ習於觀勒一矣陽胡史祖玉陳習ニ曆法一大友村主高聰學ニ天文遁甲一山背臣日並立學ニ方術一皆學以成レ業〇職員令陰陽寮被接官曆博士一人掌ニ造レ曆及敎ニ曆生等一

うきもんのうへのはかま

【うきもんのうへの袴】は童女の表袴なり花鳥にくはし又源氏男女裝束抄にも見えたり〇雅抄わらはさうぞくまいりの夜はいかさまにもつゝじのかざみをもてあやうへの袴おもてたゝきぬしろくはりてやうしてこき打うらをつくあこめ蘇芳ふたつあをきひとへこきうちぎぬこきはり袴なり

君の御ぐしはわれそがんとて

【そがん】とは髮曾木の御所作あらんとなり是男子の元服といふがごとし觚江入楚に臺の上に山菅山橘海松靑白石にをく也是等を髮にはさみそふるなり此正說尋ぬべしとみえたり〇拾芥抄髮曾木日事又以ニ甲戌日一用レ之凡酉丑日爲レ吉又乙卯巳用レ之又常以ニ午日一用レ之春必用ニ午日一二月四月十一月用レ之他月不レ可

用レ之云々
齋宮はこそうちに入給ふべかりしをさま〴〵さはることありて此秋いり給ひ九月にはやがてのゝ宮にうつろひ給へければふたゝびの御はらへのいそぎとりかさねて

初齋院に入らせ給ふ御はらひと又のゝみやに入たまふべき御はらひとゝりかさねたるなりいづれも東川にて御はらひありといへり又群行の御時は西川にて御はらひあるよし也上の齋宮の注に延喜式に引てくはし

しろき御衣にいろあひいさはなやかにて 葵ノ上ノ巻ニ

[しろき御衣] 御産の出たちは白き衣白几帳白張の屏風白綵畳以下こと〴〵く皆白装束也御産部類に委し

山の座主

[山]といへば必天台山にして寺といへば三井寺なり[座主]とは一山の管領なり○天台座首始僧中初御抄義眞和尚相模國人天長九年一作二元年一以二延暦寺義眞和尚一為二維摩講師一同十年七月四日入滅七十七歳謚號修禪大師去弘仁十三年四月補二座主一治十二年

御ゆするまいり御ぞきかへなどし給て

[御ゆする]とは御沐なり御髪あらふ事なり 侍中群要に主上の御沐の式見えたり左にしるしぬ ○侍中群要沐御沐浴承レ仰藏人召二練綾藏司一或召二練絹一又承レ仰藏人可レ候歟召二練絹一常事也 ○又曰洗二御髪一 如二御湯殿時一御匣殿女官候召二沐守藏寮一自二內藏寮一進二練絹一摘藁等進レ之

うちなどにもあまり久しく参侍らねば

看病産穢の間のをこたりをいふ産穢は神祇式には七日と見えたり後世は卅日いむよし也しかれども卅日の事は此書に叶べからす○法曹至要抄神祇式云觸二穢悪事一應レ忌者人之産七日

秋のつかさめし

[つかさめし]は京官除目なり是は三月三日より先におこなはるべき事なるを後世は秋の除目といふなり冬にもをよぶ也京にある諸司を任せらるゝ故に京官とは申なり又春の除目はあがためしといふ外官をむねと任せらるゝ故也くはしくは江次第に見えたり

にはめる御ぞたてまつるも

【にはめる】とは鈍色にて服者の衣にしてうす墨いろなりわか紫にも粗しるせり本文に源の歌にてよく聞えたり猶下にくはしくしるすべし

齋宮の左衞門のつかさにいり給にければ

上本文に齋宮はこぞうちに入給ふべかりしをさまざまさはることありて此秋にいり給ふとある是なりこれを初齋院といふ左衞門のつかさは職司南大宮東近衞北堀川西にわたれり河海に近衞府廳舍とあるは恐らくは非なるべしそれは檢非違使廳にて刑殺を判する所也神事には大に忌べき事也其例神祇令に見えたり○齋宮入二御諸司一儀當日上卿着陣令下勘二御禊日時一并定中前駈上以二頭藏人一奏聞或藏人當日被レ進レ扇五位藏人爲二敕使一頭若五位藏人奉日奉レ仰令二殿上人調一レ之而若五位藏人催二遣一二三車牛并内侍典侍藏人所前駈一也次入二御野宮一一如レ入二御諸司一儀河海上

菊のけしきばめるえだにこきあをにびのかみなる文ひうけさしたる體なり

【菊のえだ】を用ひ給ふは間の字にかよはして也青鈍の紙に花田にうす墨さしたる色也服者の方へつかはす紙これなりといへり

むらさきのにばめる紙に

【紫のにばめる】とは花田に赤花うす墨など入たるなるべしにばめるは惡くくろみたる也

のゝみやの御うつろひのほど

上に延喜式と引しるしぬ初齋院の所より又のゝみやへ入給ふなりそれのゝみやは毎度御うらありてさだめ給ひしかば其所いつ地とさしていへがたし

中將の君にび色の直衣さしぬきうすらかにころもがへして

夏の喪服のにびいろなるなをし指貫を冬の喪服に更衣し給ふついでに色をうすくなし給ひたる成べし○西宮記臨時六喪服冬遭レ喪者一周間服二冬裝束一夏時遭レ喪者又一周用レ夏當朝元無二夏冬衣一依二滋野和公起請一夏冬更レ衣重服者當レ依二舊制一歟

しごけなう打みだれ給へるさまながらひもばかりをさしなをしたまふ

【ひもばかりさしなをし給】源氏の君は衣かへし給はで夏の直衣の入紐をたゞ冬の入ひもにさしなをし給ふやうに聞えし尤故實なるにや

是は今すこしこまやかなる夏の御なをしにくれなゐのつやゝかなるひきかさねて

姉妹の服も嫡妻の服も三ヶ月なれと源氏は妻の服なれば一入こきにひ色を忌み給ひぬと聞えし こまやかなる とは濃色なるべし 紅のつやゝかなる とはきぬのいろと聞えし輕服の人紅の衣を用ひ給ふこと古注說々あり予も亦所存を申さん若是萬葉集に紅の深染の衣の色深く染にしかいか忘れかねつる古今戀の歌に紅のはつ花染の色ふかく思しゝこゝろ我わすれめやなどよめるを下こゝろにや

程なき袙人よりくろく染てくろきかさみくはざういろの袴などきたるもおかしき姿なり

程なき袙 とはちいさきよし也 くろきかさみ は、服者のもちひる色也 くはさういろの袴 是も上に同じ其色は柑子色と大略同じ蘇芳にだうさを入て染るよし也○和名抄萱草 兼名苑ゝ云萱草一名忘憂 漢語抄和須禮久佐

さうしにて日をふるけにやさと心くるしげにおほしめして

さうし は精進なり 和訓いもゐと訓ず 忌居の儀也精進といへば必魚食せぬ事と人こゝろえぬ但事によるべし神事にては齋なり葷膻を食せざるは淨食といふ○僧尼令義解精進者懇懃也 言精銳求ㇾ道進而不ㇾ退也

むもんのうへの御そににひ色の御したかさねえいまきたまへるやつれすかた

無文のうへの御衣 是は夏はうすもの冬は平緒いろは橡なりといへり橡延喜式によれば搗橡と見えたり和名抄には橡は櫟實なりといへり冠も無文のさたのなり 鈍色の下襲 異儀なし えい巻給ふ とは常の巻纓にはあらで柏夾の事にやしかれとも巻纓まきやうならひありといへり必論ずるにたらぬ事也世によりてもかはるへし

衣かへの御しつらひ

十月更衣の御裝束なり明石の巻にくはし

ゐのこのもちゐ

ゐのこのもちゐ は年中行事秘抄にくはし 今案是此陽氣のたすけにや此月は一陽もあらぬ陰の月なるか上に陰の日なればもちゐを用ひ給ふなるべし○群忌隆集云十月亥日作ㇾ餅食ㇾ之令ニ人無ㇾ病 河海 ○

又曰掌中暦云亥子餅七種粉大豆 小豆 大角豆 胡麻 栗 柿 糖

ねのこはいくつかつかうまつらすへう侍らん

新枕の三ヶ夜のもちゐの數をたづね申ことはなり

河海曰亥のこの次の日なれば子のこと惟光が當座

にしたる也ふるくよりの名目にはあらざるか秘說

ありさみえたり當話の作名其ふくみたることは有

べしたやすくいふべき事にあらず

みつかひとつにてかあらん

これも當話異稱の御答なり河海に紫明抄を引て三

日夜餅三三事殊爲二秘事一云云又一說云三日夜餅は

女の年の數を調進をする也紫の上十四なれば十を

さし置て其餘の四といはんをいむ心ちに三か一と

いはれたる歟もとより員數さたまりたる物ならは

雅光いくつかと尋申へからす紫の上の年齒を惟光

しらざる故也とみえたりこれにてよく聞えたり又

引二待賢門院御入内三日夜餅記一德大寺左府記云紫檀筥文鶴

九摺貝普通の硯筥よりは高さも大さも過分也銀小器

三に白色の餅の丸きを御歯固の物具盛たるやうに

三同し樣にうつくしく盛レ之御箸の臺は銀にて洲

濱を作て鶴の立たるに御箸をくはへさせて(頭注云)中右記寬

治五年十一月二日女御入内之後有三三ヶ夜餅事使一兵部卿處被二調進一也是高年之人所役也者紫檀筥有二螺鈿立蒸形紺地唐錦折立一有レ蓋銀杯三盃在レ餅洲濱以二鶴形一置二銀御箸一件支馬之事見二月令并迎記脱本紀一云云大略成二羅次之書歟

御所あらはしに取いたさるゝ也とみえたり

かうこのはこひとつさしいれたり

[かうこのはこ]は香壺の筥か此筥にもちゐを入て

さしいれたる歟それ香壺の筥にはいろ〳〵の香を

入たる壺を入るゝ筥なりくはしく繪合の卷にしる

しぬ

花足

[花足]とは土居に蕨手ある臺の事也寸法さたまら

すこと〳〵にかはるべし

みくしけとの

[みくしけとの]は女御更衣の儀にあらず只御所中の

沙汰なり内藏寮の外御服たちぬふ所也○禁秘御抄

御匣殿別當是非二女御更衣之儀一只御所中沙汰人也

上古不レ絕有レ之內藏寮外御服裁縫所也

見そかけのそうそく

[みそかけ]はきぬをかくる料にして衣架ミソカケ是なり其

つくりやう類聚雜要抄にみえたり○和名抄衣架衞

雅注云音移字亦作レ椸懸レ衣架也和名美曾加介

賢木

おやそひてくたり給ふれいはことになけれと

「親そひて」諸抄くはしけれと中にも花鳥の御説をよしとせり御注に曰村上の御女規子内親王天延三年に斎宮に立て下向し給ふ時御母徽子女王（重明親王女なり）そへて下り給へりいまの物語に六條の御息所を徽子になすらへて申侍れは是よりさきに母子あひそひて下向の例なきによりてかくはいへるなるへしとみえたり此次に河海の注を引はよく聞えたり○圓融院御時規子女王（女王當レ作二内親王一）斎宮にくたり侍るけるにはゝの斎宮の諸ともすゝか山をこゆとて「世にふれば又もこえけり鈴鹿山昔の今に成にやあるらん大よとの浦にて大よとのうらたつなみのかへらずばかはらぬ松の色をみしまや、斎宮女御徽子（式部卿重明親王女母貞信公女）承平六年（一云天慶元年）為二斎宮一歸京之後天暦二年十二月入内同三年四月為二女御一生二規子女王一此女王為二斎宮一参二向伊勢一之時母女御被二相伴一此例をうつす（河海）

くろ木のとりゐ

「くろ木のとりゐ」説々多し河海には仁徳天皇の御時はしまれるとなり是往古質素の門なるにや○和名抄門戸類蔫雞栖（トリヰ）考聲切韻云桁（ハッ）今之門上栖也辨色立成云雞栖（鳥居也揚氏説同）

ひたきやかすりに

「ひたき」は火炬なり○延喜斎宮式火炬二人（取二山城國葛野郡秦氏童女一）右始レ自二初斎院一至二于参二入太神宮一奉レ仕其斎宮入二伊勢斎宮一畢各替却

十六日かつら川にて御はらへし給ふ

「かつら川の御はらへ」にし川の御はらへといふ是なり斎宮群行の御時の例なり葵の巻に延喜式を引てくはし

ちやうぶそうしなと

「長奉送使」は斎宮を伊勢までおくり奉りてかへりてことゆへなく御下着のよしを奏聞せらるゝよしなり延喜式には監送使とみえたり○延喜斎宮式凡斎内親王臨行預定二監送使参議一人（或以二中納言一充レ之）弁一人史一人六位已下官人一人一即使及斎宮官人以下皆賜二装束一（儀略）○江次第（斎王群行）長奉送使令レ奏下路次国非違濫行任レ法可二糺弾一由上（蔵許食闕）

宮のおは女別當

[女別當]延喜式にあり是ならんかし

みかど御心うごきて別の御くしたてまつり給

[わかれのくし]とは天皇の齋內親王の御額にさしくはへ給ふ御櫛なり是は路次の間をすかしとをすかことくとの御心なれども御ことはに京の方におもむき給ふなと仰ことある故に時にあたりて別のくしといふ齋王の京に歸給ふはよろしからぬかゆへなれば也左にくはし

○江次第（齋王群行）宸儀渡ニ御大極殿一藏人持ニ候御笏式并齋王額櫛筥等一（此櫛先仰ニ作物所一以ニ黃楊木一令レ作長二寸許入ニ金銀蒔繪筥方四寸松折枝并鶴等蒔レ之）○齋王入レ自ニ嘉喜門一次王與登レ自ニ殿北面東第一階一登ニ候同戸下一闈司開レ戸齋王入レ自ニ同戸一著座（著ニ羅地摺袷當長袖同目染裳一著ニ玉鬘一侯レ未ニ成人一不レ可ニ上レ髮給一歟又御乳母可レ奉レ抱女房三人取ニ几帳一隱ニ王座東南西三方一前例隱ニ東南二方一由關白被レ申而長暦并延久御記如レ此）○天皇召ニ額櫛筥一次藏人頭執ニ件筥一付ニ內侍一內侍取レ筥開レ蓋置ニ御座左方席上一（蓋置レ北身置レ南）內侍奉レ仰進ニ齋王許一申下可ニ近參一給由上親王近ニ候御前一（御乳母奉レ抱女房捧ニ几帳一祗候）天皇以レ櫛刺レ加其額一勅京乃方仁趣支給奈（下）次內侍以ニ櫛筥一給ニ親王乳母一（件櫛令ニ夜刻一レ之至ニ勢多頓宮一納レ筥云云）此間大臣就ニ東福門南面掖座一（內記置ニ宣命一）召ニ使王一給ニ宣命一次大臣令レ奏下可レ給ニ使王御馬一由上勅許畢仰ニ外記一（節略）

いとあはれにてしほたれさせ給ひぬ

[しほたれ]とはなき給ふをいへり此神事のあいたの忌言外七言のうちなり○延喜齋宮式凡忌詞內七言佛稱ニ中子一經稱ニ染紙一塔稱ニ阿良良伎一寺稱ニ瓦葺一僧稱ニ髮長一尼稱ニ女髮長一齋稱ニ片膳一外七言死稱ニ奈保留一病稱ニ夜須美一哭稱ニ鹽垂一血稱ニ阿世一打稱レ撫宍稱レ菌墓稱レ壤又別忌詞堂稱ニ香燃一優婆塞稱ニ角筈一

待たてまつるとて八省にたてつゞけたる

[八省]とは八省院也其朝堂院の正殿を大極殿といふ是なり朱雀門の內一町にあり南は冷泉に限り北は中の御門にかぎり東は東坊城西は西坊城をかぎる也八省院の東に太政官の廳西に豐樂院北には中和院有といへり○拾芥抄八省院（天子臨期即位諸司告朔所又謂ニ之中臺一）又大極殿（朝堂院正殿名云ニ八省院一是也又謂ニ之最大殿一）

いたし車ともの袖ぐち色あひも

[いたし車]は齋王にしたがひくだる所の女房くるまなり是も皆手ひきなるべし

二條より洞院のおほちをおれ給ふほどに二條院なれば

齋王群行の行列のみちなり江次第とはすこし異也是二條院をいはんが爲にや二條院の事空蟬卷にしるしぬ○江次第齋王群行 行事辨令レ奏下王輿可レ出二宮城門一可レ用二何門一由上間仰フ依二某年例一云云 多經二八省東路一南行出二郁芳門一又南折至二二條一東行至二京極一云云往年用二美福門一然而門無レ實年久

神無月になりては

[神無月]とは十月の事とは誰もしりぬ此月は一陽もあらぬ陰の月なれば神祇今にも當月はのぞきたまひて祭禮の儀なし○長明四季物語に此月は一陽もあらてつとめての月より一陽來復の德をあらはせは陽神のおはしみそなはし給はぬといふ心映にて神無月とはいへるなるべくとなん

御ゆいこん

[ゆいこん]是遺詔の御事也其仰こと每事かはるべし上古は天智天皇中古は嵯峨淳和上皇の遺詔なども國史に見えたり○唐類函帝王部登遐 遺詔漢文臨レ崩作二遺詔命一令三薄葬制二三十六日之服一

ふちの御衣にやつれ給へる

[ふちの御衣]とは[illegible]衣なり和名抄に服者のきる物也と見えたり色は橡ならんか又主上の御服は錫紵と名付てうす墨染のほそ布なり本文に主上の御衣の事はなけれど諸抄に皆のせらるゝかゆへに己もまた爰にしるしぬ○喪葬令 凡天皇爲二本服二等以上親喪一服二錫紵一爲二三等以下及諸臣之喪一除二帛衣一通二用雜色一義解錫紵者細布即用二淺墨染一也帛衣者白練衣也○侍中群要錫紵事見日記 有二素服幷錫紵一之時盛二通筥一供レ之亦説盛二柳筥一居二高杯一供レ之○西宮記帝王雖レ隨二以レ日易レ月之制一一周間依レ不レ臨レ朝不レ服二位袍一服二黑橡衣一○續日本後紀承和七年五月丙子朔癸未後太上天皇崩二于淳和院一春秋五十九 甲申上二太上天皇誄諡一文略 天皇於二淸凉殿一著二素服一以二遠江貲布一奉レ著二御冠一 哀泣殊甚爲二人之後一者爲二其子一故也壬辰諸臣上レ表甲午敕答戊戌天皇除二素服一著三堅絹御冠橡染御衣一以臨レ朝也御簾及屏風之緣並用二黑染細布一但御座者施二簟於砥礪之上一不レ立二御榻一八年正月壬申朔廢朝諒闇也五月庚午朔丙申會二諸司於朱雀門一大祓爲除二後太上天皇之服一也節略

のならひにとのゐものゝ袋おき〳〵みえて

【とのゐものゝ袋】のこと秘事三ヶの一ツなりこと諸抄に見えたり河海に殿上宿直の人の名字かきたる名簿（名簿）を納る袋の事かされたり是にて文義よく聞えたり其秘事にせる事は前めしたゝめやう朝夕宴の出入宿人方の故實なるべし

みくしけとのは二月にないしのかみになり給ひぬ

【ないしのかみ】の事柄つほの巻ないしのすけの所に其職掌しるしぬいにしへはしらす後世は攝家の息女の任なるよしなり○三代實錄貞觀五年五月十九日辛巳尚藏從三位當麻朝臣人數卒○西宮云尚侍叙任之後爲三慶賀一參内（割注）陣ニ令レ奏ニ慶賀一之由（割注）中内侍一人出來傳奏（割注）宮御内宿付ニ内侍一令レ啓ニ慶賀一布ニ贈物一（割注）候宣

【梅つぼ】は凝華舍なりにしは白梅東は紅梅のよしせり○和名抄居宅類凝華舍在ニ飛香舍北一（和名牟女豆保）○拾芥抄凝華舍梅壺二 飛香舍北五間四面

登華殿のむかれたりつるに

【登華殿】は弘徽殿の北にありうめつぼも程ちかし

○拾芥抄登華殿弘徽殿北七間四面

かものいつきにはそんわうのゐたまふ例おほく意あらさりけれとさるへき女みこやをはせさりけん

【かものいつき】にそんわうのゐたまふ事若内親王なくは世の次によて女王をえらひて卜定せる事延喜式の制なりこいへとも眞子女王（惟彦親王女文德帝孫也）を仁和五年にさため給ひたる以往の例なし後世の例は齋子女王（小一條院女三條帝孫也）承保元年にさため給ひしなり

五壇のみずほう

【五壇の御修法】は不動を中尊にして左右に大威德降三世軍荼利夜叉金剛夜叉をかけて名僧をえらひ日別に其法を修せらるゝ其儀事なが〳〵し是は禁中にてをこなはるゝ事にて私の家にてはなき事也といへり　○左記凡五壇時於ニ金剛夜叉一者有ニ故實旨一然間亂ニ﨟次一所レ擇ニ仰法幷智法阿闍梨一也

式部かやうに

【式部】女房の名なり

くろききぬなとをきてよゐのそうのやうになり

【よゐの僧】は内裏の二間にさふらひて夜もすから玉體を護身し奉る是を御持僧ともいふ加持する僧

なり見えたり ○禁秘御抄ニ間敷ニ疊ニ帖ニ北間向妻戸ニ敷阿闍梨座ニ今夜南間如ニ御講ニ之時懸ニ本尊寄ニ障子ニ也

律師のこもり居

【律師】是僧官なり本朝律師のはしめ天武天皇二年十二月道光を律師とす元興寺智通を任せらるゝよし也 ○釋氏要覽律師 佛言善解ニ一字ニ名ニ律師ニ一字者律字也

御簾しにしきしきしに

【しきしきし】しきしの名稱其始を詳謂をしらす但しきしきしとかれは寄紅讃なとの色品ある心にて色紙の名を得る歟いまたふかくかんかふる所なし又直幹賛釋の障子の上に色品色紙形あり車の袖のうへに色紙形といへるありこれも色品わかちあるやうにみえたりしかれは本文の比類にもやなられかへ下にしるせり ○禁秘御抄南殿花障子號ニ賢聖障子ニ賢聖書ニ之上色紙形 近代不ニ書ニ本文ニ彼字甚能也 ○勝沙賀茂祭 治承三四廿一中宮使大進車袖計進ニ青年ニ山仙上寄ニ子以ニ紫標白色ニ有ニ色紙形ニ○近衞使少將顯家朝臣車車當色皆用ニ五節之風流ニ綱代張ニ赤地錦ニ上計也色紙形并ニ色々錦ニ上計也以上略節

ゆふたすき

【ゆふたすき】ゆふたすきは木綿襷なり又木綿手繦ともみえたりゆふの名目天照太神天石窟に入らせ給ふ時天の日鷲神木綿を造るにはしまる但し説々多し麻をもてつくるといひ楮の皮にてつくるともいふ 和名抄には杜仲綿といふ左にしるしぬ今俗木花綿を用るものは非なる歟此木花綿は日本にわたる事延暦の御時也 ○和名抄祭祀具本草註云本綿和名由布 折ニ之多ニ白絲ニ者也 ○本類杜仲陶隱居本草注云杜仲一名木綿杜仲皮中有ニ白絲ニ名ニ木綿ニ折ニ之多ニ白絲ニ者也 ○本草綱目杜仲釋名思仲思仙木綿綱註時珍曰昔有ニ杜仲服ニ此得ニ道因以名ニ之思仲思仙ニ皆由ニ此義ニ其皮中有ニ銀絲ニ如ニ綿故曰ニ木綿ニ其子名ニ逐折ニ與ニ厚朴子ニ同名

くろき御車

【くろき御車】は服者の乘車なり西宮記に重服公卿黑[illegible]車にのることみえたり

かんのきみ

【かん】とはないしのかみといへる略なりかみをか

んとはねていへり

御八講のいそきをさま〳〵に

【御八講】は五日も或六日も佛經供養おこなはる導師證義者講師以下朝座夕座をわかち僧名及その事にあつかるへき人々のさためあり願文の清書は能書の人に仰す又舞樂あり問者陳答其間の作法莊嚴なさくはしき事は短紙にのへかたき也下の本文にも粗みえたり

霜つきのいたちころ御國忌なるに

【御國忌】本朝國忌は持統天皇の御宇よりはしめらる是先皇の遠きをおふの義なりそれ國忌の日は廢務日なれは諸司政事せす樂をなさすといへり後世に至りて代々の御國忌かす〳〵なれば毀廟とて前々御國忌をすて給ふこと侍るといへども天智天皇御國忌はかはらぬよしなり　○日本紀持統天皇元年九月壬戌朔庚午設ニ國忌齋於京師諸寺一○同二年二月庚寅朔乙巳詔曰 自今以後 毎取ニ 國忌日一 要須レ齋也

五卷の日

【五卷の日】とは御八講の中日にて 提婆品を講せらるゝゆゑなり此日はたき木の行道なといふこともありき　○提婆品時王聞ニ仙言一心生ニ大喜悅一即便隨ニ仙人一供ニ給於所須一採ニ薪及果蓏一隨レ時恭敬與情存ニ妙法一故身心無ニ懈惓一

くろばうにしみて

【くろばう】黑方烏方坎方崑崙方みな是一名なりといへり調合說々たほし　○類聚雜要抄或云崑崙仙人所レ傳仍曰ニ崑崙方一後人因レ之通レ音稱レ之

內宴たうかなと

【內宴】の事粗紅葉賀の卷にしるしぬなをくはしくは若菜の卷にしるすへし【踏歌】男踏歌女踏歌あり正月十四日は男踏歌十六日は女踏歌なり委初音の卷にしるすへし

あを馬はかりそ猶ひきかへぬものにて

【あを馬】の事上末摘の卷にしるしぬ【猶引かへぬもの】とは毎年諸院宮へ引給ひたる青馬を猶とゝめ給はぬ例也との儀也禁中にも猶かくのことし左にしるしぬ諒闇心喪の間節會をとゝめ給ふといへども青馬をとゝめ給はぬゆへ也諸抄にも見えたりもし此ゆへにや○三代實錄貞觀十四年壬辰正月七

日戊寅天皇不ㇾ御ニ紫宸殿一以停ニ節會一也召ニ左右馬寮青馬各七匹於内殿前一覽ㇾ之青馬及儺人並不ニ裝飾一○貞觀十四年正月七日無ニ節會一去九月太后崩心喪中也下略 ○白馬参ニ中宮一事權記云白馬同参ニ中宮一給ニ酒祿於寮官一海河

みすのはし御木丁のあをにひにてひま〳〵よりほの見えたるうすにひくちなしの袖くちなと

【にひいろ】も壞色とて常のいろを失錯して全からさる色なるか故に僧尼の用る也又【くちなし】はいかなるこゝろにて尼なとの服にもちひ給ふ事もしらす若くちてなしなといへる心にや

ちじのへう

【ちじのへう】は致仕表なり花鳥に致仕といふ事は七十になりて出仕すましきによりて此間もちひたる車をも先祖の廟にかへる事あり故に懸車の齡ともいふと見えたり ○選叙令凡官人年七十以上聽ニ致仕一五位以上上ㇾ表○職員令中務省條受ニ納上表一義解謂凡上表者不ㇾ由ニ太政宮一向ニ中務省一省受取奏ニ進至尊一也 ○日本紀應神十三年紀曰一曰日向諸懸君牛仕ニ于朝庭一年既耆之不ㇾ能ㇾ仕仍致仕退ニ於本土一則貢ニ上巳女髮長媛一 ○本朝大臣致仕始天平勝寶八年二月正一位行左大臣橘朝臣諸兄治部卿従四位美努王子致仕辭ニ大臣一海河 ○事物記原致仕尙書咸有一德云伊尹既復ニ政厥辟一告ㇾ歸疏云告ㇾ老致ニ政事於君一此臣下致仕之初也至ㇾ周乃有ニ大夫七十致ㇾ仕之禮一其事自ニ伊尹一始 ○孝經註七十老致仕懸ニ其所ㇾ仕之事一

たかさこをいたしてはたふ

【高砂】は催馬樂律長生樂の破のよし也

うすものゝなをしひとへをき給へるにすき給へるいたつきましていみしうみゆるを

【うすものゝなをし】にすゝしの單のすきたる聞えたり御衣はまへに高砂うたひし中將の御子にかつけ給ふゆへに御身うすければはたつきといへりいにしへは單を御はたにめすなりしかれば裁縫も今世にことなるべし小袖を下にめすは後の事也 ○餝抄衣付單自ニ十月朔日一至ニ三月晦日一尋常三領練衣也單衣非ニ老者一單文單衣 但三月末二月頗及ニ暑氣一者衣一領生單衣平絹以ㇾ之號ニ一重一

文王の子武王のおとうとヽうちすんし給へる
これ朗詠執政の篇に菅三品の詩なり
○和漢朗詠執政丞相付 周公旦者文王之子武王之弟自知ニ其貴一忠仁公者皇帝之祖皇后之父世推ニ其仁一

花里散

つくしの五節こそらうたけなりし
[五節]と爰にいへるはこれ女の名なり此時はちヽに隨ひてつくしにあるか故に上につくしとかうふらしむ須磨あかしの巻にも此人見えたり

源氏官職故實秘抄巻六 須磨 明石 澪標 蓬生 關屋

須磨

入道のみやよりも
[入道]の事或僧曰諸經論の中に或入ニ佛道初門一或入ニ菩提道一なとヽ多みえたりその菩提道は上求菩提下化衆生のこヽろなり又諸惡莫作衆善奉行の意にして佛道に入なり男女にかきらす佛法の道に入をは皆入道と號するよしなり ○續日本後紀承和九年十二月辛酉朔乙丑淳和太皇后剔落入道○嘉祥三年三月己卯朔辛丑嵯峨太皇太后依レ病入道○河海に圓融院の皇后天祿四年三月十九日落飾是を入道の宮といふよししるされたり但此年號はあやまりなるらん帝皇編年紀にくはし下にしるしぬ

くらゐをと返し奉りて
此段謫居の人に比していへり下の本文に位なき人はさてむもんの御なをしめしけるといひ明石の巻に罪なくてつみにあたりつかさくらゐとられてとみえたり ○此本文のこときは官位をとかれさる

只當座の勘事たにをそれある尋常なるにましして遠流の沙汰にはといへる成へしさして官爵をとかれすあさはかことにかゝつらひてだに

官爵 官はつかさなりつかさとる所あり爵はくらゐ也貴賤の序をはかつ列位をいふなり

はか君の御めのと宰相君

宰相君 は小上臈格の女房の呼名なり

たいはんなともかたへちりはみて

臺盤 に長臺盤切臺盤あり其臺盤はをものをくひ給ふの盤なり ○延喜内匠寮式臺盤一面長八尺廣三尺三寸三分 ○臺盤一面長四尺廣三尺二寸五分 以上朱漆○八尺臺盤臺一脚長七尺六寸廣二尺五寸七分高一尺五寸五分 ○四尺臺盤一脚長三尺二寸廣二尺三寸高一尺五寸五分

位なき人はとてむもんのなをし

無文のなをし 上の文に三月はつかあまりの程になん都はなれ給ひけるとあれはいまた冬のなをしにて表白平絹裏うす縹なるへし凡装束着用の法夏冬をわかちて四月朔日より九月晦日に至りては夏の分なり十月朔日より三月晦日に至て冬の分なりと禁秘御抄に見えたり

女君のこき御衣

こき御衣 こき御衣とは紅のこき衣ならんか是万葉の紅の深染の歌の心なるへし ○万葉集第十一寄物陳思　紅之深染衣色深染西鹿齒蚊遺不得鶴

みざう御まき

みさう は源氏君の御座なり御領の庄園をいふ

御まき は御牧なり畜園をいへり

所々の劵なと皆奉り

劵 とは庄園御牧の支證なりといへり

みくらまちをさめとの

みくら は珍寶なとの入たる藏也かすの藏あるがゆへにまちといへり 納殿 は御くらより割分てをさむる所たり

右近のざうの藏人うへきかうふりも程すをつるをみふたけつられてつかさもとられて

うへきかうふりも程すきつる とは叙爵五位といふなりにあつかるべき巡年なれども程すぎつると也 みふたけつられて とは藏人も停らるゝが故に殿上の日給の御簡をけつられしとなり日給のふた又仙籍といふ是也 つかさもとられて とは右近の將監を

て解官せらるゝことなりしかれは官位もなき人なるへし　○禁秘御抄除籍侍臣等有ニ罪過一之時及ニ除籍ニ頭藏人承レ仰仰ニ藏人一藏人削レ簡藏人非藏人同レ之殿上受領在ニ後簡一同削一作ニ前字一　○又解官罪淺深被レ定有ニ解官停任一之由職事仰ニ上卿一　○本朝文粹大江朝臣成基狀云進欲レ近ニ星擒一則名字已削ニ于仙籍之上一

おさめみかはやうとまても

おさめみかはやうととはいやしき下女なり延喜式には御厠人二人御洗二人と齋宮の篇に見えたり禁秘御抄には御厠人長女と見えたり　○和名抄居宅類厠釋名云厠音四反和名加波夜或謂ニ之圊一清反言至穢處宜常修治使ニ潔清一也

かとりの御なをしさしぬきさまかはりたる

かとりの御なをし上の文にもなかまの頃になりて京の事ともおほしやらるゝとありしかれは夏の直衣なりさしぬきも同じかとりなるへしいにしへは指貫も夏冬のかはりありそれかとりとはうすきすゝしをいへり縑とかく也それ夏のなをしはうす花田なるべし委はゝ本々の巻にしるしぬ指貫の色も亦うす花田なるべし凡指貫は紫よりはしめて其次うすいろ其次花田の濃よりうすきになるなり此なをしさしぬきともにむもんなるべし　○和名抄錦綺類縑毛詩註云綃所交反又音消和名加止利縑也釋名云縑音兼其絲細緻數兼ニ於絹一也漢書云灌嬰販レ繒疾陵反師說上譜同今按又布帛ニ名見說文一

千枝つねのりなとをめしてつくり繪をつかうまつらせはやと

千枝其性いまだかんかへず　○河海千枝常則在ニ高名錄一共以畫工也應和四年四月九日御記云召ニ左衞門志飛鳥部常則一圖ニ畫西廂南壁白澤王像一

しろきあやのなよらかなるしをんいろなと奉りて

しろきあやは御きぬなりしをんいろ是さしぬきなるべし本文に初鴈わたる頃といへる折によくかなひなんか　○雅抄指貫しをんいろはつねにきる物にあらず秋の初にきるものなりうすいろの夏のさしぬきのをもてにうすあをのねりうらをつけてこまやかなる御なをし

こまやかとは濃色し給ひたるこき花田の夏のなをしならんか是又無文なるへし

民部大輔

民部大輔は當省の次官にて掌ること卿に同じ ○職員令民部卿一人掌ニ諸國戸口名籍賦役考義優復蠲免家人奴婢道橋津濟渠山川藪澤諸國田事一大輔一人少輔一人(節略) ○官職秘抄(民部輔)殊選下知ニ吏途之法一者上任レ之雖ニ辨少納言近衞次將一知レ之輩兼レ之中古以往守ニ年限一必任ニ受領一近代不レ被レ選人又不レ任ニ受領一

恩賜の御衣は今こゝにあり

恩賜御衣今在レ此とは聖廟の太宰府にてあそばせし詩の一句なり後集に去年今夜侍ニ清涼一秋思詩篇獨斷レ腸恩賜御衣今在レ此捧持毎日拜ニ餘香一とあるをこゝに託していへり

大貳のほりける

大貳は太宰次官なり職掌帥に同じ花宴の卷にくはしくしるしぬ帥は親王の任にして親王の吏務をつかさどらせ給はぬか故に宰府へは大貳をくたし給ひて國のことをしらせしむ或は權帥たる人の國に下る事もあり時によるべし任限五ケ年過ぬれば歸のぼるとなり承和二年七月三日の格に見えたり ○官職秘抄大貳權帥在任之時不レ任レ之權帥大貳間一人爲ニ吏務一故也 ○大槐秘抄帥大貳に武勇の人なりぬればかならず異國をこると申候けり小野好古か大貳の時隆家の帥の時とり分と異國の人のをこりて候なりかれらはわが心ともの武をこのみけるに候

かみなく／＼かへりてをはする御ありさまかたるにそちよりはじめ

かみは筑前守なり又こゝにそちといへるは上に大貳といひしを此物語詞花言葉帥といひかへたるなり實は大貳なれども吏務をしりたる人なるがゆへ也伊豫介を伊豫守といふがごとく例の一體成べし

むまやのをさにくしとらする人もあり

むまやのをさとは驛長なり驛戸の内にて家に富て事に幹しきものをなせるよしなり くしとらすするとは物に書すして口にいふ侍なり ○是河海に大鏡菅丞相思の外に筑紫へ下り給ひけるとき播磨の明石の驛にとまり給ひけるにむまやのをさいみしくをもへる氣色を御覽して作り給へる驛長

莫レ驚時變改一榮一落是春秋とみえたり

をほやけのかうしなる人

[をほやけ]は公なり私ならさるを公といふ[かうじ]とは勘事なり勅勘をかうふるをいふ又勘人とも侍中群要にも見えたり

山かつめきてゆるしいろのきかちなるにあをにひのかり衣さしぬきうちやつれて

[ゆるしいろのきかちなる]とは紅のうちきのいろにいひ[靑にひ]は花田に靑氣のましりたる色にしてかりきぬさしぬき二ツの色にかけていひたるなるべしと是弄花の心なり今按これ謫君の間うちやつれさせ給ひたる體を衣裳にてあかせりしかれはゆるし色の黄かちなるとは紅の色のさめたる心にや上の本文に若木の櫻ほのかにさきそめてとあれはうちきもかり衣指貫も皆冬の具なるへし

ごすくろくのばんでうとだきの具など

[碁]の事うつせみの巻にしるしぬ[でう]とはそれそれのそひたる具なり[すくろく]別なし[だき]は石はしき也河海の注にくはし　○和名抄雜藝類雙六棄名苑云雙六子一名六采今按簙亦是也簙音博俗云須久呂久　○河海古今詩語曰求レ食註云彈棊有二譜一卷一皆唐賢所レ爲棊局方二尺中心高如レ覆レ盆其顚爲二小壺一四角微起　○李商隱詩云玉作二彈棊局一中心最石平(謂其中高也)道士席謙讓異レ人善彈レ棊　○潛確居類書藝經云彈棊二人對レ局黑白棊各八枚先列レ棊相當下呼レ上擊レ之○世說云彈　棊始レ自二魏宮內一妝奩戲也文帝于二此戲一特妙用二手巾一拂レ之無レ不レ中有レ客自云能帝使レ爲レ之客著二葛角巾一低レ頭拂レ棊妙踰二于帝一

やよひのついたちにいてきたる巳の日けふなんかくをほすことある人はみそきし給ふべきと

[やよひ上巳のみそき]はみそきの日なりみそきとは身のそきといへる心也是周の世よりはしまれるよしなり河海云漢代には三月上巳百官東流の水上にして禊飮す又續齋諧記に魏あり以後は三日を用ひて上巳を用ひすといへり又應劭風俗通云周禮女巫掌二歲時一以祓二除疾病一禊者潔也故於二水上一釁潔と見えたり我　本邦のいにしへも三月上巳の日を用ひ給ひし事あり日本紀に見ゆ　○日本紀顯宗天皇元年三月上巳幸二後苑一曲水宴○二年三月上巳幸二後苑一曲水宴○三年三月上巳幸二後苑一曲水　宴今以二長暦一

推レ之元年三月朔戊辰日而二日當ニ上巳ニ二年三月朔壬辰日而二日當ニ上巳ニ三年三月朔丙戌日而八日當ニ上巳ニ也○河海世風記云三月上巳桃花水下之時飮食爲レ餔（大飮酒也 步胡反）招レ魂請レ魄拂ニ除不祥一○續漢書禮儀志云三月上巳日宮人並禊ニ飮於東流水上一○文選南都賦於是暮春之禊元巳之辰方レ軌齊レ軫祓ニ于陽濱一

せんじやうはかりを引めくらして

【せんじやう】は軟障なりよむにはせじやうのよし也幔幕のやうなる物にて高松の繪ありとみえたり御殿のうちにも引けるものなり又延喜内匠寮式によれは軟障の臺といふあり寸尺は見えす○禁秘御抄日月蝕以レ席裏ニ廻御殿一引ニ廻席一之上内引ニ軟障一（節略）○雅抄たか松のせんざうをかく東三條にありしはさか野にかりせし少將をそかゝれたりし是をたつる事まれの事なり○又云三方にみすをかけてをろしたるうへにせんじやうとてまんのやうなるきぬにたか松をほんたいにて四季の木ともを書たり二のゝ一（不明）あるかひろきへりのちいさきつなをさしまはしたるをみすの上にひくなりこれらしきの繪をかきたれは青を東にはしめて引へし

このくにゝかよひける陰陽師めして

【陰陽師】上古は陰陽師諸國へかよいける哉しらす令條に載られたるを左にしるしぬ○職員令陰陽師六人掌ニ占筮相レ地 義解謂占者極レ數知レ來曰レ占也筮者著曰レ筮也相者視也

明石

仁王會なとおこなはるへし

【仁王會】は仁王護國般若經を講せしむる儀なり河海に仁王經云講ニ讀般若波羅蜜一七難卽滅七福卽生万姓安樂帝王歡喜とみえたり○日本紀持統天皇七年十月丁巳朔巳卯始講ニ仁王經於百國一四日而畢

うしろのかたなる大炊殿とをほしき屋にうつし奉りて

【大炊殿】和訓かしき殿これいゐかしくところなり延喜齋宮式に見えたり

内裏に奏すへきことあるにより

【内裏】とは内中といへるに同し内は宮城以内なり裏は猶中の意なるへし異邦の書多内中としるして内裏としるせるもの希有なり左にしるしぬ此外禁内禁中禁闕鳳闕宮内宮中宮室宮闕なといへるも皆是宸居をいふ○漢孔光傳領ニ宿衛一供ニ養行内一師古

注云行內行在所之內中猶レ言二禁中一也○事文類聚續集樂器部顧況李供奉彈二箜篌一歌李供奉儀容質身才稍稍六尺一在レ外不二曾輙敎一レ人內裏聲々不レ遣レ出馳二鳳闕一拜二鸞殿一天子一日一回見

卯月になりぬ衣かへの御さうそくみ帳のかたひらなと

[衣かへ] 卯月朔日衣かへし給ふ冬の裝束を夏の裝束にあらためらるゝ儀也 [御帳のかたひらなと] 共にすゝしにて胡粉にて繪を書たり御たゝみなともあたらしくしきかふるよしなり延喜掃部寮式四月一日撤二冬座一供二夏御座一十月一日撤二夏座一供二冬御座一としるさるゝかことし

御かの御つたへにて女五宮

[女五宮] 第五にあたれる皇女なり

○河海嵯峨天皇女五宮繁子母文屋氏久子依二瘵病一爲レ尼此公主箏事如二血脉一者無二所見一

三月十三日かみなりひらめき雨風さはかしき夜みかとの

[かみなり] の時は諸衛警固す其作法左のことく或かみなりのつほとて襲芳舍を用ひ給ふ事あり○侍中群要雷鳴事三聲大震陣立二左右近衛次將若侍中等一或催示或依レ仰仰レ之更清涼殿前南御階立レ之左北右南殿上將立レ陣云云○又云御裝束事大床子御座南方供二御座一或說云其御座南供レ之云云其敷物用二小莚二枚半疊一神事也中少將夾二御座間一孫廂左右候左南面西上領出右北面東上(向第一間)將右少將前西面矣但著レ後給二圓座一解陣大時於二此座一承レ仰行レ之主上或御二夜塗籠中一事由一但解陣可レ奏二又大臣帶二大將一不二卷纓一著二弓箭一是例也云云又著二給神事御服一近代無二此事一○九條殿遺誡貞信公語云延長八年六月二十六日霹二靂清涼殿一之時侍臣失レ色吾心中歸二依三寶一殊無レ所レ懼大納言清貫右中辨希世譚常不レ尊二佛法一此兩人已當二其妖一

いまはなをもとのくらゐをも給ひてんと

[もとの位] 謫居の人を歸京せられては先本位に復せらるゝか故に本位に復すへきとおほすへし

七月廿よ日のほとに又かさねて京へかへり給へき宣旨くたる

○公卿補任藤原伊周長德二年四月廿四日坐レ事左二降太宰權帥一三年三月廿三日給二官符一被二召返一十二月入洛而長保三年閏十二月十六日復二本位正三位一云云 [宣旨] 和訓みことのり八雲御抄にみえた

り

みそひつあまたかけさふらはす

【みそひつ】は御衣櫃なり此中になにはの御はらへの御衣筥あるべきゆへに下の文をふくみてまつ櫃とあけられしと聞えたり

きみはなにはのかたの御はらへ

【なにはの御はらへ】はつの國なにはの三津濱の御禊なり大嘗會の次のとし八十島の禊又は齋宮歸京のときのはらへによせていへる例の一體なるべし

〇江次第（八十島祭）典侍車女房車四兩童女車一兩大略如賀茂祭於淀乘船（車有別舟）公卿以下殿上人有事緣者皆相共下向祭日到難波宮主作壇（國主作之）置祭物女官内藏寮官人等以御衣筥案立宮主前典侍車并出車等列立宮主座東（西面北上）件座東立平張可敷神祇官并中宮東宮内藏等屬以下座敷神祇官彈御琴女官披御衣筥振之次中宮御料次齋宮御料宮主著膝突（西面）捧御麻修禊畢以祭物投海歸京之後典侍參内返上御衣并申御祭平安奉仕畢由

もとの御位あらたまりてかすより外の權大納言になりたまふつき〳〵の人もさるへきかきりはもとのつかさかへしたまふ

【もとの御位】とは紅葉賀の卷にいへる正三位のくらゐにあらたまる【かすより外の權大納言】とは令條定正官四人慶雲格のさだめ正官二人の外なり凡權大納言は淳和天皇天長五年に始て任せらるかすさたまるやうになりしを又其後猶權大納言をくはへらるゝなり内かすより外の權大納言にかゝれしよし也〇續日本紀慶雲二年四月丙寅敕依官員令大納言四人職掌既比大臣官位亦超諸卿朕念之任重事密充員難滿宜廢省二員爲定兩人更置中納言三人以補大納言不足（零源卷中納言之處亦引之）〇公卿補任所見寛平以往始被置權大納言之例天長五年三月十九日以中納言左近衞大將從三位民部卿清原眞人夏野卿始任權大納言也其後中絶自齊衡元年八月至四年四月有之其後又中絶自貞觀六年正月至九年二月有之此間任權官之人三員〇官職秘抄令云大納言四人格云慶雲二年省二人寛平遺誡云大納言二人正權勿過三人其後安和二年始爲三人（正權）永觀元年增四人長

和二年增五人節略

みをつくし

春宮御げんふくの事あり

御げんふくの事桐壺の巻に記たるに同じからん

をなじ月の廿よ日御くにゆづりのことにはかなれば

御國ゆづりとは御讓位の儀なり御讓位あれば新主受禪の儀式劔璽渡御の事あり其後御即位の儀式を行せ給へり委江次第などにみえたり

源氏の大納言内大臣に成給ひぬ數さだまりてくつろく所もなかりければくはゝり給ふなりけり

内大臣の號は天智天皇の御宇はしまる但それは左右大臣の上に着給ひて太政大臣と同じそもそも爰にいふ内大臣は光仁天皇の御宇にはじまる其座次は左右大臣の下にあり下の文にくはし　數さだまりてくつろく所もなかりければくはゝり給とは太政大臣左右大臣數さだまりてくつろぎなければ内大臣に加はり給の儀なり是を四公の例といへり下の文に記せり○公卿補任藤原良繼寶龜八年正月三日爲二内大臣一元云二内臣一同魚名寶龜十年正月朔日爲二内大臣一○四公之初例公卿補任寛仁元年三月四日藤原賴通任二内大臣一同顯光轉二左大臣一同公季轉二右大臣一十二月四日同道長任二太政大臣一此外有二治安元年七月同日四公之例一先レ是無二四公之例一也

致仕のをとゝ攝政し給へきよしゆづり聞え給ふ

致仕のをとゝに攝政宣下の御事舊例いまたかんかへず是はたゝ物語の一ていなるへし抑人臣攝政のはじめは清和御幼帝の御時忠仁公にはしまりてしかしよりこのかた彼一門執政の臣たること綿々たり○公卿補任人臣攝政治天安二年十一月七日太政大臣從一位藤原良房忠仁公是也宣旨爲二攝政一准二三宮一至二食封一賜下内舍人左右近衛等爲二隨身一帶仗資人四十人上依レ爲二帝外祖一被二抽賞一也是即位之日天皇九歲之時也○西宮記臨時五攝政代二天子一攝二萬機一載二幼主受禪宣命一後或詔賜二隨身一加二内舍人一辨申二官奏於議所一行二除目一在レ時於二宿所一行レ之

太政大臣になり給ふ

太政大臣は諸官の長たりといへとも分掌の職にあらず只一人に師範して四海に儀形たり邦に經し道を論し陰陽を燮理し給ふ官なるか故に其人なき

ときは關白と令條に見えたりしかりといへども貞觀御世攝政の職をおかれてより以來は太政大臣の職掌名ありて實なきがごとくなれり元慶中奏議ありてそれより以來別敕により內辨執筆等の事をつとめらる抑太政大臣の任は天智御宇皇子大友に始りて其次持統の御宇に高市親王を任し給へり惠美押勝及道鏡法師の任はいふにたらす其後は多贈官たりしか又文德の御世忠仁公をもつて當官に見任せられてよりこのかた彼貴族連綿して任し給へり或又任せられぬ世もありけれと若天皇元服をはします御時はかならず太政大臣の任ありて御冠をくはへらるゝ御事貞觀の御遺訓なりと承りし○職員令太政大臣一人師二範一人一儀二形四海一經レ邦論レ道爕二理陰陽一無二其人一則闕義解言太政大臣佐レ王論レ道以經二緯國事一和二理陰陽一則有德之選非二分掌之職一爲レ無二其分職一故不レ稱レ掌設レ官待レ德故無二其人一則闕○文德實錄齊衡四年二月己巳朔丁亥右大臣正二位藤原朝臣良房爲二太政大臣一有二宣制文一天安元年二月二十三日杭レ表辭レ官略文敕答不レ許四月戊辰朔丙戌授二從一位一○三代實錄元慶四年十二月四日癸未右大臣正二位藤原朝臣基經爲二太政大臣一于時關白五年正月十五日甲子加二從一位一九年正月丁巳朔天皇御二大極殿一受二朝賀一太政大臣行二內辨一太政大臣儀不レ可レ行二內辨一是日別有レ敕行レ之是權時之事也

宰相中將權中納言になり給ふ

[權中納言]は慶雲格制の正官三人の外なり抑中納言の號は持統天皇四年七月に三輪高市麿を任し給ふにはしまる此事國史よりくはしからされとも公卿補任にみえたり但此時は大納言の任なくして中納言納言と列位あり其中納言は後世の大納言に同し大寶令制のまへに其中納言の號を止給ひて令には大納言と改て四人を定をかる其後慶雲二年大納言四人の中二人を省略して令外に中納言三人を置て大納言の不足を補ひ給ひぬ是後世の中納言の始なり其後天平勝寶三年に始て權中納言を任せらる是正員の外なり然して貞觀以來暫中絕しけるを天曆御宇又權中納言一人をくはへをかれて其後漸加增せしやうにみえたり下の文にしるしぬ

○慶雲二年夏四月丙寅敕依二官員令一大納言四人職掌既比二大臣一官位亦超二諸卿一朕念レ之任重事密充員

難満宜廢省二員爲定兩人更置中納言三人以補大納言不足其職掌敷奏宣旨待問參議其官位料祿准令商量施行太政官議奏其職近大納言事關機密官位料祿不可便輕請其任擬正四位上官別封二百戸資人三十人奏可之○天平寶字五年二月丙辰朔敕中納言准格正四位上此則職掌既重季祿尙少自今以後宜改爲從三位官○天暦以往始被置權中納言之例天平勝寶八年五月十九日以從三位藤原永手卿始任權中納言也九年八月三日參議從三位石川年足卿任權中納言永手轉正代其後中絕復起嘉祥三年停貞觀二年其後又中絕此間任權官之人四員（以上公卿補任節略）○官職祕抄格云元慶二年省大納言二人置中納言三人遺誡云中納言三人其後天暦三年始爲四人天祿二年增五人寬和二年增六人長和三年增七人同四年增八人（節略）（頭注云）天暦三年正中納言三人權一人此後增者皆權官後世

故院にさふらひしせんじのむすめ宮內卿の宰相にてなくなりにし人の子なりしを

「せんじ」は女房の名なり院中にかきらす中宮東宮又は執柄家にもありさかく上臈の名なり此名は宣旨を取入人なりとよせたる名なりといへり「宮內卿の宰相」とは宮內卿にて宰相を帶しする男官也○西宮記（雜事）一說上臈女房一人爲宣旨○職員令宮內省卿一人掌出納諸國調雜物舂米官田及奏宣御食產諸方口味事（輔以下略之）○官職祕抄宮內卿爲參議散三位四位官

御はかしさるへきものなと

「はかし」は佩刀なり御產成の後必しんせらるゝはかし也是白き織物の袋に入る也御產部類にくはし

五月五日にそいかにはあたるらんと

「いか」とは御產五十日の御祝なり然れとも五十日めを用ひ給ふともみえず前後吉日をえらび給ふゆへにやもゝ日も亦同しそれいかの御儀しきは秉燭の後に事行はる先着座の公卿盃酌の事あり勸盃をはりて次に若子の御前物を供す（者あり）陪膳後送の殿上人あり女房若子いたき奉り座定りて次第に御前物を供して是れ若子に含奉らしめ給ふ儀式ありて着座公卿に衝重をすゆ次に御遊等あり事をはりて祿を給ふ田舍の作法も凡是に准するならんかし百日の儀式も亦をなじ明月記の所見くはしけれど後

世の日記なれは此書の爲にはしるしかたく舊例たつぬへし

入道きさいのみや御くらゐをあらため給ふへきならねば太上天皇になずらへてみふ給はらせ給ふ

此みやもと中宮にて今正しく國母なれど入道し給ひたるゆへに今皇太后にあらため給ふべきならねばさなり太上天皇になすらへてとは封戸年官年爵などを上皇にしんせらるゝごとくにまいらせらるゝと也みふとは御封なり封戸(フコ)といふ是なり下の文にくはし○拾芥抄太上天皇御給諸司允一人諸國掾一人目一人一分三人爵一(近代加階)封戸二千戸敕旨田千町○賦役令凡封戸者皆以課戸充調庸全給其田租爲二分一分入官一分給主○田令凡田長三十歩廣十二歩爲段十段爲町段租稻二束二把町租稻二十二束義解束稻舂得米五舛(頭注云)租者今云地子也

ゐんしともなりて

ゐんしは院司なり院の雜事を勤る所の官人の事なり河海に藤原遵子の例をひかれしにて前段ともによく聞えたり更に遠き例に及ふへからさる歟○西宮一院雜事出入(無藏人依新主宣旨分左右近物[illegible]以下各五人爲御隨身)供膳(同在位儀采女)供別納供御飯(牧旨田地子)御菜(御封物)主殿所々供御湯油掃部所々奉鋪設廳充所々食藥殿供御藥仕所調節器進仕所有雜役之時召仕廳寄人公卿外頭爲別當五位藏人爲侍臣六位藏人爲判官代(不補者藏人如元)出納爲主典代瀧口爲武者所上﨟女房一人爲宣旨男女爵內外官御給御封敕旨田大粮衛士仕丁(依例可奉知)白馬牽々分使事分位祿(同諸宮)宮主御隨身勤夜行召次奏時諸祭被立使(不行列)神祇官人於本院行鎭魂御讀經(雜事圖書)御灌佛廳勤仕御佛名院司問人(御隨身中刻限)御衣(青赤)直衣隨事有例烏犀帶御荷前以殿上四位五位爲使御幸乘檳榔車御隨身布衣烏帽子帶弓箭節會時侍臣見參遣外記御服時(以日易月或說不可然)今按上本文謂准太上天皇則此文亦可知乎

世の中のことたゝなかはをわけてをほきおとゞ此おとゝの御まゝなり

これは天下の事を兩人して政こち給ふ儀なり○河海執柄二人例寛平九年七月三日權大納言左近大將藤原時平權大納言右近大將菅家　先帝詔云少主未長間一日万機之政權大納言藤原朝臣菅原朝臣可

レ奏二所レ請之上事一○延喜十五年十二月五日大納言源昇藤原道明已上宣云可レ奏二辨官雜文書一

かく人とをつらなとさうそくを調べかたちをえらびたり

とをつらは十列なりこれ社頭にて東遊なとをまふ樂人なり凡關白の賀茂春日詣のことくならんかし

松原のふかみとりなる中に花もみちをこきちらしたるとみゆるうへのきぬのこきうすきかすしらす

ふかみどり花もみちこきうすきといへるは紫緋綠の袍をふくみていへりうへのきぬとは袍の事なり此裝束も夏の具なるべし○衣服令一位深紫衣三位以上淺紫衣四位深緋衣淺縹淺緋衣六位深綠衣七位淺綠衣八位深縹衣初位淺縹衣節略○延喜彈正式凡大臣帶二二位一者朝服著二深紫一諸王二位以下五位以上諸臣二位三位竝著二中紫一○凡六位七位朝服同著二深綠一八位初位共服二深綠一○凡綾者聽レ用二五位以上朝服一六位以下不レ得二服用一

六位の中にも藏人は青色しるくみえて

六位藏人上の卷にも見えけれども其はしまれる年月いまたしるさゝれは爰にしるしぬ是も弘仁元年に始て補せらる青色は麴塵といへるに同し事也延喜縫殿寮式に青白の橡とあげ給ひし是なり此外魚陵といひ俗に山鳩色ともいへり一物にしてをほくの名を得たりそれ六位藏人の青色を着けるは是極﨟六位藏人第一なりならんかく晴なる時には第二第三といへどもこれを着せり皆拜領のよしなり又諸臣着用の例もありみゆきの卷にしるすへし○公卿補任清原夏野百濟王勝義朝野宿禰鹿取等弘仁元年三月十日補二藏人一于レ時各六位○侍中群要麴塵袍除二節會幷主上著御日一之外可レ然揭焉所二必著一之著二蘇芳下襲一時付二蘇芳裏一著二柳色下襲一時付二青裏一蒲萄染下襲時付二紫裏一○枕さうしに六位藏人こそなをめてたけれいみしき君たちなれどもゐしも着給はぬあや織物を心にまかせてきたる青いろすかたなどいとめでたき也

右近のせうもゆけいになりてことことしけなる隨身くしたる藏人なり

右近のせうは須磨卷にてみふだけつられあかしの卷にてもこのつかさ給りたる是なり今爰に

ゆけいとは左衛門大尉にて使の宣旨をかうふりたるなり又是を廷尉といふ六位の藏人も廷尉たる事も定りたる例なり又此廳の隨身は火丁なり是白羽を盛たる胡籙を負法なり○職原抄檢非違使左大尉二人右大尉二人殿上藏人爲二廷尉一者間任二大尉一節略○山槐記永曆二年四月問答大理負二白羽一之時火丁三人負二白羽一也今一人不レ負節略

よしきよもをなしすけてに人よりことにもの思るなきけしきにてをとろ〳〵しきあかきぬすかた

をなしすけとは五位の廷尉佐と聞えしあかきぬとは緋の袍の色をみたさす殊にあかきをいへり○餝抄四位已上橡今按正曆以來例也五位有二蘇芳氣一是亦同レ上六位綠廷尉佐大史外記史大夫尉等著二赤色一節略

御車をはるかにみやれは

御車びらう庇の車にやひらうは本字蒲葵ならむとをほゆ椶櫚の類にして或團扇笠などにも用ゆ是なりしかれども延喜式にも檳榔の二字をもちひ來れり不審なる事なりたつぬべし凡車いろいろあり唐車尼眉車青糸毛紫糸毛庇車檳榔庇網代同庇金作車毛車大八葉小八葉半蔀家々文車賀茂祭餝車の名あり事の次に名稱をしるせり其所々の名目調度それ〳〵のかざりは委圖式ならではつくしがたし○西宮記臨時六檳榔毛太上皇以下四位已上通用非參議不レ立レ榻近代無二乘用之人一○今按後世所見以二或檳榔庇或大八葉一爲二大臣車一見二餝抄一

かはらのをとゝの御例をまねひてわらは隨身を給る

かはらのをとゝとあれば源融公と聞えし但河海をはじめ融のをとゝに童隨身給たる勘例なし花鳥の御說に長德二年八月九日御堂殿左大臣にて左大將を辭し給ふ日童隨身六人を給はれるよし載たまひし若是などをや遠く融公のやうに書なし給ひけるにやしらず

みつらゆひてむらさきすそごのものゆひなまめかしうたけすがたとゝのひうつくしけにて十人さほことに今めかしうみゆ

みつらゆひてとはひんつらなり粗きりつぼの巻にしるしぬ是童隨身がていなり岷江入楚に裝束の色目所見なく水干たるべき哉狩衣たるべき哉隨身といへば弓やなくひをおふべきや何れもたしかかなる證據を見侍らすとみえたり

馬そひわらはのほどみなつくりあはせてやうかへてさうそきはけたり

「馬そひ」「はらは」各別なり「やうかへて」とは源のはらはなど丶又樣かはりて仕立たるなり此童は小舍人成べし○延喜彈正式凡車馬從者親王及左右大臣十四人大納言十二人中納言十人參議八人一位十二人二位十八三位八人四位六人五位四人（陪從之日二位已上八人三位六人四位五位四人）六位以下二人（節略）

齋宮の宮つかさ

「齋宮の宮つかさ」葵の卷に委しるしぬ其官人を置る丶事は聖武天皇神龜中以二年の儀なり格にみゆ但齋宮寮の號は文武天皇大寶元年に始る其より前には齋宮司といふ也

大極殿のうつくしかりしけしき

「大極殿」とは朝堂院の正殿の名にして八省院といふ是なりさか木の卷にもしるしぬ

蓬生

御せうとの禪師の君はかりそ

「禪師」とは禪定の人を稱贊していへり其禪定とは梵語なり飜譯して是を三昧といふいづれの家にも限るべからす道綽禪師の類なりと承りし

あけまきの心さへ

「あけまき」は總角なりみつらゆひたるをさなきものをいへり

八月の野わきあらかりしもしらうとも丶たうれふし

「らう」は廊なりほそとのともいへり○和名抄居宅類廊唐韻云廊音郎（和名保曾止乃）殿下外屋也

うるはしきかんやかみみちのくかみ

「かんや紙」は紙屋紙なりいろ〳〵の紙をいへるか「みちのくかみ」は檀紙の事にや河海に陸奥國より檀紙をすきはしむ檀はまゆみの木なりとみえたり○古今祕抄敎長卿云紙屋といふは內にはへるくろきかみすくところ也それを流出たる川仁和寺の東のさかへに侍りそれを世俗にかみやかはといふ也○西宮記臨時五紙屋院大同年中始置此院圖書別所野宮東○河海紙屋川とは小野平野の中を南へながれたる川也仁和寺川とも號す此所にて紙をすく也

侍從かをは少將といひ侍りしおい人

「侍從少將」ともに中﨟格の女房の名なり

御さきの露を馬のむちしていらひつゝ

むち は鞭なり蒔繪あり鞭笭むち筥などもあるやうにみえたり○和名抄鞍馬具鞭野王按鞭和名無知馬筴也筴馬檛也檛所ニ以箠レ馬驅レ遲也

御さしぬきのすそはいたうそほちぬめり

御さしぬき のいろ官位によりて是をいへば凡薄色の堅織物の御指貫にや廿七八歳の大臣なれば也上の文に卯月ばかりにとあれはいまた冬の御さしぬきなるへし四月の御禊より生の指貫を着し給ふゆへなり夏の指貫ならは大文三重襷と云ふ是なり成べし抑さしぬきのいろ紫薄色淺黄其淺深は年齢により官位に隨つて斟酌あるべし公卿幷禁色をゆる人は浮織物堅織物或綾也非禁色の人は平絹也堅織物と綾と着用の時分は更に差異有べからざる由也只色をもつて老若を分別す薄色若淺黄は凡四十已後の事也といへともそれも大臣ならず廿七八歳にても薄色の堅織物を着し給ふやうに見ゐたり堅織幷綾ならは文藤の丸浮織物ならば文龜甲或鳥襷なり是も年齢によりて用ひ給へり但龜甲は攝家淸花の外は用ひ給はさるやうにみゐたり非色の人は平絹なり

○西宮記指貫王者以下衆人所レ用也古時有レ制臣下不レ用近代五位以上昇殿六位皆用レ之 ○次將裝束抄夏冬指貫更衣事 自二十月維摩會比一至二四月御禊前一用二練指貫一自二四月御禊日一至二十月十日比一用二生指貫一若五節著二夏衣一之輩相二待其程一不レ改二冬衣一 ○非職雲客諸役抄夏袍雖レ用二冬指貫一冬袍不レ著二夏指貫一 ○桃華蘂葉指貫童時紫二倍織物指貫地文龜甲白浮線綾丸 夏生元服之後濃紫浮織物文龜甲或鳥襷或半色薄色の紫の方へよりたる也 次薄色堅織物文藤丸 次薄色綾文藤丸こわなの花堅文綾志々良 次淺黄堅織物文藤丸 次淺黄綾文同志々良以上裏同二表色一 次白藤丸或平絹 以上其色隨二年齢一依二官位一可二進退一今按一曰晴讌二老人一或レ用二薄色一平又萠黄指貫或紫苑色指貫有レ之

かうのからひつ

からひつ はあし四本を四方にくはりそりあしにして或黑ぬり或朱ぬりにして金銅の金物所々にあり尺寸定法なしこと〳〵に替るへし

下けいし

下けいし は知家事をいふにやむかしは當官の三位以上には家令を給ふはけて是をいへは四等あり令扶從書吏のしなこれなり後世扶を知家事とも又は下家司ともいへるやうにみゐたりくはしくは家

令職員に見えたり

せきや

ひたちはのほりける

[ひたち]は常陸介なり夕かほの巻に伊與介より常陸介になりて任國に下りし人なりひたちの介の職も粗するつむの巻ひたちのみこの所にしるしぬ凡受領は遠國は五ヶ年近國は四ヶ年のかきり有年限すきぬれは歸京して税帳をかんかふる也公文を勘ふといふ是なり ○江次第(定二受領功課一)格云辨二濟塡納一取二四年以上返抄一者抽二於等倫一可二褒賞一の同抄四ヶ年返抄今世受取也

車十はかりそ袖くちもの〻色あひなともり出て

[袖くちもの〻色あひ]是車のいたしきぬなり

いろ〳〵のあをさものつき〳〵しきぬひものく〻り染のさまもさるかたにをかしうみゆ

[あを]とは襖なり裏あるをあをといへり是いろいろの布にす〻し裏なと付たるや狩衣の中に狩襖といへるは必裏あり是秋の初よりは同し生の裏を付ることあり此巻も九月晦日とあれは生裏なるへし

[ぬひもの]は繡物なり[く〻り染]とは纐纈といふ是なり其く〻りやうに雌結雄結ありて纐と纈をはかつよしなり○ 雜令凡官戸奴婢三歲以上毎年給二衣服一春布衫袴衫裙各一具冬布襖袴襦裙各一具皆隨二長短一量給 ○和名抄錦綺類繡蔣魴切韻云繡(無沼訓毛乃)以二五色絲一刺二萬物形狀一也○爽纈東宮切韻釋氏曰纈(爽纈此間云加宇介知)結レ帛爲二文絲一也 孫愐曰綰之有二夾花一也 ○延喜縫殿寮式(淺紫條)綾紗一疋紫草五斤纈帛一疋紫草五斤(節略)

かのむかしのこ君いまは右衛門のすけなるをめしよせて

[右衛門の佐]を置る〻はしめ督にをなし職掌も亦同しは〻木々の巻にくはしくしるせり ○官職秘抄(左右衛門府佐)公達任レ之於二諸大夫一者規模也

きのかみといひしも今はかうちの守にそ成にける

[紀伊守]より[河内守]なる此等の受領も四ヶ年の任限なるべし

右近のそう

みをつくしの巻に記せり大將は長官中少將は次官將監は判官にしてそうといへる是也將曹は主典也

源氏官職故實秘抄巻七 繪合 松風 薄雲 槿

繪あはせ

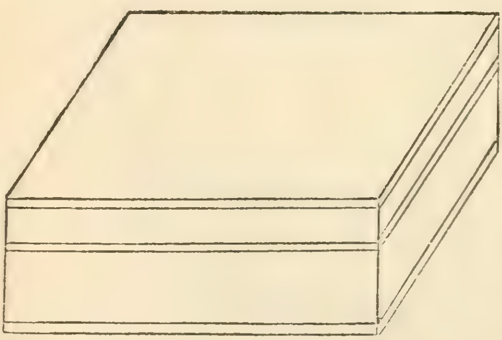
前齋宮の御まいりのこと

【前齋宮】前齋宮の御まいりとは賢木巻にをやそひて下り給ふ例はことになければどゝいへる六條の御息所の御むす成齋王の歸京し給ひて後女御まいりの事にとりなして云り此下心は矧子內親王によせらるといへ共此人女御入內はなき事なれば例の一體成べし但先例前齋宮入內の事數有抑聖武帝の皇女井上內親王は神龜四年九月壬申に齋宮にたち給ひ歸京の後に光仁帝潜龍の間に妃となり即位有て寳龜元年十一月甲子六日皇后と來給ひし又光仁天皇の御女酒人內親王寳龜三年十一月己丑十三日齋宮に立て後に桓武天皇是を入て寵ありき又桓武帝の皇女朝原內親王延暦四年九月乙亥十一日齋宮として後に平城天皇是を入て妃とし給ふ又醍醐帝御孫徽子女王（重明親王御女）朱雀帝天慶元年九月に齋宮として下り給ひ後に村上院天暦二年十二月入內有て明年四月に女御と成給ふ又村上帝御女矧子內親王（母徽子女御）圓融院天延三年六月廿七日齋宮の卜定有て後に伊勢に下り給ふ但是は女御入內の事なけれども例の一體なるべし

御くしのはこうちみたりの筥かうのはことも

【御くしの筥うちみたりの筥かうのはこ】そのをの御厨子の調度なり類聚雜要抄にくはし圖如レ左

○櫛筥一雙（甲乙）蒔繪螺鈿口白鑞



方一尺深三寸（三寸之中蓋蔓九分）懸子深七分（有ニ折立一）甲乙共同

甲筥身納ニ銀小筥廿二

二合（內六合彫透物十六合一折レ堺已上筥深八分中蓋蔓二分長弘筥之中造ニ入之一）

其小筥十二合（十二時形以レ銀造ニ入之一）

五合（湯土玉丸世顆同平玉卅銀鋌卅白鑞鋌卅鉛鋌卅各納レ之）一合（形胡人）一合（鋏子二枚）

二合（同鋏子緒二筋各筋一）一合（差櫛二枚金也）

同筥懸子（納銀鋏子二枚銀鑷子二枚銀平髮掻二枚銀鈿髮掻二枚銀耳決二櫛掃一白猪一螺鈿𥷐四十枚）

乙筥身納二銀小筥廿一合一内透彫物六合折埒十五合已上筥深八分之中蓋蔓二分長弘筥中造二入之一 其小筥一合口徑三寸八分八花前納二同鏡一面一 一合彫櫛二雙 一合鸂鶒形一雙
一合鯨鯢玉一丸但件眼云々其代琥珀玉入レ之納二錦袋一 一合胡人形二 十合師子形貘一犀猪熊鷹羊鶴龜鳩已上銀造レ之 一合水精玉一丸取レ水徑七分許納二錦袋一 一合火精玉一丸取レ火徑如レ上納同レ上 一合琥珀玉一丸徑七分許納同 一合紺瑠璃玉三十顆無レ穴 一合同平玉三十 一合牛玉一丸同筥懸子納物如二甲懸子一 已上居樣別有二繪樣一

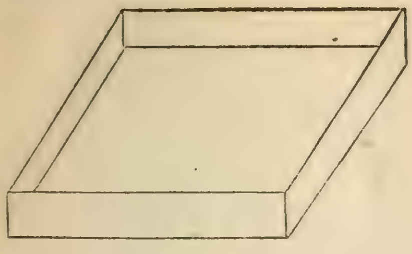
○打亂筥蒔繪螺鈿口白鑞

納二髪上具一料

長一尺一寸五分弘九寸五分

蓋定深一寸折レ角

今案内張錦あり



○香壺筥一雙甲乙蒔繪螺鈿口白鑞

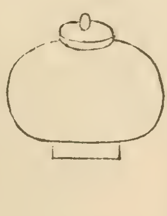
方一尺深三寸八分甲厚五分蓋蔓九分



香壺八口分二納甲乙筥一

布久頁弘三寸五分高二寸六分

内尻高二分弘二寸口弘一寸八分

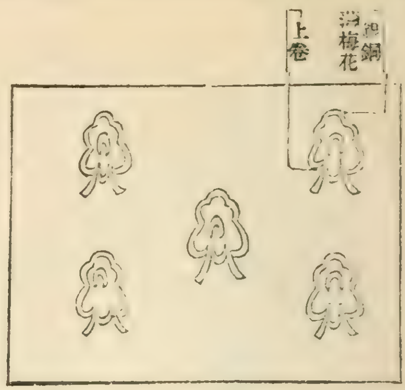


甲筥納香壺

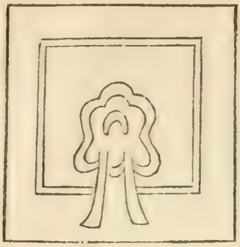
銀壺四口納一口沈香 一口甘松香 一口丁子 一口薫陸香

乙筥納香壺

銀壺四口納一口蘇合香 一口鬱金香 一口桂心 一口麝香



○心葉二枚甲乙料
象眼青村濃二倍方九寸
銀銅薄梅花二倍之
上巻付レ之上巻手長一寸末垂二寸壺共之上置レ之
（頭注云）象眼者薄物唐絹名也榮花物語に象眼のうす物と書つゝけたるさ桃花薬葉にみえたり



○壺心葉八枚
弘方二寸五分二倍上巻手長一寸末垂二寸
凡雜事宮心葉定
以上類聚雜要抄節略

しくしのはこの心葉に
[心葉]は凡右の圖のごとし大小はそれ〴〵替也う

すもののきぬに銀銅の梅花を五所に付てそれにあげまきの糸を付たり是は物ども入たる上にかざりにをく物なり

すりの宰相をくはしうつかうまつるべくの給ひて

[すり]とは修理なり嵯峨帝の御宇にはじまる委桐つぼの巻にしるしぬ[宰相]の事は紅葉賀の巻にしるせり爰にすりの宰相とは修理大夫の宰相なり此任たる始は橘常主卿にや河海にも粗しるされたり○官職秘抄左右京修理参議散三位殿上四位任レ之○公卿補任橘常主弘仁十年三月日藏人頭十一年八月十日右近少將十月左近少將十二年正月十日兼二式部少輔一少將如レ元四月一日從四位下兼二修理大夫一五月兼二中務大輔一大夫如レ元九月一日兼二式部大輔一十三年三月廿口任二參議一大夫式部大輔如レ元此後有下在原友于昌泰三年正月廿八日任二修理大夫一參議之例上以上節略

むめつぼの御かたには平內侍のすけ侍從のないし少將の命婦右には大貳のないしのすけ中將の命婦兵衞の命婦

[平ないしのすけ]とは本姓をくはへていふ其人の姓をくはふるは第二のすけなり[侍從の內侍]と呼

名をくはふるは下﨟の掌侍なり少將の命婦とは中﨟の女房なり大貳のないしのすけと呼名をくはふるは第三四の典なり中將の命婦兵衞の命婦は皆中﨟の女房なり其內待命婦にことは委桐つぼの卷にしるしぬ

ゑは巨勢相見ては紀のつらゆきかけり

巨勢紀二姓ともに武內宿禰乃苗裔なり○河海巨勢相覽一說云巨勢金岡相覽同人也云云但如高名錄者相覽猶先代人也金岡仁明天皇御時人也承和四年九月五日圖御所繪

かんやがみにからのきをばいして

かんや紙の事蓬生の卷に委しるしぬいろ〳〵のかみなるにやきとは綺なりからのうすものなりはいしてとはいろ〳〵の紙にうすものをはりかさねたるにやといへり

繪はつねのり手はみちかぜなれば

つねのりは飛鳥部常則須磨の卷にみえたり飛鳥部の本姓は百濟國人木吉志の後なりみちかぜ木工頭道風なり敏達天皇御子春日皇子六世嵯峨淳和朝之人參議從四位上小野朝臣峯守孫大宰大貳葛繪男なり

大極殿の儀しき

大極殿の儀しきは榊のまきに委しるしぬ

きんもちかつかうまつれるかいみしきを

きんもちは金岡が孫なり○河海公望繪師在高名錄采女正巨勢金岡孫公忠子也

えんにすきたるちんのはこにをなしき心葉のなたなと

すきたるちんのはこは花鳥の御說えりすかしたる筥とこゝろへべきにやと心葉は上の圖のごとし○和名抄香名類沈香本草云沈香節堅而沈水者也

院の殿上にもさふらふ左近中將を御使にて

院の殿上にもさふらふとあれば此左近中將は內の昇殿もゆるしたる人と聞えし岷江入楚に昔は內裏の昇殿をえたる人も院の昇殿ゆるされ給はぬもあり院の昇殿ゆるされたるも內裏へ昇殿せぬもあり此人は內裏にても院にても昇殿ゆるされたる人也昇殿せぬ人は殿上さぶらはぬ事なりとみえたり

ありし世をとりかへさまほしくおほしける

ありし世をとりかへさまほしくとは御後悔なり

平城上皇の嵯峨帝に御位をゆづり給ひし後に御世を取かへさまほしく思しめして御謀叛を起さしめ給ふ事によせたる例の一躰なるべし　○日本紀略嵯峨天皇弘仁元年九月戊戌朔癸卯依ニ太上天皇（平城上皇）命ニ擬ニ遷ニ都於平城ニ正三位坂上大宿禰田村麻呂従四位下藤原冬嗣紀朝臣田上等爲ニ造宮使ニ緣ニ遷都事ニ人心騒動仍遣ニ使鎮ニ固伊勢近江濃等三國府并故關ニ云云戊申正四位下藤原眞夏従四位下文室朝臣綿麻呂等被ニ召自ニ平城ニ來禁ニ綿麻呂於左衞士府ニ大外記従五位下上毛野朝臣穎人従ニ平城ニ急來言太上天皇今日早朝取ニ川口道ニ入ニ於東國ニ凡其諸司并宿衞之者皆從ニ焉于レ時遣ニ大納言正三位坂上大宿禰田村麻呂等率ニ輕鋭ニ從ニ美濃路ニ邀レ之云云是夜命ニ左近衞將監紀清成同將曹住吉豊繼等ニ射ニ殺仲成禁所ニ（先レ是禁ニ仲成右兵衞府ニ）己酉太上天皇至ニ大和國添上郡越田村ニ即聞ニ甲兵遮レ前不レ知レ所レ行以上皇遂知ニ勢蹙ニ乃旋宮剃髪入道藤原藥子自殺（藥子者仲成妹爲ニ尙侍ニ是與ニ仲成ニ共道人之首也）贈太政大臣種繼之女中納言藤原繩主之妻也（節略）

女房のさふらひにをましよそはせて

爰に［さふらひ］とは臺盤所なり［をましよそはせて］とは是主上の御座をかざらせてと也

左はしたんのはこにすはうのけそくしきものは紫地のからの錦うちしきゑひそめのからの綺なり

［しき物］は花足の上敷なり［うちしき］は花足をすへたる地しきなり［花足］の事は葵の巻［ゑひそめ］の事は末つむ巻にかしらの綺はうすき織物也花の宴の巻にしるしぬ○和名抄木類紫檀内典云栴檀黒者謂ニ之紫檀ニ○蘇枋蘇敬本草法云蘇枋人用ニ染色ニ者也

わらは六人あかいろに櫻かさねのかさみあこめはくれなゐ藤かさねのをり物なり

［赤色］是表着の色也本名赤白の橡ともいへり凡黄赤し委乙女の巻にしるすべし［櫻主のかさみ］は面白裏ゑび染の汗衫なり［藤かさね］は表紫裏萌黄なり紅も藤かさねも袙の色なり凡着かさねやうは單の上にあこめ袙の上に濃打衣うち衣の上に表着うはぎの上に汗衫なるべし下には童なればこき袴に表袴をかさねて着るなり其かざみは水干のかみのやうにてすそ長きものなりうしろは前より猶ながし枕さうしにかざみはしり長こいへかし又かざみ

ながくしり引てともみえたり其長凡しり一丈五尺まへ一丈二尺袖の廣さ二のにて二尺二寸うちたれ二尺三寸と雅抄にみえたり色は春夏にかはるよし葵の巻に枕さうしを引てとしるしぬ　○女官飾抄かざみはうはぎのうへに着るなりわらはめのきるものなり

右はちん(沈)のはこにせんかう(棧香)のしたつくゑうちしきは青地のこまのにしきあしゆひのくみけそくの心はへなと

せんかう下にしるしぬ　あしゆひのくみ　はうちしきの縁まはりを色〳〵の糸にて蜷むすびあはひむすびしてさしたるあまりを机の四の足にからみて花足よりもなか〳〵打はへたるなり○和名抄香名類淺香南州異物志云沈香其次在₂心白間₁不₂甚堅₁者置₂之水中₁不ㇾ浮不ㇾ沈與ㇾ水平者名曰₂淺香₁也

わらはあをいろに柳のかさみ山吹かさねのあこめ着たり

青いろ　麴塵とも又は青白橡ともいへりこゝには童の表着の色にもちふ　柳のかさみ　とは表白裏青なる汗衫なり　山吹かさねの袙　とは面うすくちは裏黄なるをかさぬ是を花山吹といへり是も單の上に重ぬべし

ふんのつかさ

ふんのつかさ　女官十二司の中書司なり此つかさに樂器もあり　○後宮職員令書司尚書一人掌下供₂奉内典經籍及紙墨筆几案絲竹₁之事上

松　風

まところけいしなと有へきさまにしをかせ給ふ

まところ　は政府なり万の事取まかなふ所をいへり　けいし　は家司なり分ていへば家司下家司大従少従大書吏少書吏あり政府をさだめ給へば御封なども給り政府の日給簡も給ひて各祗候して勤仕するなり此准據台記に多みえたり

中務の宮ときこえける

中務の宮　とは中務卿なる親王をいふ此卿は親王の任官にさだまりて臣下は任せぬ宮なり例はあれども可なりとせず是此省は詔敕の通ずるところ宮中の肝要なる所なりといへりしかれども藏人所を置れてより後は名ありて實なきやうになれり　○

職員令中務省卿一人掌下侍従獻替賛ニ相禮儀一審ニ署詔勅文案ニ受レ事覆宣旨勞問受ニ納上表一監ニ修國史一及女王内外命婦官人等名帳考叙位記諸國戸籍租調帳僧尼名籍事上大輔少輔大丞大録少録（節略）

故民部大輔

故民部大輔 須磨の巻にいへる民部大輔とはこと人なるよし也上に故の字を置たるは死者の通稱帚木の巻にしるせり

いとなまめかしきうちきすかた

うちき は袿なり男も女も草袷のうへに着るきぬなり女の小袿とは別の物なり爰にうちぎ姿とあるは直衣なども着給はてうちとけたる體なり

かのとけたりし藏人のもかへり成にけりゆけいの尉にてことしかうふりえてけり

とけたりし とは須磨の巻にてみふだけづられつかさもとられし右近のさうの藏人なり明石の巻にてかへりのぼりてもとのつかさかへし給りみをつくしの巻にてゆけいになりてことごとしげなる随身ぐしたる藏人なりとあるは此人にて爰に 今年かうふりえてけり とは叙爵（從五位下をいふ）したる也凡藏人の叙爵する時は藏人の職をさりて地下となる也○後拾遺雜三源經任藏人にてかうふり給はりける日よめる「かきりめれは天の羽衣ぬきかへてをりそわつらふ雲のかけはし ○枕さうしにかうふりえてをりんことちかくならんだに命よりはまさりてをしかるべき事を其御たまはりなど申てまどひけるこそ口をしけれ昔の藏人はことしの春よりこそなきたちけれ今の世にはしりくらべする

御車のしりに頭中將兵衛督のせ給ふ

車のしりに 車はしりへより乘るものなれば上臈はさきに乘給ひてまへの方にあり下臈はあとにのりてしりへにありをり給ふ時は前よりをり給ふよし 頭中將 のはじめは帚木の巻にしるしぬ但其人はかはるべし 兵衛督 とは右兵衛督なり但よむにはひやうゑと讀て右の字を讀ざるならひ也右衛門も亦右の字をよまず左衛門左兵衛は字のごとし○職員令左兵衛府督一人掌下検ニ校兵衛一分ニ配閤門一以レ時巡撿車駕出入分ニ衛前後一及左兵衛名帳門籍事上佐大尉少尉大志少志醫師各一人 番長四人兵衛四百人使部三十人直丁二人（右兵衛府准レ此）

なにかしの朝臣の小鷹にかゝつらひ

[なにかしの朝臣]とは四位の人には假令某朝臣などゝ其人の名字の下に戸をくはへたる也五位は其名字のみ六位には其姓に名字くはふる也是そのほどゝをしとべき通稱なり

おほみあそひはしまりて

[おほみあそひ]は大御遊といふ事歟

御使藏人の辨

[藏人の辨]夕顔の巻にしるしぬ

近衛つかさの名たかきとねり物のふし

[近衛の司]は近衛の舍人なり 河海神樂の人長は彼神樂（衍字歟）の其駒をまはせらるゝ歟[物のふし]は色ふし也色掌也御神樂のさいばり小さいばり星朝倉次其駒人長起舞此間内藏官人執二疋絹一插二人長腰一又花鳥今案物節といふは近衛の舍人の中に東遊に達したるものを物節と稱すとみえたり〇延喜近衛式凡番長八人近衛六百人駕輿丁一百人〇凡疑二近衛一者預擇下定便レ習二弓馬一者入色三十人已下白丁十人已上上修レ奏進二内侍一奏訖即遣二敕使試二其才藝一（略）

いはけなけなるしもつかさ

[しもつかさ]とは着袴の事をあらましにの給ふ詞に下つかたと仰られし是はかま着のさだまりたることばにはあらざる也なを薄雲の巻にしるしぬ

薄雲

たいにきゝをきてつねにゆかしかるを

[たい]は本臺なり或一の臺妻二の臺などいへる號あり是親王大臣の家にて本妻めきたる名也

はかま着のことなとも人しれぬさまならすしなさんと

[はかま着の事]童男童女の作法大かた同じ男の袴腰は左にゆひ女は右にゆふの差別あり各諸駒にゆふ胁斷關の方を右とす又御年は二才三才五才六才の例もありしゐてさだまらざる歟桐つぼの巻に粗しるしぬ

故大納言の今一きさみなりおとり給て

[今一度きさみ]と爰にいへるは大臣にのぼらぬことをいへり

御くしあまそきの程にて

[あまそき]とはさげ尼の髪のほどゝなり

御はかしあまかつやうの物

御はかし みをつくしの巻にしるしぬ あまかつ はうこのやうなる物なり小兒三歳までこれを用ふ諸抄凶事をこれにおほするまじなひなりと岷江入楚に見えたり今按あまがつを用る事三歳にも限るべからざる歟大床子の御膳にもあまがつあり又皇太子の御膳にも見えたり○江次第立太子事 書二部膳記一或幼宮時以二女房一爲二陪膳一上二一本髮一女藏人四人以上傳二供之一藏人一人君二土器二口於御盤一持參即受二御三把一奉二帳中阿末加津一云々 但有二常阿末加津土器一撤其後供二比比奈一 以上文雖レ引二用若紫巻一復引レ之

ひめきみのたすき引ゆひ給へる

たすき は襷 手繦とも書なり河海に委載られしかども決定したる儀なしく或記にいへる舊例男女共に着袴の時は小袖をはきず襷を用るなり一條院の御はかま着よりはしめて御小袖を着し給へるなり襷は白練の綾紋にあふひ裏白平絹なり三幅懸緒の廣さ三寸 帖レ之大略打處の如しとみえたり○王蘂承久二年十一月五日東宮御着袴之時襷面白小葵綾練裏白綾紺三所五紋菊鶴各一中野中左右各一又懸緒白小葵 綾練弘三寸 帖レ之 中謝 東宮著二御裝束一奉レ令レ著二御袴一注云於レ襷者不レ令二著給一舊例男女共不レ著二小袖一用レ襷而一條院初著二小袖一自レ其以來上下用レ之仍長治以後雖二相具一不二著御一也 節略

さくらのなをしに

さくらのなをし は冬の常の直衣なり 表白裏ゑび染なるをいふ委は末摘巻にしるしぬ

をほきおとゝうせ給ひぬ

おほきおとゝ とは太政大臣なり凡右大臣以上薨し給へば天皇事を視給はざる事三日是を廢朝といふ○儀制令外祖父母右大臣以上若散一位喪皇帝不レ視レ事三日 節略

あまつそらにもれいにたかへる月日星の光みえ雲のたゝずまひありとのみ

天文風雲のけしき例にだかふ時は天文博士其吉氣妖氣をうかゞひしりて密奏し奉るなり
○職員令天文博士一人常下候二天文氣色一有レ異密對及教中天文生等上義解謂天文者日月五星二十八宿也氣色者風雲之氣色也 言以二五雲之色一視二其吉凶一候二十二風氣知二其妖祥一○禁祕御抄 天文密奏 天文正權

博士并密奏者每レ有ニ天變一奉ニ奏參内裏一於ニ殿上口一申ニ事由一藏人取レ之付ニ内侍一天子覽レ之

このころとなりてかうしなとをたにふれさせ給はす

かうし は柑子與レ毒故病者も食すと云云但それともなし只不食をいふ成べしと人楚に見えたり或云かうし は好事にや病人の食事を好みだからそれだに食し給はざる事にやといへり

ともし火の消いるやうにてはて給ぬれば

はて給ぬれは 遺令の奏錫紵の御事あるべし

殿上人なとなへてひとつ色にくろみわたりてものゝはへなき春の暮なり

ひとついろにくろみわたりて とは心喪服によりて四位五位六位も位色のわかちなくにび色に黒みわたりてものゝ光榮なき事也

式部卿のみこうせ給ひぬ

式部卿 の職掌の事は箒木の巻にしるしぬ

もろこしにはあらはれてもしのひてもみたりかはしきことをほかり

秦始皇は實は呂不韋が子晋元帝は實は牛金が子なること入楚にくはし

一世の源氏又納言大臣になりて後に又更にみこにもなり位にもつき給へるもあまたの例あり

光仁帝は諸王より御位につき給ひ桓武光孝二帝は親王より御位につき給へり宇多天皇は正しく一世の源氏として後親王になりて即位し給ひぬこれらの例をいへる歟此外源の姓を給りて親王になりたまひたるは猶をほし

○光仁天皇 元諸王天平九年八月從四位天平寶字元年五月從四位上二年八月正四位下三年六月從三位六年十二月中納言不レ經ニ參議一八年九月正三位天平神護二年正月大納言神景護雲四年八月皇太子十月朔日即ニ帝位一于レ時六十二歲

○桓武天皇 天平寶字八年十月從五位下大學頭侍從寶龜元年十一月爲ニ四品親王一二年三月中務卿四年正月立太子天應元年四月三日受禪同廿五日即位(御諱山部王)

○光孝天皇 承和三年正月爲ニ四品親王一十二月元服十五年正月爲ニ常陸太守一嘉祥三年五月中務卿仁壽元年十一月叙ニ三品一貞觀六年正月兼ニ上野大守一十二年二月叙ニ二品一十八年十月任ニ式部卿一元慶六年正月叙ニ一品一八年二月四日受禪廿三日即位御諱時康

○宇多天皇 侍從元慶八年四月十三日賜ニ源姓一仁和三年八月廿六日離ニ源姓一列ニ親王一十一月廿七日即ニ帝位一于レ時廿一才(御諱定省王)

賜ニ源姓一後更親王例

○式部卿是忠親王 元慶八年四月十三日賜ニ源姓一寛平三年十二月廿九日更爲ニ親王一元中納言從三位

○大宰師是貞親王 仁和三年八月賜㆓源姓㆒寬平三年十二月更爲㆓親王㆒元左中將
○中務卿兼明親王 天德四年十二月賜㆓源姓㆒貞元二年四月更爲㆓親王㆒元左大臣從二位
○上野太守盛明親王 天德四年十二月賜㆓源姓㆒康保四年七月更爲㆓親王㆒元大藏卿正四位下
○四品昭平親王 天德四年十二月賜㆓源姓㆒貞元二年四月爲㆓親王㆒元右兵衞督從四位上

秋のつかさのめしに太政大臣に成給へき事

【つかさめし】とは京官除目をいふ京にある諸司を専任せらるゝ故也もと此つかさめしは三月三日よりさきに行るへきを今は秋の除目といふ或は冬にも及よし見えたり

御位そひてうしくるまゆるされてまいり給

【位そひて】とは加階なり【うしくるまゆるされて】とは牛車の宣下也左にくはし○世俗淺深祕抄牛車輦車人大路先聽㆓輦車㆒後聽㆓牛車㆒尋常事也直聽㆓牛車㆒事執政之外頗不㆓分明㆒執政家牛車之人用㆓上東門㆒自餘之輩用㆓待賢門㆒歟雖㆓執政人㆒又用㆓此門㆒例間々存云云但大臣雖㆑聽㆓牛車輦車㆒不㆑蒙㆓別仰㆒以前不㆑出㆓入待賢門㆒依㆓重宣旨㆒用㆓此門㆒也節略○通鑑綱目漢孝景後三年云漢初接㆓秦之弊㆒作業劇而財匱自㆓天子㆒不㆑能㆑具㆓鈞駟㆒而將相或乘㆓牛車㆒

權中納言大納言になりて大將かけ給へるをいまひときはなりあかりなんに何事もゆつりてん

【權中納言大納言】の事明石みをづくしの卷にくはし【大將】の事は紅葉賀の卷にしるしぬ【いまひときは】とは大納言の大將なるうへなれば内大臣の儀なるべし

命婦はみくしけとのゝかはりたる所に

【みくしけとの】葵の卷にしるしぬ

にひ宮の御なをし

【にひいろ】の事は葵の卷にしるしぬ

あさがほ 此卷にば上に注せし事も二ツ三ツあり其外已かあつかりいふへき程の事少し

冬つかさかんわさもとまりて

【冬つかた神態】の事は仲冬季冬にありされども諒闇の間なれば神事に皆停廢せらるゝなり

さま〴〵の袙みはれ着おひしとけなきとのゐすかた

【さま〴〵のあこめみたれ着】とは袙のいろ〳〵にてをの〳〵一様ならぬ儀なるべし【をひしとけなき】とは宿直姿なれば袴もきざるがゆへに袙に只帶ばかりの體と聞し袴の紐ならばこしとあるべし

本式は袙の上にかざみを着て下は表袴なるべし其體いろ／＼あり○臺記婚記卷久安六年正月二十一日主上御渡間童女尋常袙上著二汗衫一不レ著二表袴一不レ用レ帯汗衫尻前懸肩從二雜役一

一とせ中宮の御前に雪の山

雪の山をつくらせ給ふ事は大略一條院の御時より已後の事なりと枕さうしにもみえたり○河海此雪の山は長德二年長保二年の例事也

室松岩雄
古内三千代　校
保持照次

明治四拾一年十二月二十五日印刷
明治四拾一年十二月二十七日發行

定價金參圓也

校訂編輯者　室松岩雄
東京市麹町區飯田町五丁目八番地

發行者　目黑和三郎
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

印刷者　遠藤廉治
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

印刷所　公木社

發行所　國學院大學出版部
東京市麹町區飯田町五丁目八番地